新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

No.2 遺　跡
No.10 遺　跡

1 9 8 5

新 東 京 国 際 空 港 公 団
財団法人　千葉県文化財センター

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

No.2 遺　跡
No.10 遺　跡

1 9 8 5

新 東 京 国 際 空 港 公 団
財団法人　千葉県文化財センター

序

関東地方の東部にあって広大な常総台地の南半を占める下総台地は、周囲を海や大河川に囲まれた緑豊かな平坦な地形を成し、古くから人々の生活が営まれてきたことが知られています。

新東京国際空港予定地内においても、先土器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡が数多く所在しており、当センターでは千葉県教育委員会の指導のもとに発掘調査を昭和51年以来計画的に実施しております。

このたび、昭和54年度に発掘調査を実施した№2遺跡・№10遺跡の調査結果がまとまり報告書を刊行する運びとなりました。

№2遺跡からは、先土器時代の石器群、それに当地域では稀少な古墳時代及び歴史時代の集落跡が発見され、また、№10遺跡からは、先土器時代の石器群及び縄文時代の陥し穴状土壙群が多数発見されました。

本書は新東京国際空港関連の発掘報告書の第5集にあたりますが、当地域の歴史を解明するうえでまたひとつ貴重な資料が追加できたといえましょう。

本報告書が学術的資料として利用されるばかりでなく、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んで止みません。

最後に、新東京国際空港公団をはじめ、関係諸機関各位のご協力とご指導にお礼申し上げるとともに、調査に協力された補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　今　井　　正

例　　言

1．本書は、新東京国際空港予定地内に所在する№2遺跡及び№10遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県文化財センターが実施した。

3．発掘調査は昭和54年度事業として行なわれ、整理作業及び報告書の刊行は昭和58～59年度事業として実施した。

4．遺跡コードは、№2遺跡が409―006、№10遺跡が409―007である。

5．本書は、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第5集にあたるものである。

6．発掘調査及び報告書作成作業は、下記の職員がこれにあたった。

(1)　発掘調査（昭和54年度）

調査部長　　白石　竹雄

班　　長　　杉山　晋作

№2遺跡　　調査研究員　三浦　和信・加藤　正信・西口　　徹

№10遺跡　　調査研究員　　三浦　和信・加藤　正信・西口　　徹・西川　博孝

山口　直樹・柳　　晃

(2)　報告書作成作業（昭和58年度）

調査部長　　白石　竹雄

部長補佐　　根本　　弘

班　　長　　西山　太郎

№2遺跡　　調査研究員　雨宮龍太郎

№10遺跡　　調査研究員　川島　利道

(3)　報告書刊行作業（昭和59年度）

調査部長　　鈴木道之助

部長補佐　　岡川　宏道

班　　長　　田坂　　浩

調査研究員　　川島　利道

7．本書は、第Ⅰ篇・第Ⅲ篇を川島利道、第Ⅱ篇を雨宮龍太郎が執筆した。

8．本書の編集は、田坂浩、川島利道が担当した。

9．発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団の関係者をはじめ、多くの方々から御指導御助言を頂いた。特に、№10遺跡の石材の一部については国立科学博物館の加藤昭氏に御鑑定を頂き、衷心より謝意を表します。

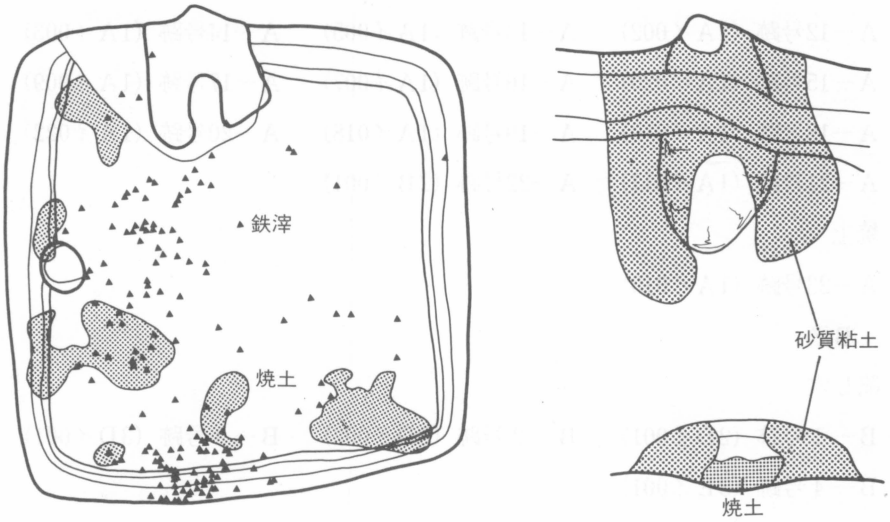
10．また、現場において酷暑の中、寒風の中を我々と苦楽を共に調査に従事して頂いた調査補

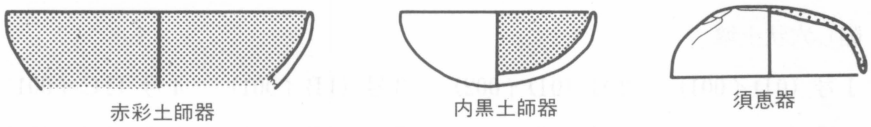
助員の方々、及び室内における整理作業に当って頂いた補助員の方々は本書の刊行に不可欠であり、終始御協力を頂き衷心より感謝の意を表します。

凡　　例

1．挿図中に示したもの以外は下記のとおりである。

No.2 遺跡





No.10遺跡

2．No.10遺跡における石材のうち玉髄は瑪瑙を含むものとする。

3．報告遺構名と調査時遺構コードの対照表

（　）内は、調査時に大グリッドごとに付した遺構コードであるが、本報告書においては1号・2号のような遺構名に変更した。

No.2 遺跡

A区

住居跡

A－1号跡（1Aイ001）　A－2号跡（1Aイ011）　A－3号跡（1Aイ013）
A－4号跡（1Aイ012）　A－5号跡（1Aイ006）　A－6号跡（1Aイ004）
A－7号跡（1Aイ014）　A－8号跡（1Aイ015）　A－9号跡（1Aイ008）
A－10号跡（1Aイ016）　A－11号跡（2Aイ001）

土壙

A－12号跡（1Aイ002）　A－13号跡（1Aイ005）　A－14号跡（1Aイ003）
A－15号跡（1Aイ020）　A－16号跡（1Aイ007）　A－17号跡（1Aイ009）
A－18号跡（1Aイ019）　A－19号跡（1Aイ018）　A－20号跡（1Aイ022）
A－21号跡（1Aイ017）　A－22号跡（2Bイ001）

焼土

A－23号跡（1Aイ010）

B区

陥し穴

B－1号跡（2Dイ001）　B－2号跡（2Dイ002）　B－3号跡（3Dイ001）
B－4号跡（3Eイ001）

No.10遺跡

陥し穴状土壙

1号（0Dイ001）　2号（0Dイ002）　3号（1Bイ001）　4号（1Cイ001）
5号（1Dイ001）　6号（1Dイ002）　7号（1Eイ001）　8号（2Cイ002）
9号（2Cイ004）　10号（2Cイ005）　11号（2Dイ001）　12号（2Dイ002）
13号（2Dイ003）　14号（2Dイ004）　15号（2Eイ001）　16号（3Cイ001）
17号（3Cイ002）　18号（3Dイ001）　19号（3Dイ002）　20号（3Dイ003）
21号（3Eイ001）　22号（3Eイ002）　23号（3Eイ003）　24号（4Cイ001）
25号（4Cイ002）　26号（4Dイ001）　27号（5Bイ001）　28号（5Cイ001）
29号（5Cイ002）　30号（5Cイ003）　31号（5Cイ004）　32号（5Cイ005）
33号（5Cイ006）　34号（5Cイ007）　35号（5Dイ001）　36号（5Dイ002）
37号（5Eイ001）　38号（5Eイ003）　39号（6Bイ001）　40号（6Bイ002）
41号（6Bイ003）　42号（6Cイ001）　43号（6Cイ002）　44号（6Cイ003）
45号（6Cイ004）　46号（6Cイ005）　47号（6Dイ001）　48号（6Dイ002）
49号（6Dイ003）　50号（6Eイ001）　51号（6Eイ002）　52号（6Eイ003）
53号（6Eイ004）　54号（6Fイ001）　55号（7Bイ001）　56号（7Cイ001）

57号（7Cイ003）　58号（7Cイ004）　59号（7Cイ005）　60号（7Cイ006）
61号（7Cイ007）　62号（7Dイ001）　63号（7Dイ002）　64号（7Dイ004）
65号（7Dイ005）　66号（7Eイ001）

その他の土壙

1号（4Dイ002）　2号（5Eイ004）　3号（7Cイ002）

目　　次

序　文
例　言
凡　例
第Ⅰ篇　空港関係遺跡の概要……1
　1．地理的環境……3
　2．歴史的環境……3
第Ⅱ篇　No.2遺跡……9
　第1章　調査の概要……11
　　第1節　遺跡の位置と環境……11
　　第2節　調査の経過と方法……12
　第2章　A区の調査……15
　　第1節　先土器時代……15
　　第2節　縄文時代……19
　　第3節　古墳～歴史時代……20
　第3章　B区の調査……52
　　第1節　先土器時代……52
　　第2節　縄文時代……63
　　第3節　古墳～歴史時代……72
　第4章　小　結……73
第Ⅲ篇　No.10遺跡……83
　第1章　調査の概要……86
　　第1節　遺跡の位置と環境……86
　　第2節　調査の経過と方法……86
　　第3節　遺跡の概要……89
　　第4節　遺跡の層位……89
　第2章　遺構と遺物……93
　　第1節　先土器時代……93
　　第2節　縄文時代……176
　　第3節　その他の時代……229
　第3章　小　結……253

挿図目次

第1図　三里塚地区と下総台地の主な先土器時代遺跡……4
第2図　空港関係遺跡分布図……5

No.2遺跡

第3図　遺跡周辺の地形図……11
第4図　No.2遺跡発掘調査区域図……13
第5図　A区先土器時代遺物分布図……16
第6図　A－1群遺物出土状況図……17
第7図　A－2群遺物出土状況図……18
第8図　A－2群石器類実測図……19
第9図　A区遺物包含層出土土器実測図……20
第10図　A区遺構配置図……21
第11図　A－1号跡実測図……22
第12図　A－1号跡出土遺物実測図……23
第13図　A－2号跡実測図……24
第14図　A－2号跡出土遺物実測図……25
第15図　A－3号跡実測図……26
第16図　A－3号跡出土遺物実測図……27
第17図　A－4号跡実測図……28
第18図　A－5号跡実測図……29
第19図　A－5号跡出土遺物実測図……29
第20図　A－6号跡実測図……30
第21図　A－6号跡出土遺物実測図……31
第22図　A－7号跡実測図……33
第23図　A－7号跡出土遺物実測図……34
第24図　A－8号跡実測図……35
第25図　A－8号跡出土遺物実測図……36
第26図　A－9号跡実測図……37
第27図　A－9号跡出土遺物実測図……38
第28図　A－10号跡実測図……39
第29図　A－10号跡出土遺物実測図……40
第30図　A－11号跡実測図……41

第 31 図　A－12号跡実測図 ……42
第 32 図　A－12号跡出土遺物実測図 ……43
第 33 図　A－13号跡実測図 ……44
第 34 図　A－13号跡出土遺物実測図 ……45
第 35 図　A－14号跡実測図 ……45
第 36 図　A－15号跡実測図 ……46
第 37 図　A－16号跡実測図 ……47
第 38 図　A－17号跡実測図 ……47
第 39 図　A－18号跡実測図 ……48
第 40 図　A－19号跡実測図 ……49
第 41 図　A－20号跡実測図 ……49
第 42 図　A－21号跡実測図 ……50
第 43 図　A－22号跡実測図 ……50
第 44 図　A－23号跡実測図 ……51
第 45 図　A区表面採集遺物実測図 ……51
第 46 図　B区先土器時代遺物分布図 ……53
第 47 図　B－1群遺物出土状況図 ……54
第 48 図　B－1群石器類実測図(1) ……55
第 49 図　B－1群石器類実測図(2) ……56
第 50 図　B－2群遺物出土状況図 ……58
第 51 図　B－2群石器類実測図 ……59
第 52 図　B－3群遺物出土状況図 ……61
第 53 図　B－3群石器類実測図 ……62
第 54 図　B区遺構配置図 ……63
第 55 図　B－1号跡実測図 ……64
第 56 図　B－2号跡実測図 ……65
第 57 図　B－3号跡実測図 ……66
第 58 図　B－4号跡実測図 ……67
第 59 図　B区包含層出土遺物実測図(1) ……69
第 60 図　B区包含層出土遺物実測図(2) ……70
第 61 図　B区包含層出土遺物実測図(3) ……71
第 62 図　B区包含層出土遺物実測図(4) ……71
第 63 図　B区表面採集遺物実測図 ……72

第 64 図　No. 2 遺跡石器類出土層位 ……74
第 65 図　石材の構成とその変遷 ……74
第 66 図　石器類組成とその変遷 ……75
第 67 図　No. 2 遺跡出土土器編年図 ……76

No.10遺跡

第 68 図　遺跡付近の地形と発掘調査区 ……85
第 69 図　小グリッド分割図 ……86
第 70 図　発掘調査深度図 ……87
第 71 図　遺構分布図 ……88
第 72 図　標準層序 ……90
第 73 図　土層柱状図地点 ……91
第 74 図　遺跡土層断面図 ……92
第 75 図　Ⅶ層主体石器群分布図 ……93
第 76 図　Ⅶ層主体石器群石材別重量比 ……95
第 77 図　Ｓブロック遺物出土状況図 ……96
第 78 図　Ⅶ層主体石器群実測図 ……97
第 79 図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群分布図 ……99
第 80 図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群石材別重量比……100
第 81 図　Ｒブロック遺物出土状況図……101
第 82 図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群実測図……102
第 83 図　Ⅲ層主体石器群分布図……105
第 84 図　Ⅲ層主体石器群（石器・剝片類）石材別重量比……106
第 85 図　Ａブロック遺物出土状況図……107
第 86 図　Ｂブロック遺物出土状況図……108
第 87 図　Ｃブロック遺物出土状況図……109
第 88 図　Ｄブロック遺物出土状況図……110
第 89 図　Ｅブロック遺物出土状況図……111
第 90 図　Ｆブロック遺物出土状況図……112
第 91 図　Ａ～Ｆブロック出土石器実測図……113
第 92 図　Ｇブロック遺物出土状況図……115
第 93 図　Ｇ・Ｈブロック出土石器実測図……117
第 94 図　Ｇブロック出土石器実測図……118
第 95 図　Ｈ・Ｉブロック遺物出土状況図……119

第96図　J・Kブロック遺物出土状況図……122
第97図　Lブロック遺物出土状況図……123
第98図　Mブロック遺物出土状況図……124
第99図　H～Mブロック出土石器実測図……125
第100図　N・Oブロック遺物出土状況図……128
第101図　Pブロック遺物出土状況図……129
第102図　Qブロック遺物出土状況図……130
第103図　Tブロック遺物出土状況図……131
第104図　N～Q・Tブロック出土石器実測図……132
第105図　ブロック外出土石器実測図……134
第106図　接合資料実測図……137
第107図　III層直上石器群実測図……151
第108図　I・II層出土先土器時代石器群実測図……152
第109図　III層出土礫分布図……158
第110図　第1～3礫群分布図……159
第111図　第4～6礫群分布図……160
第112図　III層出土礫の規模……162
第113図　III層出土礫石材別重量比……163
第114図　III層主体礫群石材別重量比……163
第115図　炭化物片集中個所分布図……170
第116図　第1炭化物片集中個所実測図……171
第117図　第2炭化物片集中個所実測図……172
第118図　第3炭化物片集中個所実測図……173
第119図　第4炭化物片集中個所実測図……174
第120図　第5炭化物片集中個所実測図……175
第121図　陥し穴状土壙分布図……177
第122図　陥し穴状土壙実測図（1・2号）……178
第123図　陥し穴状土壙実測図（3～5号）……179
第124図　陥し穴状土壙実測図（6～8号）……180
第125図　陥し穴状土壙実測図（9～12号）……181
第126図　陥し穴状土壙実測図（13～16号）……182
第127図　陥し穴状土壙実測図（17～20号）……183
第128図　陥し穴状土壙実測図（21～24号）……184

第129図　陥し穴状土壙実測図（25～28号）……185
第130図　陥し穴状土壙実測図（29～30号）……186
第131図　陥し穴状土壙実測図（31～32号）……187
第132図　陥し穴状土壙実測図（33～36号）……188
第133図　陥し穴状土壙実測図（37・38号）……189
第134図　陥し穴状土壙実測図（39～41号）……190
第135図　陥し穴状土壙実測図（42・43号）……191
第136図　陥し穴状土壙実測図（44・45号）……192
第137図　陥し穴状土壙実測図（46～48号）……193
第138図　陥し穴状土壙実測図（49～51号）……194
第139図　陥し穴状土壙実測図（52・53号）……195
第140図　陥し穴状土壙実測図（54・55号）……196
第141図　陥し穴状土壙実測図（56・57号）……197
第142図　陥し穴状土壙実測図（58・59号）……198
第143図　陥し穴状土壙実測図（60・61号）……199
第144図　陥し穴状土壙実測図（62・63号）……200
第145図　陥し穴状土壙実測図（64～66号）……201
第146図　その他の土壙実測図（１～３号）……205
第147図　縄文時代グリッド別遺物分布図……207
第148図　第１群土器拓影図(1)……208
第149図　第１群土器拓影図(2)……209
第150図　第１群土器拓影図(3)……210
第151図　第１群土器拓影図(4)……211
第152図　第１群土器拓影図(5)……212
第153図　第１・２群土器拓影図……213
第154図　第３群土器拓影図(1)……214
第155図　第３群土器拓影図(2)……215
第156図　第３群土器拓影図(3)……217
第157図　第３群土器拓影図(4)……218
第158図　第３群土器拓影図(5)……220
第159図　第３・４群土器拓影図……221
第160図　縄文土器底部実測図……222
第161図　縄文時代石器実測図(1)……224

第162図　縄文時代石器実測図(2)……225
第163図　溝状遺構分布図……230
第164図　溝状遺構実測図（１号）……231
第165図　溝状遺構実測図（１号）……232
第166図　溝状遺構実測図（１号）……233
第167図　溝状遺構実測図（２号）……234
第168図　溝状遺構実測図（２号）……235
第169図　溝状遺構実測図（２号）……236
第170図　溝状遺構実測図（３・７号）……237
第171図　溝状遺構実測図（３・４・５号）……238
第172図　溝状遺構実測図（３号）……239
第173図　溝状遺構実測図（３号）……240
第174図　溝状遺構実測図（４号）……242
第175図　溝状遺構実測図（４号）……243
第176図　溝状遺構実測図（４号）……244
第177図　溝状遺構実測図（４・６号）……245
第178図　溝状遺構実測図（５・６号）……246
第179図　溝状遺構実測図（５・６号）……247
第180図　溝状遺構実測図（５・６号）……248
第181図　溝状遺構実測図（５・６号）……249
第182図　溝状遺構実測図（５・６号）……250
第183図　溝状遺構実測図（４・５・６号）……251
第184図　その他の時代の遺物実測図……252

図版目次

No. 2 遺跡

図版１．航空写真
図版２．先土器時代石器群出土状況
　　Ａ－１号跡全景
図版３．Ａ－２号跡全景
　　Ａ－３号跡全景
図版４．Ａ－４号跡全景
　　Ａ－５号跡全景
図版５．Ａ－６号跡全景
　　Ａ－７号跡全景
図版６．Ａ－８号跡全景
　　Ａ－９号跡全景
図版７．Ａ－10号跡全景
　　Ａ－11号跡全景
図版８．Ａ－12号跡全景
　　Ａ－13号跡全景
図版９．Ｂ－１号跡全景
　　同土層断面
　　Ｂ－２号跡全景
　　Ｂ－３号跡全景
　　Ｂ－４号跡全景
　　同土層断面
図版10．先土器時代遺物（Ａ－２群）
　　先土器時代遺物（Ｂ－３群）
図版11．先土器時代遺物（Ｂ－１群）
図版12．先土器時代遺物（Ｂ－２群）
　　Ａ区包含層出土遺物
図版13．Ａ区包含層出土遺物
　　Ｂ区包含層出土遺物
図版14．Ｂ区包含層出土遺物
図版15．Ａ－１、Ａ－２、Ａ－３、Ａ－５、Ａ－６、Ａ－12号跡出土遺物

図版16. A－7、A－9、A－10号跡出土遺物

No.10遺跡

図版17. 航空写真（東から）

図版18. 航空写真（北から）

同上（西から）

図版19. 調査風景

同上

図版20. 6D07土層断面

図版21. Sブロック遺物出土状況

Rブロック遺物出土状況

図版22. III層主体石器群出土状況（北から）

同上（南から）

図版23. Cブロック遺物出土状況

Dブロック遺物出土状況

図版24. Eブロック遺物出土状況

Fブロック遺物出土状況

図版25. Gブロック遺物出土状況

Hブロック遺物出土状況

図版26. Jブロック遺物出土状況

Kブロック遺物出土状況

図版27. Lブロック遺物出土状況

Pブロック遺物出土状況

図版28. VII層主体石器群

図版29. IV～VI層主体石器群

図版30. A～Fブロック出土石器

図版31. G・Hブロック出土石器

図版32. Gブロック出土石器

図版33. H～Mブロック出土石器

図版34. N～Q・Tブロック出土石器

図版35. ブロック外出土石器

図版36. 接合資料B

接合資料A

図版37. III層直上石器群

図版38. Ⅰ・Ⅱ層出土先土器時代石器群
図版39. 礫群構成礫接合例
図版40. 陥し穴状土壙（1～6号）
図版41. 陥し穴状土壙（8・10・11・13・19・20号）
図版42. 陥し穴状土壙（21・23・24・26・27号）
図版43. 陥し穴状土壙（28～30・34・35号）
図版44. 陥し穴状土壙（36～39・42号）
図版45. 陥し穴状土壙（43・47～50号）
図版46. 陥し穴状土壙（52・54・55・57・64・66号）
図版47. 第1群土器(1)
図版48. 第1群土器(2)
図版49. 第1群土器(3)
図版50. 第1群土器(4)
図版51. 第1群土器(5)
図版52. 第1・2群土器
図版53. 第3群土器(1)
図版54. 第3群土器(2)
図版55. 第3群土器(3)
図版56. 第3群土器(4)
図版57. 第3群土器(5)
図版58. 第3・4群土器
図版59. 縄文時代石器(1)
図版60. 縄文時代石器(2)
図版61. 溝状遺構（1号）
同覆土断面
図版62. 溝状遺構（2号）
同覆土断面
図版63. 溝状遺構（3号）
溝状遺構（4号）
図版64. 溝状遺構（4・5・6号）
図版65. その他の時代の遺物

表　目　次

第１表　空港関係遺跡一覧表

No. 2 遺跡

第２表　No. 2 遺跡製鉄集落民の生活形態の可能性

No.10遺跡

第３表　VII層主体石器群一覧表

第４表　IV～VI層主体石器群一覧表

第５表　III層主体石器群一覧表

第６表　III層直上石器群一覧表

第７表　Ⅰ・II層出土先土器時代石器群一覧表

第８表　III層出土礫一覧表

第９表　陥し穴状土壙一覧表

第10表　縄文時代石器群一覧表

第Ⅰ篇　空港関係遺跡の概要

1　地理的環境

成田空港のある三里塚地区は、北流して旧鬼怒川谷（現在の利根川下流域）へ注ぐ河川と東へ下って九十九里の太平洋へ注ぐ河川の分水界をなしており、北東から南西へ続く標高約40mの平担な広い台地と狭小な谷津から構成されている（第１図）。

この広い台地面は、下総上位面といわれ（杉原1970）、この辺では上部から表土黒色腐植土層、立川ローム層、武蔵野ローム層、常総粘土層、成田層という堆積を示している。

成田層が堆積した頃はこの辺は古東京湾という海を形成しており、その後の海退で陸化が進行し、古東京湾が消滅する頃には沼沢地や湿地帯となり常総粘土層（下末吉ローム層上半部）が形成されたと考えられている。そして、その上に武蔵野・立川両ローム層が降下堆積したのであるが、この頃関東造盆地運動が活発に働き、関東堆積盆地の南東部を占める下総台地は、南東から北西へ高度が下る現在のような姿に次第になって行ったと考えられる（鈴木尉元他1980）。

このように下総台地においては造盆地運動により比較的新しい時期に地形が変化していると考えられ、先土器時代をはじめ考古学的遺跡を理解するうえで注意が必要である。

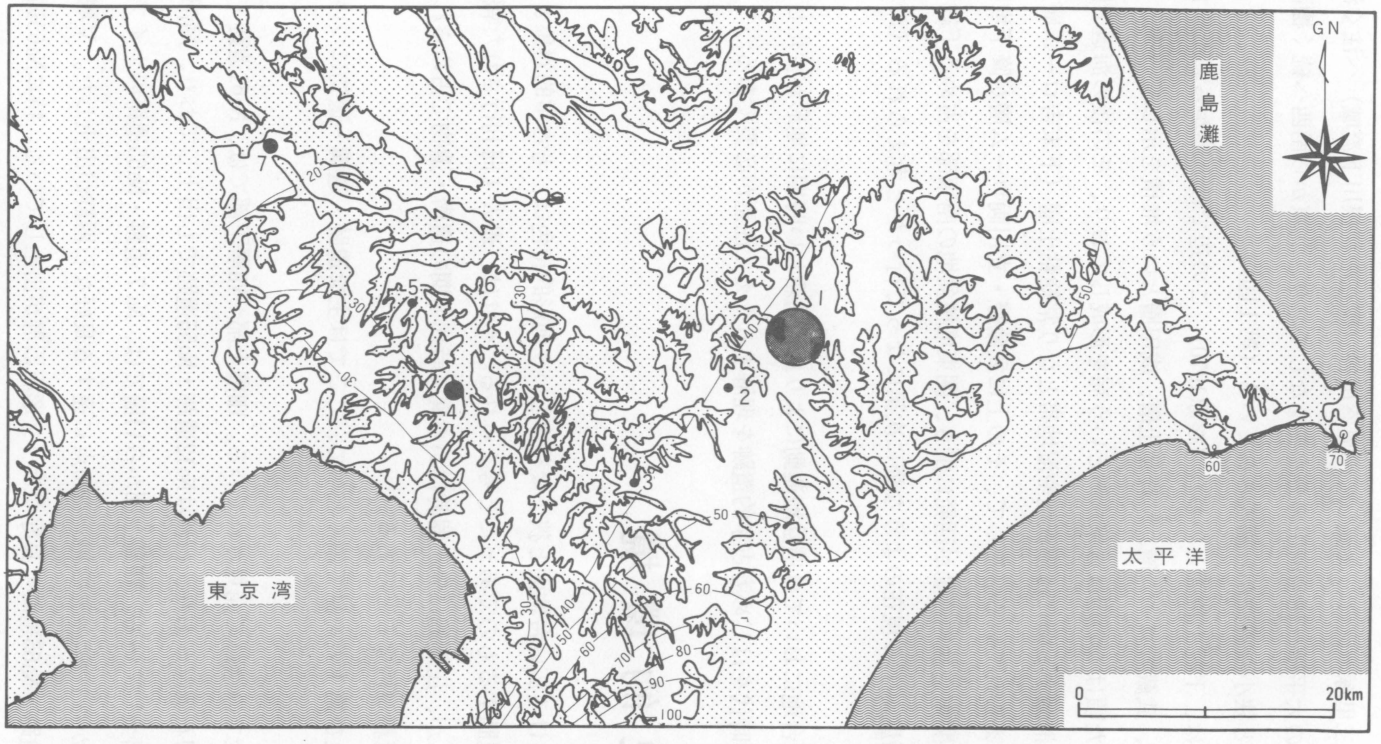
2　歴史的環境

三里塚地区における広い台地面と狭小な谷津という地形的特色は、考古学的対象となる人々の生活を大きく規制するものであったと考えられる。それは、過去４冊刊行された報告書をみれば明らかであるが、圧倒的に先土器時代から縄文時代早期の遺構・遺物で占められており、その他の時代の資料が稀なことである。

詳細は第２図及び第１表を見て頂くとして、ここでは主な遺跡・遺構・遺物について述べることにする。

先土器時代は全ての遺跡で発見されている。Ⅷ層上部～Ⅶ層下部では、No.61遺跡・No.67遺跡の石斧を伴う石刃石器群があり、石斧はNo.12遺跡・No.55遺跡でも出土しており、局部磨製・打製を合わせ13点出土している。Ⅶ層上部からⅥ層では、No.７遺跡・No.65遺跡のナイフ形石器群があり、No.65遺跡から１ブロックで400～500点に達する良好な石器群が出土した。Ⅴ層～Ⅲ層下部からは、No.10遺跡・No.65遺跡で良好なナイフ形石器群が出土している。特にNo.65遺跡では良好な礫群を伴っている。Ⅲ層中部～上面では、No.60遺跡・No.66遺跡・No.67遺跡等において槍先形尖頭器や細石刃を主体とする石器群が出土している。

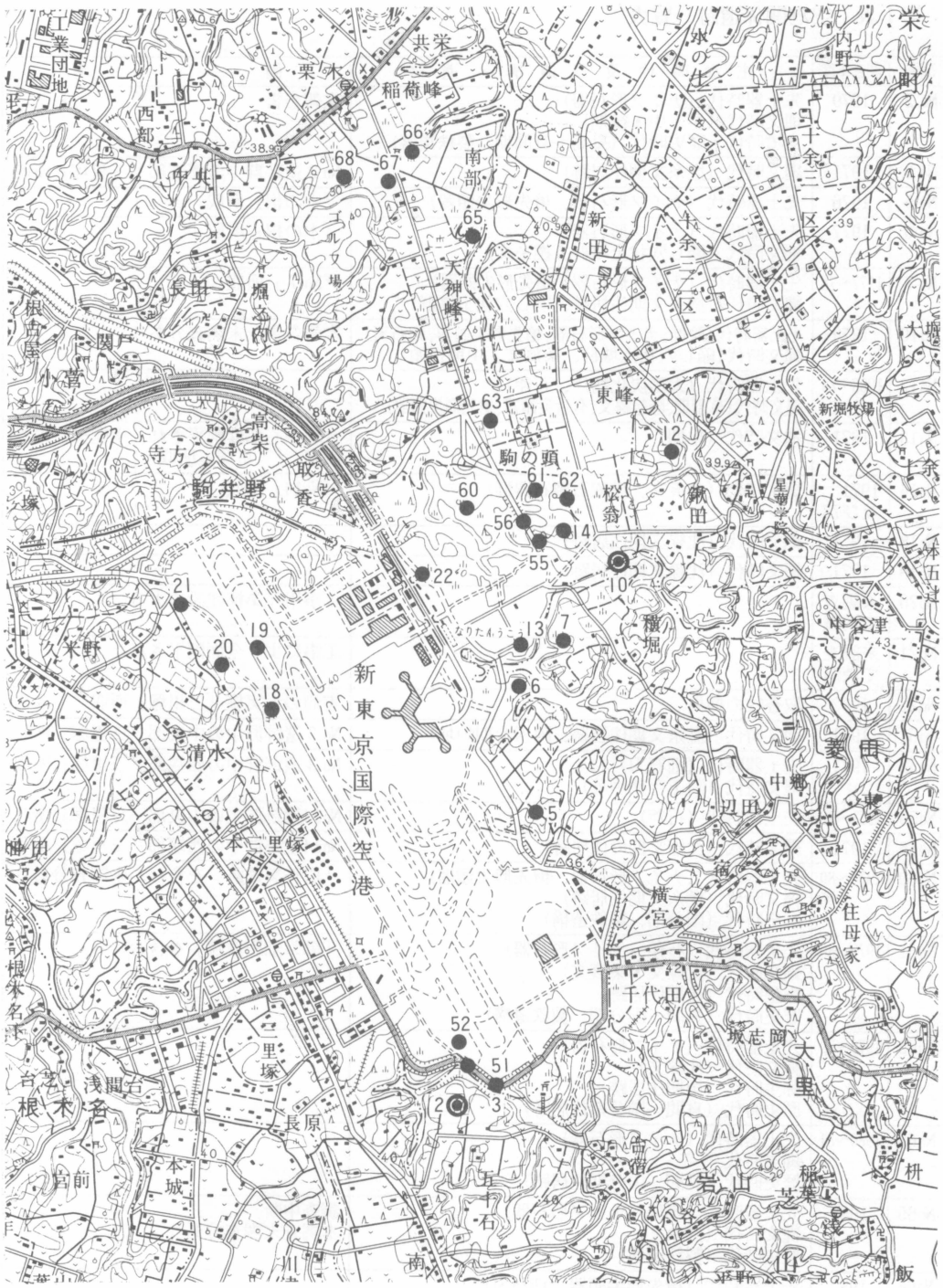
縄文時代も全ての遺跡から出土している。特に早期のものが非常に多く、その他は前期のも



第１図　三里塚地区と下総台地の主な先土器時代遺跡(1：600000)－築地書館『関東ローム』より作成－

沖積地

1　三里塚地区遺跡群　2　東内野遺跡　3　星谷津遺跡　4　萱田地区遺跡群
5　復山谷遺跡　6　木苅峠遺跡　7　中山新田遺跡群



第2図　空港関係遺跡分布図

―この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図（成田）を使用したものである―

第１表　空港関係遺跡一覧表

遺跡	調査年度	主な時代及び遺構・遺物	備考
No. 2	1979	先土器時代（ナイフ形石器） 縄文時代（早・中・後期） 古墳時代・歴史時代（鬼高～真間期、製鉄集落）	本報告書
No. 3	1971	縄文時代（撚糸文期住居跡）	No. 3 遺跡群中の東端部『三里塚』所収
No. 5	1976	先土器時代（ナイフ形石器、槍先形尖頭器）	『木の根』所収
No. 6	1977	先土器時代（ナイフ形石器） 縄文時代（陥し穴状土壙群、撚糸文）	『木の根』所収
No. 7	1977～78	先土器時代（ナイフ形石器、槍先形尖頭器） 縄文時代（撚糸文期住居跡、陥し穴状土壙群）	『No. 7 』所収
No.10	1979	先土器時代(礫群、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃) 縄文時代(陥し穴状土壙群、条痕文、中期初頭)	本報告書、未調査分あり
No.12	1983～84	先土器時代（大形炭化物片、石斧） 縄文時代(草創期、隆起線文、有舌尖頭器、槍先形尖頭器)	
No.13	1971	縄文時代（早期）	台地中心部は削平され、南側縁辺のみ調査、『三里塚』所収
No.14	1971 及び78	縄文時代（条痕文、黒曜石製石器群）	『No.14』所収
No.18	1971	縄文時代（沈線文期住居跡）	
No.19	1971	縄文時代（沈線文期住居跡）	
No.20	未調査で消滅		工事用作業棟建設による
No.21	未調査で消滅		工事により全面削平された
No.22	1972	取香牧の捕馬	実測のみ実施『三里塚』所収
No.51	1971	縄文時代（撚糸文期住居跡、阿玉台期炉址）	No. 3 遺跡群中の中央部『三里塚』所収
No.52	1971	先土器時代（細石刃） 縄文時代（阿玉台期炉址）	No. 3 遺跡群中の西端部『三里塚』所収
No.55	1971～72	先土器時代（石斧）	No.14遺跡群中の中央部『三里塚』所収
No.56	1971	縄文時代（沈線文期の住居跡）	No.14遺跡群中の西端部『三里塚』所収
No.60	1978～80	先土器時代（ナイフ形石器、槍先形尖頭器） 縄文時代（撚糸文期住居跡） 歴史時代（国分期、製鉄遺構）	「取香製鉄跡」を含む、未調査分あり
No.61	1979～80	先土器時代（石斧、ナイフ形石器） 縄文時代（沈線文・条痕文） 弥生時代（後期住居跡） 歴史時代（真間～国分期、製鉄遺構）	「御幸畑製鉄跡」を含む
No.62	1978～79	先土器時代（ナイフ形石器） 縄文時代（沈線文） 弥生時代（後期住居跡） 歴史時代（真間～国分期住居跡）	
No.63	1980～81	先土器時代（ナイフ形石器） 縄文時代 歴史時代（真間～国分期住居跡）	
No.65	1982	先土器時代（礫群、ナイフ形石器） 縄文時代（撚糸文） 歴史時代（製鉄遺構）	調査中断 本調査未調査分あり
No.66	1982	先土器時代（槍先形尖頭器、細石刃） 縄文時代（沈線文、条痕文）	
No.67	1981～83	先土器時代（ナイフ形石器、石斧） 縄文時代(沈線文期住居跡、陥し穴状土壙群、炉穴群)	未調査分あり
No.68	1981	先土器時代（ナイフ形石器） 縄文時代（条痕文）	

のが目に付くぐらいで、中期以降のものは極端に少ない。草創期では、No.12遺跡において隆起線文土器を伴い多量の有舌尖頭器を主体とする遺物群が出土しており注目される。早期前半では、No.6遺跡・No.60遺跡において撚糸文土器を多量に出土するとともに住居跡が検出されている。早期後半では、No.61遺跡・No.62遺跡・No.67遺跡から多量の沈線文土器・条痕文土器が出土し、No.67遺跡からは沈線文期の住居跡が10数基検出されている。また、No.6遺跡・No.7遺跡・No.10遺跡・No.67遺跡からは多量の陥し穴状土壙が検出されている。さらに、No.12遺跡・No.14遺跡からは早期のものと思われる多量の黒曜石製石器群が出土している。

弥生時代としては、No.60遺跡・No.61遺跡・No.62遺跡の隣接した3遺跡からのみ住居跡が検出されており興味深い。なお、土器は北関東系あるいは印手系が主体と思われる。

古墳時代以後としては、No.2遺跡・No.7遺跡・No.60遺跡・No.61遺跡・No.62遺跡の各遺跡から住居跡あるいは製鉄関係の工房址が検出されている。なかでもNo.60遺跡とNo.61遺跡の南向斜面からは大規模な製鉄関連遺構群（各々取香製鉄址、御幸畑製鉄址と呼称している）が検出されている。この他多くの遺跡で鉄滓が出土することなどから、かつてこの地域で盛んに製鉄作業が行なわれていたことが知られるのである。

引用・参考文献

大原正義他（1978）『佐倉市星谷津遺跡』財団法人千葉県文化財センター

関東ローム研究グループ（1965）『関東ローム―その起源と性状―』築地書館

杉原重夫（1970）「下総台地西部における地形の発達」地理学評論43―12

鈴木尉元他（1980）「特集＝関東堆積盆地」アーバンクボタNo.18

鈴木道之助（1974）「木苅峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III』財団法人千葉県文化財センター

清藤一順・田中豪他（1984）『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II―花前Ⅰ・中山新田II・中山新田III―』財団法人千葉県文化財センター

田村隆他（1982）「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII』財団法人千葉県文化財センター

戸田哲也・篠原正・並木忠良（1977）『東内野遺跡発掘調査概報』富里村教育委員会

西川博孝・西口徹他（1984）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV―No.7遺跡―』財団法人千葉県文化財センター

西野元他（1971）『三里塚―新東京国際空港用地内の考古学的調査―』財団法人千葉県北総公社

野口行雄（1983）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III―No.14遺跡―』財団法人千葉県文化財センター

橋本勝雄（1984）『八千代市権現後遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』財団法人千葉県文化財センター

宮重行・池田大助他（1981）『木の根』財団法人千葉県文化財センター

第II篇　No. 2 遺跡

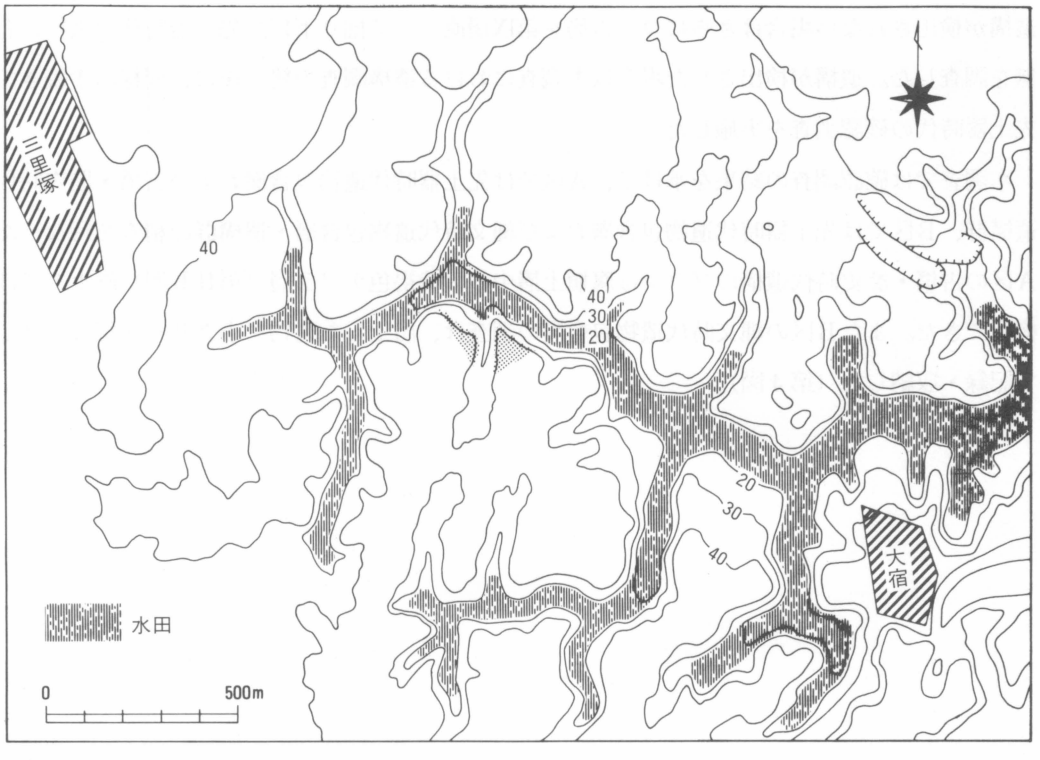
第1章　調 査 の 概 要

第1節　遺跡の位置と環境

No.2遺跡は山武郡芝山町岩山字中袋2016他に所在し、新東京国際空港の南端に位置する。

遺跡付近は西流する九十九里方面への水系と北流して利根川に注ぐ水系との分水嶺となっており、なだらかな丘陵地が展開し、浅い小支谷が八方に入り込んでいる。

遺跡は九十九里に注ぐ栗山川に合流する高谷川と木戸川との解折作用によって形成された支台上に存在し、芝山町岩山地区を東流する高谷川の一支流の水源地付近に位置している。遺跡をのせる小台地はその四周を小支谷によって包囲された海抜41m余りの半島状を呈している。周囲の水田面との比高は約22mを測る。遺跡はこの小台地の北端に位置し、その中央部は小支谷による侵食を受けて、地形的には東、西の両高燥地から構成されている（第3図）。



第3図　遺跡周辺の地形図（1/20000）

第2節　調査の経過と方法

発掘調査は20,000㎡を対象に、確認調査を昭和54年7月2日から9日まで、本調査を昭和54年8月17日から11月19日まで行なった。

発掘調査を実施するに際して次のような遺跡区画単位を設け、確認調査の進行や現場における遺構・遺物の取扱いはこれに従って行なわれた。

まず公共座標に基き50m方眼単位の大グリッドを設定し、その大グリッドをさらに5m方眼単位の小グリッドに細分して1単位大グリッドが100単位小グリッドから構成されるようにした。グリッド名称は大グリッド縦列を西から東へA、B、C……とし、横列を北から南へ0、1、2、……として、これらを組合わせて個々の大グリッドを1A、3D等と呼称した。大グリッドに包括される小グリッド名称は北西隅から横方向に00から99までの2連番号を順次付して南東隅に到るように設定した。

上記方法による調査対象区域のグリッド設定後、遺構・遺物の分布状況を把握し本調査区域を設定するための確認調査を実施した。確認調査の試掘坑は2×2mで、これを調査対象区域全体に均等に配分した。試掘坑の総面積は調査対象区域面積の約5％である。試掘は表土よりすべて人力で行なわれ、第III層直上まで掘り下げて土器片の多寡、遺構の有無等を調査した。遺構が検出されない場合はさらにローム層を第IX層直上まで掘り下げて先土器時代の遺物の有無を調査した。遺構が検出された場合は本調査における遺構調査の終了後に、同様の手続きで先土器時代の確認調査を実施した。

本調査では確認調査の結果を承けて、A区では先土器時代遺物包含層および古墳・歴史時代遺構群、B区では先土器時代遺物包含層および縄文時代遺物包含層・遺構群の精査を行なった。A区の古墳・歴史時代遺構のプランは腐植土層中の暗黄褐色テフラ層（第IIb層）直上でほぼ検出できた。またB区の縄文時代遺物包含層の調査は、出土した遺物を小グリッド毎に一括して記録・収納した（第4図）。

第4図　No.2遺跡発掘調査区域図（1/1.000）

第2章　A 区 の 調 査

第1節　先土器時代（第5図、図版2）

A区からは2箇所の炭化粒集中地区と1箇所の石器類集中地区が検出されている。西側の台地奥部の地区をA－1群、東側の台地縁辺部の地区をA－2群として、その内容を報告する。

A－1群（第6図）

層序は全体として西から東へ緩く傾斜している。ここからは炭化粒のみが検出された。小規模な北西群と大規模な南東群とに分かれる。

北西群は径1m程の広がりを有し、散漫な分布状況を示す。VI層からVIII層上層にかけて分布している。

南東群は径3m程の広がりを有し、比較的密に分布する。IV～V層からVIII層にかけて検出された。

A－2群（第7図）

炭化粒と石器類の混在群である。地形的にはA－1群地区から連続した地区で、層序はA－1群同様に全体として西から東へ緩やかに傾斜している。

炭化粒は調査区域内に広範に分布するが、その密度の濃い地点は2B55グリッド中央部、2B56グリッド北西部、2B66グリッド南東部から2B67グリッド南西部にかけての地点である。出土層位はその大半がIV～V層からVII層にかけて検出された。

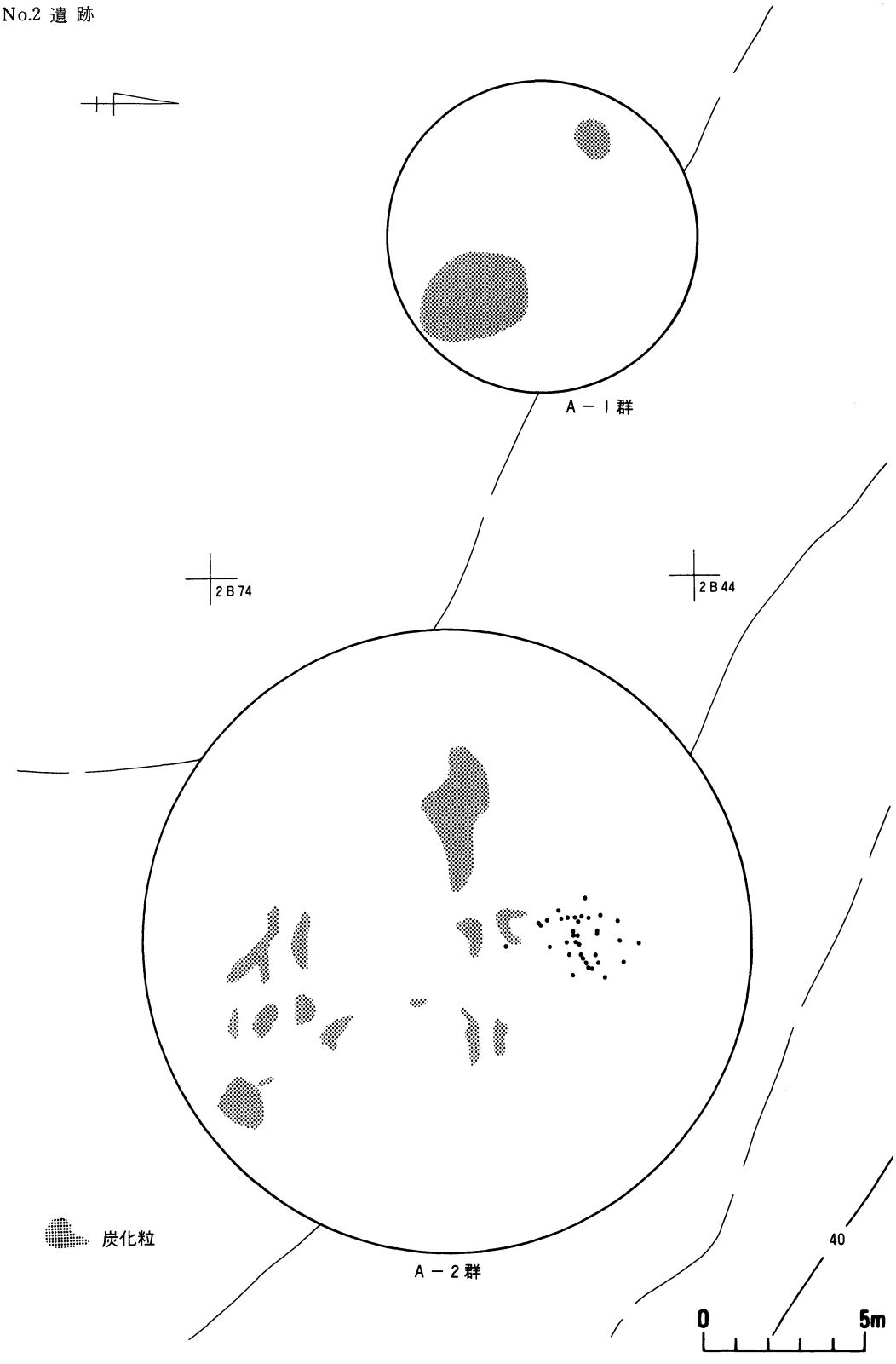
石器類は調査区域の北部に集中し、前述の2B56グリッド北西部の炭化粒密集地点と隣接している。出土層位はVII層からVIII層にかけて検出されているが、後述する接合フレークの各片はVII・VIII両層にわたって出土しており、文化層としては一括的に把握することができる。

石器類の出土点数は安山岩製34点、砂岩製2点、計36点で、その大半が無調整の剝片・小片類であり、器形を整えたトゥールは皆無であった。ここでは使用剝片及び接合剝片について報告する。

A－2群石器類（第8図、図版10）

1は砂岩製の使用剝片でVII層下部から出土した。器肌は幾分風化しており、リングの所在はかろうじて判別できた。表面左側縁に小範囲の使用痕がある。

2は安山岩の接合の剝片でVII層からVIII層にかけて各片が検出されており、接合点数は9点で



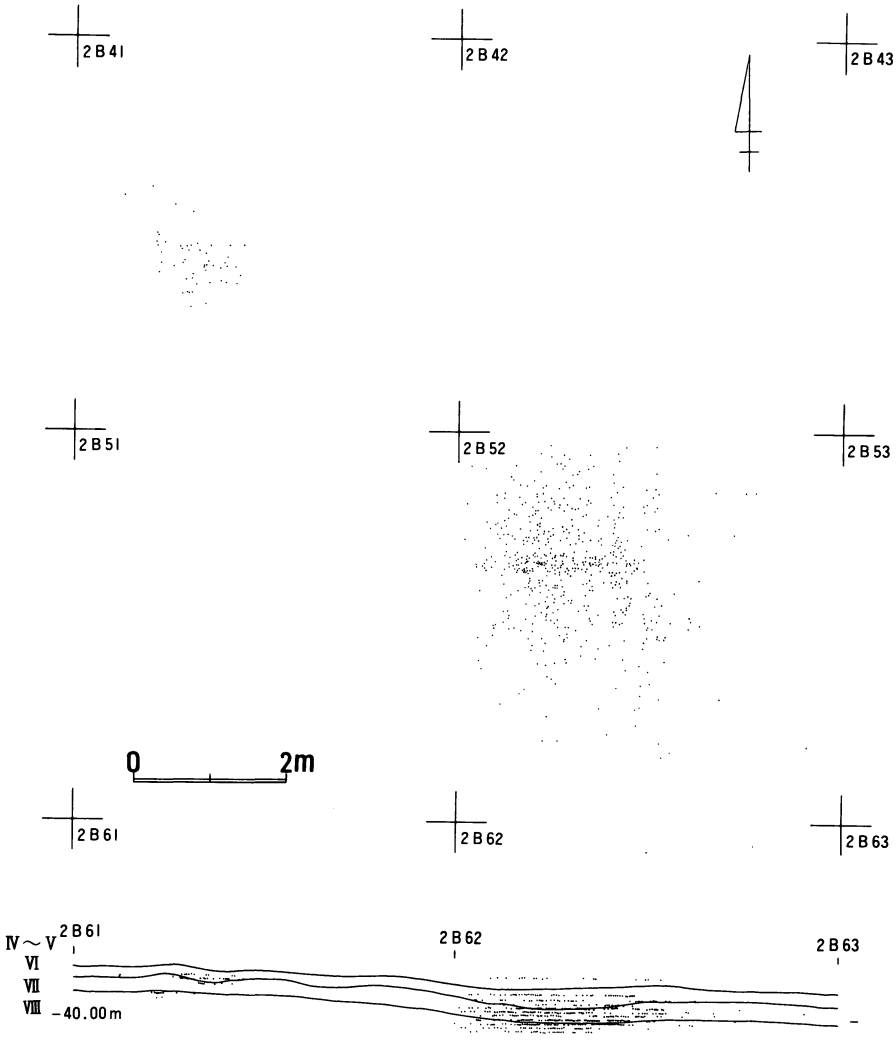
第5図　A区先土器時代遺物分布図（1/200）

ある。各片はすべて無調整だが、裏面下端付近には細かな敲打痕の集中箇所が認められた。分割前の母岩をハンマーとして使用した痕跡かも知れない。

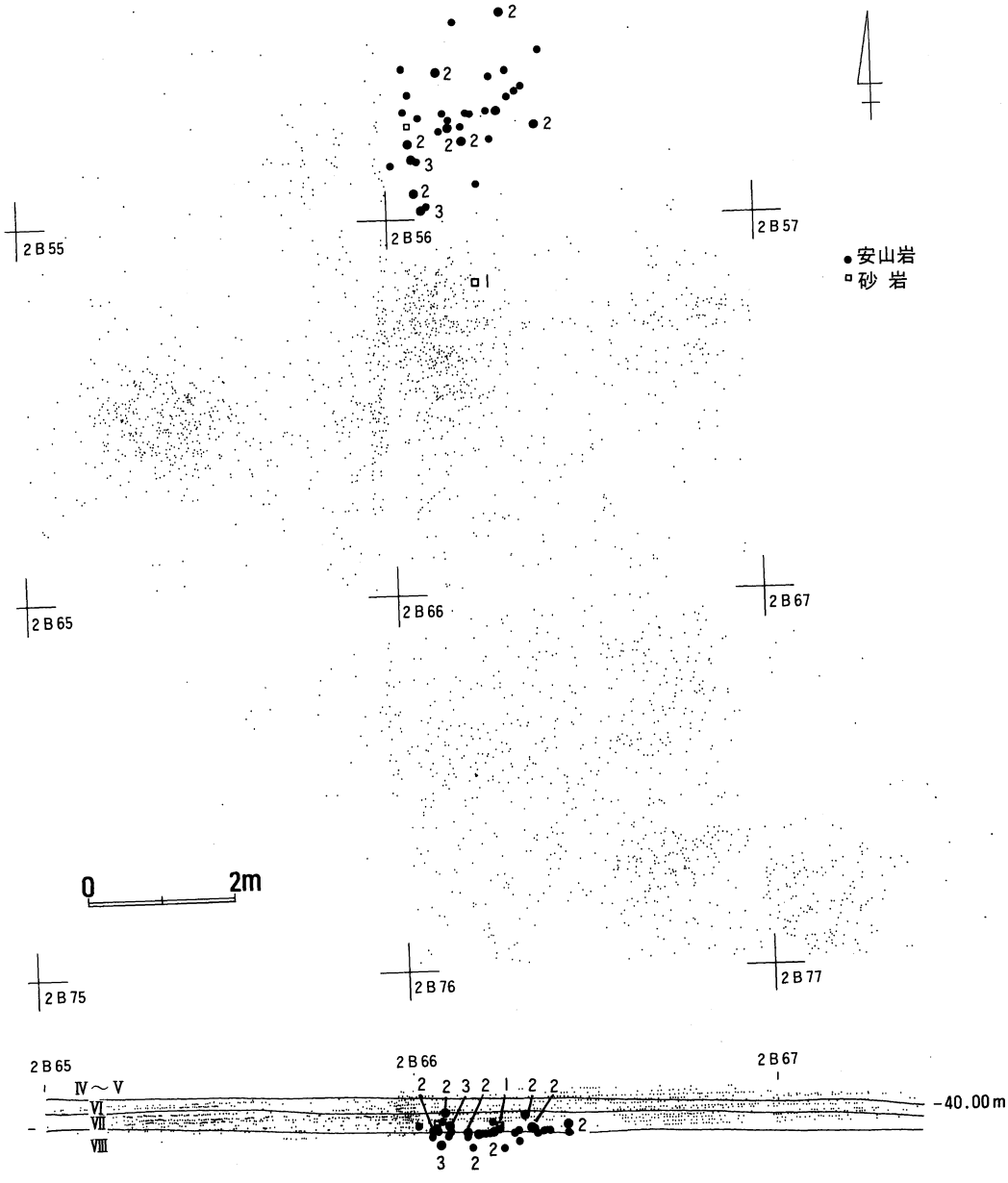
3は安山岩の接合剝片2片から構成されており、各々Ⅶ層とⅧ層から出土した。

表面採集遺物（第45図）

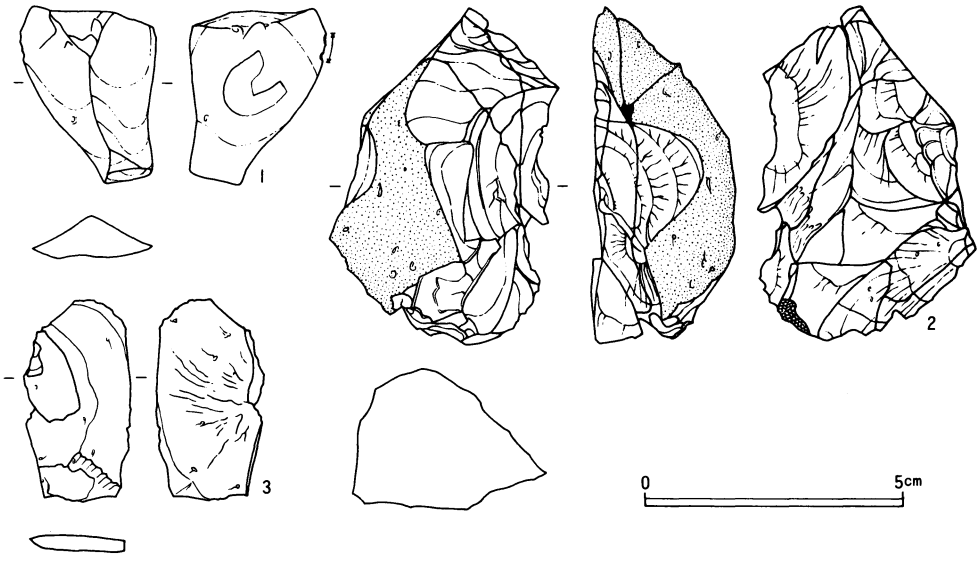
3 B07グリッドより採集された頁岩製の剝片である。



第6図　A－1群遺物出土状況図（1/100）



第7図　A－2群遺物出土状況図（1/100）



第８図　Ａ－２群石器類実測図（2/3）

第２節　縄文時代（第９図、図版12～13）

Ａ区では明瞭に縄文時代に属する遺構は検出されなかった。しかしながら当該期遺物包含層の調査において若干数の土器片が出土したので、主な資料を報告しておく。

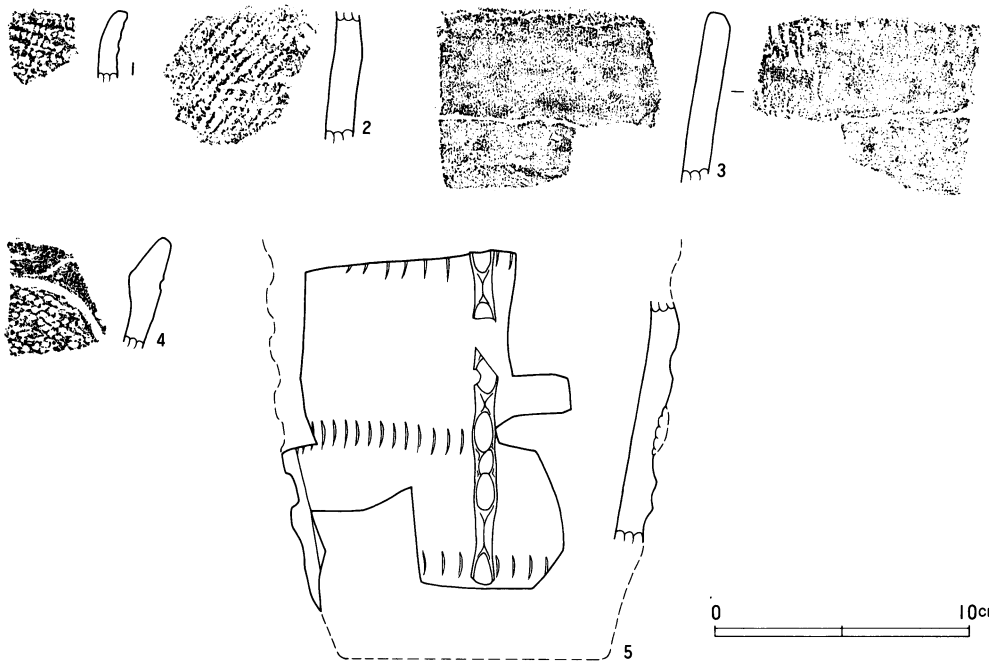
１はＲＬの横走撚糸文である。縄文時代早期初頭の撚糸文系土器である。

２は胴部破片でＬＲの斜縄文が施文されている。胎土中には繊維が混入している。前期前半に属するものであろう。

３は無文であるが裏面口縁直下には爪状工具による浅い擦痕列が見られる。胎土には砂が多く、雲母片が混入する。中期前半の粗製土器である。

４はＲＬ斜縄文を磨り消した波状口縁の一部である。後期前半に属する。

５は４本の隆起懸垂文を貼付し、器面には貝殻状工具による連続刻目文を施している。中期前半の土器である。



第９図　Ａ区包含層出土遺物実測図（1/3）

第３節　古墳～歴史時代（第10図）

調査区域西北部の台地縁辺上に住居跡を中心とする竪穴遺構が集中している。これらより東方にやや離れてＡ―22号跡が検出された。遺物が出土しなかったために時期決定の困難な遺構もあるが、一括して本項で取り扱うこととする。

遺構数は23基であり、その内訳は次のとおりである。

住　居　跡……11基（Ａ－１～11号跡）

鍛冶工房跡……２基（Ａ―12・13号跡）

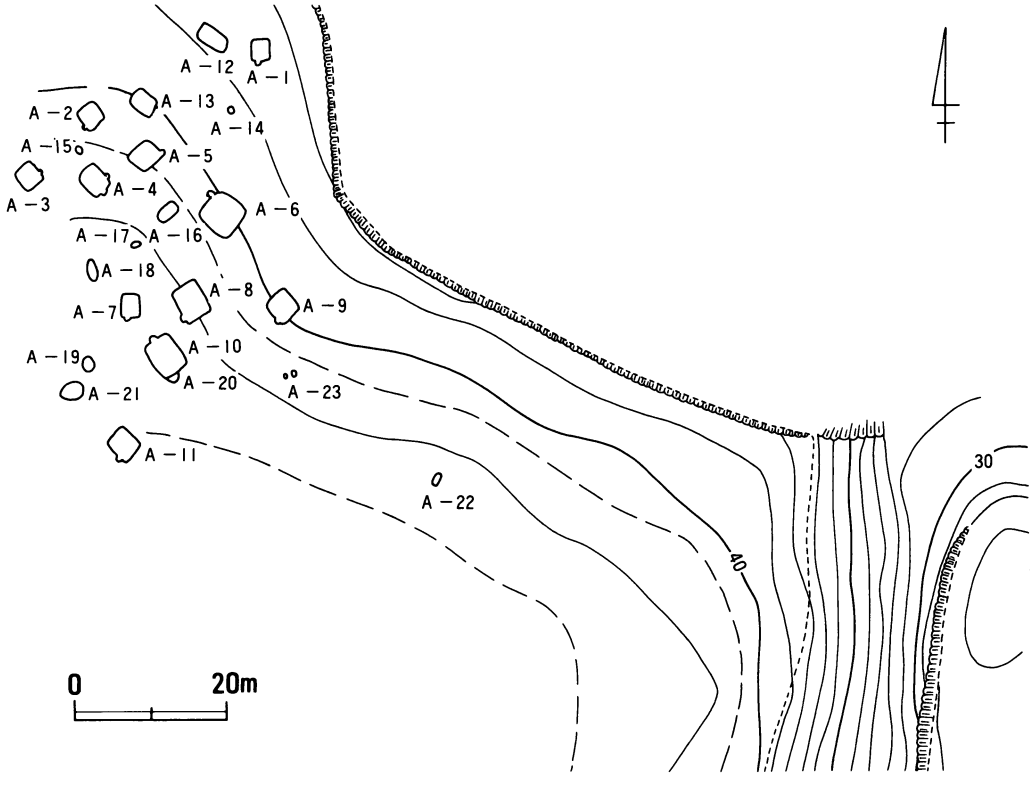
土　　壙……９基（Ａ―14～22号跡）

焚　火　跡……１基（Ａ―23号跡）

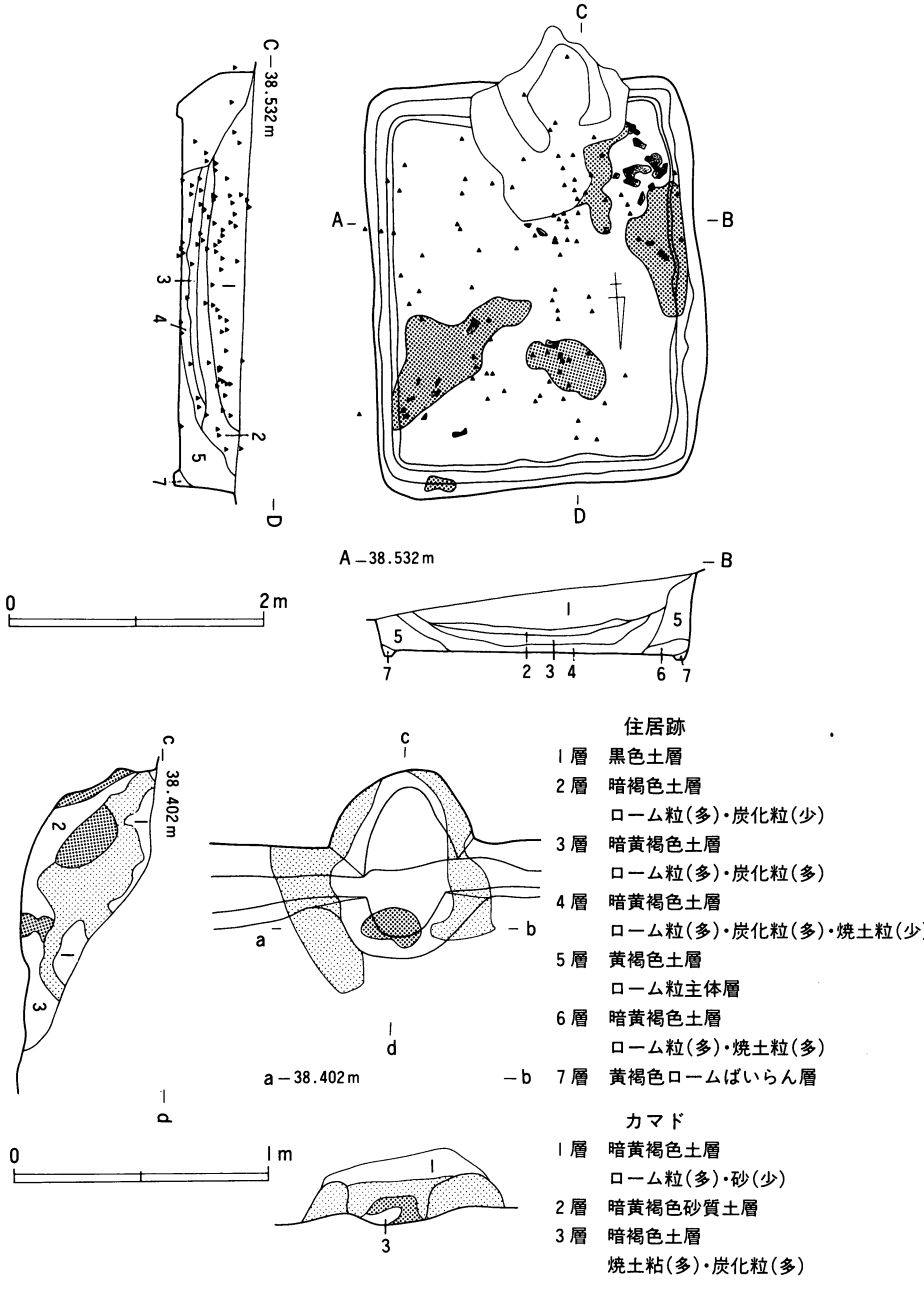
多くの住居跡の床面上には焼土が散布していたが、床面には明瞭な赤変硬化箇所が認められず、状況的に住居の上部構造を暗示させる炭化材の出土も見られないことから、これらの焼土は後述の鉄滓とともに住居跡内に投棄されたものと考えられる。

住居跡内からは多数の鉄滓が検出された。これらの鉄滓の殆どは磁石に引かれ、鉄錆色を呈する径2cm前後の粒状鍛冶滓であるが、少数ではあるが磁石に引かれず、暗褐色や青褐色を呈する製錬滓も混在していた。これらの鉄滓は鍛冶工房等で行なわれた鍛冶作業後に前述の焼土とともに住居跡内に投棄されたものと考えられる。

なお調査区域外の後背台地を踏査したが、当該時期の土器片は殆ど見られなかったので、調査区域外に本集落跡の主体部があるとは考え難い。検出された遺構群でほぼその全貌を現わしていると見做してさしつかえなかろう。



第10図　A区遺構配置図（1/1000）



第11図　A－1号跡実測図（1/60・1/30）

A－1号跡（第11図、図版2）

長軸がほぼ南北方向に沿った長方形プランで、床面は北方にやや傾斜する。側溝が全周し、柱穴は検出されなかった。南壁中央から東よりの部分にカマドが設定されている。

カマドは側溝を中心に煙道部下のピットを壁外へ80cm、燃焼部ピットを住居内へ40cm程延ばした卵形プランのピット上に構築されている。上部施設は両袖部の下半が残存しており、中央部は陥没していた。

床面上には焼土が広く分布し、南東コーナー付近には炭化材の集中箇所が検出された。

粒状鍛冶滓が多数出土したが、その殆どは覆土中からのもので、床面からの出土例は少ない。

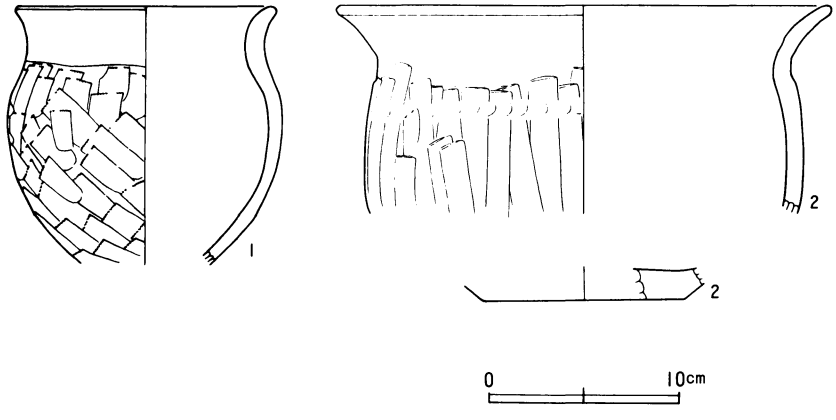
出土遺物（第12図、図版15）

1は小型甕（土師器）で口径13.6cm、現高13.5cmを測る。茶褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は板材木口部でヘラケズリ、胴部内面はナデ処理である。内面口縁付近は器肌が荒れ、径2㎜程の浅い剝落痕が多数見られる。

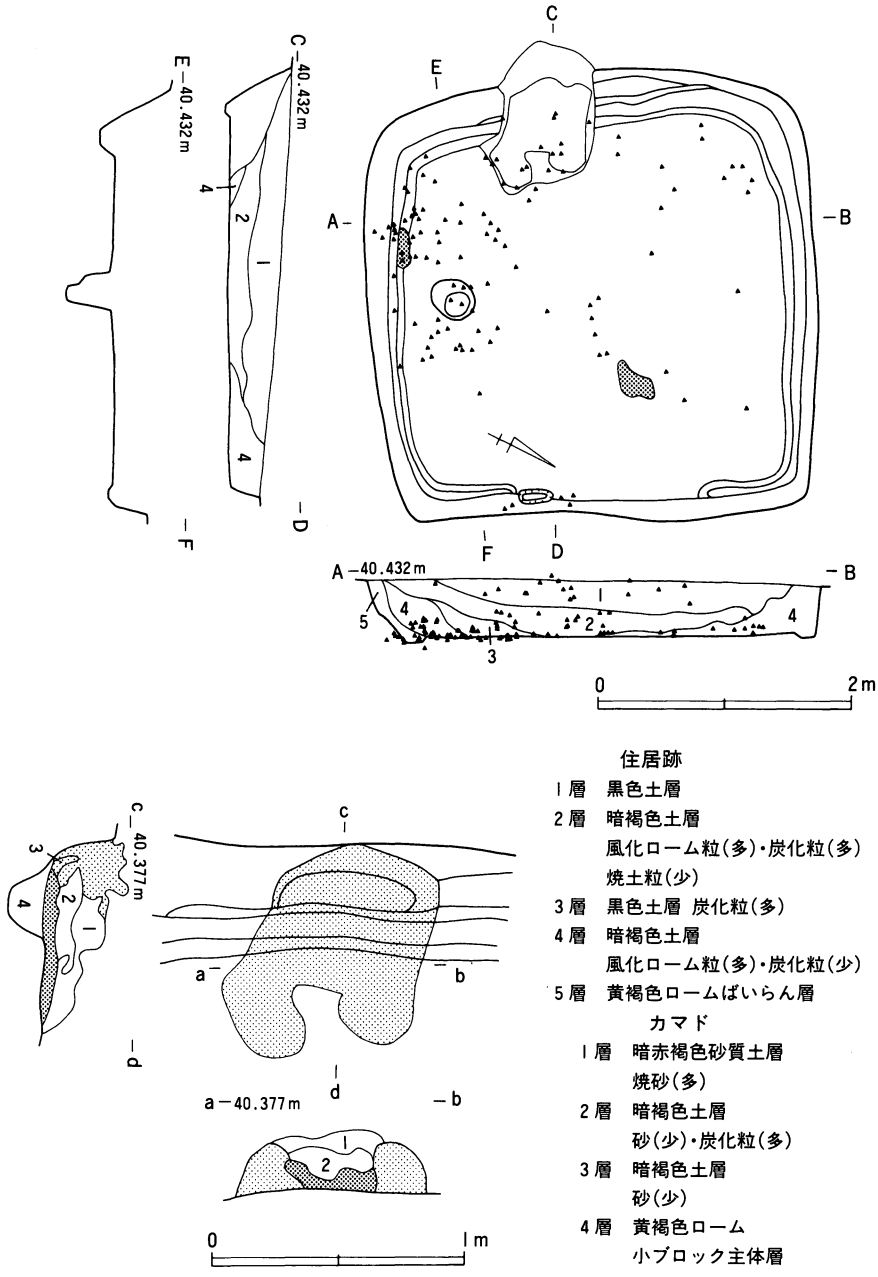
遺構の中央部よりやや北側、覆土上層から散乱した状態で出土した。

2は大型甕（土師器）で口径26.1cm、底径10.4cm、上部現高10.6cmを測る。暗褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面へラケズリ、同内面はナデている。へラケズリの上端付近には連続指頭圧痕がめぐっているが、これは下部へラケズリの際に土器を固定させるために当該部の内外面を指で強くオサエたために生じたものであろう。また外面には煤が若干付着し、内面は3～4㎜の浅い剝落痕が少々見られる。胎土中の砂粒はやや多い。

1の東隣の覆土上層から散乱した状態で出土した。



第12図　A－1号跡出土遺物実測図（1/4）



第13図　A－2号跡実測図（1/60・1/30）

A－2号跡（第13図、図版3）

胴張りぎみの正方形プランを呈する。柱穴は南東壁中央付近に1基確認された。側溝は北東壁では完周せず、南西壁側では壁より離れてめぐっている。カマドはそこに生じた平担面をまたぐように設置されていた。

カマドの下部施設は壁面を多少修正し、深い側溝を暗褐色土で埋めていた。上部施設は両袖部下半が遺存する。

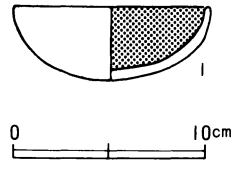
床面上には狭い焼土域が2箇所確認された。

粒状鍛冶滓が多数検出されたが、遺構西半部からの出土が多かった。床面出土例とともに覆土中かなり浮いた部分からの検出例も目立つ。

出土遺物（第14図、図版15）

1は杯（土師器）で口径10.1cm、器高3.8cmを測る。色調は外面明褐色、内面黒色を呈する。外面はヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラミガキである。なお体部外面に大きな黒斑がある。

カマドの手前東寄りの地点、床面から一括出土した。



第14図　A－2号跡出土遺物実測図（1/4）

A－3号跡（第15図、図版3）

ほぼ正方形のプランで、側溝・柱穴は存在しない。中央からやや北コーナー寄りに浅い摺鉢状の不整形なピットが存在する。羽口の出土はなかったが、鍛冶炉の可能性がある。カマドは北東壁の東コーナー付近に設置される。なお南東壁中央からカマドに向かって攪乱溝が走っていた。

カマドは壁外へ20cm程突出した煙道部下のピットと壁際に設けられた半楕円形プランの燃焼部ピットの上に構築されている。現状では両袖部下半が残存し、中央部は陥没していた。

床面上には南西壁に沿って焼土が分布していた。

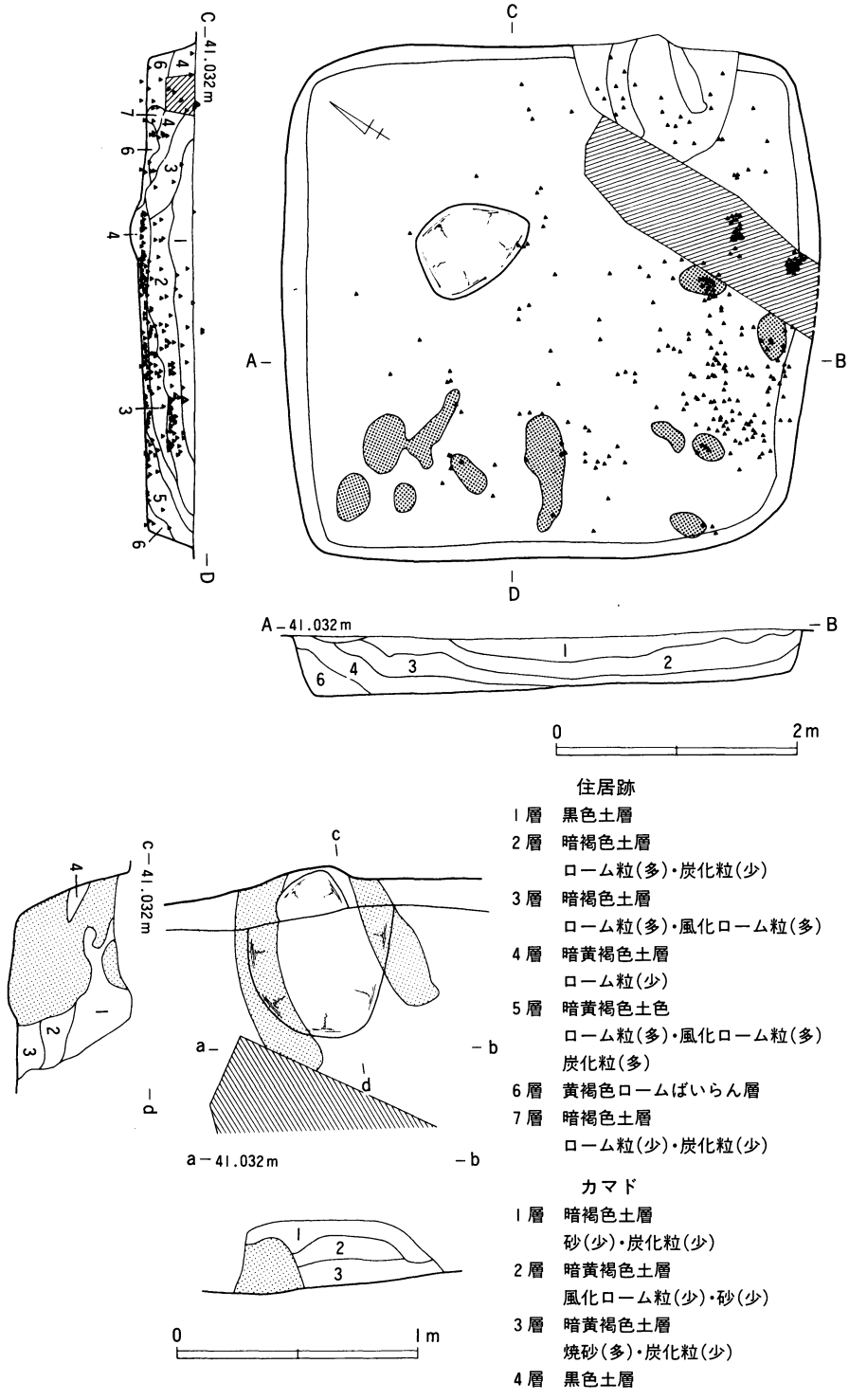
粒状鍛冶滓が多数出土したが、製錬滓が15点混在する。これらは遺構南東側からのものが多く、その中でも床面出土例と覆土2層中出土例とに大分されるようである。

出土遺物（第16図、図版15）

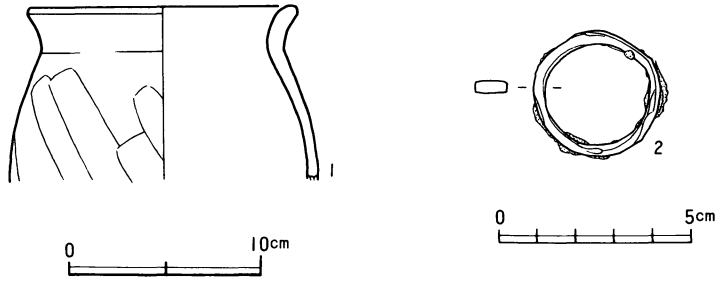
1は小型甕（土師器）で口径13.8cm、現高9.1cmを測る。暗赤褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は粗雑なヘラケズリ、同内面は横方向のヘラミガキを施す。

カマドの手前、東コーナー付近の覆土中層から散乱した状態で出土した。

2は鉄環で直径3.3cm、厚さ3㎜を計る。表面が剝離する程度に銹化が進んでいる。鍍金の有無は不明。遺構中央部の覆土上層から単独出土した。



第15図　A－3号跡実測図（1/60・1/30）



第16図　A－3号跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

A－4号跡（第17図、図版4）

不整長方形プランを呈し、柱穴・側溝は存在しない。南東壁には張り出し部が設けられている。カマドは北東壁の東コーナー付近に造られている。

カマドの煙道部下のピットは壁を10cm程削りとっただけのもので、燃焼部ピットは壁から30cm離れた場所に浅く楕円形に掘り込まれている。上部施設は両袖部の基部が遺存していた。

カマドの周囲の床面上には焼土が分布していた。

粒状鍛冶滓が多数出土したが、製錬滓が2点混在する。これらの多くは床面から少し浮いた覆土2層中から検出された。

本住居跡はカマドは付設されているが、平面的には鍛冶工房跡としたA－12・13号跡に類似している。階段状のテラスは見られないが相当部分には張り出しが存在する。また他の住居跡に比べ、遺構の掘り方が浅い点もA－12・13号跡と共通している。これらのことから、「カマド」が鍛冶炉として使用されたのではあるまいか。

A－5号跡（第18図、図版4）

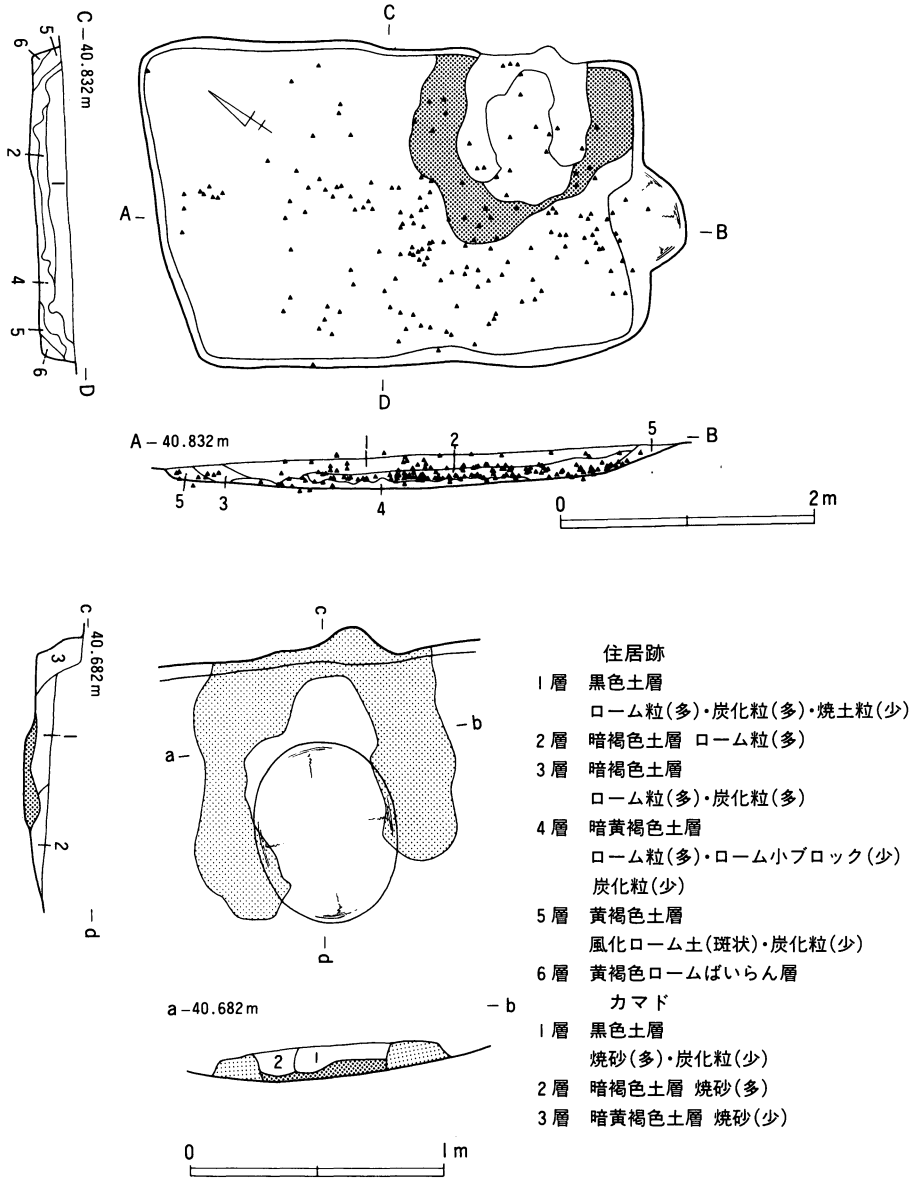
不整方形プランを呈し、とくにカマド設置箇所は壁線の出入りが激しい。柱穴・側溝は存在しない。カマドは北東壁の東コーナー付近に設置されている。

カマド煙道部下の壁は僅かに外方へ掘り広げられ、燃焼部のピットは壁際から浅く掘り下げられている。カマドの上部施設は煙道部と両袖部下半が遺存しており、中央部は陥没していた。

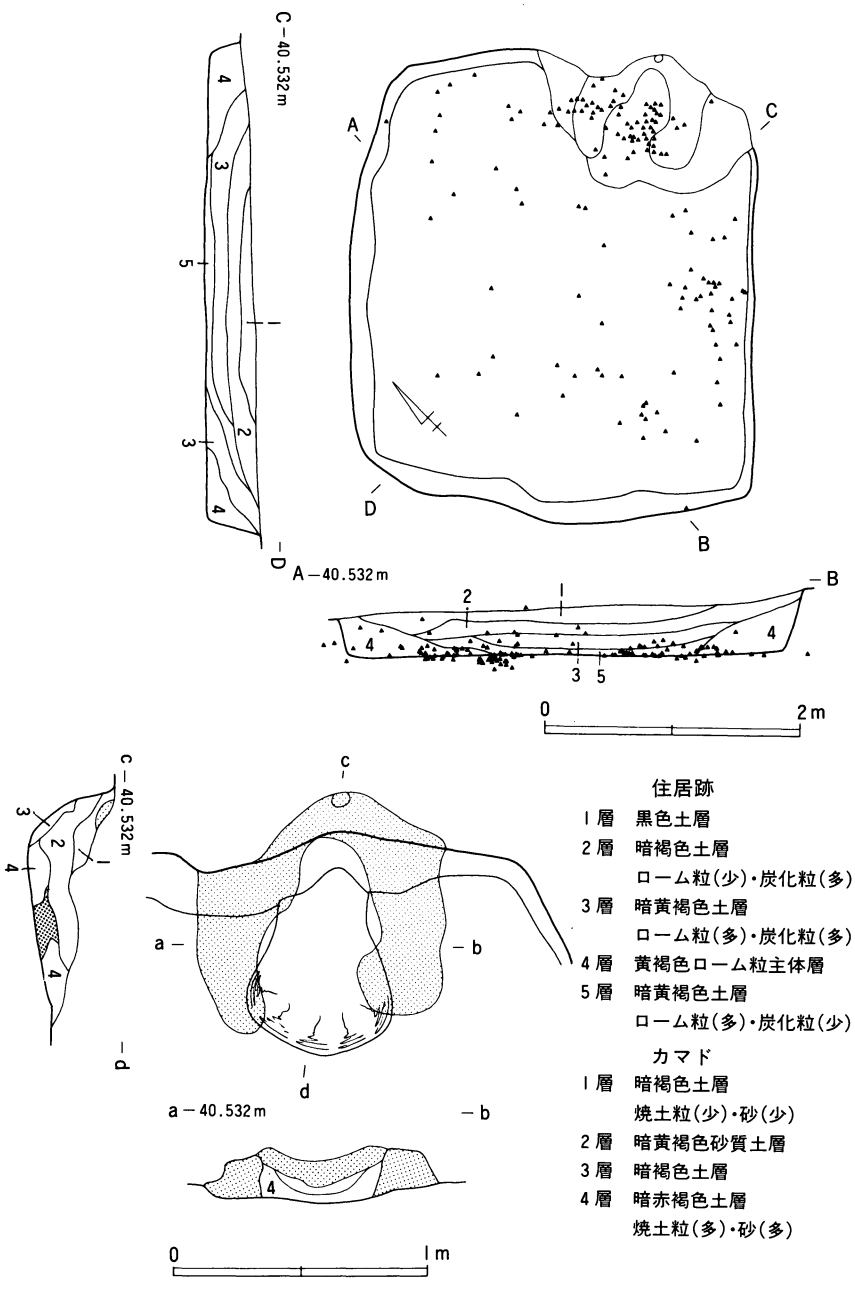
粒状鍛冶滓が多数検出されたが、遺構東半部からのものが多く、なかでもカマド内より集中的に出土した。床面上からの出土例が多い。

出土遺物（第19図、図版15）

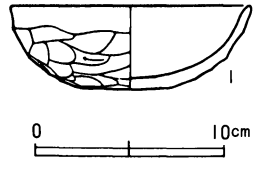
1は杯（土師器）で口径12.6cm、器底4.3cmを測る。明褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、体部から底部にかけて外面は深いヘラケズリ、内面は横ナデ調整である。胎土中には小石・砂がやや多い。北コーナー付近の床面から、ほぼ完形で出土した。



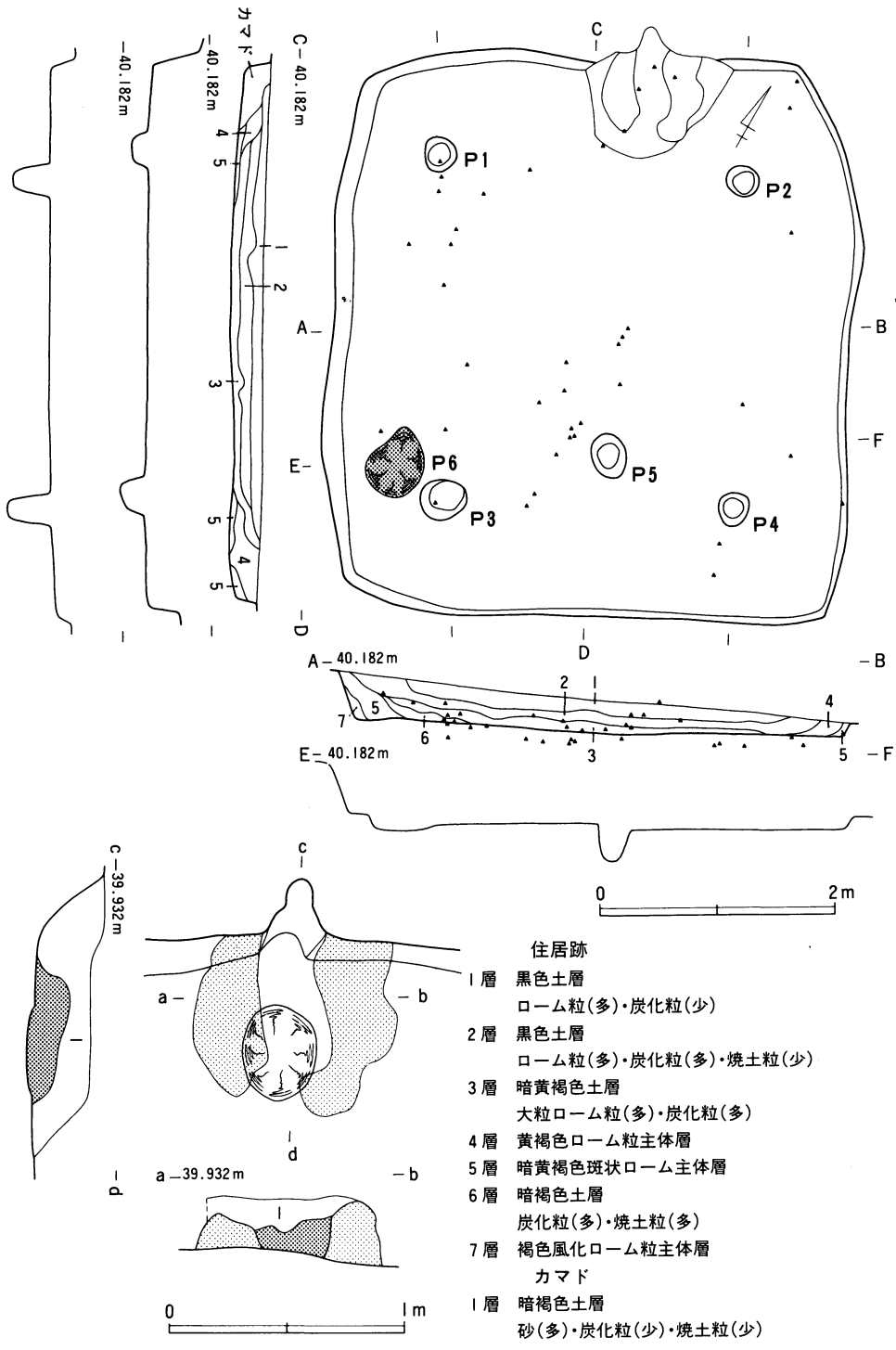
第17図　A－4号跡実測図（1/60・1/30）



第18図　A－5号跡実測図（1/60・1/30）



第19図　A－5号跡出土遺物実測図（1/4）



第20図　A－6号跡実測図（1/60・1/30）

A－6号跡（第20図、図版5）

略正方形を呈する胴張りのプランである。柱穴は5基（P_1・P_2・P_3・P_4・P_5）検出されたが、P_1・P_3はP_2・P_4に比し浅くなっており、P_5はそれらの中間的深さである。柱穴の深さが柱の高さに比例するとすれば、この住居跡の上部構造は一方向のみに傾斜する片流れ式であり、出入口には東側に設けられたものと思われる。P_6は浅い摺鉢状の不整形ピットで、その覆土には焼土が充塡していた。このピットは壁や柱穴に接近し過ぎているため鍛冶炉としての使用は困難であったと思われる。側溝は存在しない。カマドは北西壁の北コーナー付近に設置されていた。

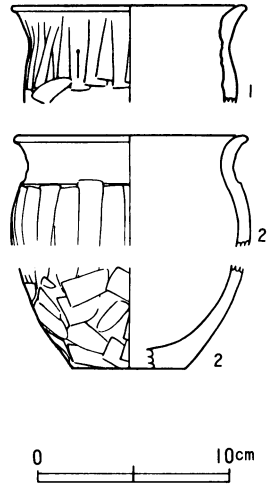
カマド煙道部のピットは壁より25cm程突出して掘り込まれ、燃焼部のピットは壁より20cm程離れた箇所に楕円形に浅く掘られていた。カマドの上部施設は両袖部下半が遺存する。

粒状鍛冶滓が少数出土したが、その中に製錬滓が7点混在する。分布は散漫で床面上からの出土が多かった。

出土遺物（第21図、図版15）

1は小型甕（土師器）で口径12.2cm、現高5.1cmを測る。色調は外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面下から上方向のヘラケズリ、同内面ヘラナデ調整がなされている。口唇部は水平に外方に延びているが、これは胴部ヘラケズリの際に土器を倒置したためと思われる。内外面共器肌の剝落が見られるが、とくに内面において著しい。

南コーナーを中心とした覆土上層から散乱した状態で出土した。



第21図　A－6号跡出土遺物実測図（1/4）

2は小型甕（土師器）で上部と下部に分かれるが接合しない。口径12.1cm、現高上部5.6cm、同下部5.2cm、底径5.8cmを測る。明褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、同内面はナデである。頸部の横ナデは強く肩部との境は明瞭な稜をなす。胴部外面には若干の剝落部がある。胎土は比較的キメが細かい。

遺構南東部の覆土上層において、かなり散乱した状態で出土した。

A－7号跡（第22図、図版5）

北壁がやや短かい方形プランを呈する。柱穴は1基確認された。側溝は存在しない。カマドは南壁の南西コーナー付近に設置されている。

カマドの煙道部は壁を若干掘り広げ、燃焼部には浅い皿状のピットが造られている。上部施設は煙道部と両袖部下半が遺存していた。

床面上には各所に焼土が散布していた。

粒状鍛冶滓がやや多量に検出された。その多くは床面上からの出土である。

出土遺物（第23図、図版16）

1は杯蓋（須恵器）で口径9.9cm、器高3.2cmを測る。明灰色を呈し、体部はナデが行き届き平滑だが、天井部はヘラ切り後無調整である。体上部に「の」形のヘラ記号状の陰刻がある。ロクロは右回転で、胎土中の小石・不純物は少ない。カマド手前の南西コーナー付近、床面からほぼ完形で出土した。

2は杯（土師器）で口径7.4cm、現高1.9cmを測る。暗褐色から黒色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリの後ナデ、同内面にはナデが施される。胎土中の小石・砂はやや少ない。北壁中央部付近、覆土下層から出土した。

3は杯（土師器）で口径10.5cm、器高3.5cmを測る。色調は暗褐色で内面は黒味が強い。口縁部内外面は横ナデ、体部から底部にかけて外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデが行なわれる。胎土中には小石・砂がやや多い。南東コーナー付近、床面から一括出土した。

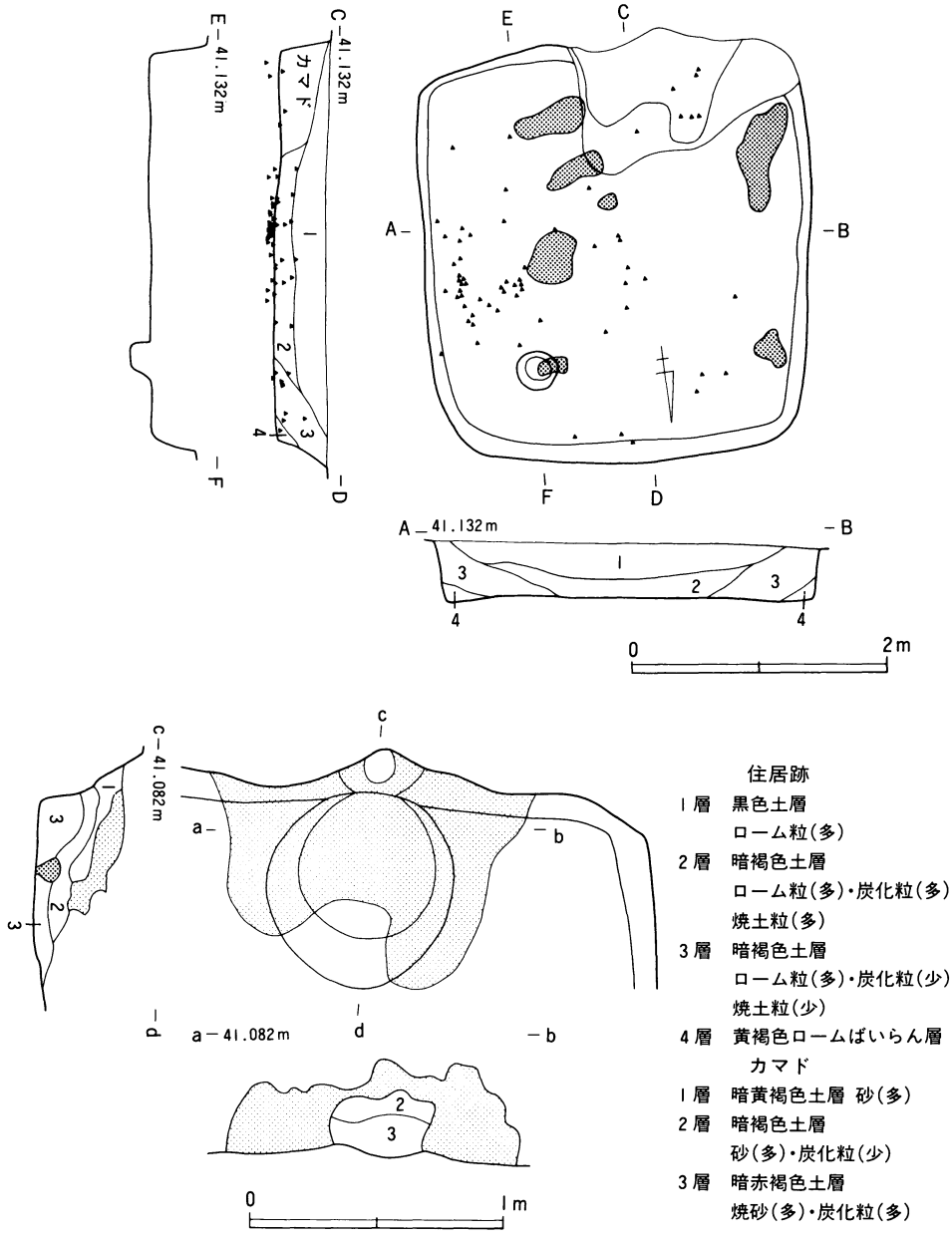
4は小型甕（土師器）で、口径13.5cm、底径8.0cm、器高14.5cmを測る。暗茶褐色を呈し、口縁部内外面は弱い横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、同内面はナデ調整される。胴下部外面は器肌の剝落が著しく、上部にも径5㎜程のアバタ状剝落痕が見られるが、内面は荒れていない。また胴部外面には煤が付着する。胎土は砂を多く含む。1に南隣して床面から一括出土した。

5は甕（土師器）で胴下半部のみ残存した。底径8.4cm、現高12.0cmを計る。色調は赤褐色を呈し、外面には赤味の強い部分があるが、塗彩痕か否かは不明。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデがなされ平滑であり、同内面はナデられているが器肌の剝落が著しく凹凸が激しい。胎土中の小石・砂は少ない。カマドの手前やや西よりの地点、覆土下層から一括出土した。

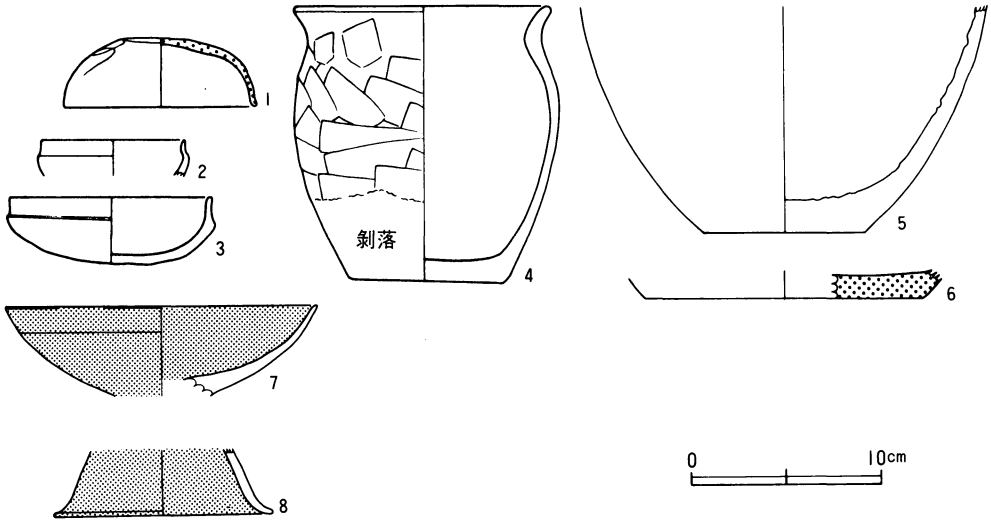
6は底部破片（須恵器）で、壺か瓶のものであろう。底径14.4cm、現高1.4cmを測る。器表面は暗青紫色だが、断面では暗青紫色と赤紫色とが横縞状に成層している。胎土中には径2㎜程の小石・ガラス質微細砂粒・黒色炭化有機物が含まれる。なお現形は四角形の破片で、割れ口は鋭い稜を成しているが、一角のみ磨滅して鋭利な角がとれている。破片の再利用を考えさせる。3に東隣した南東コーナー、覆土中層から出土した。

7は高杯（土師器）で、脚上部が接合しない。口径16.2cm、脚端径11.4cm、杯部現高4.7cm、脚部現高3.3cmを測る。赤褐色を呈し、杯部外面には口縁下に細沈線が1条めぐっている。内外面共丁寧にナデられ、その上から赤色化粧土をハケで二度塗りしている。胎土は精良で小石・砂は殆ど見られない。

カマド内床面から散乱した状態で出土した。



第22図　A－7号跡実測図（1/60・1/30）



第23図　A－7号跡出土遺物実測図（1/4）

A－8号跡（第24図、図版6）

床面の浅い遺構で、とくに東壁は遺存状態が悪い。長方形プランを呈し、側溝は存在しない。柱穴は2基（P_1・P_2）確認されており、P_2の方がP_1よりも深い。本住居跡の上部構造もA－6号跡と同様な片流れ式ではあるまいか。とすれば出入口は東側になるであろう。カマドは西壁の南西コーナー付近に設置されている。

カマドの煙道部は壁を20cm程掘り広げて突出させ、燃焼部には楕円形の浅いピットを穿っている。上部施設は両袖部基部のみが遺存する。

床面上からは2箇所の焼土散布域が見られた。

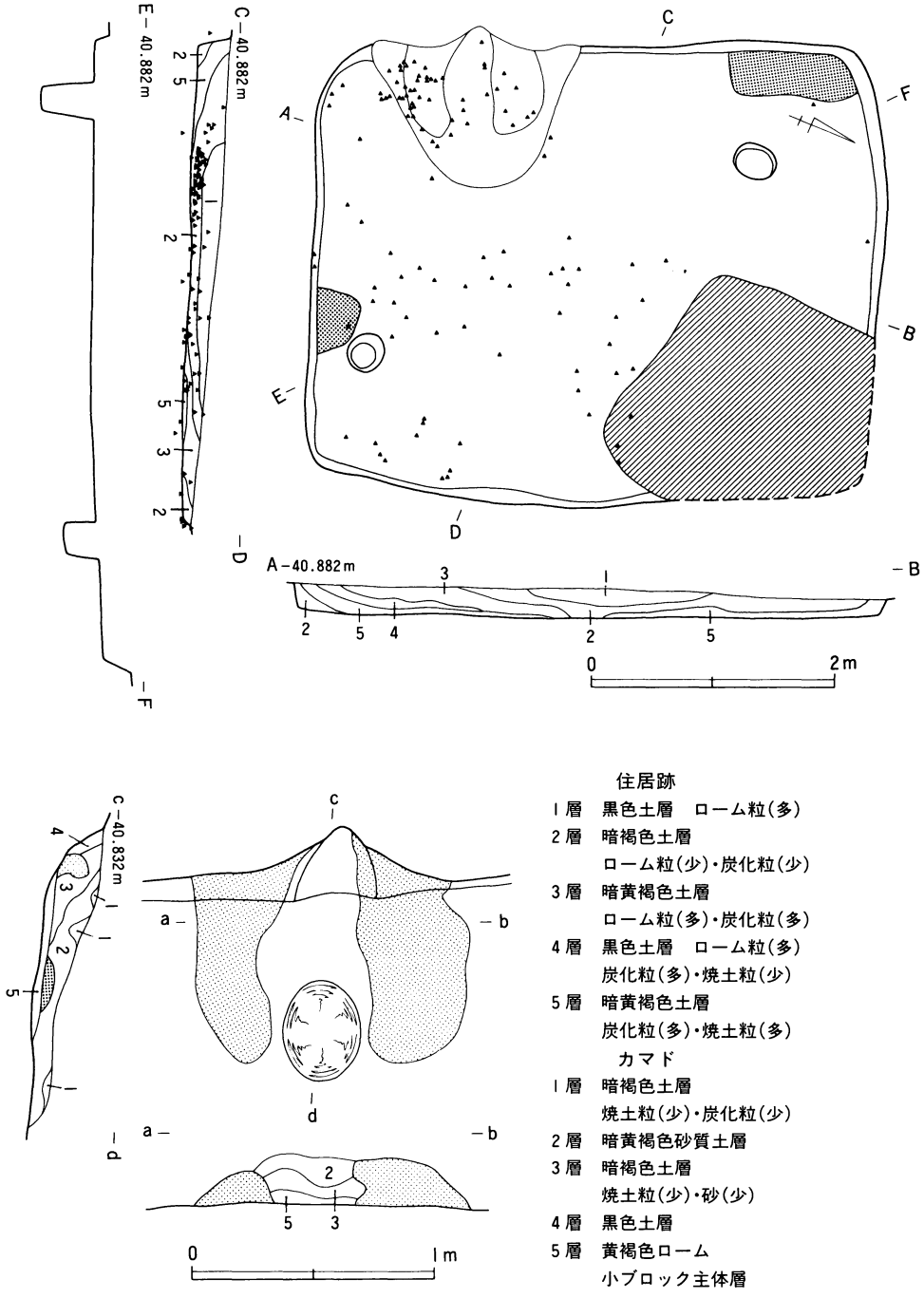
粒状鍛冶滓が多数検出されている。南半部からの出土が目立ったが、とくにカマド付近に集中している。床面あるいはその付近から検出されたものが多い。

なお北東コーナーは攪乱を受けており検出不能だった。

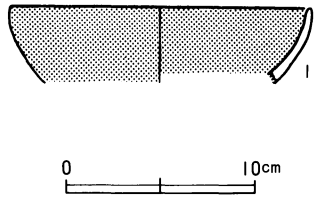
出土遺物（第25図）

1は杯（土師器）破片で口径15.5cm、現高5.0cmを測る。暗赤褐色を呈し、外面はヘラケズリの後ナデ、内面はミガキに近いヘラナデである。内外面共赤彩が施されるが、外面には黒斑が見られる。胎土中には砂がやや多い。

カマド南脇の覆土下層から、やや散乱した状態で検出された。



第24図　A－8号跡実測図（1/60・1/30）



第25図　A－8号跡出土遺物実測図（1/4）

A－9号跡（第26図、図版6）

北西壁が短かい台形状を呈する。側溝は全周している。南東壁中央部付近にピットが存在するが、深さや掘られた方向からして柱穴とは考えられない。カマドは南西壁中央からやや南コーナー寄りの箇所に設置されている。

カマドは側溝を中心に壁側を若干掘り広げ、床面部は半楕円形の浅いピットを穿って、排出したローム土で側溝を埋めて下部施設を形成した後に、上部施設を構築している。上部施設の遺存度は良好であり、煙道部が明確に検出された他、土器挿入部もほぼ本来の位置を保っていた。

遺構東半部の床面上には焼土が広範に散布していた。

粒状鍛冶滓が多数検出されたが、製錬滓が1点混在する。分布は遺構東半部に偏っており、床面出土のものは少なく、覆土中出土例が目立つ。

出土遺物（第27図、図版16）

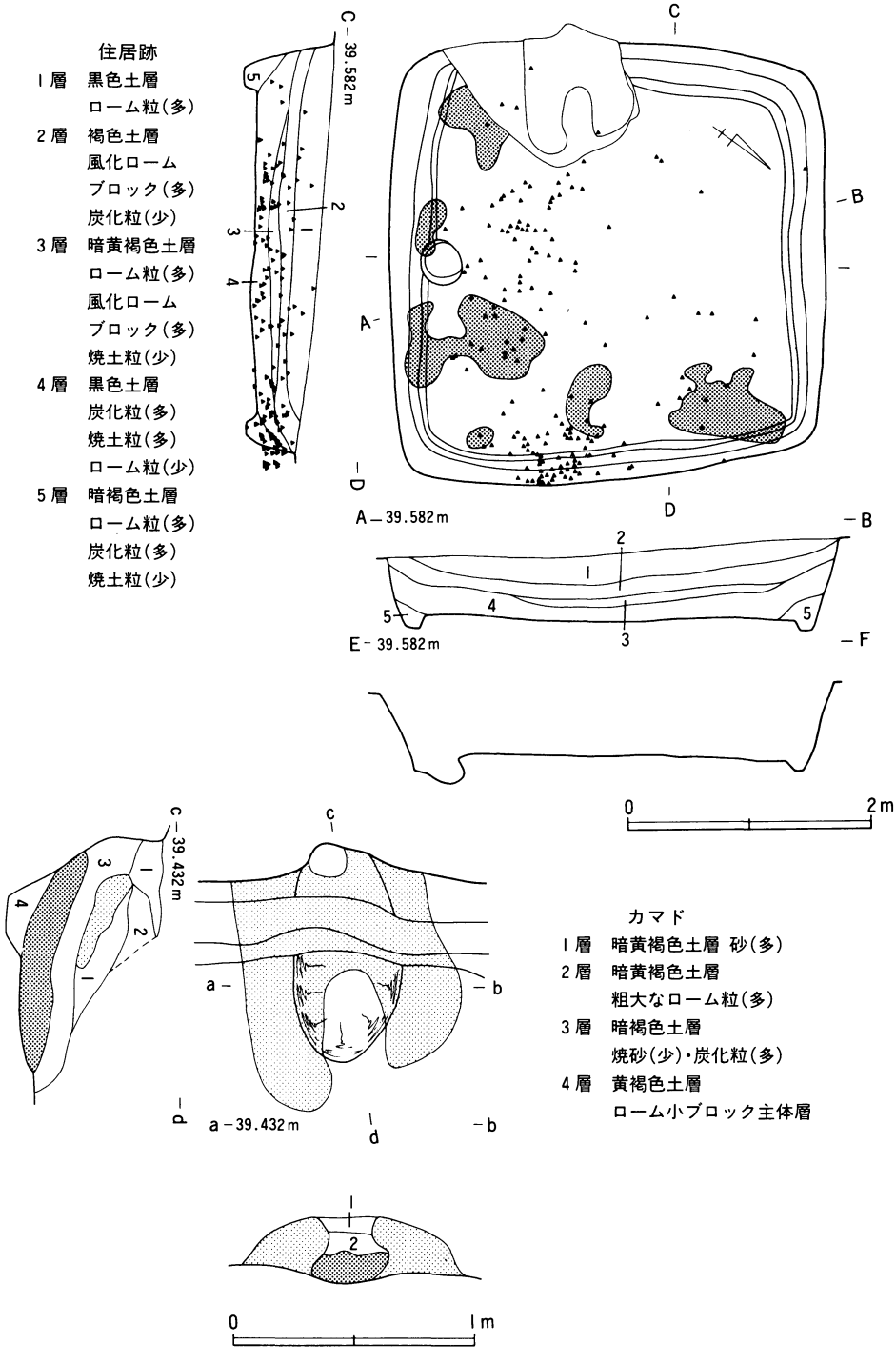
1は小型甕（土師器）で口径13.8cm、底径5.4cm、胴部最大径13.6cm、器高5.4cmを測る。茶褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面へラケズリ、内面はナデが施されている。胴部のへラケズリは弱く、ナデに近いために器面は僅かに光沢をもつ。胎土中の小石・砂はやや少ない。

カマドと南東壁に狭まれた空間の覆土中層から下層にかけて散乱した状態で出土した。

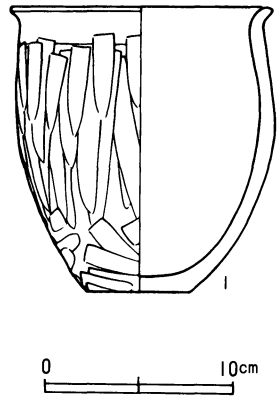
A－10号跡（第28図、図版7）

A－20号跡を切って構築された遺構である。本来の長方形プランを一部拡張した不整長方形プランを呈する。拡張後にはローム土を敷き詰め貼床としている。拡張前には2基の柱穴と側溝が存在した。側溝は一部掘り過ぎのため不明部分があるが、西コーナー付近で途切れている。拡張時にはこれらはすべて埋められている。カマドは北西壁中央部に設置されていた。

カマドの下部施設は壁を30cm程外方に突出させ、床面には不整円形ピットを穿っている。上部施設は遺存が比較的良好で、煙道部と両袖部下半が残存していた。



第26図　A－9号跡実測図（1/60・1/30）



第27図　A－9号跡出土遺物実測図（1/4）

床面上には北コーナー付近を除き焼土が広範に分布し、炭化材も検出された。

また東コーナーからは製錬原料と思われる14.6kgの砂鉄堆積が発見された。

粒状鍛治滓が少数検出された。すべて覆土中からの出土である。

出土遺物（第29図、図版16）

1は杯蓋（須恵器）で口径16.3cm、器高4.2cmを測る。明灰色を呈し、外面は口縁部から体部にかけて回転ヘラケズリ後回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリのみ、内面は回転ナデである。ロクロは右回転で、胎土には小石を少量含む。なお口縁部の一部には煤が付着している。カマド正面手前の覆土下層から散乱した状態で出土した。

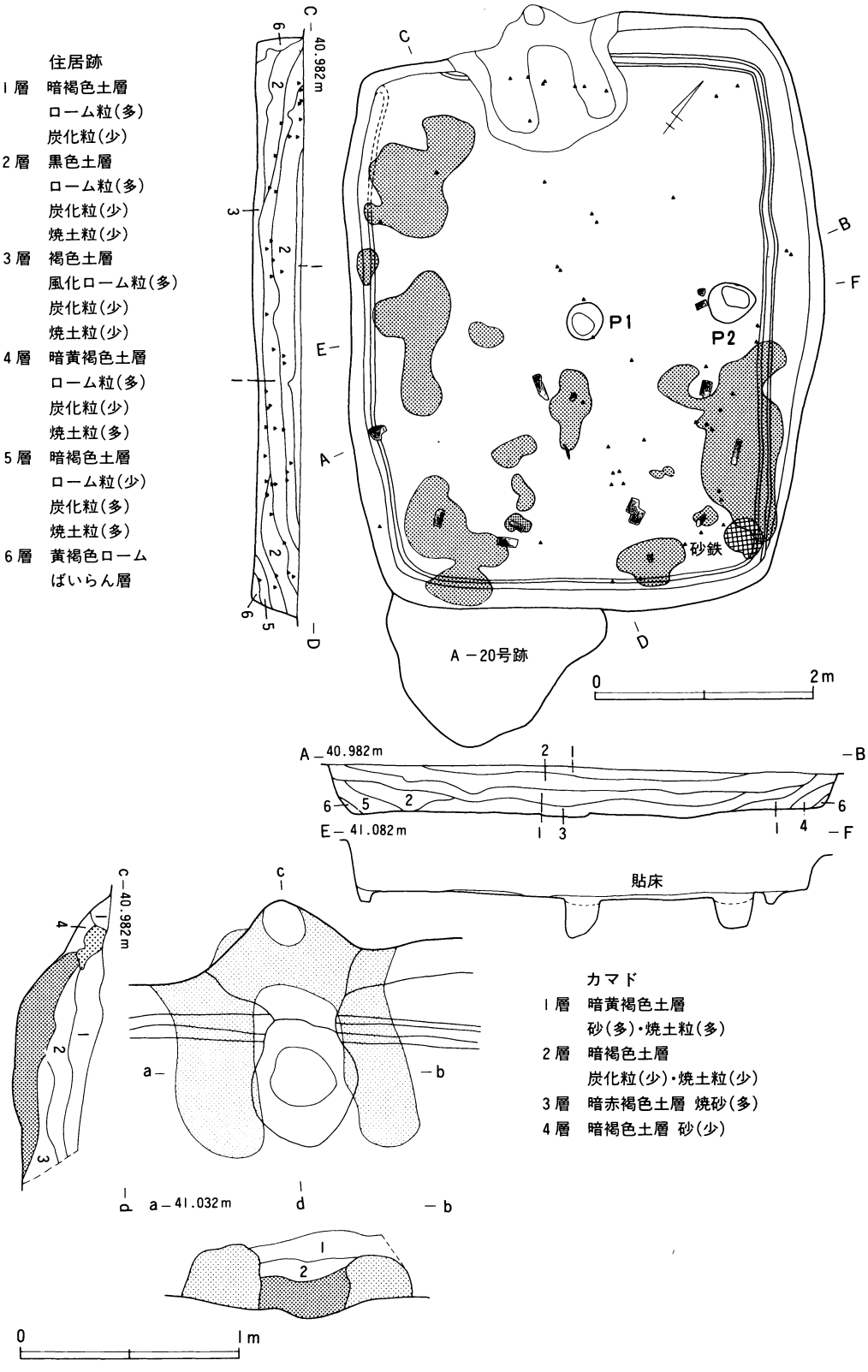
2はフラスコ形長頸瓶（須恵器）で口径10.1cm、器高25.2cmを測る。胴部はその最大径が図示した角度では17.1cm、90°回転させると15.3cmとなり、ラグビーボールに近い形状を呈する。暗灰色で、外面は回転ナデが行き届き平滑だが、口頸部内面には水びき痕がそのまま残される。底部周辺には幅3㎜程のワラ状物による焼成前に付された短い擦痕がとりまいている。胴部外面には器肌の剝落が著しい部分がある。また肩部から胴部にかけて煤の付着が見られる、胎土中の小石は少ない。カマド東脇の覆土下層から散乱した状態で出土した。

3は、鉄鎌である。現在先端部が欠失し、刃部中央から折離している。基部を8㎜程折曲げ、刃部は中央あたりから湾曲の度合いを強めている。萱状の木質部が付着した部分が数か所ある。南西壁際において、南コーナー付近と中央より西コーナー寄りの地点とに分離して出土した。

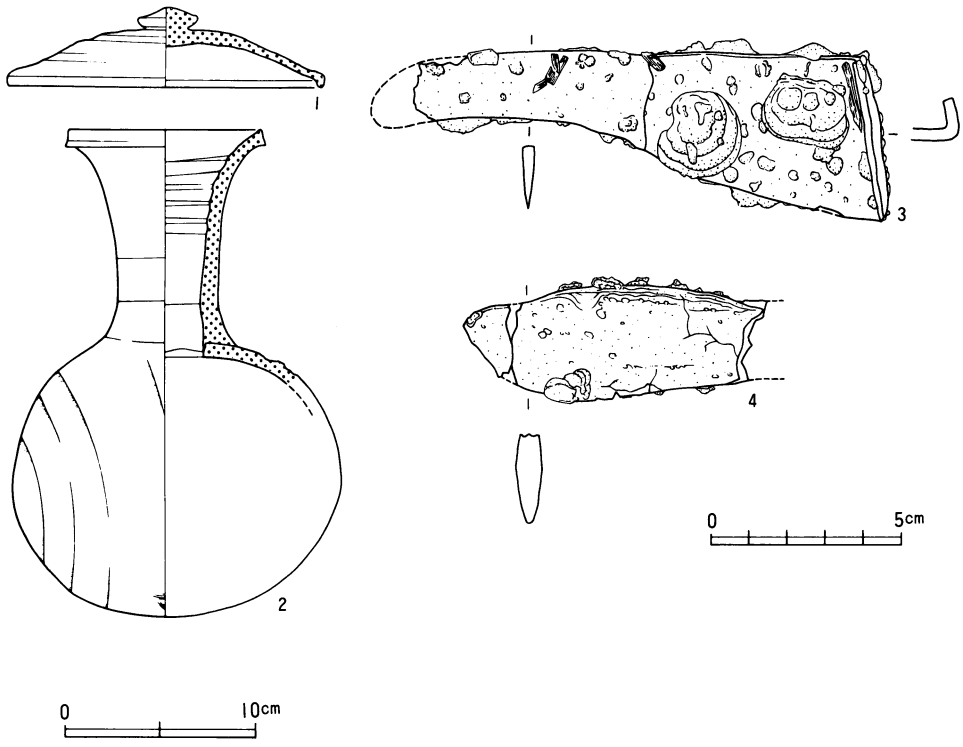
出土層位は覆土中層である。

4は刀子の切先部である。先端部が折損している。銹化が進行し銹ぶくれが著しく、図示した断面も本来の厚みではない。現長8.0cmを測る。

カマドの南1mの地点、覆土最上層より出土した。



第28図　A－10号跡実測図（1/60・1/30）



第29図　A－10号跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

A－11号跡（第30図、図版７）

正方形に近い長方形プランを呈する。柱穴と思われるものは２基（P_1・P_2）確認されたが、P_2の方は極端に浅い。本住居跡もA－６・８号跡同様な片流れ式とすれば、その出入口は南東側になろう。側溝は全周している。カマドは南西壁の南コーナー付近に設置されている。

カマドの下部施設は壁を若干突出させ、床面には円形のピットを掘り込んでいる。側溝を埋めた形跡はない。上部施設は煙道部はつぶれているが、比較的遺存良好である。

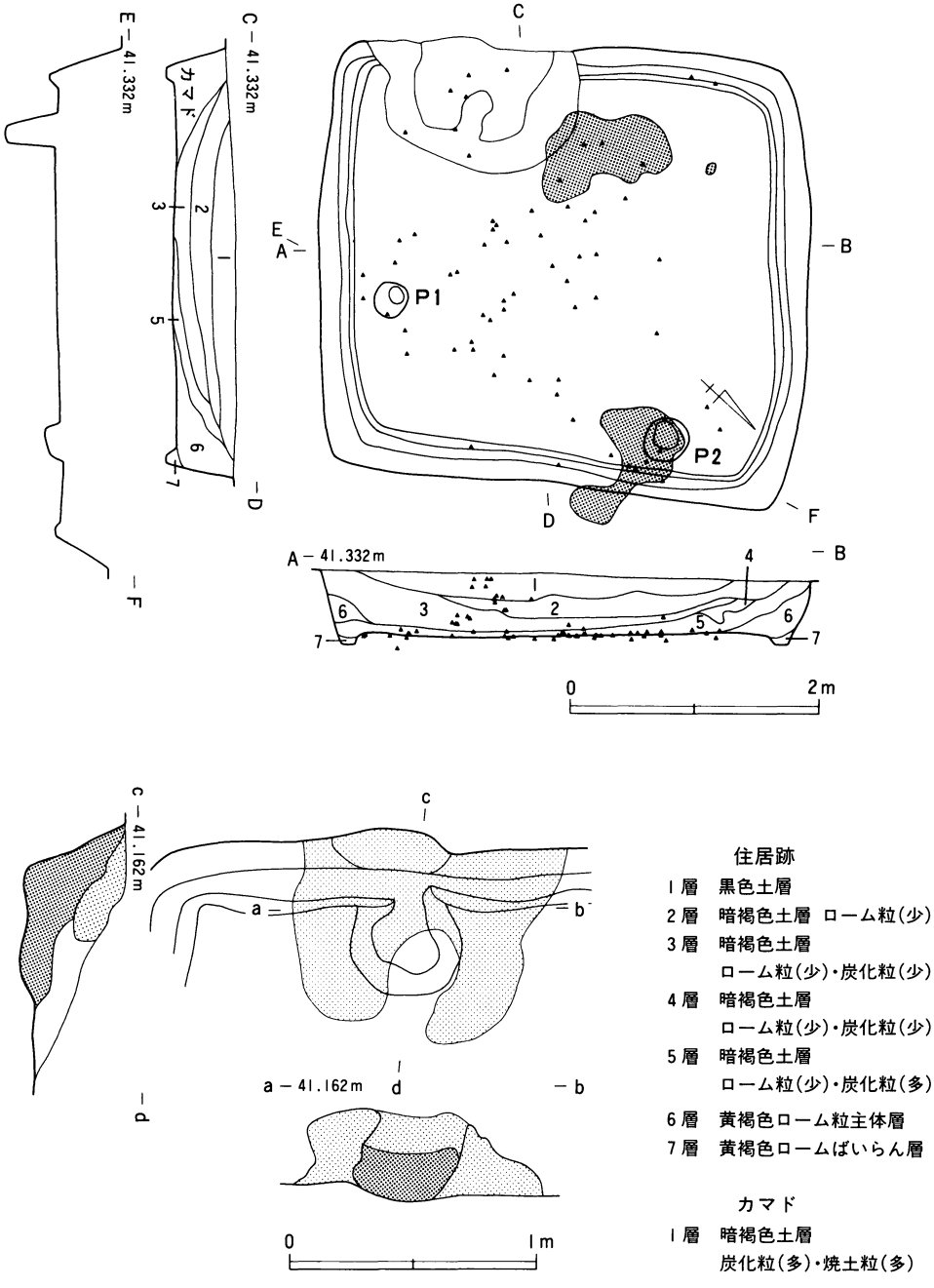
床面上には焼土の散布が見られた。

粒状鍛冶滓が少数検出され、４点の製練滓が混在する。床面からの出土が多かった。

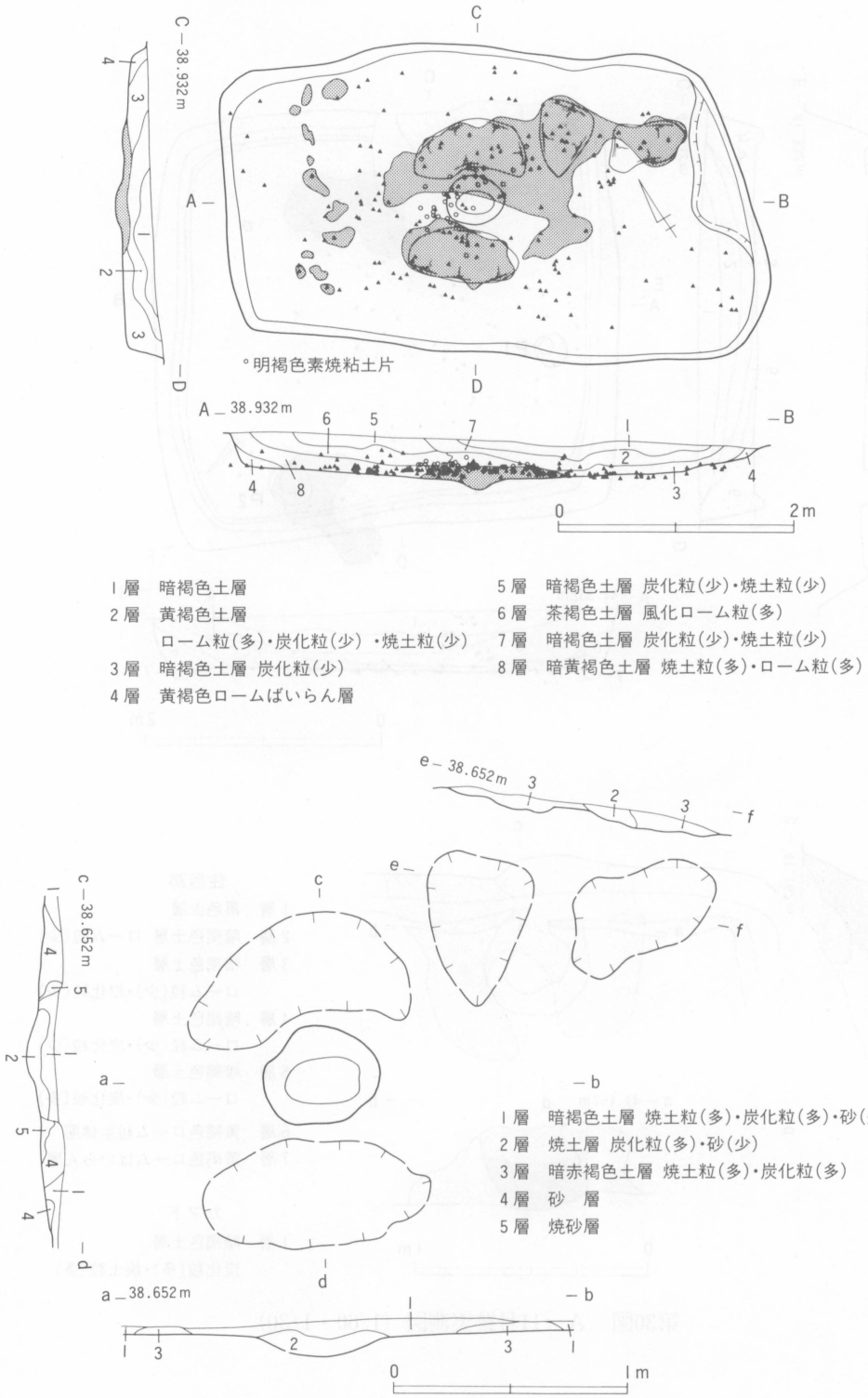
A－12号跡（第31図、図版８）

不整な長方形プランを呈する。東壁付近は床面が僅かに高くなっている。中央には不整形の浅いピットがあり、その周囲には浅いくぼみ状の落ち込みが４箇所確認された。

このピットには焼土が充塡しており、それを取りまく２つの落ち込みには鍛冶炉の壁材と思われる山砂が残存しており、ピットに面する部分は赤く焼けて硬化していた。またこのピットの周囲には径２cm前後の明褐色を呈する炉壁材外方部と見られる素焼粘土片が床面からやや浮



第30図　A－11号跡実測図（1/60・1/30）



1層　暗褐色土層
2層　黄褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(少)・焼土粒(少)
3層　暗褐色土層 炭化粒(少)
4層　黄褐色ロームばいらん層
5層　暗褐色土層 炭化粒(少)・焼土粒(少)
6層　茶褐色土層 風化ローム粒(多)
7層　暗褐色土層 炭化粒(少)・焼土粒(少)
8層　暗黄褐色土層 焼土粒(多)・ローム粒(多)

1層　暗褐色土層 焼土粒(多)・炭化粒(多)・砂(少)
2層　焼土層 炭化粒(多)・砂(少)
3層　暗赤褐色土層 焼土粒(多)・炭化粒(多)
4層　砂　層
5層　焼砂層

第31図　A－12号跡実測図 (1/60・1/30)

いた状態で散乱していた。

遺構の床面にはこれらピットや落ち込みを被覆するように焼土が広範に散布していた。

粒状鍛冶滓が多数検出され、製錬滓が1点混在する。床面からの出土例が多い。

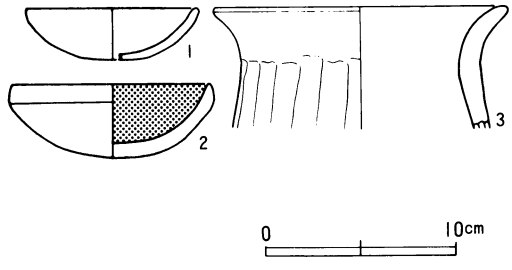
出土遺物（第32図、図版15）

1は杯（土師器）で口径8.8cm、器高2.7cmを測る。明褐色を呈し、外面はヘラケズリの後に粗雑なヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。口縁部内面には煤が付着する。胎土は精良で小石・砂は少ない。南コーナー床面から一括出土した。

2は杯（土師器）で口径10.3cm、器高3.9cmを測る。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈する。調整は外面が口縁部横ナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリの後ミガキに近いヘラナデで弱い光沢をもつ。内面は横方向のヘラミガキである。内面には細かいヒビ割れが全面に見られる。胎土には小石がやや多い。西コーナーの東70～80cmの付近、覆土上層からやや散乱した状態で出土した。

3は小型甕（土師器）で口径15.4cm、現高6.3cmを測る。色調は外面黒色、内面明褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は弱いヘラケズリ。内面はナデが施されている。内面の器肌の剝落が著しい。胎土には砂粒がやや多い。

北東壁中央壁際床面から一括出土した。



第32図　A－12号跡出土遺物実測図（1/4）

A－13号跡（第33図、図版8）

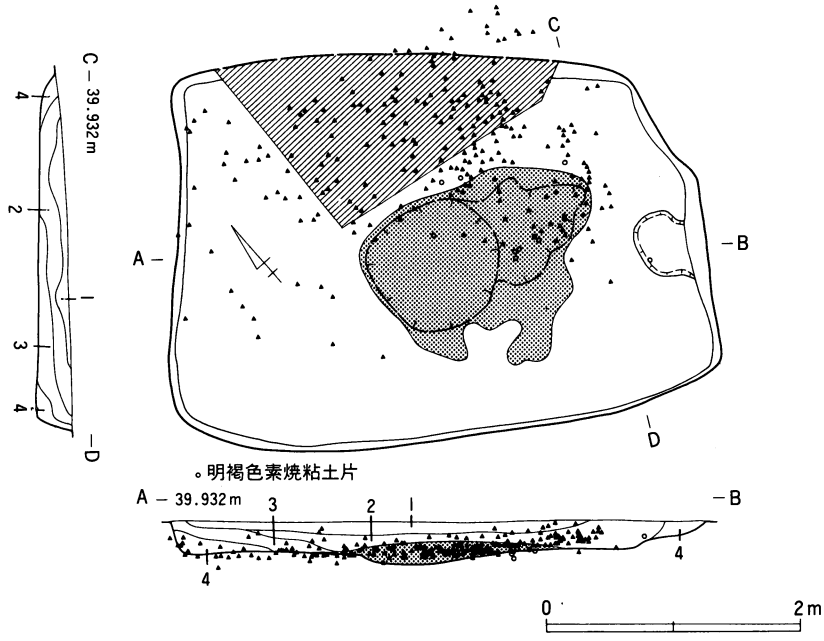
不整な長方形プランを呈する。南東壁の中央部には階段状に高くなったテラスが形成されている。遺構中央部には浅いくぼみ状の落ち込みが確認された。

この落ち込みには焼土が充塡しており、部分的に焼砂が残存していた。また落ち込み中とその周囲からはA－12号跡と同様な明褐色素焼粘土片が若干検出されている。

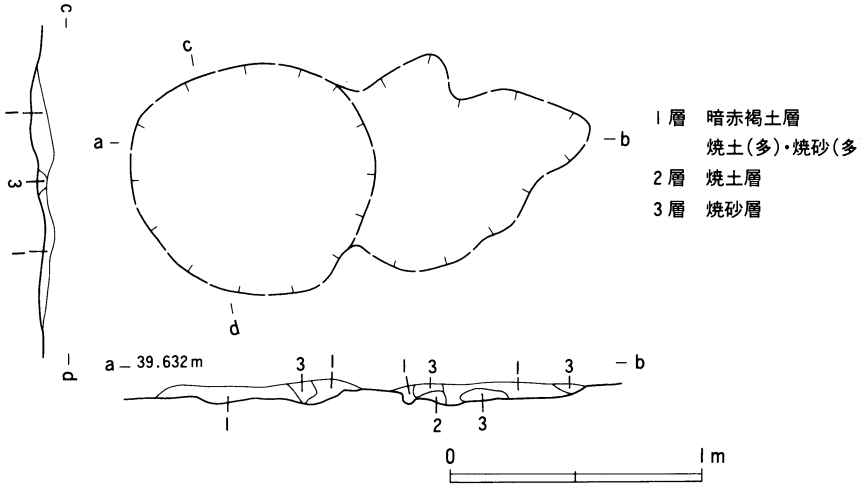
床面上には落ち込みを被覆するように焼土が散布していた。

遺構の北東半部を中心に粒状鍛冶滓が多数検出された。その多くは床面からの出土である。

なお遺構の北東壁は攪乱を受けている。



1層　暗黄褐色土層　ローム粒(多)
2層　暗褐色土層　ローム粒(少)・炭化粒(少)
3層　黄褐色土層
　　ローム粒(多)・焼土粒(多)・炭化粒(少)
4層　暗黄褐色ロームばいらん層　炭化粒(少)

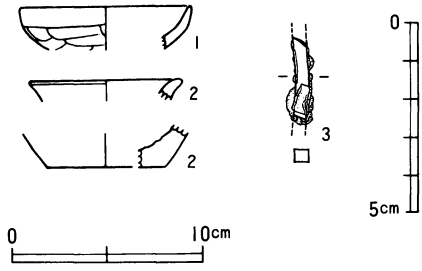


1層　暗赤褐土層
　　焼土(多)・焼砂(多)
2層　焼土層
3層　焼砂層

第33図　A－13号跡実測図（1/60・1/30）

出土遺物（第34図）

1は杯（土師器）で口径9.0cm、現高2.3cmを測る。色調は明褐色を呈する。外面は口縁部は粗雑なヘラミガキ、体部から底部にかけてはヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキである。胎土は精良で小石・砂は少ない。中央部落ち込みの北脇床面から単独出土した。

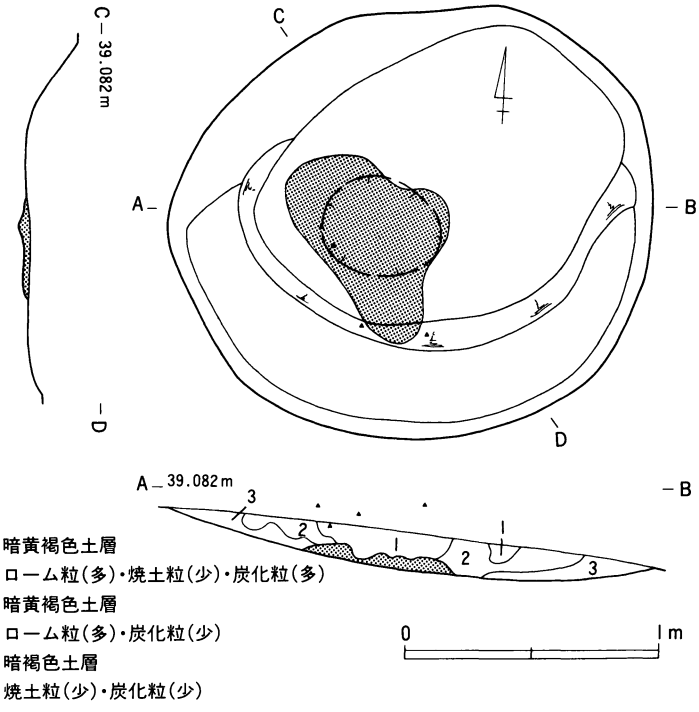


第34図　A－13号跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

2は小型甕（土師器）の口縁部及び底部破片である。他に胴部片が若干あるが接合しない。口径8.0cm、底径6.2cmを測る。暗赤褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴下部外面ヘラケズリ、内面ナデが施されている。内面は器肌の剝落が著しい。胎土中には白砂が多い。中央部落ち込み南側の床面上より散乱した状態で出土した。

3は鉄鏃の茎部片である。現長2.1cmを測る。

西コーナーから90cm東の地点、覆土下層から出土した。



第35図　A－14号跡実測図（1/30）

A－14号跡（第35図）

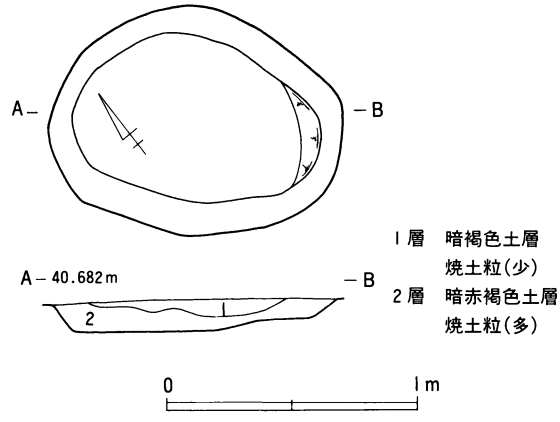
不整な円形プランを呈する。掘り方は北側が深くなる浅い皿状で、中央部には卵形の浅い落ち込みが確認された。この落ち込みには焼土が充塡し、その周囲にも焼土の散布が見られた。

粒状鍛冶滓が4点検出されたが、いずれも遺構覆土上層中からの出土である。

A－15号跡（第36図）

不整楕円形プランの浅い皿状の遺構である。

覆土中には焼土粒が多く含まれており、底面も焼き締まっている。遺物は出土していない。



第36図　A－15号跡実測図（1/30）

A－16号跡（第37図）

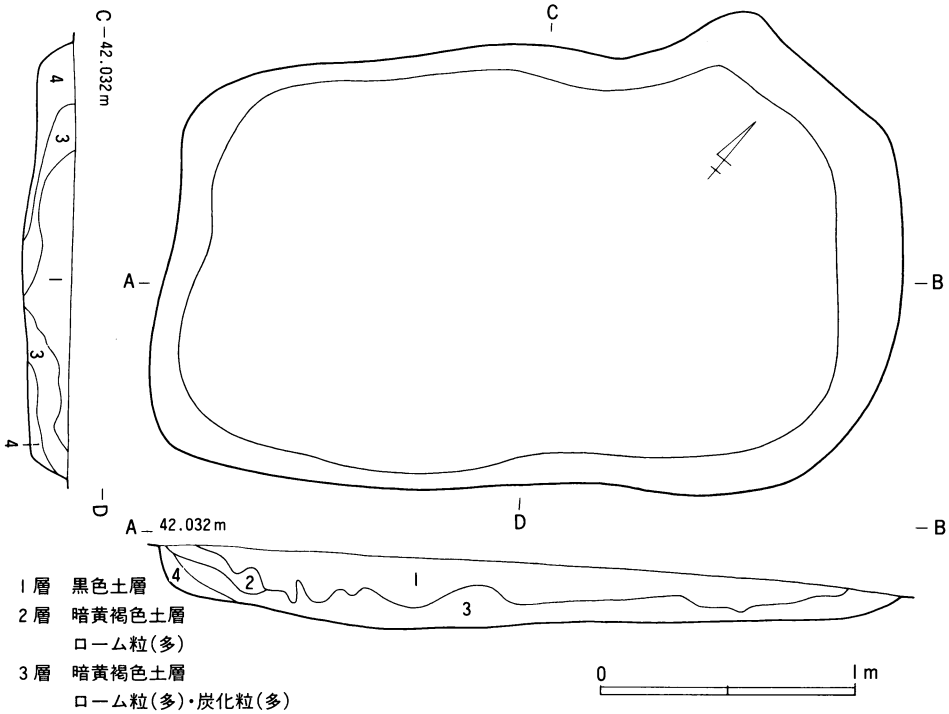
不整長方形プランを呈する。遺物は出土していない。

A－17号跡（第38図）

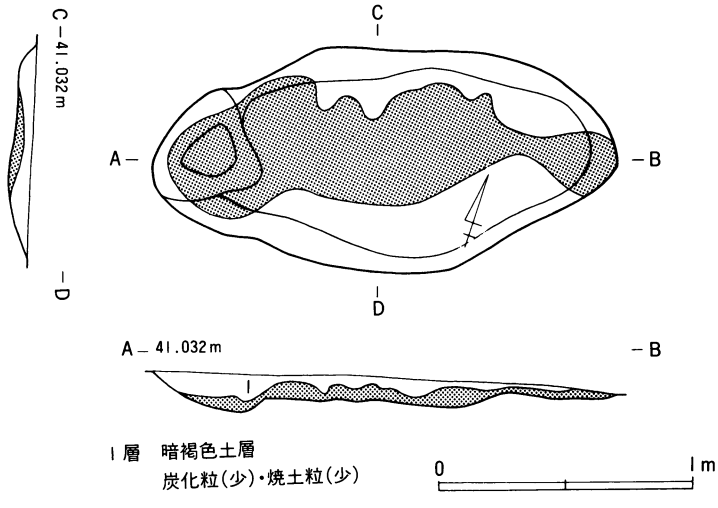
不整楕円形プランで、西端部は一段深く掘り下げられている。底面上には長軸方向に沿って焼土が散布していた。遺物は出土していない。

A－18号跡（第39図）

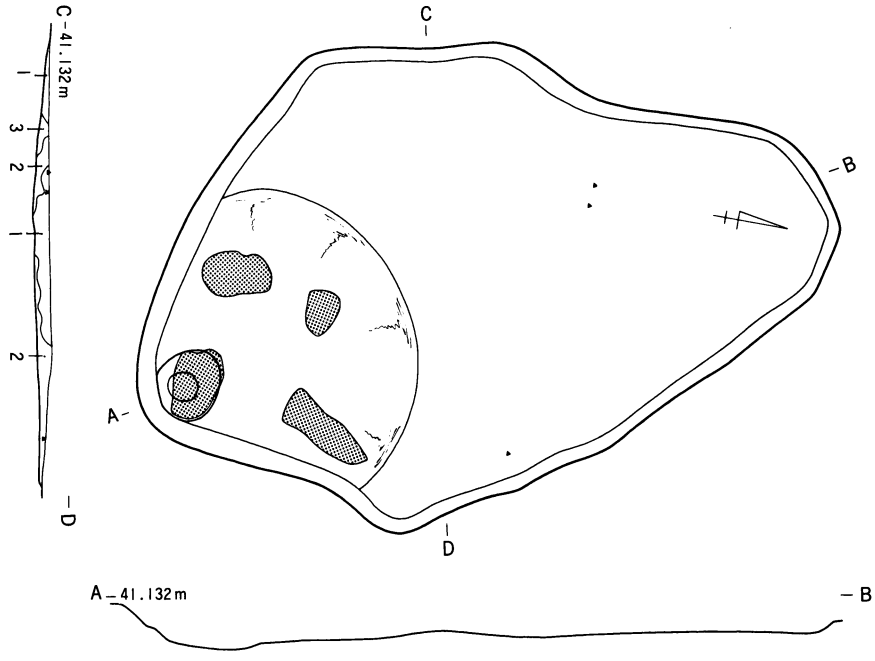
不整形プランの浅い落ち込みである。南側のやや深くなった底面には焼土が若干散布していた。覆土中からは粒状鍛冶滓が3点出土している。



第37図　A－16号跡実測図（1/30）



第38図　A－17号跡実測図（1/30）



1層　暗黄褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(多)
　　焼土粒(少)
2層　暗黄褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(少)
3層　黄褐色ロームばいらん層

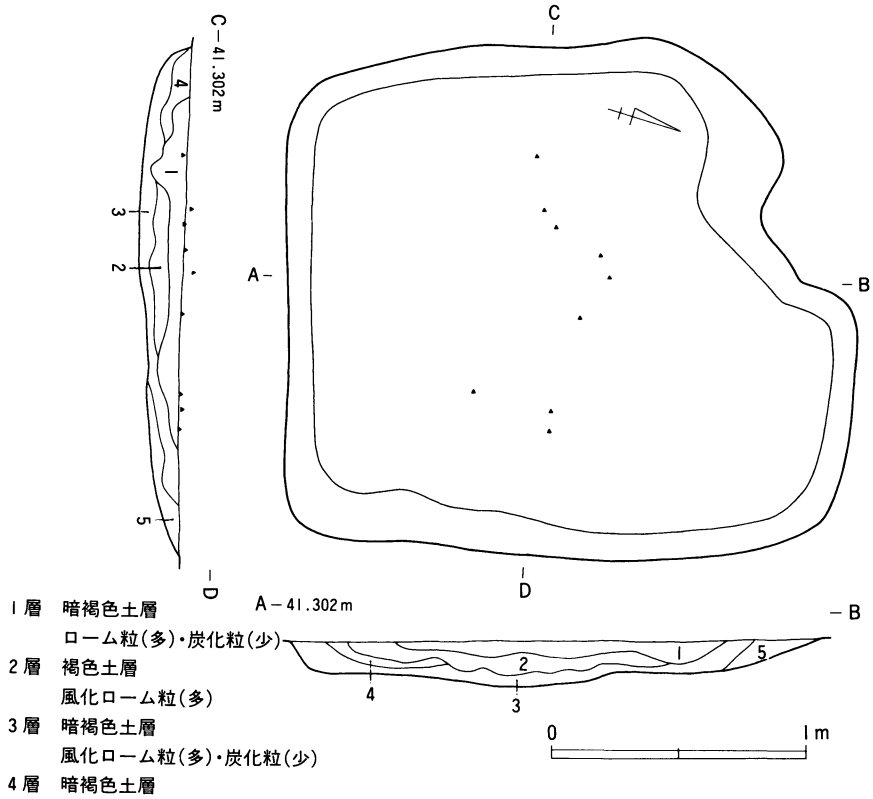
第39図　A－18号跡実測図（1/30）

A－19号跡（第40図）

三隅が角を成す不整形プランを呈する。遺構確認面上で9点の粒状鍛冶滓を検出した。覆土中には焼土粒は見られない。

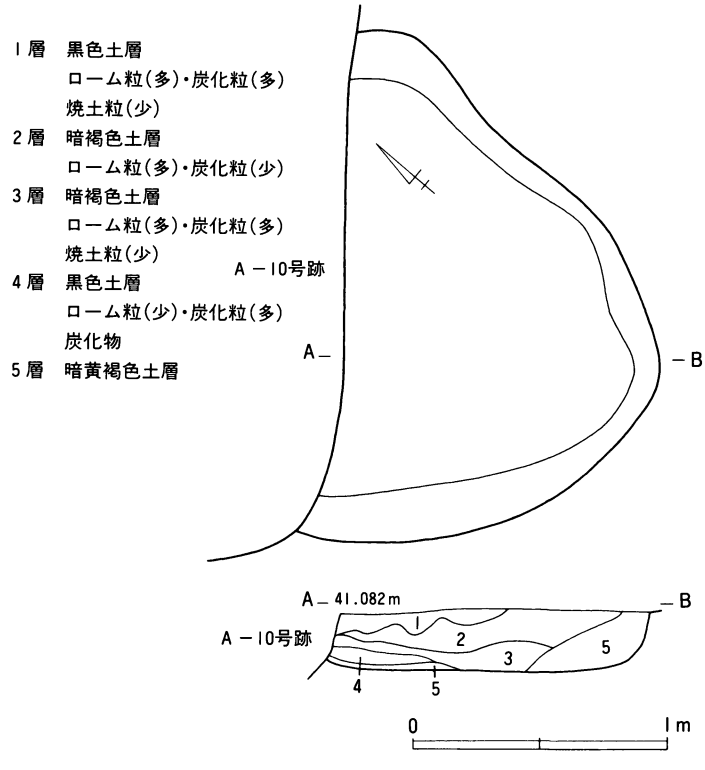
A－20号跡（第41図）

北側をA－10号跡によって攪乱されている遺構である。覆土中には炭化粒が多く含まれていた。遺物は出土していない。



1層　暗褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(少)
2層　褐色土層
　　風化ローム粒(多)
3層　暗褐色土層
　　風化ローム粒(多)・炭化粒(少)
4層　暗褐色土層
　　風化ローム粒(多)
5層　黄褐色ローム ばいらん層

第40図　A－19号跡実測図（1/30）

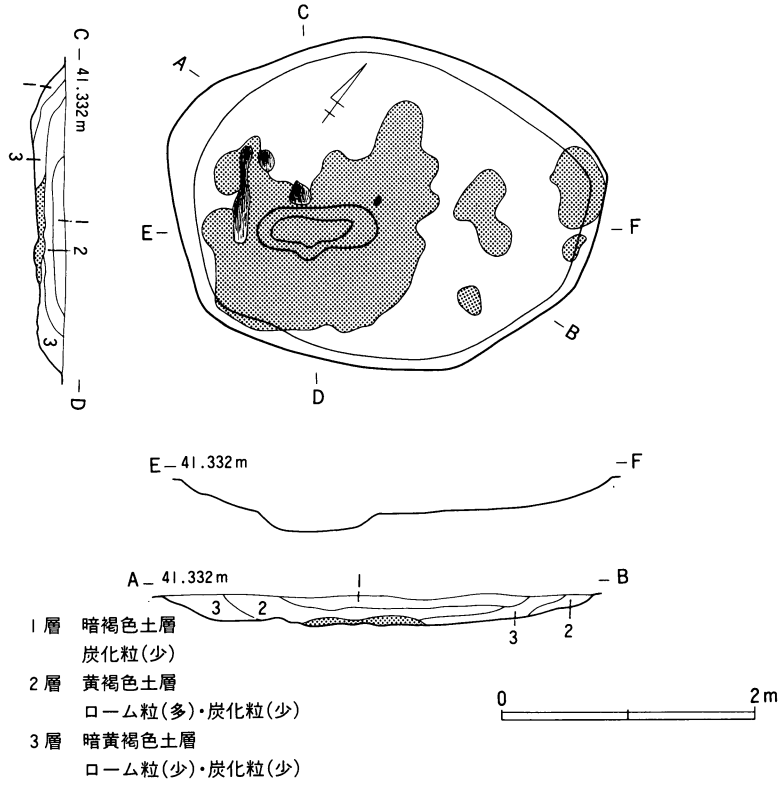


1層　黒色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(多)
　　焼土粒(少)
2層　暗褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(少)
3層　暗褐色土層
　　ローム粒(多)・炭化粒(多)
　　焼土粒(少)
4層　黒色土層
　　ローム粒(少)・炭化粒(多)
　　炭化物
5層　暗黄褐色土層

第41図　A－20号跡実測図（1/30）

A－21号跡（第42図）

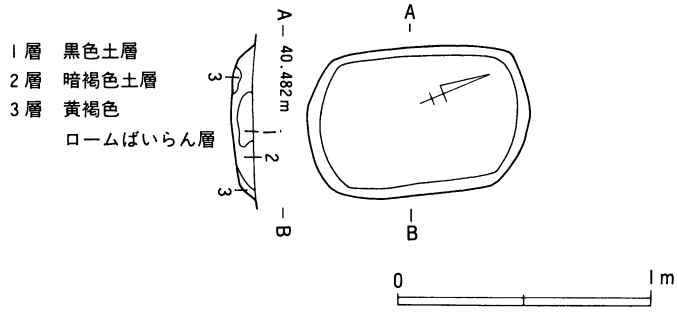
楕円形のピットで中央やや南西寄りにさらに小ピットが穿ってある。底面はこの小ピットを中心に焼土が広範に散布していた。小ピットの西側から炭化材が検出されている。



第42図　A－21号跡実測図（1/60）

A－22号跡（第43図）

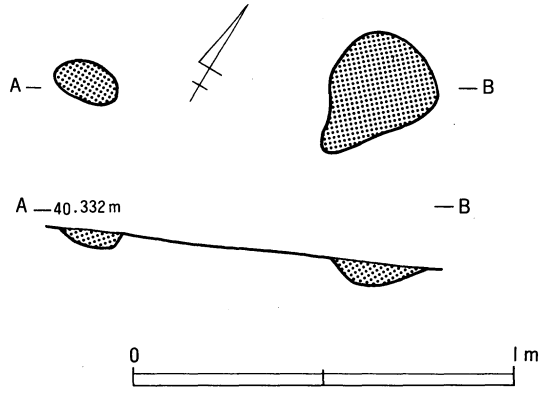
短辺が膨らむ方形プランの小ピットである。遺物は出土していない。



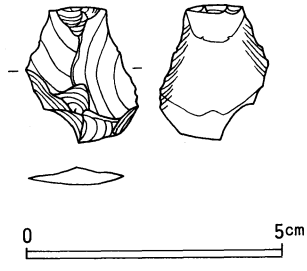
第43図　A－22号跡実測図（1/30）

A－23号跡（第44図）

A－9号跡の南7mの地点に位置する焚火跡である。



第44図　A－23号跡実測図（1/20）



第45図　A区表面採集遺物実測図（2/3）

第3章　B 区 の 調 査

第1節　先土器時代（第46図）

B区においては台地の北側縁辺部に沿う様にして3箇所の石器類集中地区が検出された。これらを西からB－1群、B－2群、B－3群としてその内容を報告する。

B－1群（第47図）

層序は全体として南から北に緩く傾斜している。石器類はこの区域の中でも2D65グリッド東部・2D68グリッド北西部・2D59グリッド南西部に集中が見られる。出土層位はIII層下部からIV～V層に及ぶが分布の中心はIV～V層最上部である。なお2D68グリッドの小群には焼礫片群が含まれている。

石器類の出土点数は安山岩製11点、凝灰岩製11点、チャート製9点、頁岩製6点、花崗岩製4点、玄武岩製2点、瑪瑙製1点で、計44点である。

無調整の剝片・小片が多数を占めるが、トウールとして、ナイフ形石器2点、スクレイパー3点、ドリルまたはノッチ1点が検出され、他に石核2点、ハンマーストーン1点、調整剝片4点、加熱された接合礫片等が出土している。

B－1群石器類（第48～49図、図版11）

1はチャート製の石核で、楕円筒形を呈する。上面は平坦に整えられ、側面は上下両方向からの剝離痕が認められる。IV～V層最上部出土。

2は瑪瑙製の石核で、1よりも不整形な多面体である。剝離方向も一定していない。IV～V層下部出土。

3はチャート製で両縁調整の典型的な茂呂型ナイフ形石器である。IV～V層最上部出土。

4はチャート製のナイフ形石器で、表面右側辺上半部が刃部となっている。III層下部出土。

5は両面調整のスクレイパーで凝灰岩製である。III層下部出土。

6は片面調整のスクレイパーでチャート製である。IV～V層出土。

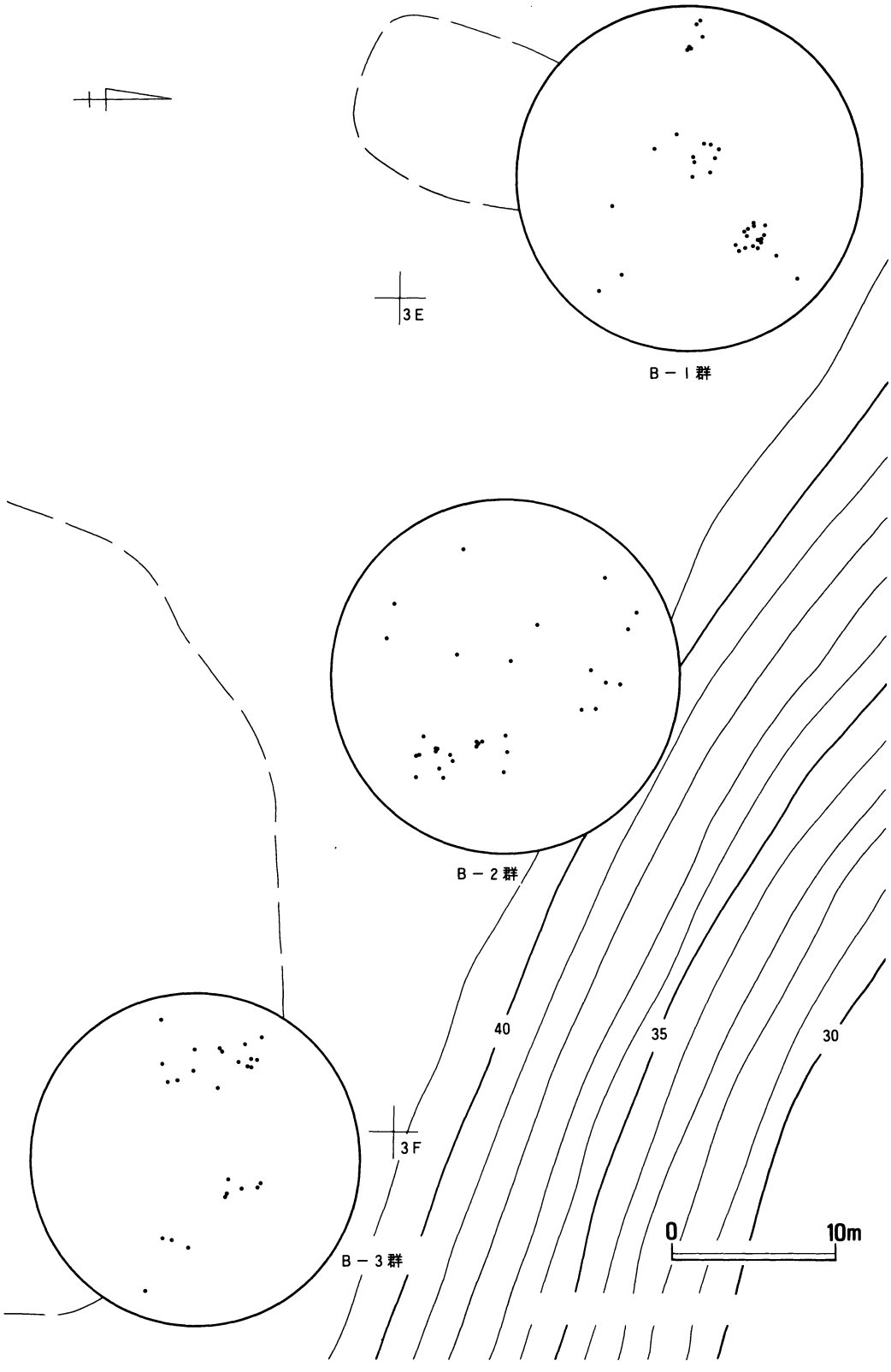
7はチャート製の両面調整剝片である。IV～V層上部出土。

8はチャート製のスクレイパーで、1側縁にブランティング状の剝離を施し、末端には微細な調整を加えている。IV～V層出土。

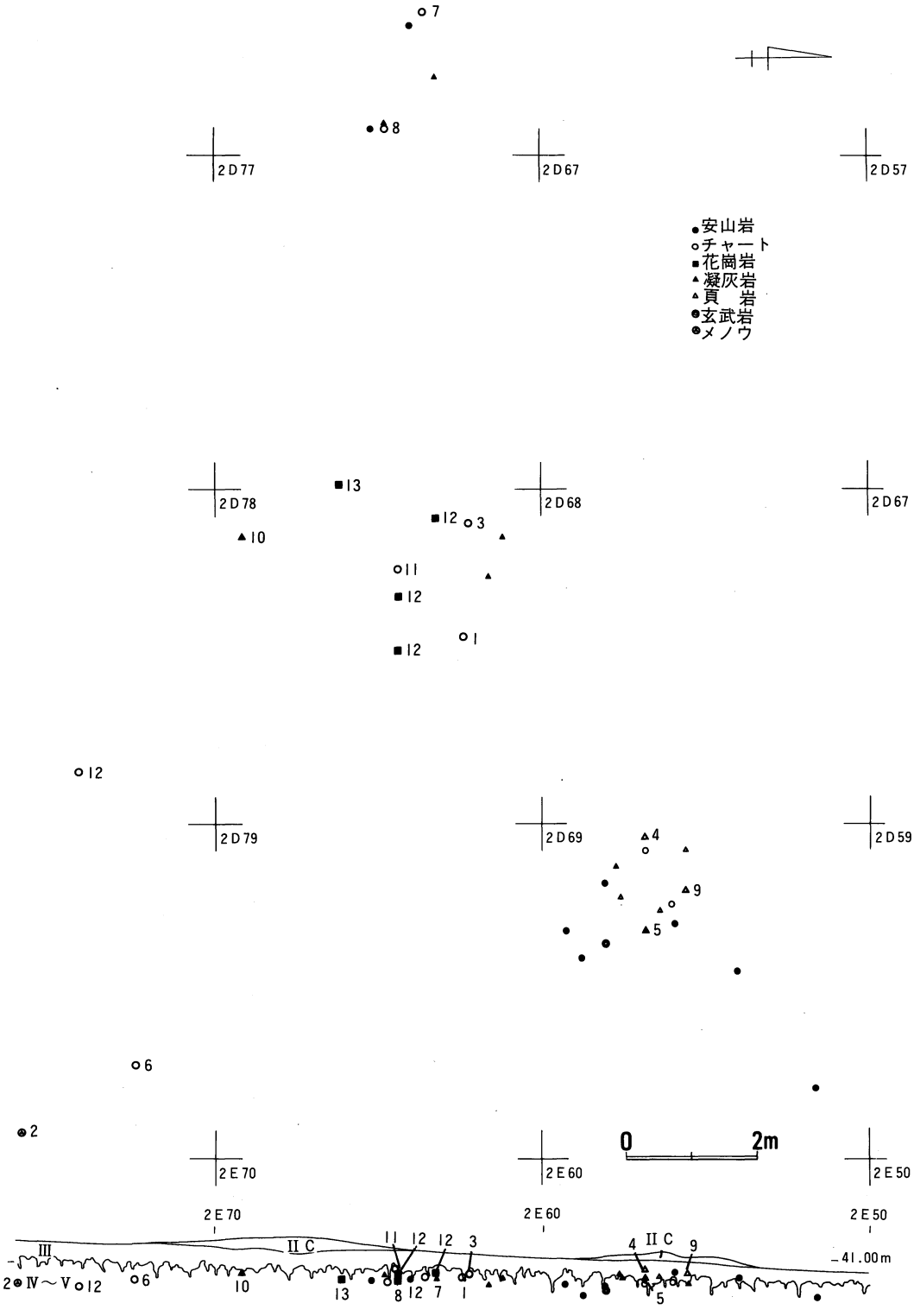
9は側縁の一端を調整した頁岩製の剝片である。III層下部出土。

10も9と同様な凝灰岩製の調整剝片である。IV～V層最上部出土。

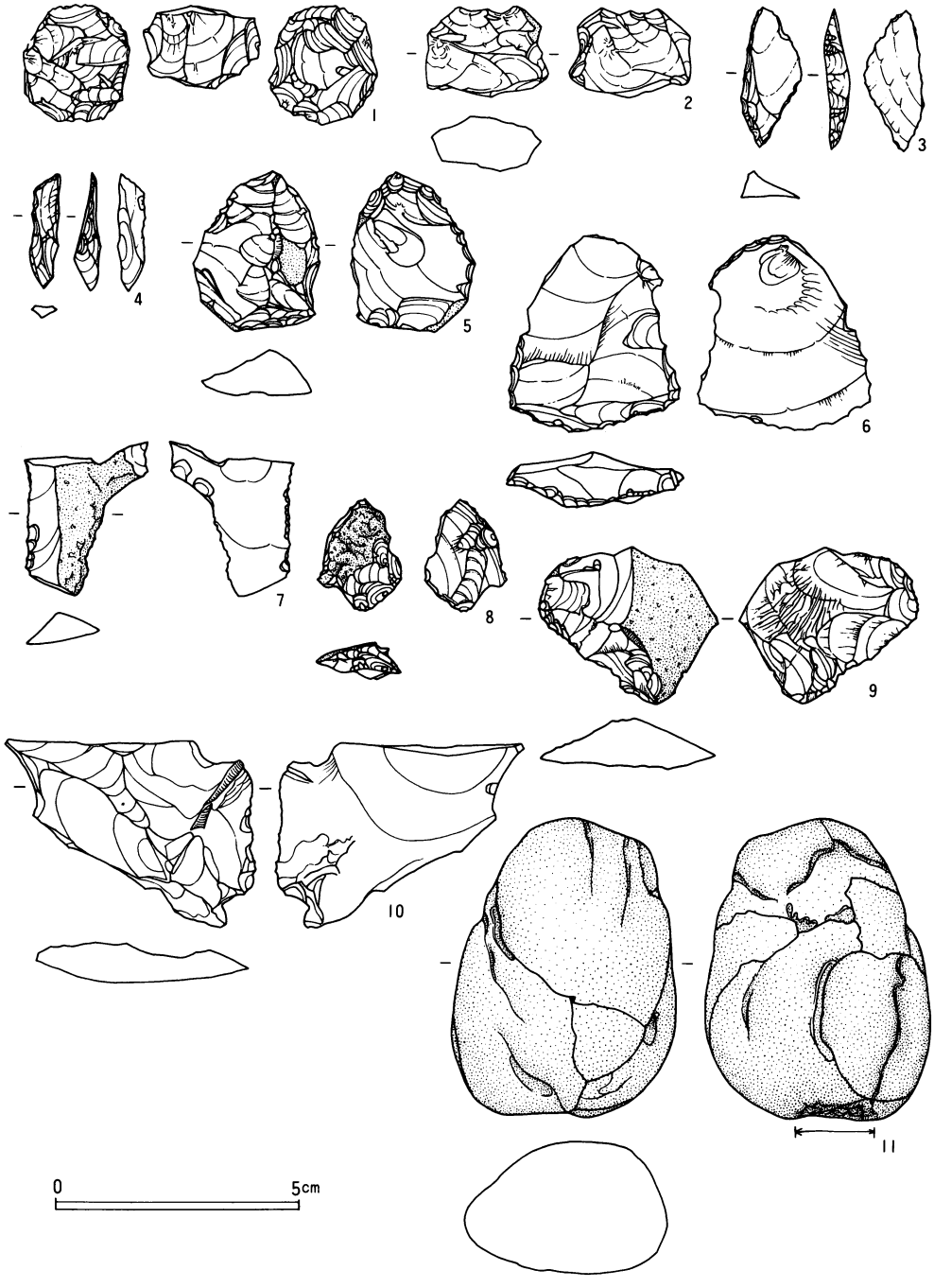
11はチャート製のハンマーストーンで、末端部には多数の敲打痕が見られる。加熱されても



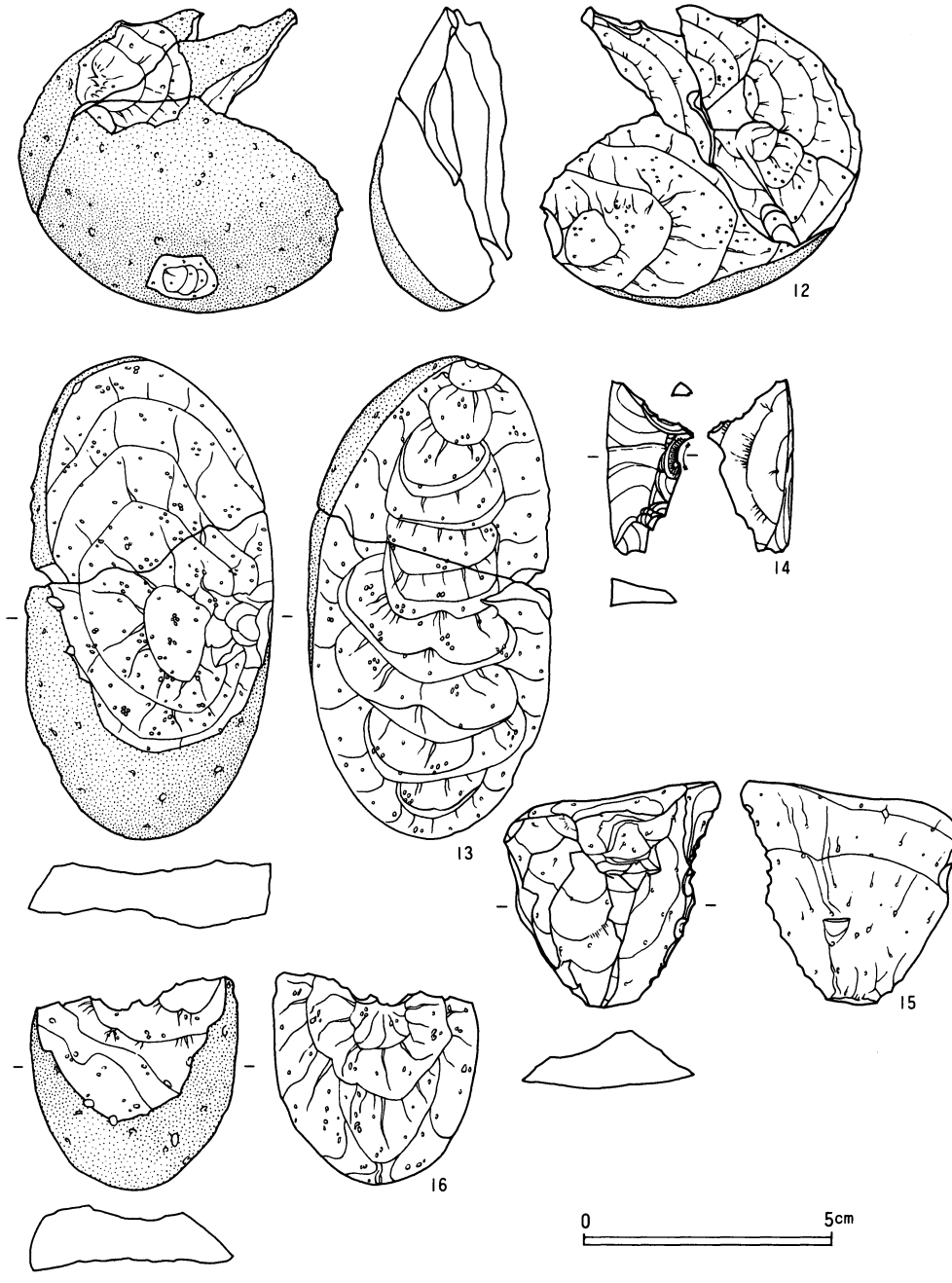
第46図　B区先土器時代遺物分布図（1/40）



第47図　B－1群遺物出土状況図（1/100）



第48図　B－1群石器類実測図(1)（2/3）



第49図　B－1群石器類実測図(2)（2/3）

ろくなっており、発見時には7片に分かれて一括出土した。III層下部出土。

12は花崗岩製の接合礫片で3片に分かれてIV～V層上部から検出された。加熱されて自然面が赤味を帯びている。

13も花崗岩製の礫片で、2片に分かれてIV～V層上部から一括出土した。12同様加熱されて自然面が赤味を帯びている。

14は凝灰岩製のドリルまたはノッチである。抉入部は磨滅して光沢をもつ。2D67グリッドの攪乱土層中から検出された。

15は安山岩製の調整剝片で、石刃状剝片の末端部を利用して1側縁にサイドスクレイパー風の並列調整を加えている。2D68グリッドの攪乱土層中から出土した。

16は花崗岩製礫片で、12・13と同様に加熱されて自然面が赤味を帯びている。2D78グリッドの攪乱土層中から出土した。

B－1群における主要遺物は以上であるが、14・15・16は遺物出土状況図には記入しなかった。

B－2群（第50図）

層序は全体として南から北に緩く傾斜している。石器類の平面的な分布状況は散漫であるが、2E95グリッドでは集中度が比較的高くなっている。出土層位はすべてVII層下部である。

石器類の出土点数はチャート製18点、安山岩製10点、粘板岩製2点、凝灰岩製1点、頁岩製1点で計32点を数える。

無調整の剝片・小片が多数を占めるが、調整剝片7点、使用剝片2点が伴なっている。

B－2群石器類（第51図、図版12）

1は両面調整剝片でチャート製である。側縁部には断続的に並列する浅く細かい調整剝離が見られる。表面右側縁部は磨滅している。

2も1と同様なチャート製の両面調整剝片である。

3は片面調整の剝片でチャート製である。

4は打面再生剝片を利用した使用剝片でチャート製である。

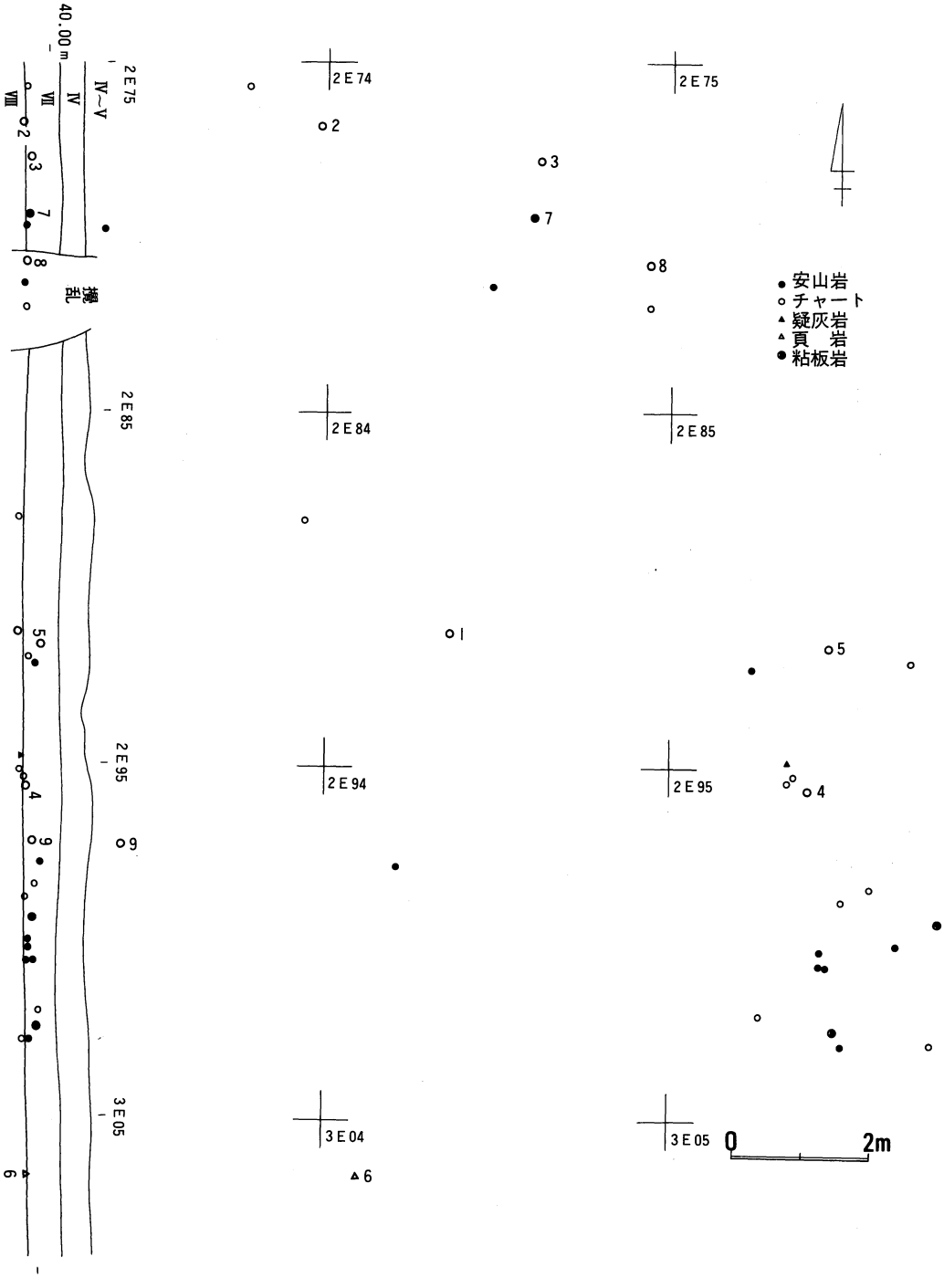
5はチャート製で基部片側両面に浅い調整剝離を施したものである。もう一方の側縁には使用痕が認められる。

6は両極打法を示す縦長剝片の抉入部に、並列する片面調整を加えた頁岩製の剝片である。両側縁とも使用痕が認められ磨滅している。

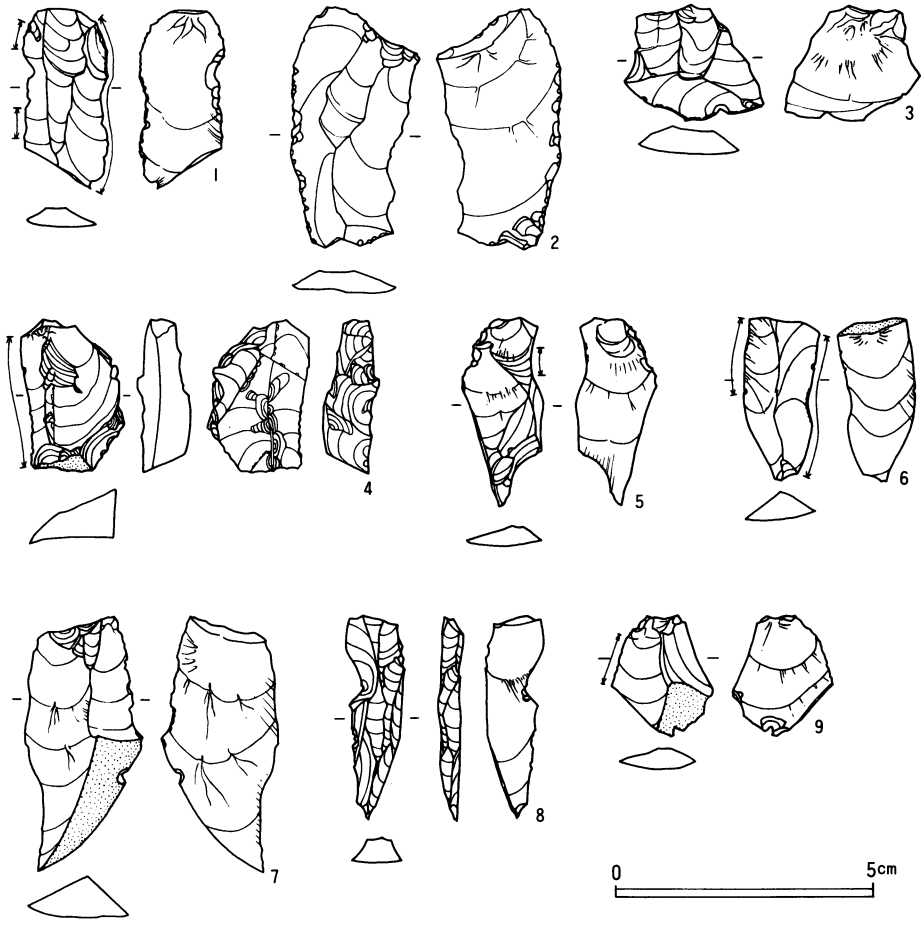
7は裏面の小抉入部に微細な調整を加えた安山岩製の剝片である。

8は表面側縁に小範囲の調整を加えたチャート製の剝片である。

9はチャート製の使用剝片である。



第50図　B－2群遺物出土状況図（1/100）



第51図　B－2群石器類実測図（2/3）

B－3群（第52図）

層序は全体として南から北へ緩く傾斜している。遺物の分布状況は3F18グリッド南西隅を中心として3E29グリッドに広がる西群と、3F20グリッド北東隅を中心とする中央群、3F21グリッドの東群に3分される。遺物出土層位はすべてIII層中であるが、図示した土層断面図は測量位置が不適当で遺物出土レベルとの相関関係を正しく伝えていないことをお断わりしておく。

石器類の出土点数はチャート製17点、安山岩製6点、砂岩製2点、頁岩製1点の計26点を数える。

このうちトゥールとしてはナイフ形石器2点、ノッチ2点、鋸歯縁石器1点があり、この他に石核1点、使用剝片1点、接合礫片等が検出された。

B－3群石器類（第53図、図版10）

1は砂岩製の石核である。表面の風化が著しく、稜線やリングが判然としないので、識別できる部分のみを図化した。両極打法が採用されている。

2はチャート製のナイフ形石器で刃部には使用痕が認められる。

3は安山岩製のナイフ形石器で表面は母岩の自然面をそのまま残している。基部調整は片側だけ行なわれ、ブランティングはほぼ垂直である。

4はチャート製のノッチで側縁中程に単一剝離を施したものである。

5はナイフ形石器を素材としたノッチである。チャート製。

6はチャート製の鋸歯縁石器である。鋸歯縁と反対側の側縁にはブランティングを施す。

7は頁岩製の使用剝片である。

8は母岩の自然面を残したチャート製の石刃である。

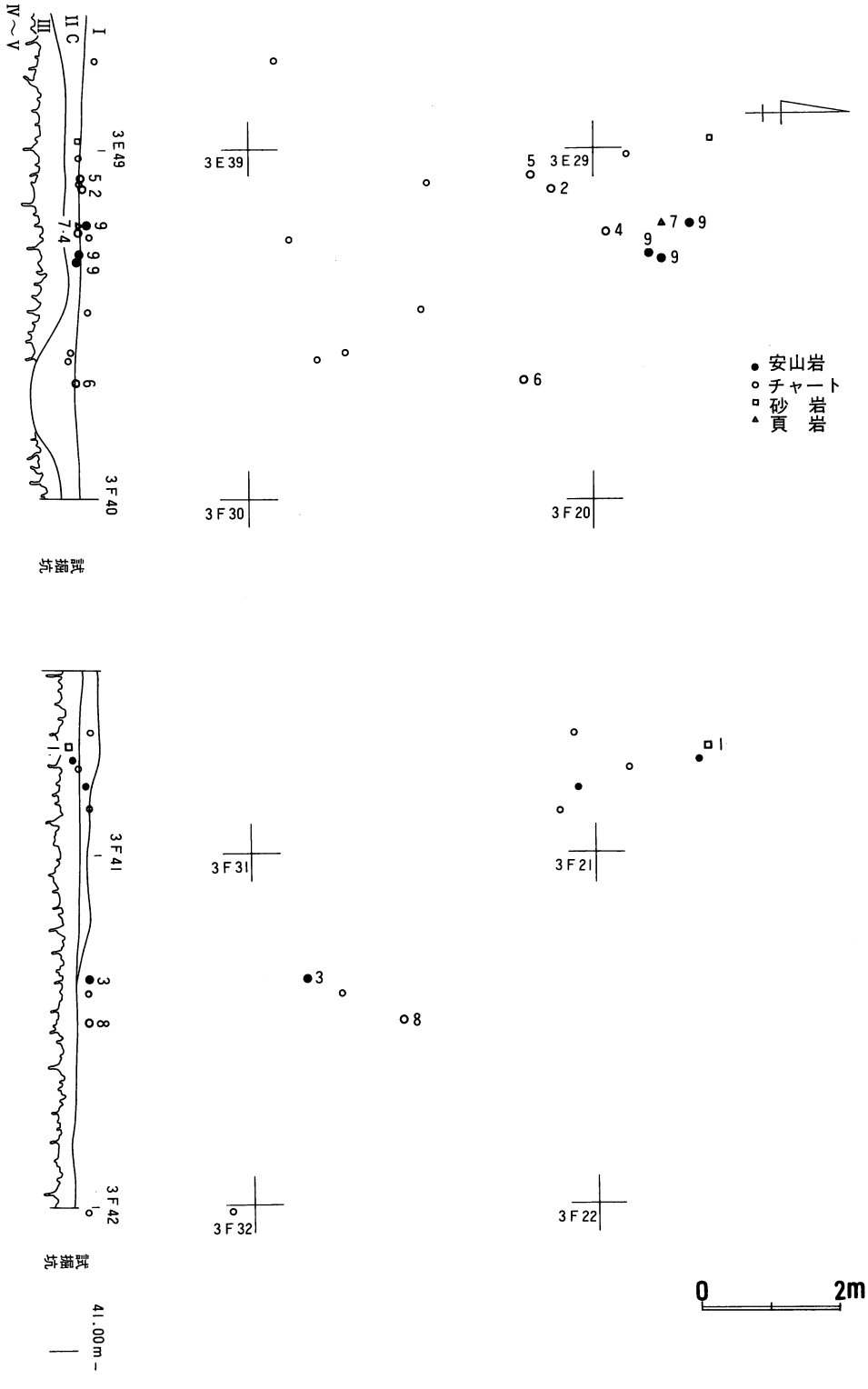
9は3片からなる安山岩製の接合礫片である。

遺物包含層の石器（第62図、図版13）

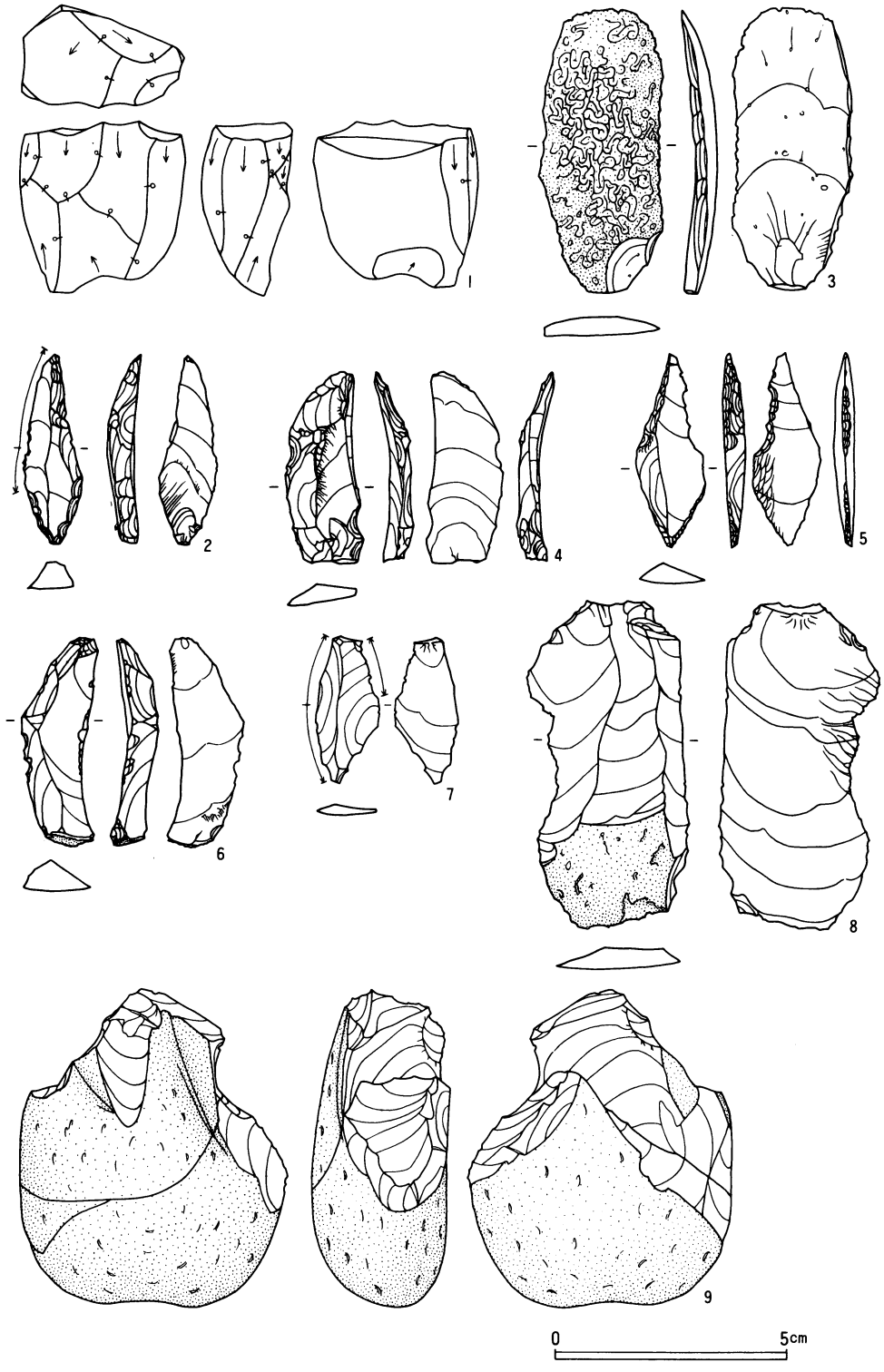
6は先土器時代の両面調整ポイントである。チャート製。

表面採集の石器（第63図）

2は先土器時代の角錐状石器片である。チャート製の横長剝片を素材として片面調整を加えている。



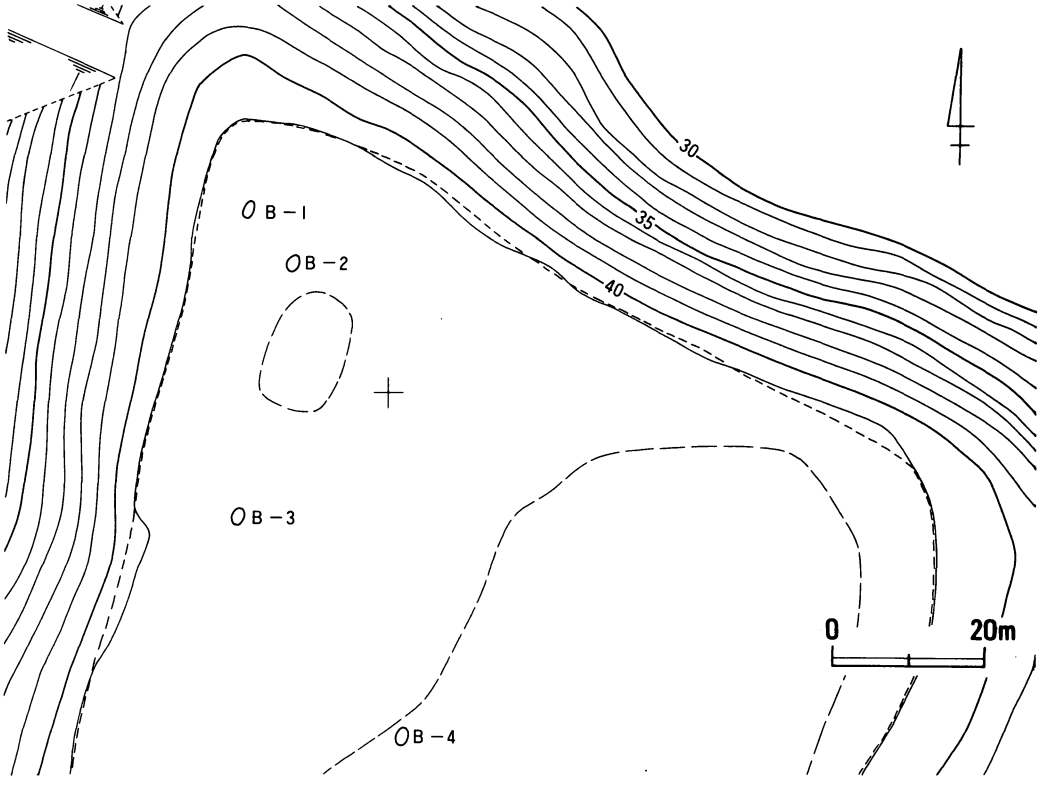
第52図　B－3群遺物出土状況図（1/100）



第53図　B－3群石器類実測図（2/3）

第２節　縄文時代（第54図）

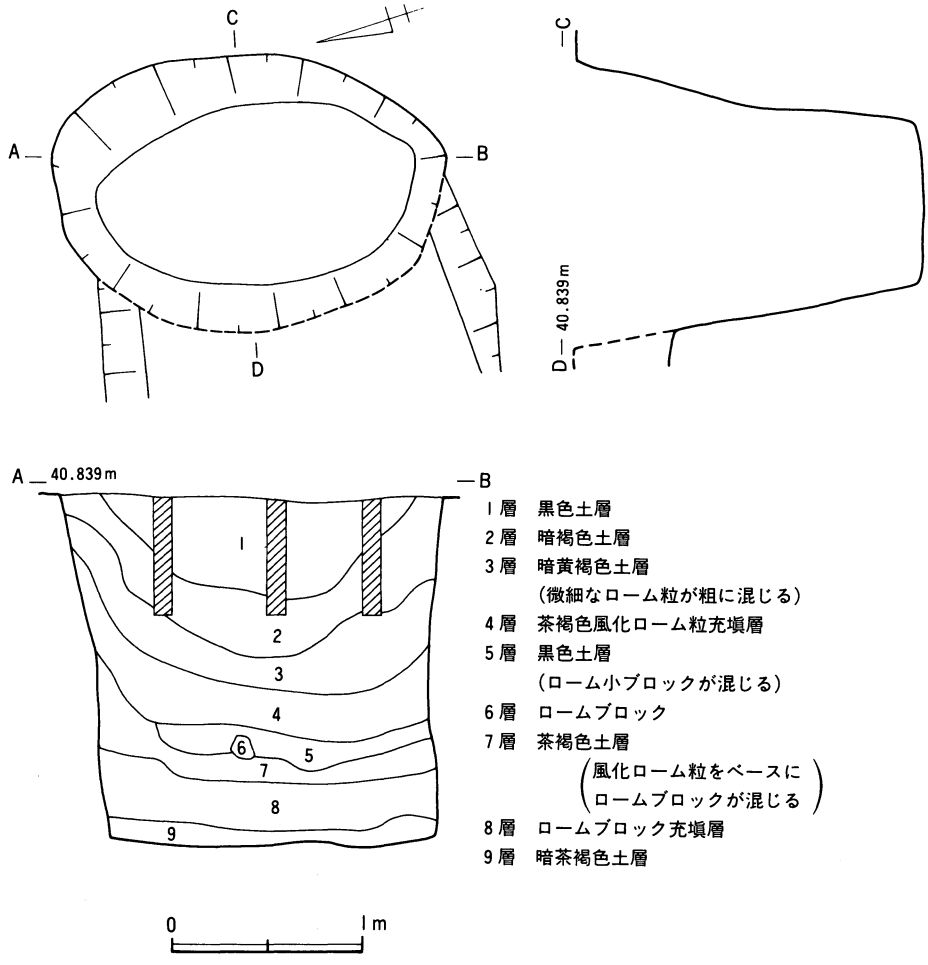
Ｂ区からは４基の陥し穴状土壙、および遺物包含層中より土器片1,000点余り、石器若干数が検出された。



第54図　Ｂ区遺構配置図（1/1000）

B－1号跡（第55図、図版9）

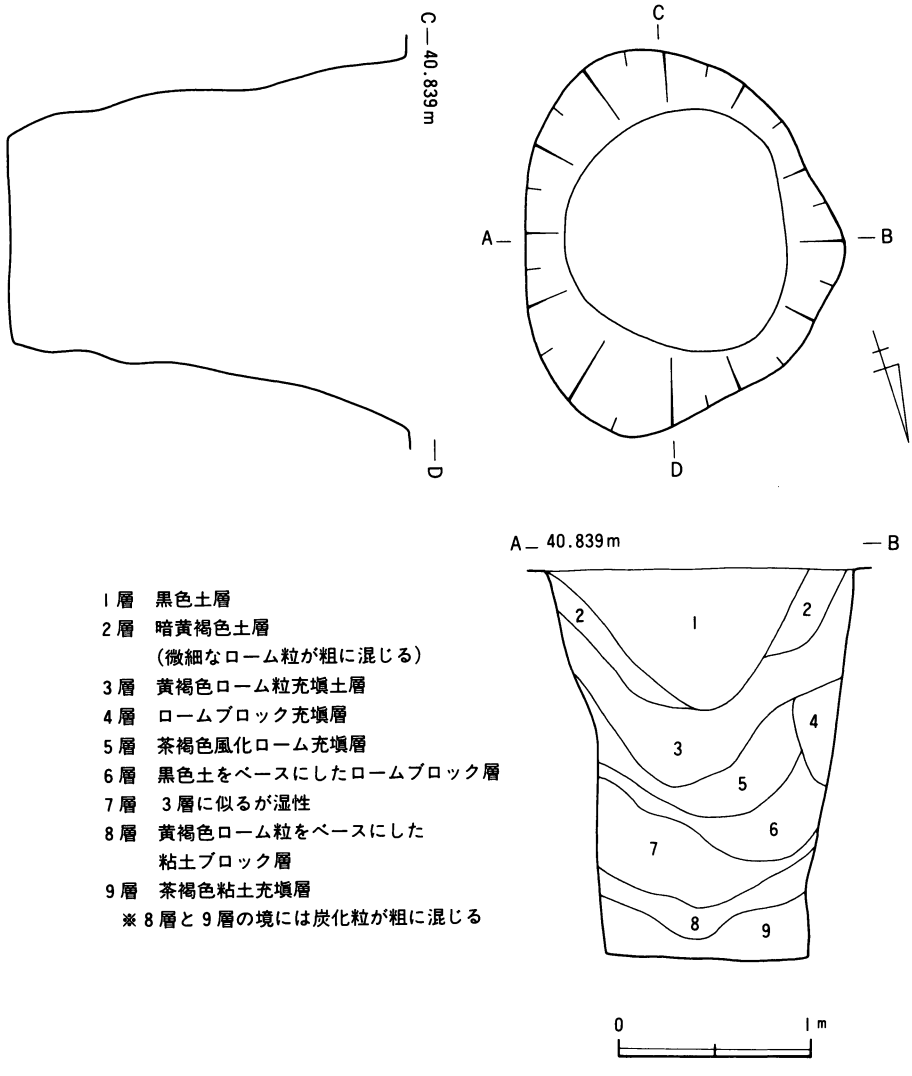
楕円形プランで、底面は広く平坦である。覆土層序は腐食土と風化ローム土との互層状となっている。遺物は出土しなかった。



第55図　B－1号跡実測図（1/40）

B－2号跡（第56図、図版9）

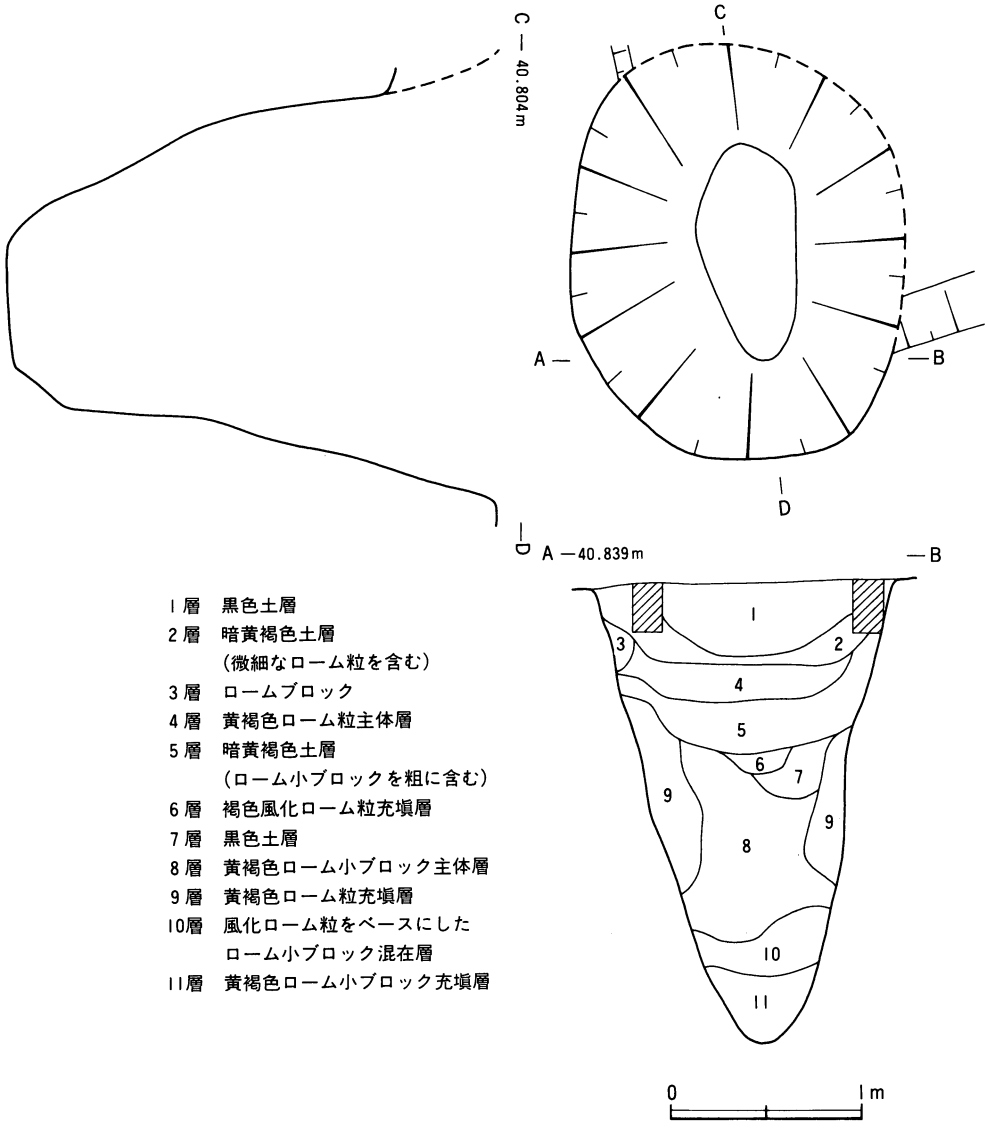
不整形プランで、底面は広く平坦である。覆土層序中、8層と9層との境面には炭化粒が粗に散布していた。遺物は出土しなかった。



第56図　B－2号跡実測図（1/40）

B－3号跡（第57図、図版9）

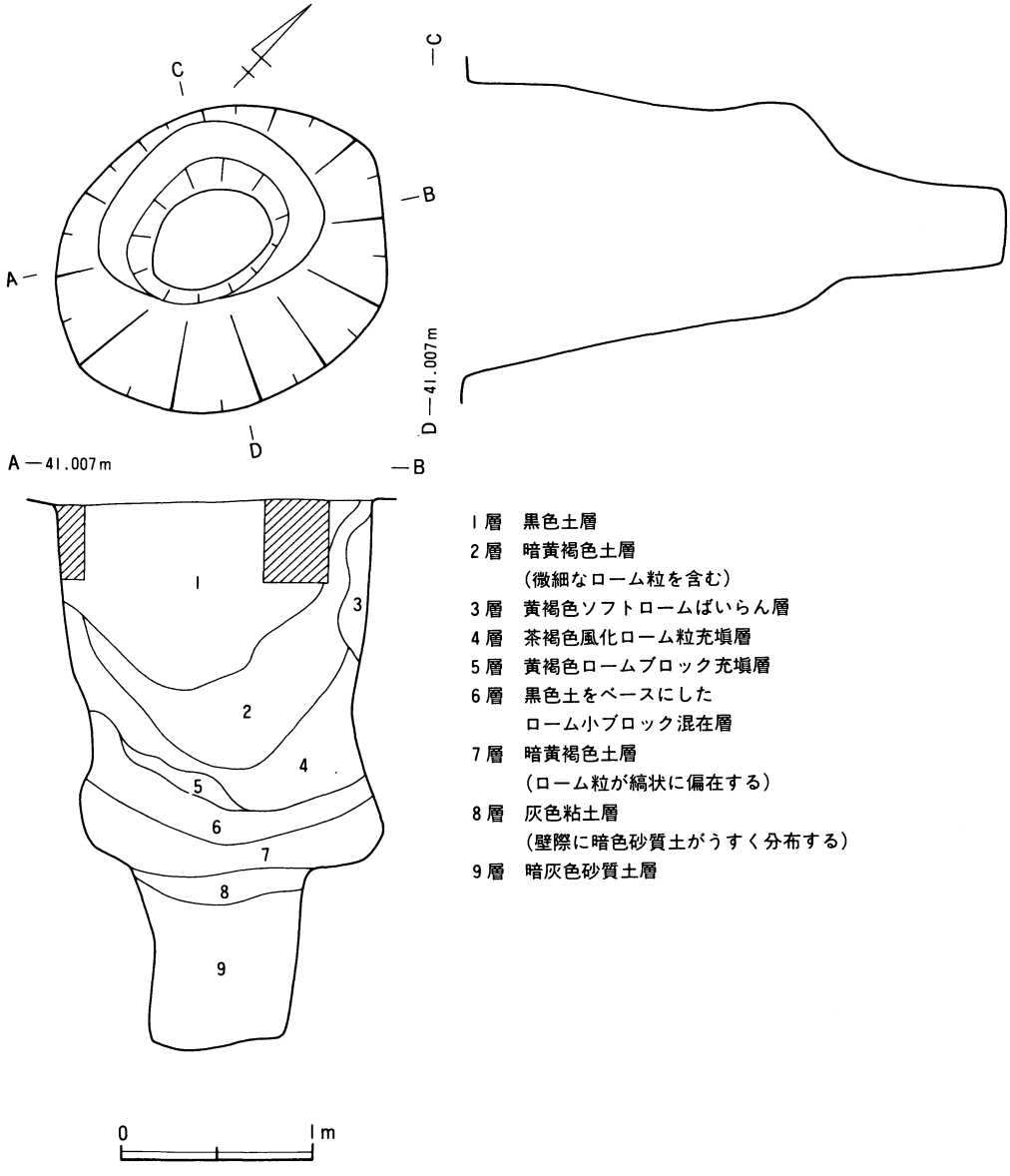
楕円形プランで、底面は狭長である。覆土中にはロームブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかった。



第57図　B－3号跡実測図（1/40）

B－4号跡（第58図、図版9）

楕円形プランで、掘り方は中位で一担袋状に膨らみ、さらに深く落ち込んでいる。覆土は最下部に砂質土、その上を粘土が覆い、上層はローム土が主体的となる。遺物は出土しなかった。



第58図　B－4号跡実測図（1/40）

遺物包含層の土器（第59～61図、図版14）

(1) **早期**（第59図１～23）

１～10は撚糸文系土器群である。

１～４は井草式土器で、口唇頂部にも横走斜縄文が施される。口縁部文様帯は１・３が肥大した口唇直下から横走撚糸文、２は少なくとも１条以上のＲＬ原体押捺文、４は幅４㎜程の無文体を設けて横走撚糸文を付している。

５～７は大丸式土器で口唇部の斜縄文は側縁部に限られ、口縁部には無文帯が形成され、胴部には縦走撚糸文が付される。

８・９は夏島式土器で、８は口唇部が肥大するが、９は単純な成形である。口縁部から胴部にかけては縦走撚糸文が施される。

10は稲荷台式土器で、平滑でしまった器面に間隔の広い縦走撚糸文が浅く施文される。

14・15は波状口縁土器群である。焼成が堅緻で14には無節の横走結節斜縄文が付く。花輪台Ｉ式併行か。

11～13は花輪台II式の無文土器群である。11には縦方向の細く浅い擦痕が付され、12・13の器表面には小粘土片を無秩序に貼りつけた様な痕跡が残っている。

16～23は胎土中に繊維が含まれる土器群である。

19は田戸上層式土器で、微量な繊維を含み、細沈線が縦走する。16は口縁部の条痕が横走しており、子母口式土器か。その他は茅山式系土器群である。

(2) **中期**（第59図24～第60図48）

24・25は肥大した口唇部直下に１条の粘土紐を貼付して、上下から交互に刺突する。五領ケ台式。

26～32は阿玉台式土器で、胎土中には雲母片が含まれる。27は口縁内面に断面三角形の突帯をめぐらしている。29は山形突起部の破片である。

39・57も阿玉台式併行期の土器である。

39は胎土が砂質で、口縁部には長楕円形の微隆起区画文が配される。57は口唇部が内側に肥大し、胴上半は輪積痕を明瞭に残す無文土器である。

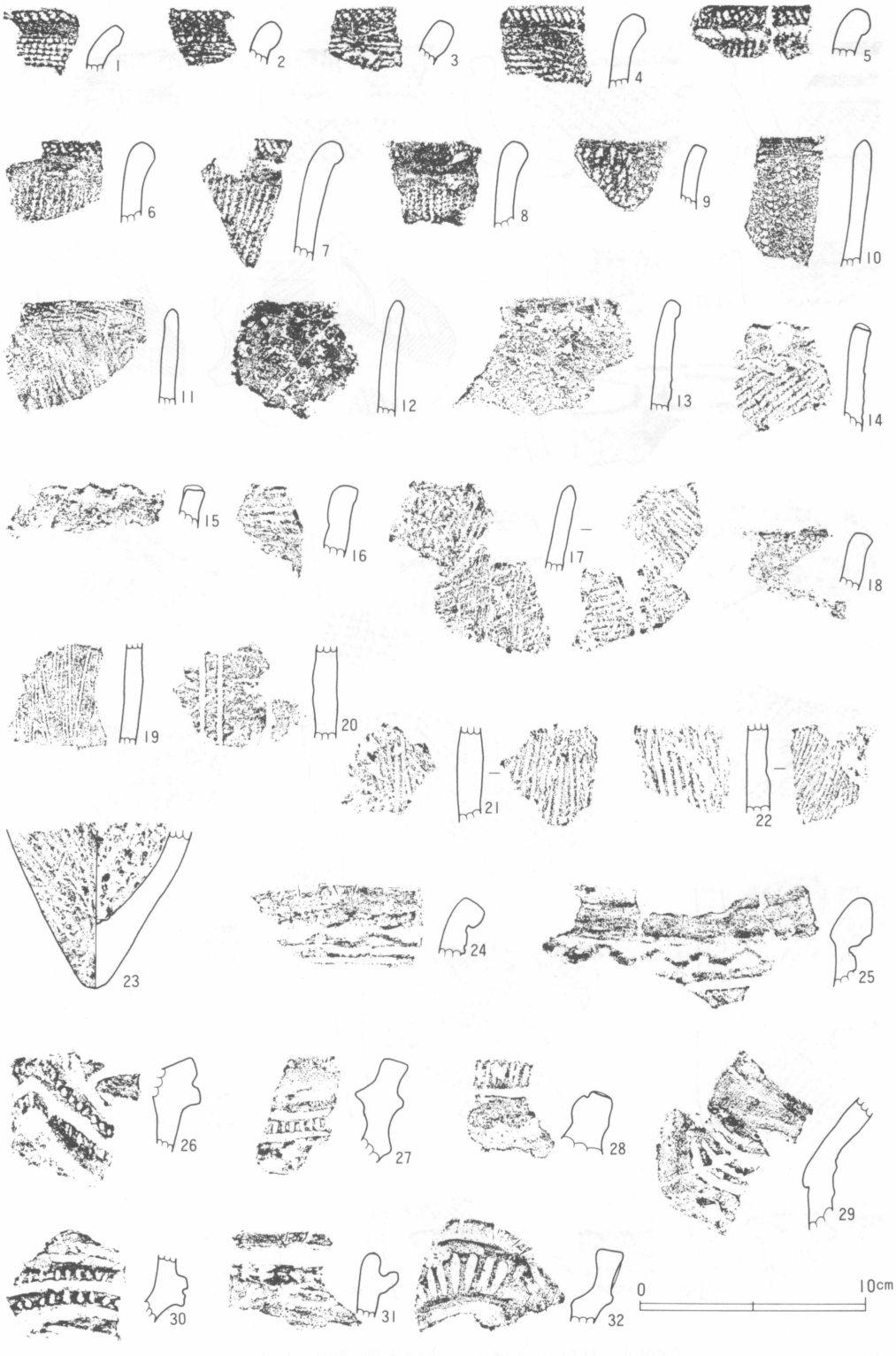
33～38・40～48は加曽利Ｅ式系土器群である。

33・41は加曽利ＥＩ式、40の環状把手片も同式併行である。34・35・42は加曽利ＥII式。46は胴部垂下沈線が連結した加曽利ＥIII式。36～38・43・44は加曽利Ｅ式末に属する。45・47・48は加曽利ＥII式あるいはIII式の胴部破片である。

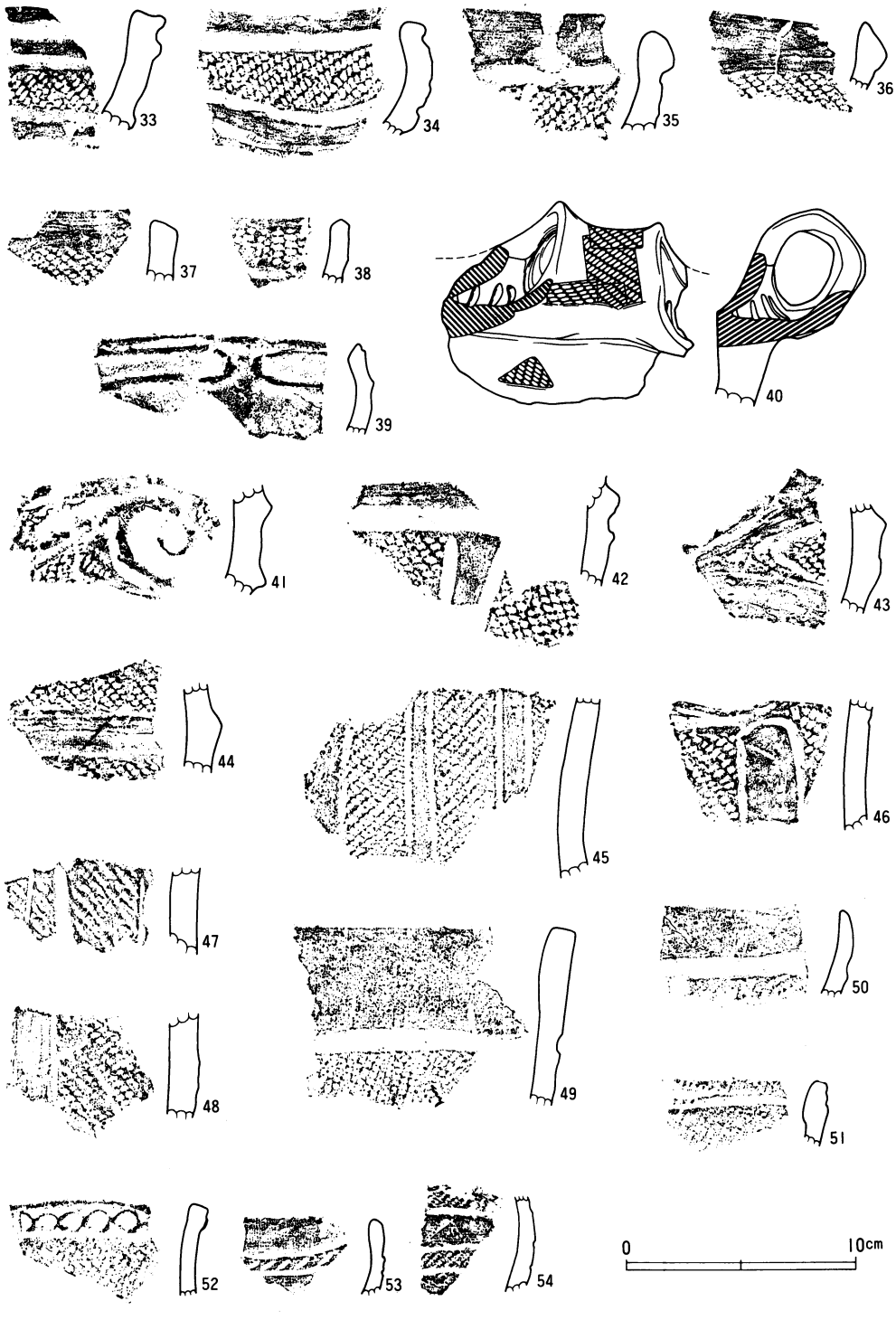
(3) **後期**（第60図49～第61図56）

49～51・56は堀之内Ｉ式土器である。

49・50は口縁部無文帯を太い沈線で画し、胴部地文は斜縄文を付す。51は細い原体の斜縄文



第59図　B区包含層出土遺物実測図(1)（1/3）



第60図　B区包含層出土遺物実測図(2)（1/3）

を配した後、口縁に沈線をめぐらしている。56は環状突起の破片で、環部内面には赤彩が残る。

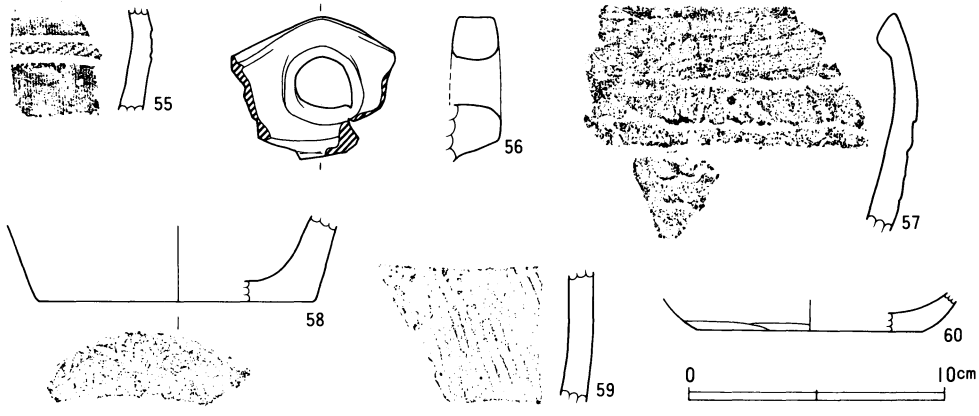
52は堀之内II式土器である。

53～55は加曽利BII式土器で、器壁が薄く堅緻で、磨かれている。

53は刻目突帯、54・55は磨消縄文帯である。

(4) その他（第61図58）

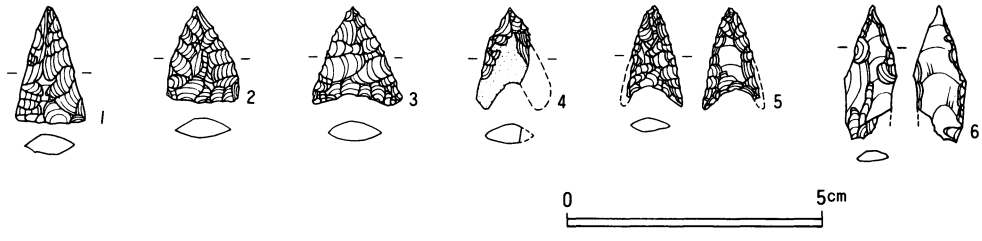
58は縄文土器の底部で、網代痕が認められる。



第61図　B区包含層出土遺物実測図(3)（1/3）

遺物包含層の石器（第62図）

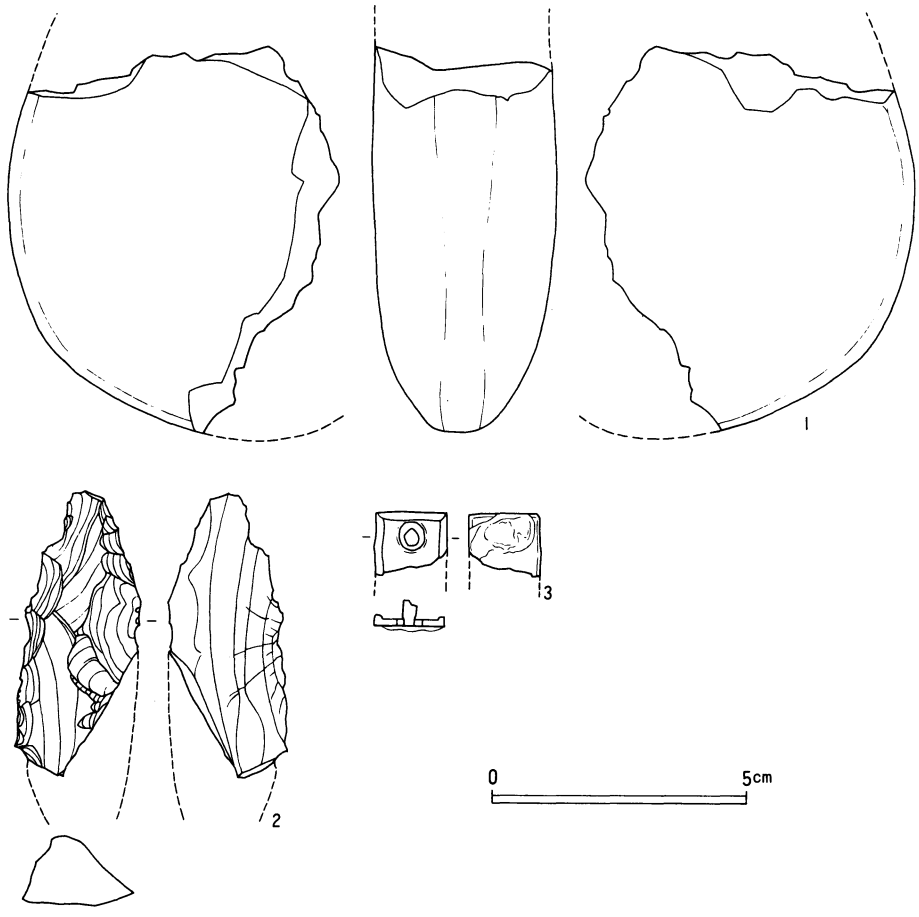
1～5は石鏃で、4は瑪瑙製、他はチャート製である。4の下半部は風化が著しい。



第62図　B区包含層出土遺物実測図(4)（2/3）

表面採集遺物（第63図）

1は縄文時代の磨石片である。砂岩製。器表面は平滑で、表裏側面共磨かれている。



第63図　B区表面採集遺物実測図（2/3）

第3節　古墳～歴史時代

B区では古墳～歴史時代の遺構は認められない。わずかに次に示す遺物が出土したのみである。

表面採集遺物（第61図59・60、第63図3）

59は古墳時代の須恵器甕片で、外面には平行叩き目が入り、自然釉がかかっている。

60は奈良時代後期のロクロ土師器杯片で、底部調整は手持ちヘラ削りである。

3は性格不明の鉄製品である。釘（鋲）の残存が認められる。

第4章　小　　結

前章までにNo.2遺跡の内容を報告したが、本遺跡が先土器時代・縄文時代・古墳～歴史時代の遺跡・遺物を包含する複合遺跡であることが判明した。なかでも先土器時代および古墳～歴史時代には質量ともに好資料が得られたので、これら両時代の調査成果をまとめておきたい

1　先土器時代

(1)　炭化粒群について

炭化粒群はA－1・A－2群から検出された。

A－1群では炭化粒のみの出土で、石器類は伴わない。炭化粒のまとまりは大小の2小群に細分されるが、その集中層位は各々Ⅶ層下部、Ⅵ層下部であり、レベル的にも格差が見られるので、炭化粒が自然地表面上に落下したものであるならば、これら2小群は同時期の所産とは言えない。

A－2群では炭化粒集中地区に北接して石器類が共伴している。炭化粒のまとまりはその分布密度からいくつかの小中心が存在する。これら小群のうち北側すなわち2B55・2B56小グリッドに分布する小群は、集中層位がⅦ層中心で、密集度が高い。いっぽう南側すなわち2B66・2B67に分布する小群は集中層位がⅥ層中心で、密集度が低い。南北の小群の分布状況にはこのような差異が存在するが、レベル的には大きな違いは見られない。地形・各小群間の距離・土中に長期間埋在する間の上下動等を考慮すれば、むしろA－2群炭化粒は全体として同時期にかかわると見做してさしつかえないであろう。石器類との関係については土層断面への投影図を見る限り、石器類の方がやや下に位置するようだが、これだけの手掛りでは何とも言えない。

このA－2群炭化粒とA－1群中の大群に属する炭化粒はレベル的にも層序的にも符合しているので、この両群は同時期とすることができる。

以上を要約するとA－1群の小群に含まれるもの以外のA区検出の炭化粒はすべて同時期の所産であると言えよう。また石器類との関係は距離的・層位的には接近しているが不明である。

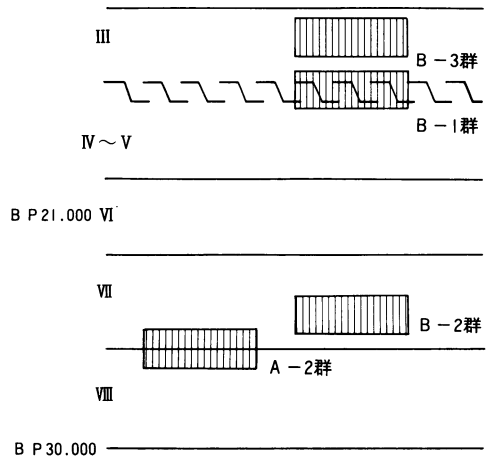
炭化粒の性格に関しては、考察材料が乏しく自然的なものか人工的なものかの判断は困難であった。

(2)　石器類について（第64～66図）

No.2遺跡ではA・B区合わせて4箇所の石器類集中地区が検出された。層位的にはこれら4群はA－2群（Ⅶ層下部～Ⅷ層上部）→B－2群（Ⅶ層下部）→B－1群（Ⅲ層下部～Ⅳ～Ⅴ

層上部）→B－3群（III層）の順序で推移していった(第64図)。ここでは石材と石器組成を中心に総括する。

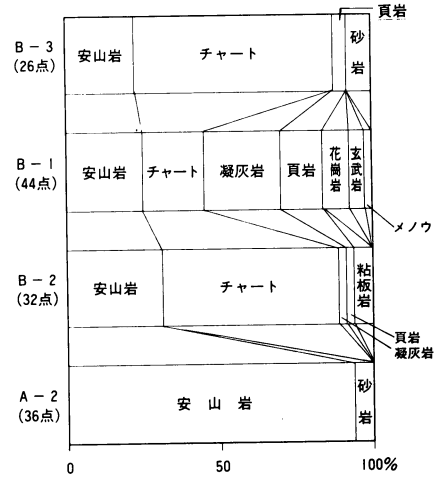
まず石材であるが、前章にも述べたように群別の内訳はA－2群が安山岩34点(94.4%)、砂岩2点(5.6%)、B－2群がチャート18点(56.3%)、安山岩10点（31.3%)、粘板岩2点（6.2%)、凝灰岩1点（3.1%)、頁岩1点（3.1%)、B－1群が安山岩11点（25.0%)、凝灰岩11点（25.0%)、チャート9点（20.5%)、頁岩6点（13.6%)、花崗岩4点(9.1%)、玄武岩2点(4.5%)、瑪瑙1点(2.3%)、B－3群がチャート17点（65.4%)、安山岩6点（23.1%)、砂岩2点（7.7%)、頁岩1点（3.8%）となっている（第65図)。しかしA－2群についてはトゥールが存在しないこと、36点中9点までが接合して単一石塊を構成してしまうこと等を考慮すれば、他の3群とは同列に論じることはできない。



第64図　No.2遺跡石器類出土層位

本遺跡ではIV～V層下部からVII層上部にわたる資料に欠けているが、上記諸事実から判明することは次のとおりである。

(1) 本遺跡の石器石材構成は一貫してチャート・安山岩が主流を占めている。



第65図　石材の構成とその変遷

(2) しかしながらIII層下部からIV～V層上部に位置するB－1群では凝灰岩・頁岩等の比率が高くなり、チャート・安山岩の優位が相対化されている。

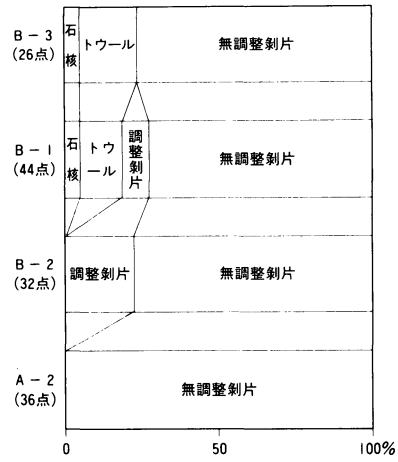
(3) 黒曜石は1点も含まれていない。

次に石器組成の面からまとめてみよう。まず製品化の度合いを見るために全石器類を石核・トゥール・調整剥片・無調整剥片に分類して群別の内訳を調査した。それによればA－2群が無調整剥片36点（100%)、B－2群が調整剥片7点（21.9%)、無調整剥片25点（78.1%)、B－1群が石核2点（4.5%)、トゥール6点（13.6%)、調整剥片4点（9.1%)、無調整剥片32点（72.8%)、B－3群が石核1点（3.8%)、トゥール5点（19.2%)、無調整剥片20点（77.0%）となっている（第66図)。

各群ともに無調整剥片が圧倒的に多く、石器製作跡としての性格を明瞭に表わしているが、

B－1群には加熱された礫片が混在しており、群内あるいはその付近で火を焚いたことが想定され、この群の複機能的性格を物語っている。

次に調整剝片とトゥールとの出土比率を見ると、B－2群では調整剝片のみ、B－1群ではトゥールが調整剝片を上回り、B－3群に到ってトゥールのみとなる。県下他遺跡の事例ではB－2群の時期に局部磨製石斧、ナイフ形石器等が既に登場するが、それにしてもこの時期における調整剝片の数量はトゥールのそれを大幅に上回るのではなかろうか。



第66図　石器類組成とその変遷

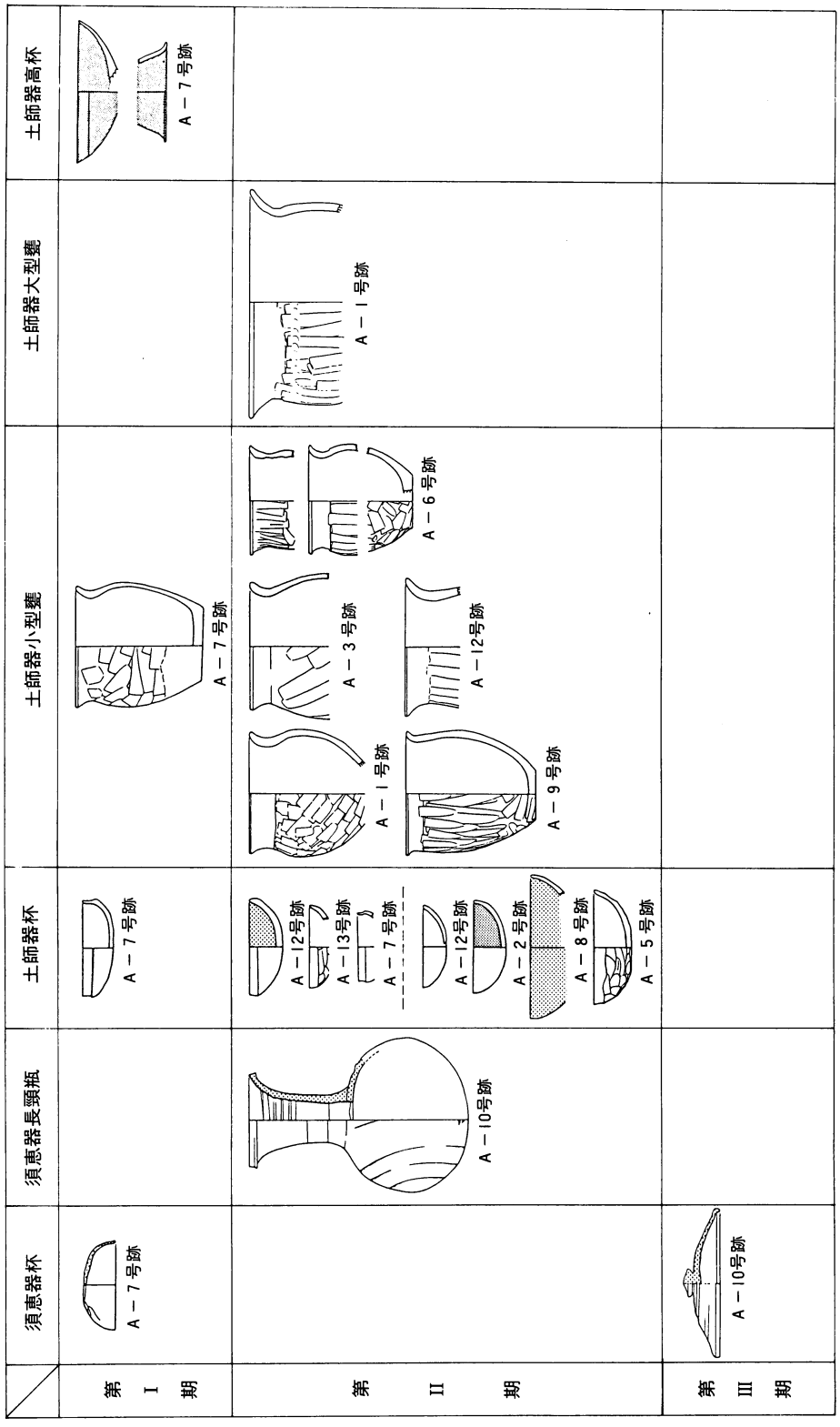
またおしなべて調整剝片と称される石器類の中でも、B－2群の1・2は縦長剝片の側縁部をかなり長距離にわたって連続的に片面あるいは両面調整を施している点、さらに素材の薄さから階段状剝離が行なわれない点で共通している。これらと類似した石器類は藤沢遺跡1群(Ⅶ層)（註1）、三里塚馬場遺跡Ⅰブロック（Ⅶ層）（註2）、水砂遺跡Cブロック（Ⅴ層）（註3）、復山谷遺跡Jブロック（Ⅶ層）（註4）等からも出土しており、小地域を超えて類型的に製作されていたことが知られる。

最後にB－1群とB－3群のトゥールを比較してみよう。まずB－3群の縦長剝片の多用が目につく。これはB－3群における石刃ないし石刃状剝片の増加、両群の石核の形態比較等からも裏づけることができる。縦長剝片が他の不定形剝片を駆逐していく過程で後者を素材として長期間製作されてきた調整剝片が消滅していく。この傾向はナイフ形石器の基本形にも大きな変化を与え、以前にもまして狭長な器形が量産されるようになった。この段階で前代来の多様な短小ナイフ形石器は著しく減少したであろう。さらにこれら一連の変化の最終的副産物として、狭長なナイフ形石器を素材としてノッチや鋸歯縁石器が製作されたこともB－3群の特徴である。B－1群に見られたスクレイパー類がB－3群には現われないことも上述の変化となんらかの関係があるものと考える。

2　古墳～歴史時代

(1)　土器の編年（第67図）

A区における22基の遺構中、11基から年代の判別可能な土器が出土している。これらの土器は須恵器・土師器の杯形土器の型式的変化を跡づけることによって、次のような3時期に区分・編年することができる（第67図）。



第67図　No.2遺跡出土土器編年図

第Ⅰ期はA－7号跡出土土器群に代表される段階である。

A－7号跡出土土器のうち古墳時代に通有な合子形須恵器杯蓋、同時代の須恵器杯身を模倣した大形の土師器杯、土師器小型甕、同高杯がこの段階に含まれる。

1の須恵器杯蓋はその口径値から見て合子形タイプの最終段階に属することが明らかである。和泉陶邑ではこのタイプの杯は蓋身を逆転した形で、7世紀前半の第Ⅲ型式第1段階まで焼成されている(註5)。また大和藤原京周辺では7世紀第2四半期の飛鳥Ⅱ期まで残存することが判明している（註6)。これらのことからA－7号跡出土の須恵器杯蓋は遅くとも650年までには製作されていたとすることができる。

3の須恵器杯身模倣の大型土師器杯は立上がり部が直立して古式を留めるものの、その口径値はさきの須恵器杯蓋に対応すること、最終調整としてナデが施されること等新しい要素が目立つので須恵器杯蓋と同段階のものとすることができる。

4の土師器小型甕は次期のものに比べ口頸部のくびれがやや強く、「く」字状に屈曲し、底径も大きく安定感がある。

7の土師器高杯は充実した柱状部を形成せずに、脚部付根から大きく開く器形である。このタイプの高杯は本期末から次期にかけて製作されたものと思われる。

第Ⅱ期は土器を出土した全遺構が関係している。本集落跡が形成・廃絶された主要時期に相当する段階である。土師器杯は古相と新相に型式細分することができるが、諸他の土器は一括して取扱う。

土師器杯の古相は古墳時代の合子形須恵器杯を模倣した最後の段階である。A－7号跡2、A－12号跡2、A－13号跡1がこれに含まれる。A－12号跡2は口縁部が屈折して内傾ぎみに立上がる器形で、須恵器杯蓋を意識的に模倣した最終形態である。A－13号跡1は前者よりも体部の屈曲度が弱くなっている。A－7号跡2は立上がり部がつまみ出した程度に退化した須恵器杯身模倣の最終形態である。小破片で底部形態が判明しないが、ヘラ切り無調整の個体を模倣していれば平底となるはずである。この段階は前期よりも口径が小さくなり、最終調整にナデが多用される。

土師器杯の新相は

A類　土師器独自の器形

B類　平底の須恵器杯身を模倣した器形

の両類が併存した段階である。

A類の典型としてはA－2号跡1、A－12号跡1がある。器形は丸底を呈する椀形で、古相同様に小口径でナデが多用される。A－8号跡1はこれが大型化したもので、時期的にはやや後出的である。

B類にはA－5号跡1がある。平底の底部から湾曲しつつ外反ぎみに開く器形を呈する。最

終調整は体部では深いヘラケズリ、口縁部は横ナデである。陶邑における第III型式第2ないし3段階に相当する製品を模倣したものと思われる。

第II期に属するその他の土器として須恵器フラスコ形長頸瓶、土師器小型甕、同大型甕が見られる。

フラスコ形長頸瓶は主要生産地の東海地方では6世紀末から7世紀前半を中心に生産されたと見られているが(註7)、A—10号跡2は口頸部長が全体の½近く伸び、口縁直下の頸部突帯も消失していることから、その最終段階の所産と見倣すことができる。なおフラスコ形長頸瓶は船橋市本郷台遺跡第1号跡からも第II期古相の土師器杯と伴出している(註8)。以上のことからA—10号跡2の製作された時期は古く見ても650年以前には遡らないであろう。

土師器小型甕はA—1号跡1、A—3号跡1、A—6号跡1、同2、A—9号跡1、A—12号跡3等が含まれる。器形的・調整法的に多様だが、前期に比べ口頸部のくびれが弱い点、底部径が縮小すると思われる点が共通している。

土師器大型甕はA—1号跡2の1点のみである。胴部最大径は口頸部よりもやや下位にあり、口縁部先端はまだ水平化するに致らない。

第III期に属する土器はA—10号跡1の須恵器杯蓋1点のみである。偏平な宝珠状ツマミが付され、口縁部は既にカエリが消失し折曲口縁となっている。陶邑におけるこのタイプの初出は7世紀終末から8世紀初頭の第IV型式第1段階であり、藤原京周辺ではほぼ同時期の飛鳥IV期にカエリを伴う旧式の杯蓋と相半ばする割合で出土している。A—10号跡1はフラスコ形長頸瓶との共伴関係から見て、その出現期に製作された土器と考えることができ、7世紀終末の年代が与えられる。

以上各期の絶対年代については、須恵器製作年代の検討から第I期が7世紀中葉、第II期が7世紀後葉、第III期が7世紀終末を中心に継起したと考えられる。

第II期土師器杯の新古二相細分は土器の製作時期に主眼を置いた型式論的把握であり、他遺跡では共伴する例も少なくない。比較的短期間に継起して製作された土器は、使用期間中に混在する場合が生じても不思議ではない。その土器が幾年間使用されるかは全く偶然に左右されている。同一型式と見倣される土器でも、だから、使用開始直後に毀損して捨てられるものもあれば、運よく生き延びて次型式とともに出土するものもある。蛇足の嫌いもあるが、窯跡での編年はその型式が製作され続けた画期を示し、集落跡での編年はその型式が製作され、使用され続けた画期を表現している。製作期間であれば人間の意志がかなり介入してくるので、一度新型式が導入されれば比較的速やかに旧型式にとって換わる。しかしながら使用期間は人間の意志よりも偶然性が優先する。たとえ諸型式の製作時期が継起的に移行しても、その使用期間は「型式」のカテゴリィではなく、個々の土器の運命に任された結果の産物である。したがって資料数に恵まれた遺構では、複数型式の混在率から単一型式出土遺構よりもいっそう厳密

な相対年代の比定が可能となるのである。

(2) 遺構の編年

前節での成果から土器を出土した遺構については次のように編年することができる。

第Ⅰ期　A－7号跡

第Ⅱ期　A－1・2・3・5・6・8・9・12・13号跡

第Ⅲ期　A－10号跡

ただし各期の中で建築・使用・廃絶が完了するわけではない。第Ⅰ期のA－1号跡は土器内容から見て、諸他の遺構よりも一足先に建築・使用されたことはまちがいないが、第Ⅱ期に属する土器を1点含んでいることから、A－1号跡の廃絶時点では既に第Ⅱ期の諸遺構が建築・使用されていたと思われる。また第Ⅲ期のA－10号跡は諸他の遺構の廃絶後にも使用され間もなく廃絶されたと見られるが、第Ⅱ期に属する土器を出土したことから、第Ⅱ期の諸遺構がまだ使用されている期間に建築・使用されたと思われる。したがってこれら諸遺構は時間的に密接な一体性をもっていることが明らかで、全遺構が第Ⅱ期のある時期には併存していた可能性もある。

住居跡の中ではA－4・11号跡に土器の出土がなく、時期が判明しないが、集落の大勢から判断して第Ⅱ期に属するものと考えてさしつかえないであろう。

次に土壙群の年代について述べてみたい。土壙群として取扱った遺構のうちA－20号跡は住居跡のA－10号跡に切られていたので、住居跡の年代よりも古いことは明らかである。遺構の集中地区から離れているA－22号跡は別として、他の土壙群についても集落跡より古く見てもさしつかえないであろう。というのもこれらの遺構の覆土中の底面付近からは鉄滓は検出されず、検出される場合にはA－14・18・19号跡のように覆土最上層から遺構確認面にかけての深度から発見されている。このことは集落が営まれて鍛冶工程から生じた鉄滓を投棄した時には、土壙群は既に埋没していたことを意味するものである。

以上の検討結果から集落跡と土壙群とは時期を異にし、直接には結びつかないことが明らかとなった。したがって集落跡の構成は住居跡11基（このうちA－4号跡は鍛冶工房跡の可能性がある)、鍛冶工房跡2基となる。

1基の住居に夫婦1組とその子供3人が居住するとすれば、この集落の総人口は60人程度、そのうち男子労働人口は、17～8人程度であったろう。

(3) 製鉄集落について

i) 製鉄集落の特異性

7世紀後半のある期間には本集落跡の11基の住居跡と2基の鍛冶工房跡は併存して活用され

ていたと思われる。住居の上部構造は片流れ式を主体としたため、その景観は低地に占拠し、寄棟方式を主体とした一般的竪穴集落とは趣を異にしていたであろう。すべての住居跡のカマドが壁隅に偏して造られているのも、上部構造との関係から理解すべきである。
さらに本集落跡の住居跡には一般的竪穴集落に通有な「単位集団」的結合が明瞭に把えることができず、私的な消費生活よりもむしろ、製鉄作業の能率を優先する配置となっていたことがうかがわれる。これらのことから本集落構成員は低地の一般的農耕集落の「単位集団」ないしその複合体とは出自を異にしていることが想定できる。これらの特異性に加えて、他の一般的稲作農耕民とは異なる作業に従事しているという事実は、現実・意識の両面においてかれら相互の団結力をいっそう強固なものとするのに役立ったであろう。

ii）製鉄作業の復原

本集落はA－10号跡より砂鉄を出土したことから、製錬・鍛冶の一貫作業を行なっていたことが明らかである。製錬は砂鉄や鉄鉱石を製錬炉中で還元焼成して溶融させ、チタン等の不純物を鉄滓として除去して金属鉄を得る工程であり、鍛冶は製錬工程でできた鉄塊を鍛冶炉中で酸化焼成して脱炭するとともに加鍛して成形加工する工程である。鉄滓の化学分析成果によれば、鍛冶に含まれる2工程の成分比的識別が可能とされるが(註9)。分析を経ていない本遺跡の資料については不明という他はない。それゆえ製鉄の一貫作業といっても当地で製品化して低地の集落地域に運搬したのか、あるいは当地では鉄塊または鉄鋌等の半製品までを担当し、製品化は他処で行なうという分業システムをとっていたかどうかについては明確な解答が得られない。

しかしながらもし当地で製品化段階まで行なわれていたとすれば、住居跡から検出された鉄器類はその質量ともに余りにみすぼらしいものではあるまいか。本集落跡出土鉄器は鉄環1（A－3号跡)、鉄鎌1（A－10号跡)、小刀片1（同)、鉄鏃片1（A－13号跡）のみである。もし製品まで生産していたとすれば、それらの一部は日常的用途に流用され、現状よりも多彩・多量の鉄器類の出土を見たであろう。当地の製鉄集落民は、それゆえ、半製品を生産・搬出し、最終工程は搬出先で行なわれたと考えるべきである。加工工程（いわゆる小鍛冶）は原理的にはここで行なわれた中間工程（いわゆる大鍛冶）の延長線上に把えることが可能であるが、その作業内容は製品の種類に応じた工芸的熟練を要し、それ自体独自に発展し得る性格をもっている。かれらが加工技能を持っていなかったといえば言い過ぎになるが、製錬－中間工程と加工工程の間にはそれくらい深い溝が存在したのではないだろうか。

次に集落内分業についてまとめてみよう。本遺跡で行なわれた製鉄関連作業は製錬原料たる砂鉄の採取・炭材の伐採・炭窯および製錬炉体粘土の採掘・炭窯の構築・炭焼・製錬炉の構築・製錬・製錬鉄塊の選別・鍛冶等に及んでいる。製錬炉と炭窯は本遺跡の発掘調査区域からは検出されなかったが、遺跡周辺の緩斜面に構築されていたものと思われる。前述のごとく本集落

跡の男子労働人口は17～8人と想定されるが、かれらが上記諸作業を分担して行なっていたかどうかを示す明確な手掛りは今回の調査では得られなかった。

しかし集落を構成する住居跡と鍛冶工房跡の配置を見ると、北側では2基の鍛冶工房跡を挾んでA－1～5号跡が東北東一西南西の方向に、また南側ではA－6～11号跡が北東一南西の方向に各々直線的に並んでいるように見える。前者を北群、後者を南群と呼称すれば、北群は鍛冶部門に専業した可能性が高いのである。その理由は本集落跡のすべての鍛冶工房跡（といっても2基ではあるが）が北群に取込まれていること、本文記載のようにA－4号跡は鍛冶工房としても使用された可能性があること、A－3号跡の摺鉢状ピットは鍛冶炉の可能性があること等である。北群が鍛冶部門の専業集団であるとすれば、南群は当然のことながら製錬部門を専業的に受持っていたであろう。南群のA－10号跡から出土した砂鉄はそれを傍証するように思われる。以上のように南群が製錬部門を、北群が鍛冶部門を各々専業的に担当していたとすれば、製錬部門の労働人口は10人程度、鍛冶部門のそれは7～8人であったろう。

iii）製鉄集落民の生業と生活

この問題は個別的な資料から解明の糸口を見つけ出すことは極めて困難であるが、ここでは本遺跡の製鉄集落民の農耕との関係と居住期間について展望を与えて問題点を整理しておきたい。まず第1に、本集落跡は半世紀近くにわたり継続的に営まれてきたのであるが、その間年間を通して恒常的に集落民が居住・生活していたのか、それとも1年間の一定期間を限って、即ち季節的に人々がこの地に仮住して製鉄業に従事したのか。後者であるならば谷間から吹き上げる季節風が強まって製錬炉の通風条件が良好になる冬期が選ばれたであろう。そして第2に、かれらは当地で自活するに足る規模の農耕を営んでいたかどうか。当地での集落生活が季節的仮住に過ぎないものであれば、その期間は前述のごとく冬期に限られるから、農耕を営む前提条件が欠けてしまうので、この問題は当地での集落生活が年間を通して恒常的に営まれた場合に限定することができる。

以上の居住期間・製鉄・農耕の諸関係をまとめると第2表のようになる。本遺跡の製鉄集落民の生活形態は表中のいずれかのタイプに帰結するものと考えられる。この3つの可能性をさらに限定するためには当地における農耕の適否、および四季を通じた製錬炉の操業の可否についての明確な見通しをもたなければならない。A_1は当地において自給可能であり、A_2は食糧を支給されねば生存できず、Bは春から秋にかけて低地で農耕を営んだ場合は自給可能、製鉄関連作業に従事している場合は自給不能である。いうまでもなく製鉄集落民の自給率の度合いは第3者にたいする依存率の度合いと表裏関係にあり、その依存のあり方は近世的でも中世的でもなく、古代的でしかあり得なかったはずである。

最後に集落の廃絶理由にふれて結びとしたい。本集落跡は比較的短期間に形成・廃絶された小規模集落であるが、集落の規模や存続期間のこのような傾向は周辺の他の製鉄関連集落にも

タイプ	居住形態	生活サイクル	食糧調達
A_1	常　住	春～秋農耕、冬製鉄	自　給
A_2	常　住	年間を通して製鉄	支　給
B	仮　住	春～秋下山、冬製鉄	不　明

第2表　No.2遺跡製鉄集落民の生活形態の可能性

あてはまるようである。おそらく半世紀近くに操業した結果、周辺の砂鉄や樹林等の原料資源が枯渇したために移動を余儀なくされたのであろう。かれら製鉄集落民は資源に恵まれたこの水源地域を世代を超えて放浪したのではないだろうか。

註

註1　高橋博文他「藤沢遺跡」『千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡』財団法人千葉県文化財センター（1979）

註2　小林清隆『成田市三里塚馬場遺跡』財団法人千葉県文化財センター（1982）

註3　田中豪他「水砂遺跡」『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』財団法人千葉県文化財センター（1982）

註4　清藤一順他「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI』財団法人千葉県文化財センター（1978）

註5　田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園（1966）
　　中村浩他『陶邑III』財団法人大阪文化財センター（1978）

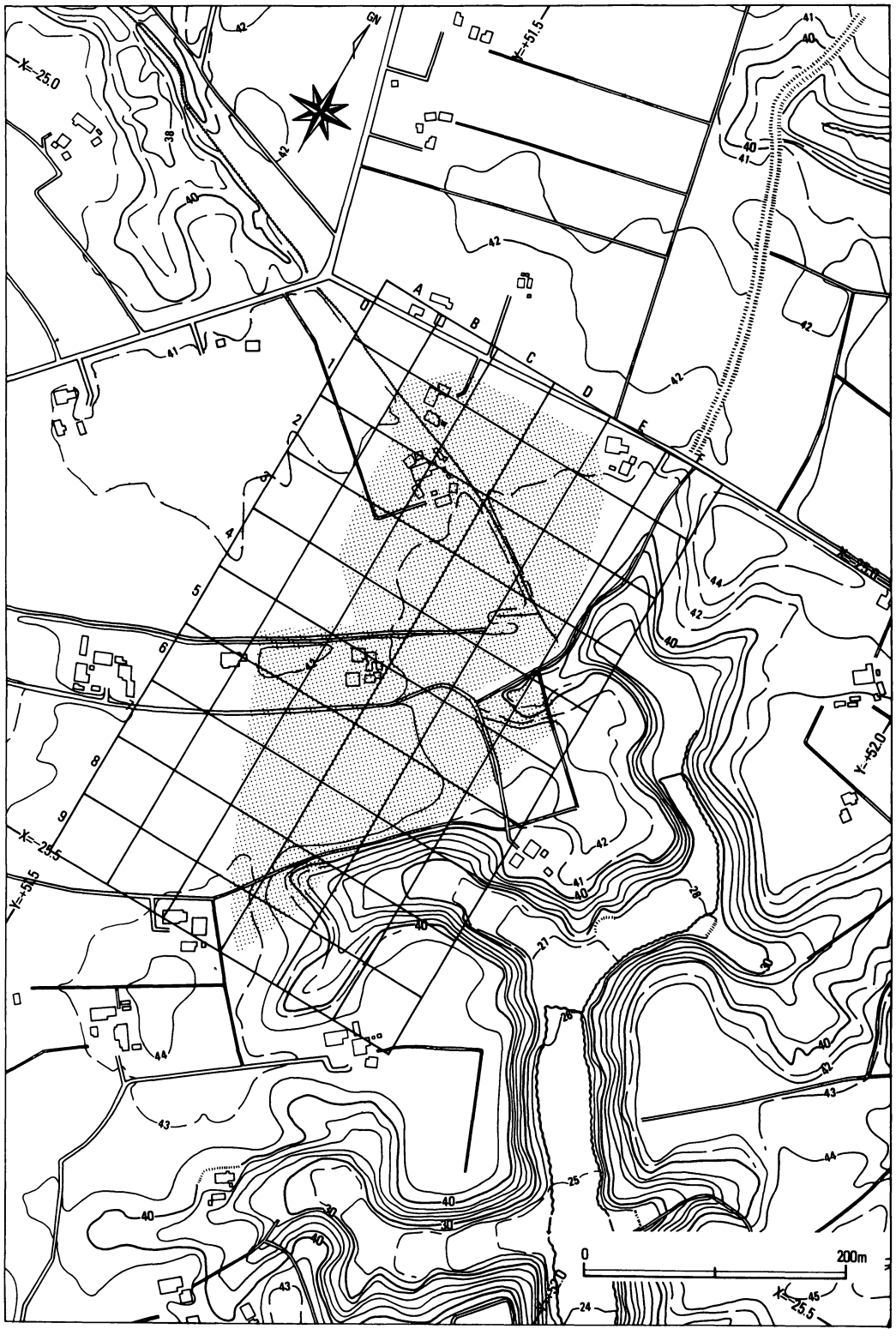
註6　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』　奈良国立文化財研究所（1978）

註7　『鬼堕古墳』　赤羽根町教育委員会（1978）

註8　『本郷台』　本郷台遺跡調査団（1979）

註9　大澤正己「千葉県下出土の製鉄関係遺物の分析調査」『研究紀要7』財団法人千葉県文化財センター（1982）

第Ⅲ篇　No.10遺跡



第68図　遺跡付近の地形と発掘調査区（1/5000）

第1章　調 査 の 概 要

第1節　遺跡の位置と環境（第68図）

No.10遺跡は、山武郡芝山町香山新田字新山106他に所在する。遺跡東側は谷津の谷頭部にあたり、緩斜面となっている。この谷津は周囲の谷津と合わさり高谷川となり下流で栗山川に注ぎ九十九里浜で太平洋に繋っている。また、ここから2km程北へ行くと現在は利根川となっている旧鬼怒川谷（霞ケ浦低地帯）に注ぐ谷津が入っており、この辺が分水界を成していることがわかる。

付近の遺跡としては、南西にNo.7遺跡、北西にNo.14遺跡、No.62遺跡、北にNo.16遺跡が各々約500m程の距離に所在する。

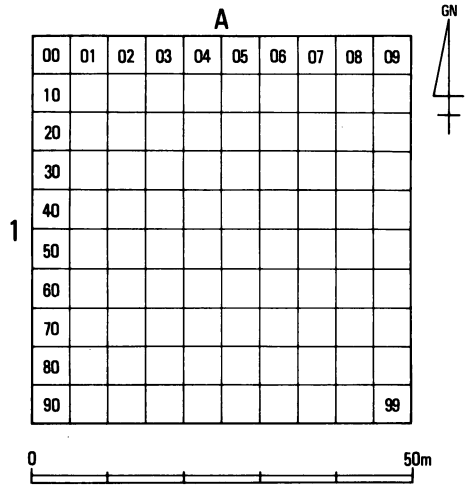
なお、本来のNo.10遺跡は、調査区外の東側や南東側の谷津に接する舌状部をも含むもので、かえって地形的にはこれらの方が良好であり、遺跡の主体をなす可能性が強いと思われる。

本報告書は、No.10遺跡の西側約半分の調査結果であって、遺跡の全容を知るには東側及び南東側の調査を待たねばならない。

第2節　調査の経過と方法

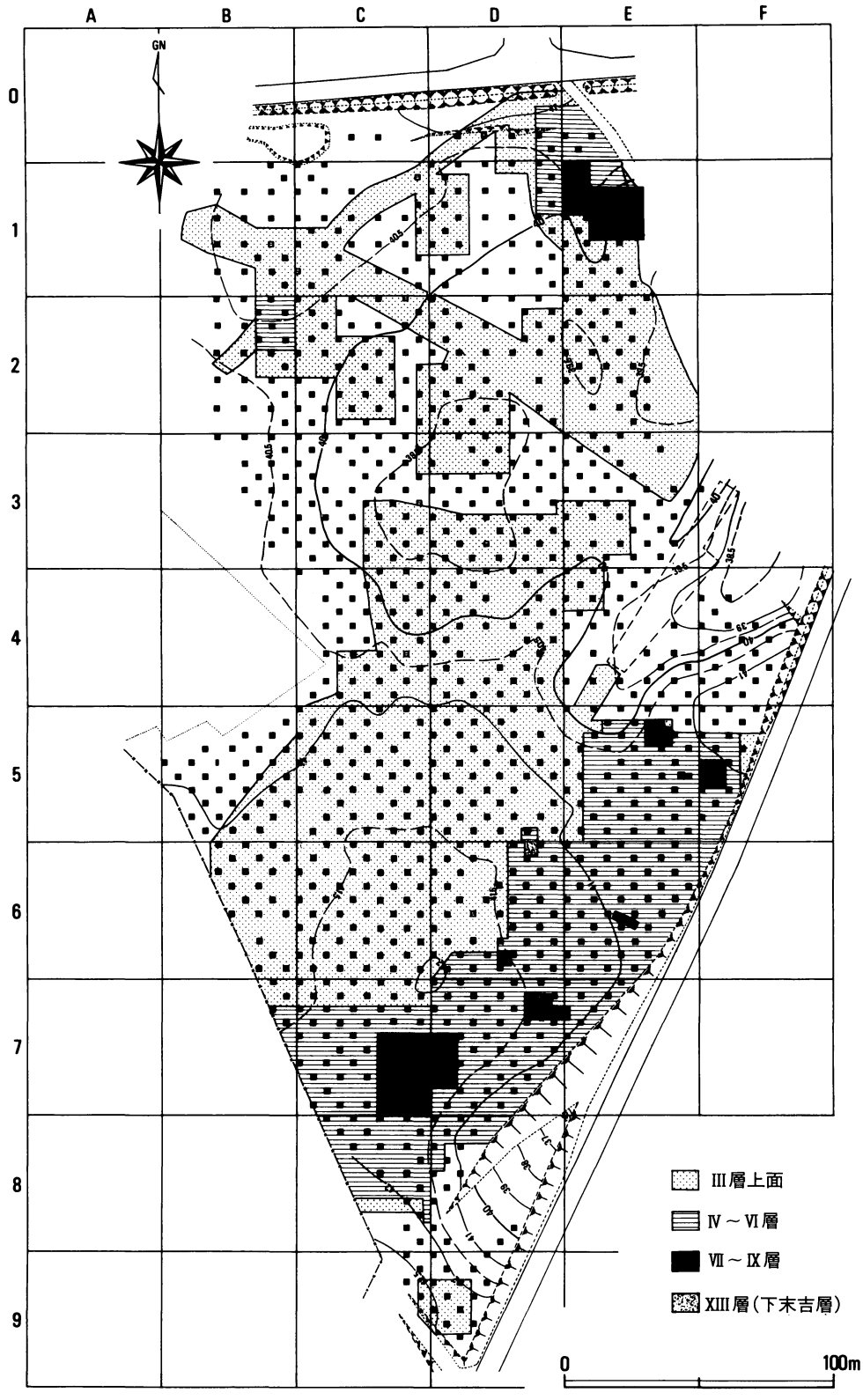
発掘調査は、確認調査と本調査に分けられ、確認調査は、65,000m²を対象にその8％約5,000m²を調査することにし、昭和54年7月6日から7月31日まで約1ケ月間行なった。

調査は、発掘調査区全域に公共座標に基づき50m方眼を設定して大グリッドとし、さらにこの大グリッドを縦横各10個計100個の小グリッドに分け、1小グリッドは5×5mとした（第69図）。そして、基本的にはこの小グリッドの北西隅に2×2mの確認調査用グリッドを市松模様に入れ、武蔵野ローム層直上まで掘り下げた（第70図）。

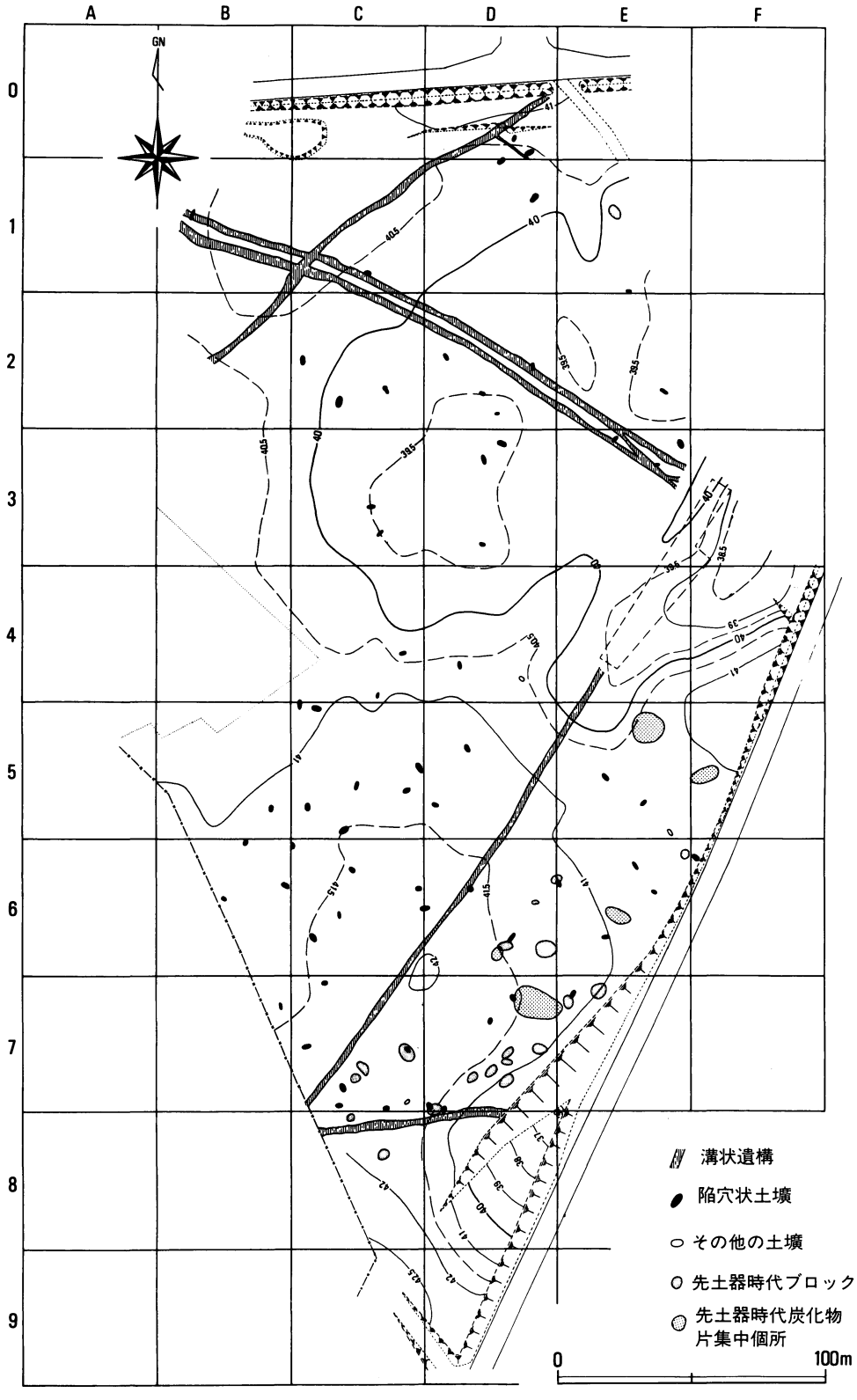


第69図　小グリッド分割図（1/1000）

その結果、本調査面積は、縄文時代以後の遺構調査を中心とした上層の調査範囲が41,500m²、下層の先土器時代の調査範囲が15,550m²、計57,050m²となり、昭和54年9月18日から昭和55



第70図　発掘調査深度図（1/2500）



第71図　遺構分布図（1/2500）

年3月31日まで実施した。

なお、確認調査の結果縄文時代の遺物が少なかったのと、広範囲に分布する遺構調査の効率を考え、Ⅰ層はもちろんⅡ層の大部分もバックホーにより除去した。

第3節　遺跡の概要（第71図）

先土器時代としては、Ⅶ層主体石器群1、Ⅳ～Ⅵ層主体石器群1、Ⅲ層主体石器群18の計20ブロックの石器群を検出した。なお、Ⅲ層主体石器群には小規模ながら礫群が6ブロックにおいて伴出した。また、炭化物片の集中を5個所検出した。

縄文時代としては、陥し穴状土壙66基、その他の土壙3基を検出した他、土器・石器がややまとまって出土した地点が1個所ある。特に多数の陥し穴状土壙の検出は注目される。

その他の時代としては、7条の溝状遺構と若干の土師器・古銭等が出土したにとどまった。

このように、本遺跡は、先土器時代から縄文時代が主体を占める三里塚地区の諸遺跡の中でも、その典型的な内容をもつものである。

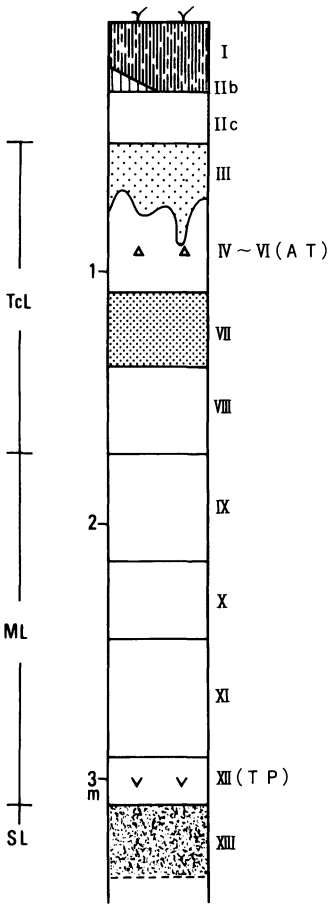
第4節　遺跡の層位

No.10遺跡は、地形面としては下総上位面に位置して、上部から表土黒色腐植土層、立川ローム層、武蔵野ローム層、常総粘土層（下末吉ローム層上半部）、成田層の順で堆積している（第72・74図）。

第Ⅰ層　黒色～黒褐色土層。表土で耕作土などの攪乱層。厚さ約20～30cm。

第Ⅱb層　暗黄褐色土層。いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層で、本遺跡ではそのほとんどが第Ⅰ層に取り込まれていると考えられ、ごく稀に斜面などに存在した。この層は、縄文時代後期～晩期に降下した「新期富士降下火山灰層」と考えられ、この時期に富士山のテフラを噴出する活動が活発であったようである（町田1964）。三里塚地域の遺存の良いところで観察すると厚さ約15cm程である。

第Ⅱc層　暗褐色土層。ほぼ遺跡全域で確認され、縄文時代の主たる遺物包含層で、厚さ約20cm。この層はいわゆる「富士黒土層」に相当すると考えられ、火山活動の極めて静穏な時期に降下した細粒火山灰を母材にして生成した土壌と思われる（町田1964）。下部のソフトローム層との境は漸移的である。この辺ではソフトローム層の堆積の終了時期が給源火山の近くよりもいくらか早くかつその後の火山灰の供給も少なかったと推定されるので、Ⅱc層がソフトローム層を取り込んでいると考えられる。このことは細石刃及び細石刃核などがⅢ層よりもかえってⅡc層から多く発見されることからも窺える。



第72図　標準層序

第III層　黄褐色ローム層。立川ローム層最上部の軟質ローム層でいわゆるソフトローム層である。下部のハードローム層をかなり取り込んでいると思われ、遺跡によっては上下の２つの層に分けられるところもある。厚さ約25～30cm。

第IV～VI層　明黄褐ローム層。上部のソフトローム層と下部の暗褐帯との間層で、厚さ約30cmで硬い。この辺ではＡＴ（姶良丹沢火山灰）層が目立つため、それを鍵層として識別される層で、ＡＴは遺跡平坦部では厚さ約20cmの幅をもって上下に拡散しているが、斜面では場所により厚さ約５cm程のブロック状あるいは帯状に堆積している。本遺跡ではIV～Ｖ層（第１暗色帯以上のハードローム層）の大半がIII層のソフトローム層に取り込まれていると考えられる。

第VII層　暗褐色ローム層。立川ローム層第II暗色帯であるが、あまり濃いものではない。赤褐色スコリアを多量に含み硬い。厚さ約30cm。

第VIII層　褐色ローム層。立川ローム層最下部層で赤褐色スコリアを少し含む。厚さ約35cmで上層より軟質、下部はやや青味を帯びる。

第IX層　褐色ローム層。武蔵野ローム層最上部層。クラックが発達しやや軟質で、少し水を被った感じである。厚さ約40cm。

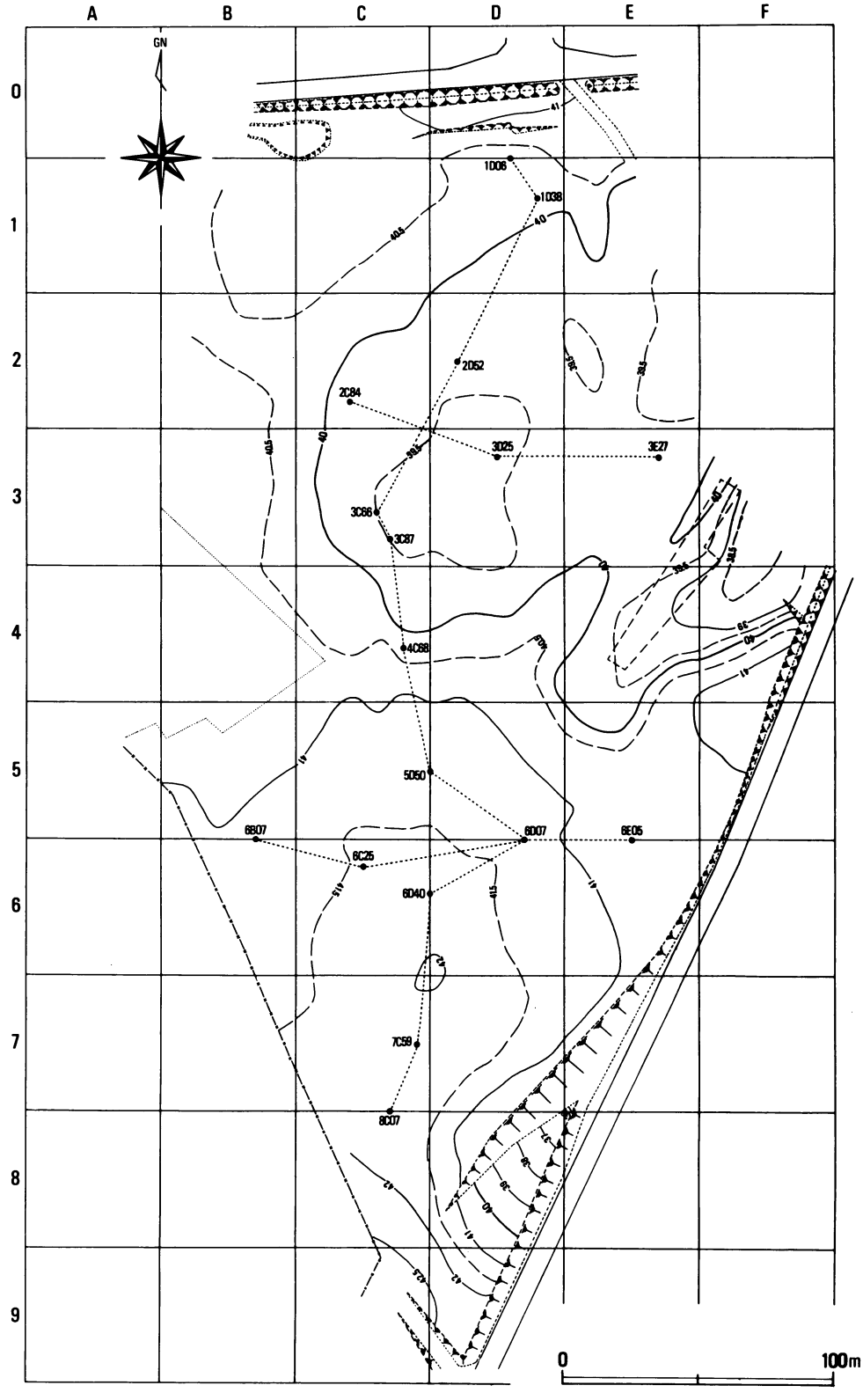
第Ｘ層　褐色ローム層。IX層より赤味を帯びて硬質である。厚さ約30cm。

第XI層　褐色ローム層。IX層と同様青味が強く、下部へ行く程粘質が強まる。厚さ約45cm。

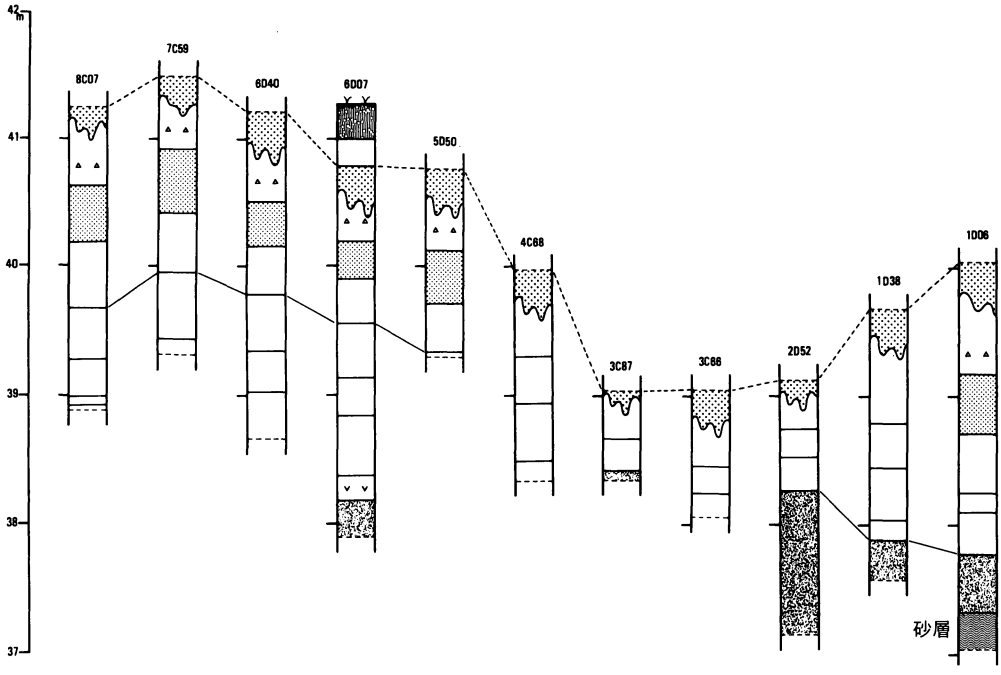
第XII層　黄橙色軽石層。東京パミスで厚さ約15～20cm。台地平坦部よりも斜面部の方が一般に識別が容易である。

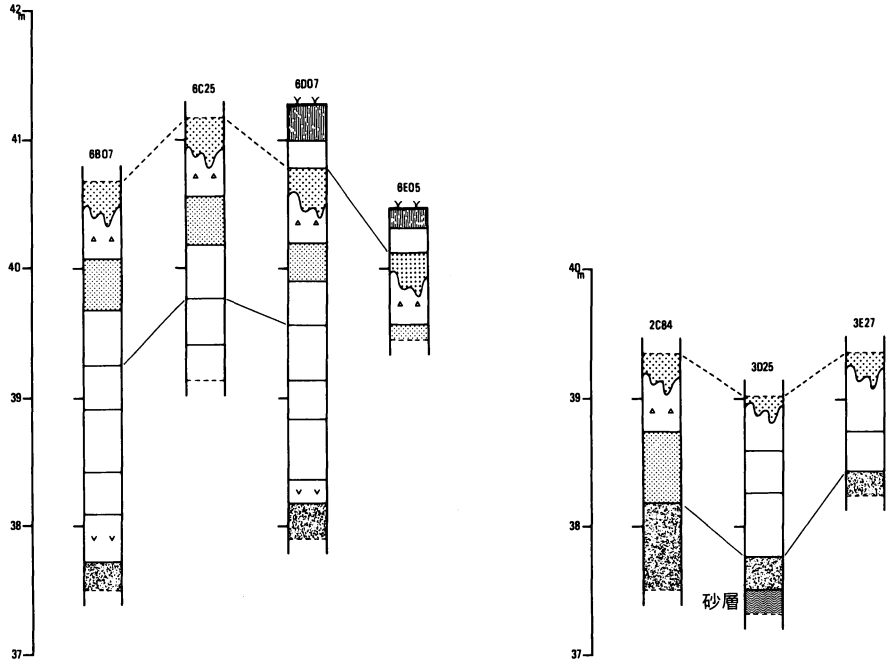
第XIII層　白色粘土層。 常総粘土層（下末吉ローム層上部相当層）と呼ばれるもので下部へ行く程砂質を帯びる。厚さは地形によりかなり異るが、約50cm～１m位である。この下には海成層の成田層が厚く堆積している。

遺跡斜面部の標高40m以下ではVII層以下に変化がみられ、立川ローム層下部を欠いたり、武蔵野ローム層も一部しかみられないところがある。しかし、白色粘土層はあまり地形に関係なく標高38m前後が上面を成す（第73・74図）。



第73図　土層柱状図地点（1/2500）





第74図　遺跡土層断面図 (1/60)

第2章　遺構と遺物

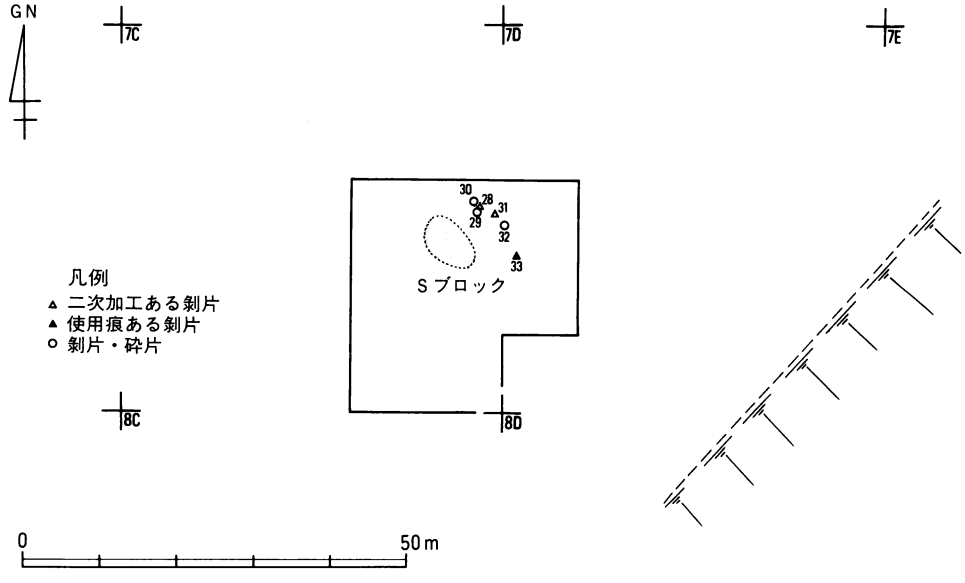
第1節　先土器時代

1　Ⅶ層主体石器群

遺跡南端に近い7C58グリッド付近からⅦ層を主体とする石器群が検出された。この辺は谷頭に近いところではあるが、緩斜面から少し内側のためほぼ平坦な地形を呈している。

石器群は石器・剥片類のみで構成され、ブロック1個所（Sブロック）とその周辺から計33点出土した（第75・76図、第3表）

なお、層位的に近いと思われる炭化物片の集中が2個所検出された（第117・118図）。



第75図　Ⅶ層主体石器群分布図（1/1000）

(1)　**Sブロック**（第77・78図、図版21・28）

出土状況　7C58グリッドを主体に径約5m程の広がりをもち、あまりまとまりを示さない。出土層位はⅦ層上部～中部である。

出土遺物　出土した石器群は、彫器1点、ハンマーストーン1点、二次加工ある剥片3点、使用痕ある剥片2点、石核3点、その他剥片・砕片16点、計26点である。

24は小形のやや不定形な剥片を素材とした彫器である。背面右方向から1条、さらにそれと

は直角に近く末端から基部方向へ1条の彫刀面を作出している。彫刀面近くの主要剥離面縁辺には使用痕ともみられる微細な剥離痕がある。

14は小形の縦長の二次加工ある剥片である。主要剥離面右側縁基部及び左側縁中程には微細な加工痕があり、特に末端部の急斜な加工痕及び入念な頭部調整などはナイフ形石器とも考えられるものである。

13・21は使用痕ある剥片で、13は基部と末端を欠損しているが、鋭い二側縁を持つ先細りの良好な石刃状剥片であると考えられ、両側縁には微細な使用痕が顕著である。21はやや縦長の剥片で末端部を欠損している。

18・19・26はいずれも剥片であるが、19は頭部調整が施されている石刃状剥片で、末端を欠損しているうえ風化が進んでおり、二次加工の有無は明らかではないが、形態的・技法的に19と似ておりナイフ形石器の可能性がある。

18は下半を欠くため明確ではないが縦長の剥片と考えられ、平坦な打面を広く残している。14と同一個体である。

26はやや横広の剥片で21と同一個体である。

22は平たい円礫の角張ったところに打痕を残すハンマーストーンである。

この他小形の石核が3点出土しているが、いずれも既設の剥離面を打面として不定形の小剥片を剥取している。

(2) ブロック外出土石器（第78図、図版28）

ブロック外からは7点出土し、1E20グリッド出土のピエスエスキー21点を除き全てSブロック周辺からの出土である。

28・31はいずれも二次加工と使用痕の両方が認められる縦長剥片である。28は背面に不規則な剥離面がみられ、厚さも不均衡で石核調整剥片ではないかと思われる。左右両側縁には微細な使用痕がみられ、末端には抉入状のやや急斜な加工が施されスクレイパーとも考えられる。31は背面右側縁下半に使用痕がみられ、末端には粗い加工が施されている。

33は末端にわずかに使用痕が認められる不定形の小剥片である。

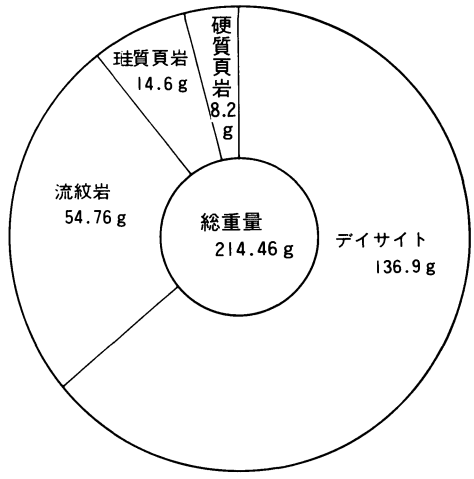
(3) Ⅶ層主体石器群のまとめ

Ⅶ層を主体とした石器群はSブロック及びその周辺の他には1点の出土をみたのみであり、また、このブロック内外の石器群はその出土状況などから同一のグループと考えられるので、これについて述べてまとめとしたい。

組成及び石材　組成としては、彫器1点、ハンマーストーン1点、二次加工と使用痕の両方がある剥片2点、二次加工のみある剥片3点、使用痕のみある剥片3点、石核3点、その他剥

片・砕片19点、計32点であり、該期の組成としてはナイフ形石器とスクレイパーが欠除していることになる。しかし、14や19はナイフ形石器の可能性をもち、28もスクレイパーの可能性が有り、こうしてみると一応の器種をもった石器群とも考えられる。

石材は、流紋岩20点、頁岩11点（硬質頁岩７点、珪質頁岩４点）、デイサイト１点で、デイサイトのハンマーストーン１点を除けば流紋岩と頁岩の２種から構成されていることになる。

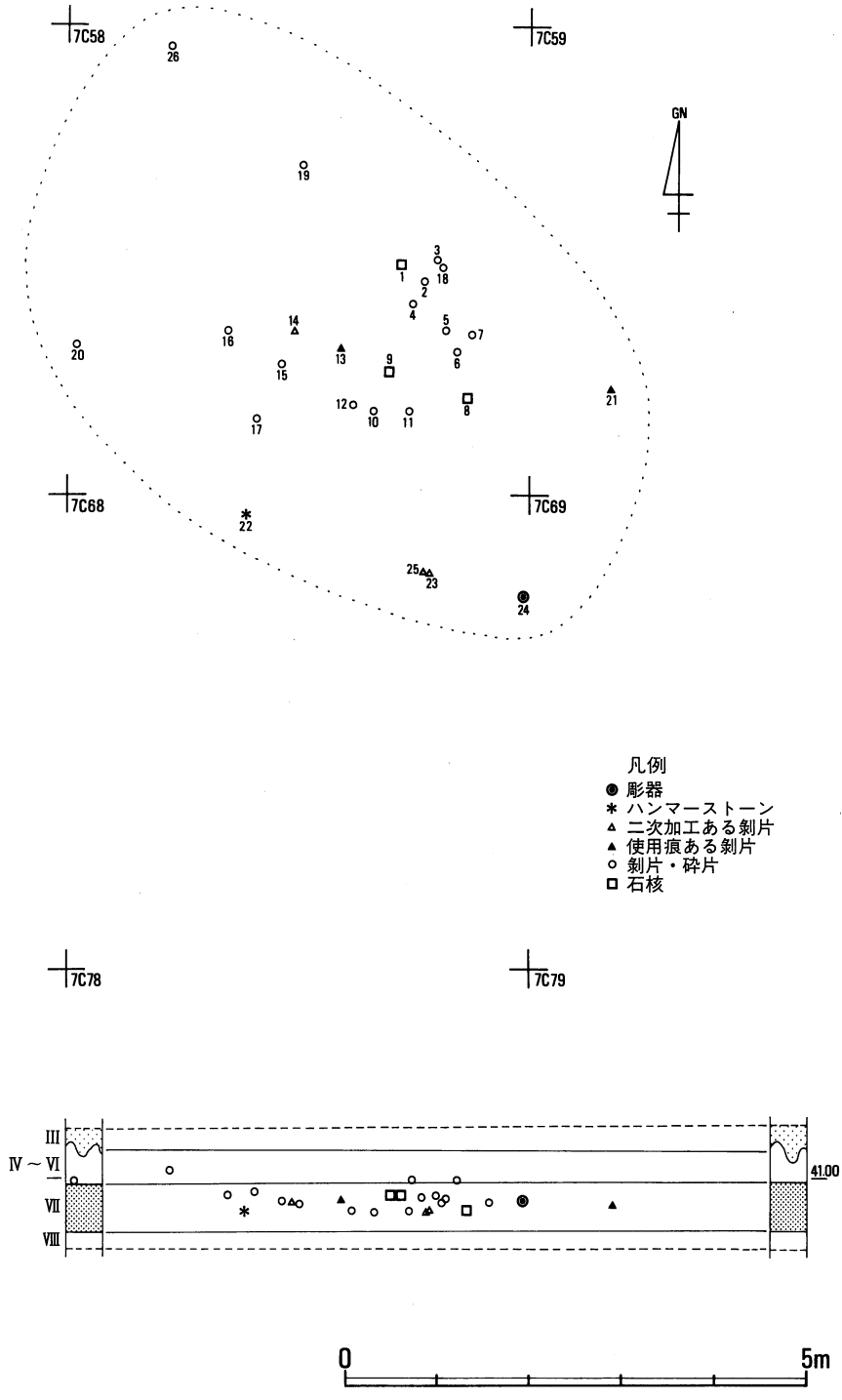


第76図　Ⅶ層主体石器群石材別重量比

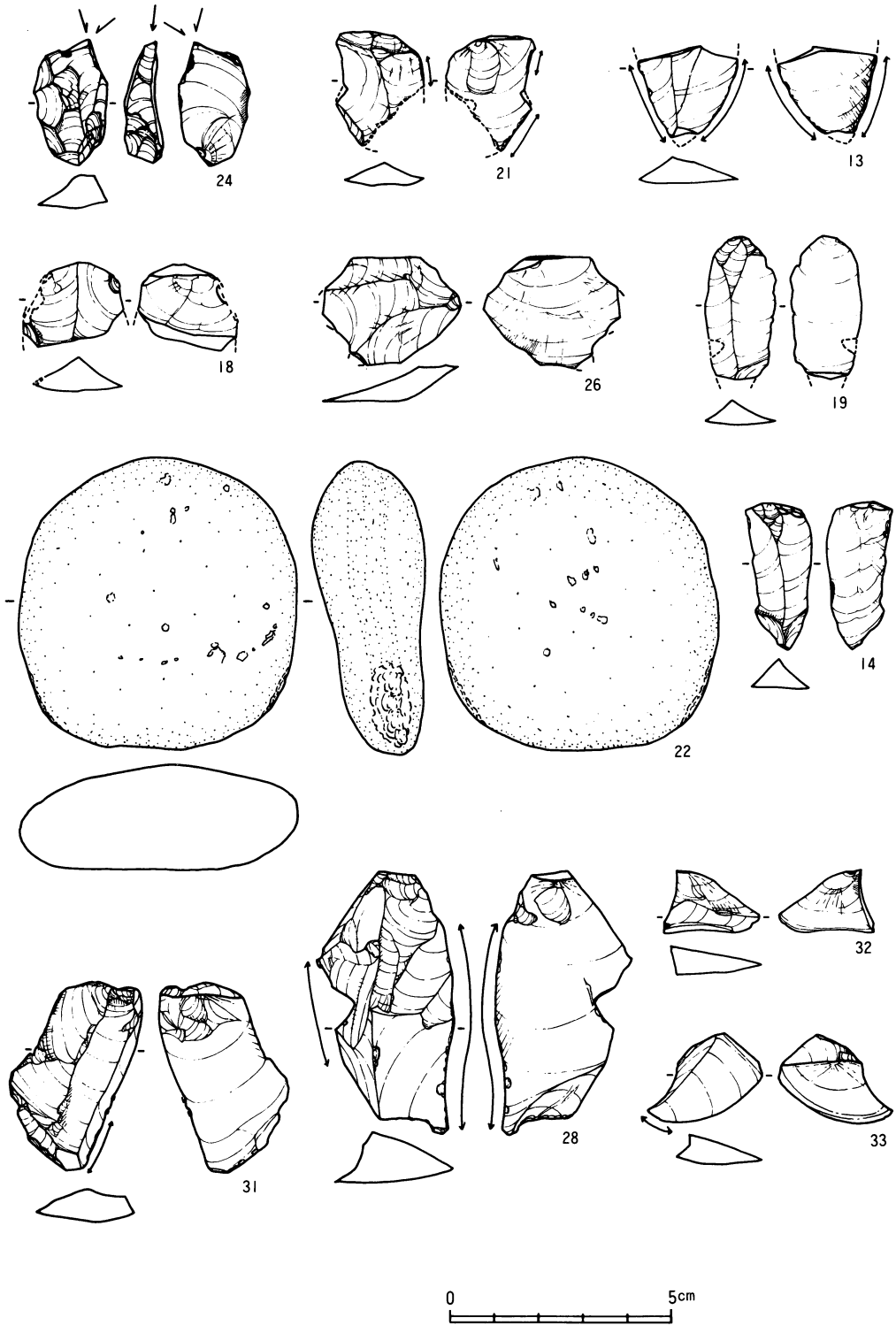
剝片剝離技術　剝片には縦長の石刃状剝片とやや横広の不定形ともいえる剝片の２種があり、どちらも打面はほとんど調整されないようである。しかし、石刃状剝片には頭部調整が施され、ナイフ形石器の素材として用いられていることが推定される。また、やや横広の不定形の剝片を剝取したと思われる石核が出土しており、一定の打面をもたず、既設の剝離面を打面として剝片剝離を繰り返している。

調整加工技術　彫器を除けば明確なトゥールがみられず、調整加工技術を窺うのは難しいが、出土資料からみると、あまり素材の形状を変えないものと考えられ、目的的剝片の剝取前に施される石核調整がより重要な働きをしており、言いかえれば、二次加工よりも剝片剝離段階の占める割合が相対的に高かったものと考える。

編年的位置　空港№７遺跡Ａ地点第７石器群（西川・西口他1984）、権現後遺跡第５文化層出土石器群（橋本他1984）などが近いと思われ、武蔵野第ＩＣ期前半、相模野第II期前半に位置付けられる。



第77図　Sブロック遺物出土状況図（1/800）



第78図　Ⅶ層主体石器群実測図（2/3）

第3表　Ⅶ層主体石器群一覧表

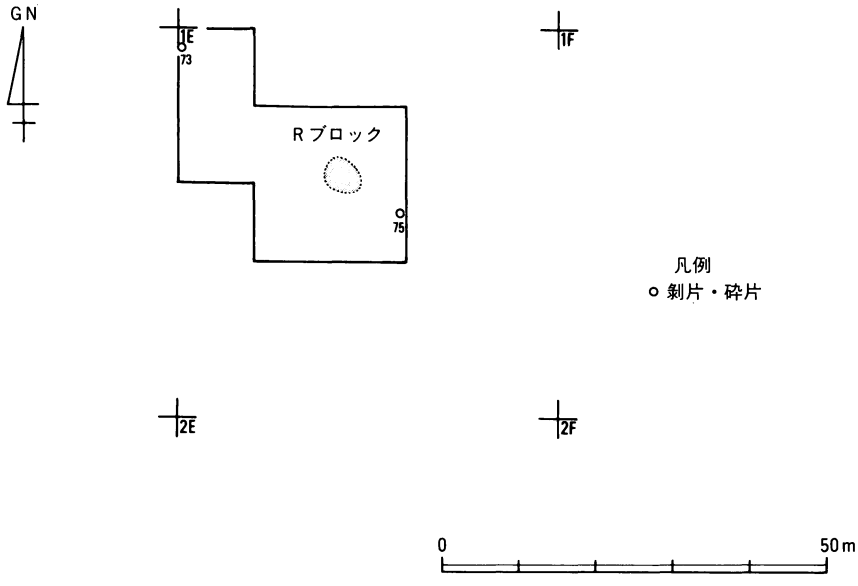
番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
1	S	石核	流紋岩	2.4	1.8	3.0	12.9		7C58-8
2	S	砕片	流紋岩	0.7	0.8	0.2	0.1		7C58-9
3	S	砕片	流紋岩	0.9	0.7	0.2	0.1		7C58-10
4	S	剥片	流紋岩	2.1	1.3	0.3	0.8	110°	7C58-11
5	S	砕片	流紋岩	1.4	1.2	0.5	0.6		7C58-12
6	S	剥片	流紋岩	2.2	1.8	0.8	2.0	110°	7C58-13
7	S	砕片	流紋岩	0.8	0.8	0.1	0.06		7C58-14
8	S	石核	流紋岩	2.0	2.6	3.6	12.4		7C58-15
9	S	石核	珪質頁岩	2.0	2.0	2.6	4.2		7C58-16
10	S	砕片	硬質頁岩	1.7	1.0	0.5	0.8		7C58-17
11	S	剥片	珪質頁岩	2.2	1.1	0.6	0.9	105°	7C58-18
12	S	剥片	珪質頁岩	1.2	1.4	0.5	0.7	100°	7C58-19
13	S	使用痕ある剥片	流紋岩	(2.1)	(2.3)	(0.7)	2.2		7C58-20
14	S	二次加工ある剥片	硬質頁岩	3.3	1.4	0.8	2.6		7C58-21
15	S	砕片	硬質頁岩	1.2	0.6	0.3	0.2		7C58-22
16	S	剥片	流紋岩	(2.0)	(1.6)	(0.3)	0.7	105°	7C58-23
17	S	砕片	硬質頁岩	1.0	0.6	0.2	0.1		7C58-29
18	S	剥片	硬質頁岩	(2.0)	(2.3)	(1.0)	3.0	115°	7C58-35
19	S	剥片	流紋岩	(3.2)	1.6	0.6	2.0	110°	7C58-6
20	S	砕片	流紋岩	1.0	0.9	0.2	0.2		7C58-26
21	S	使用痕ある剥片	流紋岩	(2.6)	(2.1)	(0.7)	2.2	115°	7C59-5
22	S	ハンマーストーン	デイサイト	6.6	6.1	2.4	136.9		7C68-4
23	S	二次加工ある剥片	流紋岩	1.3	1.5	0.4	0.4	95°	7C68-31
24	S	彫器	流紋岩	2.8	1.7	0.9	3.6		7C68-32
25	S	二次加工ある剥片	流紋岩	0.8	1.9	0.6	0.6		7C68-36
26	S	剥片	流紋岩	(2.7)	(3.0)	0.7	3.8	125°	7C58-4
27	ブロック外	ピエスエスキーユ	珪質頁岩	2.3	1.6	0.6	2.2		1E20-4
28	ブロック外	二次加工及び使用痕ある剥片	珪質頁岩	5.8	2.3	2.0	6.2		7C49-4
29	ブロック外	砕片	硬質頁岩	1.1	0.7	0.6	0.3		7C49-5
30	ブロック外	剥片	流紋岩	(1.4)	(1.4)	(0.4)	0.5	120°	7C49-6
31	ブロック外	二次加工及び使用痕ある剥片	流紋岩	(4.2)	(3.0)	(0.9)	7.5	110°	7C49-10
32	ブロック外	剥片	硬質頁岩	1.4	2.2	0.8	1.6		7D50-5
33	ブロック外	使用痕ある剥片	流紋岩	2.2	2.7	0.7	2.1	160°	7D50-7

2　IV～VI層主体石器群

遺跡の北東隅に当る１Ｅ34グリッドを中心にIV～VI層を主体とする石器群が検出された。この辺も谷頭部に当り、北西から南東へ緩やかに傾斜している。

石器群は石器・剥片類のみで構成され、ブロック１個所（Ｒブロック）とその近辺から計43点出土した（第79・80図、第４表）。

また、層位的には若干上部になると思われるが、やはりIV～VI層を主体とする炭化物片の集中が１ケ所検出された（第116図）。



第79図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群分布図（1/1000）

(1)　Ｒブロック（第81・82図、図版21・29）

出土状況　１Ｅ34グリッドを主体に径４～５ｍ程の広がりをもつが、中でも１Ｅ44グリッド杭付近に大部分が集中する。出土層位はIV～VI層下部のものが多く、ほぼVI層の石器群といえるであろう。

出土遺物　出土した石器群は、彫器１点、二次加工と使用痕の両方がある剥片１点、二次加工のみある剥片２点、使用痕のみある剥片２点、その他剥片・砕片33点、計39点である。

71は彫器である。背面左上方からの剥離の後、右上方から１条の彫刀面が作出され、さらに右方向から１条の浅い彫刀面を作出している。素材の形状ははっきりしないが、末端が部厚いやや大きめの剥片が使用されているようである。彫刀面近くには小剥離が施されている。

72は打面を除く全周に二次加工及び使用痕がみられる縦長剝片である。打面は若干の調整がされていると思われ、剝離面の交点を打点としている。

70はねじれたやや縦長の剝片で、末端に若干の二次加工が施されている。

62は背面左下半の側縁に使用痕のある剝片である。

43・52・65はいずれも剝片であるが、43は石核調整剝片と考えられ、部厚なもので背面下部には礫面を大きく残している。52・65は共に剝離面の交点を打点としており、65には入念な頭部調整が施されている。

(2) ブロック外出土石器（第82図、図版29）

ブロック外からは4点出土し、76以外はRブロック近辺からの出土である。

74は二次加工ある剝片であるが、背面上部には大きな剝離が施され、背面右側の欠損個所の断面にも小剝離が施されている。

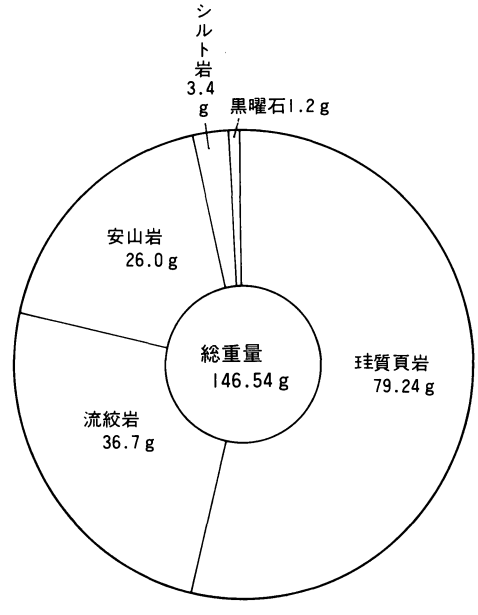
73はやや横広、76は横長の剝片である。

この他打面再生剝片が1点出土しているが、それには2個所に打面が作られており、打面が一定したものでないことを窺わせる。

(3) Ⅳ～Ⅵ層主体石器群のまとめ

組成及び石材　石器組成は彫器1点、二次加工と使用痕の両方がある剝片1点、二次加工のみある剝片3点、使用痕のみある剝片2点、打面再生剝片1点、その他剝片・砕片35点、計43点であり、彫器の他は明確なトゥールが見当らず、剝片に二次加工あるいは使用痕のみられるものが目に付く。

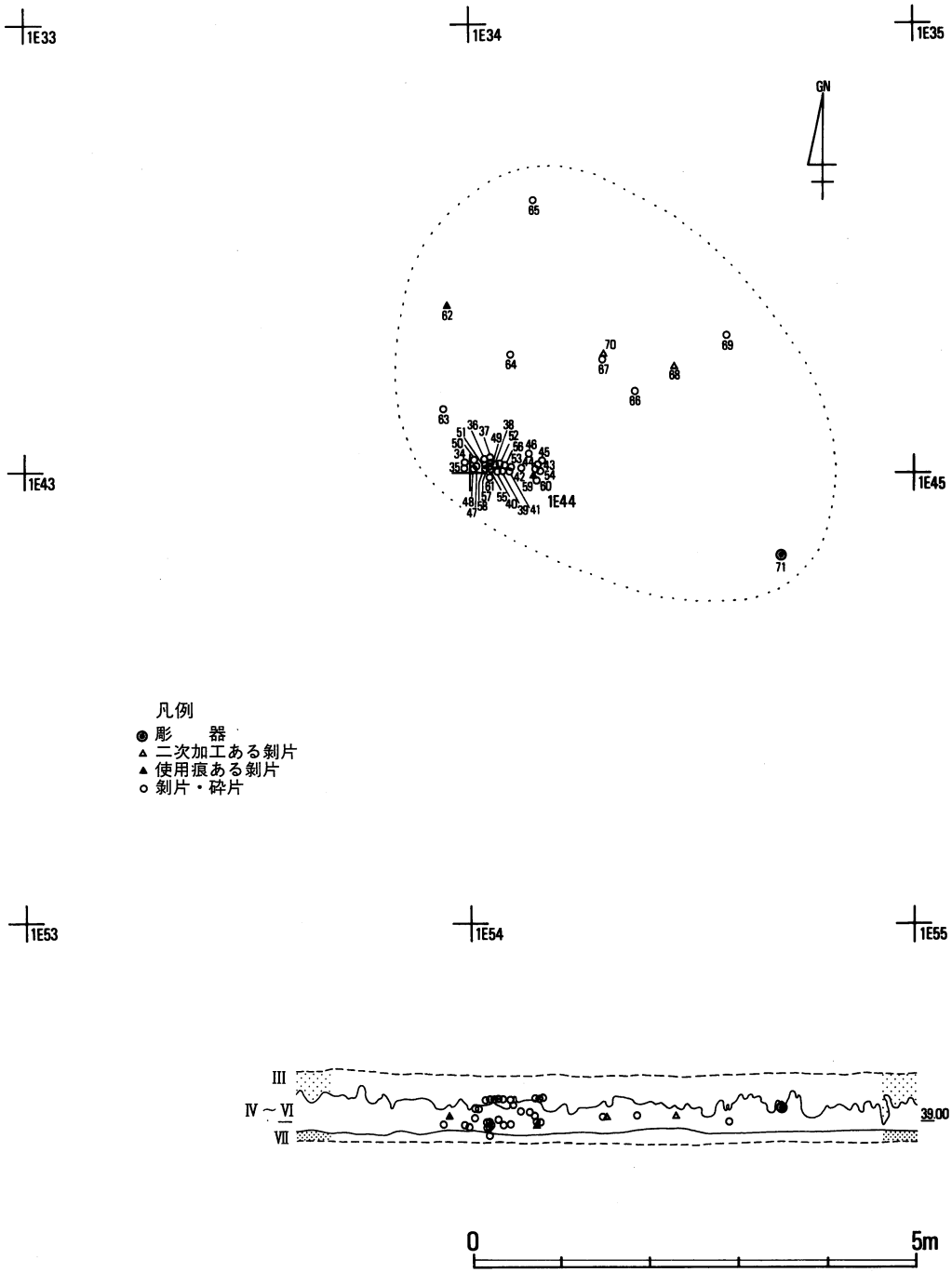
石材は、珪質頁岩が多用されていることに特徴がある。



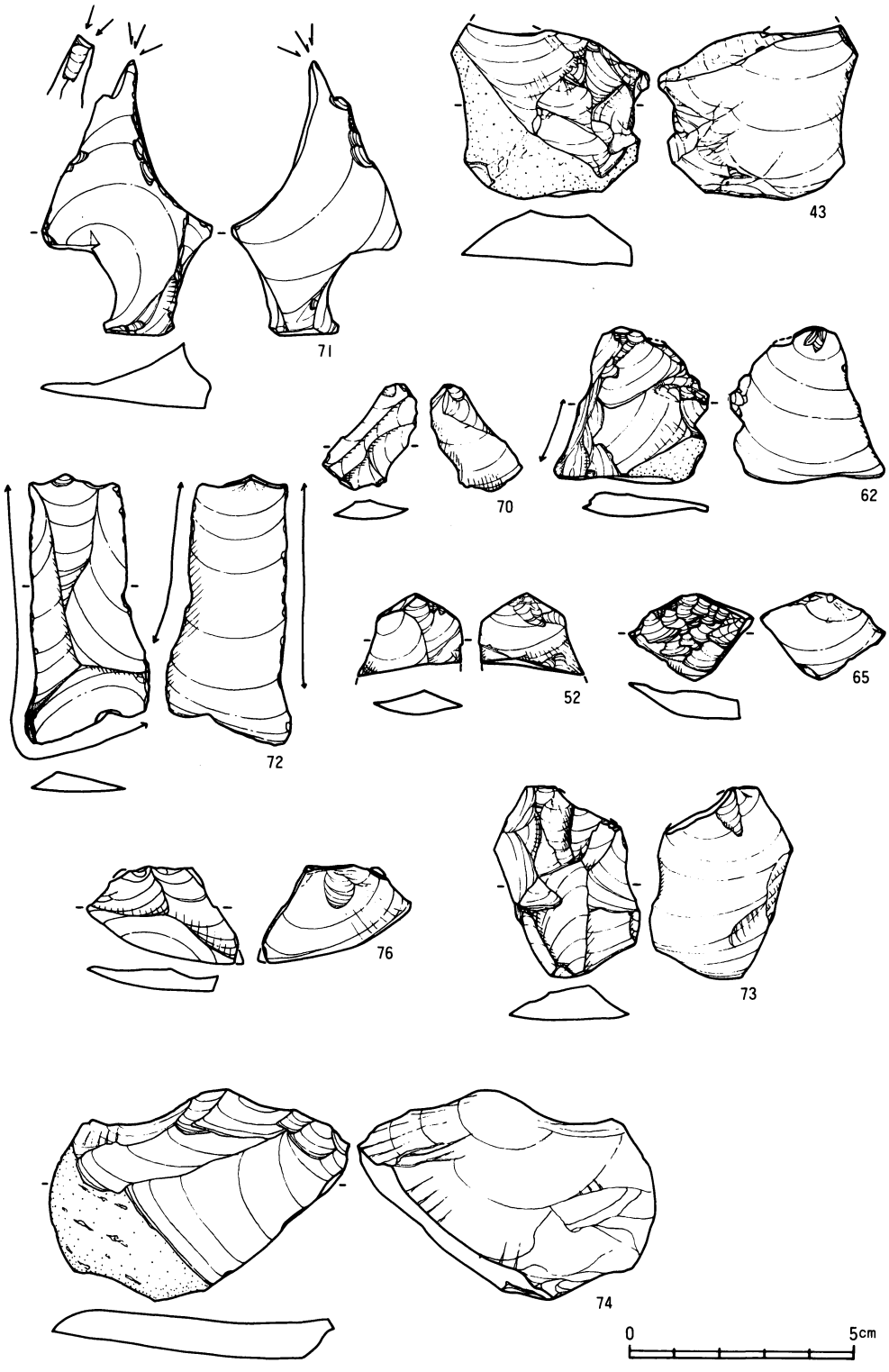
第80図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群石材別重量比

剝片剝離技術　打面調整は少し施され、その際の剝離面の稜を打点として剝片が剝取されていると考えられるが、剝片の形状には縦長と横広の2種が認められる。ただこれらの剝片とトゥールとの関係は明確なトゥールが彫器のみのため明らかではない。

調整加工技術　これも彫器以外に明確なトゥールを欠く状況のため判然としないが、二次加工ある剝片及び使用痕ある剝片の比重が高い石器群であることを考えると、素材となる剝片の



第81図　Rブロック遺物出土状況図（1/80）



第82図　Ⅳ～Ⅵ層主体石器群実測図（2/3）

第4表　IV～VI層主体石器群一覧表

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
34	R	砕片	珪質頁岩	0.9	1.2	0.2	0.1		1E33-4
35	R	砕片	珪質頁岩	(0.3)	(0.7)	(0.2)	0.02		1E33-5
36	R	剝片	珪質頁岩	(1.4)	(1.8)	(0.5)	0.8	100°	1E34-4
37	R	砕片	珪質頁岩	1.3	0.4	0.3	0.04		1E34-5
38	R	剝片	珪質頁岩	(1.0)	(1.0)	(0.4)	0.2	110°	1E34-6
39	R	砕片	珪質頁岩	(0.7)	(1.1)	(0.3)	0.15		1E34-7
40	R	砕片	珪質頁岩	0.9	0.8	0.2	0.1		1E34-8
41	R	剝片	珪質頁岩	(0.9)	(1.8)	(0.5)	0.6		1E34-9
42	R	剝片	珪質頁岩	2.5	1.5	0.3	0.6		1E34-10
43	R	剝片	珪質頁岩	(3.9)	(4.3)	(1.4)	24.7		1E34-11
44	R	剝片	珪質頁岩	(1.6)	(1.8)	(0.3)	0.5	120°	1E34-12
45	R	剝片	珪質頁岩	(1.4)	(1.6)	(0.4)	0.5	110°	1E34-13
46	R	剝片	珪質頁岩	(1.6)	(2.2)	(0.7)	1.3	130°	1E34-14
47	R	剝片	珪質頁岩	(0.9)	(1.2)	(0.3)	0.3	95°	1E34-21
48	R	剝片	珪質頁岩	0.9	1.6	0.1	0.1		1E34-22
49	R	剝片	珪質頁岩	(1.1)	(1.4)	(0.2)	0.15		1E34-23
50	R	砕片	珪質頁岩	(0.4)	(0.7)	(0.1)	0.01		1E34-24
51	R	砕片	珪質頁岩	(0.5)	(0.5)	(0.1)	0.01		1E34-25
52	R	剝片	珪質頁岩	(2.1)	(2.1)	(0.7)	2.0	110°	1E34-26
53	R	砕片	珪質頁岩	0.5	1.0	0.2	0.05		1E34-27
54	R	砕片	珪質頁岩	(0.3)	(0.8)	(0.1)	0.02		1E34-28
55	R	剝片	珪質頁岩	(0.8)	(1.6)	(0.3)	0.2		1E34-29
56	R	砕片	珪質頁岩	0.9	1.2	0.3	0.2		1E34-30
57	R	砕片	珪質頁岩	0.5	0.9	0.1	0.03		1E34-31
58	R	剝片	珪質頁岩	(1.1)	(2.5)	(0.3)	0.7		1E34-32
59	R	使用痕ある剝片	珪質頁岩	1.7	1.7	0.5	0.8	115°	1E44-4
60	R	剝片	珪質頁岩	(0.9)	(1.3)	(0.3)	0.3	110°	1E44-6
61	R	砕片	珪質頁岩	0.6	0.9	0.2	0.06		1E44-7
62	R	使用痕ある剝片	珪質頁岩	3.5	3.7	0.5	5.4	90°	1E33-6
63	R	剝片	珪質頁岩	1.0	1.5	0.3	0.4	105°	1E33-7
64	R	砕片	珪質頁岩	1.0	0.9	0.2	0.2		1E34-15
65	R	剝片	珪質頁岩	1.9	2.8	0.6	2.3	100°	1E34-16
66	R	剝片	珪質頁岩	(3.7)	2.0	0.9	5.5		1E34-17
67	R	砕片	珪質頁岩	0.8	1.4	0.3	0.2		1E34-18
68	R	二次加工ある剝片	珪質頁岩	(3.1)	5.0	2.2	21.0		1E34-19
69	R	剝片	珪質頁岩	(1.8)	(3.1)	(0.4)	1.9		1E34-20
70	R	二次加工ある剝片	黒曜石	2.5	1.4	0.4	1.2	100°	1E34-33
71	R	彫器	流紋岩	6.2	3.8	1.6	17.1		1E44-5
72	R	二次加工及び使用痕ある剝片	珪質頁岩	5.8	2.8	0.6	7.8	110°	1E44-8
73	ブロック外	剝片	流紋岩	4.1	3.3	0.8	8.4	115°	1E00-4
74	ブロック外	剝片	安山岩	(4.5)	(6.6)	(0.9)	26.0		1E34-2
75	ブロック外	打面再生剝片	流紋岩	3.7	2.9	1.2	11.2		1E45-4
76	ブロック外	剝片	シルト岩	2.0	3.5	0.5	3.4	120°	2D60-4

形状をあまり変更しないものと思われる。

編年的位置　空港№7遺跡A地点第6石器群（西川・西口他1984）、さらには本遺跡のSブロック出土石器群も近いものと思われ、武蔵野第ＩＣ期中頃、相模野第II期中頃に位置付けられる。

3　III層主体石器群

III層を主体とする石器群は、遺跡南東部の谷頭に面した緩斜面から谷に沿って18ブロック763点（石器・剥片類518点、礫245点）が検出された（第83・84図、図版22、第5表）。

これらは層位的にはソフトローム層を主体として出土したという共通性はあるものの、時間差のあるいくつかのグループに分かれるものと考えられるが、まずブロック別に検討した後にグループ分けをすることにする。

(1)　Aブロック（第85・91図、図版30）

出土状況　6Ｅ30グリッド付近から径3m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層中～下部である。

出土遺物　小規模な礫群（第1礫群、15点）が主体のブロックであり、石器・剥片類は小剥片のみ3点と少ない。

77・78・79はいずれも不定形の小剥片である。石材は77がチャートで他は流紋岩である。

(2)　Bブロック（第86図）

出土状況　6D48からの出土で径2m程の小礫群（第2礫群、12点）のみからなる。出土層位はIII層下部付近である。

(3)　Cブロック（第87・91図、図版23・30）

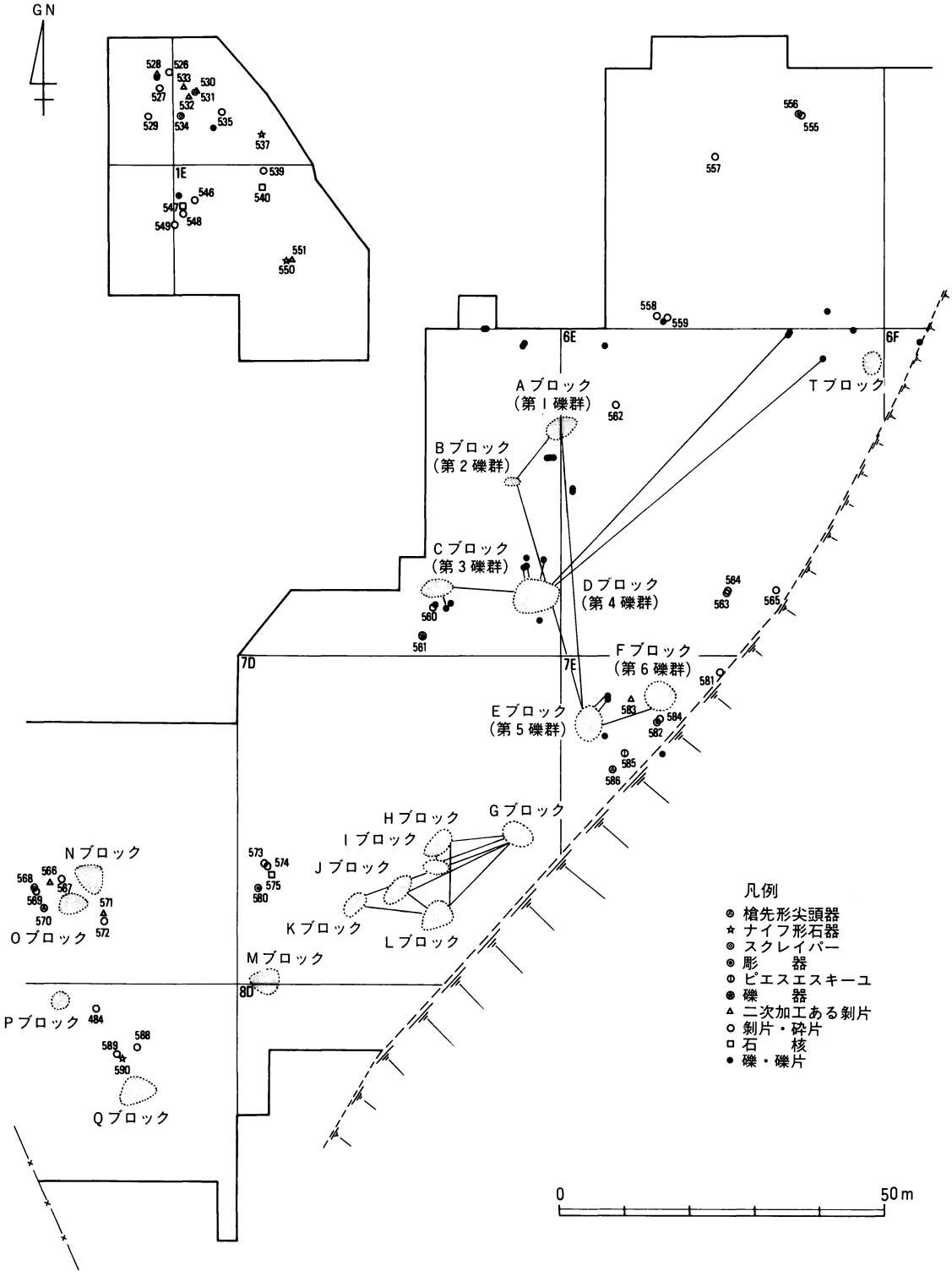
出土状況　6D76付近から径3～4m程の広がりをもって出土し、層位はIII層中～下部である。

出土遺物　このブロックも礫群（第3礫群、33点）が主体で、石器・剥片類は少なく、スクレイパー1点、二次加工ある剥片1点、その他剥片・砕片4点、計6点である。

83は礫面を打面とした小形の剥片の末端に傾斜の緩やかな刃部を作出したスクレイパーである。

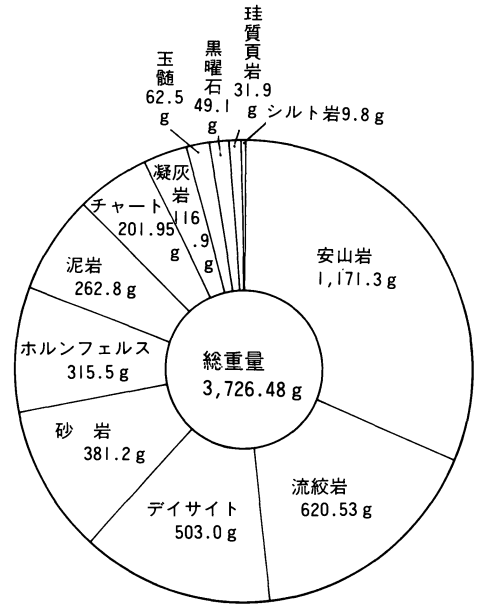
80・81・82・85はいずれも剥片で、81と85は接合するがともに礫面を打面としている。

技術的特徴　資料が少ないため多くを語ることは出来ないが、この6点に限ってみれば、礫



第83図　Ⅲ層主体石器群分布図（1/1000）

面を打面とするなど打面調整はほとんど行なわれず、幅広の不定形とも思える剥片を剥離していると考えられる。石材は81・82・85が砂岩、80がシルト岩、83が泥岩、84が流紋岩である。



第84図　III層主体石器群(石器・剥片類)石材別重量比

(4) Dブロック（第88・91図、図版23・30）

出土状況　6 D89を中心に径6 m程の範囲から出土、層位はIII層下部である。

出土遺物　やはり礫が多く（第4礫群、76点)、石器組成は、ナイフ形石器4点、二次加工ある剥片1点、石核4点、小石核1点、その他剥片・砕片20点、計30点である。

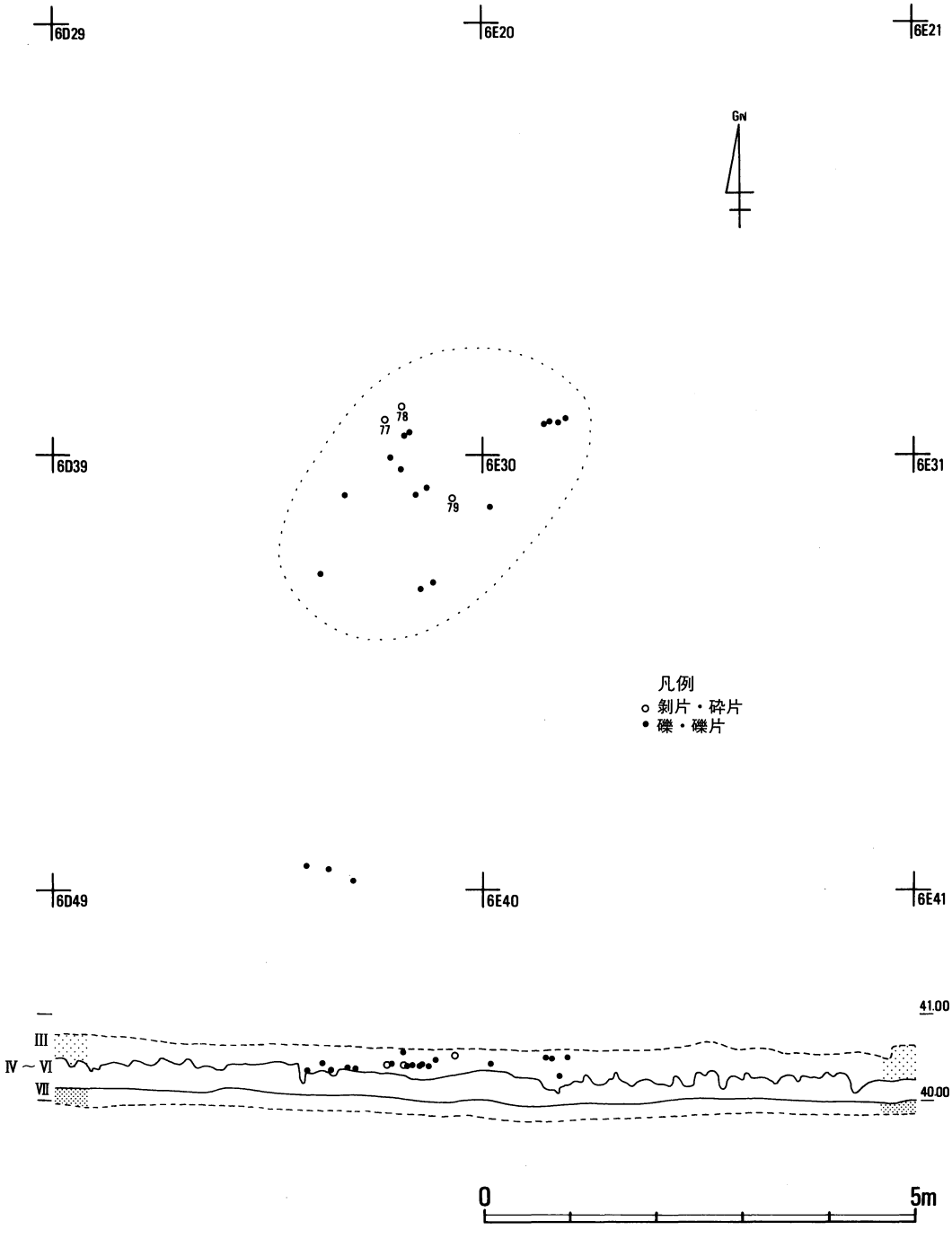
90と110はナイフ形石器である。90は小形の不定形な剥片を素材とし、基部両側縁及び背面先端右側を折断してそこにも調整剥離を施している。このうち左側縁基部の加工のみ背面から主要剥離面へ施している。打点部は除去されている。110は横広の剥片を素材として打点部を除去するとともに、剥片の末端を折断して背面右側縁基部には折断面から背面に向って緩やかな調整剥離を施して、いわゆる切出形のナイフ形石器としている。

100は2 cmにも満たない小形の石核である。打面は既設の剥離面を利用していると思われるが、剥取される剥片は非常に小さなものである。

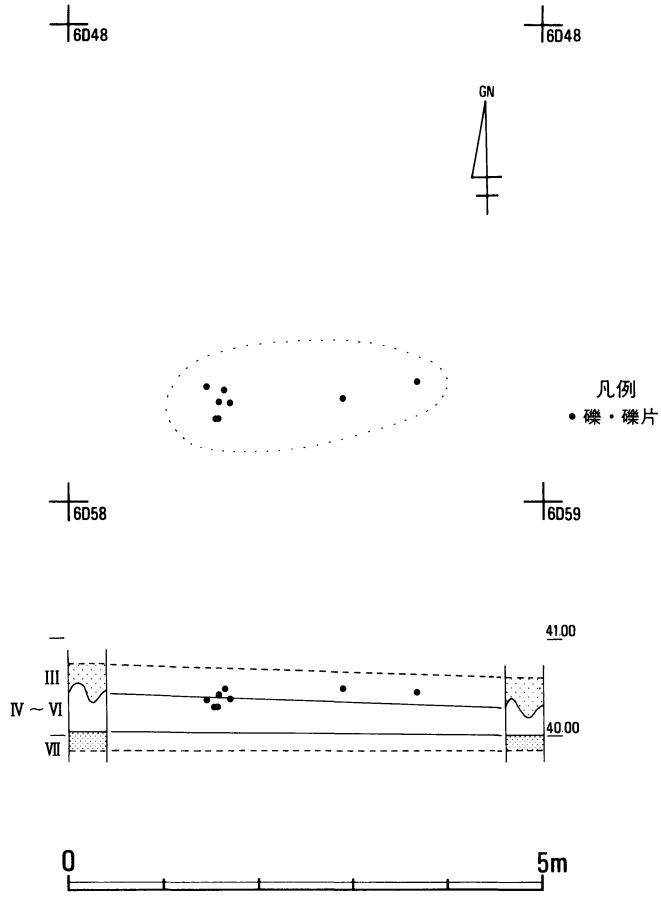
95は頭部調整が施されているずんぐりとした剥片である。

この他2点の小形のナイフ形石器があるが、いずれも横広の剥片を素材として打点部を右に置くいわゆる切出形のナイフ形石器である。また、石核と考えられるものが4点出土しており、そのうち2点は安山岩で既設の剥離面を打面として不定形の小剥片を剥取している。他の1点は平たい砂岩の円礫を使用して、打面に礫面をもつ幅広の剥片を剥取している。残る1点は珪質頁岩製で、節理面と思われる打面の周囲から小剥片を剥取している。

技術的特徴　横広及び小形の剥片を素材として、折断技法をもつ基部加工のナイフ形石器を主体とする石器群と考えられる。石材は安山岩13点、砂岩6点、チャート4点、流紋岩3点、泥岩2点、珪質頁岩・黒曜石各1点である。



第85図　Aブロック遺物出土状況図（1/80）



第86図　Bブロック遺物出土状況図（1/80）

(5)　**Eブロック**（第89・91図、図版24・30）

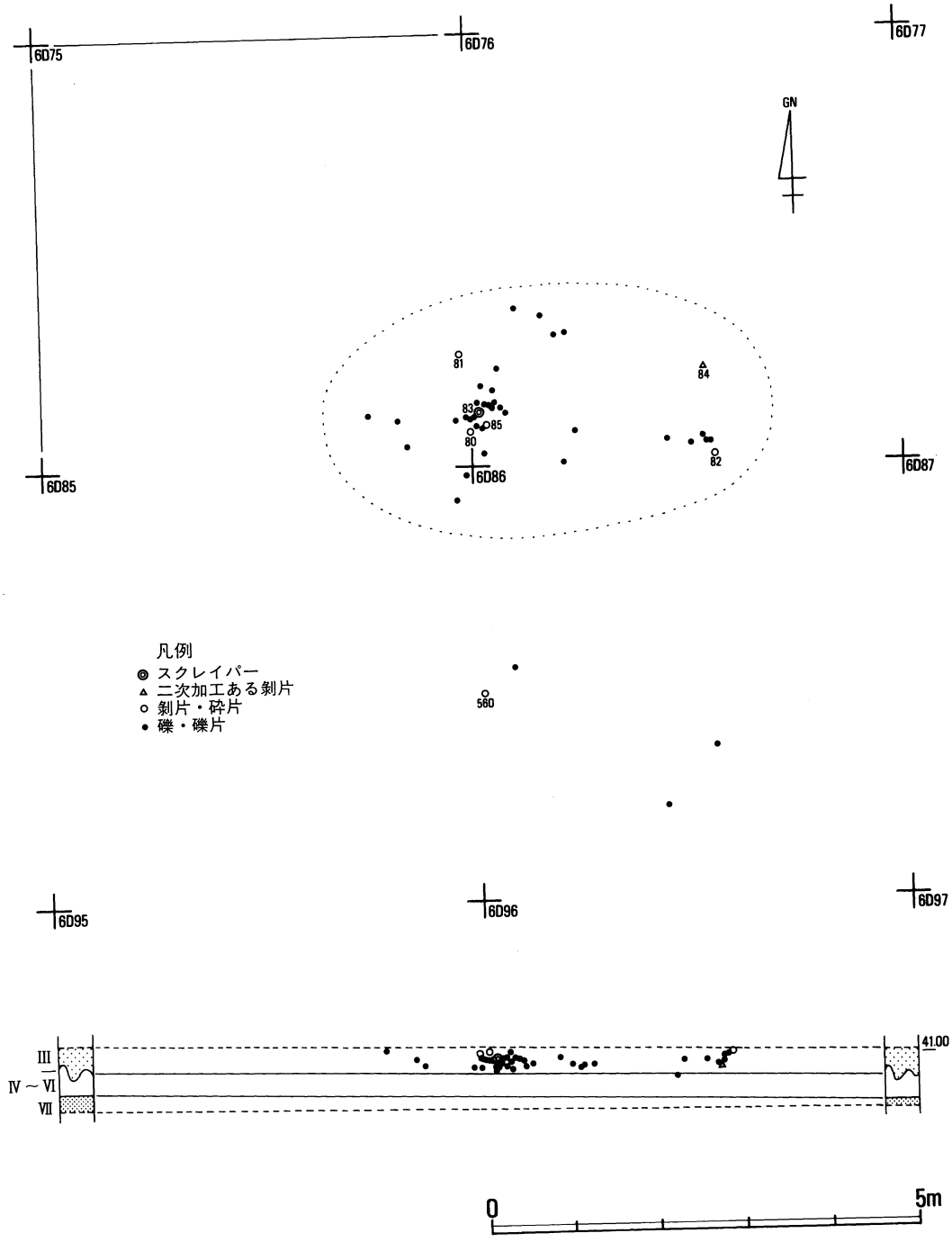
出土状況　7E20グリッド付近からの出土で、径3～4mの広がりをもつ。出土層位はIII層中部である。

出土遺物　石器群の組成は、ナイフ形石器2点、スクレイパー2点、石核1点、その他剥片・砕片16点、計21点である。また礫は21点出土している（第5礫群）。

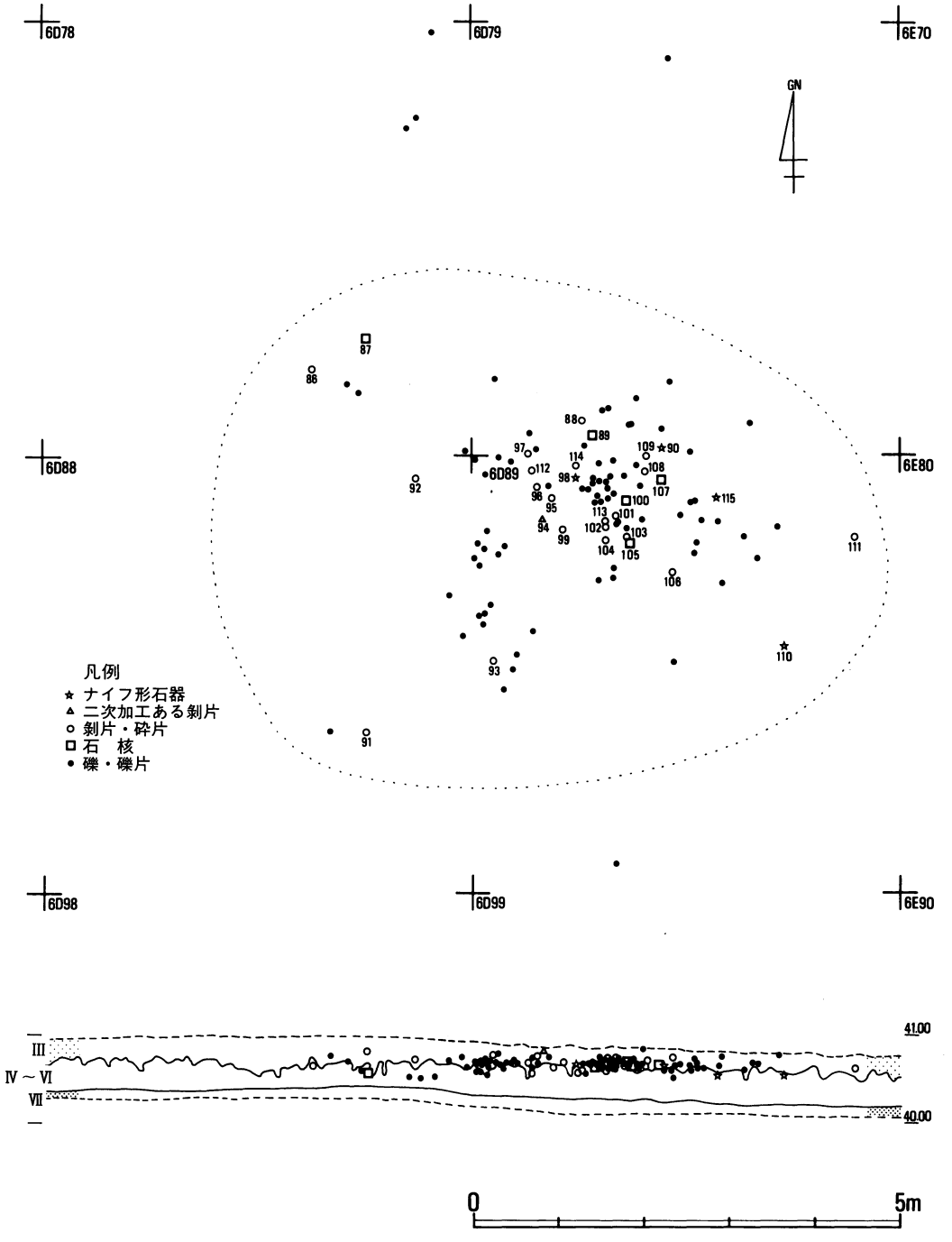
116・122はナイフ形石器である。116はやや縦長の剥片を素材に用いていると思われるが、その末端部を折断し、打面から主要剥離面左側縁に対して背面から急斜な調整剥離を施している。形態的には刺突具というよりも切削用と考えられているものである。122は横長の小剥片を素材として、打面側及び基部を主体に調整剥離を施した小形のいわゆる切出形のナイフ形石器である。

135は打面と背面の末端に礫面をもつ幅広の剥片である。

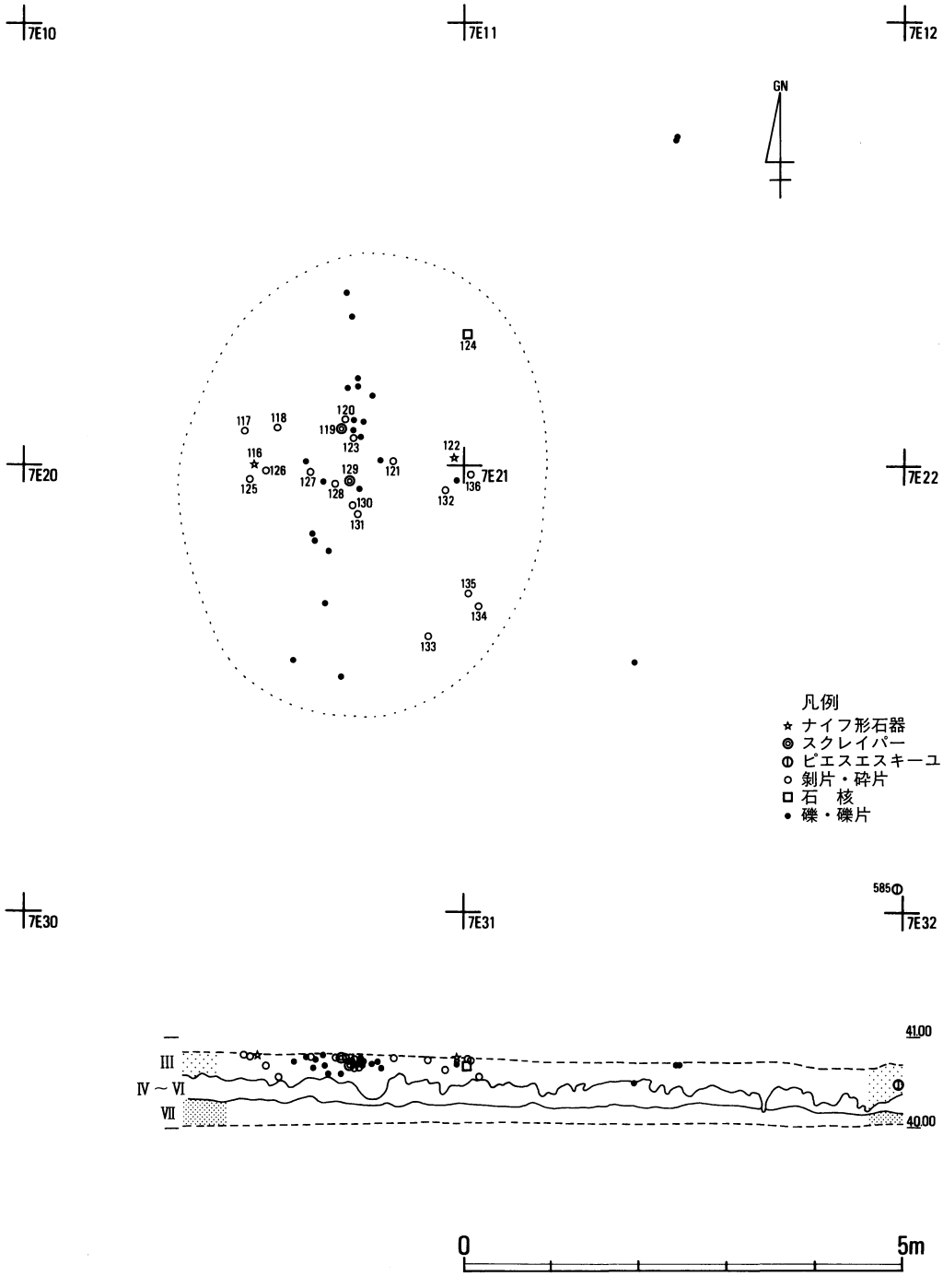
この他不定形の剥片の一側縁に刃部を付したスクレイパーが2点出土している。



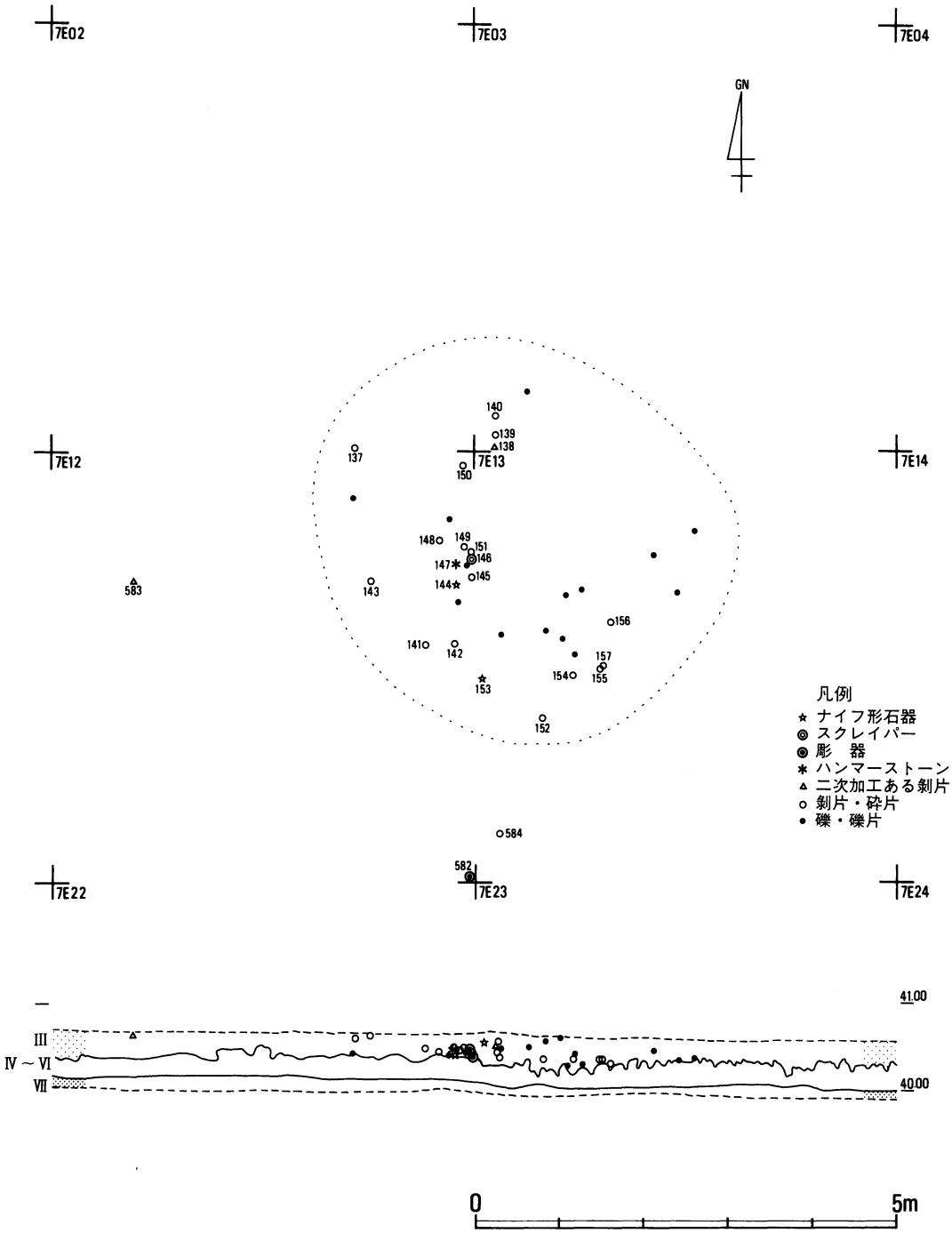
第87図　Cブロック遺物出土状況図（1/80）



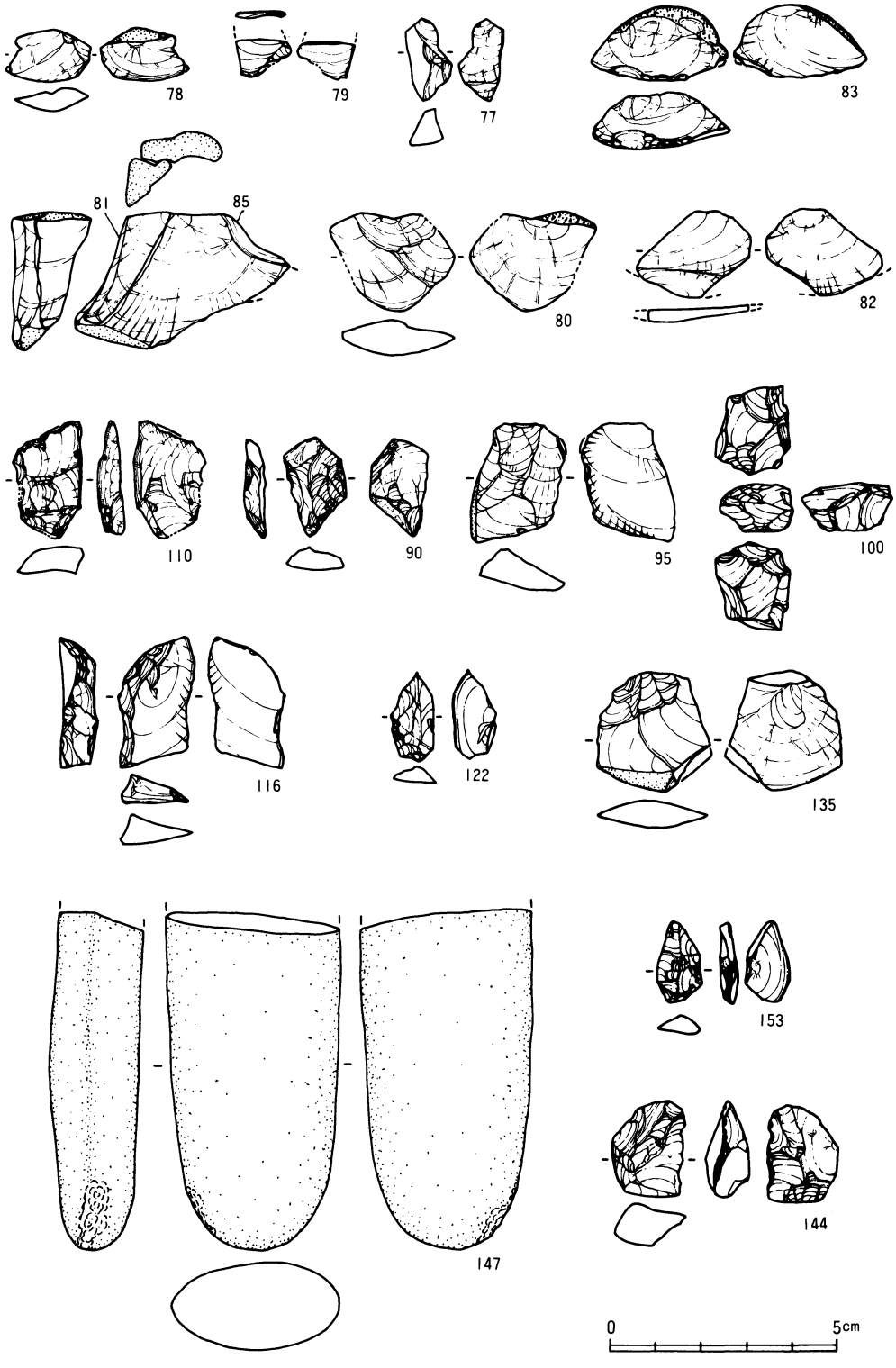
第88図　Dブロック遺物出土状況図（1/80）



第89図　Eブロック遺物出土状況図（1/80）



第90図　Fブロック遺物出土状況図（1/80）



第91図　A～Fブロック出土石器実測図（2/3）

技術的特徴　特に打面調整を行なわず、礫面などを打面として不定形とも思える幅広の小剝片を剝離していると思われるが、出土したナイフ形石器の素材となるようなものもみられず明らかではない。石材は砂岩11点、チャート７点、ホルンフェルス２点、流紋岩１点である。

(6)　Ｆブロック（第90・91図、図版24・30）

出土状況　７Ｅ13グリッドを中心に径４ｍ程の広がりをもって出土し、層位はIII層中～下部である。

出土遺物　石器組成は、ナイフ形石器２点、スクレイパー１点、ハンマーストーン１点、二次加工ある剝片２点、その他剝片・砕片18点、計24点である。また、礫は18点出土している（第６礫群）。

144と153はナイフ形石器である。153は横長の小剝片の背面打面部及び基部を中心に調整剝離が施された小形のいわゆる切出形のナイフ形石器である。144は厚みのある小形の幅広の剝片を素材として、先端の一部を残し他の縁辺に調整剝離を加えたいわゆる切出形のナイフ形石器である。

147は上部を欠損しているが、細長く平たい円礫の一端に打痕が認められるハンマーストーンである。

この他小剝片に刃部を付したスクレイパーが１点ある。

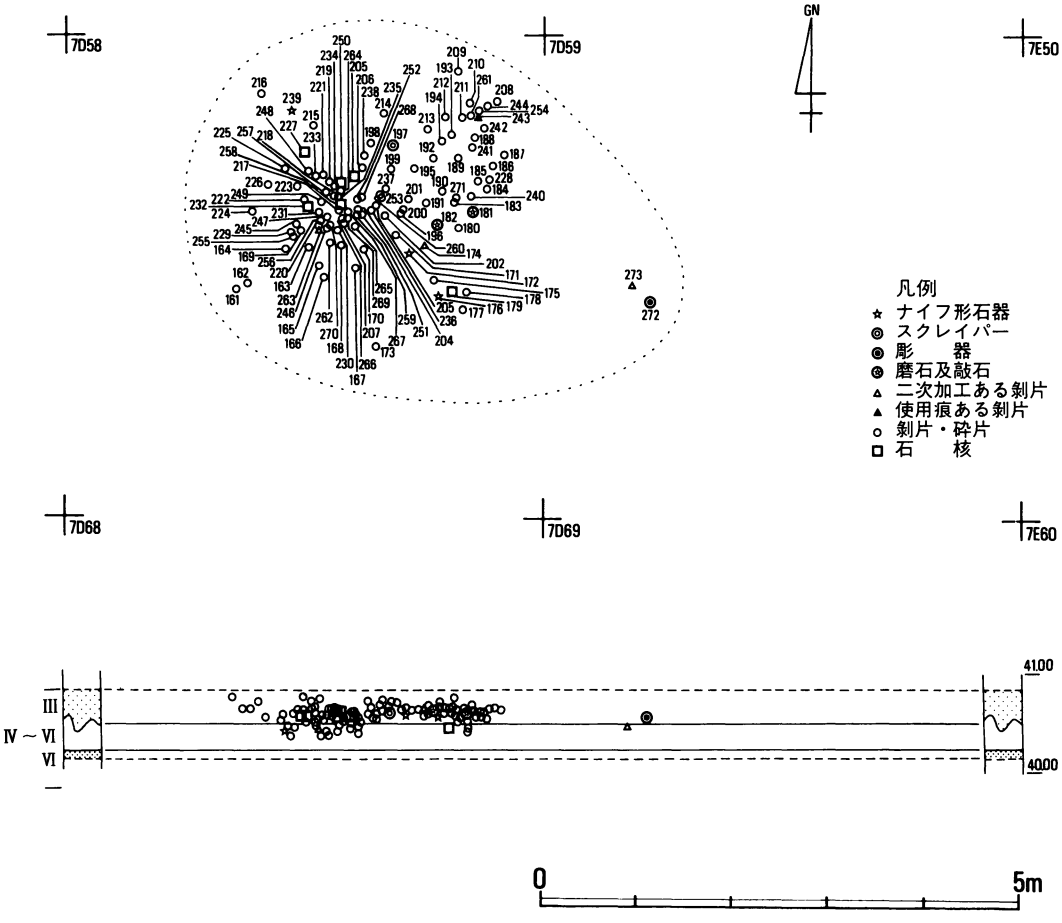
技術的特徴　Ｅブロックと近似して、ほとんど打面調整を施すことなく幅広の小剝片が剝離され、これが小形のいわゆる切出形のナイフ形石器や小形のスクレイパーの素材となっているようだ。石材は砂岩９点、チャート７点、流紋岩５点、ホルンフェルス・シルト岩・泥岩各１点である。

(7)　Ｇブロック（第92～94図、図版25・31・32）

出土状況　７Ｄ58グリッドを中心に径４ｍ程からかなり密集して石器群が出土した。出土層位はIII層最下部前後である。

出土遺物　石器組成は、ナイフ形石器３点、スクレイパー１点、彫器１点、磨石及び敲石２点、二次加工ある剝片３点、使用痕ある剝片１点、石核６点、その他剝片・砕片97点、計114点である。

172・176はナイフ形石器である。172は背面に小高い稜をもつ縦長の剝片を素材として、主要剝離面側からだけでなく、この稜からも調整剝離を施している。ただ調整加工は稜の左側のみに限られ、右側には施されていない。断面の形状は部厚な三角形をなし、先端には剝片剝離以前に石核に対して施された打面とは反対方向からの調整剝離がみられる。176も部厚い縦長の剝片が素材に用いられ、先端の１側縁を除き主要剝離面側から急斜な調整剝離が施されている。



第92図　Gブロック遺物出土状況図（1/80）

断面の形状は三角形をなし、先端部には172と同様の剥片剥離以前の石核調整剥離がみられる。

263は背面の末端と右側縁に調整剥離が施された縦長の剥片であるが、上下を逆にしてナイフ形石器としてもよいかもしれない。

243は背面左側縁に微細な使用痕のある縦長剥片であるが、これも172同様背面の中央付近に小高い稜をもつ。

178・192・269・274はいずれも剥片であるが、192は石刃状、269と274はそれに近いものである。

181と182は磨石兼敲石であり、大きさが異るだけでどちらも石材はデイサイトを使用し、よく似ている。

技術的特徴　石核において打面の位置をほとんど変えずに剥片剥離を行なうものと、打面調整を行ないながら石核を左右に回転させて打面を移動させるものとの2種がみられる。また、打角（剥離角）は110°～115°前後のものが多い。石材は安山岩33点、流紋岩22点、チャート21

点、玉髄17点、泥岩９点、デイサイト２点、シルト岩１点である。

⑻　Ｈブロック（第95・99図、図版25・33）

出土状況　７Ｄ56グリッドを主体に４×2.5m程の広がりをもち、さらに遺物の集中度から大きく２個所に分け、北側をＨａ、南側をＨｂと呼称する。出土層位はⅢ層下部付近である。なお、Ｈブロックに接して南側にはＩブロックがある。

出土遺物　Ｈａブロックからはナイフ形石器１点、二次加工ある剥片１点、石核２点、その他剥片・砕片７点、計11点の石器群、それに礫が１点出土した。

284もＧブロックの172同様背面に１条の小高い稜をもち、主要剥離面からと背面の稜からの両方から調整剥離を施している。そして背面の稜の左側のみに調整を施して、右側は素材のままである点も172によく似ている作りである。

この他Ｈａブロックからは２点の石核が出土しており、いずれも背後に礫面を残し、数回の剥離により打面を作出している。打面調整は顕著ではない。これからは主に縦長剥片を剥取している。

Ｈｂブロックからはナイフ形石器４点、二次加工ある剥片１点、石核１点、その他剥片・砕片５点、計11点の石器群が出土している。

289は厚みのあるやや寸づまりの縦長剥片の末端に調整剥離を施したナイフ形石器である。

293はやや幅広の剥片で背面の末端には二次加工の小剥離があり、主要剥離面右側縁には微細な使用痕がみられる。

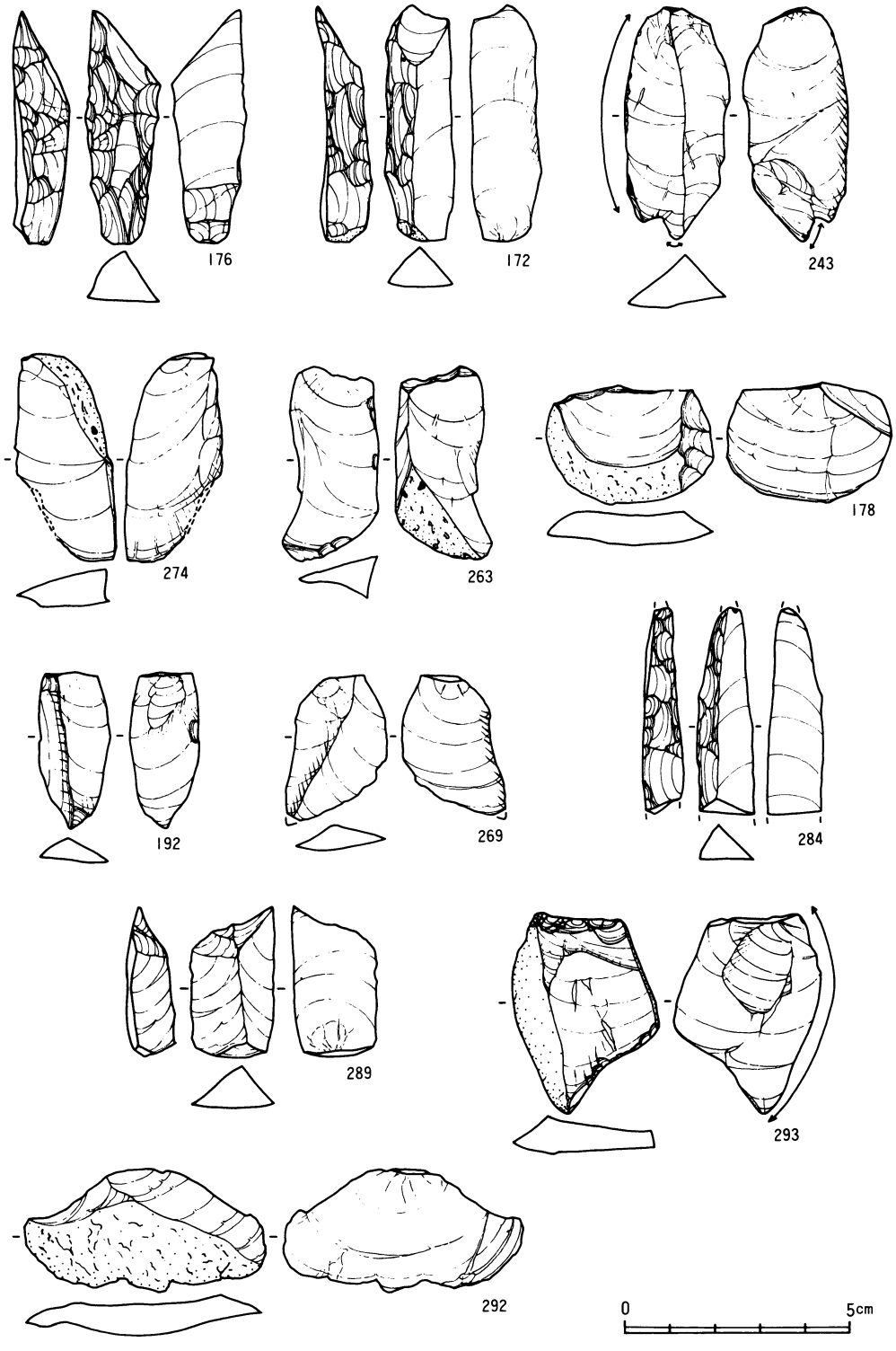
292は横長の剥片で背面には大きく礫面を残している。

この他石核が１点出土している。それは既設の剥離面を打面として交互に剥離を繰り返して小形不定形の剥片を剥取するもので、残核は小形のチョッピングトゥールのような形状をしている。

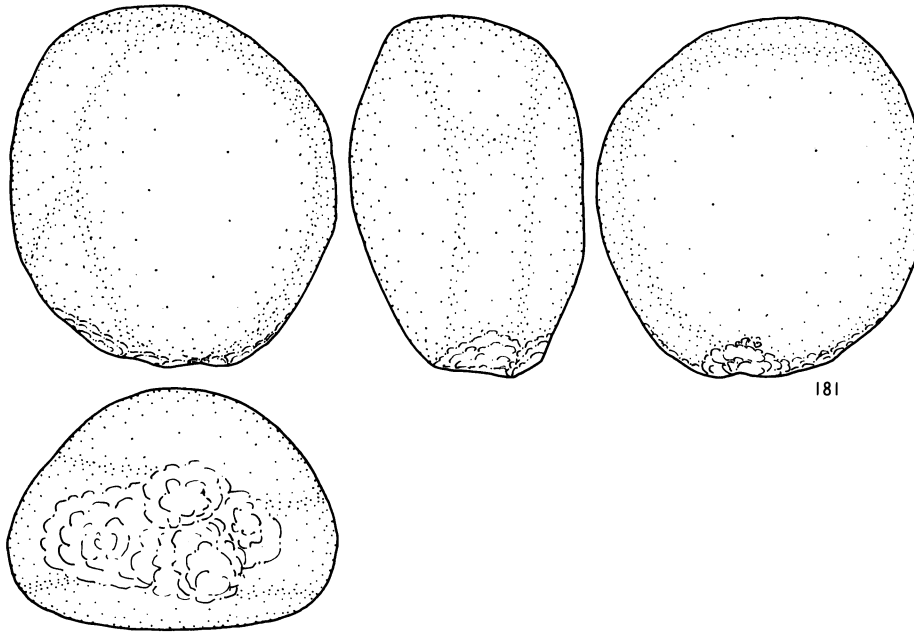
ＨａブロックとＨｂブロックの組成はよく似た内容であるが、石材はＨａブロックが流紋岩６点、安山岩５点と２種のみで構成されているのに対して、Ｈｂブロックは安山岩５点、泥岩５点、流紋岩１点という違いがみられる。

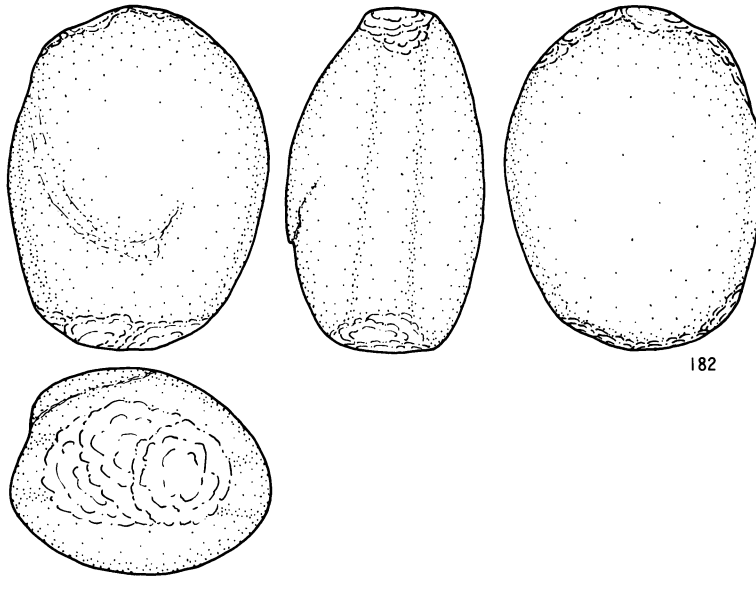
技術的特徴　ここではＨａとＨｂを合わせＨブロックとして検討する。

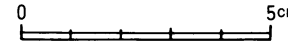
石核からは異る２種の剥片剥離のあることが窺われたが、横長（広）の剥片の存在からそれらを目的として剥離する技術の存在することが推定される。



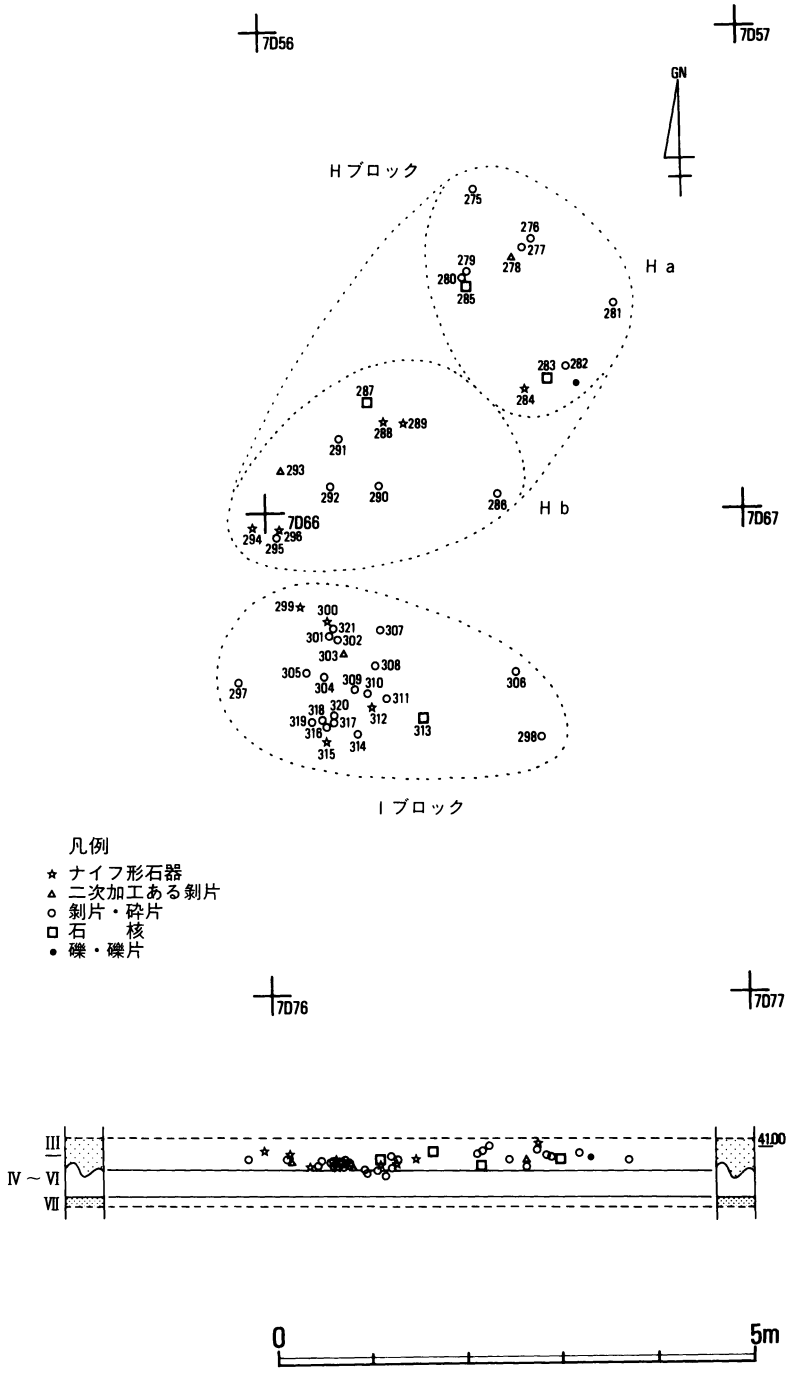
第93図　G・Hブロック出土石器実測図（2/3）







第94図　Gブロック出土石器実測図（2/3）



第95図　H・Iブロック遺物出土状況図（1/80）

⑼　**Ｉブロック**（第95・99図、図版33）

出土状況　７Ｄ66グリッドを中心にＨブロックの南に接して出土した。出土層位はIII層下部である。

出土遺物　石器組成は、ナイフ形石器４点、二次加工ある剝片１点、石核１点、その他の剝片・砕片19点、計25点である。

315はナイフ形石器の下半部で上半部の288はＨｂブロックに所属する。この資料は主要剝離面が図上では中央の稜の左側に来るという少し変わった用い方をしている。ただ中央に小高い稜をもち、それの左右どちらか一方にのみ調整剝離を施している（この場合右側にのみ）など、Ｇブロックの172やＨａブロックの284とほぼ同様な作りである。

この他接合資料Ａ（第106図、図版36）を構成する299・305・307などがある。

技術的特徴　２種類の剝片がみられ、ひとつは接合資料Ａや288と315が接合するナイフ形石器のような縦長の剝片で、もうひとつは横広の不定形の剝片である。前者はナイフ形石器の素材を提供していると思われるが、後者は他の器種がほとんどないため明らかにしえないが、Ｌブロック出土のスクレイパー（第99図385・387）のようなものとの結び付きが考えられる。石材は安山岩15点、泥岩８点、流紋岩１点である。

⑽　**Ｊブロック**（第96・99図、図版26・33）

出土状況　７Ｄ75グリッドを中心に径３～４ｍ程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層下部である。

出土遺物　二次加工ある剝片１点、打面再生剝片１点、その他の剝片•砕片７点、計9点、それに礫３点が出土した。

325は背面に大きく礫面を残した剝片である。

この他打面再生剝片は末端に礫面が残るもので、２点の縦長剝片を剝取したことが窺われる。

技術的特徴　資料数が少なくあまり多くを語れないが、背後に礫面を残す石核の存在が推定される。石材は安山岩４点、泥岩２点、玉髄・流紋岩・砂岩各１点である。

⑾　**Ｋブロック**（第96・99図、図版26、33）

出土状況　７Ｄ73グリッドから径３～４ｍ程の広がりをもって出土した。層位はIII層下部である。このブロックも集中度から大きく２個所に分けられ、北側をＫａ、南側の密度の高い方をＫｂと呼ぶことにする。

（Ｋａブロック）

出土遺物　石核３点、剝片・砕片18点、計21点が出土した。

技術的特徴　石核は３点とも既設の剝離面またはその交点を打面として不定形の剝片を剝取

するもので、そのうち２点は厚みのある剝片を石核にしている。

石材は安山岩10点、流紋岩６点の他は珪質頁岩・泥岩・チャート・玉髄・デイサイト各１点である。

（Ｋｂブロック）

出土遺物　ナイフ形石器１点、石核４点、剝片・砕片９点、計14点である。

363は下半を欠損したナイフ形石器で、縦長の剝片を素材に用いていると思われる。

技術的特徴　石核は４点とも背後に礫面を残した単設打面で、あまり打面調整を施すことなくやや幅広で寸づまりのものあるいは縦長に近いものを剝取している。

石材は安山岩10点、流紋岩４点である。

ここでＫａとＫｂを較べてみると、組成においては類似した内容を示すが、石材はＫｂが２種で構成されるのに対して、Ｋａは主体となる２種の他１点づつ５種のものが混じっている点異る。また、石核にも個々のブロックのところで検討したように違いがみられる。この剝片剝離技術上の相違が同一石器群が本来合わせもつものかどうかさらに検討を要するところである。

⑿　Ｌブロック（第97・99・106図、図版27・33・36）

出土状況　７Ｄ76グリッドを中心に径４ｍ程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層中～下部で下部が主体。

出土遺物　ナイフ形石器３点、角錐状石器４点、スクレイパー２点、二次加工ある剝片４点、石核１点、その他剝片・砕片40点、計54点の石器群と礫１点が出土した。

386は縦長剝片の末端に調整剝離を施したナイフ形石器である。打面部を欠くが、欠損ではなく折断により除去したものと考える。

395・399・405は接合して角錐状石器となるもので、ややねじれた縦長の剝片を素材とし、主要剝離面から両側縁全体に角度のあるやや鋸歯状の調整剝離を施している。背面中央には平坦な面が残り、断面は台形状を呈する。

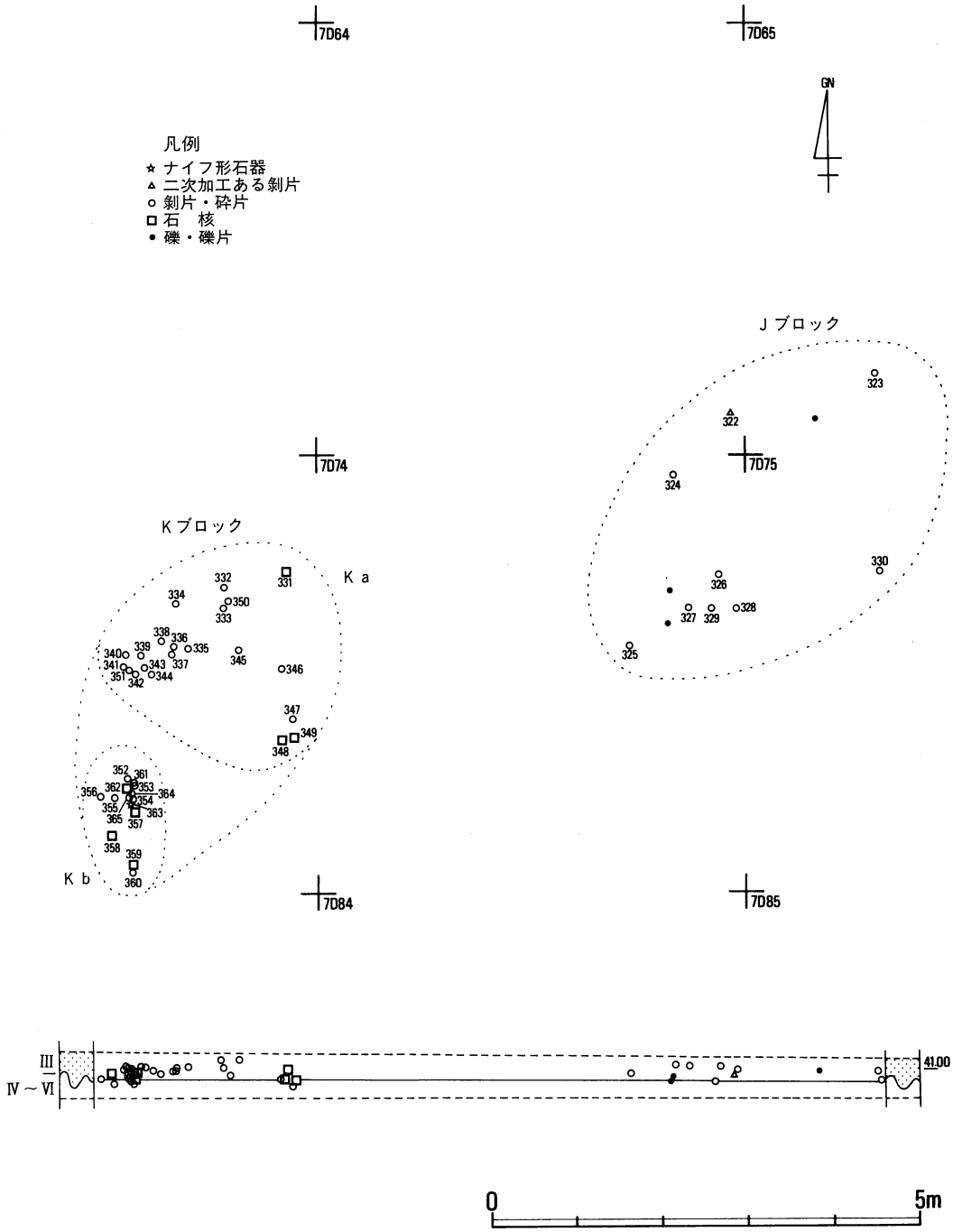
416も縦長剝片を素材とした角錐状石器で、作りは前述のものとよく似ているが、先端は尖り、背面上の平坦な面も少ない。また、主要剝離面基部にも調整剝離が施されている。

385と387は接合してスクレイパーとなるものである。横広の剝片の末端に傾斜のあるやや鋸歯状の刃部を作出している。

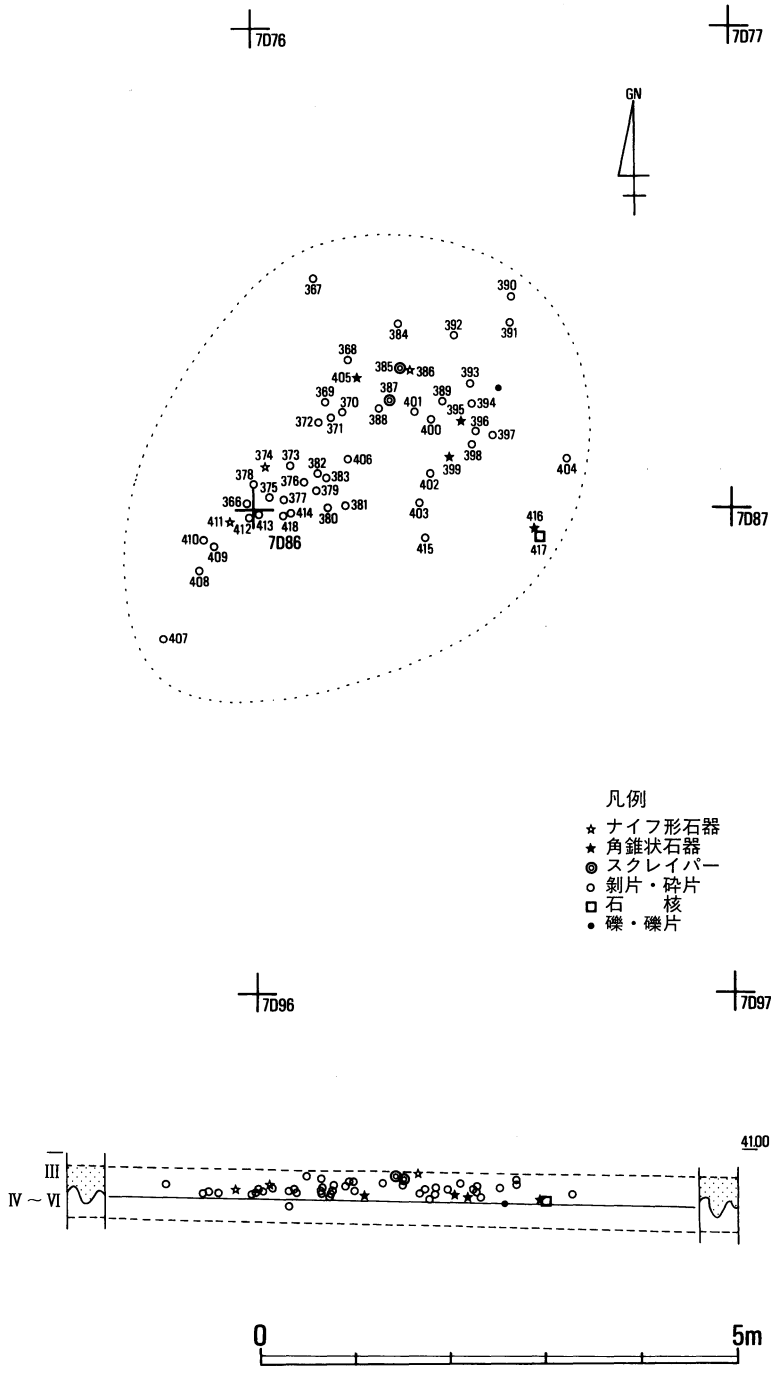
397は打面再生剝片である。背面に残る旧打面は平坦な１枚の剝離面からなる。

371は背面左側縁部に礫面を残す縦長剝片である。

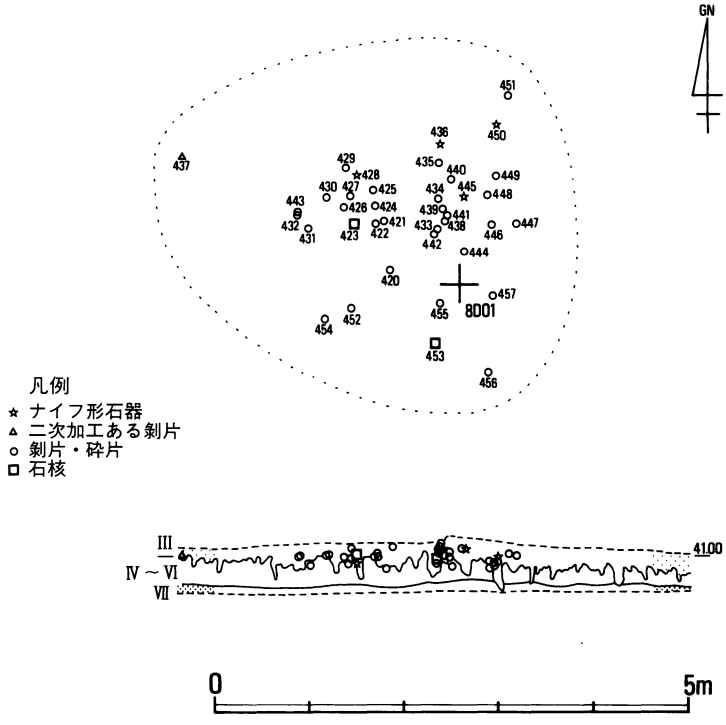
この他本ブロックのみからなる接合資料Ｂ（第106図、図版36）があるが別項でふれることにする。



第96図　J・Kブロック遺物出土状況図（1/80）



第97図　Lブロック遺物出土状況図（1/80）



第98図　Mブロック遺物出土状況図（1/80）

技術的特徴　剥片剥離においては縦長剥片と横長剥片各々を生産する技法が看取され、それがまた前者はナイフ形石器や角錐状石器と後者はスクレイパーと結びついているらしいことがわかる。そして調整加工は鋸歯状の調整剥離が行なわれている。

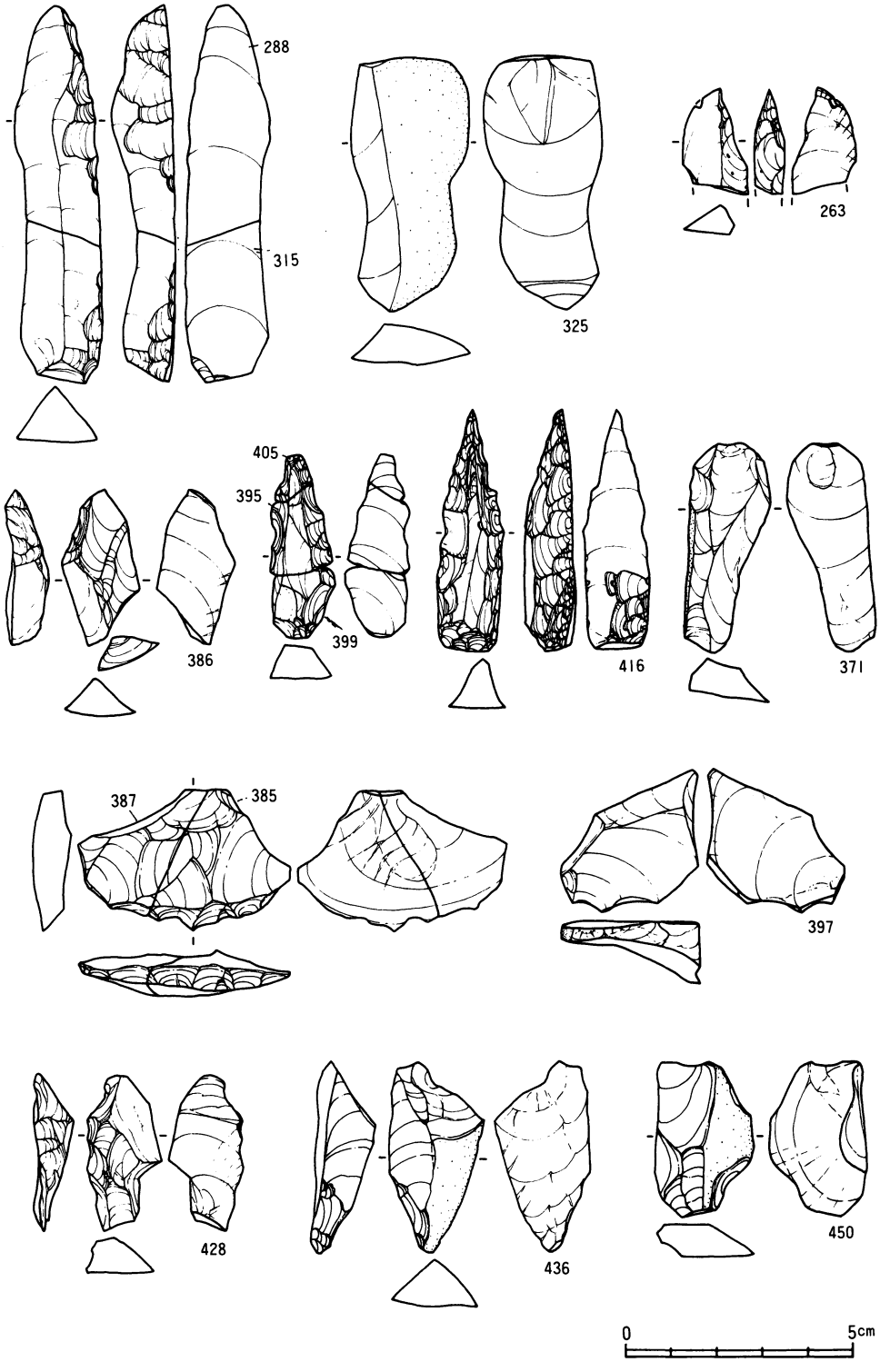
石材は安山岩23点、凝灰岩16点、砂岩６点、泥岩４点、流紋岩３点、珪質頁岩１点である。

(13)　Mブロック（第98・99図、図版33）

出土状況　７D90グリッドを中心に径３～４m程の広がりをもって出土した。層位はIII層下部である。

出土遺物　ナイフ形石器４点、二次加工ある剥片１点、石核２点、その他剥片・砕片31点、計38点である。

428・436・450はいずれもナイフ形石器である。428は左側縁にのみ調整剥離を施したもので、背面基部は石核上においてすでに薄く調整されたものと考える。436は縦長剥片の打面部をナイフ形石器の先端部としたもので、調整剥離を施して打面部を除去している。450は幅広の剥片を素材としたもので打面は除去されている。



第99図　H～Mブロック出土石器実測図（2/3）

技術的特徴　剝片には良好な縦長剝片が見当らず、横広の不定形な剝方が多い。また、ナイフ形石器にはやや縦長なものと横広のものとの両者の剝片を素材として用いている。

石材は全て安山岩である。

⒁　Nブロック（第100・104図、図版34）

出土状況　7C65～75グリッドにかけて分布し、径4m程の広がりをもつ。出土層位はIII層上部である。このブロックには密な部分とまばらな部分がみられるため、前者をNb、後者をNaと呼称する。

（Naブロック）

出土遺物　細石刃1点、二次加工ある剝片1点、その他剝片・砕片6点、計9点の石器剝片類と2点の礫がある。

458は黒曜石の細石刃である。長さ2.8cm、幅0.6cmと細長いもので、両側縁には使用痕と思われる微細な剝離痕がある。

その他は不定形の剝片のみである。

石材は黒曜石・ホルフェルス各3点、チャート・玉髄・安山岩各1点である。

（Nbブロック）

出土遺物　石核1点、剝片・砕片6点、計7点である。

470は泥岩の剝片で背面左側縁部に礫面が残る。

また、石核が1点出土しており、既設の剝離面を打面として小形不定形の剝片を剝取している。

石材は黒曜石・チャート各2点、泥岩・流紋岩・ホルンフェルス各1点である。

NaとNbを較べると資料的に制約され、技術的なものは検討しにくいが、石材とともに大差のないことが感じられる。

⒂　Oブロック（第100・104図、図版34）

出土状況　Nブロックの南東に接して7C74グリッドを中心に径4m程の範囲から出土したがあまりまとまりをもたない。出土層位はIII層上部である。

出土遺物　細石刃核1点、ピエスエスキーユ1点、二次加工ある剝片2点、その他剝片・砕片6点、計10点の石器・剝片類と礫4点がある。

477は黒曜石の細石刃核である。背後に礫面を残し、高さは2.2cmである。Nブロック出土の細石刃と同一の石器群ではないかと推定されるが、この2点のみの比較では細石刃の長さが異っている。

482は黒曜石のピエスエスキーユである。主要剝離面左上に打点部が円形に残存している。

474は流紋岩、480は黒曜石で、共に広く平坦な打面を残しており、打角(剝離角)は120～130°を測る。

その他は不定形の剝片のみである。

石材は黒曜石７点の他は流紋岩・泥岩・安山岩が各１点である。

⑯　**Ｐブロック**（第101・104図、図版27・34）

出土状況　8Ｃ04グリッドから出土し、径３ｍ程の広がりをもつ。出土層位はIII層中部である。

出土遺物　ナイフ形石器９点、二次加工ある剝片１点、石核２点、その他剝片・砕片８点計20点である。

484～503は全て小形のナイフ形石器である。

486・503はどちらも小形幅広の剝片を素材とし、打面を横位置に置くもので、水平な１側縁を先端としている。486は左側縁にのみ調整剝離を施している。503は背面には先端を除く側縁全周に、主要剝離面では先端部にわずかに調整剝離を施している。また、この２点の打面にはこれを剝取する時の打点部に接してもう１つの打点部が残っており、この２点が剝片を石核として剝取されたことがわかる。

487・494は幅広の、496は打面とねじれた関係のやはり幅広の剝片が素材となっている。そしていずれも打面部は除去されている。494・496はどちらも先端の１側縁を除く全周に主要剝離面から調整剝離を施している。487は背面に左側縁から１つの大きな剝離が施され、打面部が除去されるとともに、器体を薄くしている。

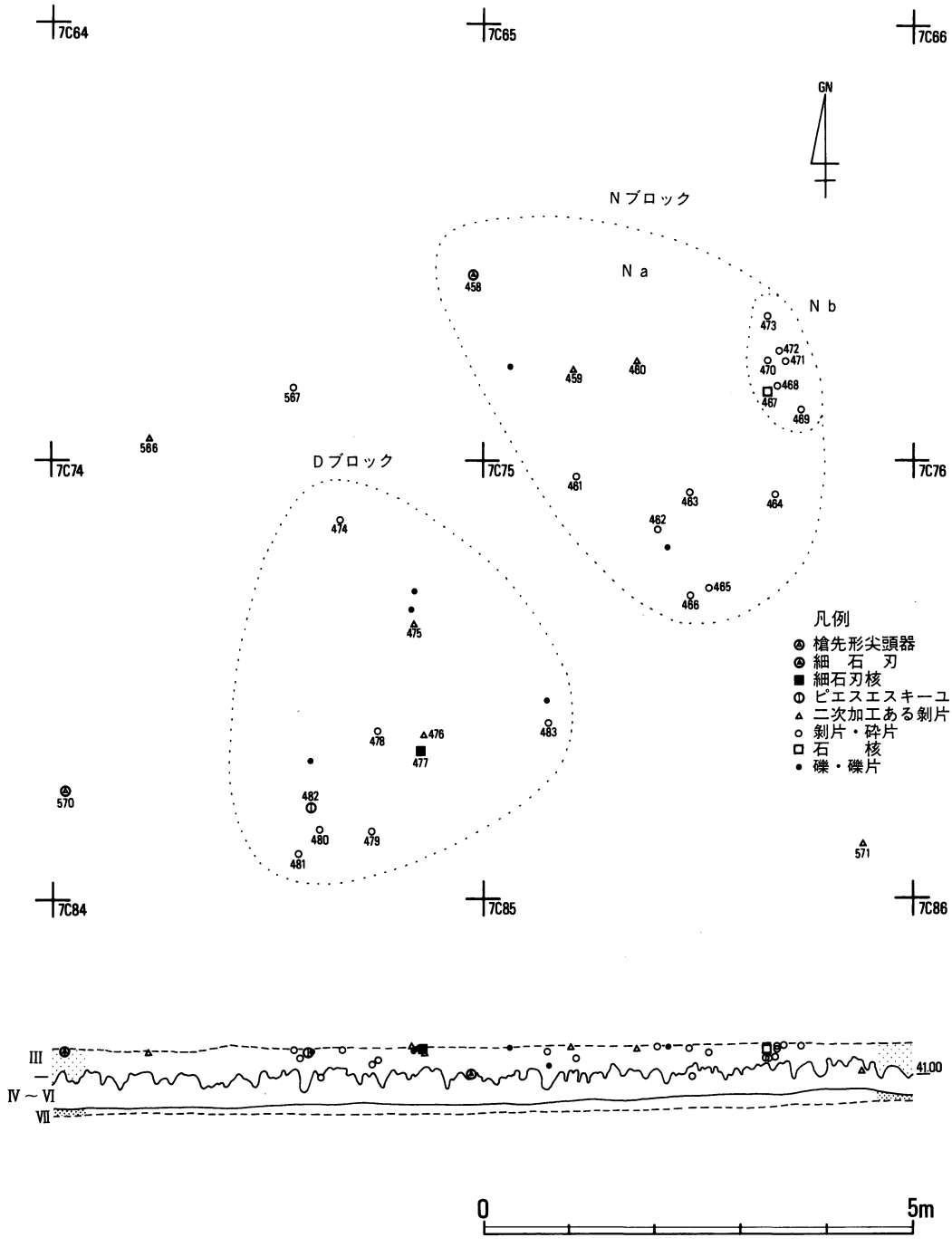
481・491・501はいずれも整ってはいるがやや縦長の剝片を素材としており、主要剝離面の左端には３点とも同じような亀裂が打点あるいはその近くから走って、他の部分とは様相が異っている。また、調整剝離は501が右側縁に、他の２点は右側縁基部のみに施されている。

497は二次加工ある剝片とも考えられるが、背面上部や右側にみえる剝片剝離痕を残した石核であろう。厚みのある剝片が用いられており、背面には礫面が残る。

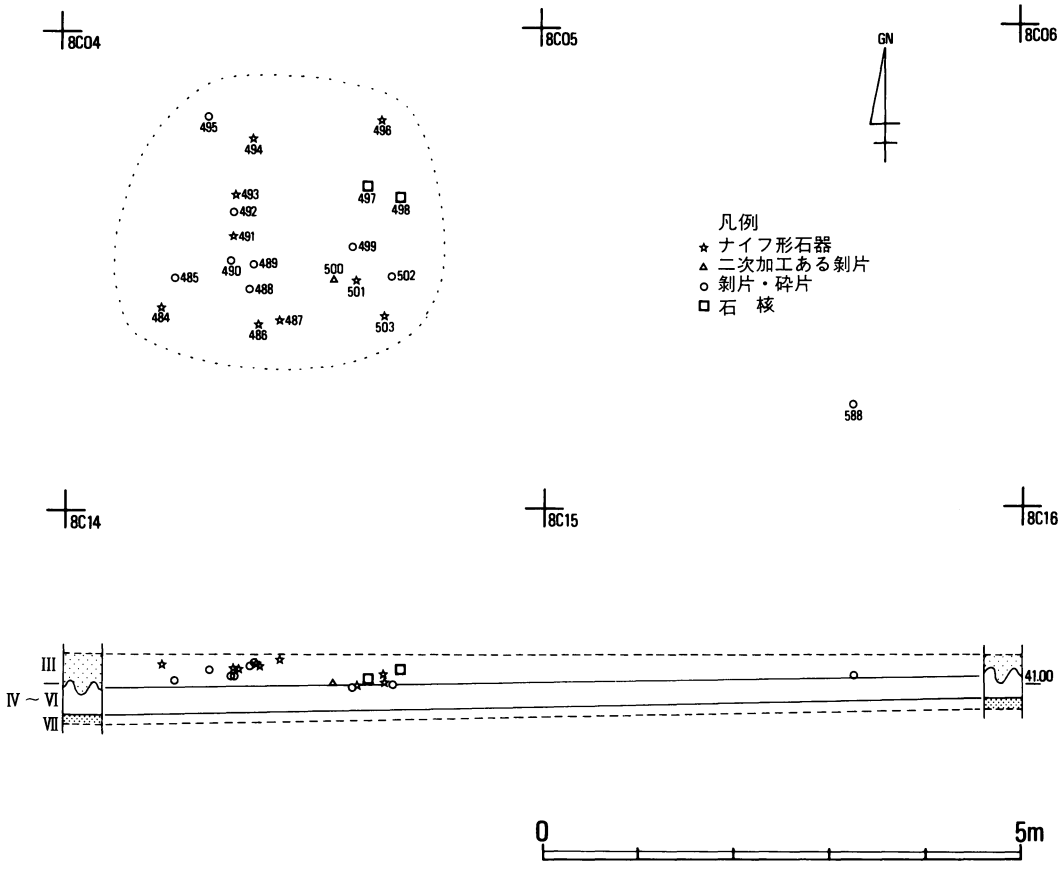
技術的特徴　剝片を石核としたものから剝取された小形不定形の剝片を素材として作られる小形のナイフ形石器群で、幾何形ともいえるものがある。石材は全て流紋岩である。

⑰　**Ｑブロック**（第102・104図、図版34）

出土状況　8Ｃ37グリッドを中心に径３～４ｍ程の広がりをもち、あまりまとまりがない。出土層位はIII層中部である。



第100図　N・Oブロック遺物出土状況図（1/80）



第101図　Pブロック遺物出土状況図（1/80）

出土遺物　ナイフ形石器３点、二次加工ある剥片２点、その他剥片・砕片10点、計15点である。

504・507・513はいずれもナイフ形石器である。507・513はともに横広の小剥片を横位置に用いたもので打面を残している。調整剥離は打面と背面が交わる稜を中心に施され、相対する側縁には微細なものが若干施されるだけである。504も横長の剥片を横位置に用いたもので、調整剥離を施して打面部を除去している。

技術的特徴　ナイフ形石器３点をはじめ、他の剥片も全て幅広の不定形の小剥片である。

石材は流紋岩８点、黒曜石５点の他は泥岩・チャート各１点である。

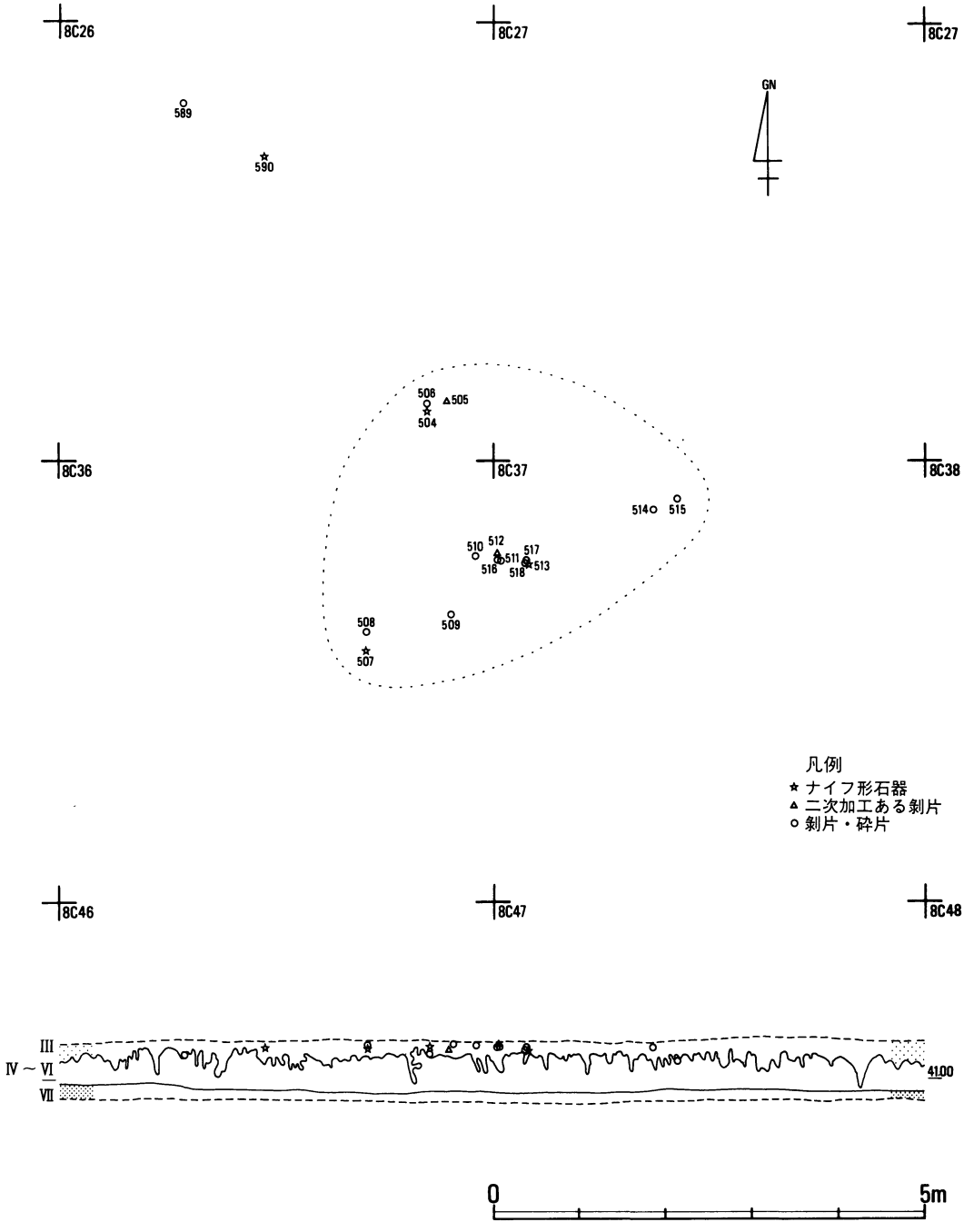
⑱　Tブロック（第103・104図、図版34）

出土状況　6E09グリッドから6E19グリッドにかけて、径2.5m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層上部である。

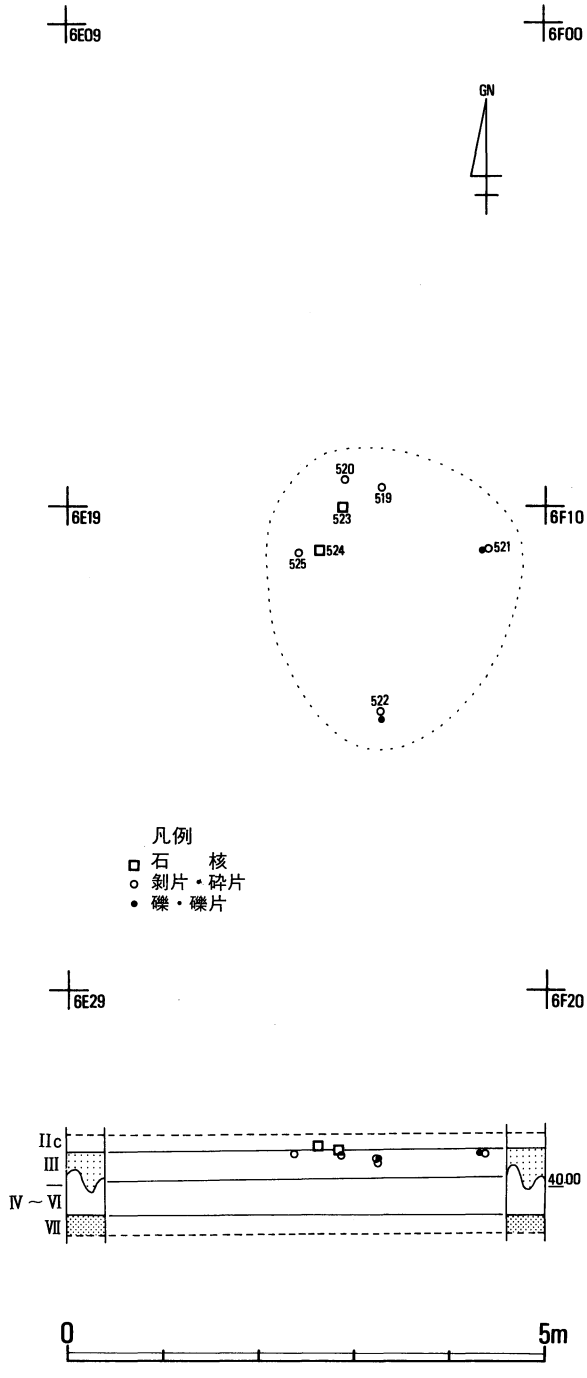
出土遺物　石核２点、剥片・砕片５点の計７点が出土している。

523はスクレイパーとも考えられたが、小剝片を剝取する石核と判断した。同様なものが他にも１点出土している。これらは部厚い剝片を石核に用いている。

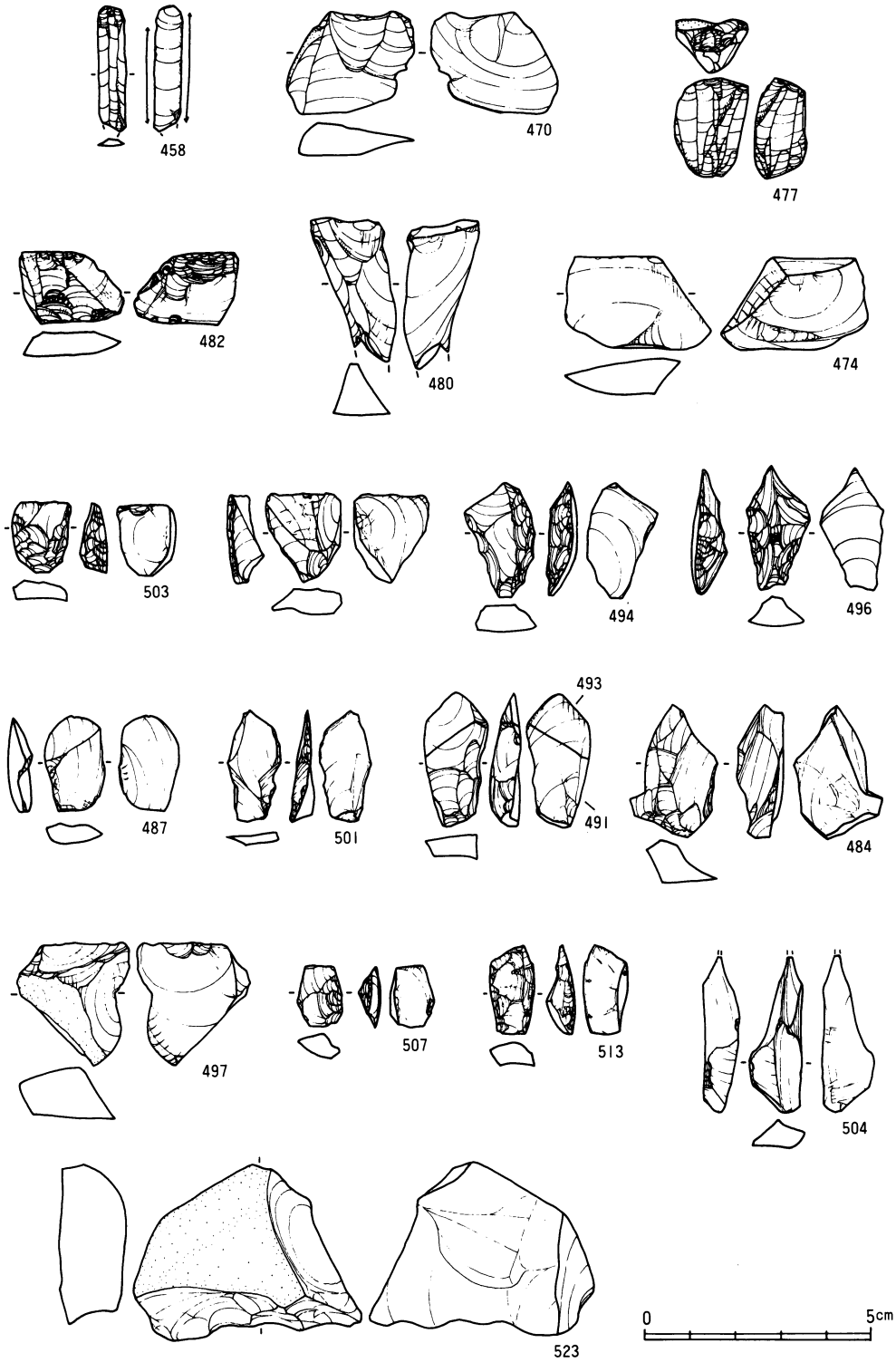
この他背面が礫面のものや、礫面を周囲に残す輪切りのような不定形の剝片が出土している。石材はホルンフェルス３点、砂岩２点、流紋岩・安山岩各１点である。



第102図　Qブロック遺物出土状況図（1/80）



第103図　Tブロック遺物出土状況図（1/80）



第104図　N～Q・Tブロック出土石器実測図（2/3）

⑲ III層ブロック外出土石器（第83・105図、図版35）

ブロック外からは槍先形尖頭器3点、ナイフ形石器6点、スクレイパー3点、彫器2点、ピエスエスキーユ1点、礫器1点、二次加工と使用痕の両方のあるもの1点、二次加工のみあるもの8点、石刃状剥片1点、石核調整剥片2点、その他剥片・砕片、38点、計69点が出土した。

556は周辺加工の小形の槍先形尖頭器である。基部に平坦な打面が残り、調整剥離は表面・裏面とも左側縁を重点的に行なっており、素材の剥片を左右に回転させて同一方向から施したと思われる。

570は基部を欠損した両面加工の槍先形尖頭器である。調整剥離は前述のものと同様な方法がとられている。

586は基部にわずかに打面を残した半両面加工の槍先形尖頭器である。表面・裏面とも未調整部分が広く残り、周辺加工に近いものである。

577は先端及び基部を欠損したナイフ形石器である。右側縁にのみ調整剥離が施され、背面には小高い稜が残るなどG・H・I各ブロックでみられたものと同グループである。

580は彫器で石核調整剥片を素材に用いていると思われる。打面を除去して主要剥離面から調整剥離を施した後、左右に各1条の彫刀面を作出している。

528と541はともに二次加工ある剥片である。528は背面左側縁に角度のあまりない丁寧な調整剥離が施されており、ナイフ形石器に近いものである。礫面を打面としている。

541は末端に小剥離が施され、背面左側縁には使用痕と思われる微細な剥離がある。

551は先細りの石刃状剥片である。

526は縦長の剥片を折断した折断剥片でナイフ形石器の可能性も考えられる。

555は基部を欠損しているが、石核調整剥片と思われる。

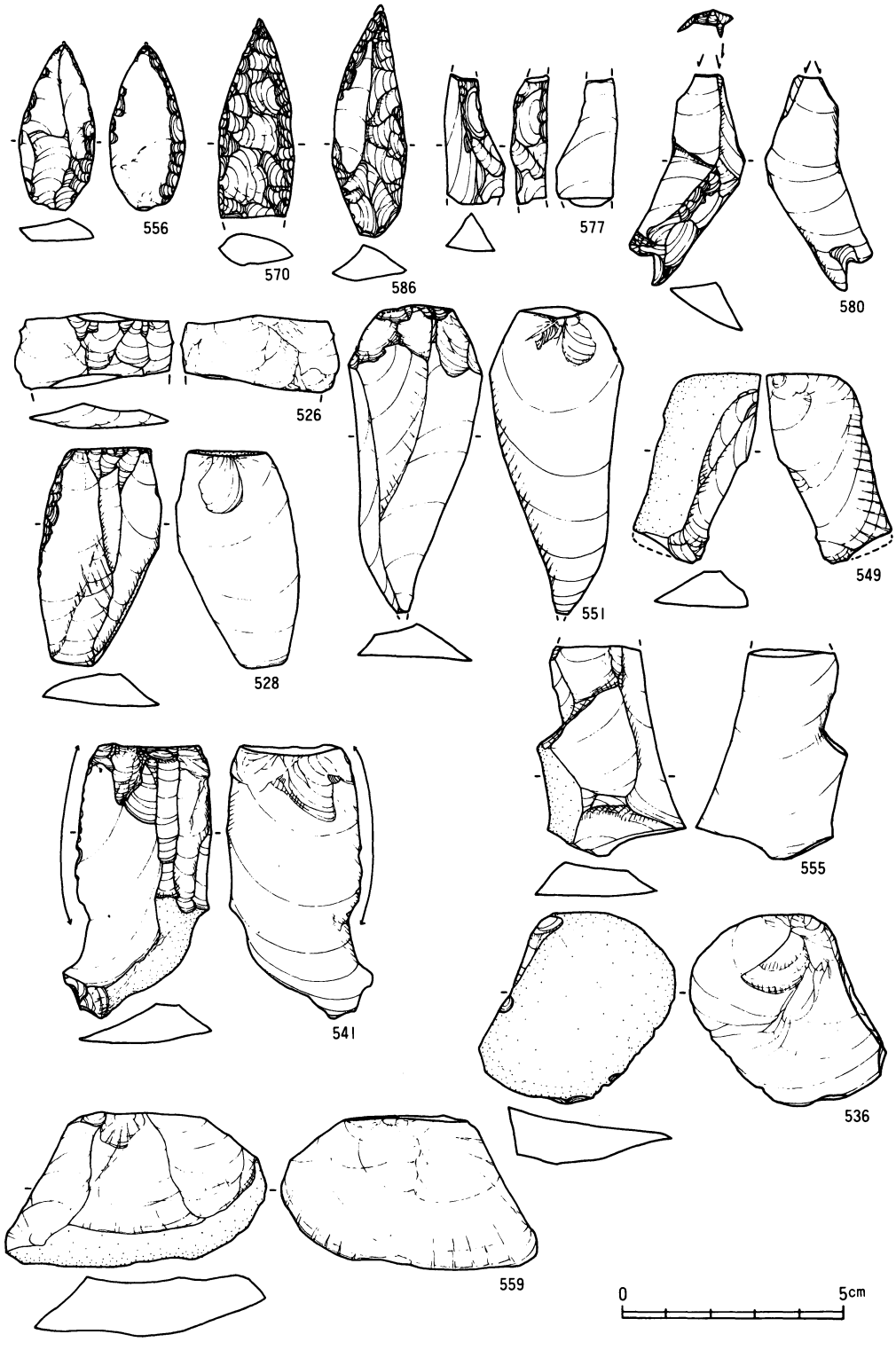
536、549、559はいずれも礫面を打面とした剥片である。536は礫面を背面とし、549、559は背面に礫面を広く残している。

⑳ 接合資料（第106図、図版36）

接合資料A

泥岩を石材として、ナイフ形石器5点（Hbブロックの294、296、Iブロックの299、7D68の578、579）、縦長剥片3点（Gブロックの175、Hbブロックの290、Iブロックの307）、石核調整（頭部調整）剥片1点（Iブロックの305）、計9点で構成される。この他接合はしないが同一個体と思われるものにナイフ形石器1点（Iブロックの300）、縦長剥片2点（Jブロックの325、Lブロックの419）、調整剥片4点（Iブロックの304、311、317、321）の計7点がある。

剥片剥離作業の復原　本資料からは以下の8つの剥片剥離作業とそれから派生する7つの作



第105図　ブロック外出土石器実測図（2/3）

業過程が復原出来る。

①305の石核調整（頭部調整）剝片が剝離される。

②（打面調整剝片が剝離されたものと推定される。）

③（296＋578）の素材たる縦長剝片が剝離される。

③a（296＋578）の素材たる縦長剝片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。

③b（296＋578）のナイフ形石器が２つに折れて、296がＨｂブロックに、578が7D68グリッドに残される。

④（打面調整剝片が剝離されたものと推定される。）

⑤290の縦長剝片が剝離される。

⑥（打面再生剝片及び打面調整剝片が剝離されたものと推定される。）

⑦（175＋307）の縦長剝片が剝離される。

⑦a（175＋307）の縦長剝片が２つに折れて、175がＧブロックに、307がＩブロックに残される。

⑧（294＋579＋299）の素材たる縦長剝片が剝離される。

⑧a（294＋579＋299）の素材たる縦長剝片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。

⑧b（294＋579＋299）のナイフ形石器が２つに折れて先端部の299がＩブロックに残される。

⑧c（294＋579）の先端部の折れたナイフ形石器に再調整を施す。

⑧d（294＋579）の再調整後のナイフ形石器が２つに折れて、294がＨｂブロックに、579が7D68グリッドに残される。

以上の諸過程には、さらに①以前と⑧以後の作業過程が予想され、①以前には石核の両側面の調整などが行なわれており、⑧の結果残された石核もまだ十分に目的的剝片の剝離が行なえるものである。

本資料及び７点の個体別資料に係わる剝片剝離作業の諸過程が行なわれた場所については、①以前及び⑧以後の諸作業の大部分は本遺跡で確認出来ないため、そう遠くない他の遺跡で行なわれたと推定される。問題はＨｂ・Ｉ・Ｇ・Ｊ・Ｋの各ブロックと7D68グリッドに分散して残されたものについてであるが、位置的にはＨｂブロックとＩブロック、Ｇブロックと7D68グリッド、それにＪブロック、Ｌブロックの計４グループに分けることが出来る。そしてそのほとんどがＨｂ・Ｉグループに所属しているためそこが中心になって行なわれたことは明らかである。またＪブロックとＫブロック出土の縦長剝片については、Ｈｂ・Ｉグループなどから持ち込まれたかあるいは各ブロックにおいて剝離されたと考えられる。残るＧ・7D68グループの175・578・59の３資料は全てＨｂ・Ｉグループと接合関係にある破損品と考えられ、破損品がＨｂ・Ｉグループから持ち込まれたとは考えにくい。しかし破損品と解釈せずに、ナイフ形石器や縦長剝片が折断されてその一部が運ばれたと考える、つまりナイフ形石器や縦長剝片の一

部には折断されて使用されたものがあるのではないかと考えれば分散して残されることに何の不思議もないのである。ただ、そうなるとナイフ形石器の機能、用途の問題と深く係わってくる問題となるが、この資料に限らず本遺跡の資料には、2つばかりではなく3つに折れているものもいくつか見受けられる。このように破損とみるか、折断とするかはなかなか難しい問題である。完成品と思われるナイフ形石器をさらに意図的に折断して、その一部を単独あるいは複数の新な石器として利用することが行なわれていたと推定されるが、それを確認するには多くの資料の検討が心要であり、今回は資料の提示にとどめ今後の検討課題としたい。

技術的特徴　剝片剝離技術は頻繁に打面再生及び打面調整を行ないながら連続的に縦長剝片を剝離しており、石核は背後に礫面を残し、単設打面のものが推定される。ナイフ形石器にみられる調整加工は、素材となる縦長剝片の厚みのある一側縁を薄くするように施されており、素材の形状を大きく変えるものではない。

接合資料B

凝灰岩を石材として、ナイフ形石器2点（374＋411）、縦長剝片3点（389、403、414）、打面再生削片3点（368＋377、413）、打面調整剝片1点（382）、石核調整剝片1点（384）、計10点で構成され、全てLブロックからの出土である。この他接合はしないが同一個体と思われるものに縦長剝片1点（381）、打面再生剝片3点（375＋401＋412）、調整剝片2点（400、407）、計6点があり、これも全てLブロック出土である。

剝片剝離作業の復原　本資料からは以下の10の剝片剝離作業とそれから派生する3つの作業過程が復原出来る。

①（374＋411）のナイフ形石器の素材たる縦長剝片が剝離される。

①a（374＋411）の素材たる縦長剝片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。

①b（374＋411）のナイフ形石器が2つに折れて374と411になる。

②413の打面再生剝片が剝離される。

③403の縦長剝片が剝離される。

④382の打面調整剝片が剝離される。

⑤（打面調整剝片が剝離されたものと推定される。）

⑥（368＋377）の打面再生剝片が剝離される。

⑥a（368＋377）の打面再生剝片が2つに折れて368と377になる。

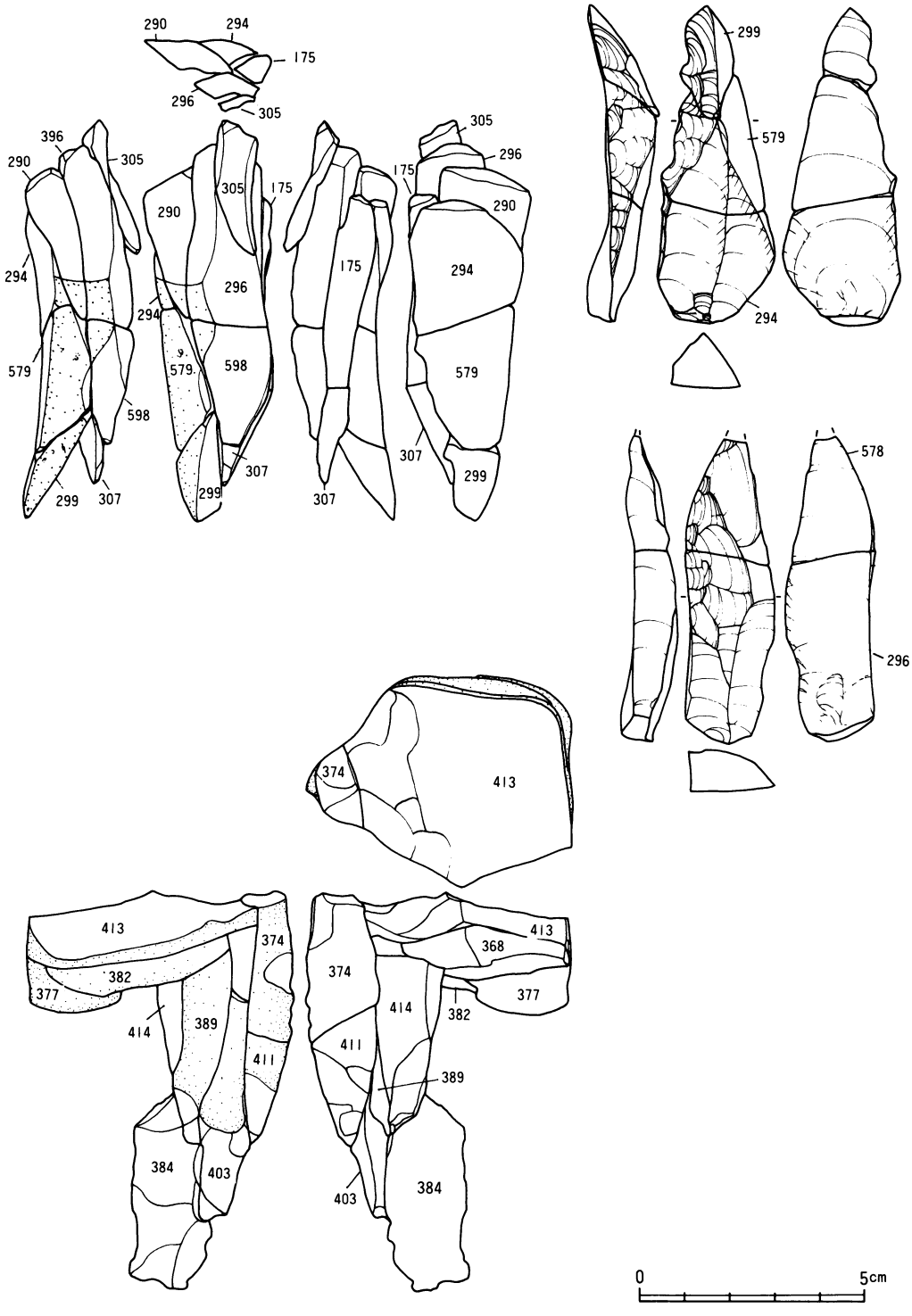
⑦389の縦長剝片が剝離される。

⑧（縦長剝片が剝離されたものと推定される。）

⑨414の縦長剝片が剝離される。

⑩384の石核調整剝片が剝離される。

以上の作業過程にはさらに①以前と⑩以後の作業過程が予想され、①以前にすでに剝片剝離



第106図　接合資料実測図（2/3）

は始められており、⑩の結果残された石核もまだ十分に目的的剥片の剥離が行なえるものである。

これら本資料及び6点の個体別資料に係わる剥片剥離作業の諸過程はもちろんLブロックが主体となって行なわれたことはまちがいないが、①以前の諸過程及び⑩以後の諸過程の大部分は本遺跡において確認することが出来ないため、そう遠くない他の遺跡において行なわれたと推定される。

技術的特徴　本資料から窺われる剥片剥離技術は、背後に礫面を残した単設打面の石核から打面再生及び打面調整を頻繁に行ないながら目的とする縦長剥片を剥離している。また、ナイフ形石器にみられる調整加工は、頭部調整はあまり行われず剥片の先端部に調整加工が施されるもので、素材となる縦長剥片の形状を大きく変えないものである。

第5表　III層主体石器群一覧表

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
77	A	剥片	チャート	1.8	1.2	0.7	1.0	90°	6D29-5
78	A	剥片	流紋岩	1.2	1.8	0.5	0.8	120°	6D29-6
79	A	剥片	流紋岩	(0.8)	(1.2)	(0.2)	(0.2)		6D39-6
80	C	剥片	シルト岩	2.3	2.7	0.7	4.0	120°	6D75-13
81	C	剥片	砂岩	3.1	0.9	1.4	2.0	95°	6D75-18
82	C	剥片	砂岩	1.9	2.6	0.4	2.0		6D76-8
83	C	スクレイパー	泥岩	1.8	3.0	1.1	4.6		6D76-13
84	C	二次加工ある剥片	流紋岩	(1.0)	(1.6)	(1.2)	(1.9)	120°	6D76-27
85	C	剥片	砂岩	3.0	4.7	0.8	9.0	95°	6D76-42
86	D	剥片	砂岩	2.0	2.7	1.0	3.9	80°	6D78-6
87	D	石核	砂岩	2.0	5.7	4.2	40.4		6D78-7
88	D	砕片	チャート	0.7	1.6	1.3	1.3		6D79-8
89	D	石核	安山岩	(2.1)	(3.1)	(1.4)	7.5		6D79-9
90	D	ナイフ形石器	チャート	2.2	1.4	0.5	1.3		6D79-16
91	D	剥片	チャート	2.0	1.6	0.7	1.7	120°	6D88-6
92	D	剥片	チャート	1.5	3.3	1.1	5.9	120°	6D88-11
93	D	剥片	安山岩	1.9	2.4	0.8	3.7	120°	6D89-6
94	D	二次加工ある剥片	流紋岩	(2.1)	(2.5)	(0.6)	2.7	115°	6D89-20
95	D	剥片	泥岩	2.6	2.1	0.8	3.9		6D89-21
96	D	剥片	安山岩	0.9	2.9	0.6	1.4		6D89-22
97	D	剥片	安山岩	(1.6)	(2.5)	(0.6)	2.4	120°	6D89-28
98	D	ナイフ形石器	安山岩	1.8	1.3	0.5	1.3		6D89-29
99	D	剥片	泥岩	2.4	2.4	0.5	3.4		6D89-31
100	D	小石核	流紋岩	1.7	1.9	1.0	3.4		6D89-44
101	D	剥片	安山岩	1.4	2.1	0.4	1.0	110°	6D89-45
102	D	剥片	安山岩	2.4	1.4	0.4	1.3	130°	6D89-46
103	D	砕片	砂岩	1.0	0.5	0.2	0.1	120°	6D89-50

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
104	D	剥片	流紋岩	(1.4)	(1.6)	(0.5)	(1.0)	130°	6D89-51
105	D	石核	安山岩	(1.6)	(3.1)	(0.9)	4.8		6D89-52
106	D	砕片	砂岩	1.3	0.9	0.2	0.4		6D89-58
107	D	石核？	珪質頁岩	1.2	1.9	0.9	2.3		6D89-67
108	D	剥片	砂岩	4.1	4.1	1.1	19.1		6D89-68
109	D	剥片	安山岩	(1.5)	(1.2)	(0.6)	0.7		6D89-69
110	D	ナイフ形石器	黒曜石	2.6	1.6	0.6	2.1		6D89-73
111	D	剥片	砂岩	1.2	1.4	0.4	0.8	125°	6D89-75
112	D	剥片	安山岩	1.3	1.6	0.5	1.0	120°	6D89-77
113	D	剥片	安山岩	(1.8)	(1.6)	(0.6)	1.3	110°	6D89-78
114	D	剥片	安山岩	(2.1)	(1.6)	(0.9)	2.8		6D89-82
115	D	ナイフ形石器	安山岩	(2.5)	1.4	0.6	1.7		6D89-83
116	E	ナイフ形石器	チャート	(3.1)	(1.9)	(0.7)	3.2		7E10-4
117	E	剥片	ホルンフェルス	(4.2)	(2.6)	(0.7)	9.3		7E10-5
118	E	剥片	チャート	(1.3)	(2.0)	(0.6)	1.1		7E10-6
119	E	スクレイパー	流紋岩	1.9	2.5	1.0	4.2		7E10-9
120	E	砕片	砂岩	(1.2)	(1.2)	(0.2)	0.3		7E10-10
121	E	砕片	砂岩	(1.3)	(1.5)	(0.3)	0.6		7E10-21
122	E	ナイフ形石器	チャート	1.9	0.9	0.4	0.6		7E10-22
123	E	剥片	砂岩	1.5	1.4	0.3	0.5		7E10-27
124	E	石核	砂岩	3.4	4.9	2.5	60.4		7E11-9
125	E	剥片	砂岩	2.2	4.0	1.1	7.7	120°	7E20-4
126	E	剥片	砂岩	2.6	3.0	1.3	10.9	100°	7E20-5
127	E	剥片	砂岩	2.2	2.5	1.6	4.6	110°	7E20-6
128	E	剥片	チャート	1.8	1.3	0.4	0.8		7E20-8
129	E	スクレイパー	チャート	2.2	2.3	0.8	3.6		7E20-9
130	E	剥片	砂岩	1.2	0.9	0.4	0.3	110°	7E20-11
131	E	剥片	チャート	2.6	2.5	1.0	5.2		7E20-12
132	E	剥片	チャート	(2.2)	(1.5)	(1.1)	2.3		7E20-17
133	E	剥片	ホルンフェルス	(3.2)	(3.1)	(0.8)	7.8		7E20-19
134	E	剥片	砂岩	4.0	2.2	2.6	24.6		7E21-4
135	E	剥片	砂岩	2.7	2.5	0.7	4.3	115°	7E21-5
136	E	砕片	砂岩	0.9	2.2	0.5	0.6		7E21-6
137	F	剥片	チャート	1.2	1.3	0.3	0.4	105°	7E02-4
138	F	二次加工ある剥片	チャート	1.2	1.4	0.5	0.8	115°	7E03-4
139	F	剥片	砂岩	2.6	3.2	0.7	5.7		7E03-5
140	F	砕片	流紋岩	(0.8)	(1.2)	(0.1)	(0.2)		7E03-6
141	F	剥片	チャート	1.6	1.5	0.9	2.3	120°	7E12-8
142	F	剥片	シルト岩	2.1	1.8	0.6	2.8	115°	7E12-9
143	F	砕片	チャート	0.9	1.1	0.4	0.3		7E12-12
144	F	ナイフ形石器	チャート	2.1	1.6	1.0	2.8		7E12-14
145	F	剥片	流紋岩	(1.3)	(0.6)	(0.2)	0.2		7E12-15
146	F	スクレイパー	チャート	(1.6)	(1.5)	(0.7)	1.3		7E12-17
147	F	ハンマーストーン？	砂岩	(7.2)	(3.9)	(2.0)	89.3		7E12-18
148	F	剥片	流紋岩	(1.7)	(1.3)	(0.7)	1.0		7E12-19
149	F	砕片	チャート	(0.9)	0.8	0.3	0.1		7E12-20

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
150	F	剥片	流紋岩	2.1	1.3	0.6	1.5		7E12-23
151	F	剥片	砂岩	2.8	4.6	1.6	14.7	110°	7E12-24
152	F	剥片	砂岩	1.5	2.1	0.6	2.1	120°	7E13-6
153	F	ナイフ形石器	チャート	1.8	1.0	0.4	0.6		7E13-7
154	F	剥片	砂岩	1.9	1.2	0.4	1.0	115°	7E13-14
155	F	剥片	砂岩	1.2	1.9	0.4	0.8		7E13-15
156	F	剥片	砂岩	1.7	1.4	0.8	1.9	85°	7E13-16
157	F	剥片	砂岩	2.3	3.5	1.0	7.1		7E13-26
158	F	砕片	流紋岩	1.1	2.0	0.4	0.9		7E13-3
159	F	二次加工ある剥片	ホルンフェルス	(4.5)	(6.3)	(1.4)	41.2		7E13-24
160	F	剥片	泥岩	2.1	3.7	0.6	4.1		7E13-25
161	G	剥片	安山岩	1.8	2.3	0.8	2.3	130°	7D58-4
162	G	剥片？	泥岩	1.8	2.1	0.6	2.5	120°	7D58-5
163	G	剥片	流紋岩	2.9	1.7	0.9	3.7	120°	7D58-6
164	G	剥片	流紋岩	2.2	1.8	1.0	3.5	130°	7D58-7
165	G	剥片	流紋岩	1.5	1.1	0.4	0.4	125°	7D58-8
166	G	剥片	安山岩	1.8	2.0	0.3	1.2	120°	7D58-9
167	G	剥片	ホルンフェルス	3.1	1.4	2.0	7.1	60°	7D58-10
168	G	剥片	安山岩	1.6	1.1	0.4	0.6	115°	7D58-11
169	G	剥片	流紋岩	3.7	2.6	1.6	6.7	110°	7D58-12
170	G	剥片	安山岩	5.6	3.8	1.5	28.5	115°	7D58-13
171	G	剥片	チャート	(2.4)	(3.0)	(0.9)	6.3	115°	7D58-14
172	G	ナイフ形石器	安山岩	5.3	1.6	1.2	8.5		7D58-15
173	G	剥片	流紋岩	1.7	1.3	0.4	0.5	115°	7D58-16
174	G	二次加工ある剥片	流紋岩	2.3	2.9	0.6	3.2	120°	7D58-17
175	G	剥片	泥岩	(4.2)	1.9	0.9	6.0	115°	7D58-18
176	G	ナイフ形石器	安山岩	5.2	1.6	1.2	9.0		7D58-19
177	G	剥片	安山岩	3.4	2.3	0.7	5.7	125°	7D58-20
178	G	剥片	ホルンフェルス	3.2	3.5	0.8	10.4	135°	7D58-21
179	G	石核	安山岩	3.7	2.1	2.8	22.5		7D58-22
180	G	剥片	安山岩	1.6	3.1	0.4	1.7	115°	7D58-23
181	G	磨石及敲石	デイサイト	7.1	6.5	4.7	313.5		7D58-24
182	G	磨石及敲石	デイサイト	6.8	5.2	4.1	187.8		7D58-25
183	G	剥片	安山岩	2.9	2.6	0.9	5.5	110°	7D58-26
184	G	剥片	流紋岩	1.5	0.7	0.2	0.2	130°	7D58-27
185	G	砕片	チャート	0.8	1.0	0.1	0.05		7D58-28
186	G	剥片	チャート	2.7	3.3	1.2	7.6		7D58-29
187	G	剥片	チャート	2.1	2.5	0.8	3.6		7D58-30
188	G	剥片	安山岩						7D58-31
189	G	剥片	泥岩	3.2	3.0	1.0	7.6		7D58-32
190	G	剥片	チャート	2.0	1.5	0.5	1.3	105°	7D58-33
191	G	剥片	流紋岩	(1.2)	(1.6)	(0.3)	0.4		2D58-34
192	G	剥片	安山岩	3.5	1.6	0.5	3.1	100°	7D58-35
193	G	剥片	チャート	(1.7)	(1.9)	(0.4)	0.9	120°	7D58-36
194	G	剥片	チャート	4.3	2.3	0.8	5.3	110°	7D58-37
195	G	剥片	玉髄	2.2	4.3	0.9	5.8	115°	7D58-38

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
196	G	剥片	玉髄	1.5	1.6	0.3	0.5	125°	7D58-39
197	G	スクレイパー	流紋岩	3.0	2.7	1.2	9.4		7D58-40
198	G	砕片	安山岩	1.5	1.0	0.8	1.0		7D58-41
199	G	剥片	安山岩	(2.0)	(2.0)	(0.3)	0.7		7D58-42
200	G	剥片	玉髄	2.7	3.1	1.2	6.6	115°	7D58-43
201	G	剥片	玉髄	1.4	1.2	0.4	0.6		7D58-44
202	G	剥片	流紋岩	2.9	2.3	1.2	5.1	120°	7D58-45
203	G	剥片	玉髄	2.0	2.2	0.8	2.9		7D58-46
204	G	剥片	安山岩	(4.4)	(2.8)	0.9	7.7		7D58-47
205	G	石核	流紋岩	3.9	3.5	2.0	21.0		7D58-48
206	G	剥片	チャート	3.4	6.4	1.7	38.0	120°	7D58-49
207	G	砕片	玉髄	0.9	1.1	0.3	0.3	100°	7D58-50
208	G	剥片	チャート	1.7	2.3	0.7	1.8		7D58-51
209	G	剥片	チャート	1.7	1.7	0.6	0.8	90°	7D58-52
210	G	剥片	チャート	4.2	3.2	0.9	9.7	120°	7D58-53
211	G	剥片	チャート	4.3	1.8	0.6	3.7	110°	7D58-54
212	G	砕片	玉髄	0.8	1.3	0.3	0.2		7D58-55
213	G	剥片	チャート	2.9	3.0	1.4	15.7	110°	7D58-56
214	G	剥片	安山岩	4.2	2.3	1.2	6.5	100°	7D58-57
215	G	剥片	玉髄	1.4	1.9	0.4	0.6	90°	7D58-58
216	G	剥片	玉髄	1.7	2.0	0.8	1.8	105°	7D58-59
217	G	剥片	玉髄	3.5	3.4	1.0	9.8	115°	7D58-60
218	G	剥片	流紋岩	(2.3)	(1.7)	(0.9)	2.2		7D58-61
219	G	剥片	安山岩	(2.4)	(0.6)	(0.5)	0.7		7D58-62
220	G	剥片	安山岩	(2.5)	1.7	0.6	2.8	95°	7D58-63
221	G	剥片	玉髄	2.1	1.5	0.4	1.2	115°	7D58-64
222	G	剥片	流紋岩	4.3	3.4	1.7	19.3	105°	7D58-65
223	G	剥片	安山岩	6.0	4.2	1.8	44.6	115°	7D58-66
224	G	剥片	安山岩	1.5	1.2	0.5	0.7	120°	7D58-68
225	G	剥片	流紋岩	4.0	2.1	0.8	5.9		7D58-69
226	G	砕片	安山岩	1.5	1.7	0.3	0.7		7D58-70
227	G	石核	ホルンフェルス	2.0	3.7	4.0	20.4		7D58-71
228	G	剥片	安山岩						7D58-72
229	G	剥片	ホルンフェルス	2.6	1.6	0.5	1.1	120°	7D58-73
230	G	剥片	ホルンフェルス	2.0	2.9	1.2	5.1	60°	7D58-74
231	G	剥片	安山岩	(2.5)	(2.4)	(0.8)	5.4	85°	7D58-75
232	G	石核	ホルンフェルス	1.9	4.5	3.8	31.1		7D58-76
233	G	剥片	安山岩	1.7	1.2	0.6	0.9	105°	7D58-77
234	G	剥片	流紋岩	2.0	2.5	0.9	3.0		7D58-78
235	G	剥片	流紋岩	2.3	2.0	0.7	2.4	115°	7D58-79
236	G	剥片	流紋岩	2.0	1.3	0.7	1.4		7D58-80
237	G	剥片	流紋岩	2.5	1.9	0.6	2.9	115°	7D58-81
238	G	砕片	玉髄	(1.0)	(1.3)	(0.7)	0.7		7D58-82
239	G	ナイフ形石器	流紋岩	3.4	1.8	0.7	3.0		7D58-83
240	G	剥片	チャート	3.3	2.0	0.5	2.6	105°	7D58-84
241	G	剥片	安山岩	(2.4)	2.8	0.4	2.9		7D58-85

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
242	G	砕片	チャート	1.5	1.4	0.6	0.9		7D58-86
243	G	使用痕ある剥片	チャート	4.7	2.8	1.3	13.0	95°	7D58-87
244	G	剥片	チャート	(0.8)	(1.7)	(0.3)	0.4	100°	7D58-88
245	G	剥片	チャート	1.9	0.7	1.4	1.6		7D58-89
246	G	剥片	泥岩	1.9	1.7	0.4	0.7	120°	7D58-90
247	G	剥片	安山岩	2.2	3.2	2.3	16.0	115°	7D58-91
248	G	剥片	ホルンフェルス	1.5	2.0	0.4	1.4		7D58-92
249	G	剥片	安山岩	1.9	1.9	0.7	2.1	115°	7D58-93
250	G	石核	泥岩	4.0	4.9	1.1	22.3	50°	7D58-94
251	G	剥片	泥岩	(2.4)	(1.9)	(0.5)	1.4		7D58-95
252	G	剥片	泥岩	2.4	2.4	0.8	4.2		7D58-96
253	G	剥片	安山岩	2.4	2.5	0.5	1.6	110°	7D58-97
254	G	剥片	安山岩	3.0	2.4	0.8	5.9	110°	7D58-98
255	G	剥片	玉髄	1.9	1.7	0.6	1.6	110°	7D58-99
256	G	剥片	泥岩	2.3	1.7	0.4	1.1	100°	7D58-100
257	G	剥片	玉髄	1.4	2.2	0.7	0.6	105°	7D58-102
258	G	石核	安山岩	5.0	2.9	3.5	52.8		7D58-103
259	G	剥片	泥岩	(1.6)	(1.3)	(0.4)	0.6		7D58-104
260	G	剥片	流紋岩	(1.2)	(2.1)	(0.6)	1.0		7D58-105
261	G	剥片	チャート	2.8	1.2	0.4	1.0	80°	7D58-106
262	G	剥片	安山岩	2.0	2.6	0.6	2.3	115°	7D58-107
263	G	二次加工ある剥片	安山岩	4.3	2.3	0.9	6.8	110°	7D58-108
264	G	砕片	玉髄	1.8	1.5	0.5	0.6		7D58-109
265	G	剥片	安山岩	(1.8)	(1.8)	(0.7)	2.2	115°	7D58-110
266	G	剥片	玉髄	1.4	2.2	0.6	1.0	110°	7D58-111
267	G	剥片	安山岩	4.7	3.0	2.1	23.5	115°	7D58-112
268	G	剥片	流紋岩	1.4	1.5	0.6	0.6	120°	7D58-113
269	G	剥片	流紋岩	3.1	2.4	0.5	2.7	115°	7D58-114
270	G	剥片	シルト岩	1.7	3.3	0.6	3.0	120°	7D58-115
271	G	剥片	玉髄	(1.0)	(1.9)	(0.6)	0.9		7D58-116
272	G	彫器	チャート	2.1	2.3	1.0	4.2		7D59-4
273	G	二次加工ある剥片	チャート	0.8	2.6	0.7	1.1		7D59-5
274	G	剥片	安山岩	4.6	2.0	1.0	7.8		7D59-3
275	Ha	剥片	流紋岩	(1.4)	(1.9)	(0.4)	(0.4)	130°	7D56-4
276	Ha	剥片	流紋岩	2.5	2.0	1.0	2.9	125°	7D56-5
277	Ha	剥片	流紋岩	2.1	2.0	0.6	2.8		7D56-6
278	Ha	二次加工ある剥片	流紋岩	2.8	2.3	1.0	7.1	115°	7D56-7
279	Ha	剥片	流紋岩	1.8	1.7	0.5	1.3	120°	7D56-8
280	Ha	砕片	流紋岩	1.0	0.7	0.3	0.2	120°	7D56-9
281	Ha	剥片	安山岩	3.6	2.1	0.5	3.7	120°	7D56-10
282	Ha	剥片	安山岩	5.4	2.9	1.5	14.7	120°	7D56-11
283	Ha	石核	安山岩	6.1	3.7	2.8	68.5		7D56-13
284	Ha	ナイフ形石器	安山岩	(4.5)	(1.2)	(0.8)	(4.6)		7D56-14
285	Ha	石核	安山岩	4.0	2.3	3.3	38.9		7D56-23
286	Hb	剥片	安山岩	3.3	3.4	0.5	5.3	105°	7D56-15
287	Hb	石核	泥岩	2.9	4.0	4.5	47.7		7D56-16

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
288	Hb	ナイフ形石器	安山岩	(5.3)	(1.8)	(1.3)	(10.6)		7D56-17
289	Hb	ナイフ形石器	安山岩	3.4	1.9	1.0	6.3	125°	7D56-18
290	Hb	剥片	泥岩	3.4	2.2	0.9	4.2	115°	7D56-19
291	Hb	剥片	泥岩	2.5	1.8	0.4	1.5		7D56-20
292	Hb	剥片	安山岩	2.7	5.3	1.0	11.3	145°	7D56-21
293	Hb	二次加工及び使用痕ある剥片	流紋岩	4.3	3.3	0.9	10.1	110°	7D56-22
294	Hb	ナイフ形石器	泥岩	(2.8)	2.6	(0.9)	7.4	115°	7D65-9
295	Hb	剥片	安山岩	1.7	2.6	0.6	2.7	60°	7D66-4
296	Hb	ナイフ形石器	泥岩	(3.9)	2.6	1.0	11.8	105°	7D66-6
297	I	砕片	安山岩	0.7	0.8	0.2	0.1		7D65-10
298	I	剥片	流紋岩	(2.8)	(1.3)	(1.2)	3.2	95°	7D66-5
299	I	ナイフ形石器	泥岩	2.9	1.3	0.9	2.3		7D66-7
300	I	ナイフ形石器	泥岩	(1.2)	(1.0)	(0.7)	0.8		7D66-8
301	I	砕片	安山岩	1.3	1.7	0.3	0.7		7D66-9
302	I	剥片	安山岩	2.8	2.1	0.5	2.4	80°	7D66-10
303	I	二次加工ある剥片	安山岩	2.4	2.5	1.1	6.0	120°	7D66-11
304	I	剥片	泥岩	1.4	2.3	0.2	0.8	125°	7D66-12
305	I	剥片	泥岩	2.7	1.8	0.5	1.3		7D66-13
306	I	剥片	安山岩	1.2	1.8	0.6	1.1	115°	7D66-14
307	I	剥片	泥岩	(2.3)	(1.1)	(0.7)	1.4		7D66-15
308	I	剥片	安山岩	(2.8)	(1.4)	(0.6)	3.1	105°	7D66-16
309	I	剥片	安山岩	(1.3)	(1.3)	(0.4)	0.8	120°	7D66-17
310	I	砕片	安山岩	0.6	1.0	0.4	0.2		7D66-18
311	I	剥片	泥岩	3.6	0.9	0.7	2.2		7D66-19
312	I	ナイフ形石器	安山岩	3.2	1.7	1.1	4.2		7D66-20
313	I	石核	安山岩	3.9	3.7	2.3	44.9		7D66-21
314	I	剥片	安山岩	(3.1)	(2.3)	0.6	3.6	105°	7D66-23
315	I	ナイフ形石器	安山岩	3.5	1.8	1.1	7.3		7D66-24
316	I	剥片	安山岩	2.5	2.7	0.6	3.6	110°	7D66-25
317	I	剥片	泥岩	1.3	1.7	0.3	0.6	110°	7D66-26
318	I	砕片	安山岩	1.3	1.4	0.4	0.6		7D66-27
319	I	剥片	安山岩	(1.9)	(1.4)	(0.4)	0.9	100°	7D66-28
320	I	剥片	安山岩	1.7	2.2	0.3	1.1	115°	7D66-29
321	I	剥片	泥岩	3.9	1.1	0.8	2.8		7D66-30
322	J	二次加工ある剥片	玉髄	3.3	3.1	1.1	8.4	130°	7D64-4
323	J	剥片	安山岩	(1.0)	(1.3)	(0.7)	0.8		7D65-7
324	J	剥片	安山岩	5.9	3.5	1.2	23.7	120°	7D74-4
325	J	剥片	泥岩	(5.6)	2.7	1.2	14.9	100°	7D74-6
326	J	剥片	安山岩	3.4	3.8	1.0	13.2	120°	7D74-7
327	J	剥片	砂岩	(1.7)	(2.4)	(0.6)	2.5	95°	7D74-8
328	J	剥片	泥岩	(2.9)	(1.8)	(0.4)	(2.3)	115°	7D74-10
329	J	打面再生剥片	安山岩	3.5	3.4	1.6	16.5	110°	7D74-11
330	J	剥片	流紋岩	3.1	2.6	0.7	3.7	120°	7D75-4
331	Ka	石核	流紋岩	5.8	3.9	2.3	47.6		7D73-4
332	Ka	砕片	安山岩	0.9	1.1	0.3	0.4	90°	7D73-6
333	Ka	剥片	チャート	4.9	2.3	0.8	9.3	115°	7D73-7

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
334	Ka	剝片	安山岩	(2.4)	(1.7)	(0.5)	1.9	110°	7D73-8
335	Ka	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.0)	5.3	120°	7D73-9
336	Ka	剝片	流紋岩	2.5	3.2	0.6	2.8	110°	7D73-10
337	Ka	剝片	安山岩	(1.1)	(2.6)	(1.0)	3.8		7D73-11
338	Ka	剝片	玉髄	4.5	2.7	2.5	17.4	130°	7D73-12
339	Ka	剝片	安山岩	3.3	2.5	0.5	4.2	120°	7D73-13
340	Ka	剝片	流紋岩	5.3	3.2	1.2	14.7	110°	7D73-14
341	Ka	剝片	安山岩	3.2	2.8	0.7	5.4	115°	7D73-15
342	Ka	剝片	珪質頁岩	2.2	2.0	0.3	1.1	115°	7D73-16
343	Ka	剝片	安山岩	4.3	2.1	1.5	11.9	125°	7D73-17
344	Ka	剝片	流紋岩	5.0	2.0	0.6	5.5	80°	7D73-18
345	Ka	剝片	デイサイト	2.8	1.9	0.5	1.7	115°	7D73-19
346	Ka	剝片	流紋岩	(4.4)	(1.9)	0.8	6.7		7D73-20
347	Ka	剝片	安山岩	(2.1)	(3.1)	(0.9)	4.7		7D73-21
348	Ka	石核	流紋岩	5.8	3.2	2.0	33.0		7D73-22
349	Ka	石核	安山岩	5.0	5.3	1.4	35.3		7D73-23
350	Ka	剝片	泥岩	4.7	2.0	0.9	4.5	145°	7D73-33
351	Ka	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.3)	8.1		7D73-34
352	Kb	剝片	流紋岩	(2.7)	2.2	0.7	3.3		7D73-24
353	Kb	剝片	安山岩	3.3	2.3	1.8	7.9		7D73-25
354	Kb	剝片	安山岩	2.9	1.5	0.4	1.4	115°	7D73-26
355	Kb	砕片	安山岩	(0.7)	(0.8)	(0.2)	0.1		7D73-27
356	Kb	剝片	安山岩	1.6	1.5	0.2	0.4	110°	7D73-28
357	Kb	石核	流紋岩	3.2	3.6	2.3	27.3		7D73-29
358	Kb	石核	安山岩	4.2	2.8	1.7	21.2		7D73-30
359	Ka	石核	安山岩	2.9	2.1	2.6	18.7		7D73-31
360	Ka	剝片	安山岩	3.1	1.5	1.0	5.8	115°	7D73-32
361	Kb	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.3)	8.1		7D73-35
362	Kb	石核	流紋岩	3.5	4.1	2.9	40.7		7D73-36
363	Kb	ナイフ形石器	安山岩	(2.3)	(1.4)	(0.7)	1.9		7D73-37
364	Kb	剝片	流紋岩	(1.2)	(2.0)	(0.4)	0.8	105°	7D73-38
365	Kb	剝片	安山岩	2.5	2.6	0.8	6.0	115°	7D73-39
366	L	砕片	安山岩	0.9	0.8	0.4	0.2	100°	7D75-5
367	L	剝片	安山岩	4.2	4.0	0.7	7.6	110°	7D76-4
368	L	打面再生剝片	凝灰岩	(3.5)	(3.9)	1.0	9.1	105°	7D76-5
369	L	砕片	安山岩	0.6	0.9	0.2	0.1		7D76-6
370	L	剝片	砂岩	3.4	2.0	0.4	1.6	125°	7D76-7
371	L	剝片	安山岩	4.5	1.8	0.8	6.8	120°	7D76-8
372	L	剝片	安山岩	3.3	3.2	0.9	7.0	110°	7D76-9
373	L	剝片	砂岩	2.7	3.9	0.5	5.9	125°	7D76-10
374	L	ナイフ形石器	凝灰岩	(3.3)	(2.1)	(1.4)	10.9		7D76-11
375	L	剝片	凝灰岩	(1.2)	(1.8)	1.1	1.7		7D76-12
376	L	剝片	安山岩	(2.4)	(3.1)	(0.7)	5.6	110°	7D76-13
377	L	打面再生剝片	凝灰岩	(1.8)	3.8	(0.9)	5.6		7D76-14
378	L	剝片	安山岩	(2.3)	(2.5)	1.0	3.5	120°	7D76-15
379	L	剝片	砂岩	(3.5)	(5.3)	(1.1)	21.4		7D76-16

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
380	L	砕片	安山岩	(1.1)	(1.5)	(0.3)	0.5		7D76-17
381	L	剥片	凝灰岩	(3.0)	(2.7)	(1.0)	8.6		7D76-18
382	L	剥片	凝灰岩	4.1	1.9	0.6	5.0	110°	7D76-19
383	L	剥片	安山岩	(4.2)	3.2	1.5	17.9	120°	7D76-20
384	L	剥片	凝灰岩	(3.1)	(4.8)	1.1	9.9		7D76-21
385	L	スクレイパー	安山岩	(3.2)	(2.8)	(0.8)	5.7		7D76-22
386	L	ナイフ形石器	安山岩	3.4	1.7	0.8	3.6		7D76-23
387	L	スクレイパー	安山岩	(3.2)	(2.1)	(0.9)	5.2		7D76-24
388	L	剥片	砂岩	(2.9)	(3.4)	(0.6)	4.4	120°	7D76-25
389	L	剥片	凝灰岩	(4.1)	2.3	1.0	8.9	100°	7D76-26
390	L	剥片	安山岩	(1.3)	(1.0)	(0.4)	0.4		7D76-27
391	L	剥片	安山岩	(2.7)	(2.0)	(0.7)	4.2		7D76-28
392	L	剥片	安山岩	(2.1)	1.6	0.7	2.1	115°	7D76-29
393	L	剥片	泥岩	2.9	2.8	1.1	8.0	95°	7D76-30
394	L	剥片	泥岩	3.3	2.6	1.3	6.3	110°	7D76-31
395	L	角錐状石器	流紋岩	(1.9)	(1.4)	(0.8)	1.7		7D76-33
396	L	剥片	砂岩	2.0	3.5	0.4	2.2		7D76-34
397	L	打面再生剥片	安山岩	3.9	2.3	1.2	7.5	115°	7D76-35
398	L	剥片	泥岩	5.2	4.7	1.4	24.7	130°	7D76-36
399	L	角錐状石器	流紋岩	(1.5)	(1.4)	(0.7)	(1.3)		7D76-37
400	L	砕片	凝灰岩	1.2	0.9	0.2	0.2		7D76-38
401	L	剥片	凝灰岩	(2.6)	3.4	(0.6)	4.6		7D76-39
402	L	剥片	安山岩	2.3	3.8	0.8	4.7	145°	7D76-40
403	L	剥片	凝灰岩	(5.2)	(2.2)	0.9	7.3		7D76-41
404	L	剥片	泥岩	(2.7)	(2.6)	(0.9)	4.7	100°	7D76-42
405	L	角錐状石器	流紋岩	(1.0)	(0.8)	(0.6)	(0.2)		7D76-43
406	L	剥片	砂岩	3.6	2.2	0.6	3.4	85°	7D76-44
407	L	剥片	凝灰岩	1.2	2.4	0.4	1.3	140°	7D85-5
408	L	剥片	安山岩	(2.9)	(2.5)	(1.0)	6.9		7D85-6
409	L	剥片	安山岩	2.8	4.0	0.7	7.4	120°	7D85-7
410	L	剥片	安山岩	3.4	3.0	0.9	9.2	105°	7D85-8
411	L	ナイフ形石器	凝灰岩	(3.0)	(1.7)	(1.3)	4.6		7D85-9
412	L	剥片	凝灰岩	(1.5)	(1.5)	(0.4)	0.7		7D85-10
413	L	打面再生剥片	凝灰岩	4.7	5.7	1.1	23.1	115°	7D86-4
414	L	剥片	凝灰岩	3.9	2.8	1.5	15.4	105°	7D86-8
415	L	剥片	安山岩	4.9	4.0	1.5	24.6	110°	7D86-9
416	L	角錐状石器	珪質頁岩	5.3	1.5	1.1	8.4		7D86-10
417	L	石核	安山岩	3.5	4.3	1.7	22.8		7D86-11
418	L	剥片	安山岩	5.0	2.5	1.4	11.2	130°	7D86-12
419	L	剥片	泥岩	4.2	5.0	1.1	17.2	115°	7D86-13
420	M	剥片	安山岩	(2.9)	(2.8)	(1.3)	10.0	110°	7D90-4
421	M	剥片	安山岩	1.4	1.6	0.4	0.6	130°	7D90-5
422	M	剥片	安山岩	(1.4)	(3.0)	0.6	3.1		7D90-6
423	M	石核	安山岩	(3.6)	(2.2)	1.2	0.8		7D90-7
424	M	剥片	安山岩	2.2	2.3	0.7	2.2	120°	7D90-8
425	M	剥片	安山岩	(4.1)	(3.3)	(1.1)	13.3		7D90-9

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
426	M	剥片	安山岩	(2.6)	2.2	0.9	5.4		7D90-10
427	M	剥片	安山岩	(0.9)	(1.6)	0.3	0.3		7D90-11
428	M	ナイフ形石器	安山岩	3.4	1.6	0.9	3.2		7D90-12
429	M	剥片	安山岩	(2.7)	2.0	0.9	6.8		7D90-13
430	M	剥片	安山岩	(2.9)	(1.6)	0.8	3.2		7D90-14
431	M	剥片	安山岩	(2.0)	(1.7)	(0.5)	1.8	115°	7D90-15
432	M	剥片	安山岩	(3.0)	(2.9)	(0.8)	4.6		7D90-16
433	M	剥片	安山岩	2.9	2.4	0.8	3.5	115°	7D90-17
434	M	剥片	安山岩	2.5	4.9	0.9	8.6	130°	7D90-18
435	M	剥片	安山岩	(2.7)	2.9	0.8	7.5	125°	7D90-19
436	M	ナイフ形石器	安山岩	4.1	2.1	1.2	7.3		7D90-20
437	M	二次加工ある剥片	安山岩	2.7	2.9	0.7	3.2	120°	7D90-22
438	M	剥片	安山岩	(3.2)	(2.1)	(1.6)	8.4		7D90-23
439	M	剥片	安山岩	2.4	2.5	0.7	2.9	120°	7D90-24
440	M	剥片	安山岩	(2.7)	(1.9)	1.1	4.5		7D90-25
441	M	剥片	安山岩	1.6	2.5	0.7	2.1	95°	7D90-26
442	M	剥片	安山岩	(2.5)	4.0	0.8	9.5		7D90-27
443	M	剥片	安山岩	(1.0)	(1.7)	(0.3)	0.4		7D90-28
444	M	剥片	安山岩	1.4	1.5	0.4	0.5	105°	7D91-4
445	M	ナイフ形石器	安山岩	2.8	1.8	1.1	5.8		7D91-5
446	M	剥片	安山岩	(2.5)	(2.5)	0.6	2.7		7D91-6
447	M	剥片	安山岩	2.1	3.1	1.0	2.4	70°	7D91-8
448	M	剥片	安山岩	4.3	3.5	1.4	23.7	120°	7D91-9
449	M	剥片	安山岩	(1.8)	(2.2)	(0.9)	1.8		7D91-10
450	M	ナイフ形石器	安山岩	3.3	2.2	0.8	5.9		7D91-11
451	M	剥片	安山岩	(4.4)	(2.7)	(1.2)	9.8		7D91-12
452	M	剥片	安山岩	2.2	2.6	0.6	4.6	100°	8D00-4
453	M	石核	安山岩	(2.6)	4.7	1.5	16.0		8D00-5
454	M	剥片	安山岩	2.6	(1.3)	1.3	2.6	115°	8D00-6
455	M	剥片	安山岩	(2.2)	(3.4)	(0.9)	(2.4)		8D00-7
456	M	剥片	安山岩	(4.5)	(3.3)	1.3	18.5		8D01-4
457	M	剥片	安山岩	(2.5)	(2.5)	(1.6)	5.0		8D01-5
458	Na	細石刃	黒曜石	2.8	0.6	0.2	0.4	115°	7C64-6
459	Na	二次加工ある剥片	黒曜石	1.6	1.6	0.5	1.2		7C65-7
460	Na	二次加工ある剥片	安山岩	(1.1)	(2.0)	(0.8)	2.0		7C65-9
461	Na	剥片	玉髄	1.3	1.9	0.4	1.0	120°	7C75-5
462	Na	剥片	ホルンフェルス	(2.6)	(4.2)	(0.4)	5.3		7C75-6
463	Na	剥片	ホルンフェルス	2.7	3.8	0.8	9.3		7C75-8
464	Na	剥片	ホルンフェルス	(1.7)	(2.3)	(0.7)	2.0	115°	7C75-9
465	Na	剥片	黒曜石	(1.2)	(2.2)	(0.2)	0.5		7C75-11
466	Na	剥片	チャート	(2.0)	(1.8)	(0.9)	3.5		7C75-12
467	Nb	石核	流紋岩	(2.5)	(3.0)	(2.4)	17.2		7C65-10
468	Nb	剥片	ホルンフェルス	(2.2)	(2.3)	(1.0)	3.7		7C65-11
469	Nb	剥片	黒曜石	1.7	2.5	1.1	2.8	100°	7C65-12
470	Nb	剥片	泥岩	2.3	2.9	0.8	3.9		7C65-13
471	Nb	剥片	チャート	(3.7)	(4.4)	(1.3)	19.9		7C65-14

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
472	Nb	剥片	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.8	110°	7C65-15
473	Nb	剥片	チャート	2.8	3.6	0.6	6.0		7C65-16
474	O	剥片	流紋岩	2.0	3.2	0.8	5.1	120°	7C74-4
475	O	二次加工ある剥片	黒曜石	(1.9)	(1.2)	(1.3)	1.7		7C74-7
476	O	二次加工ある剥片	黒曜石	(2.2)	(1.0)	(0.5)	1.6		7C74-8
477	O	細石刃核	黒曜石	2.2	1.3	1.1	4.2		7C74-9
478	O	剥片	黒曜石	1.8	2.5	0.7	1.6	85°	7C74-10
479	O	剥片	泥岩	2.1	2.3	0.4	2.0		7C74-11
480	O	剥片	黒曜石	3.1	2.0	1.1	4.3	130°	7C74-12
481	O	剥片	安山岩	3.8	4.5	1.2	20.7		7C74-13
482	O	ピエスエスキーユ	黒曜石	1.6	2.3	0.5	2.0		7C74-14
483	O	剥片	黒曜石	3.3	2.0	1.2	9.3		7C75-15
484	P	ナイフ形石器	流紋岩	1.8	2.9	1.0	3.7		8C04-4
485	P	剥片	流紋岩	(1.3)	(1.3)	(0.4)	0.6		8C04-5
486	P	ナイフ形石器	流紋岩	2.1	1.7	0.8	1.9		8C04-6
487	P	ナイフ形石器	流紋岩	2.0	1.3	0.4	1.3		8C04-7
488	P	剥片	流紋岩	1.6	1.5	0.3	0.5	110°	8C04-8
489	P	剥片	流紋岩	1.2	1.5	0.3	0.4	110°	8C04-9
490	P	剥片	流紋岩	1.3	1.5	0.2	0.3	115°	8C04-10
491	P	ナイフ形石器	流紋岩	(2.2)	(1.3)	(0.5)	2.0		8C04-11
492	P	砕片	流紋岩	1.1	0.9	0.2	0.1		8C04-12
493	P	ナイフ形石器	流紋岩	(1.0)	(1.5)	(0.4)	0.5		8C04-13
494	P	ナイフ形石器	流紋岩	2.5	1.6	0.6	2.2		8C04-14
495	P	剥片	流紋岩	1.3	1.7	0.4	0.7	90°	8C04-15
496	P	ナイフ形石器	流紋岩	2.7	1.4	0.8	1.9		8C04-16
497	P	石核	流紋岩	(2.6)	(2.5)	(1.1)	6.6		8C04-17
498	P	石核	流紋岩	2.8	3.5	1.5	11.6		8C04-18
499	P	砕片	流紋岩	0.4	0.7	0.1	0.03		8C04-19
500	P	二次加工ある剥片	流紋岩	1.1	1.1	0.3	0.2	90°	8C04-20
501	P	ナイフ形石器	流紋岩	2.3	1.2	0.4	1.0		8C04-21
502	P	剥片	流紋岩	1.6	1.1	0.4	0.7	115°	8C04-22
503	P	ナイフ形石器	流紋岩	1.5	1.3	0.5	1.3		8C04-23
504	Q	ナイフ形石器	流紋岩	3.4	1.2	0.8	2.2		8C26-6
505	Q	二次加工ある剥片	流紋岩	1.5	1.8	0.5	1.1	120°	8C26-7
506	Q	剥片	泥岩	2.0	2.0	0.5	1.9	110°	8C26-8
507	Q	ナイフ形石器？	チャート	1.3	1.0	0.4	0.5		8C36-4
508	Q	剥片	流紋岩	0.8	1.2	0.2	0.2	125°	8C36-5
509	Q	砕片	黒曜石	1.3	0.6	0.4	0.1		8C36-6
510	Q	剥片	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.5		8C36-7
511	Q	剥片	流紋岩	0.8	1.0	0.2	0.1	120°	8C37-4
512	Q	二次加工ある剥片	流紋岩	2.8	2.1	0.8	4.1	115°	8C37-5
513	Q	ナイフ形石器	黒曜石	2.0	1.0	0.6	0.8		8C37-6
514	Q	剥片	流紋岩	(1.5)	(1.6)	(0.3)	(0.7)	100°	8C37-7
515	Q	剥片	流紋岩	2.7	1.9	0.5	1.9		8C37-8
516	Q	砕片	流紋岩	1.3	1.2	0.4	0.3		8C37-9
517	Q	砕片	黒曜石	0.8	0.8	0.2	0.1	105°	8C37-10

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
518	Q	砕片	黒曜石	(0.7)	(0.7)	(0.2)	(0.1)		8C37-11
519	T	剥片	ホルンフェルス	1.7	1.2	0.4	0.8	130°	6E09-4
520	T	剥片	砂岩	2.8	3.0	0.9	8.9	120°	6E09-5
521	T	剥片	流紋岩	1.5	1.6	0.4	0.5	120°	6E19-4
522	T	剥片	砂岩	4.0	3.1	0.9	11.9	115°	6E19-6
523	T	石核	ホルンフェルス	3.6	5.2	1.6	29.4		6E19-8
524	T	石核	ホルンフェルス	3.1	5.0	1.6	22.3		6E19-9
525	T	剥片	安山岩	3.3	1.7	0.5	2.0	85°	6E19-10
526	ブロック外	剥片	流紋岩	(1.7)	(3.6)	(0.7)	3.4	110°	0D79-4
527	ブロック外	剥片	流紋岩	(2.0)	(1.5)	(0.2)	0.6	110°	0D79-5
528	ブロック外	二次加工ある剥片	流紋岩	4.8	2.8	1.0	10.3		0D79-6
529	ブロック外	剥片	安山岩	(1.8)	(2.0)	0.4	1.1		0D89-4
530	ブロック外	二次加工ある剥片	黒曜石	1.5	1.4	0.4	0.7	90°	0E70-4
531	ブロック外	剥片	黒曜石	2.9	1.6	0.3	0.9	120°	0E70-5
532	ブロック外	二次加工ある剥片	黒曜石	2.5	2.1	0.3	1.9	130°	0E70-6
533	ブロック外	二次加工ある剥片	黒曜石	0.9	1.8	0.3	0.5	130°	0E70-7
534	ブロック外	スクレイパー	黒曜石	1.8	2.5	0.4	1.9		0E80-4
535	ブロック外	剥片	流紋岩	1.8	2.2	0.5	1.5	120°	0E81-6
536	ブロック外	剥片	流紋岩	4.3	4.3	1.1	17.8	120°	0E91-4
537	ブロック外	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	1.5	0.6	2.2		0E92-4
538	ブロック外	スクレイパー	流紋岩	3.0	3.4	1.6	12.5		1E02-2
539	ブロック外	剥片	泥岩	3.7	2.2	0.4	3.0		1E02-4
540	ブロック外	石核	流紋岩	3.1	2.7	1.3	8.0		1E02-5
541	ブロック外	二次加工及び使用痕ある剥片	流紋岩	6.0	3.4	1.0	18.4	110°	1E04-2
542	ブロック外	石核調整剥片	流紋岩	5.3	4.0	2.3	26.8	125°	1E10-2-②
543	ブロック外	石核調整剥片	流紋岩	4.8	1.7	1.3	7.0	120°	1E10-2-③
544	ブロック外	剥片	流紋岩	3.1	2.6	1.3	8.2	110°	1E10-2-④
545	ブロック外	剥片	流紋岩	(2.6)	(2.3)	(0.5)	2.4	110°	1E10-2-⑤
546	ブロック外	剥片	流紋岩	3.8	1.4	0.8	2.8	110°	1E10-4
547	ブロック外	石核	流紋岩	3.2	3.5	2.7	18.1		1E10-5
548	ブロック外	剥片	流紋岩	2.9	2.8	2.1	12.9	120°	1E10-6
549	ブロック外	剥片	砂岩	4.3	2.8	1.3	10.6	80°	1E10-8
550	ブロック外	ナイフ形石器	流紋岩	4.0	2.2	0.8	6.4		1E23-4
551	ブロック外	石刃状剥片	流紋岩	6.8	3.1	1.1	15.8	120°	1E23-5
552	ブロック外	二次加工ある剥片	流紋岩	(3.1)	2.0	0.5	2.9		1E74-2
553	ブロック外	剥片	泥岩	3.7	2.5	1.6	10.1	130°	2B28-3
554	ブロック外	剥片	チャート	1.9	2.1	0.7	2.3	110°	4E22-4
555	ブロック外	剥片	珪質頁岩	4.7	3.4	0.9	10.8		5E37-4
556	ブロック外	槍先形尖頭器	珪質頁岩	3.7	1.7	0.5	3.1		5E37-5
557	ブロック外	剥片	流紋岩	3.0	3.1	0.6	4.6	110°	5E44-4
558	ブロック外	剥片	砂岩	(2.6)	(3.8)	(0.9)	7.9		5E92-4
559	ブロック外	剥片	砂岩	3.3	6.1	1.7	31.1	115°	5E93-4
560	ブロック外	剥片	砂岩	2.0	1.9	0.8	2.3	90°	6D86-4
561	ブロック外	礫器	ホルンフェルス	(5.4)	(4.3)	(1.6)	43.0		6D95-4
562	ブロック外	剥片	流紋岩	1.8	1.5	0.3	0.7		6E21-4
563	ブロック外	剥片	黒曜石	2.0	1.8	0.3	0.7		6E85-4

番号	ブロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
564	ブロック外	剥片	黒曜石	(1.5)	(1.9)	(0.2)	0.5		6E85-5
565	ブロック外	剥片	黒曜石	(0.8)	(1.7)	(0.2)	0.2		6E86-4
566	ブロック外	二次加工ある剥片	黒曜石	1.2	1.4	0.4	0.4	120°	7C64-4
567	ブロック外	剥片	泥岩	1.5	1.5	0.2	0.6		7C64-5
568	ブロック外	スクレイパー	黒曜石	2.3	1.5	0.7	2.8		7C73-4
569	ブロック外	剥片	黒曜石	1.4	2.9	0.9	3.1		7C73-5
570	ブロック外	槍先形尖頭器	流紋岩	2.0	3.2	0.8	5.1	120°	7C74-17
571	ブロック外	二次加工ある剥片	黒曜石	1.8	2.9	0.6	2.7	120°	7C75-16
572	ブロック外	剥片	泥岩	2.2	1.0	0.5	0.9	110°	7C85-4
573	ブロック外	剥片	ホルンフェルス	(3.5)	(6.1)	(1.6)	39.2		7D60-4
574	ブロック外	剥片	流紋岩	(2.7)	(2.8)	(0.8)	4.5	110°	7D60-5
575	ブロック外	石核	泥岩	2.0	3.0	3.1	14.9		7D61-4
576	ブロック外	剥片	安山岩	2.6	1.8	0.5	2.4	120°	7D68-3
577	ブロック外	ナイフ形石器	安山岩	(3.0)	(1.2)	(0.9)	3.3		7D68-4
578	ブロック外	ナイフ形石器	泥岩	(2.7)	(2.1)	(0.8)	4.2		7D68-5
579	ブロック外	ナイフ形石器	泥岩	(3.4)	(2.3)	(1.2)	8.7		7D68-6
580	ブロック外	彫器	珪質頁岩	5.0	2.2	0.9	6.2		7D70-4
581	ブロック外	剥片	黒曜石	1.9	1.8	0.7	1.6		7E04-6
582	ブロック外	彫器	黒曜石	2.5	1.6	0.7	2.4		7E12-7
583	ブロック外	二次加工ある剥片	ホルンフェルス	(4.7)	(5.0)	(0.9)	24.7		7E12-11
584	ブロック外	剥片	ホルンフェルス	1.7	2.2	0.3	0.9	120°	7E13-5
585	ブロック外	ピエスエスキーユ	チャート	2.3	1.6	0.4	2.1		7E21-9
586	ブロック外	槍先形尖頭器	流紋岩	5.1	1.7	0.8	5.9		7E31-4
587	ブロック外	剥片	安山岩	(1.3)	(3.5)	(0.4)	1.6		8C05-4
588	ブロック外	剥片	流紋岩	1.5	2.4	0.5	1.5	125°	8C16-4
589	ブロック外	砕片	流紋岩	1.0	1.1	0.6	0.4		8C26-4
590	ブロック外	ナイフ形石器	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.6		8C26-5
591	ブロック外	砕片	流紋岩	1.0	0.9	0.4	0.2		III-1
592	ブロック外	砕片	流紋岩	0.6	1.1	0.2	0.1		III-2
593	ブロック外	剥片	流紋岩	0.8	1.1	0.2	0.1	120°	III-3
594	ブロック外	剥片	チャート	1.6	1.3	0.3	0.5	110°	0003-8

(21) III層直上石器群（第107図、図版37、第6表）

先土器時代終末から縄文時代初頭に位置付けられる石器が10点出土した。660、661、662の3点を除き遺跡各所からの出土である。

653は両面加工の槍先形尖頭器である。これも表面と裏面の調整剥離に対応関係がみられ、素材となった剥片を左右に回転させて同方向から調整剥離を施していると思われる。

654は先端が左傾した半両面加工の槍先形尖頭器である。横長の部厚い剥片を素材として用いており、裏面の約半分には主要剥離面が残る。調整剥離は、表面には器体整形用として両側縁全体から施され、裏面には器体を薄くするために打面部及び先端部に施している。

655も先端が左傾した半両面加工の槍先形尖頭器である。表面先端部には広く調整部分が残る。調整剥離はやはり左右に回転させて同一方向から施していると考えられる。

657は周辺加工の槍先形尖頭器である。厚みのある縦長の剥片を素材に用いて、調整剥離は背面左側縁上半部と右側縁には主要剥離面から、末端部は背面から施している。礫面を打面としている。

656は丸みのある断面をした有舌尖頭器である。舌部は浅い抉りで長い。

658～662はピエスエスキーユである。

658は表面の右端に礫面が残る。

659は下部縁辺は細かな鋸歯状を呈する。

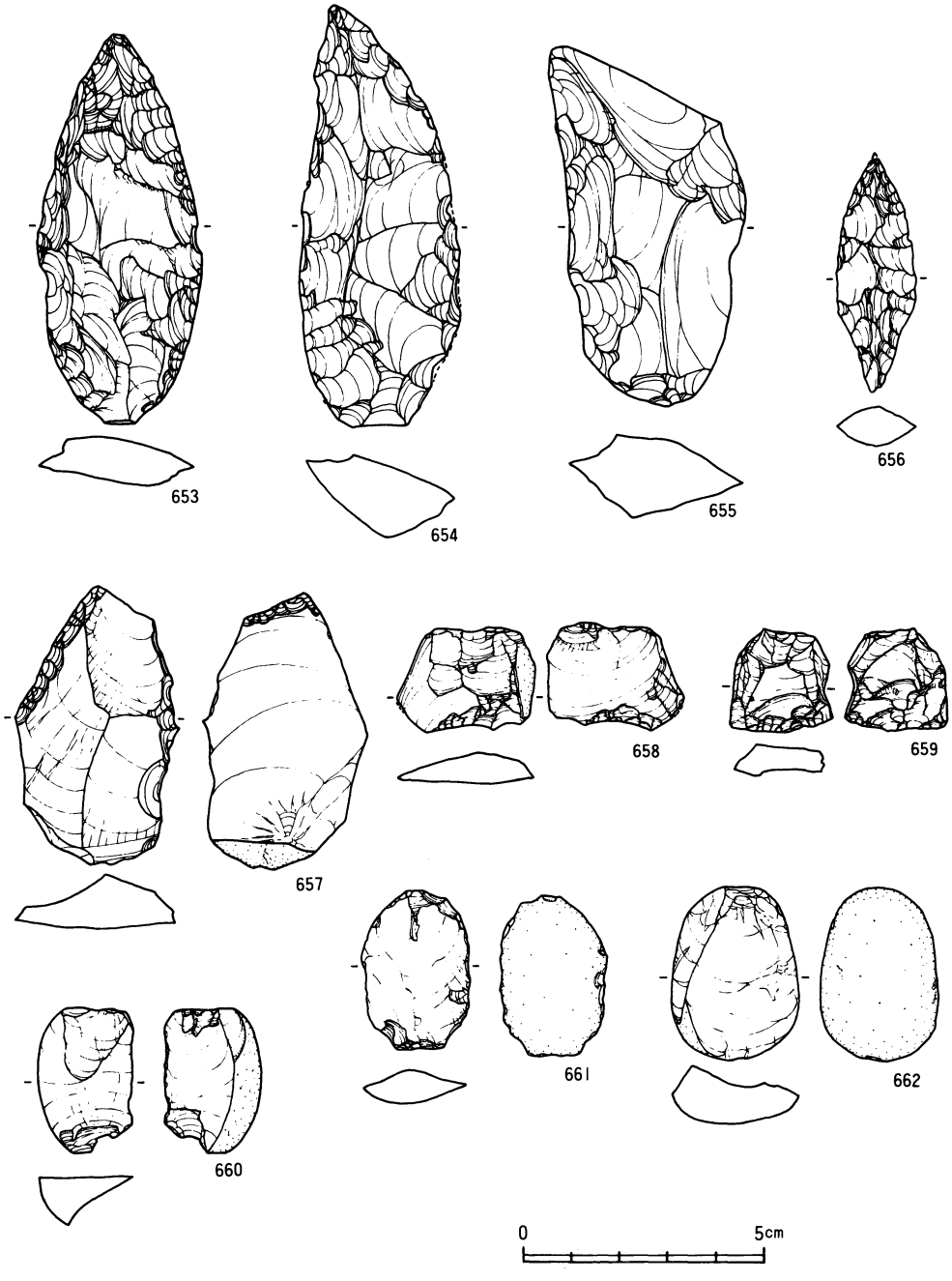
660は裏面右側に広く礫面が残る。

661は裏面は礫面のままで周縁には細かな剥離痕があり、使用痕であろうか。

662も裏面に礫面がそのまま残る。

第6表　III層直上石器群一覧表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
653	槍先形尖頭器	スレート	8.0	3.4	1.0	26.0		1E24-2
654	槍先形尖頭器	安山岩	8.7	3.3	1.4	42.8		6C17-1
655	槍先形尖頭器	安山岩	7.5	3.7	1.8	46.0		1E14-2-2
656	有舌尖頭器	安山岩	(4.7)	1.7	0.8	5.8		5D59-2
657	槍先形尖頭器	流紋岩	5.8	3.4	1.4	21.6		1E84-2-2
658	ピエスエスキーユ	流紋岩	2.1	2.9	0.7	4.0		0D96-2-5
659	ピエスエスキーユ	黒曜石	2.1	2.2	0.7	2.6		2E03-2-3
660	ピエスエスキーユ	チャート	3.0	2.0	1.1	5.9		7E11-4
661	ピエスエスキーユ	チャート	3.3	2.4	0.7	5.2		7E11-5
662	ピエスエスキーユ	チャート	3.5	2.8	1.8	19.2		7E12-5



第107図　Ⅲ層直上石器群実測図（2/3）

(22)　Ⅰ、Ⅱ層出土先土器時代石器群（第108図、図版38、第７表）

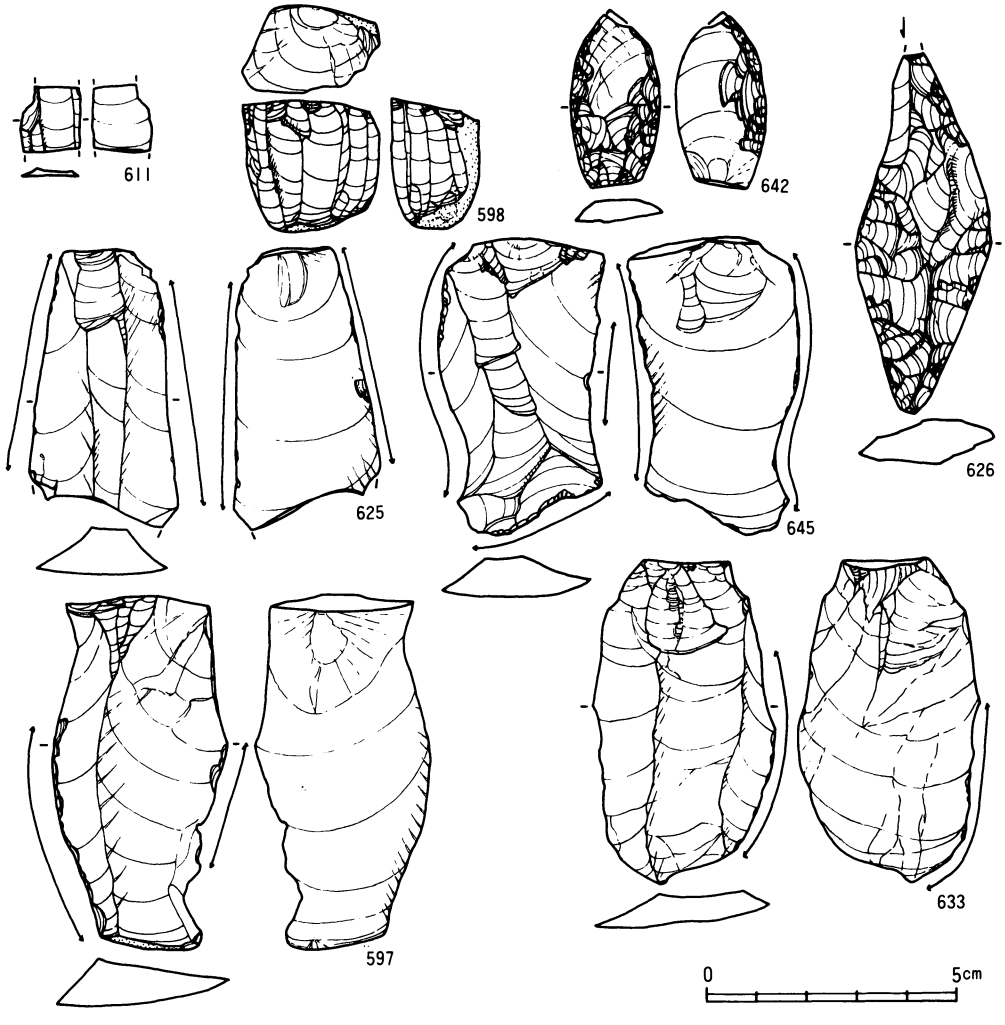
Ⅰ層(表土攪乱層)、遺構覆土、表採、それにⅡ層出土でⅢ層主体石器群各ブロックへの帰属が不明のもの等々を「Ⅰ・Ⅱ層出土先土器時代石器群」として一括した。

器種別にみると、槍先形尖頭器３点、細石刃２点、細石刃核１点、ナイフ形石器７点、スクレイパー３点、揉錐器１点、二次加工ある剥片９点、使用痕ある剥片４点、打面再生剥片１点、その他剥片・砕片27点、計58点である。

611はやや幅広であるが細石刃と思われる。上下とも切断されている。

598は背後から下面にかけて礫面を残した細石刃核である。１回の剥離で平坦な打面がつくられ、打面調整は施されない。

642はやや幅広の縦長剥片を素材とした周辺加工の槍先形尖頭器である。基部には打面が残る。調整剥離はⅢ層ブロック外出土の556と同様剥片を左右に回転して同一方向から施している



第108図　Ⅰ・Ⅱ層出土先土器時代石器群実測図（2/3）

が、表面左側縁にもかなり調整が施され556よりも加工量が多い。先端を少し欠損している。

626は先端部に1条の樋状剥離が入る両面加工の槍先形尖頭器である。先端は欠損している。側面形態は樋状剥離が抜けたところあたりから先が少し上方に屈曲し、やや厚くなっている。調整剥離もそのあたりまでは裏面に仕上げ痕があるが、それから先は表面の方に移行している。

597、625、633、645はいずれも使用痕がある剥片である。

597は背面左側縁の使用痕が顕著な石刃状剥片である。打面は平坦で広く残り、末端には礫面がみえる。

625は両側縁と2本の稜が直線状にのびた石刃であるが、下半を欠損している。打面調整は粗く施されていると思われる。両側縁には微細な使用痕がみられる。

633は両側縁下半に使用痕がみられる縦長剥片で打面調整はあまり顕著でない。

645は剥離面の交点を打点として剥取された縦長剥片であるが、周縁全体特に末端の使用痕が顕著である。

第7表　I・II層出土先土器時代石器群一覧表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
595	スクレイパー	黒曜石	2.3	2.6	0.9	4.6		0D69-2-1
596	揉錐器	流紋岩	4.4	2.2	0.4	3.7		0D85-2
597	使用痕ある剥片	安山岩	6.8	3.4	1.2	23.8	115°	0D87-2
598	細石刃核	流紋岩	2.6	2.8	1.8	16.6		0D95-2-1
599	二次加工ある剥片	流紋岩	(2.9)	(4.7)	(1.7)	11.4		0D95-2-2
600	打面再生剥片	流紋岩	2.3	2.9	1.6	8.8	120°	0D95-2-4
601	剥片	流紋岩	(2.4)	(2.2)	(0.7)	3.2		0D95-2-5
602	剥片	安山岩	(3.2)	(4.5)	(1.2)	16.0		0D95-2-6
603	剥片	安山岩	(3.2)	3.1	0.7	5.3		0D95-2-7
604	二次加工ある剥片	流紋岩	2.1	2.4	1.0	3.9	130°	0D96-2-3
605	細石刃	流紋岩	2.7	1.0	0.4	0.8		0D96-2-4
606	剥片	流紋岩	2.8	1.5	0.8	2.6	120°	0D96-2-6
607	剥片	流紋岩	3.3	3.2	0.8	6.4	115°	0D96-2-7
608	剥片	流紋岩	2.3	2.1	0.8	2.3	130°	0D98-2-2
609	剥片	流紋岩	(3.0)	(2.0)	(0.5)	3.2	115°	0D98-2-3
610	剥片	安山岩	4.9	(3.8)	0.6	9.9		0D98-2-4
611	細石刃	珪質頁岩	(1.4)	(1.2)	(0.2)	0.3		0D98-2-5
612	剥片	流紋岩	2.5	2.6	0.5	2.7	105°	0E71-2-2
613	二次加工ある剥片	流紋岩	6.7	2.9	1.1	21.9	115°	0E80-2-1
614	槍先形尖頭器	流紋岩	(3.6)	(2.6)	(0.7)	5.6		0E80-2-3
615	二次加工ある剥片	流紋岩	2.0	2.6	0.6	1.8		0E81-2
616	剥片	泥岩	2.0	1.5	0.9	2.4		0E90-2
617	剥片	凝灰岩						0D99-2
618	剥片	流紋岩	(2.4)	(4.2)	(0.9)	3.7		1D05-2-2
619	剥片	流紋岩	1.4	1.3	0.6	1.0	130°	1D05-2-3

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
620	剥片	流紋岩	2.1	2.3	0.5	1.7	110°	1D05-2-4
621	剥片	泥岩	2.5	2.5	0.9	5.3		1D05-2-5
622	剥片	安山岩	2.4	4.0	1.1	8.8		1D06-2-2
623	剥片	チャート	2.0	0.6	0.5	0.4		1D06-2-3
624	剥片	流紋岩	2.0	0.7	0.3	0.4	115°	1D10-2-2
625	使用痕ある剥片	流紋岩	(5.4)	(3.0)	(1.2)	16.7	100°	1D49-2
626	槍先形尖頭器	流紋岩	(7.0)	2.7	0.9	12.7		1D51-2
627	剥片	泥岩	5.0	4.2	1.4	17.6	125°	1E00-2-2
628	スクレイパー	流紋岩	3.0	3.4	1.6	12.5		1E02-2
629	二次加工ある剥片	頁岩	10.4	5.2	2.1	105.4	120°	1E10-2-1
630	剥片	泥岩	(2.6)	(3.4)	(0.6)	5.5		1E13-2-1
631	剥片	珪質頁岩	3.4	2.0	1.0	5.5	115°	1E13-2-2
632	ナイフ形石器	流紋岩	(3.6)	(3.7)	(1.4)	17.1		1E14-2-1
633	使用痕ある剥片	流紋岩	6.3	3.7	0.7	16.4	120°	1E46-2
634	ナイフ形石器	泥岩	(5.4)	2.0	1.1	10.5		1E84-2-3
635	ナイフ形石器	泥岩	(6.3)	(3.4)	(1.6)	30.7		1E94-2
636	剥片	泥岩	7.2	4.1	2.1	60.5	125°	1E95-2
637	ナイフ形石器	玉髄	(2.2)	(2.1)	(0.4)	1.5		2E25-2
638	剥片	安山岩	(5.2)	(4.7)	(1.0)	20.9		2E33-2-2
639	剥片	流紋岩	(1.9)	(3.2)	(0.5)	2.9		2E36-2
640	ナイフ形石器	流紋岩	2.9	1.4	0.7	2.2		2E56-2-1
641	二次加工ある剥片	安山岩	3.4	3.2	0.8	6.5	140°	4D54-2
642	槍先形尖頭器	流紋岩	(3.4)	1.8	0.6	3.4		5E56-2
643	ナイフ形石器	黒曜石	3.7	1.8	0.8	5.2		7C07-2
644	二次加工ある剥片	安山岩	(2.7)	3.5	0.7	8.8		7C66-2
645	使用痕ある剥片	流紋岩	5.8	3.3	0.8	15.5	110°	5E-0
646	ナイフ形石器	黒曜石	(3.7)	2.7	0.7	6.4		北側表採-1
647	剥片	黒曜石	(1.0)	(2.3)	(0.4)	0.8		北側表採-2
648	剥片	安山岩	3.9	4.8	1.5	26.3	110°	北側表採-3
649	スクレイパー	珪質頁岩	4.0	3.8	0.9	12.2		北側表採-4
650	二次加工ある剥片	流紋岩	3.8	3.5	1.4	15.3		南側表採
651	剥片	玉髄	2.0	1.8	0.4	1.3	110°	表採-2
652	二次加工ある剥片	チャート	(1.4)	(1.4)	(0.5)	0.8		表採-3

(23) III層主体石器群のまとめ

これまでIII層主体石器群として一括して扱ってきたが、ここでは接合関係・組成・剥片剥離技術などによって、時期的に異なると思われるいくつかのグループに分けて検討したい。

III_1期

G～Mの7ブロックにより構成されるグループで、Mブロックを除くG～LはGブロックを中心として接合関係をもつ。出土層位はIII層下部である。

組成としてはナイフ形石器と角錐状石器を主体とするが、スクレイパーの少なさが注意され

る。また、ナイフ形石器には1側縁加工のものが目立つ。

剝片剝離技術は、縦長剝片と横長剝片の各々を生産する技法があり、縦長剝片は大形で細みのナイフ形石器や角錐状石器と、横長剝片はスクレイパーや小形のずんぐりとしたナイフ形石器と各々結び付いていると思われる。石核もこれらに対応するように前者に係わるものと後者に係わるものとが出土している。あまり打面調整を施さない単設打面の石核は前者に、既設の剝離面を打面として交互に剝離を繰り返すチョッピングトゥール状の石核などは後者に係わるものであろう。

調整加工は鋸歯状で急斜なものが多く、石材は安山岩が圧倒的に多く使用されている。

本資料に類似したものは、高井戸東遺跡IV下層（小田他1977)、東内野遺跡IV層（戸田他1977)、唐沢遺跡（田中1979)、多聞寺前遺跡IV層中部（戸沢・鶴丸1983）などにみられ、編年的には武蔵野第II a 期及び相模野第III期中頃に位置付けられるものと思う。

III_2期

A～Fの6ブロックにより構成されるグループで、各ブロックは礫群を共伴し、A・B・Eの各ブロック及びC・Dブロック、それにE・Fブロック間で接合する。出土層位はIII層中部～下部である。

組成的にはナイフ形石器とスクレイパーが主体であるが、それらの素材となる剝片は、ほとんど打面調整を施されず礫面などを打面とした不定形の小剝片と思われる。石材は砂岩の多用に特徴がある。

本資料はやや不明瞭な内容の石器群であるが、鈴木遺跡IV層(松村他1978)、東内野遺跡上層（戸田他1977)、権現後遺跡第2文化層（橋本他1984）などに類例がみられ、編年的には武蔵野第II a 期及び相模野第III期の終わり頃と考える。

III_3期

明確なブロックを形成しないが主に遺跡北端の1Eグリッド付近から出土したもので、出土層位はIII層中部～下部である。

組成としてはナイフ形石器・スクレイパー・揉錐器がある他、ブロック外出土の526・528・551やI・II層出土の597・625・633などの石刃あるいは石刃状剝片が目立ち、剝片剝離技術はいわゆる石刃技法に近いものが主体となっていると推定される。

編年的には武蔵野第II b 期前半及び相模野第IV期に位置付けられるであろう。

III_4期

PとQの両ブロックから構成されるもので、出土層位はIII層中部である。

組成的にはナイフ形石器の占める割合が高くかつそのナイフ形石器が全て小形である点に特徴がある。ナイフ形石器11点の最大のもので長さ3.4cm、最小のものは1.3cmを測り、平均は2.2cmである。石材は圧倒的に流紋岩が多い。

本資料に近いものとして寺尾遺跡第III文化層（Ｂ１上面あるいは上部相当層）（白石・鈴木1980）や月見野IVＡ遺跡Ｌ１下底（あるいはＢ１上面）（明大月見野遺跡群調査団1969）の石器群が考えられるが、高井戸東遺跡IV上層（小田他1977）や東内野遺跡上層（戸田他1977）なども近いものと思われる。

編年的には武蔵野第IIｂ期後半及び相模野第IV期終末頃と考える。

III_5期

ブロック外出土の556・570・586やＩ・II層出土の626・642などの槍先形尖頭器をもってこの時期とする。

出土層位はIII層上部から上面で、層位的には細石刃はもちろんナイフ形石器とも一部重なるが、本遺跡ではこれらの伴出関係については確認出来なかった。

編年的には武蔵野第IIｂ期終末及び相模野第Ｖ期前半に位置付けられる。

III_6期

ＮとＯの両ブロック及びＩ・II層出土の598の細石刃核と611の細石刃が該当する。

トゥールとしては細石刃とピエスエスキーユしかなく、石器群としては欠落する部分が多いという不明瞭なものであるが、一応細石刃を主体とする石器群と考えて、編年的には武蔵野第III期及び相模野第Ｖ期中頃に位置付けたい。

III_7期

III層主体石器群ではないが、III層直上から出土したやや大形の尖頭器をもってこの時期とする。

なお、ピエスエスキーユの一部は縄文時代早期にまで下るかもしれない。

編年的には武蔵野第IV期及び相模野第Ｖ期後半に位置するものと考える。

4．礫群（第109～114図、図版39、第８表）

III層出土の礫は、約64個体総数245点を数え、そのうち約38個体171点が６つのまとまりをもって出土し、各々第１～第６礫群と呼称する。これらの礫群は１つを除き他は全て石器群を共伴している（第85～90図）。

(1) 第１礫群（第85・110図）

出土状況　約７個体15点が３～４ｍの範囲をもってやや散漫に出土した。

出土層位　III層中～下部である。

構成礫の大きさ　平均２～３cm約12ｇで、特に大きいものもなく、遺存状態も全て⅓以下の小礫片である。

石材　石英斑岩と砂岩がほとんどを占める。

接合関係　第２礫群及び第５礫群と有り。

(2) 第２礫群（第86・110図）

出土状況　唯一礫のみで構成されるブロックで、６Ｄ48グリッドから約５個体８点が2.5m程の範囲から出土。

出土層位　III層下部である。

構成礫の大きさ　平均約３～４cm約35ｇで、第１礫群よりやや大きいが遺存状態はやはり全て⅓以下の小礫片である。

石材　砂岩とホルンフェルスが圧倒的である。

接合関係　第１礫群及び第５礫群と有り。

(3) 第３礫群（第87・110図）

出土状況　６Ｄ85グリッド付近から約９個体33点が３～４ｍ程の広がりをもって出土、ややまとまりがみられる。

出土層位　III層中～下部である。

構成礫の大きさ　平均約２cm約５ｇで、遺存状態も全て⅓以下でかなりの小礫片である。

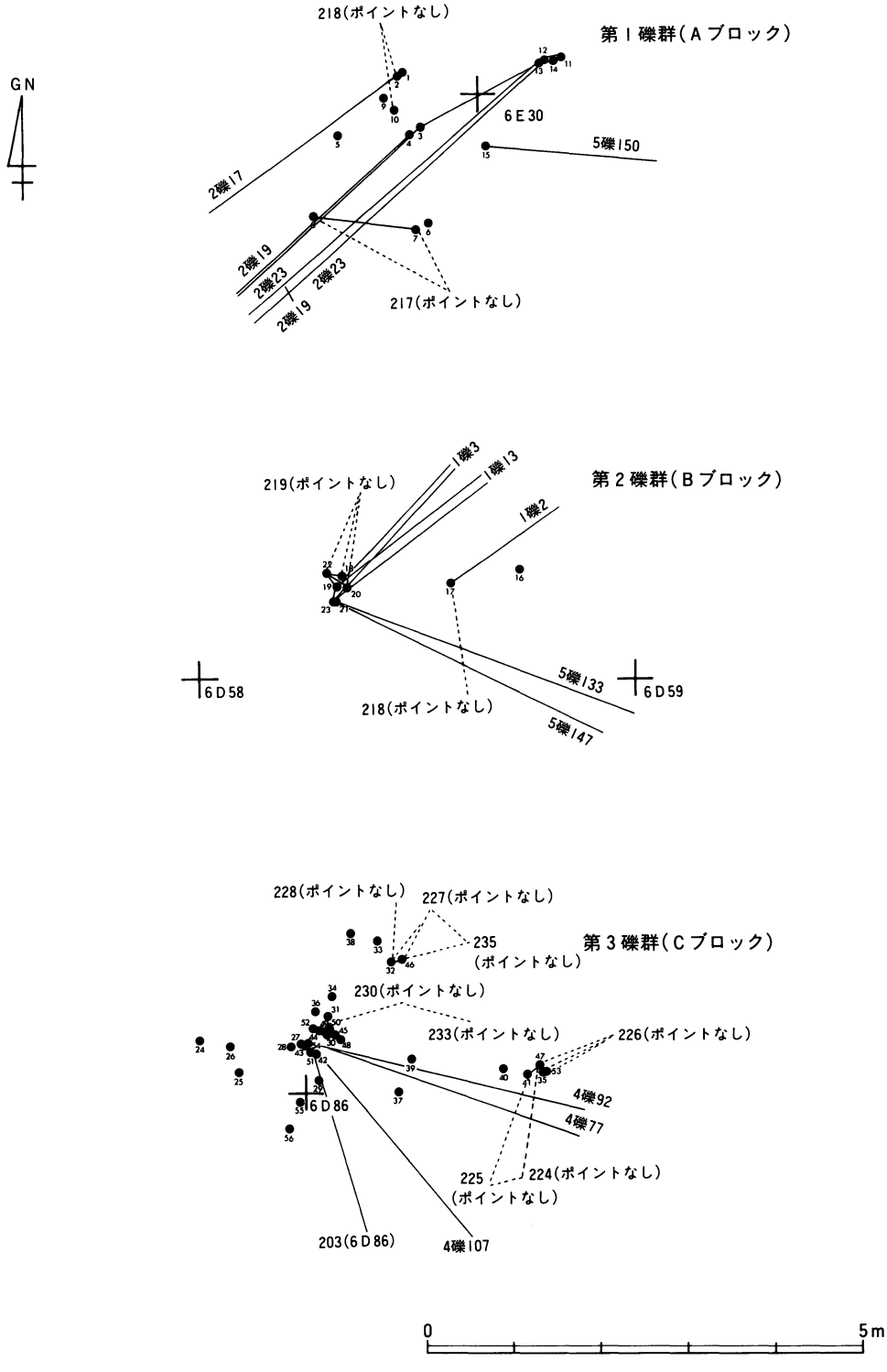
石材　石英斑岩が主体の他ホルンフェルスと砂岩である。

接合関係　第４礫群と有り。

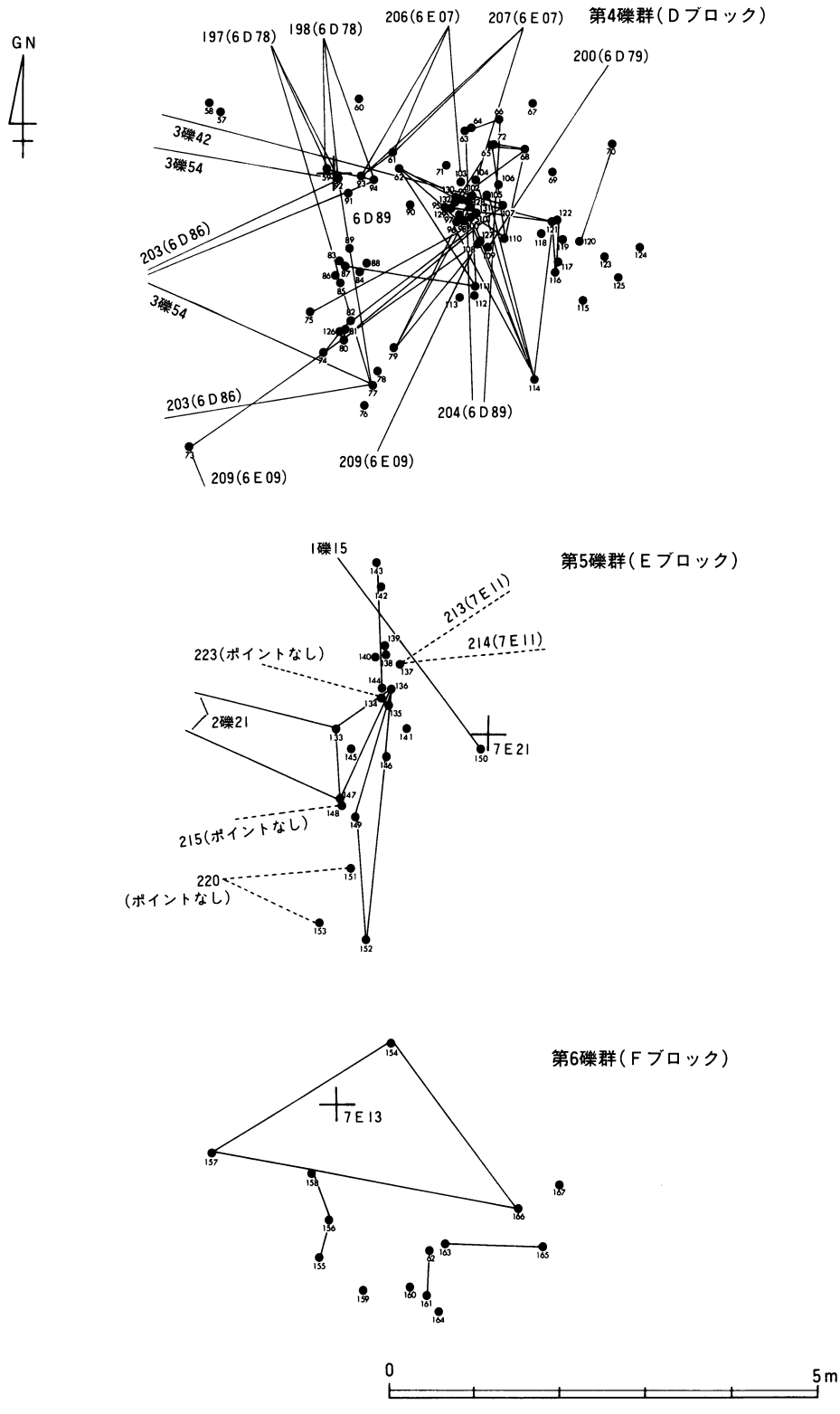
(4) 第４礫群（第88・111図）

出土状況　６Ｄ89グリッド付近から約15個体76点が約４～５ｍの広がりをもって出土した。

第109図　Ⅲ層出土礫分布図（1/1000）



第110図　第1～3礫群分布図（1/80）



第111図　第4～6礫群分布図（1/80）

良好なまとまりである。

出土層位　III層下部である。

構成礫の大きさ　平均約2cm弱約1gで、遺存状態も全て⅓の細かい礫片である。

石材　砂岩を主体に、ついで石英斑岩が多い。

接合関係　第3礫群と有り。

(5)　第5礫群（第89・111図）

出土状況　7E10～20グリッド付近にかけて約6個体21点が2×4m程の南北に細長く広がって出土。ややまとまりがみられる。

出土層位　III層中部である。

構成礫の大きさ　平均約2cm約2.5gで、遺存状態も全て⅓以下の小礫片である。

石材　デイサイトが主体である。

接合関係　第1礫群及び第2礫群と有り。

(6)　第6礫群（第90・111図）

出土状況　7E13グリッド付近から約8個体18点が径3～4m程の広がりをもって散漫に出土した。

出土層位　III層下部である。

構成礫の大きさ　平均2～3cm約15gで、遺存状態は全て⅓以下の小礫片である。

石材　石英斑岩を主体とする。

接合関係　他の礫群とはなし。

(7)　礫群のまとめ

ここでは6つの礫群をまとめて若干の検討をしてみたい。

出土状況　第4礫群を除きあまりまとまりがなく、規模も小さい。

出土層位　全てIII層中～下部である。

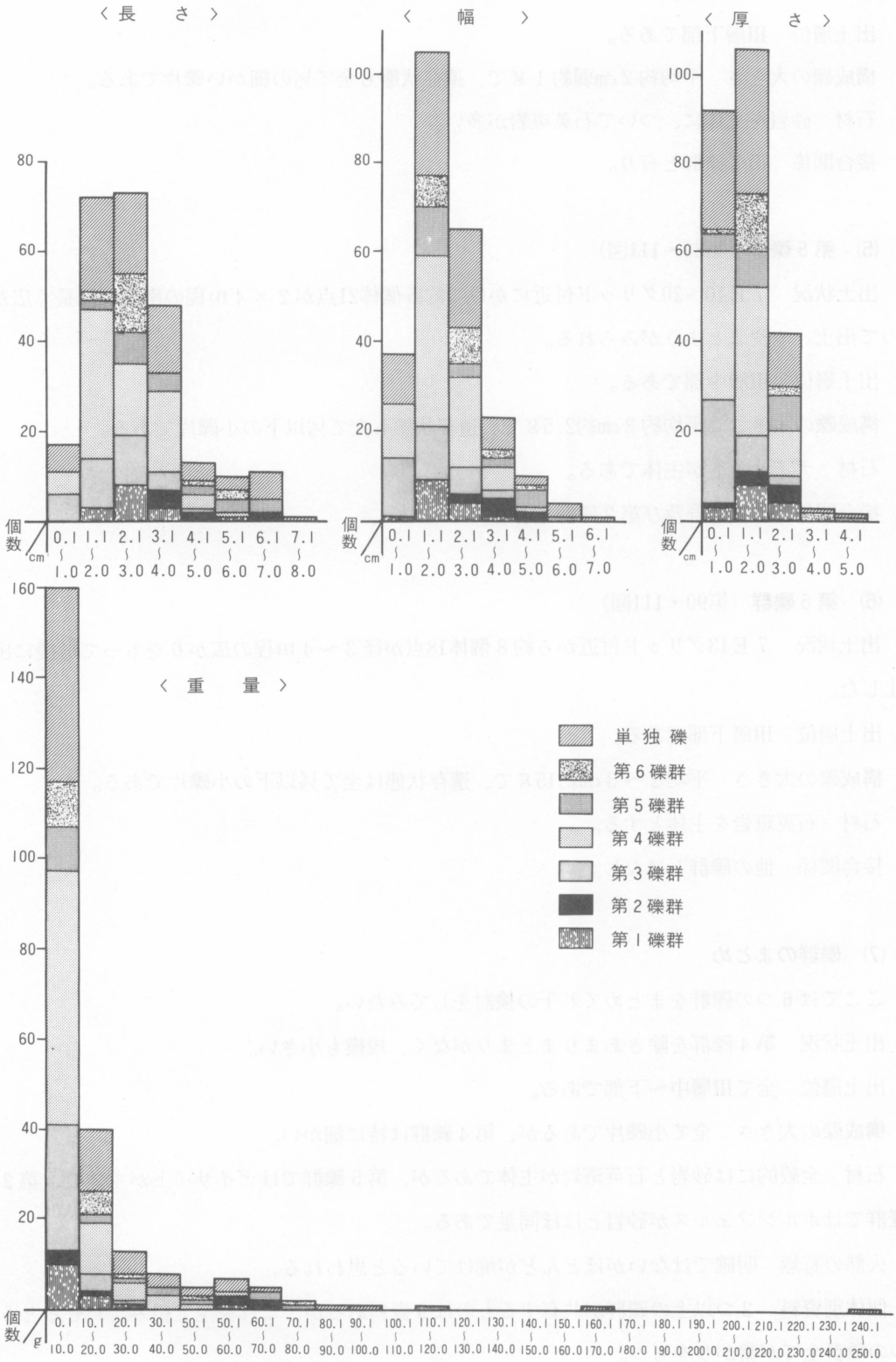
構成礫の大きさ　全て小礫片であるが、第4礫群は特に細かい。

石材　全般的には砂岩と石英斑岩が主体であるが、第5礫群ではデイサイトが主体で、第2礫群ではホルンフェルスが砂岩とほぼ同量である。

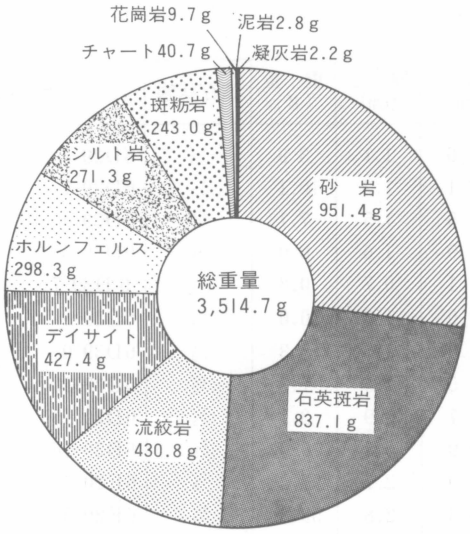
火熱の有無　明確ではないがほとんどが焼けていると思われる。

個体別資料　2つ以上の礫群が共有するものは9資料あるが、これを全て組み合わせると6つの礫群全てが繋がりをもつ。

接合関係　第1礫群・第2礫群・第5礫群のグループと第3礫群・第4礫群のグループに分



第112図　Ⅲ層出土礫の規模



第113図　Ⅲ層出土礫石材別重量比

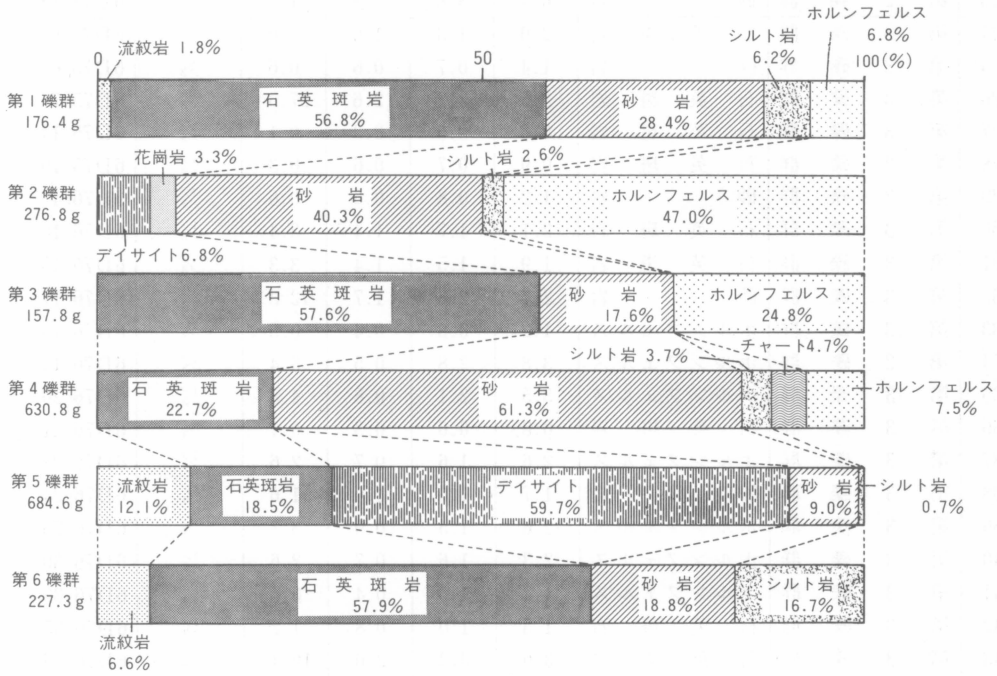
かれる。

ここで礫群間に接合関係をもつ資料のうち、3点以上の接合資料を検討してみると、その全てに分布の片寄りがみられ、次のような礫群間における礫の移動が考えられる。

第2礫群から第1礫群及び第5礫群へ、第3礫群から第4礫群へというもので、このことは第2礫群よりも第1礫群や第5礫群、あるいは第3礫群より第4礫群の方が構成礫が小さくかつまとまりのよいことなどの現象とよく符合する。

このような礫群間における礫の移動は、それが再度使用されることと理解され、礫群構成礫が必要となり、使用可能ならば何度も使用されたことが考えられる。

礫群の具体的な形態・構成・使用方法などはいまだ不明なことが多いが、ここでの検討を含めもっと多様な分析が積み重ねられることによって少しづつ解明されることを期待したい（川島他1983、鈴木他1984）。



第114図　Ⅲ層主体礫群石材別重量比

第8表　III層出土礫一覧表

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
1	第1礫群	ホルンフェルス	2.0	1.6	1.1	3.9	⅓	6D29-4
2	第1礫群	シルト岩	3.6	2.1	1.2	10.1	⅓	6D29-7
3	第1礫群	砂岩	2.5	1.5	1.5	7.1	⅓	6D39-4
4	第1礫群	砂岩	2.3	1.9	1.6	6.0	⅓	6D39-5
5	第1礫群	ホルンフェルス	1.2	1.1	0.7	0.8	⅓	6 D39-7
6	第1礫群	石英斑岩	3.0	2.0	1.3	10.0	⅓	6D39-8
7	第1礫群	石英斑岩	2.9	1.8	1.5	8.3	⅓	6D39-9
8	第1礫群	ホルンフェルス	2.9	1.5	1.5	7.3	⅓	6D39-10
9	第1礫群	流紋岩	2.2	1.7	0.9	3.1	⅓	6D39-15
10	第1礫群	シルト岩	1.3	0.9	0.8	0.9	⅓	6D39-16
11	第1礫群	石英斑岩	3.4	3.0	2.7	27.2	⅓	6E20-4
12	第1礫群	石英斑岩	5.1	3.3	2.8	50.8	⅓	6E20-5
13	第1礫群	砂岩	3.6	2.5	2.3	17.8	⅓	6E20-6
14	第1礫群	石英斑岩	2.2	1.3	1.3	3.9	⅓	6E20-7
15	第1礫群	砂岩	2.9	2.4	2.2	19.2	⅓	6E30-4
16	第2礫群	花崗岩	3.3	2.1	1.3	9.2	⅓	6D48-4
17	第2礫群	シルト岩	3.5	2.5	1.0	7.2	⅓	6D48-5
18	第2礫群	ホルンフェルス	6.3	3.8	2.5	64.6	⅓	6D48-7
19	第2礫群	砂岩	4.6	4.2	2.7	50.4	⅓	6D48-8
20	第2礫群	ホルンフェルス	3.2	3.2	1.4	10.0	⅓	6D48-9
21	第2礫群	デイサイト	3.4	3.3	1.7	18.7	⅓	6D48-10
22	第2礫群	ホルンフェルス	5.0	4.8	2.3	55.4	⅓	6D48-11
23	第2礫群	砂岩	6.4	3.8	2.9	61.3	⅓	6D48-12
24	第3礫群	石英斑岩	2.0	1.3	1.0	2.0	⅓	6D75-5
25	第3礫群	砂岩	1.4	0.7	0.6	0.6	⅓	6D75-6
26	第3礫群	石英斑岩	3.6	3.2	2.6	27.5	⅓	6D75-7
27	第3礫群	石英斑岩	0.6	0.5	0.3	0.1	⅓	6D75-14
28	第3礫群	石英斑岩	0.9	0.7	0.6	0.3	⅓	6D75-19
29	第3礫群	砂岩	1.2	0.8	0.6	0.6	⅓	6D76-4
30	第3礫群	石英斑岩	2.1	1.7	1.4	3.4	⅓	6D76-10
31	第3礫群	石英斑岩	1.9	1.5	1.4	3.3	⅓	6D76-15
32	第3礫群	砂岩	2.7	2.6	1.7	12.3	⅓	6D76-17
33	第3礫群	ホルンフェルス	1.2	0.9	0.4	0.5	⅓	6D76-18
34	第3礫群	ホルンフェルス	3.8	2.8	0.5	5.4	⅓	6D76-19
35	第3礫群	ホルンフェルス	3.5	2.1	0.8	4.8	⅓	6D76-20
36	第3礫群	石英斑岩	0.8	0.6	0.3	0.1	⅓	6D76-21
37	第3礫群	ホルンフェルス	2.6	1.6	0.7	2.6	⅓	6D76-22
38	第3礫群	砂岩	1.7	1.0	1.0	1.6	⅓	6D76-24
39	第3礫群	ホルンフェルス	2.6	1.5	0.9	3.3	⅓	6D76-26
40	第3礫群	ホルンフェルス	2.3	1.6	0.7	2.6	⅓	6D76-30
41	第3礫群	ホルンフェルス	1.2	1.0	0.4	0.6	⅓	6D76-32
42	第3礫群	石英斑岩	1.5	1.0	0.8	1.2	⅓	6D76-35
43	第3礫群	石英斑岩	3.0	3.2	2.0	16.4	⅓	6D76-36
44	第3礫群	石英斑岩	2.5	2.0	1.5	6.5	⅓	6D76-37

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
45	第3礫群	石英斑岩	3.0	2.6	2.2	16.2	1/3	6D76-38
46	第3礫群	砂岩	2.1	2.1	2.0	8.2	1/3	6D76-39
47	第3礫群	ホルンフェルス	4.8	3.0	1.1	18.1	1/3	6D76-40
48	第3礫群	石英斑岩	3.1	1.9	1.7	7.7	1/3	6D76-41
49	第3礫群	石英斑岩	1.0	1.0	0.9	0.8	1/3	6D76-43
50	第3礫群	石英斑岩	2.2	2.0	1.0	4.2	1/3	6D76-44
51	第3礫群	石英斑岩	1.3	0.9	0.7	0.7	1/3	6D76-45
52	第3礫群	石英斑岩	1.0	0.8	0.8	0.4	1/3	6D76-46
53	第3礫群	ホルンフェルス	1.9	1.5	0.5	1.2	1/3	6D76-47
54	第3礫群	砂岩	2.2	1.4	1.0	3.3	1/3	6D76-48
55	第3礫群	砂岩	1.4	1.1	0.8	1.2	1/3	6D85-11
56	第3礫群	石英斑岩	0.7	0.5	0.3	0.1	1/3	6D85-13
57	第4礫群	チャート	1.7	1.3	1.2	3.6	1/3	6D78-4
58	第4礫群	チャート	1.2	1.1	1.1	1.2	1/3	6D78-5
59	第4礫群	砂岩	2.4	2.3	1.6	6.1	1/3	6D78-11
60	第4礫群	ホルンフェルス	1.0	0.7	0.5	0.3	1/3	6D79-4
61	第4礫群	ホルンフェルス	3.3	2.8	1.0	10.1	1/3	6D79-5
62	第4礫群	砂岩	1.7	1.5	0.9	2.2	1/3	6D79-6
63	第4礫群	砂岩	4.4	3.3	1.6	30.2	1/3	6D79-10
64	第4礫群	砂岩	3.3	2.5	2.1	23.9	1/3	6D79-11
65	第4礫群	チャート	1.2	1.1	0.7	0.8	1/3	6D79-12
66	第4礫群	砂岩	2.7	2.4	1.4	8.7	1/3	6D79-13
67	第4礫群	チャート	2.1	1.1	1.0	2.1	1/3	6D79-14
68	第4礫群	チャート	1.8	1.6	1.5	5.8	1/3	6D79-15
69	第4礫群	ホルンフェルス	1.3	1.0	0.8	0.7	1/3	6D79-17
70	第4礫群	砂岩	2.0	1.7	1.0	3.0	1/3	6D79-18
71	第4礫群	ホルンフェルス	1.3	1.0	0.7	0.8	1/3	6D79-20
72	第4礫群	チャート	1.4	1.3	0.9	1.5	1/3	6D79-21
73	第4礫群	シルト岩	3.3	2.4	2.3	15.3	1/3	6D88-7
74	第4礫群	石英斑岩	1.6	1.4	1.0	2.0	1/3	6D88-8
75	第4礫群	石英斑岩	1.4	0.8	0.4	0.4	1/3	6D88-9
76	第4礫群	砂岩	2.1	2.1	0.5	2.4	1/3	6D89-7
77	第4礫群	砂岩	3.5	2.2	1.9	12.5	1/3	6D89-5
78	第4礫群	石英斑岩	1.1	0.7	0.5	0.5	1/3	6D89-7
79	第4礫群	砂岩	3.3	2.5	1.0	8.6	1/3	6D89-8
80	第4礫群	石英斑岩	3.3	2.7	2.2	14.2	1/3	6D89-9
81	第4礫群	石英斑岩	2.3	1.8	1.1	3.9	1/3	6D89-10
82	第4礫群	石英斑岩	2.3	2.0	1.6	7.1	1/3	6D89-11
83	第4礫群	砂岩	1.2	1.1	0.8	1.2	1/3	6D89-13
84	第4礫群	砂岩	1.0	0.8	0.8	0.7	1/3	6D89-14
85	第4礫群	砂岩	1.3	1.2	1.0	1.7	1/3	6D89-15
86	第4礫群	砂岩	1.4	1.1	1.0	2.0	1/3	6D89-16
87	第4礫群	砂岩	2.0	2.0	2.0	8.6	1/3	6D89-17
88	第4礫群	砂岩	0.9	0.8	0.7	0.5	1/3	6D89-18
89	第4礫群	砂岩	0.7	0.6	0.5	0.2	1/3	6D89-19
90	第4礫群	砂岩	1.7	1.7	1.3	4.2	1/3	6D89-23

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
91	第4礫群	花崗岩	1.0	0.7	0.6	0.5	⅓	6D89-24
92	第4礫群	砂岩	3.7	2.8	2.5	20.0	⅓	6D89-25
93	第4礫群	ホルンフェルス	4.3	3.7	1.9	32.5	⅓	6D89-26
94	第4礫群	砂岩	2.0	1.6	1.2	3.9	⅓	6D89-27
95	第4礫群	砂岩	3.2	3.0	1.6	16.0	⅓	6D89-30
96	第4礫群	砂岩	1.6	1.1	0.4	0.8	⅓	6D89-32
97	第4礫群	砂岩	3.2	2.5	1.1	5.9	⅓	6D89-33
98	第4礫群	ホルンフェルス	2.5	1.3	0.9	3.0	⅓	6D89-34
99	第4礫群	砂岩	2.0	2.0	1.7	5.6	⅓	6D89-35
100	第4礫群	砂岩	2.5	2.1	0.5	2.6	⅓	6D89-36
101	第4礫群	チャート	1.2	1.1	0.6	0.6	⅓	6D89-37
102	第4礫群	チャート	1.8	1.5	1.4	3.0	⅓	6D89-38
103	第4礫群	砂岩	3.7	1.9	1.7	15.9	⅓	6D89-39
104	第4礫群	砂岩	1.4	1.4	0.5	1.1	⅓	6D89-40
105	第4礫群	砂岩	3.6	2.1	1.9	13.4	⅓	6D89-41
106	第4礫群	砂岩	1.3	1.3	0.8	1.6	⅓	6D89-42
107	第4礫群	石英斑岩	3.6	3.2	2.7	28.3	⅓	6D89-43
108	第4礫群	シルト岩	2.7	2.0	1.6	8.0	⅓	6D89-47
109	第4礫群	砂岩	4.0	2.5	1.8	16.2	⅓	6D89-48
110	第4礫群	チャート	1.6	1.4	0.8	2.0	⅓	6D89-49
111	第4礫群	砂岩	3.0	2.0	1.9	8.4	⅓	6D89-53
112	第4礫群	チャート	1.3	1.0	0.8	1.0	⅓	6D89-54
113	第4礫群	石英斑岩	1.9	1.2	1.2	2.0	⅓	6D89-55
114	第4礫群	砂岩	3.9	3.1	2.2	30.9	⅓	6D89-57
115	第4礫群	砂岩	1.6	1.3	1.2	2.3	⅓	6D89-59
116	第4礫群	砂岩	1.9	1.5	1.4	5.1	⅓	6D89-60
117	第4礫群	砂岩	2.3	2.1	1.7	7.4	⅓	6D89-61
118	第4礫群	砂岩	2.3	1.5	1.3	4.0	⅓	6D89-62
119	第4礫群	砂岩	1.5	1.1	0.6	0.9	⅓	6D89-63
120	第4礫群	砂岩	3.3	1.5	1.3	6.0	⅓	6D89-64
121	第4礫群	砂岩	3.5	3.1	2.6	41.0	⅓	6D89-65
122	第4礫群	砂岩	3.2	2.5	1.8	13.5	⅓	6D89-66
123	第4礫群	砂岩	1.2	0.6	0.4	0.2	⅓	6D89-70
124	第4礫群	チャート	1.4	1.0	1.0	1.1	⅓	6D89-71
125	第4礫群	石英斑岩	6.0	4.7	2.1	57.8	⅓	6D89-72
126	第4礫群	石英斑岩	4.5	3.0	2.7	27.0	⅓	6D89-76
127	第4礫群	砂岩	1.6	1.1	1.1	1.7	⅓	6D89-79
128	第4礫群	砂岩	2.3	1.7	0.9	4.0	⅓	6D89-80
129	第4礫群	砂岩	2.8	1.7	1.6	7.6	⅓	6D89-81
130	第4礫群	砂岩	3.5	2.4	2.2	23.8	⅓	6D89-84
131	第4礫群	砂岩	3.0	2.2	1.9	10.2	⅓	6D89-85
132	第4礫群	チャート	2.8	1.9	1.5	7.0	⅓	6D89-86
133	第5礫群	デイサイト	5.0	3.3	2.8	33.5	⅓	7E10-8
134	第5礫群	砂岩	2.8	1.9	1.8	6.2	⅓	7E10-11
135	第5礫群	砂岩	1.5	1.2	0.7	1.3	⅓	7E10-12
136	第5礫群	デイサイト	6.7	5.4	4.7	164.1	⅓	7E10-13

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
137	第5礫群	砂岩	3.3	1.8	1.5	7.5	1/3	7E10-16
138	第5礫群	流紋岩	5.9	4.1	2.1	72.0	1/3	7E10-17
139	第5礫群	流紋岩	3.2	2.0	1.4	10.6	1/3	7E10-18
140	第5礫群	石英斑岩	3.1	2.2	1.8	10.9	1/3	7E10-19
141	第5礫群	砂岩	2.1	2.0	1.3	4.2	1/3	7E10-20
142	第5礫群	砂岩	2.5	1.8	0.9	3.2	1/3	7E10-23
143	第5礫群	石英斑岩	5.3	4.4	2.9	46.8	1/3	7E10-24
144	第5礫群	石英斑岩	5.7	4.3	2.4	69.0	1/3	7E10-26
145	第5礫群	砂岩	1.8	1.5	1.1	1.9	1/3	7E20-7
146	第5礫群	砂岩	2.1	1.3	1.0	2.0	1/3	7E20-10
147	第5礫群	デイサイト	6.2	4.0	2.8	64.6	1/3	7E20-13
148	第5礫群	シルト岩	2.9	1.8	1.3	5.0	1/3	7E20-14
149	第5礫群	デイサイト	6.2	4.4	3.0	113.6	1/3	7E20-15
150	第5礫群	砂岩	2.4	1.9	1.5	4.1	1/3	7E20-18
151	第5礫群	砂岩	4.8	3.0	2.5	28.5	1/3	7E20-21
152	第5礫群	デイサイト	3.4	3.0	2.6	32.9	1/3	7E20-22
153	第5礫群	砂岩	2.1	2.0	0.9	2.5	1/3	7E20-23
154	第6礫群	シルト岩	2.4	1.9	1.0	3.5	1/3	7E03-7
155	第6礫群	砂岩	2.2	2.1	2.0	7.0	1/3	7E12-13
156	第6礫群	砂岩	1.6	1.3	1.1	3.3	1/3	7E12-16
157	第6礫群	シルト岩	2.4	1.9	1.1	4.2	1/3	7E12-21
158	第6礫群	砂岩	3.0	2.8	1.4	12.8	1/3	7E12-22
159	第6礫群	石英斑岩	2.5	2.0	1.7	9.1	1/3	7E13-8
160	第6礫群	砂岩	2.7	1.7	1.5	8.9	1/3	7E13-9
161	第6礫群	シルト岩	2.3	1.8	1.4	5.1	1/3	7E13-10
162	第6礫群	シルト岩	2.7	2.1	1.9	4.2	1/3	7E13-11
163	第6礫群	石英斑岩	5.1	3.6	3.4	80.0	1/3	7E13-12
164	第6礫群	砂岩	2.6	2.1	1.2	6.1	1/3	7E13-13
165	第6礫群	石英斑岩	1.3	1.4	1.1	2.0	1/3	7E13-17
166	第6礫群	シルト岩	5.4	3.2	1.9	29.5	1/3	7E13-18
167	第6礫群	流紋岩	2.9	2.7	2.3	18.4	1/3	7E13-19
168	第6礫群	石英斑岩	4.3	4.3	3.3	45.9	1/3	7E13-20
169	第6礫群	石英斑岩	3.0	2.2	1.8	10.3	1/3	7E13-21
170	第6礫群	石英斑岩	2.9	2.2	2.1	12.8	1/3	7E13-22
171	第6礫群	砂岩	2.7	2.3	2.0	14.2	1/3	7E13-23
172	礫群外(Hブロック)	流紋岩	6.5	3.0	2.4	59.4	完形	7D56-12
173	礫群外(Jブロック)	流紋岩	6.7	5.2	2.0	94.4	1/3	7D65-8
174	礫群外(Jブロック)	流紋岩	7.3	4.1	1.7	45.1	1/3	7D74-9
175	礫群外(Jブロック)	流紋岩	6.2	4.0	1.8	33.6	1/3	7D74-12
176	礫群外(Lブロック)	流紋岩	6.2	3.9	1.8	49.5	完形	7D76-32
177	礫群外(Nブロック)	凝灰岩	2.2	1.6	0.6	2.2	1/3	7C65-5
178	礫群外(Nブロック)	泥岩	2.6	1.5	0.8	2.8	1/3	7C75-7
179	礫群外(Oブロック)	流紋岩	1.8	1.7	1.0	2.5	1/3	7C74-5
180	礫群外(Oブロック)	シルト岩	2.1	2.0	1.4	5.8	1/3	7C74-6
181	礫群外(Oブロック)	流紋岩	3.3	2.0	1.2	9.3	1/3	7C74-15
182	礫群外(Oブロック)	斑糲岩	6.5	5.6	4.8	243.0	1/3	7C75-14

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
183	礫群外	シルト岩	2.6	2.2	0.5	2.9	1/3	6E19-5
184	礫群外	シルト岩	5.3	1.6	1.4	15.0	1/3	6E19-7
185	礫群外	チャート	4.7	3.3	0.9	11.0	1/3	0D79-7
186	礫群外	砂岩	2.6	2.5	0.9	5.9	1/3	0E81-4
187	礫群外	砂岩	1.7	1.0	0.8	1.5	1/3	1E00-5
188	礫群外	石英斑岩	7.3	6.5	1.5	61.5	1/3	5E93-5
189	礫群外	砂岩	2.5	2.1	1.4	9.1	完形	5E98-10
190	礫群外	石英斑岩	3.5	2.6	2.0	19.1	1/3	6D07-4
191	礫群外	石英斑岩	2.9	2.7	2.7	23.9	1/3	6D07-5
192	礫群外	砂岩	3.0	2.8	2.5	17.1	1/3	6D08-4
193	礫群外	砂岩	6.5	3.5	2.7	57.3	1/3	6D08-5
194	礫群外	ホルンフェルス	1.4	0.8	0.7	0.6	1/3	6D39-11
195	礫群外	ホルンフェルス	1.9	1.5	1.1	4.1	1/3	6D39-12
196	礫群外	ホルンフェルス	1.4	1.1	0.6	1.1	1/3	6D39-13
197	礫群外	砂岩	3.4	2.9	2.7	31.9	1/3	6D78-8
198	礫群外	砂岩	1.6	1.2	0.9	1.8	1/3	6D78-9
199	礫群外	砂岩	3.6	2.2	1.4	12.0	1/3	6D78-10
200	礫群外	砂岩	3.7	2.4	2.1	17.3	1/3	6D79-19
201	礫群外	石英斑岩	2.3	2.2	1.2	5.7	1/3	6D86-5
202	礫群外	砂岩	3.0	2.6	2.0	14.3	1/3	6D86-6
203	礫群外	砂岩	2.7	2.1	1.5	8.5	1/3	6D86-7
204	礫群外	砂岩	5.2	3.5	2.3	26.6	1/3	6D89-56
205	礫群外	砂岩	2.4	1.8	0.9	3.0	1/3	6E01-4
206	礫群外	ホルンフェルス	4.5	3.4	2.3	24.5	1/3	6E07-4
207	礫群外	ホルンフェルス	3.2	3.0	1.5	18.7	1/3	6E07-5
208	礫群外	シルト岩	1.9	1.8	1.8	6.7	1/3	6E08-4
209	礫群外	シルト岩	3.4	2.9	2.5	25.1	1/3	6E09-6
210	礫群外	石英斑岩	2.9	1.9	1.3	7.7	1/3	6E40-4
211	礫群外	石英斑岩	4.4	2.5	1.3	13.0	1/3	6E40-5
212	礫群外	流紋岩	3.2	3.0	2.1	20.2	1/3	6F01-4
213	礫群外	砂岩	2.8	2.0	2.0	7.8	1/3	7E11-7
214	礫群外	砂岩	3.5	2.9	2.1	15.2	1/3	7E11-8
215	礫群外	シルト岩	5.3	5.3	2.8	87.4	2/3	7E21-10
216	礫群外	流紋岩	3.7	2.4	1.4	12.7	完形	7E23-4
217	礫群外	石英斑岩	3.9	3.8	3.1	56.0	1/3	6Eイ001
218	礫群外	シルト岩	5.0	4.3	2.0	35.4	1/3	60.1-1
219	礫群外	ホルンフェルス	3.8	2.1	1.6	13.5	1/3	60.1-2
220	礫群外	砂岩	3.5	1.9	1.4	7.0	1/3	0003-1
221	礫群外	砂岩	3.2	2.8	1.5	10.4	1/3	0003-2
222	礫群外	砂岩	2.4	1.7	1.1	4.0	1/3	0003-3
223	礫群外	砂岩	1.8	1.4	1.2	2.0	1/3	0003-4
224	礫群外	ホルンフェルス	2.9	1.8	0.6	3.4	1/3	0003-5
225	礫群外	ホルンフェルス	2.2	1.4	0.5	1.9	1/3	0003-6
226	礫群外	ホルンフェルス	2.0	1.4	0.8	1.8	1/3	0003-7
227	礫群外	砂岩	1.6	1.3	1.3	3.1	1/3	0003-9
228	礫群外	砂岩	1.5	1.4	1.4	2.7	1/3	0003-10

番号	礫　　群	石　　材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
229	礫　群　外	ホルンフェルス	1.0	0.8	0.3	0.2	⅓	0003-11
230	礫　群　外	石英斑岩	3.1	2.5	2.0	14.3	⅓	0003-12
231	礫　群　外	石英斑岩	1.7	1.3	1.2	2.0	⅓	0003-13
232	礫　群　外	石英斑岩	1.8	1.3	1.0	2.2	⅓	0003-14
233	礫　群　外	石英斑岩	1.8	1.7	1.2	3.4	⅓	0003-15
234	礫　群　外	石英斑岩	0.9	0.9	0.7	0.4	⅓	0003-16
235	礫　群　外	砂岩	1.6	1.3	0.9	1.6	⅓	0003-17
236	礫　群　外	石英斑岩	1.2	0.8	0.8	0.5	⅓	0003-18
237	礫　群　外	石英斑岩	1.1	0.7	0.5	0.2	⅓	0003-19
238	礫　群　外	石英斑岩	1.7	1.2	0.9	1.6	⅓	0003-20
239	礫　群　外	石英斑岩	1.6	1.2	1.1	2.1	⅓	0003-21
240	礫　群　外	石英斑岩	1.3	1.0	0.7	0.7	⅓	0003-22
241	礫　群　外	石英斑岩	1.5	1.2	1.0	1.3	⅓	0003-23
242	礫　群　外	石英斑岩	0.9	0.7	0.5	0.2	⅓	0003-24
243	礫　群　外	砂岩	1.0	0.8	0.6	0.5	⅓	0003-25
244	礫　群　外	砂岩	0.9	0.9	0.6	0.6	⅓	0003-26
245	礫　群　外	石英斑岩	0.7	0.6	0.5	0.2	⅓	0003-28

5　炭化物片集中個所

先土器時代に属する炭化物片集中個所が遺跡南東部において5個所検出された。(第115図)

(1)　第1炭化物片集中個所（第116図）

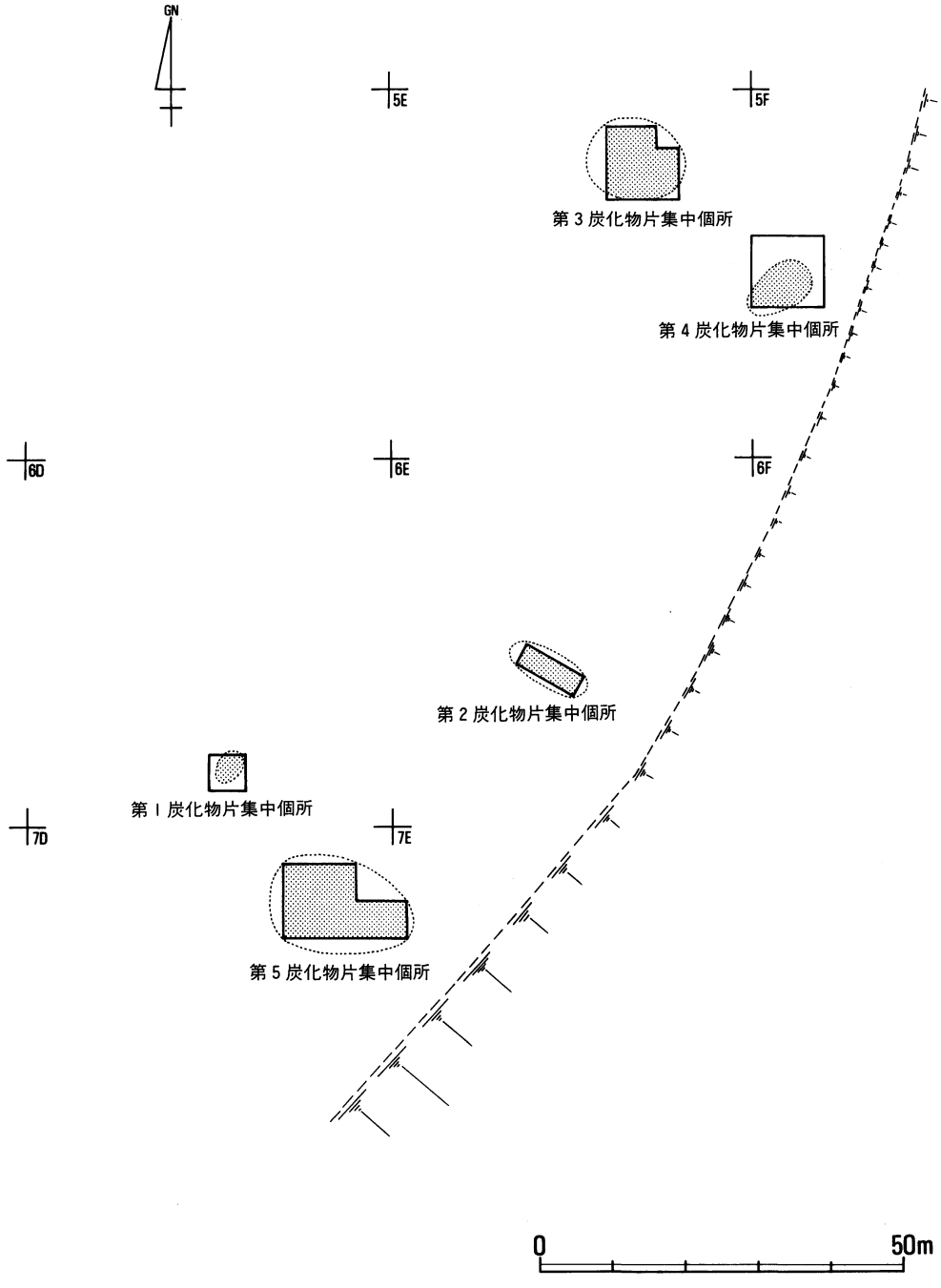
6 P85グリッドのほぼ中央からの検出で密集度は高い。出土層位はⅣ～Ⅵ層の中程が主体で炭化物片の大きさは2㎜前後と小粒である。層位的にはRブロックがかなり近いものと思われる。

(2)　第2炭化物片集中個所（第117図）

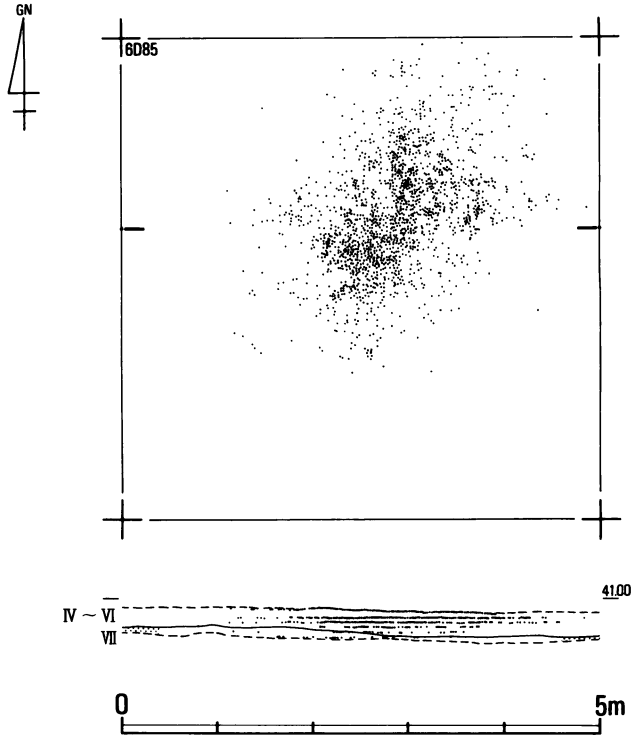
6 E54グリッドを中心に検出され、密集度は高い。かなり広範囲に広がっているもようである。出土層位はⅣ～Ⅷ層上部でⅦ層が主体をなす。炭化物片の大きさは細かい。層位的にはSブロックが近いものと思われる。

(3)　第3炭化物片集中個所（第118図）

5 E27杭付近において検出された。分布範囲は約10mと広く、数ケ所の密集部分が認められる。出土層位はⅦ層前後であり、炭化物片の大きさは細かい。層位的にはSブロックが近いものと思われる。



第115図　炭化物片集中個所分布図（1/1000）



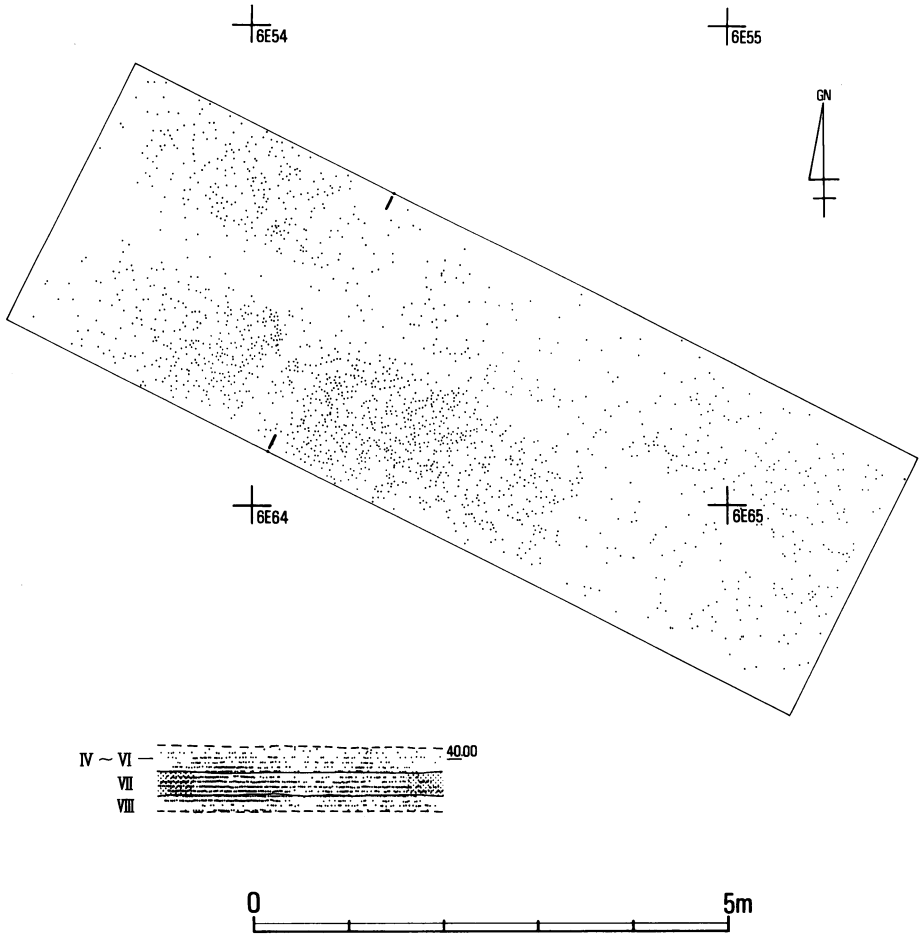
第116図　第１炭化物片集中個所実測図（1/80）

(4)　第４炭化物片集中個所（第119図）

５Ｅ61グリッド付近からやや散漫に検出された。分布範囲は中心とおぼしきものがはっきりせず、やや細長く４×８ｍ程である。出土層位はⅧ層下部からⅦ層上部を主体とする。炭化物片の大きさは細かい。

(5)　第５炭化物片集中個所（第120図）

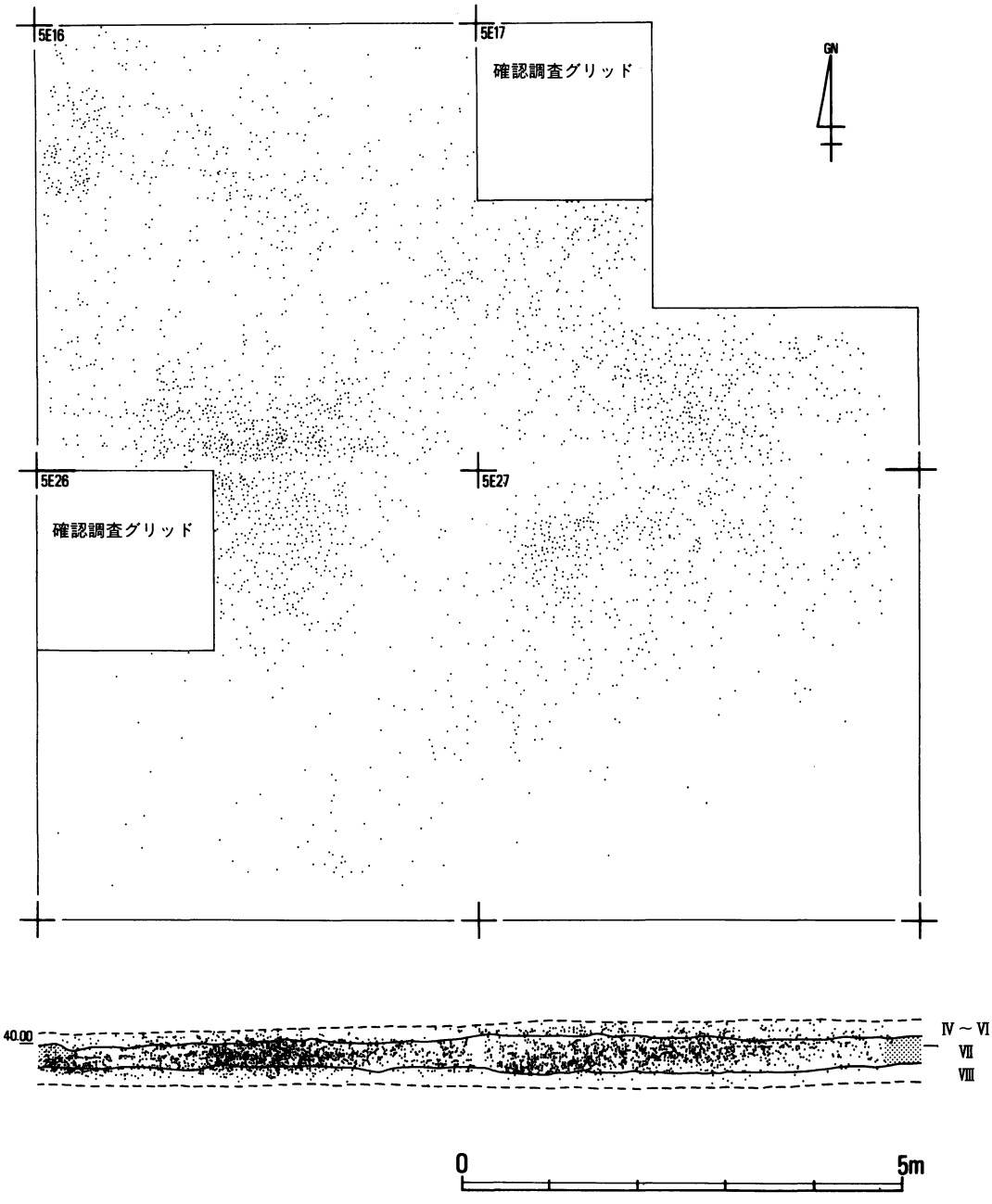
７Ｄ28グリッド付近を中心として10×20ｍ程の広がりをもって出土した。７Ｄ17グリッド南側辺にやや集中している部分があるが全体としては散漫な分布をしている。



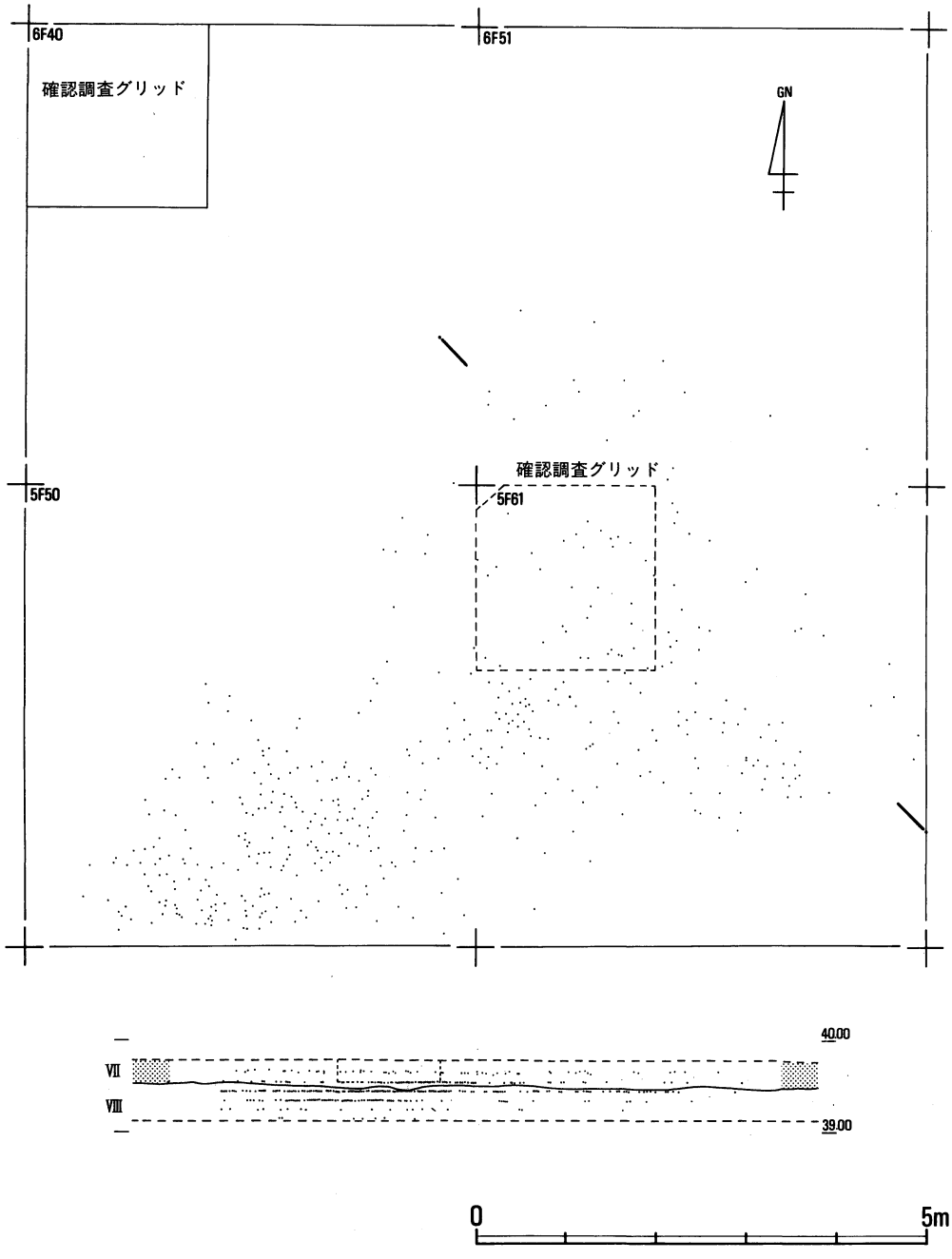
第117図　第２炭化物片集中個所実測図（1/80）

⑹　炭化物片集中個所のまとめ

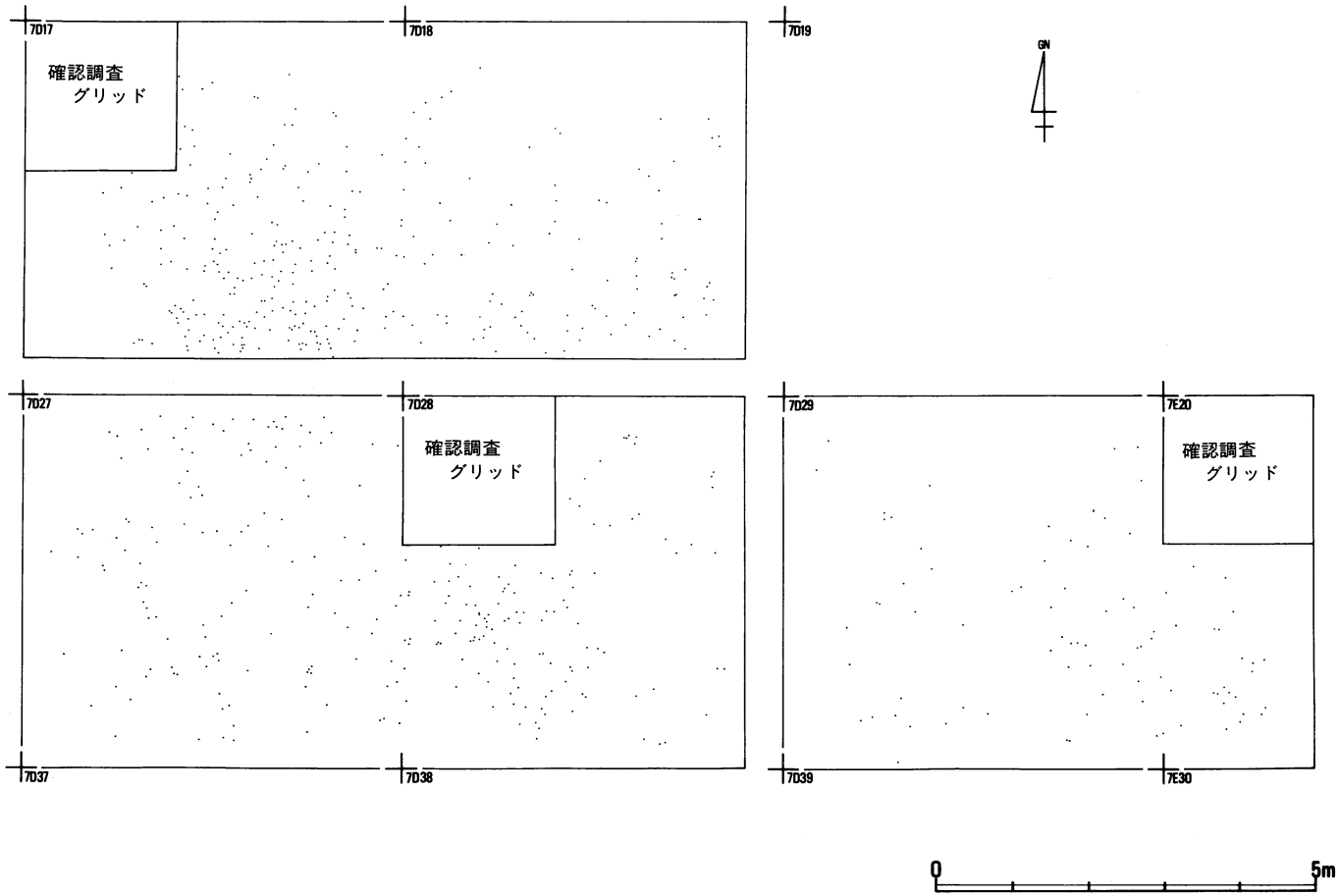
５個所で検出された炭化物片集中個所は、いずれも石器群を伴ってはいないため、両者の時間的な比較は困難であるが、層位的に近いものとして第２・３炭化物片集中個所とＳブロック、第１炭化物片集中個所とＲブロックをあげることが出来る。また炭化物片の大きさのうえでは共通して皆細かいものであるが、密度の面からは高低差がかなり存在し、層位的な上下のバラツキにもかなりの違いがみられる。これらの炭化物片集中個所にみられる相違が何に起因しているかを知ることは難しいが、たとえば土中での包含状態に石器や礫とは異なったあり方が考えられ、石器群におけるビーナス曲線のようなパターンを検討することも意味のあることと考える。



第118図　第３炭化物片集中個所実測図（1/80）



第119図　第４炭化物片集中個所実測図（1/80）



第120図　第５炭化物片集中個所実測図（1/80）

第２節　縄文時代

１　陥し穴状土壙（第121～145図、図版40～46、第９表）

陥し穴状土壙は総数66基検出され、規模・形態等に違いがみられる。

個々の陥し穴状土壙については第122～145図及び第９表を見て頂くことにして、ここでは項目別に検討することにしたい。

(1)　形態分類

Ａ類　口部が長楕円で細長い形態のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均2.9である。

Ａ１類　24基ある。底部の幅が狭く棒状で短軸断面が漏斗状を呈するもの。底部の幅はほとんどが20cm以下で、深さは約1.6m。３号・５号・９号・12～15号・19号・20号・22号・23号・25号・26～28号、37号・38号・40号・43号・45号・49号が相当する。

Ａ２類　７基ある。口部と底部の幅にあまり差がなく短軸断面が寸胴で浅いもの。深さは約１m。17号・24号・33号・34号・47号・53号・66号が相当する。

Ａ３類　２基ある。底部の幅がやや広く浅いもの。底部の幅は約40～50cm、深さは約１m。16号と18号が相当する。

Ｂ類　口部が楕円形のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均1.5である。

Ｂ１類　底部の幅が狭く棒状のもの。

Ｂ１ａ類　５基ある。大形で縦断面がほとんどオーバーハングしないもの。口部長軸約3.0m。８号・29号・35号・44号・58号が相当する。

Ｂ１ｂ類　３基ある。大形で縦断面の下半が大きくオーバーハングするもの。口部長軸約2.8m。30号・32号・54号が相当する。

Ｂ１ｃ類　５基ある。中～小形で縦断面は上部が少しくびれて、底部へ行く程序々にオーバーハングするもの。口部長軸約2.0m。41号・51号・57号・62号・63号が相当する。

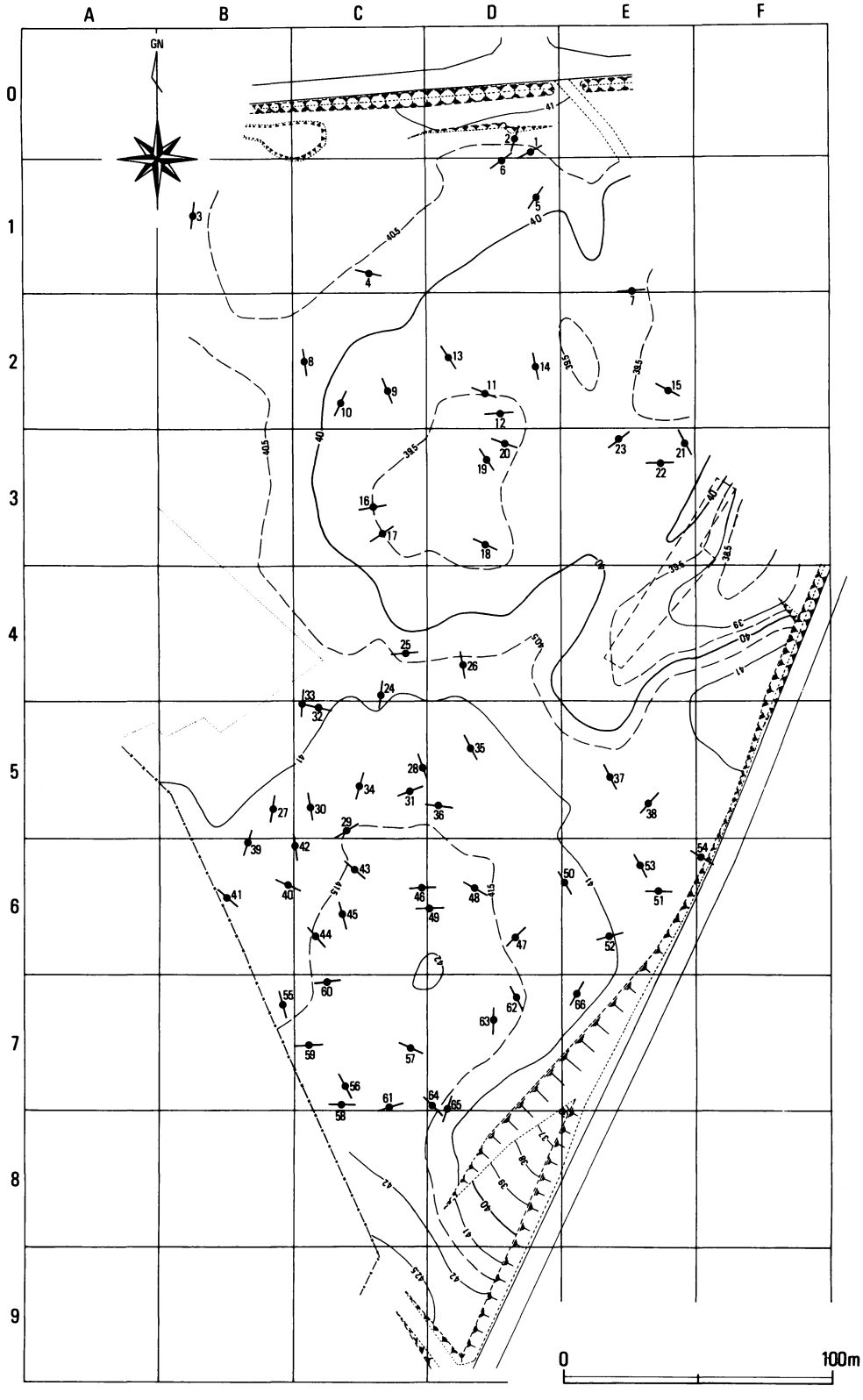
Ｂ２類　底部の幅がやや広いもの。

Ｂ２ａ類　７基ある。縦断面が寸胴のもの。深さ約2.6m。36号・39号・42号・52号・56号・60号・65号が相当する。

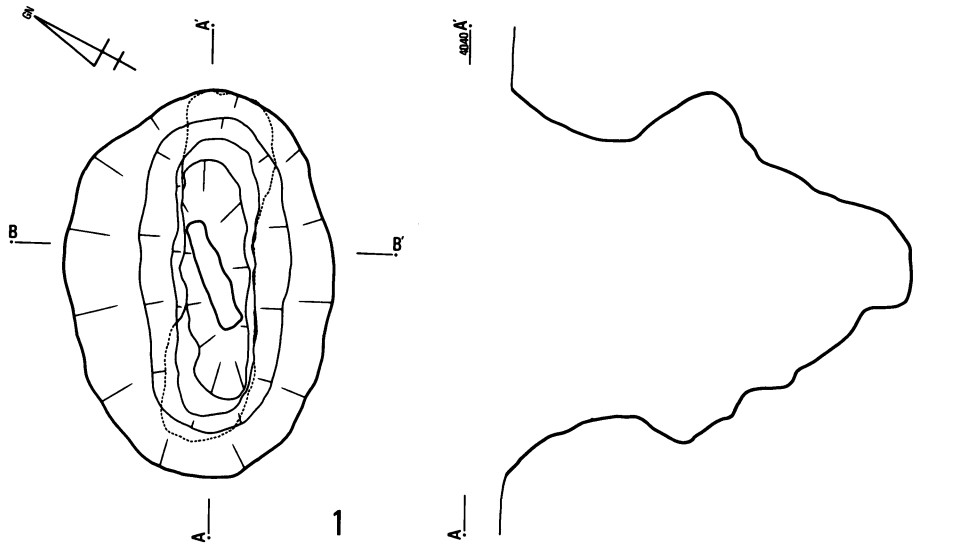
Ｂ２ｂ類　５基ある。縦断面の中程がオーバーハングして深いもの。深さ約2.8m。１号・６号・46号・48号・61号が相当する。

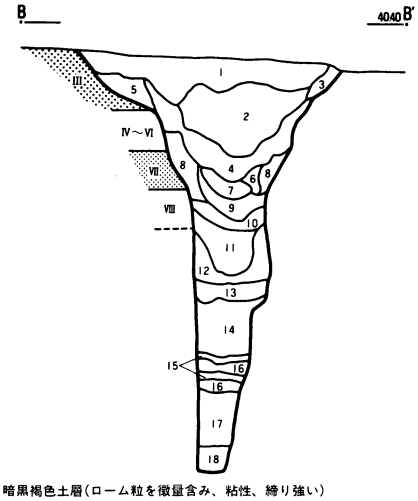
Ｂ２ｃ類　31号の１基のみである。縦断面の底部がオーバーハングして深いもの。深さ約2.7m。

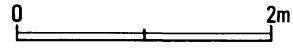
Ｂ２ｄ類　６基ある。縦断面がオーバーハングしないで浅いもの。深さ約1.5m。４号・７号・10号・11号・21号・59号が相当する。

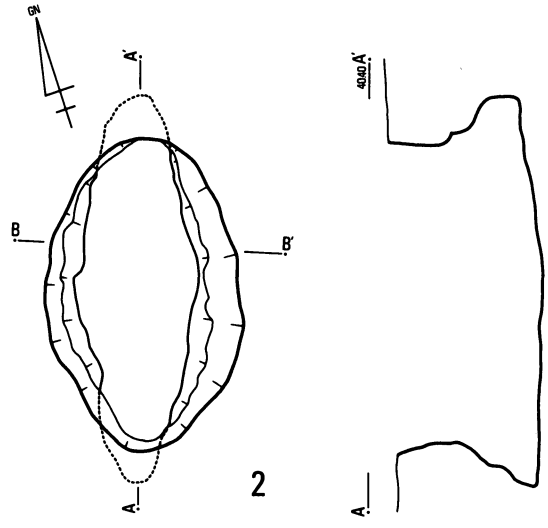


第121図　陥し穴状土壙分布図（1/2500）

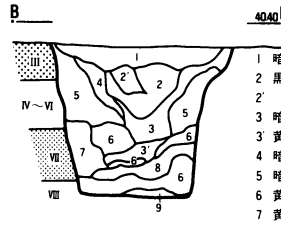






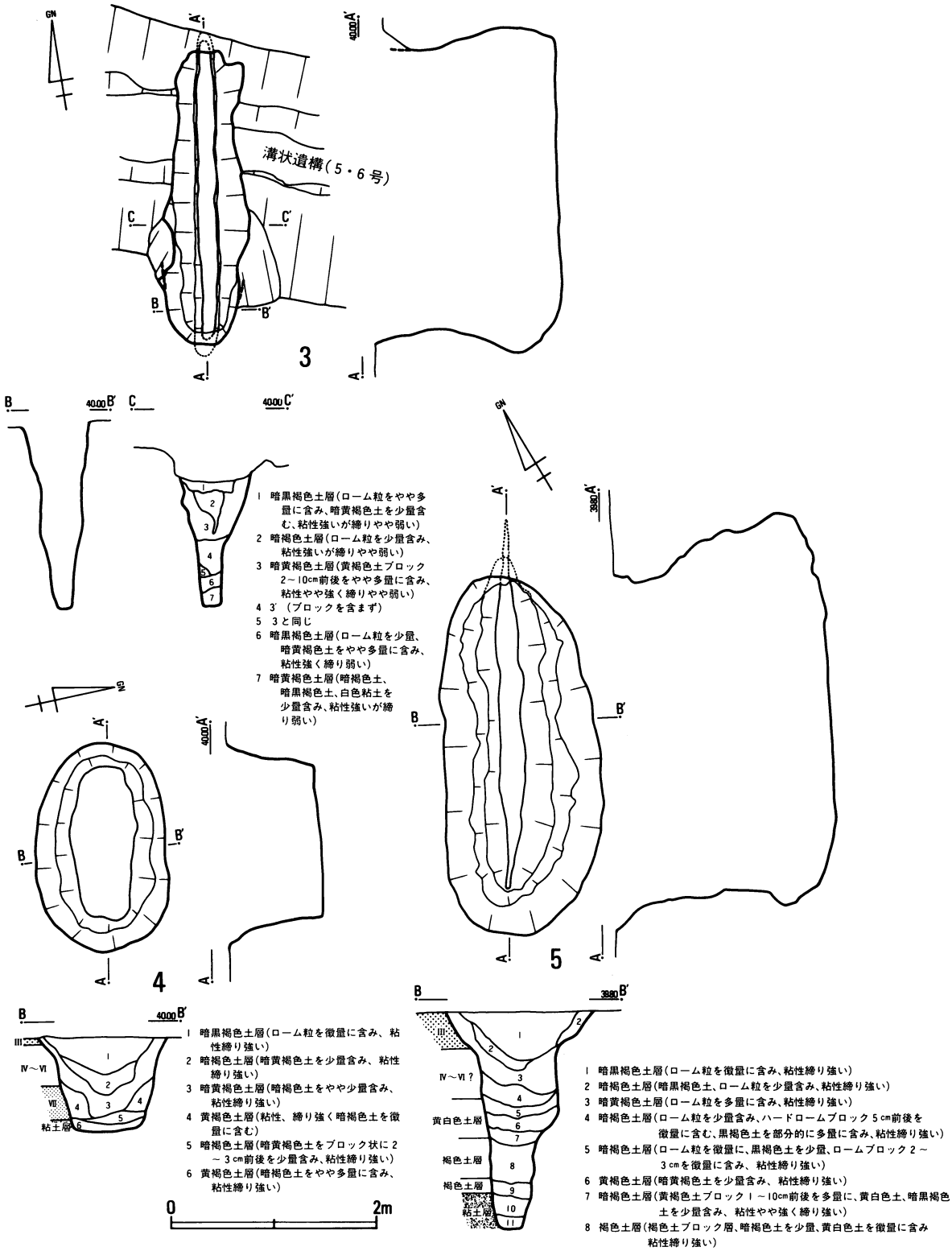


1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量含み、粘性、締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性、締り強い)
3 暗褐色土層(黄褐色土をやや多量に含む)
4 暗褐色土層(暗黒褐色土を多量に含み、粘性、締り強い)
5 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(暗黄褐色土を多量に含み粘性強いが、締りやや弱い)
7 黄褐色土層 (III層崩落土)
8 黄褐色土層(III層及び暗褐色土を多量に含み、粘性強いが締りやや弱い)
9 黄褐色土層(III、IV～VI層ブロック層)
10 暗褐色土層(III、IV～VI層を少量含み、粘性強いが締りやや弱い)
11 黄褐色土層(9' 層暗褐色土をやや多量に含む)
12 暗褐色土層(10' 層VII・VIII層を少量含む)
13 黒褐色土層(暗黄褐色土を少量含む)
14 黄褐色土層(褐色土ブロック2～3cmを微量に含み、粘性締り非常に強い)
15 黄褐色土層(黒褐色土、暗褐色土、白色粘土を多量に含み、粘性締り非常に強い)
16 暗黄褐色土層(褐色土、白色粘土少量含み、粘性締り強い)
17 暗褐色土層(白色粘土を多量に、褐色土を少量含み、粘性強いが締り弱い)
18 暗黒褐色土層(褐色土、白色粘土を多量に含み、粘性強いが締り弱い)

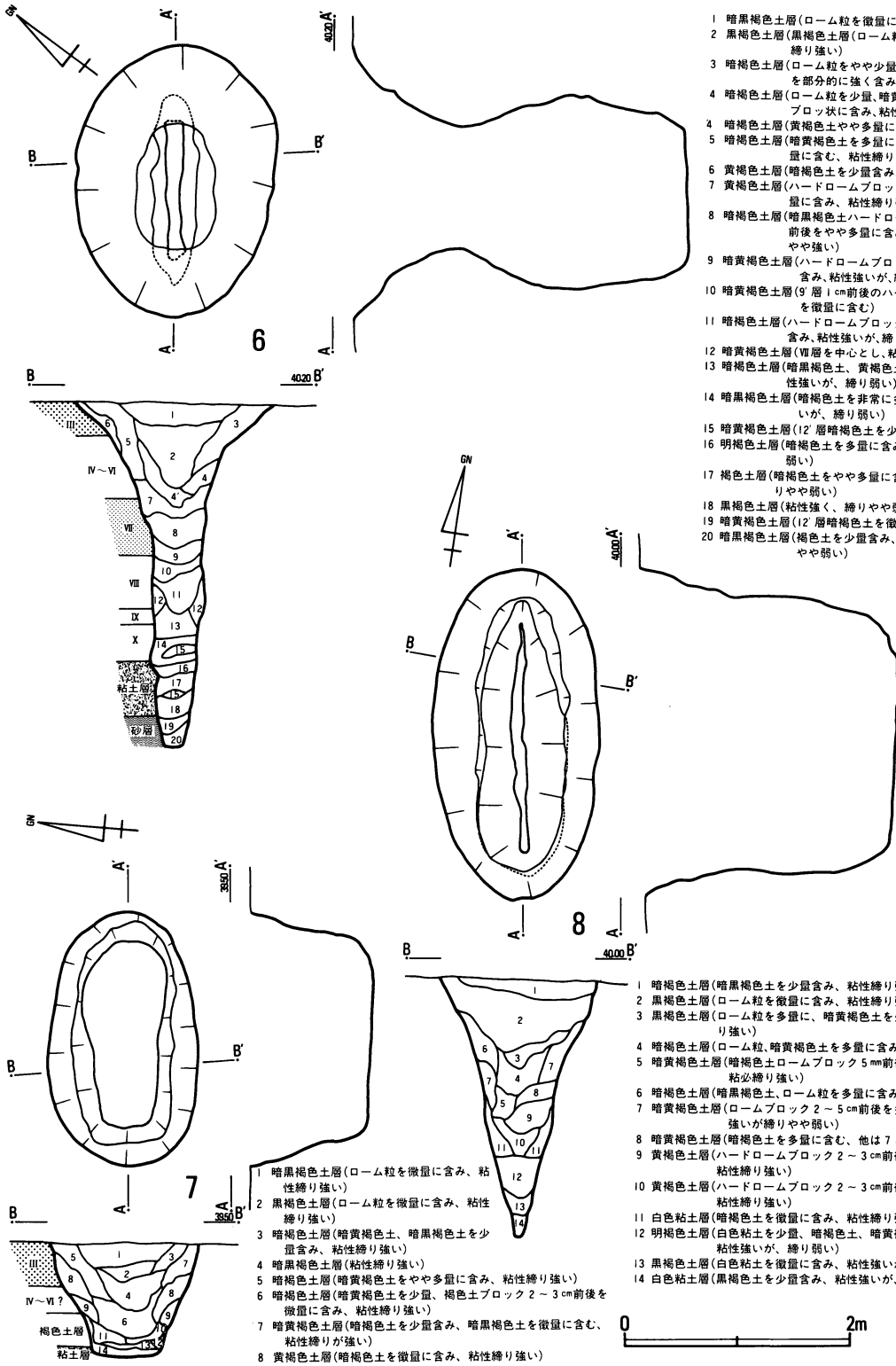


1 暗黒褐色土層(暗黄褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、暗褐色土を微量含む、粘性絞り強い)
2' (暗黄褐色土を含まず)
3 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、暗黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
3' 黄褐色土ブロック1cm前後を微量に含む)
4 暗黄褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(粘性締り強い)
6 黄褐色土層(暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層 (粘性締り強い)
8 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、黄褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
9 暗黒褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

第122図　陥し穴状土壙実測図(1・2号)(1/60)



第123図　陥し穴状土壙実測図(3～5号)(1/60)



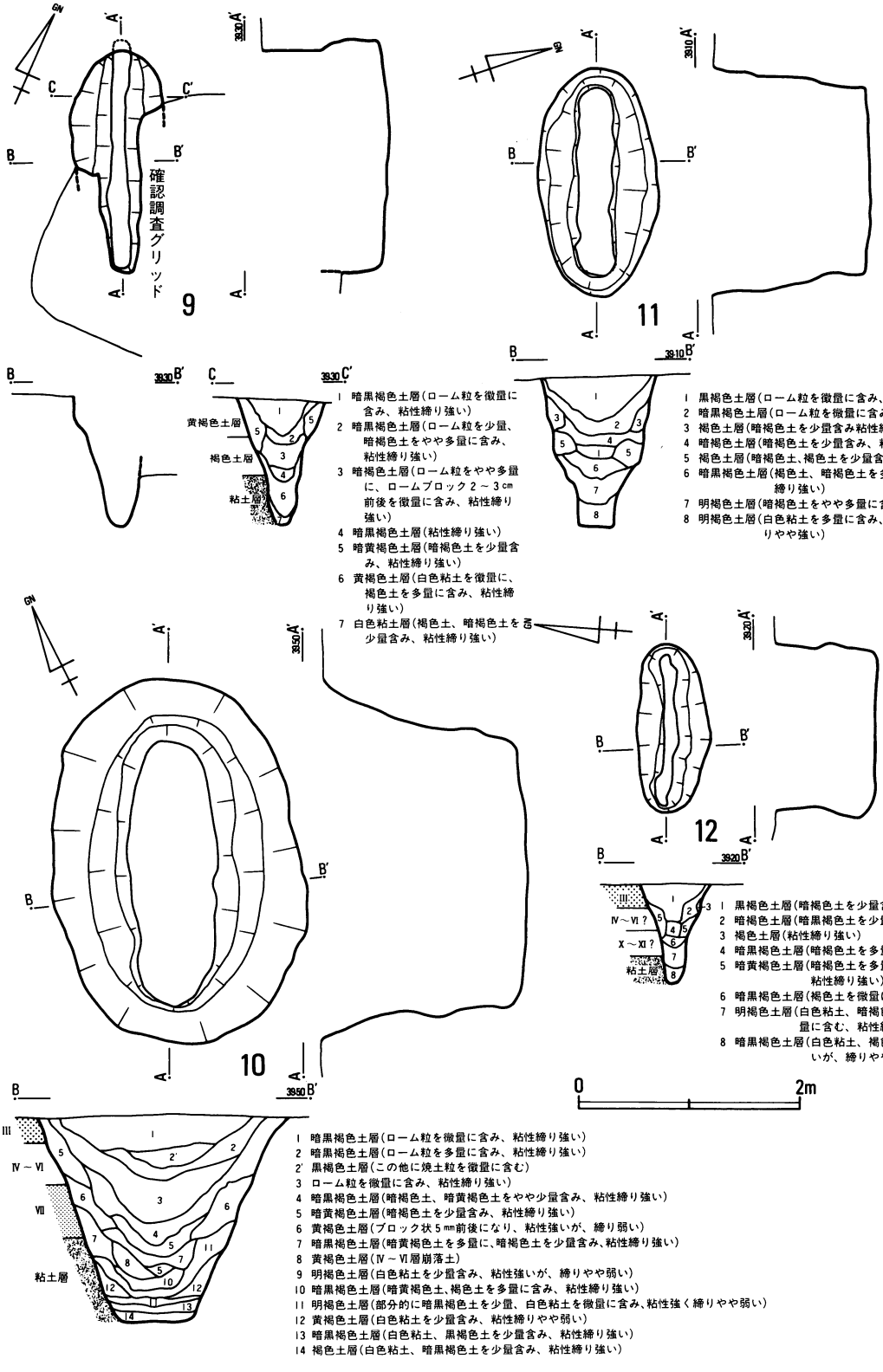
1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(ローム粒をやや少量、黄褐色土、暗褐色土を部分的に強く含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(ローム粒を少量、暗黄褐色土を1cm前後のブロック状に含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(黄褐色土やや多量に含む)
5 暗褐色土層(暗黄褐色土を多量に含む、ローム粒を微量に含む、粘性締り強い)
6 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(ハードロームブロック2～3cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
8 暗褐色土層(暗黒褐色土ハードロームブロック3～5cm前後をやや多量に含み、粘性強く、締りやや強い)
9 暗黄褐色土層(ハードロームブロック5cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
10 暗黄褐色土層(9'層1cm前後のハードロームブロックを微量に含む)
11 暗褐色土層(ハードロームブロック10cm前後を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
12 暗黄褐色土層(Ⅶ層を中心とし、粘性強いが、締り弱い)
13 暗褐色土層(暗黒褐色土、黄褐色土を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
14 暗黒褐色土層(暗褐色土を非常に多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
15 暗黄褐色土層(12'層暗褐色土を少量含む)
16 明褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性強く、締り弱い)
17 褐色土層(暗褐色土をやや多量に含み、粘性強く、締りやや弱い)
18 黒褐色土層(粘性強く、締りやや弱い)
19 暗黄褐色土層(12'層暗褐色土を微量に含む)
20 暗黒褐色土層(褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)

1 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 黒褐色土層(ローム粒を多量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(暗褐色土ロームブロック5mm前後を多量に含み、粘必締り強い)
6 暗褐色土層(暗黒褐色土、ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
7 暗黄褐色土層(ロームブロック2～5cm前後を多量に含み、粘性強いが締りやや弱い)
8 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に含む、他は7と同じ)
9 黄褐色土層(ハードロームブロック2～3cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
10 黄褐色土層(ハードロームブロック2～3cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
11 白色粘土層(暗褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
12 明褐色土層(白色粘土を少量、暗褐色土、暗黄褐色土を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
13 黒褐色土層(白色粘土を微量に含み、粘性強いが、締り弱い)
14 白色粘土層(黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締り弱い)

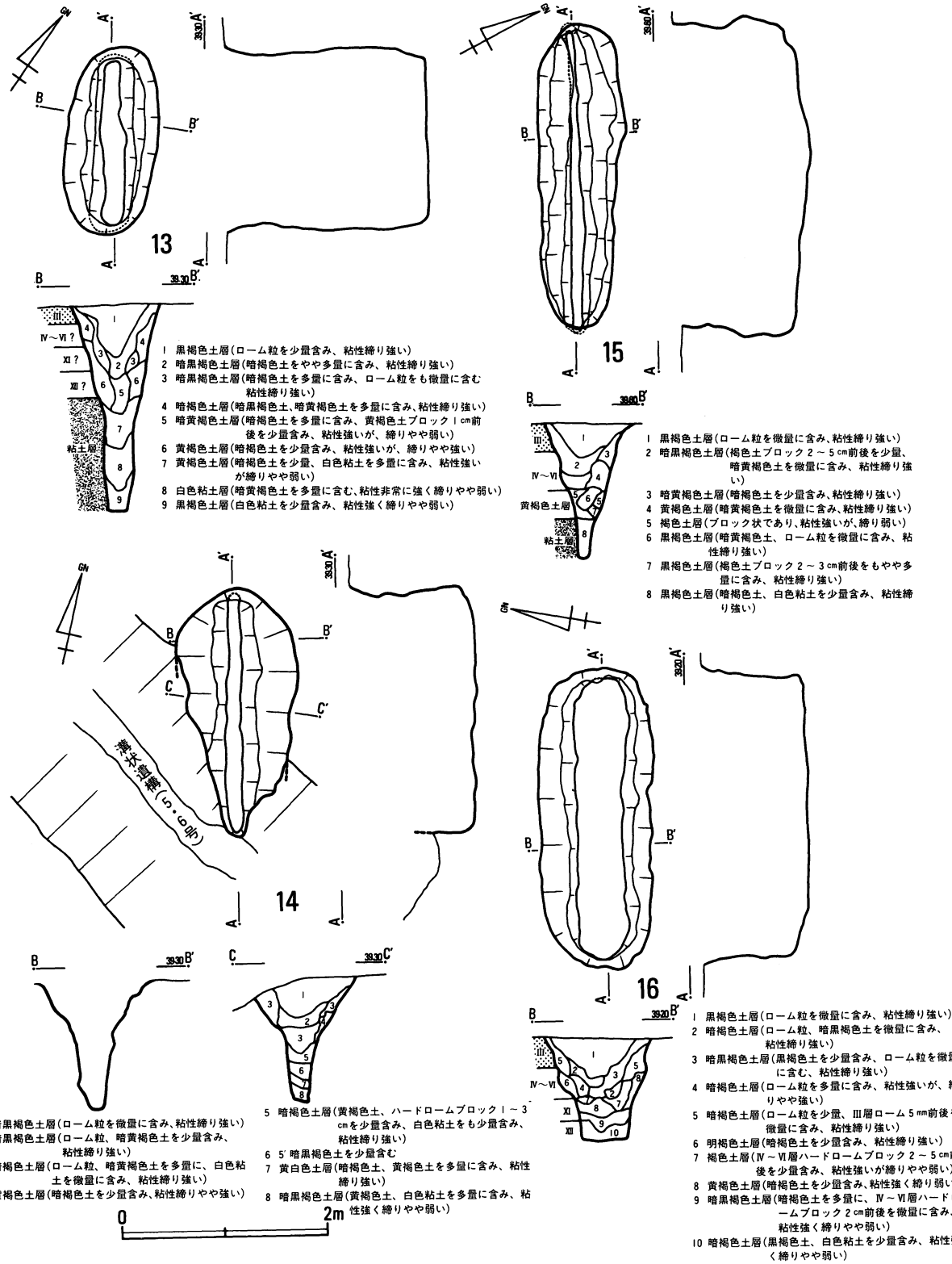
0 2m

1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(暗黄褐色土、暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
4 暗黒褐色土層(粘性締り強い)
5 暗褐色土層(暗黄褐色土をやや多量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量、褐色土ブロック2～3cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
7 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、暗黒褐色土を微量に含む、粘性締りが強い)
8 黄褐色土層(暗褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
9 褐色土層(粘性締り強い)
10 暗褐色土層(褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
11 褐色土層(暗褐色土をやや多量に含み、粘性締り強い)
12 明褐色土層(褐色土、暗褐色土、黄白色土を多量に含み、粘性締り強い)
13 暗黒褐色土層(黒褐色土、黄白色土を多量に含み、粘性強いが締りやや弱い)
14 黄白色土層(黄白色粘土を主体に褐色土を少量含み、粘性強いが締りやや弱い)

第124図　陥し穴状土壙実測図(6～8号)(1/60)



第125図　陥し穴状土壙実測図(9～12号)(1/60)



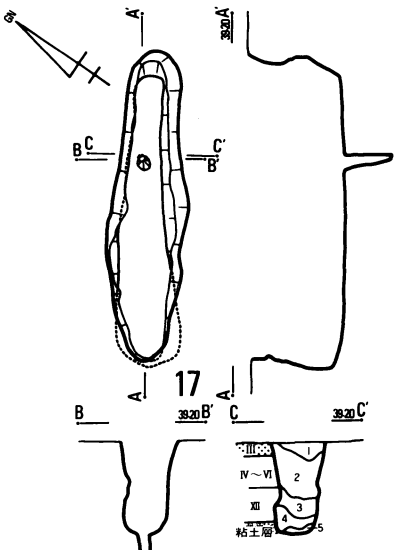
13
1 黒褐色土層(ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(暗褐色土をやや多量に含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(暗褐色土を多量に含み、ローム粒をも微量に含む粘性締り強い)
4 暗褐色土層(暗黒褐色土、暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に含み、黄褐色土ブロック1cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
6 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや強い)
7 黄褐色土層(暗褐色土を少量、白色粘土を多量に含み、粘性強いが締りやや弱い)
8 白色粘土層(暗黄褐色土を多量に含む、粘性非常に強く締りやや弱い)
9 黒褐色土層(白色粘土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)

15
1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(褐色土ブロック2～5cm前後を少量、暗黄褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
4 黄褐色土層(暗黄褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
5 褐色土層(ブロック状であり、粘性強いが、締り弱い)
6 黒褐色土層(暗黄褐色土、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
7 黒褐色土層(褐色土ブロック2～3cm前後をもやや多量に含み、粘性締り強い)
8 黒褐色土層(暗褐色土、白色粘土を少量含み、粘性締り強い)

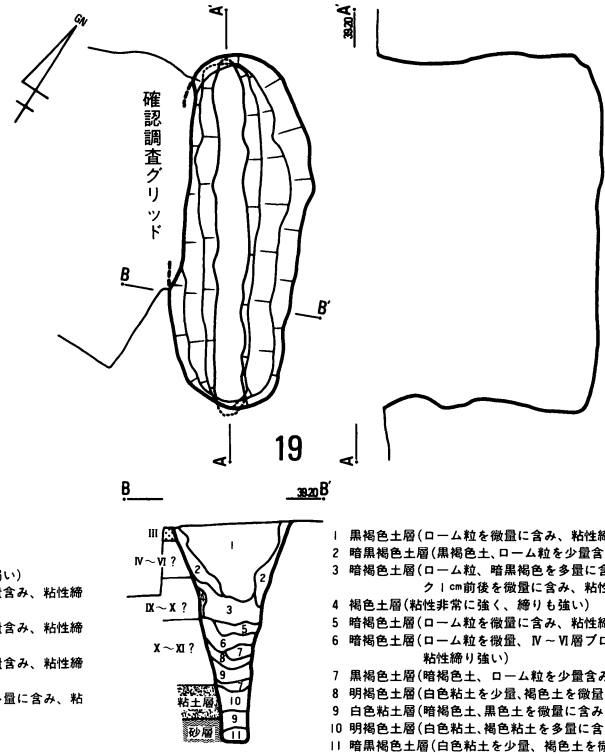
14
1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を多量に、白色粘土を微量に含み、粘性締り強い)
4 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締りやや強い)
5 暗褐色土層(黄褐色土、ハードロームブロック1～3cmを少量含み、白色粘土をも少量含み、粘性締り強い)
6 5 暗黒褐色土を少量含む
7 黄白色土層(暗褐色土、黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
8 暗黒褐色土層(黄褐色土、白色粘土を多量に含み、粘性強く締りやや弱い)

16
1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(ローム粒、暗黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(黒褐色土を少量含み、ローム粒を微量に含む、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(ローム粒を多量に含み、粘性強いが、締りやや強い)
5 暗褐色土層(ローム粒を少量、Ⅲ層ローム5mm前後を微量に含み、粘性締り強い)
6 明褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
7 褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2～5cm前後を少量含み、粘性強いが締りやや弱い)
8 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強く締り弱い)
9 暗黒褐色土層(暗褐色土を多量に、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2cm前後を微量に含み、粘性強く締りやや弱い)
10 暗褐色土層(黒褐色土、白色粘土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)

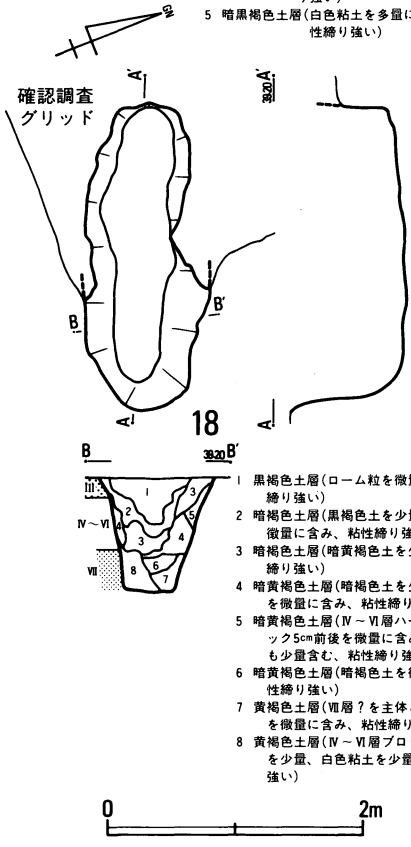
第126図　陥し穴状土壙実測図(13～16号)(1/60)



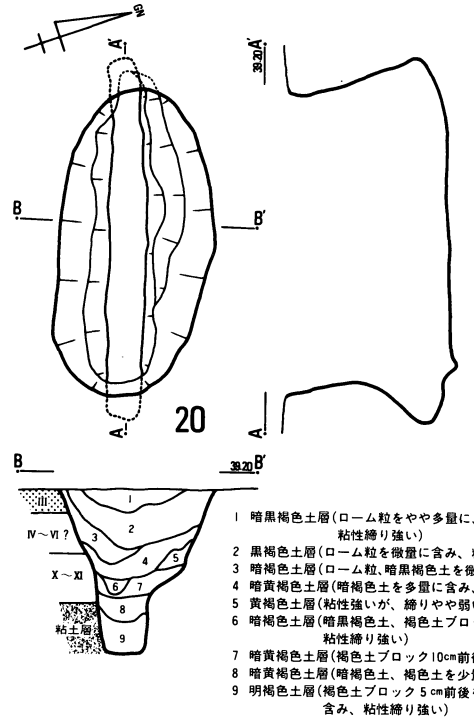
1 暗褐色土層(粘性強く締り弱い)
2 暗褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(白色粘土を微量含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(白色粘土を少量含み、粘性締り強い)
5 暗黒褐色土層(白色粘土を多量に含み、粘性締り強い)



1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(黒褐色土、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(ローム粒、暗黒褐色を多量に含み、Ⅳ～Ⅵ層ブロック1cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
4 褐色土層(粘性非常に強く、締りも強い)
5 暗褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(ローム粒を微量、Ⅳ～Ⅵ層ブロックを多量に含み、粘性締り強い)
7 黒褐色土層(暗褐色土、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
8 明褐色土層(白色粘土を少量、褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
9 白色粘土層(暗褐色土、黒色土を微量に含み、粘性締り強い)
10 明褐色土層(白色粘土、褐色粘土を多量に含み、粘性締り強い)
11 暗黒褐色土層(白色粘土を少量、褐色土を微量に含み、粘性強いが締りやや強い)

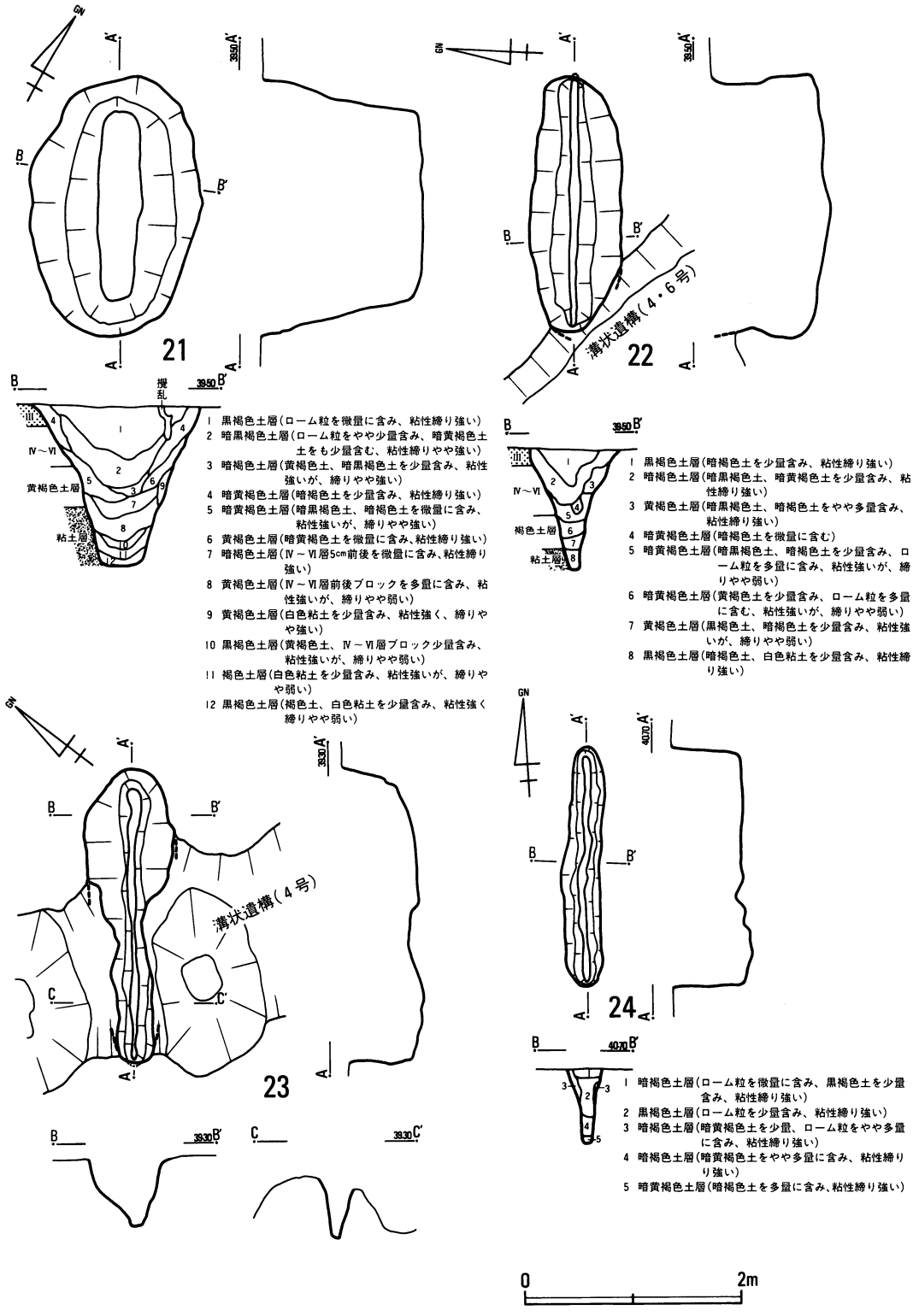


1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(黒褐色土を少量、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、暗黒褐色を微量に含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック5cm前後を微量に含み、暗褐色土をも少量含む、粘性締り強い)
6 暗黄褐色土層(暗褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(Ⅶ層?を主体とし、白色粘土を微量に含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～3cm前後を少量、白色粘土を少量含み、粘性締り強い)

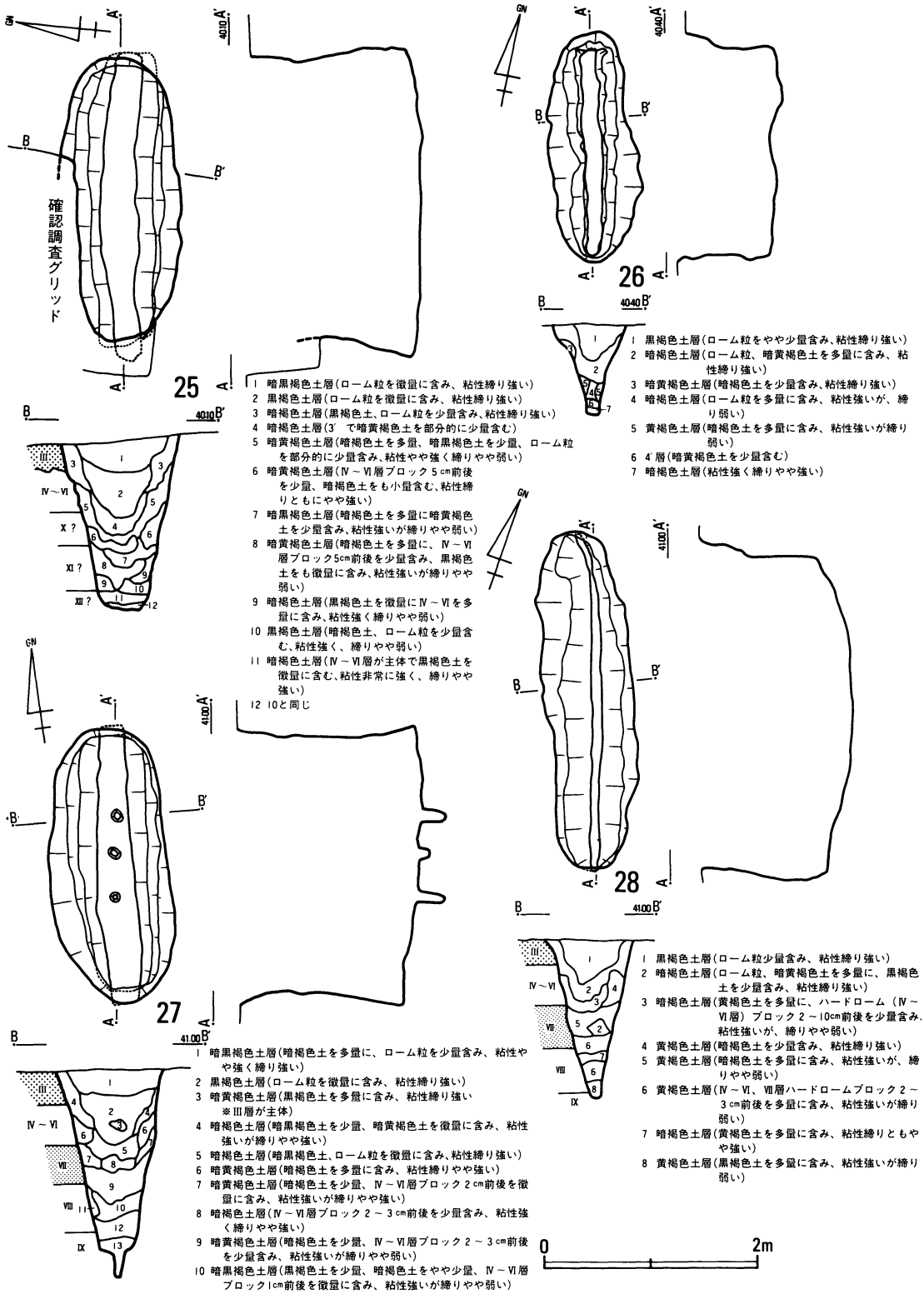


1 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(ローム粒、暗黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
5 黄褐色土層(粘性強いが、締りやや弱い)
6 暗褐色土層(暗黒褐色土、褐色土ブロック1cm前後を少量含み、粘性締り強い)
7 暗黄褐色土層(褐色土ブロック10cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
8 暗黄褐色土層(暗褐色土、褐色土を少量含み、粘性締り強い)
9 明褐色土層(褐色土ブロック5cm前後を少量、白色粘土を微量に含み、粘性締り強い)

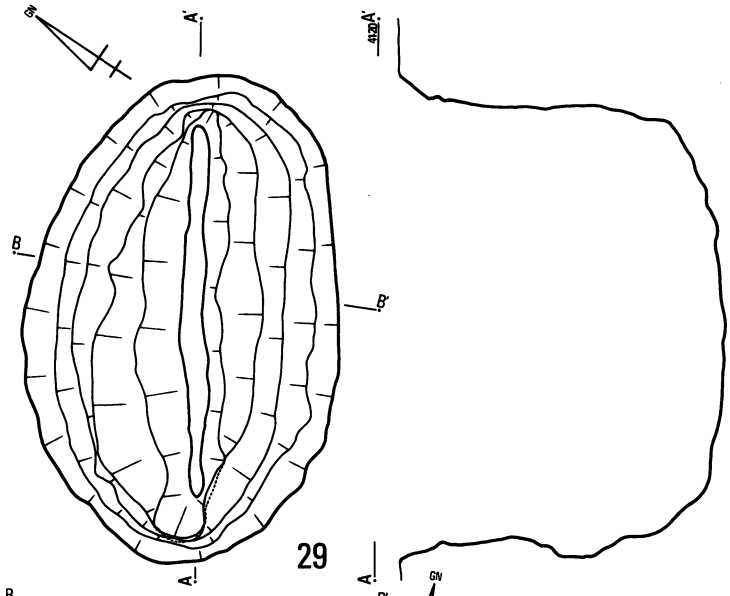
第127図　陥し穴状土壙実測図(17～20号)(1/60)

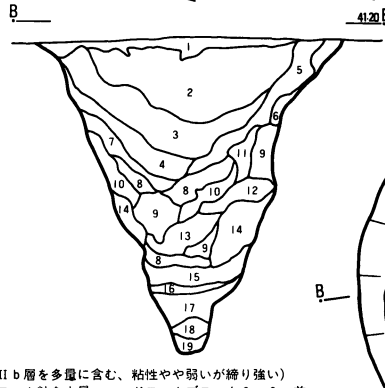


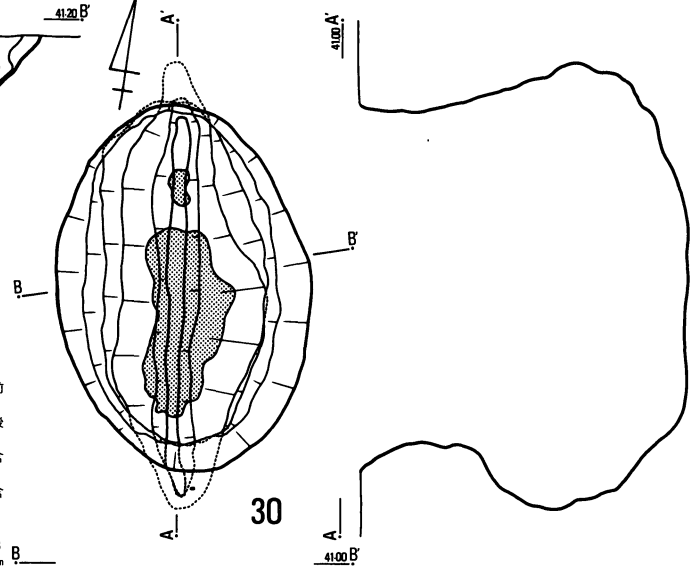
第128図　陥し穴状土壙実測図(21～24号)(1/60)

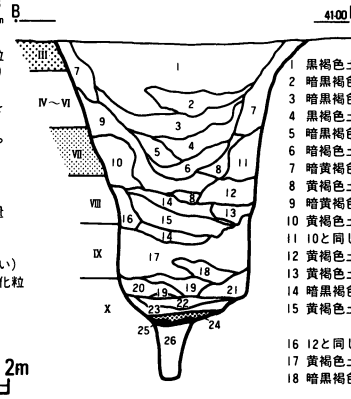


第129図　陥し穴状土壙実測図(25～28号)(1/60)







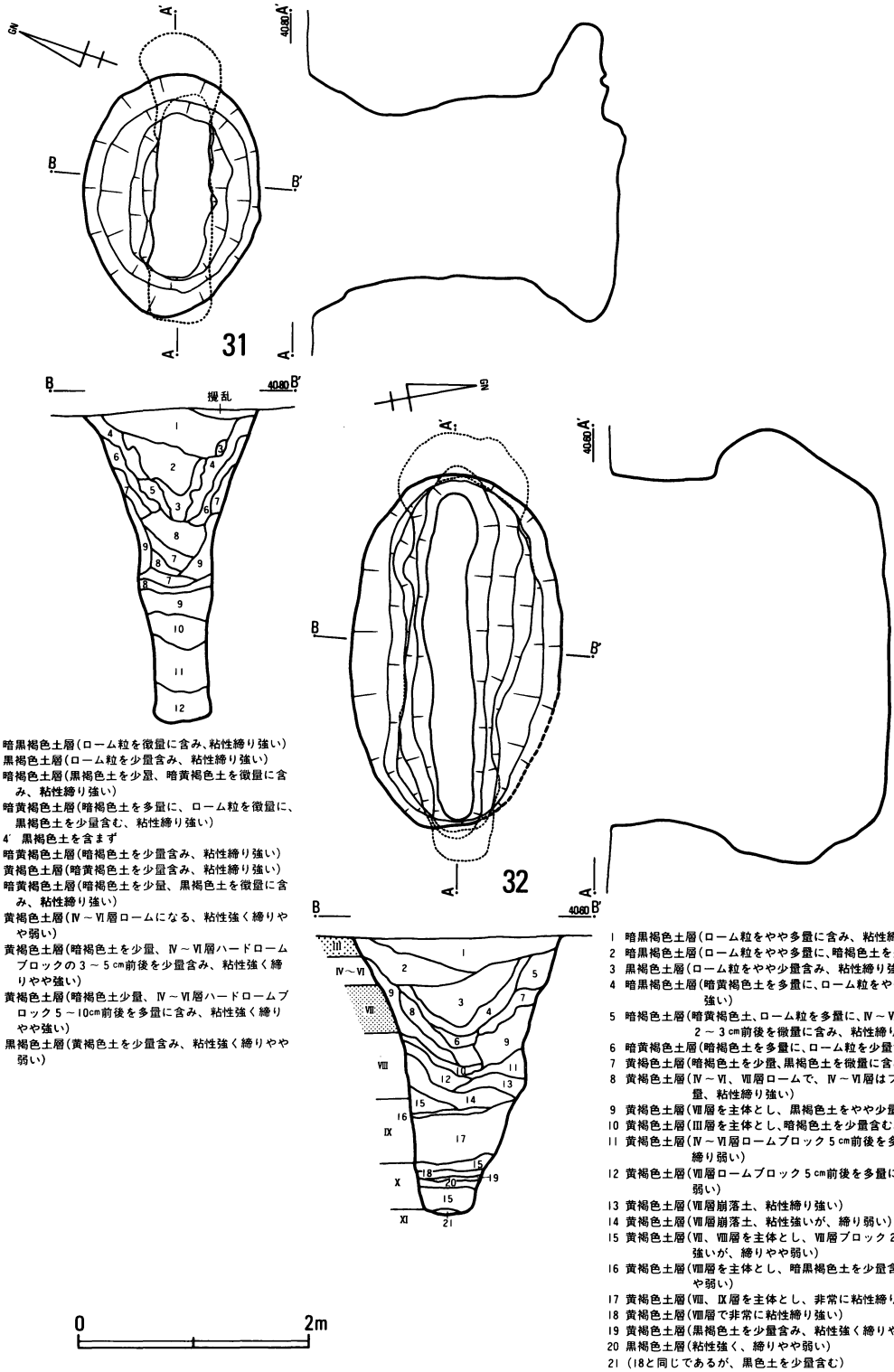


1 暗褐色土層(II b 層を多量に含む、粘性やや弱いが締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を少量、ハードロームブロック 2 ～ 3 mm前後を少量含み、粘性締り強い)
3 黒色土層(ローム粒を少量、ハードロームブロック 2 ～ 3 mm前後を少量含み、粘性締り強い)
4 黒褐色土層(ローム粒、ロームブロック 2 ～ 3 mm前後を多量に含み、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(暗黄褐色土をやや多量に含み、ローム粒をも少量含む、粘性締り強い)
6 暗黄褐色土層(III、IV ～ VI 層を多量に含み、粘性締り強い)
7 暗褐色土層(黒褐色土を少量、ローム粒、ロームブロック 2 ～ 3 mm前後を多量にIV ～ VI 層ハードロームブロック 5 cm前後を少量含み、粘性締り強い)
8 暗黄褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 2 ～ 3 cm前後を少量、ローム粒を多量に暗褐色土をもやや多量に含み、粘性締り強い)
9 黄褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 2 ～ 3 cm前後を少量、暗褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
10 黄褐色土層(VII 層ローム粒を多量に含み、、粘性強いが締りやや弱い)
11 黄褐色土層(III 層を多量に含み、粘性強いが、やや締り強い)
12 黄褐色土層(IV ～ VI、VII 層を多量に含み、粘性締り強い)
13 黄褐色土層(IV ～ VI 層ハードロームブロック10～20cm前後を多量に含む)
14 黄褐色土層(VIII 層崩落土)
15 黒褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 5 cm前後を少量含み、粘性締り強い)
16 黄褐色土層(炭化物を多量に含み、粘性締り非常に強い) ●炭化粒
17 黄褐色土層(IX 層の崩落土、粘性締り強い)
18 黄褐色土層(IX 層の崩落土、粘性締り弱い)
19 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強いが締り弱い)

0 2m

1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(ローム粒をやや少量含み、粘性締り強い)
4 黒褐色土層(ローム粒を微量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
5 暗黒褐色土層(ローム粒を少量、IV ～ VI 層ブロック 5 mmを微量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量、ローム粒を微量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
7 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
9 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、IV ～ VI 層ブロック 1 ～ 2cm前後を少量含み、粘性締り強い)
10 黄褐色土層(IV ～ VI 層ブロック10cm前後を少量、VII 層を多量に含み、粘性強いが締りやや強い)
11 10と同じ
12 黄褐色土層(VII 層を主体とし、IV ～ VI 層ブロック2cm前後を少量含み、粘性強いが締りやや強い)
13 黄褐色土層(VIII 層主体の粘性強く、締りやや強い)
14 暗黒褐色土層(黄褐色土を多量に含み、粘性強いが、締りやや強い)
15 黄褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 2 cm前後VII・ VIII 層を主体とし、暗褐色土を少量含む、粘性強いが締りやや弱い)
16 12と同じ
17 黄褐色土層(VIII 層を主体とし、粘性締り強い)
18 暗黒褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 3 ～ 4 cm前後を少量含み、VIII 層をも多量に含む、粘性強いが締りやや弱い)
19 暗黒褐色土層(IV ～ VI ブロック 1 ～ 3 cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
20 黄褐色土層(IV ～ VI 層ブロック 5 cm前後を少量、VIII 層を多量に含み、粘性締り強い)
21 黄褐色土層(IX 層を主体とし、粘性締り強い)
22 暗褐色土層(黄褐色土を多量に含み、粘性強く締り非常に強い)
23 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、黄褐色土を微量に含み、粘性強く締り非常に強い)
24 焼土(炭化物を多量に含む)
25 炭化物層
26 暗褐色土層(暗黒褐色土粒、黄褐色土粒をそれぞれ少量含み、粘性強く締り非常に強い)

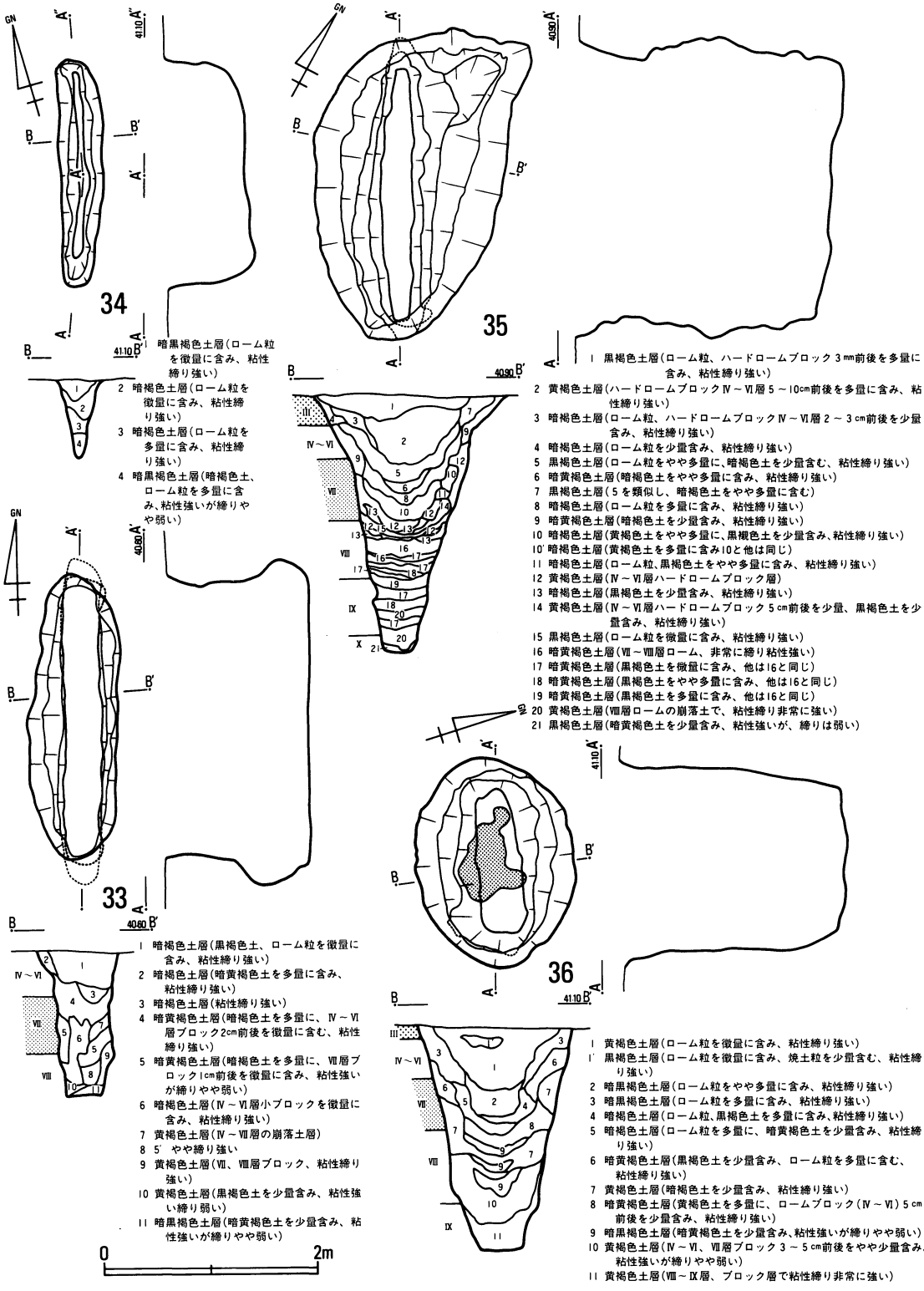
第130図 陥し穴状土壙実測図(29・30号)(1/60)



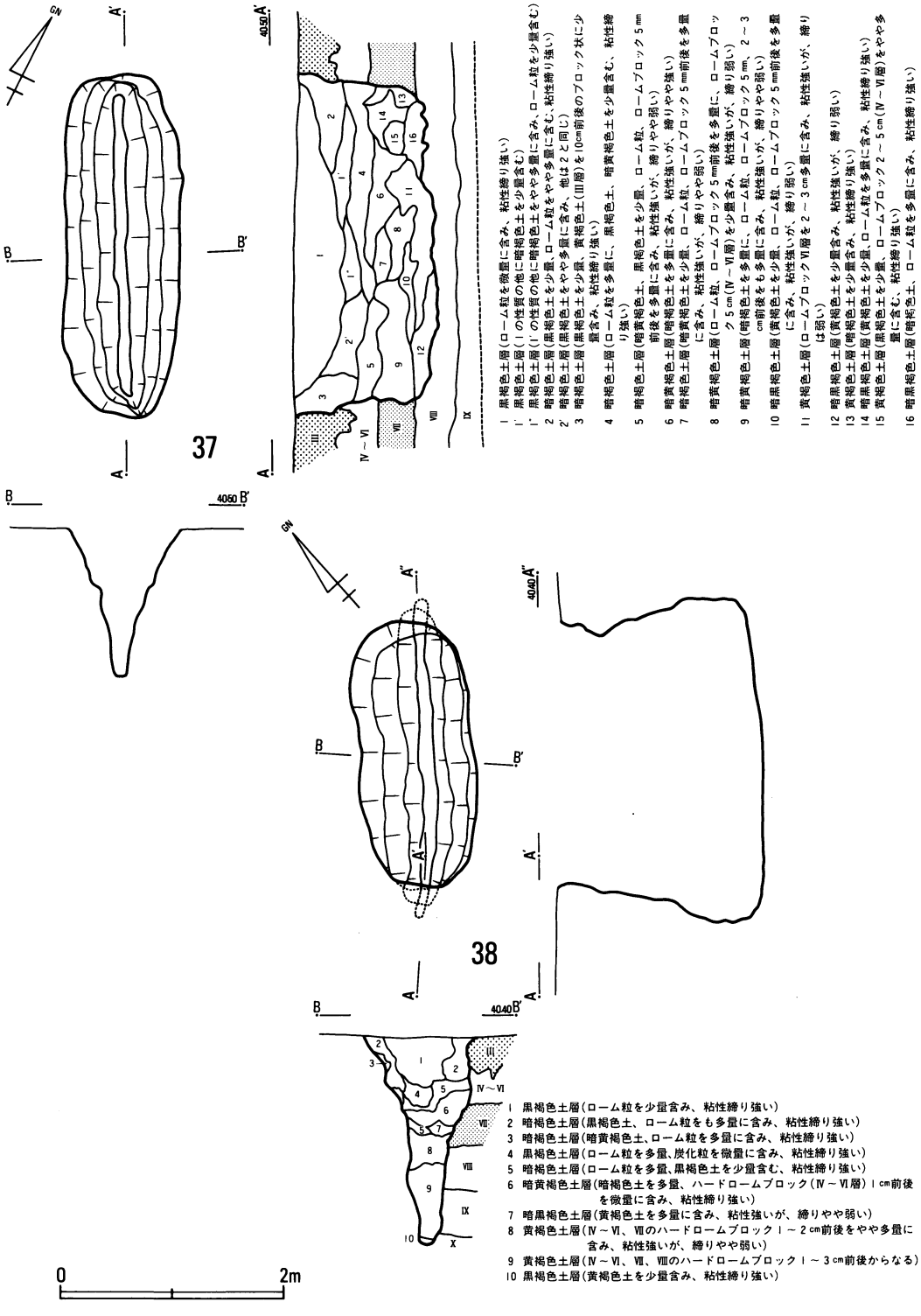
1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(黒褐色土を少量、暗黄褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、ローム粒を微量に、黒褐色土を少量含む、粘性締り強い)
5 4′ 黒褐色土を含まず
6 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
8 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
*9 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ロームになる、粘性強く締りやや弱い)
10 黄褐色土層(暗褐色土を少量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロックの3～5㎝前後を少量含み、粘性強く締りやや強い)
11 黄褐色土層(暗褐色土少量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック5～10㎝前後を多量に含み、粘性強く締りやや強い)
12 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)

1 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 黒褐色土層(ローム粒をやや少量含み、粘性締り強い)
4 暗黒褐色土層(暗黄褐色土を多量に、ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(暗黄褐色土、ローム粒を多量に、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2～3㎝前後を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(暗褐色土を少量、黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶ層ロームで、Ⅳ～Ⅵ層はブロック2～3㎝前後を少量、粘性締り強い)
9 黄褐色土層(Ⅶ層を主体とし、黒褐色土をやや少量含む)
10 黄褐色土層(Ⅲ層を主体とし、暗褐色土を少量含む、粘性締り強い)
11 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ロームブロック5㎝前後を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
12 黄褐色土層(Ⅶ層ロームブロック5㎝前後を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
13 黄褐色土層(Ⅶ層崩落土、粘性締り強い)
14 黄褐色土層(Ⅶ層崩落土、粘性強いが、締り弱い)
15 黄褐色土層(Ⅶ、Ⅷ層を主体とし、Ⅶ層ブロック2～3㎝前後を含み、粘性強いが、締りやや弱い)
16 黄褐色土層(Ⅷ層を主体とし、暗黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
17 黄褐色土層(Ⅷ、Ⅸ層を主体とし、非常に粘性締り強い)
18 黄褐色土層(Ⅷ層で非常に粘性締り強い)
19 黄褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)
20 黒褐色土層(粘性強く、締りやや弱い)
21 (18と同じであるが、黒色土を少量含む)

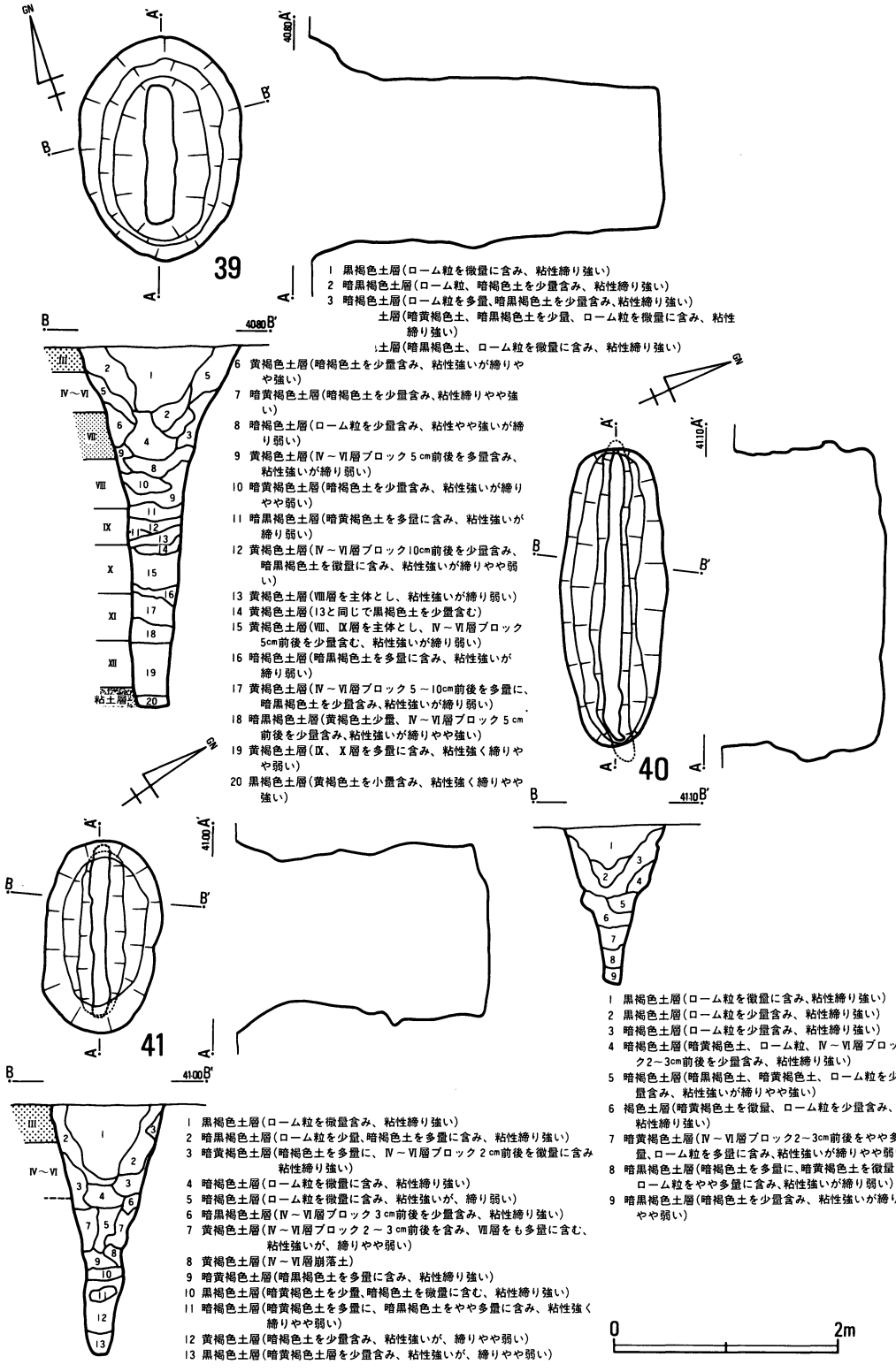
第131図　陥し穴状土壙実測図(31・32号)(1/60)



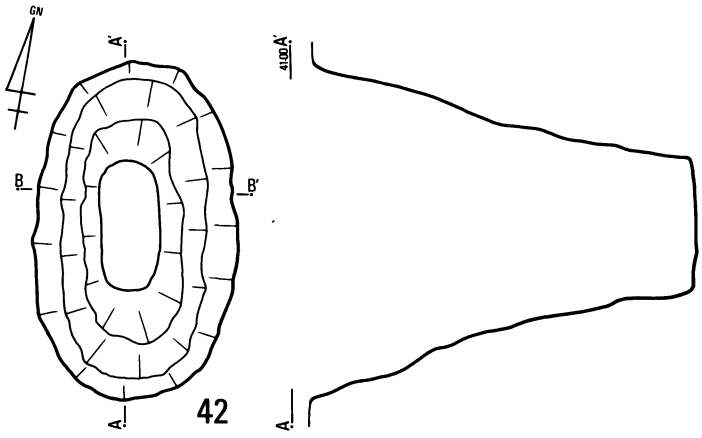
第132図　陥し穴状土壙実測図(33～36号)(1/60)

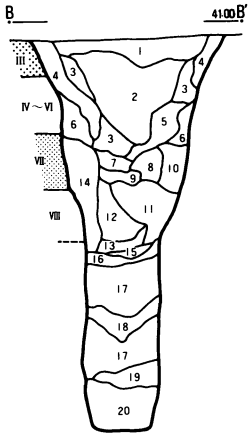


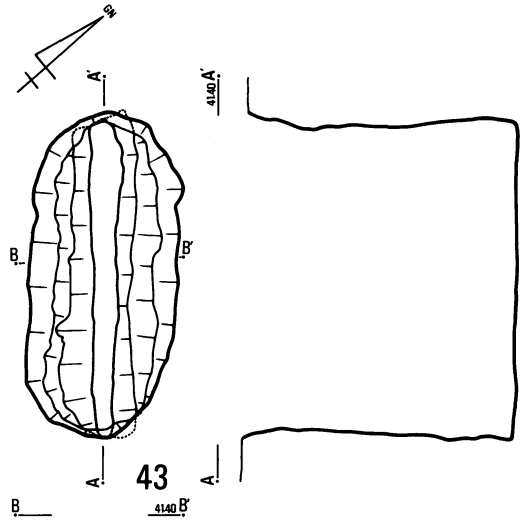
第133図　陥し穴状土壙実測図(37・38号)(1/60)

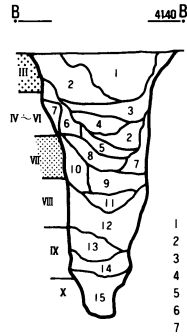


第134図　陥し穴状土壙実測図(39～41号)(1/60)







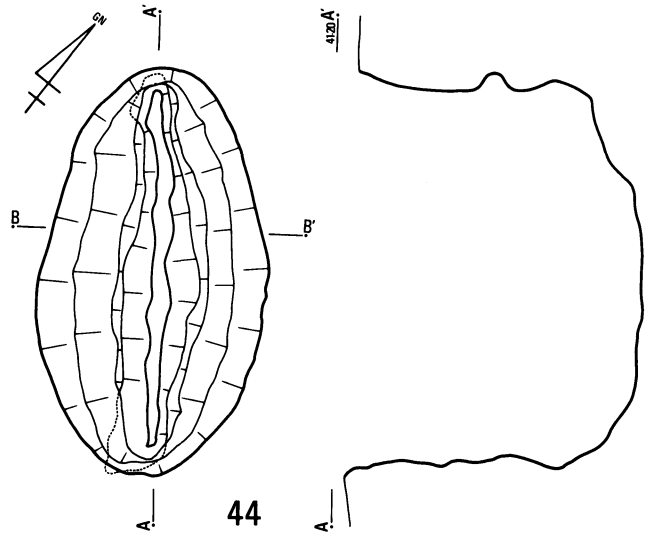


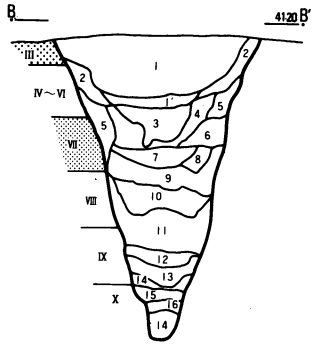
1 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に、暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗黄褐色土を少量含む、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(黒褐色土を多量、暗黄褐色土を少量、ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
5 暗黒褐色土層(暗褐色土、暗黄褐色土をやや多量に、Ⅳ～Ⅵ層ブロック1cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、黒褐色土を微量に含む、粘性強いが、締りやや弱い)
7 暗黒褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後を少量、暗黄褐色土をも少量含む、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後を主体とし、暗褐色土、黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
9 3'(ローム粒を微量に含む)
10 黄褐色土層(Ⅶ層崩落土、粘性強いが、締り弱い)
11 黄褐色土層(Ⅶ層崩落土、ブロック状になり10より締りやや強い)
12 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
13 暗黒褐色土層(Ⅶ層を多量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
14 黄褐色土層(Ⅶ層を主体としⅣ～Ⅵ層ブロック3～10cm前後の崩落土、締りやや弱い)
15 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層崩落土)
16 暗褐色土層(黒褐色土を少量、Ⅳ～Ⅵ層を微量に含み、粘性強いが締り弱い)
17 黄褐色土層(黒褐色土、暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
18 暗黒褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック3cm前後を少量、暗黄褐色土をやや多量に含む、粘性強いが、締り弱い)
19 黄褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性強く締り弱い)
20 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

1 暗黒褐色土層(ローム粒、暗褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に、暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(暗黄褐色土を少量、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
4 暗黒褐色土層(暗褐色土を微量に含む、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(暗黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
8 黒褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
9 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～3cm前後を多量に、暗黒褐色土を微量に含む、粘性強いが、締りやや弱い)
10 褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性強いが、締りやや強い)
11 黒褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
12 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック3～10cm前後、粘性強いが、締り弱い)
13 黄褐色土層(Ⅶ層ブロック、Ⅷ層ブロック、黒褐色土を少量含む、粘性強いが、締り弱い)
14 暗黒褐色土層(黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
15 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

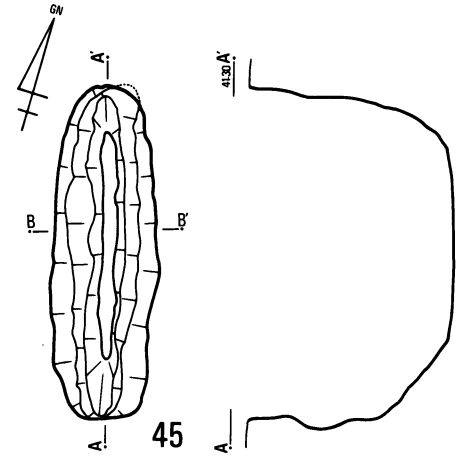
0 2m

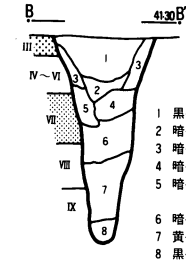
第135図　陥し穴状土壙実測図(42・43号)(1/60)





1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
1' 黒褐色土層(ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
2 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量にローム粒を少量含み、粘性締り強い)
3 黒褐色土層(粘性締り強い)
4 暗褐色土層(暗黄褐色土を多量に、暗黒褐色土を少量含む、粘性締り強い)
5 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック 2 ～ 3 cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや強い)
6 黄褐色土層(Ⅶ層を主体とし、粘性締りやや強い)
7 暗褐色土層(暗黄褐色土、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
8 暗褐色土層(黄褐色土をやや多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
9 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶブロック 2 ～ 3 cm前後を主体とし)
10 暗褐色土層(黒褐色土、黄褐色土を多量に、Ⅳ～Ⅵ層ブロック 2 ～ 3 cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
11 黄褐色土層(Ⅶ層を主体とし、ブロック状 2 ～ 3 cm前後を少量含む、粘性締り強い)
12 黄褐色土層(11' 暗黒褐色土を微量に含む)
13 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック 5 ～10cm前後を主体とし、粘性強いが、締り弱い)
14 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強く締りやや強い)
15 黄褐色土層(Ⅶ層崩落土、粘性締り強い)
16 黄褐色土層(15' 暗褐色土を少量含む)

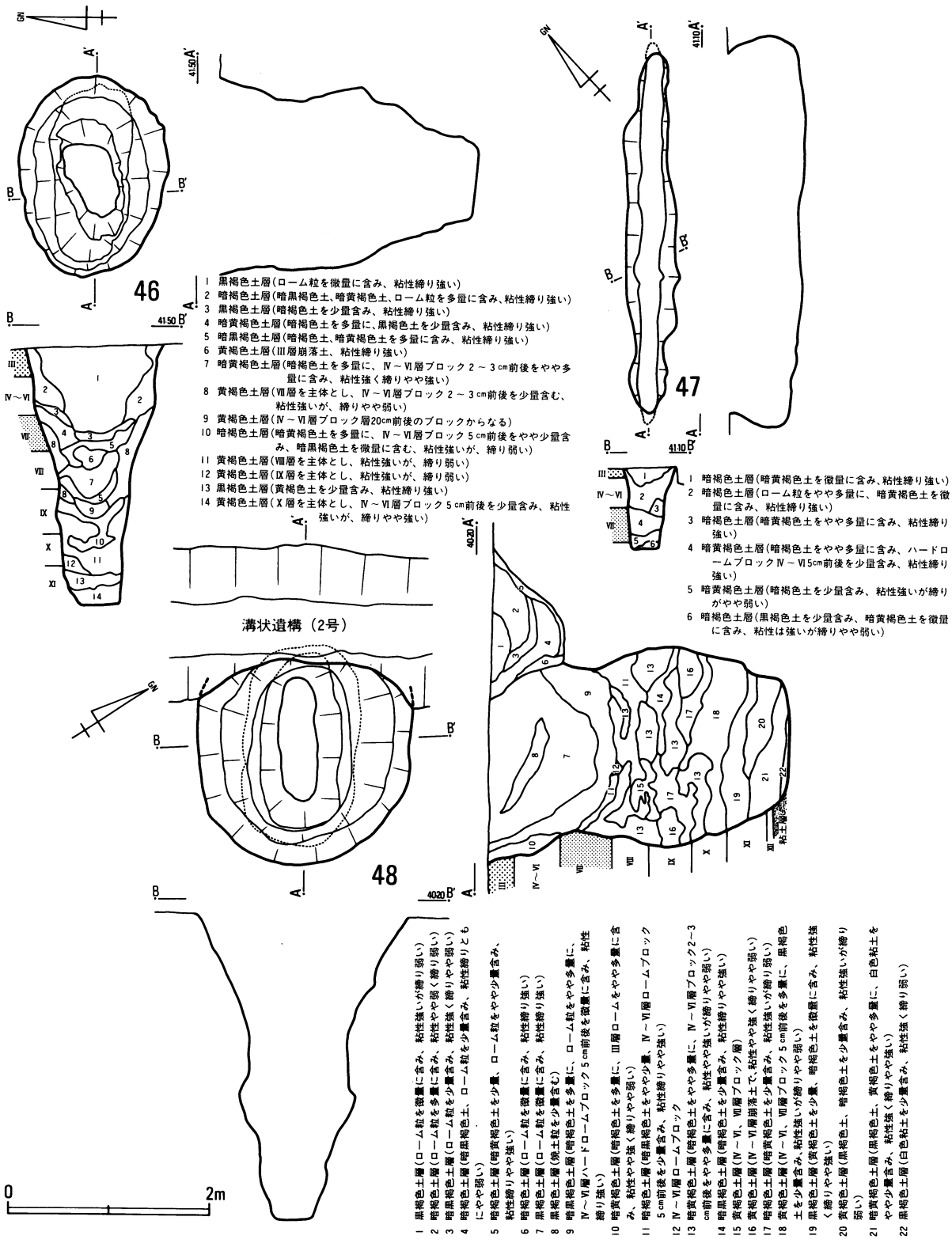




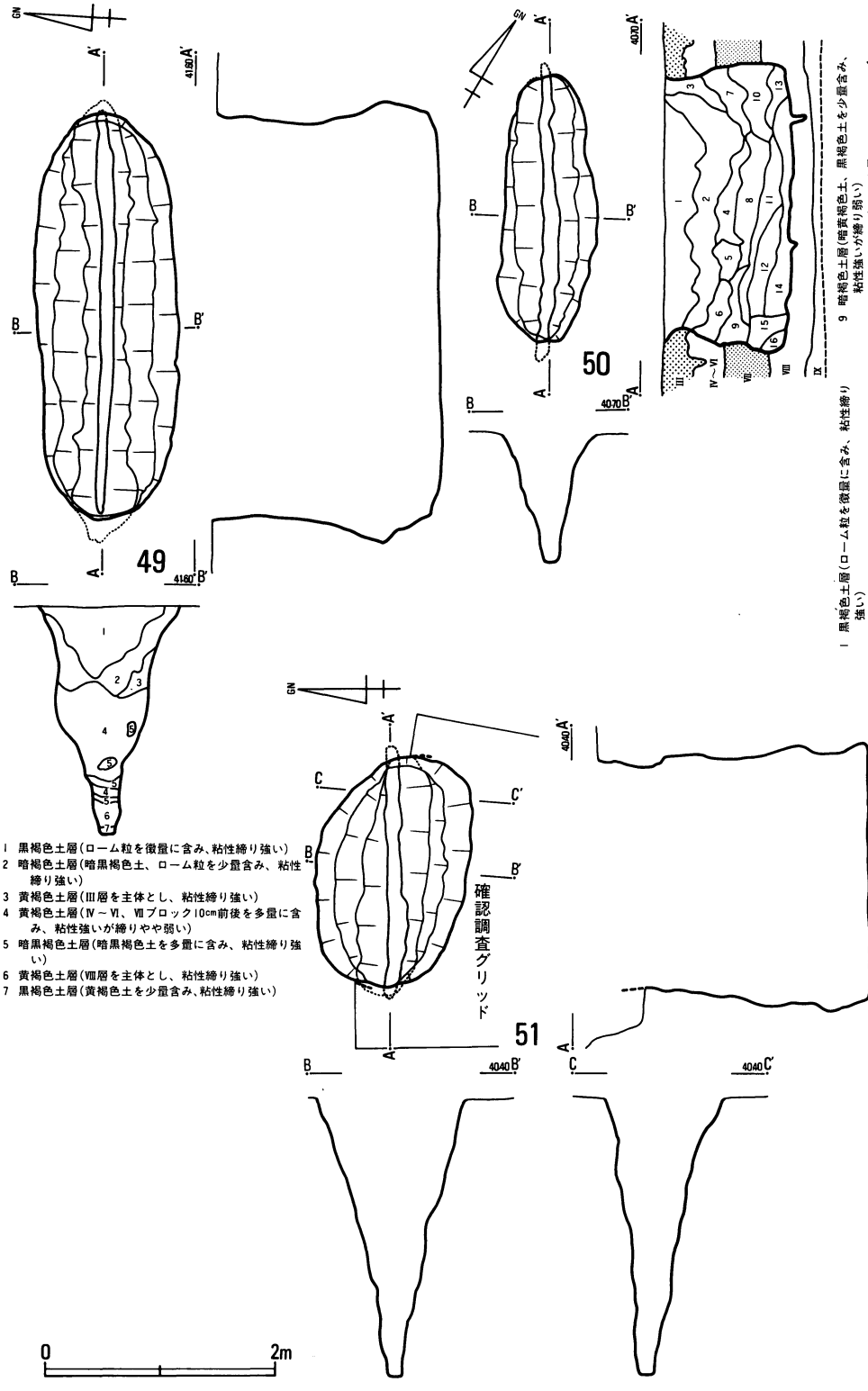
1 黒褐色土層(暗褐色土、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(暗黒褐色土をやや多量に、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(暗黒褐色土、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(粘性締り強い)
5 暗褐色土層(黄褐色土を多量に、黒褐色土を少量、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(黄褐色土ブロック 5 ～10cm前後を少量含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶ層を主体とし、粘性強いが、締りやや強い)
8 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

0 2m

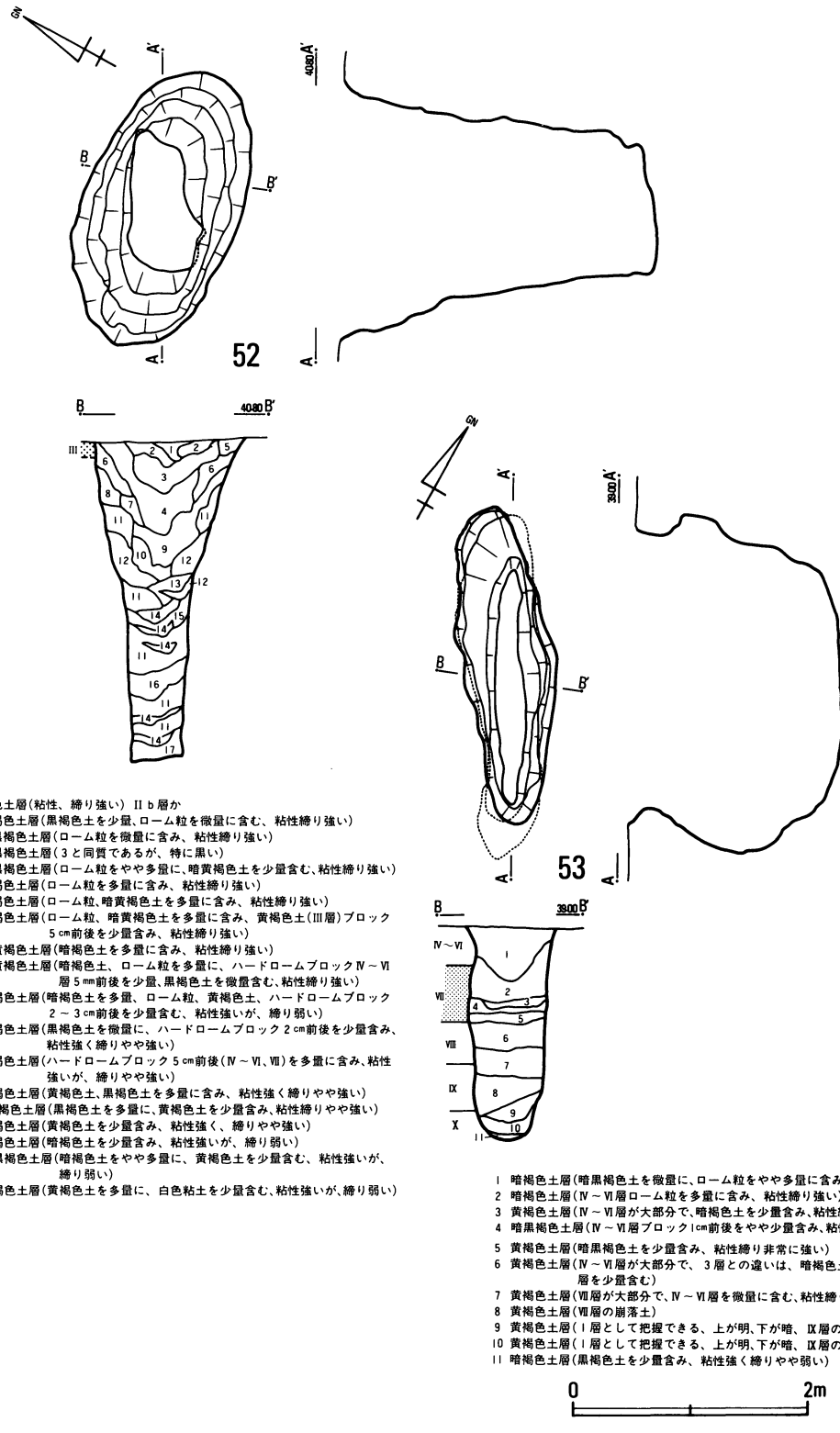
第136図　陥し穴状土壙実測図(44・45号)(1/60)



第137図　陥し穴状土壙実測図(46～48号)(1/60)



第138図　陥し穴状土壙実測図(49～51号)(1/60)

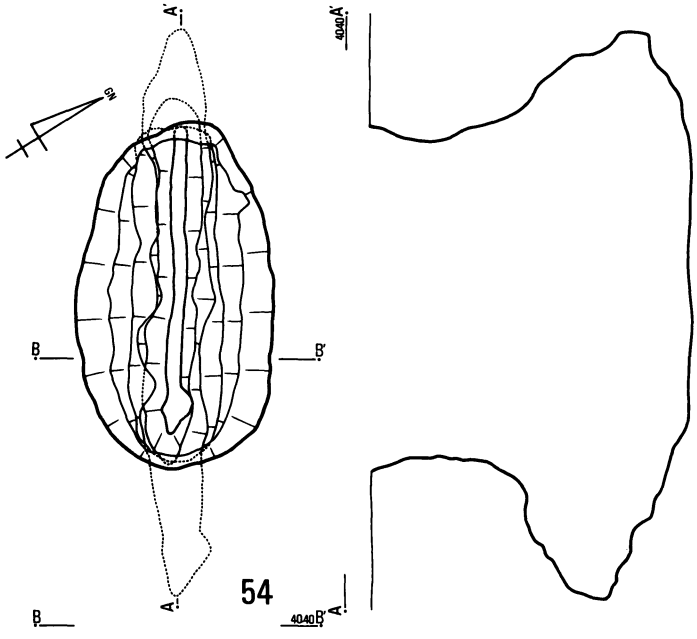


1 褐色土層(粘性、締り強い) II b 層か
2 暗褐色土層(黒褐色土を少量、ローム粒を微量に含む、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3' 暗黒褐色土層(3と同質であるが、特に黒い)
4 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗黄褐色土を少量含む、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
7 暗褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を多量に含み、黄褐色土(III層)ブロック5cm前後を少量含み、粘性締り強い)
8 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
9 暗黄褐色土層(暗褐色土、ローム粒を多量に、ハードロームブロックIV～VI層5mm前後を少量、黒褐色土を微量含む、粘性締り強い)
10 黒褐色土層(暗褐色土を多量、ローム粒、黄褐色土、ハードロームブロック2～3cm前後を少量含む、粘性強いが、締り弱い)
11 黄褐色土層(黒褐色土を微量に、ハードロームブロック2cm前後を少量含み、粘性強く締りやや強い)
12 黄褐色土層(ハードロームブロック5cm前後(IV～VI、VII)を多量に含み、粘性強いが、締りやや強い)
13 暗褐色土層(黄褐色土、黒褐色土を多量に含み、粘性強く締りやや強い)
13' 暗褐色土層(黒褐色土を多量に、黄褐色土を少量含み、粘性締りやや強い)
14 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強く、締りやや強い)
15 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
16 暗黒褐色土層(暗褐色土をやや多量に、黄褐色土を少量含む、粘性強いが、締り弱い)
17 暗褐色土層(黄褐色土を多量に、白色粘土を少量含む、粘性強いが、締り弱い)

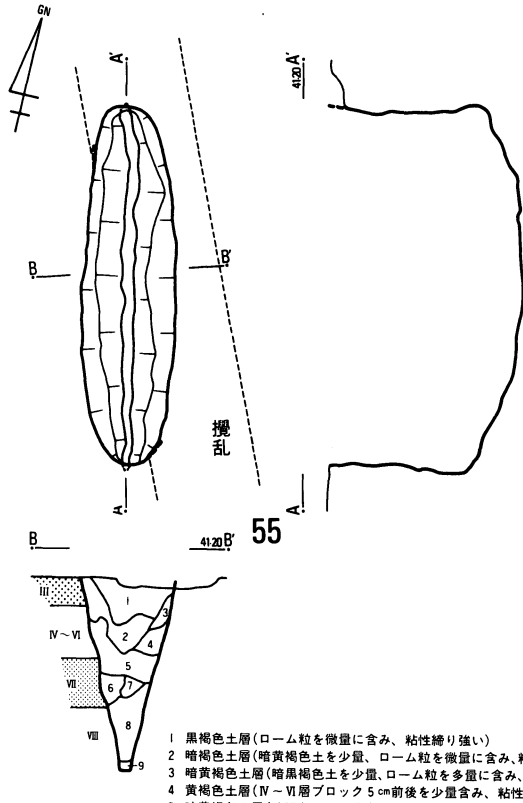
1 暗褐色土層(暗黒褐色土を微量に、ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(IV～VI層ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
3 黄褐色土層(IV～VI層が大部分で、暗褐色土を少量含み、粘性締り非常に強い)
4 暗黒褐色土層(IV～VI層ブロック1cm前後をやや少量含み、粘性締り非常に強い)
5 黄褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性締り非常に強い)
6 黄褐色土層(IV～VI層が大部分で、3層との違いは、暗褐色土を含まないVII層を少量含む)
7 黄褐色土層(VII層が大部分で、IV～VI層を微量に含む、粘性締り非常に強い)
8 黄褐色土層(VII層の崩落土)
9 黄褐色土層(1層として把握できる、上が明、下が暗、IX層の崩落土)
10 黄褐色土層(1層として把握できる、上が明、下が暗、IX層の崩落土)
11 暗褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)

0 2m

第139図 陥し穴状土壙実測図(52・53号)(1/60)



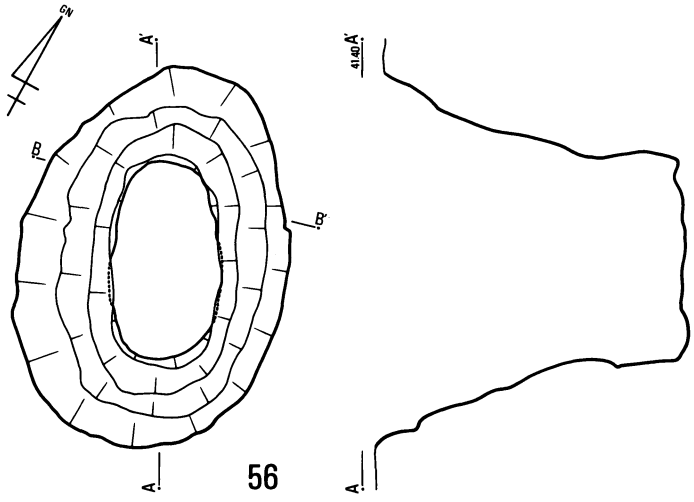
1 暗黒褐色土層(ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(黒褐色土、暗黄褐色土を多量に、ローム粒をやや多量に含む、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、ハードロームブロック1cm前後を少量含む、粘性締り強い)
5 黄褐色土層(黒褐色土、暗褐色土を少量含む、粘性締り強い)
6 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
7 暗黄褐色土層(黒褐色土、暗褐色土を多量に、ハードロームブロック(Ⅳ～Ⅵ)5cm前後を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
8 黄褐色土層(暗褐色土を多量に、黒褐色土を微量に含み、粘性強いが、締り弱い)
9 黄褐色土層(黒褐色土を少量、暗褐色土、ハードロームブロック10cm前後(Ⅶ層)を多量に含む、粘性は強いが、締りは弱い)
10 黄褐色土層(ハードロームブロック1cm前後で、締り弱い)
11 黄褐色土層(10と同じであるが黒褐色土を少量含む)
12 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
13 黄褐色土層(ハードロームブロック、11層に含まれる可能性あり)
14 黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
15 暗褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
16 黒褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)

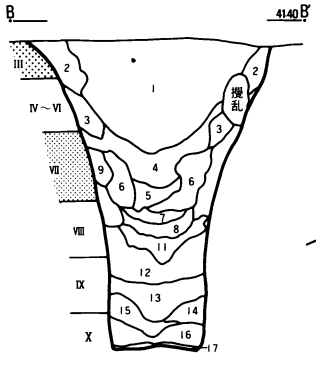


1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
3 暗黄褐色土層(暗黒褐色土を少量、ローム粒を多量に含み、粘性締り強い)
4 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後を少量含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性、締り強い)
6 4' Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後を多量に含み、粘性、締り強い)
7 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性、締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶブロック2cm前後を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
9 黒褐色土層(黄褐色土を微量に含み、粘性、締り強い)

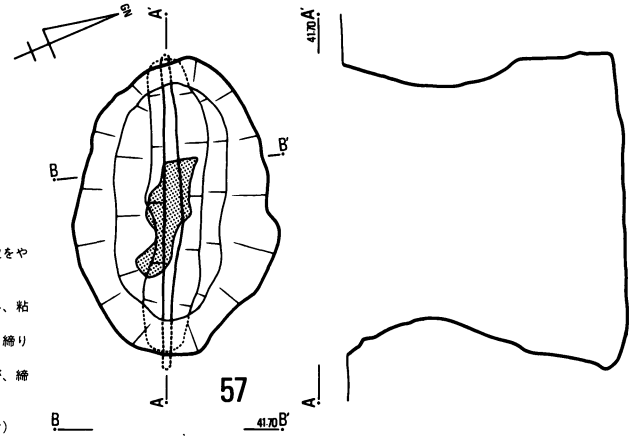
0 2m

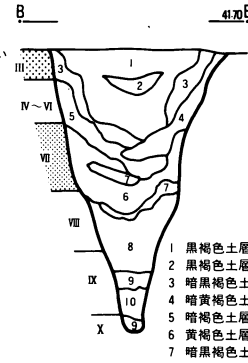
第140図 陥し穴状土壙実測図(54・55号)(1/60)





1 黒褐色土層(暗褐色土を多量に、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗褐色土層(暗黄燥色土を多量に、黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 黄褐色土層(Ⅲ層崩落土、粘性強いが、締りやや強い)
4 暗褐色土層(部分的に黄褐色土を多量に、暗黒褐色土を少量、ローム粒をやや少量含み、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(ローム粒を多量に含み、粘性強いが、締り弱い)
6 暗黒褐色土層(暗褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～5cm前後を多量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
7 暗褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～3cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
8 暗褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～3cm前後を多量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
9 暗黄褐色土層(Ⅶ層を主体とし、粘性強いが、締りやや弱い)
10 暗黄褐色土層(9と同じで、Ⅳ～Ⅵ層ブロック4～5cm前後を少量含む)
11 暗黄褐色土層(黒褐色土を微量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
12 暗黄褐色土層(Ⅶ、Ⅷを主体とし、特に1～●20cm前後ブロック状になっている、粘性強いが、締り弱い)
13 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶを主体とし、Ⅳ～Ⅵ層ブロック5～10cm前後をやや少量含み、粘性強く締りやや弱い)
14 黄褐色土層(黒褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ローム3cm前後を少量含み、粘性強いが、締り弱い)
15 暗褐色土層(暗褐色土、黒褐色土をやや多量に含み、粘性強く締りやや弱い)
16 暗褐色土層(Ⅷ、Ⅸ層を主体とし、暗褐色土を微量に含み、粘性強く、締り弱い)
17 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強く、締り弱い)

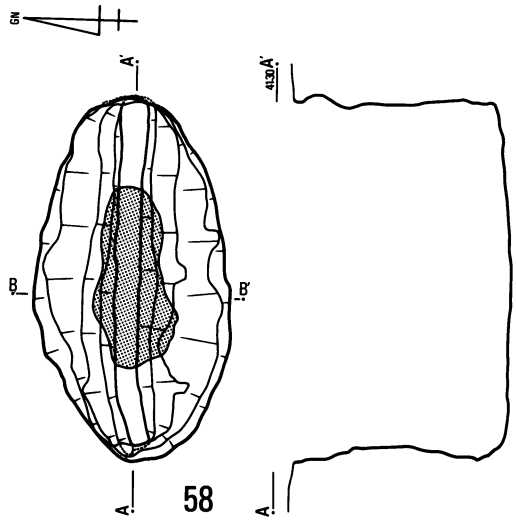


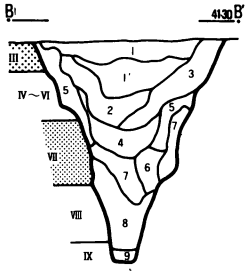


1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(焼土粒を多量に含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(暗黄褐色土、ローム粒を少量含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(暗黄褐色土を部分的に多量に含み、粘性締り強い)
6 黄褐色土層(暗褐色土を部分的に少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
7 暗黒褐色土層(暗褐色土、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅶ層を主体とし、Ⅳ～Ⅵ層ブロック5cm前後をやや多量に含み、粘性締り強い)
9 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性締りやや強い)
10 黄褐色土層(Ⅷ～Ⅸ層を主体とし、粘性強いが、締りやや弱い)

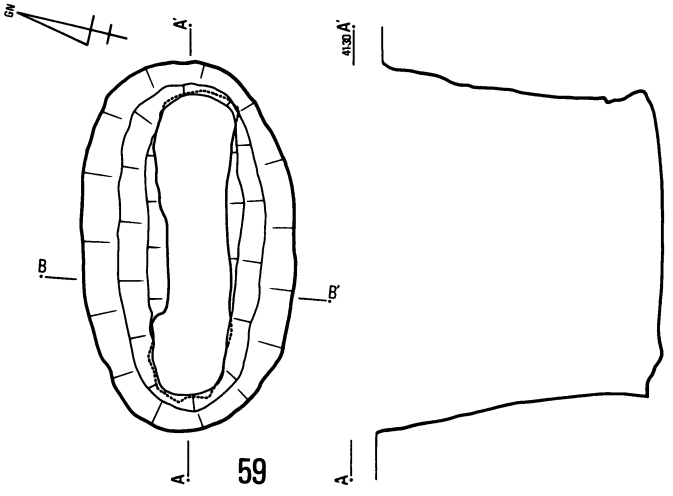
0 2m

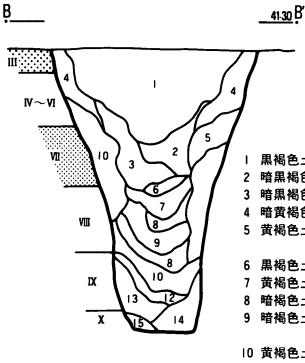
第141図 陥し穴状土壙実測図(56・57号)(1/60)





1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
1' 黒褐色土層(ローム粒を微量に、焼土粒を多量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ブロック2cm前後を少量含み、粘性締り強い)
5 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
6 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶ層を主体とし、粘性強いが締りやや弱い)
7 暗黄褐色土層(暗褐色土を多量に、暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(Ⅶ、Ⅷ層を主体とし、粘性強いが締り弱い)
9 黒褐色土層(暗褐色土を多量に、黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

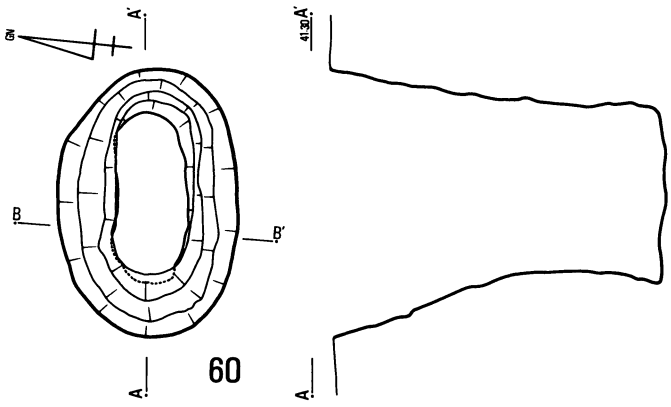


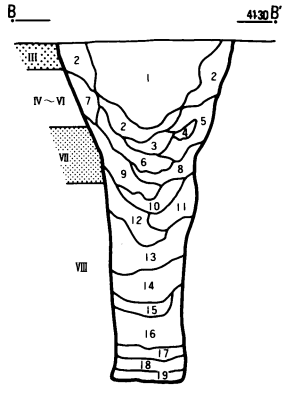


1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒を微量に、暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
3 暗黒褐色土層(ローム粒を多量に、他は2と同じ、2' としてもよい)
4 暗黄褐色土層(ローム粒を少量、暗黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
5 黄褐色土層(Ⅲ層を主体とし、Ⅳ～Ⅵ層ブロック1～2cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
6 黒褐色土層(ローム粒、暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(Ⅲ層崩落土、粘性締り強い)
8 暗褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック2～3cm前後をやや多量に含み、粘性締り強い)
9 暗褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ブロック5～10cm前後を少量、黒褐色土を微量、暗黄褐色土をやや多量に含み、粘性締り強い)
10 黄褐色土層(暗褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ブロック2cm前後を微量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
11 黄褐色土層(Ⅶ層主体で、暗褐色土を微量に含む、粘性強いが、締りやや弱い)
12 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量含み、粘性締り強い)
13 黄褐色土層(Ⅶ、Ⅷ層を主体とし、粘性強く締りやや強い)
14 黄褐色土層(Ⅸ層崩落土、粘性締りやや強い)
15 黄褐色土層(Ⅸ層崩落土に暗褐色土を少量含み、粘性強く締りやや弱い)

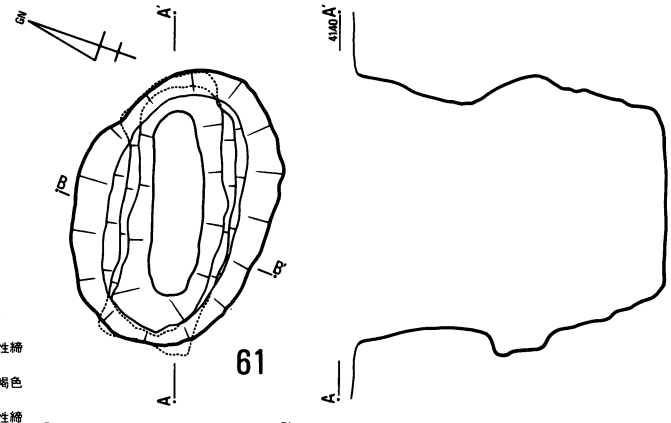
0 2m

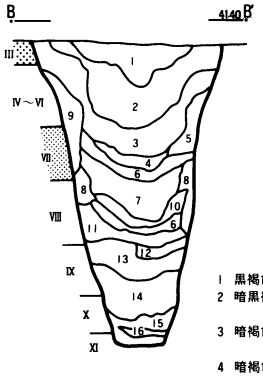
第142図　陥し穴状土壙実測図(58・59号)(1/60)





1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗褐色土を少量含み、粘性締り強い)
3 黄褐色土層(III層を主体とし、暗褐色土をやや少量含む、粘性締り強い)
4 黄褐色土層(IV～VI層ブロック3～5cm前後を主体とし、暗褐色土を少量含む)
5 暗褐色土層(ローム粒を多量に、黒褐色土を微量に含み、粘性締り強い)
6 暗褐色土層(ローム粒を微量に、IV～VI層ブロック5cm前後をやや微量に含み、粘性締り強い)
7 黄褐色土層(3' 暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
8 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
9 黄褐色土層(IV～VI、VII層を主体とし、IV～VIブロック5cm前後を多量に含み、粘性強いが締りやや弱い)
10 暗黒褐色土層(暗褐色土を多量に、IV～VI層ブロック5cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
11 暗褐色土層(VII層ブロック1cm前後を少量含み、粘性強いが締りやや弱い)
12 暗褐色土層(VII層ブロック5～10cm前後を多量に含み、粘性強いいが締り弱い)
13 暗褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性強いが締り弱い)
14 黄褐色土層(VII層を主体とし、IV～VI層ブロック2～5cm前後を少量含み、粘性強いが締りやや弱い)
15 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強く、締りやや強い)
16 黄褐色土層(VII、VIII層を主体とし、粘性強いが締り弱い)
17 暗褐色土層(黄褐色土を多量に含み、暗黒褐色土をも微量に含む、粘性強いが締りやや強い)
18 暗黄褐色土層(暗褐色土、暗黒褐色土を少量含み、粘性強く締りやや強い)
19 黒褐色土層(暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)

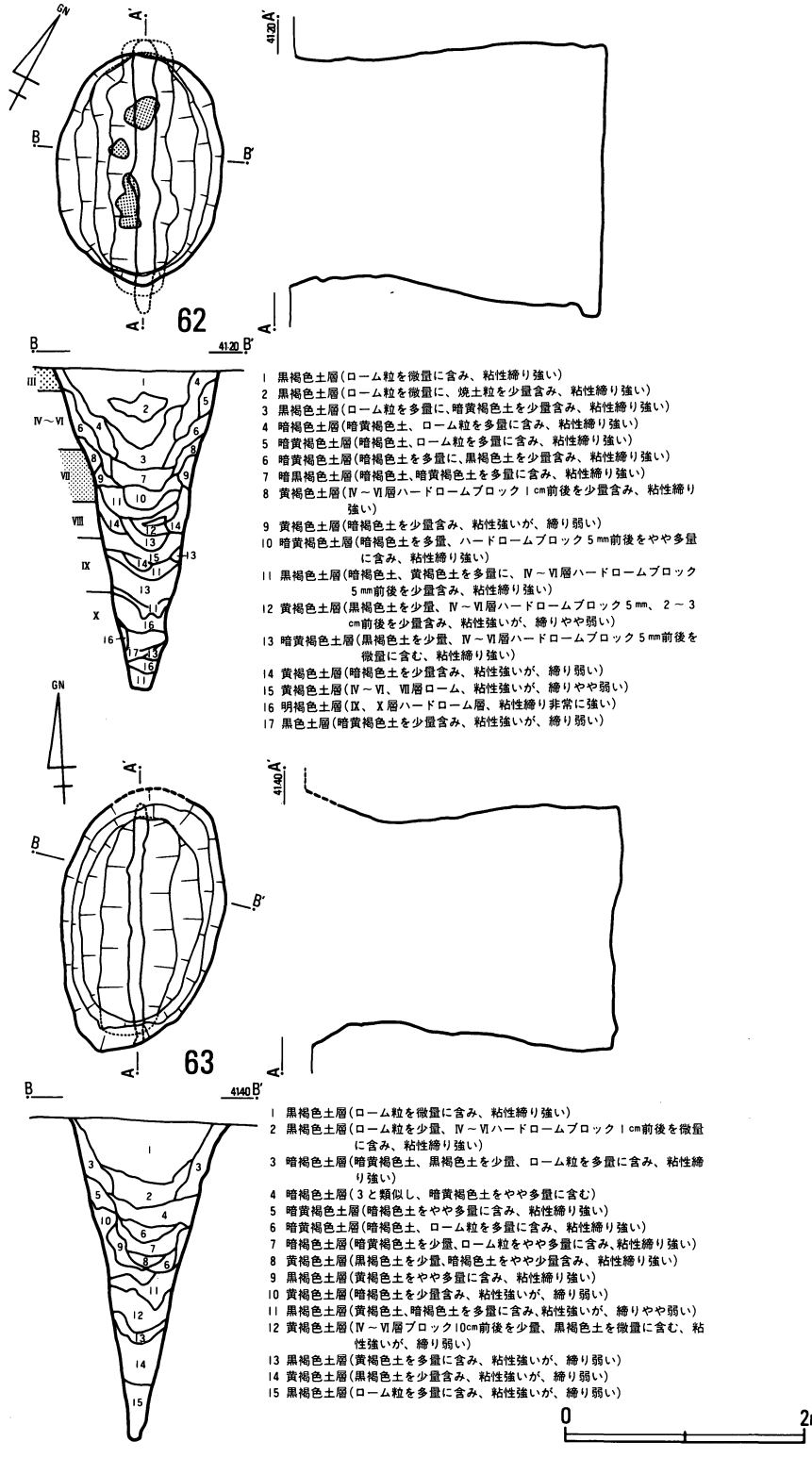




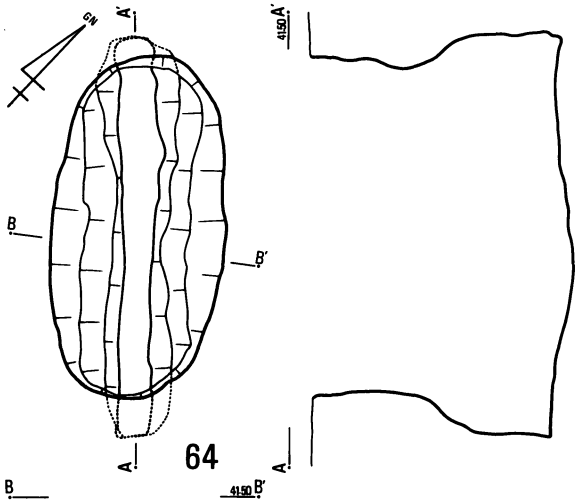
1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 暗黒褐色土層(ローム粒をやや多量に、暗褐色土を部分的に少量含む、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(暗黒褐色土を少量、IV～VI層ブロック5mm～1cm前後をやや少量含み、粘性締り強い)
4 暗褐色土層(3' III層ブロック5～10mm前後を多量に含む)
5 黄褐色土層(暗褐色土を微量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)
6 黒褐色土層(暗褐色土、IV～VI層ブロック1cm前後を微量に含み、粘性締り強い)
7 暗褐色土層(暗黒褐色土、IV～VI層を少量含み、粘性締り強い)
8 黄褐色土層(VII層を主体とし、粘性強いが、締りやや弱い)
9 黄褐色土層(III層を主体とし、粘性強いが、締りやや弱い)
10 黄褐色土層(IV～VI層ブロックを主体とする、粘性締り強い)
11 暗黄褐色土層(暗褐色土、暗黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
12 暗褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性締りやや強い)
13 黄褐色土層(IV～VI、VII層を主体とし、粘性強く、締りやや弱い)
14 黄褐色土層(VIII、IX層を主体とし、暗褐色土を少量含み、粘性強いが締り弱い)
15 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
16 暗褐色土層(黒褐色土をやや多量に含み、粘性強いが、締りやや弱い)

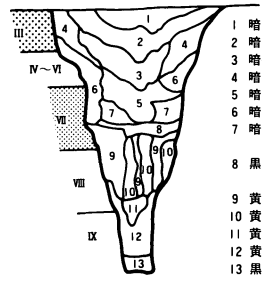
0 2m

第143図　陥し穴状土壙実測図(60・61号)(1/60)

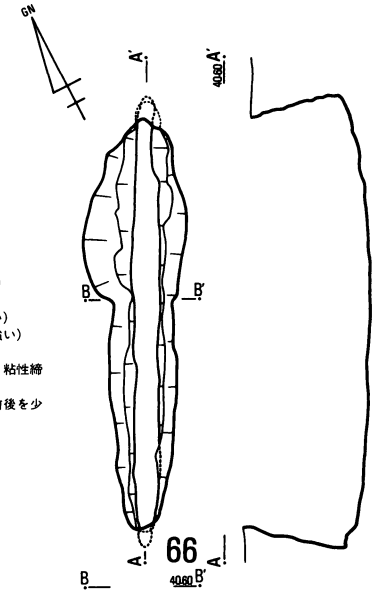


第144図　陥し穴状土壙実測図(62・63号)(1/60)

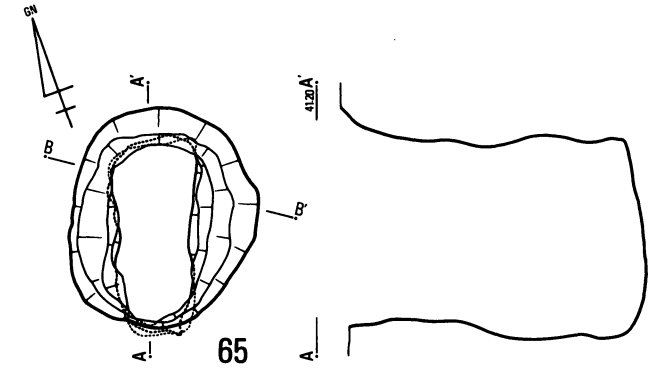


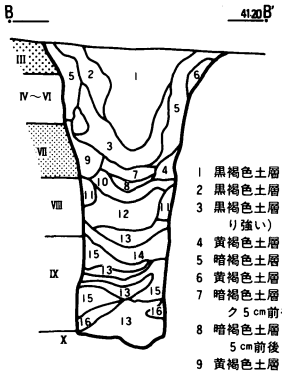


1 暗黒褐色土層(ローム粒をやや少量含み、粘性締り強い)
2 暗黄褐色土層(暗褐色土、ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
3 暗褐色土層(ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
4 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量、ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(ローム粒をやや少量、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
6 暗黄褐色土層(暗褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
7 暗黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック3cm前後を少量含み、粘性締り強い)
8 黒褐色土層(黄褐色土を多量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2cm前後を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
9 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ層ロームで、粘性強いが、締り弱い)
10 黄褐色土層(Ⅶ～Ⅷ層の崩落土で、粘性締り非常に強い)
11 黄褐色土層(黒褐色土を少量含み、粘性強いが、締りやや弱い)
12 黄褐色土層(Ⅷ、Ⅸ層ロームよりなる層、粘性強いが、締り弱い)
13 黒褐色土層(暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)



1 暗黄褐色土層(黄褐色土を部分的に強く含み、粘性締り強い)
2 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2～3cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
3 黄褐色土層(粘性締り非常に強い)
4 暗黄褐色土層(黒褐色土、黄褐色土を多量に、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック2～3cm前後を少量含む、粘性締り強い)
5 黒褐色土層(黄褐色土を少量含み、粘性強いが締り弱い)
6 黄褐色土層(黒褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック3mm前後を少量含み、粘性強いが締り弱い)





1 黒褐色土層(ローム粒を微量に含み、粘性締り強い)
2 黒褐色土層(ローム粒をやや多量に含み、粘性締り強い)
3 黒褐色土層(ローム粒を多量に、暗黄褐色土を少量含み、粘性締り強い)
4 黄褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層、粘性締り強い)
5 暗褐色土層(ローム粒、暗黄褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
6 黄褐色土層(暗褐色土を多量に含み、粘性締り強い)
7 暗褐色土層(暗黄褐色土、黒褐色土を少量、ハードロームブロック5cm前後を微量に含む、粘性締り強い)
8 暗褐色土層(暗黄褐色土を少量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック5cm前後を多量に含み、粘性締り強い)
9 黄褐色土層(暗褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック1cm前後を少量含み、粘性締り強い)
10 暗褐色土層(ローム粒、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック1cm前後を微量に含み、粘性強いが締り弱い)
11 暗黄褐色土層(Ⅷ層の崩落土、粘性強いが締り弱い)
12 暗褐色土層(黒褐色土を少量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック5cm～3cm前後を多量に含み、粘性強いが締り弱い)
13 黒褐色土層(Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック1～2cm前後を少量含み、粘性強いが締り弱い)
14 暗黄褐色土層(黒褐色土、暗褐色土、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック5cm前後を少量含み、粘性強いが締り弱い)
15 黄褐色土層(黒褐色土を微量、Ⅳ～Ⅵ層ハードロームブロック4～5cm前後を少量含み、粘性強いが締り弱い)
16 黄褐色土層(Ⅷ～Ⅸ層ローム、粘性強いが締り弱い)

0 2m

第145図　陥し穴状土壙実測図(64～66号)(1/60)

Ｂ２ｅ類　２号の１基のみである。縦断面の底部がオーバーハングして浅いもの。深さ約1.2ｍ。

(2)規模

口部の平均は2.5ｍ×1.3ｍで長幅比は1.9である。最大はＢ１ａ類の29号で3.8ｍ×2.5ｍ、最小はＡ１類12号の1.5ｍ×0.7ｍとＡ２類34号の2.1ｍ×0.4ｍである。

底部の平均は2.2ｍ×0.3ｍで長幅比は7.3である。最大はＡ２類47号の3.7ｍ×0.2ｍとＢ２ｅ類２号の3.0ｍ×1.0ｍであり、最小はＢ２ｂ類46号の0.8ｍ×0.5ｍと同じくＢ２ｂ類６号の1.2ｍ×0.1ｍである。

深さの平均は1.8ｍ，最大はＢ２ｂ類１号の3.2ｍ、最小はＡ１類23号の0.6ｍである。

(3)覆土

上半部は黒褐色～暗褐色土がレンズ状に落ち込んでいるものが多く、下半部はロームブロックをかなり含み壁面の崩落が考えられる。また、黒色～黒褐色土が底面直上に帯状に認められることが多い。

(4)出土遺物

覆土出土の遺物はほとんどないと言ってよく、土器としてはＢ２ａ類52号の１基から出土した条痕文系土器（第152図５～８）があるのみである。その他Ｂ１ｂ類30号からは底部より炭化物と焼土が出土しており、Ｂ１ａ類58号・Ｂ１ｃ類57号・62号の３基からは覆土上部において焼土が検出された。以上の出土遺物は全てＢ類からであるが、土器を除く焼土・炭化物の存在と形態とがどこかで結び付くのであろうか。

(5)底部ピット

Ａ２類17号から径８cm深さ40cm程のピットが１個、またＡ１類27号から径９cm深さ10～25cm程のピットが３個検出された。これらは２例ともＡ類に属し興味深い。

(6)等高線との交差方向

直交するもの21基、斜交するもの30基、平行するもの15基の割合であるが、遺跡南部の高所の周りの標高41.5ｍ付近や北部のやや窪地の標高39.5ｍ付近のはほとんどが直交しているようにみえる。

(7)分布

等高線との交差方向のところでもふれたが、遺跡南部の標高42ｍの高所を囲むようにやや環状に分布しているようにみえる。また、北部の窪地の辺もやや環状に近い分布をしているようにみえる。

形態別にみると、Ａ１類は北部の窪地よりやや北側と南部の高所より北側のゆるやかな緩斜面に集中している。Ａ２類は中央部やや西側と南東部に集中している。Ａ３類は中央やや北側の窪地に２基ともある。Ｂ１ａ類は南部の高所の西側を北から南にかけて分布している。Ｂ１

b類は高所の北側の東西に分布している。Ｂ１ｃ類は高所の南側を西から東にかけて分布している。Ｂ２ａ類は高所を取り囲むように分布している。Ｂ２ｂ類は高所の北側と南側及び遺跡の北端に分布しているが、そのうち２ケ所は隣接して２基があり、セットでつくられたとも考えられる。Ｂ２ｄ類は南端の１基を除き全て北側につくられている。Ｂ２ｃ類及びＢ２ｅ類は１基のみである。

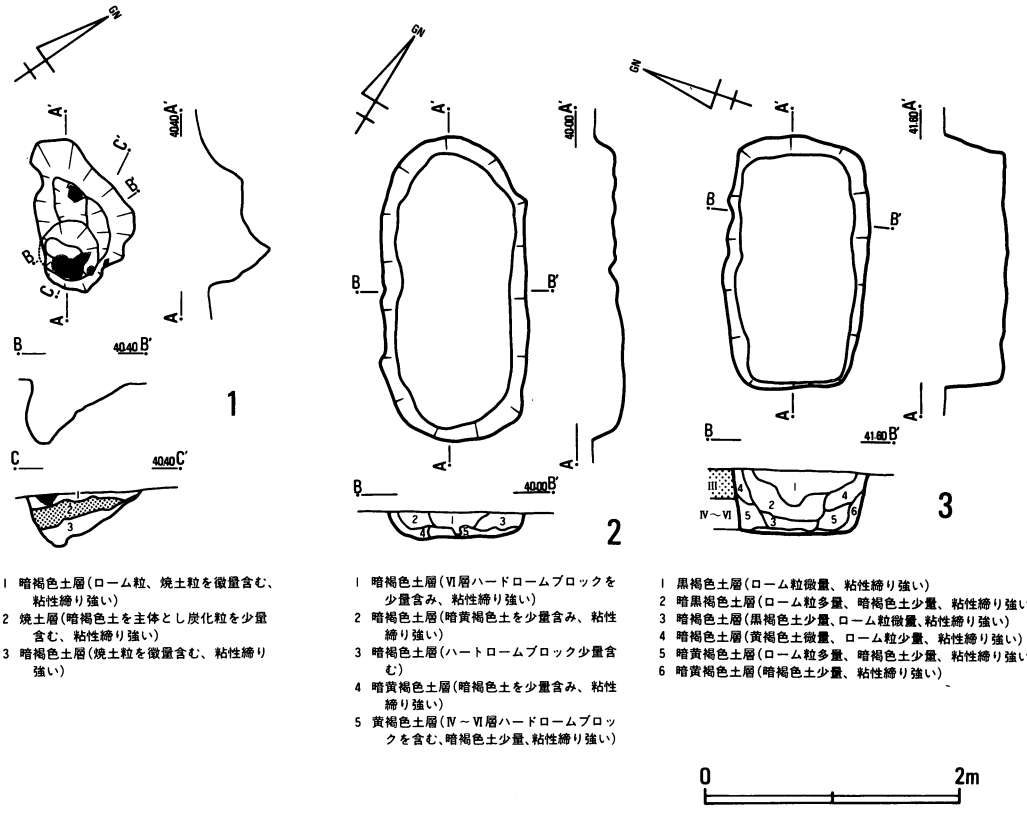
(8)まとめ

陥し穴状土壙は、Ｔピットあるいは溝状遺構などと呼ばれ、いまだ機能・用途は不明であるが、いまのところ一番有力と考えられるのでこの名称を使用した。本遺跡においては切り合い関係も溝状遺構との間にしかないため、その時期を推定することは困難であるが、近隣の遺跡においても本遺跡のようなタイプのものからは縄文時代早期の土器が出土することが多く、また、ハードローム面まで下げないと確認出来ないことも多々あるので、霧ケ丘（今村他1973）等に盲従する訳ではないがやはり縄文時代早期後半ぐらいのものと考えたい。なお本分類によると今村の行なった霧ケ丘のＥ型２基は各々Ａ１類、Ａ２類といえる。また、宮澤・今井の分類（宮澤・今井1976）のＩ形態はＡ類、Ａ形態とＨ形態はＢ類に相当するものとなろう。

第９表　陥し穴状土壙一覧表

番号	登録番号	口部規模(m) (長軸 × 短軸)	底部規模(m) (長軸 × 短軸)	深さ (m)	底部 ピット	等高線との 交差方向	覆土遺物
1	0Dイ001	3.0 × 2.1	0.9 × 0.2	3.2		直交	
2	0Dイ002	2.4 × 1.5	3.0 × 1.0	1.2		直交	
3	1Bイ001	(3.0)×(0.8)	2.9 × 0.1	1.8		平行	
4	1Cイ001	2.0 × 1.3	1.5 × 0.6	0.9		直交	
5	1Dイ001	3.5 × 1.5	3.6 × 0.2	2.1		斜交	
6	1Dイ002	2.4 × 1.7	1.2 × 0.1	3.0		斜交	
7	1Eイ001	2.2 × 1.3	1.6 × 0.7	1.0		直交	
8	2Cイ002	2.9 × 1.5	2.0 × 0.1	2.2		斜交	
9	2Cイ004	(2.0)×(0.8)	2.1 × 0.2	1.1		直交	
10	2Cイ005	3.3 × 2.3	2.4 × 0.8	1.8		平行	
11	2Dイ001	2.1 × 1.1	1.7 × 0.3	1.4		平行	
12	2Dイ002	1.5 × 0.7	1.3 × 0.1	0.9		斜交	
13	2Dイ003	1.8 × 0.9	1.6 × 0.2	2.0		直交	
14	2Dイ004	(2.4)×(1.2)	2.3 × 0.1	1.2		斜交	
15	2Eイ001	2.9 × 0.8	2.9 × 0.1	1.3		平行	
16	3Cイ001	2.9 × 1.1	2.7 × 0.4	1.0		直交	
17	3Cイ002	2.4 × 0.6	2.3 × 0.4	0.7	1	直交	
18	3Dイ001	(2.5)×(1.0)	2.1 × 0.5	0.9		直交	
19	3Dイ002	2.7 ×(1.1)	2.7 × 0.2	0.7		斜交	
20	3Dイ003	2.4 × 1.2	2.8 × 0.3	1.3		直交	
21	3Eイ001	2.4 × 1.6	1.7 × 0.4	1.5		斜交	

番号	登録番号	口部規模(m) (長軸 × 短軸)	底部規模(m) (長軸 × 短軸)	深さ (m)	底部 ピット	等高線との 交差方向	覆土遺物
22	3Eイ002	(2.4)× 0.8	2.3 × 0.1	1.1		斜交	
23	3Eイ003	2.6 ×(0.8)	2.4 × 0.1	0.6		直交	
24	4Cイ001	2.2 × 0.4	2.0 × 0.1	0.7		直交	
25	4Cイ002	2.6 ×(1.1)	2.9 × 0.3	1.6		斜交	
26	4Dイ001	2.2 × 0.8	1.9 × 0.2	0.9		直交	
27	5Bイ001	2.5 × 1.1	2.6 × 0.4	1.7	3	斜交	
28	5Cイ001	3.1 × 0.8	3.1 × 0.1	1.4		斜交	
29	5Cイ002	3.8 × 2.5	2.9 × 0.2	2.5		平行	
30	5Cイ003	2.8 × 2.0	2.9 × 0.1	2.6		斜交	炭化物片,焼土
31	5Cイ004	2.1 × 1.5	2.5 × 0.5	2.7		斜交	
32	5Cイ005	3.0 × 1.8	2.8 × 0.4	2.4		斜交	
33	5Cイ006	2.6 × 0.8	2.7 × 0.3	1.3		斜交	
34	5Cイ007	2.1 × 0.4	1.7 × 0.1	0.8		斜交	
35	5Dイ001	2.8 × 1.8	2.3 × 0.3	2.4		斜交	
36	5Dイ002	1.9 × 1.5	1.3 × 0.4	2.1		平行	
37	5Eイ001	3.0 × 1.0	2.7 × 0.1	1.3		斜交	
38	5Eイ003	2.3 × 1.0	2.8 × 0.1	1.8		直交	
39	6Bイ001	2.0 × 1.4	1.2 × 0.3	3.1		斜交	
40	6Bイ002	2.6 × 0.9	2.5 × 0.2	1.4		直交	
41	6Bイ003	1.7 × 1.0	1.5 × 0.1	2.2		直交	
42	6Cイ001	2.7 × 1.6	1.0 × 0.4	3.0		斜交	
43	6Cイ002	2.5 × 1.2	2.4 × 0.2	2.1		直交	
44	6Cイ003	3.2 × 1.8	2.8 × 0.1	2.3		斜交	
45	6Cイ004	2.6 × 0.8	1.7 × 0.1	1.6		斜交	
46	6Cイ005	2.0 × 1.5	0.8 × 0.5	2.5		平行	
47	6Dイ001	3.5 × 0.5	3.7 × 0.2	0.8		斜交	
48	6Dイ002	(2.4)× 2.1	1.2 × 0.4	3.0		斜交	
49	6Dイ003	3.5 × 1.2	3.5 × 0.1	2.0		平行	
50	6Eイ001	2.3 × 0.8	2.6 × 0.1	1.1		平行	
51	6Eイ002	2.0 × 1.3	2.2 × 0.1	2.4		斜交	
52	6Eイ003	2.5 × 1.3	1.2 × 0.6	2.7		直交	条痕文系土器
53	6Eイ004	2.6 × 0.8	2.1 × 0.2	1.8		直交	
54	6Fイ001	2.7 × 1.5	2.4 × 0.1	2.5		直交	
55	7Bイ001	2.8 × 0.7	2.8 × 0.1	1.5		斜交	
56	7Cイ001	3.0 × 2.1	1.5 × 0.9	2.4		平行	
57	7Cイ003	2.3 × 1.6	2.4 × 0.1	2.2		平行	焼土
58	7Cイ004	2.8 × 1.5	2.7 × 0.2	1.7		斜交	焼土
59	7Cイ005	2.8 × 1.7	2.4 × 0.6	2.2		平行	
60	7Cイ006	2.1 × 1.4	1.3 × 0.5	2.6		直交	
61	7Cイ007	2.2 × 1.5	1.4 × 0.4	2.3		斜交	
62	7Dイ001	1.9 × 1.4	2.3 × 0.2	2.6		斜交	焼土
63	7Dイ002	2.2 × 1.3	2.0 × 0.1	2.6		平行	
64	7Dイ004	2.7 × 1.3	3.1 × 0.3	2.0		斜交	
65	7Dイ005	1.7 × 1.4	1.5 × 0.6	2.3		平行	
66	7Eイ001	3.2 × 0.8	3.5 × 0.2	1.0		平行	



第146図　その他の土壙実測図(1～3号)(1/60)

2　その他の土壙

3基検出したが、出土遺物もなく、いずれも遺構の性格を推定するには至らなかった。

1号（第146図1）

4D87グリッドにおいて検出した焼土遺構である。この辺は北東へなだらかに下る緩斜面をなす。覆土上部には炭化粒をブロック状に、中部には焼土を多量に含む。平面形態はやや歪んだ三角形を呈し、底部の一部が深くなっている。

2号（第146図2）

5E98グリッドから検出された。発掘調査区の東端に近いところで、緩斜面に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、掘り込みは浅い。底部は平らに近く、覆土にはロームブロックが目立つ。

3号（第146図３）

7C98グリッドから検出された。ここは発掘調査区の南端に近く、遺跡内では標高の高い地点である。平面形態は隅丸の長方形を呈し、掘り込みは約50cmで底部は平らである。覆土にはローム粒を含む。

3　土器

縄文土器の出土量は調査面積の割に少なく、遺跡北東部の１Ｅグリッドを中心に土器片が約1,000片出土した（第147図）

ここではこれらを以下のように時期区分に従い４群に分類した。

第１群土器　　早期の土器

第２群土器　　前期の土器

第３群土器　　中期の土器

第４群土器　　後期の土器

第１群土器　早期の土器を一括した。

第１類　条痕文系土器（第148～152図、図版47～51）

第１種　細隆起線による区画文を構成するもの。（第148図～第150図３）

細隆起線による区画状文の交叉部に竹管による円形の刺突文を押捺している。口唇部と上下２段には刻みが施され、充塡文は特に施されない。胎土には砂粒をかなり含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。鵜ケ島台式である。

第２種　沈線による区画文を構成するもの。（第150図４～第151図２）

浅い条痕文の地文を沈線により区画し、その交叉部に棒状の工具により刺突を押捺している。そして区画内には押し引きによる充塡文を施している。胎土は砂っぽく、色調は茶褐色、焼成はやや良好である。鵜ケ島台式である。

第３種　垂下する押し引きにより文様が施されるもの。（第151図３～５）

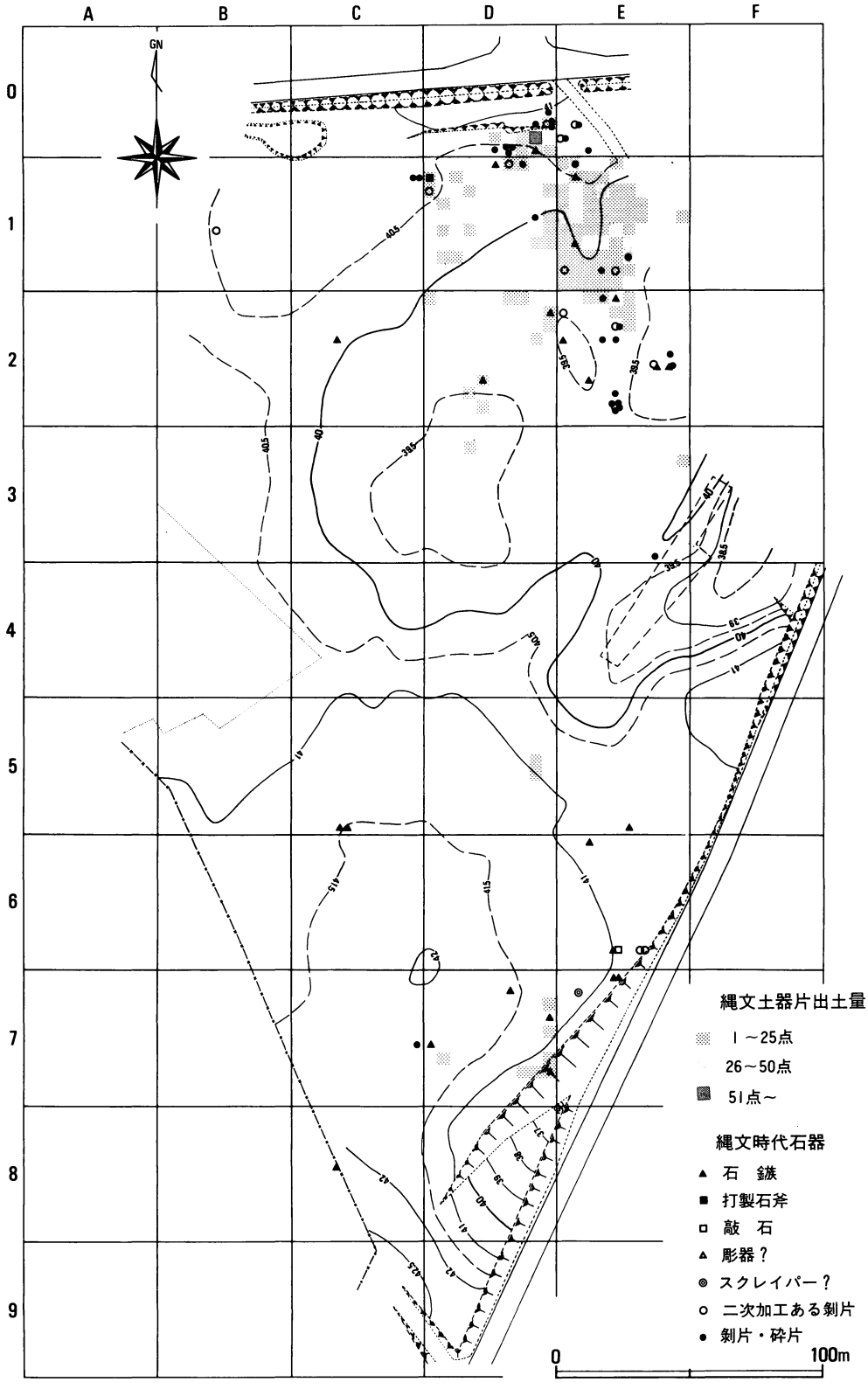
口唇部に刻みが施され、口唇直下には一条の押し引き文が廻り、口縁部には垂下する押し引き文が施される。色調は茶褐色、焼成は良好。鵜ケ島台式である。

第４種　口唇に刻みを施されたもの。（第151図６）

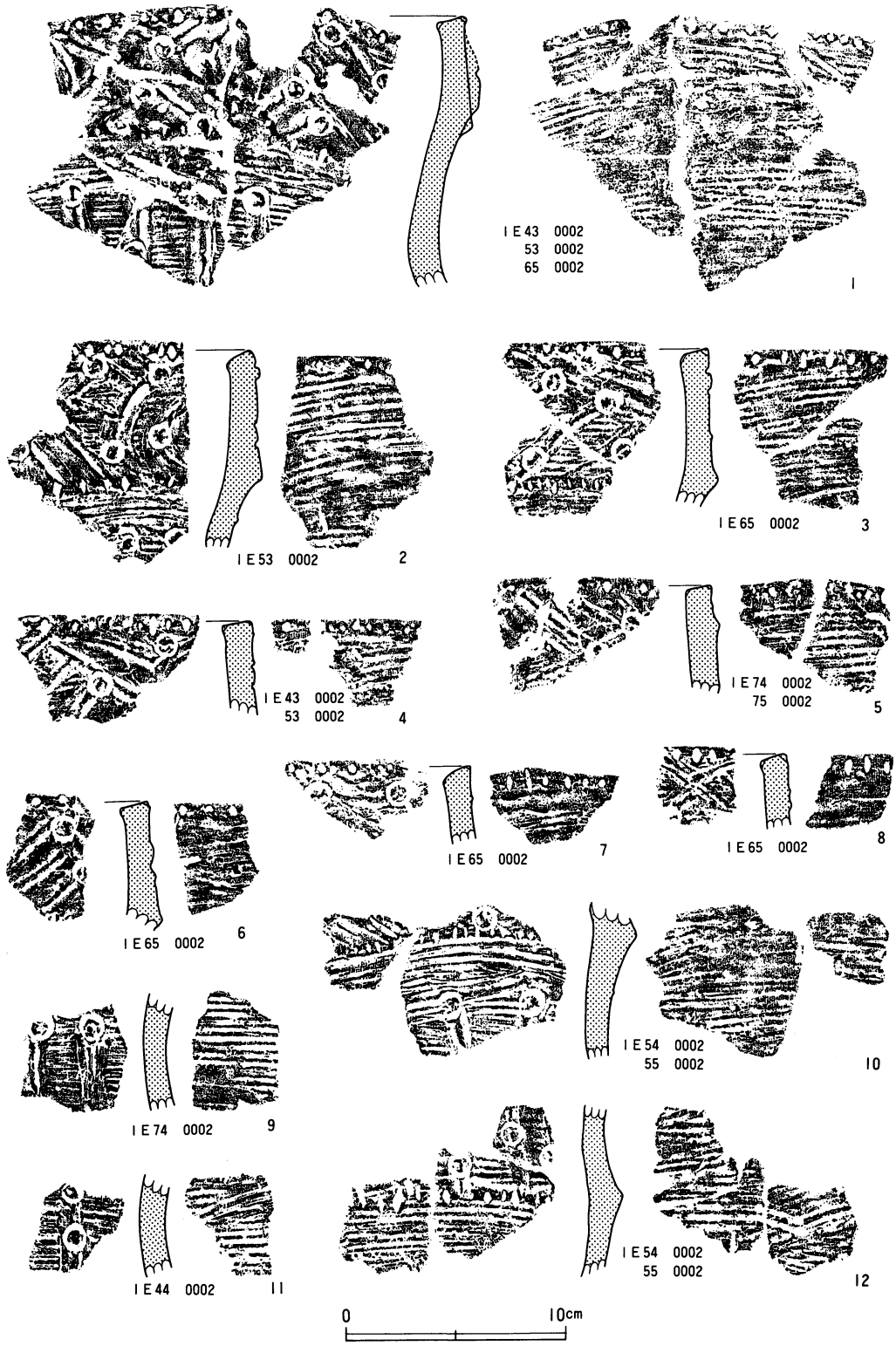
口唇の刻み以外は表裏の条痕のみのものである。色調は茶褐色、焼成は良好。鵜ケ島台式と思われる。

第５種　表裏ともに条痕のみ施されたもの。（第151図７～第152図４）

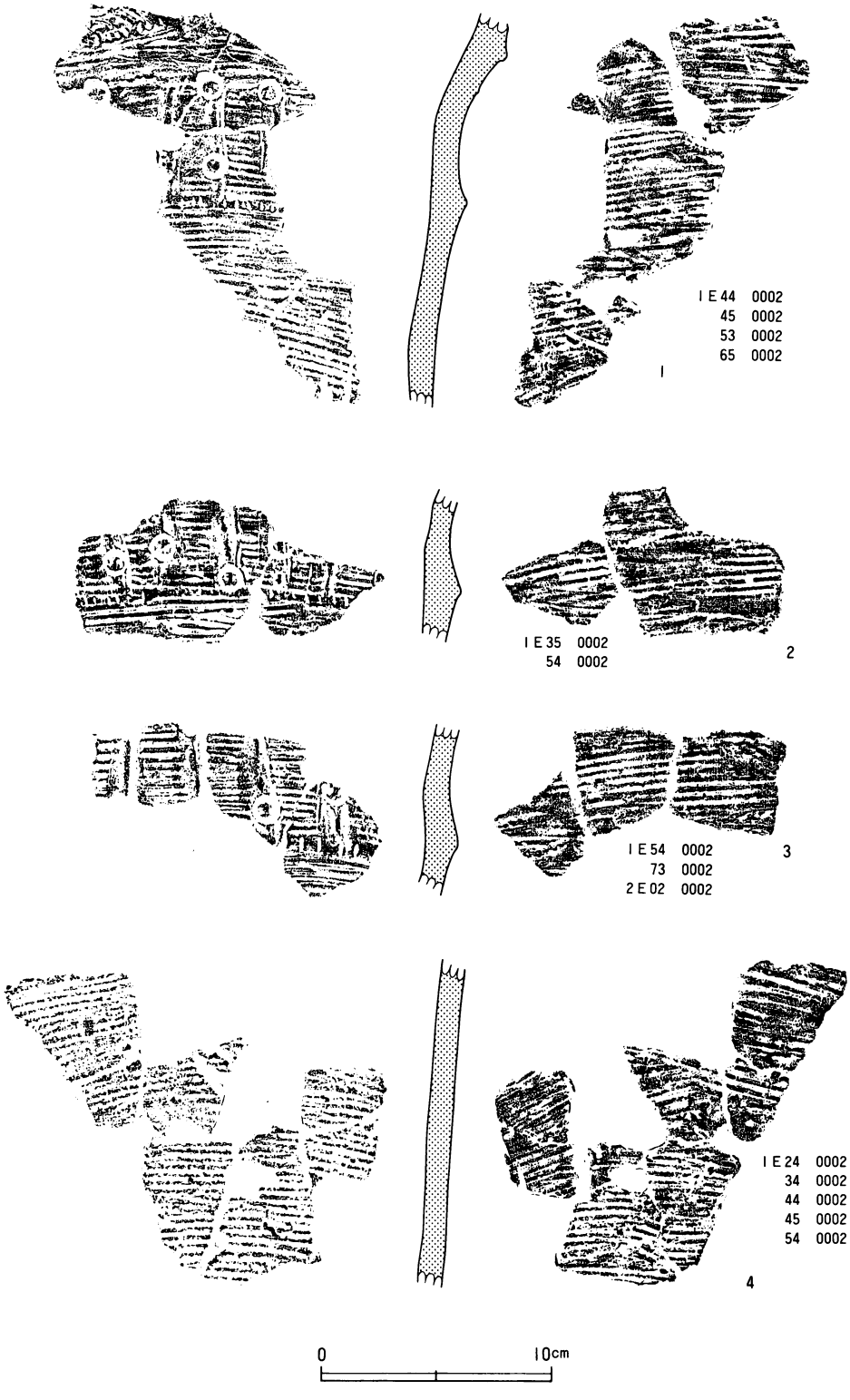
表裏とも斜行する条痕を施されたもので、第151図７は底部直上ぐらいの破片であり、条痕が少し横走している。第151図８～11は口縁部であるが、口端は尖り気味である。胎土は砂っぽ



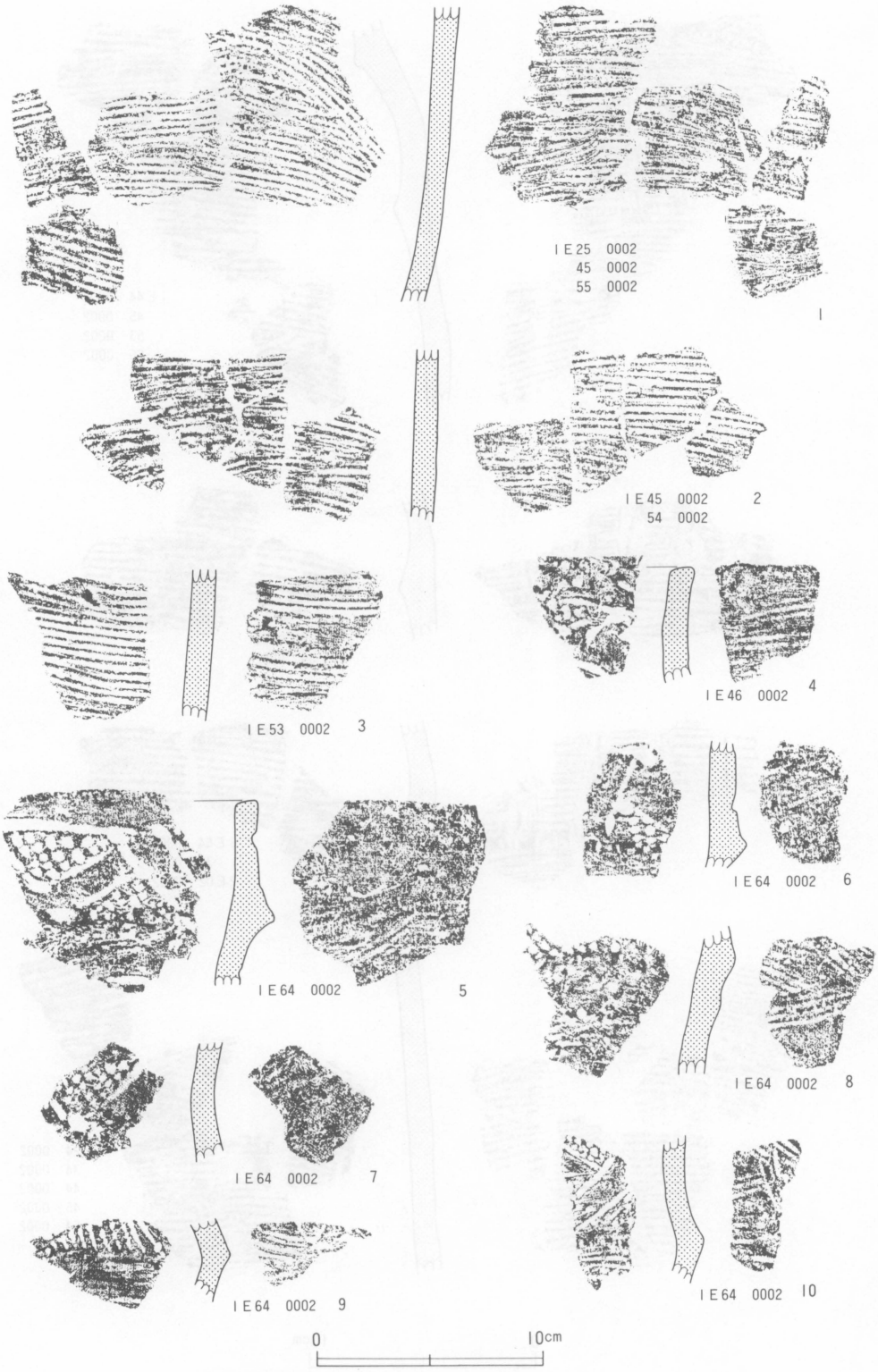
第147図　縄文時代グリッド別遺物分布図（1/2500）



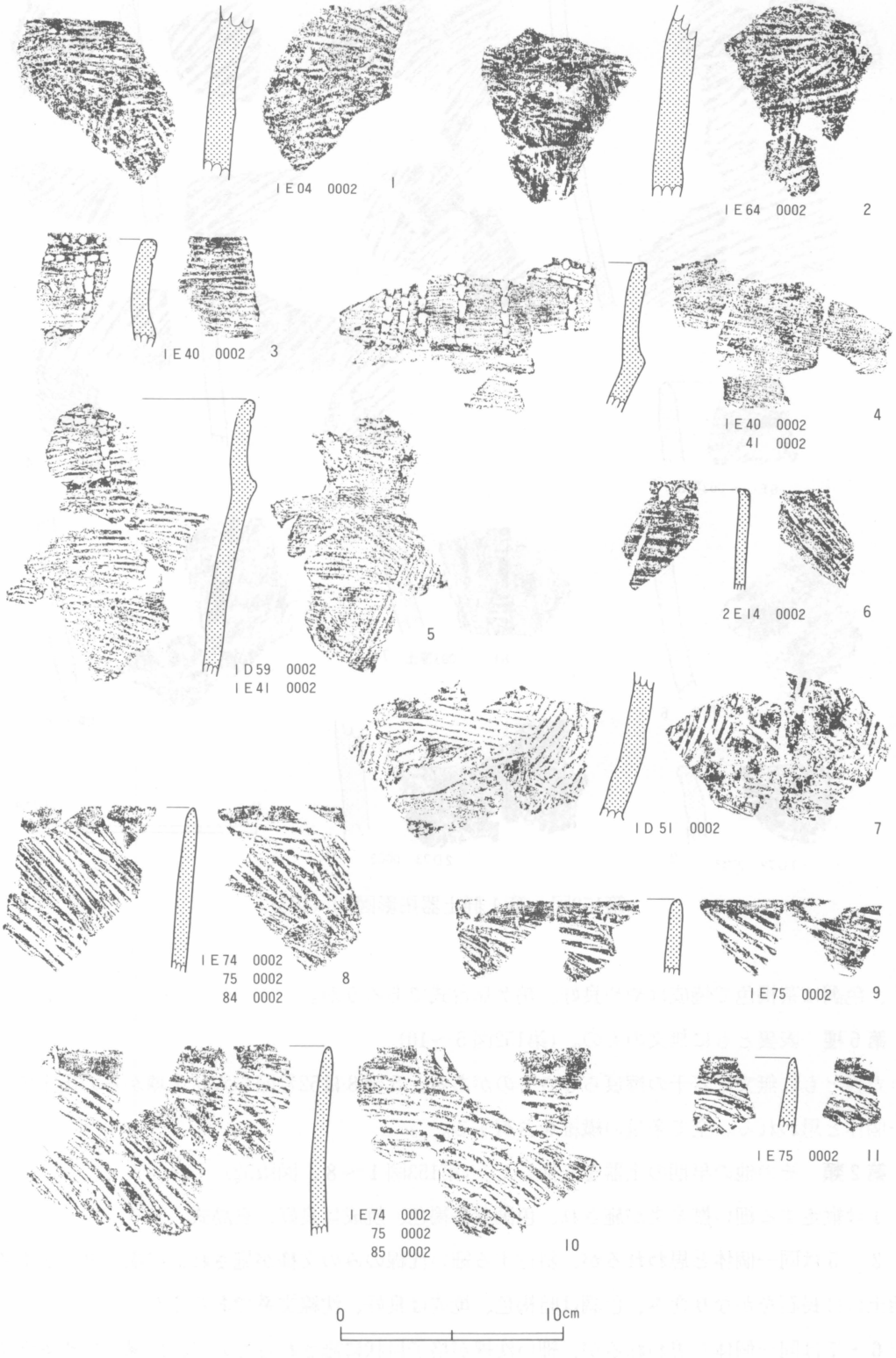
第148図　第１群土器拓影図(1)（1/3）



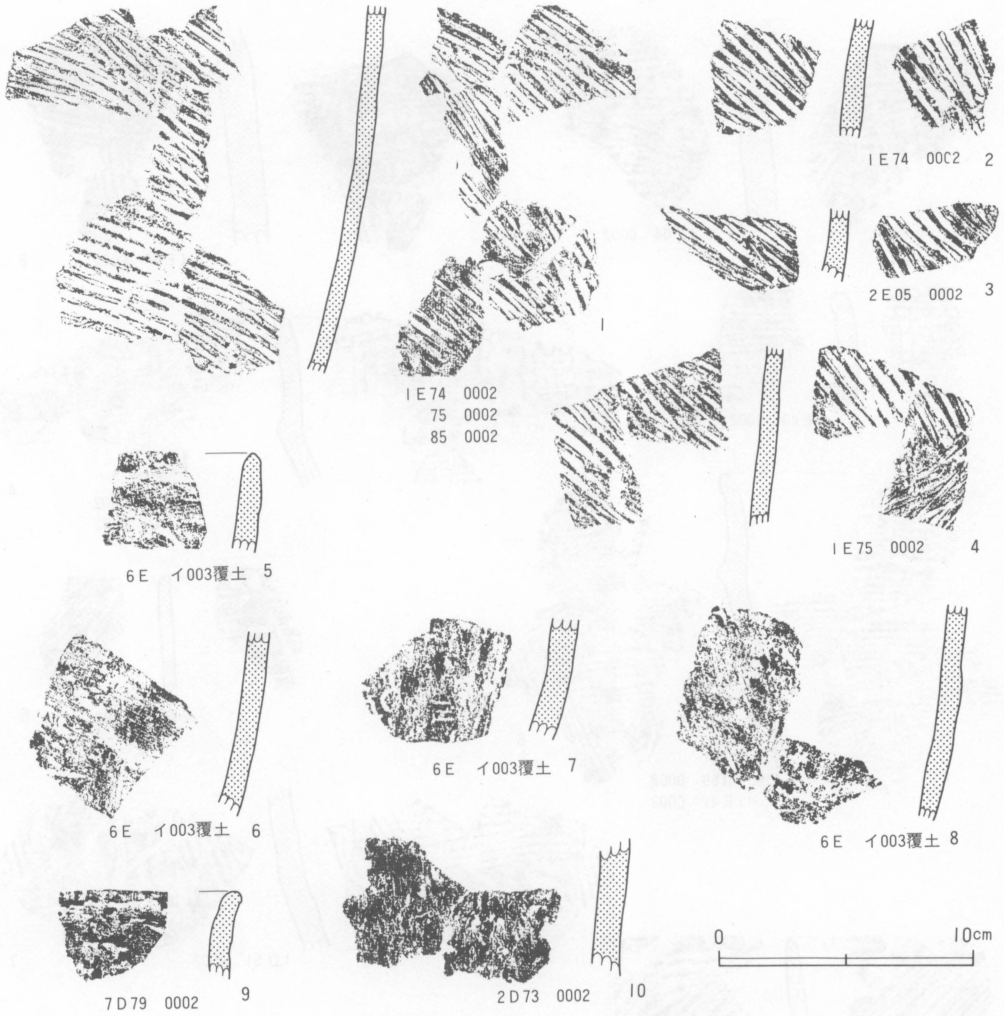
第149図　第１群土器拓影図(2)（1/3）



第150図　第１群土器拓影図(3)（1/3）



第151図　第１群土器拓影図(4)（1/3）



第152図　第１群土器拓影図(5)（1/3）

く、色調は茶褐色で焼成はやや良好。鵜ケ島台式であろうか。

第６種　表裏ともに無文のもの。（第152図５～10）

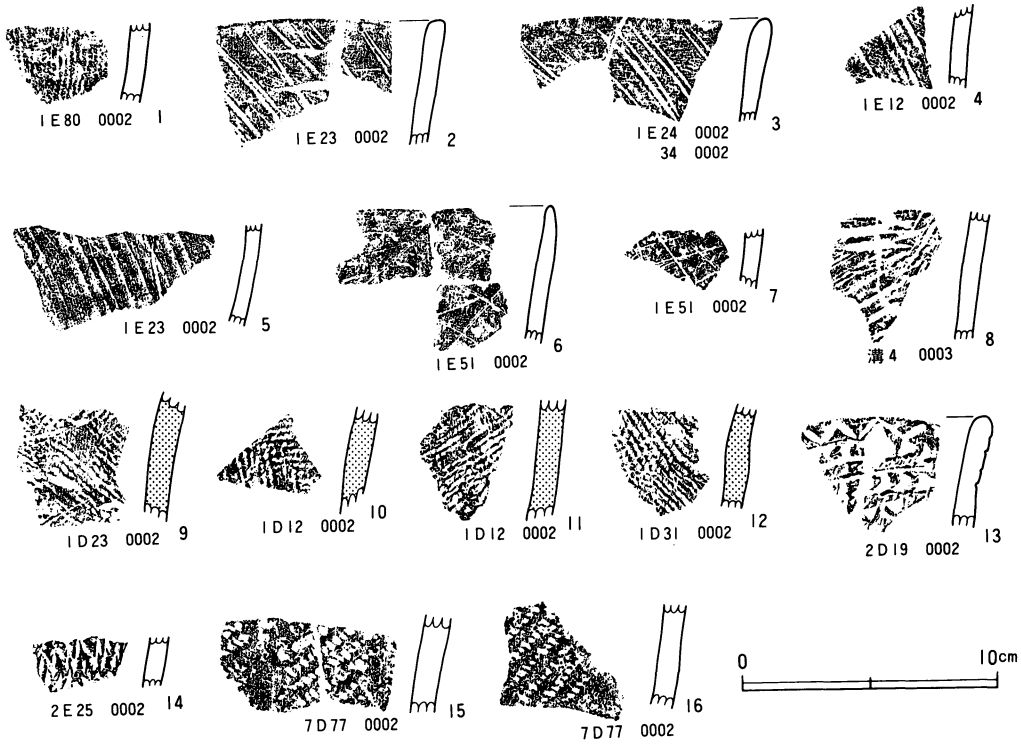
表裏ともに無文で若干の擦痕らしきものがある。５～８は52号陥し穴状土壙からの出土で同一個体と思われる。全て多量の繊維を含有する。

第２類　その他の早期の土器を一括した。（第153図１～８、図版52）

１は縦走する細い撚糸文が施され、色調な茶褐色、焼成は良好、夏島式。

２～５は同一個体と思われるが、斜行する細い沈線のみの文様が施され、口端は丸みがある。胎土には長石をかなり含み、色調は暗褐色、焼成は良好、沈線文系であろうか。

６・７は同一個体と思われるが、細い沈線が格子目状に施されるもので、口縁はやや内湾する小形の土器である。色調は茶褐色、焼成は良好、沈線文系かと思われる。



第153図　第１・２群土器拓影図（1/3）

８は斜行を主体とする沈線文が施され、胎土には砂粒（石英粒）を多く含み、底部は尖底になるようである。

第２群土器　前期の土器を一括した。（第153図９～16、図版52）

９～12は同一個体と思われるもので、胎土に繊維を多量に含み、色調は茶褐色、焼成はあまり良くない。無節の縄文を施している。黒浜式である。

13は口唇部に棒状工具でハの字状の文様を施し、口縁部には連続瓜形文を数段施している。口縁は丸みをもってゆるく外反する。色調は暗褐色、焼成は良好、諸磯式と思われる。

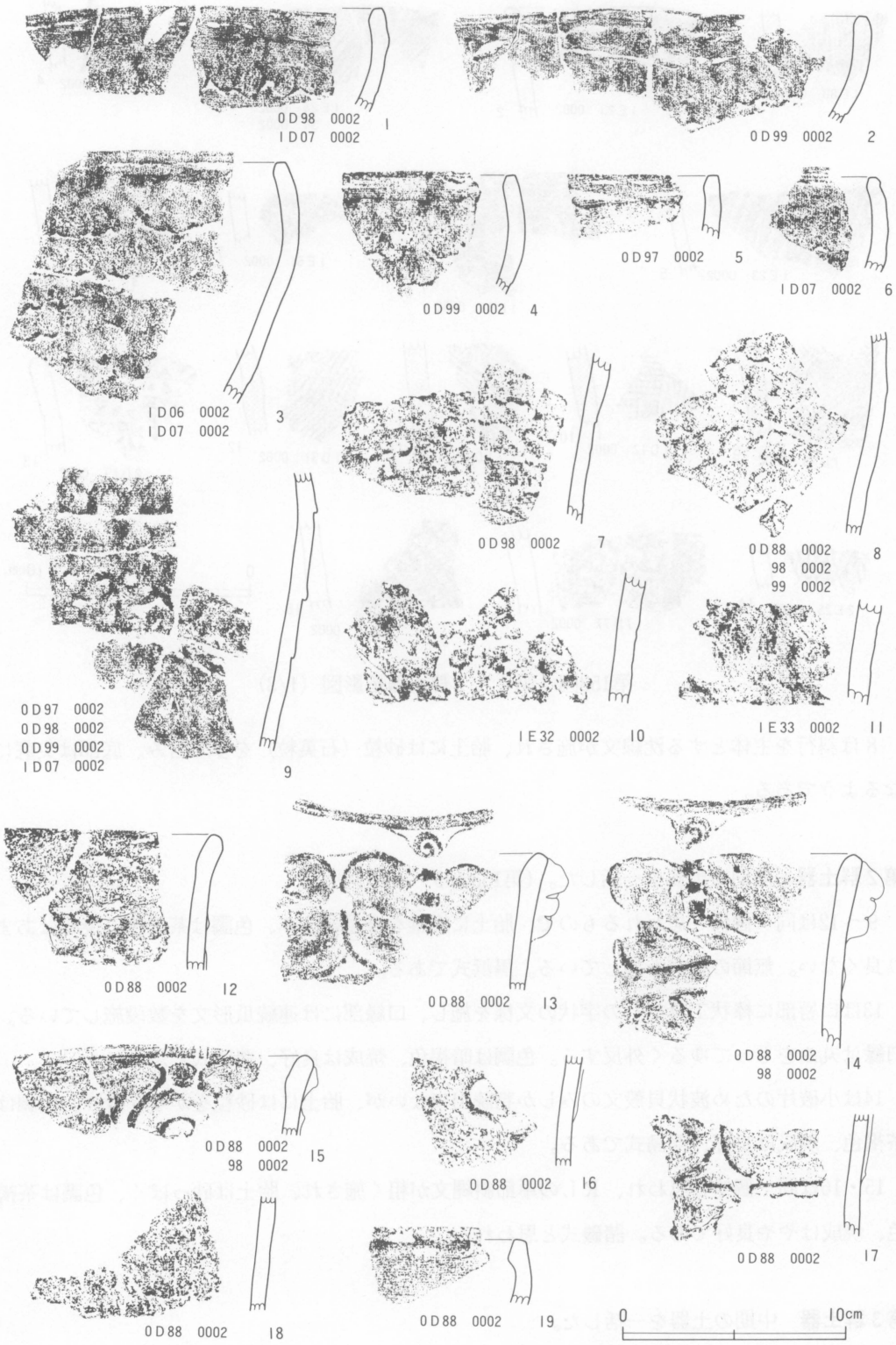
14は小破片のため波状貝殻文のみしか判読出来ないが、胎土には砂粒をかなり含み、色調は茶褐色、焼成は良好、浮島式である。

15・16は同一個体と思われ、ＲＬの単節斜縄文が粗く施され、胎土は砂っぽく、色調は茶褐色、焼成はやや良好である。諸磯式と思われる。

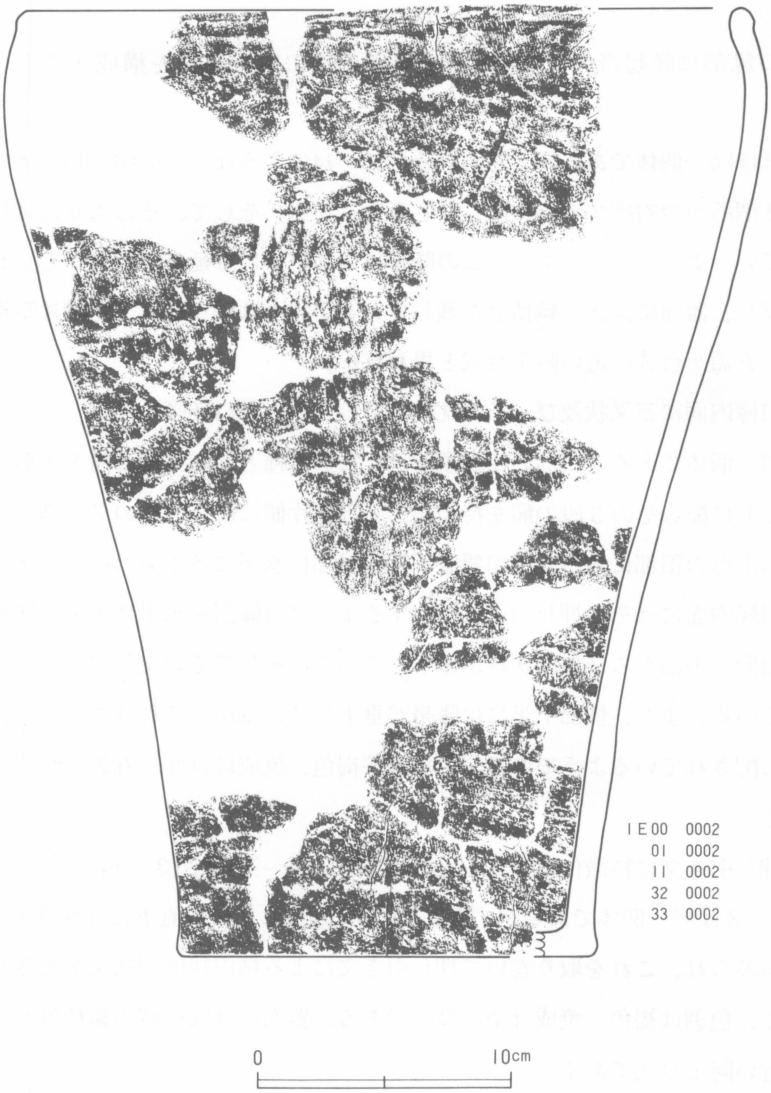
第３群土器　中期の土器を一括した。

第１類　中期初頭から前半の土器（第154図～第158図、図版53～57）

第１種　輪積痕を明瞭に残したもの。（第154図１～11、第155図）



第154図　第３群土器拓影図(1)（1/3）



第155図　第３群土器拓影図(2)（1/3）

１～９は同一個体と思われるもので、口縁は内湾し、口端は平らで、口唇部内側には一条の稜がみられ、それに対応するように口唇部外側は少し凹む。器体は全体に渡って成形時の輪積痕を明瞭に残している。色調は暗褐色から黒褐色で、焼成は良好。五領ケ台式に近い阿玉台式と思われる。

10・11は同一個体で、器面に粗く輪積痕を残しているが、内側は平滑に磨いてある。色調は灰褐色、焼成は良好。五領ケ台式に近い阿玉台式と思われる。

第155図は、本遺跡で唯一復原出来た土器である。口縁が内湾し、口唇部外面が少し凹む寸胴なキャリパー形の深鉢で、底部が少し張り出す。器面は全体に渡って成形時の輪積痕を明瞭に残している。色調は茶褐色、焼成は良好。口径27cm、器高37cm。五領ケ台式に近い阿玉台式と

思われる。

第2種　口縁部に隆起帯により渦状あるいは楕円の区画状文を構成するもの。(第154図12～19)

これらはほぼ同一個体であろうと思われる。13・14のような3段の瘤と15のような円形の瘤を口唇下に2個所づつ対応する形に配したと考えられる。そして、その周りに隆帯を楕円の区画状に配しているようである。また、この隆帯は体部下半にも延びて行くかもしれない。口縁はゆるく外反し、器面には浅く輪積痕を残している。胎土は砂っぽく、色調は暗褐色、焼成はややもろい。五領ケ台式に近い阿玉台式と思われる。

第3種　口縁内面に三叉状及び一条の沈線が廻るもの。(第156図)

1～6は同一個体である。山形の口縁頂部近くに第2種と同様3段の瘤と円形の瘤を2個所づつ対応する形に配しその3段の瘤を持つ山形の頂部片側には4つ程の刻を施している。口縁外面は2対の山形の頂部に合わせて口唇直下と口縁部に水平に各1条の押し引き文を施している。また、口縁内面にはその押し引きに対応するように口縁部を水平に1条の沈線が廻り、これに向って山形の頂部から2本の沈線が垂下している。そしてその交叉するところでは三叉状の形となっている。また、体部下半には隆帯が垂下しているが、これはちょうど山形の頂部のないところに配されているようである。色調は茶褐色、焼成は良好。五領ケ台式に近い阿玉台式と思われる。

第4種　押し引き文に特徴付けられるもの。(第157図～第158図3～14)

第157図1～8は同一個体であるが、第2、3種に類似して口唇直下に2～3の瘤、口縁部には円形の瘤がみられ、これを取り巻いて押し引き文による楕円状区画状文が施されている。胎土は砂っぽく、色調は褐色、焼成はやや良好である。器面には成形時の輪積痕が少し残る。五領ケ台式に近い阿玉台式である。

第158図3～6は同一個体であるが小破片のため全体を窺うことは出来ないが、隆起線を狭んで両側に押し引き文を配し、楕円状の区画状文を構成するようである。色調は暗褐色、焼成は良好。阿玉台式の古い方であろう。

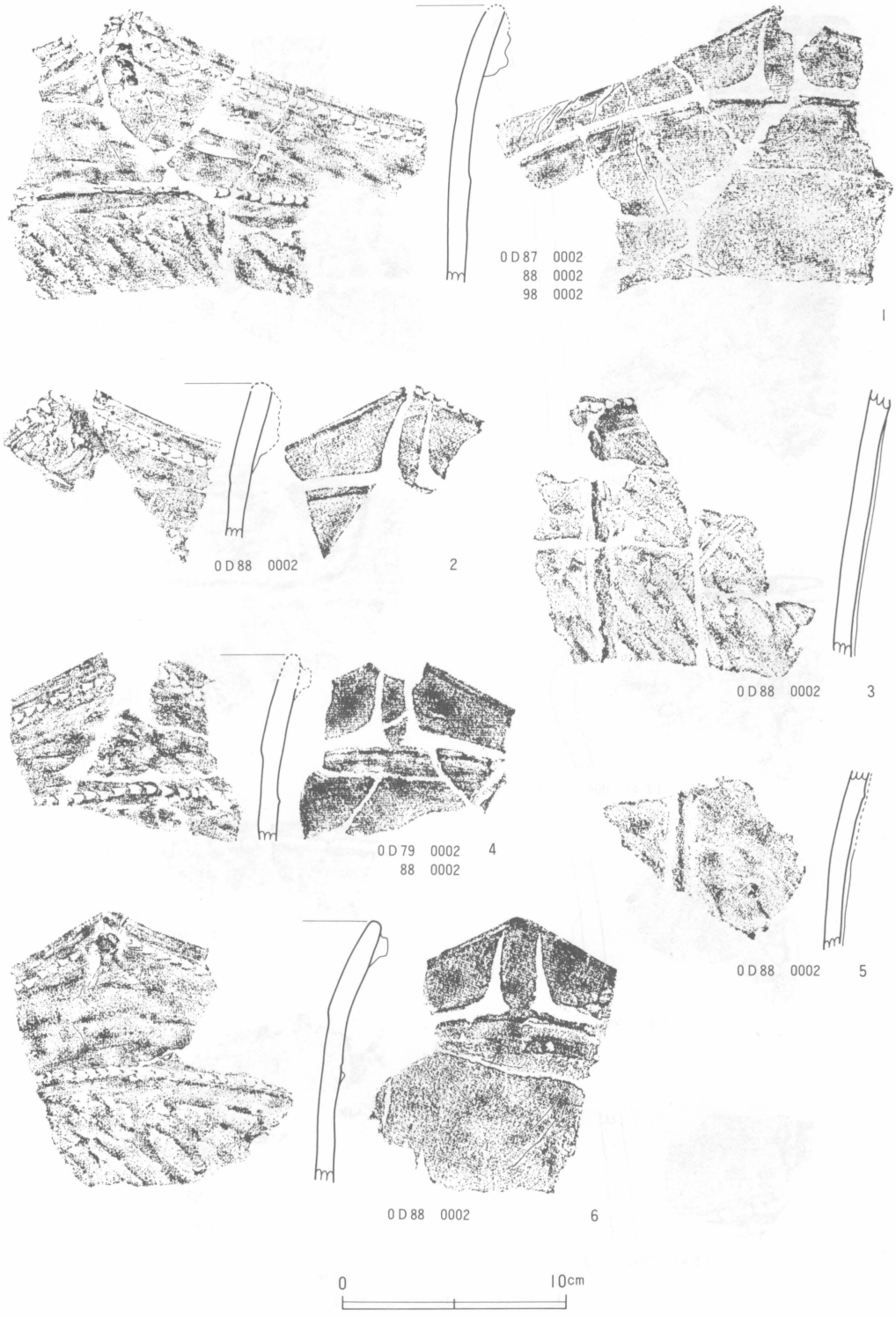
7・8も同一個体である。これも3～6同様2条の押し引き文により楕円区画文を配している。色調は灰褐色、焼成は良好。阿玉式の古い方であろう。

9～12にも同様の2条の押し引き文がみられ、9・11・12は口縁に沿って平行に、10は下部のものが垂下している。9・11は器面に成形時の輪積痕を少し残す。10・11は胎土に金雲母を多量に含む。阿玉台式である。

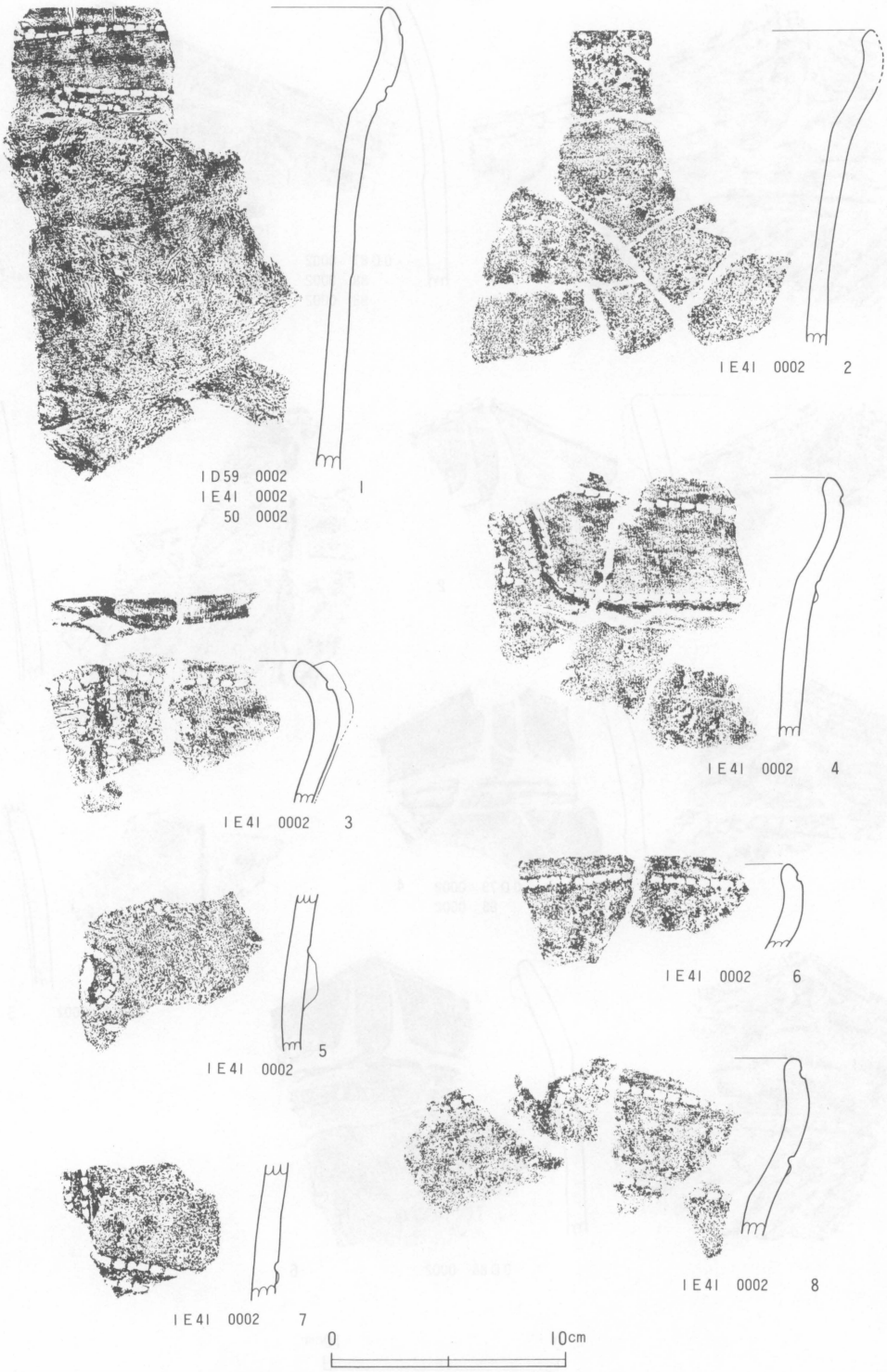
13は口縁に沿って沈線文と押し引き文が各1条配されている。胎土に砂粒が非常に多い。

色調は灰褐色、焼成良好。

14は縦に1条押し引き文が垂下している。胎土に砂粒をかなり含み、色調は褐色、焼成は良



第156図　第３群土器拓影図(3)（1/3）



第157図　第３群土器拓影図(4)（1/3）

好。13・14とも阿玉台式と思われる。

第5種　口端あるいは口唇に刻みをもつ山形板状の把手をもつもの。(第158図1・2・15)

1は地文にＲＬの単節斜縄文を施し、その上から2条の沈線を山形の形態に合わせた口唇直下と口縁部に、またそれを繋ぐ形で山形の頂部から3条の沈線を垂下している。さらに口唇部には刻みを施し、山裾には上下の沈線間に千鳥に三角文が入り、そこから体部へ隆帯が垂下している。色調茶褐色、焼成良好。

15は1の底部と思われ、平行する3条以上の沈線が底面に水平に廻っている。

2は山形頂部が平担でそこに4つの刻みが施されている。そして、頂部両端から把手中程にかけて4つの瘤が配され、それを取り巻くとともに口唇に沿って押し引きが施されている。また把手中央にも環状に押し引きが施されている。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成はやや良好。頂部の刻みや瘤のあり方など第3種に似ている。1・2・15とも阿玉台式直前あたりではなかろうか。

第2類　その他の中期の土器（第159図1～12、図版58）

1は原体ＲＬを4段以上口唇に沿って水平に押捺したもので、少し外反する。色調は暗褐色、焼成はやや良好。

2は口唇に縦の刻みが入り、口縁部にはほぼ水平に走る6条の沈線とその間に千鳥に入る刺突及びこれらの文様の最下端に入る押し引き文が施されている。器形は全体に内湾するが口縁だけ外反する。湾曲度からみて片口か注口土器と思われる。胎土に砂粒を多く含み、色調は黒褐色、焼成は良好。1・2とも中期初頭に比定出来るであろう。

3は波状の口縁で三日月状の隆帯をもち、4は口縁の一部が突起し、あるいは右端から推測すると隆帯があったかもしれない。ともに色調は茶褐色、焼成は良好な小形の土器である。やはり中期初頭かと思われる。

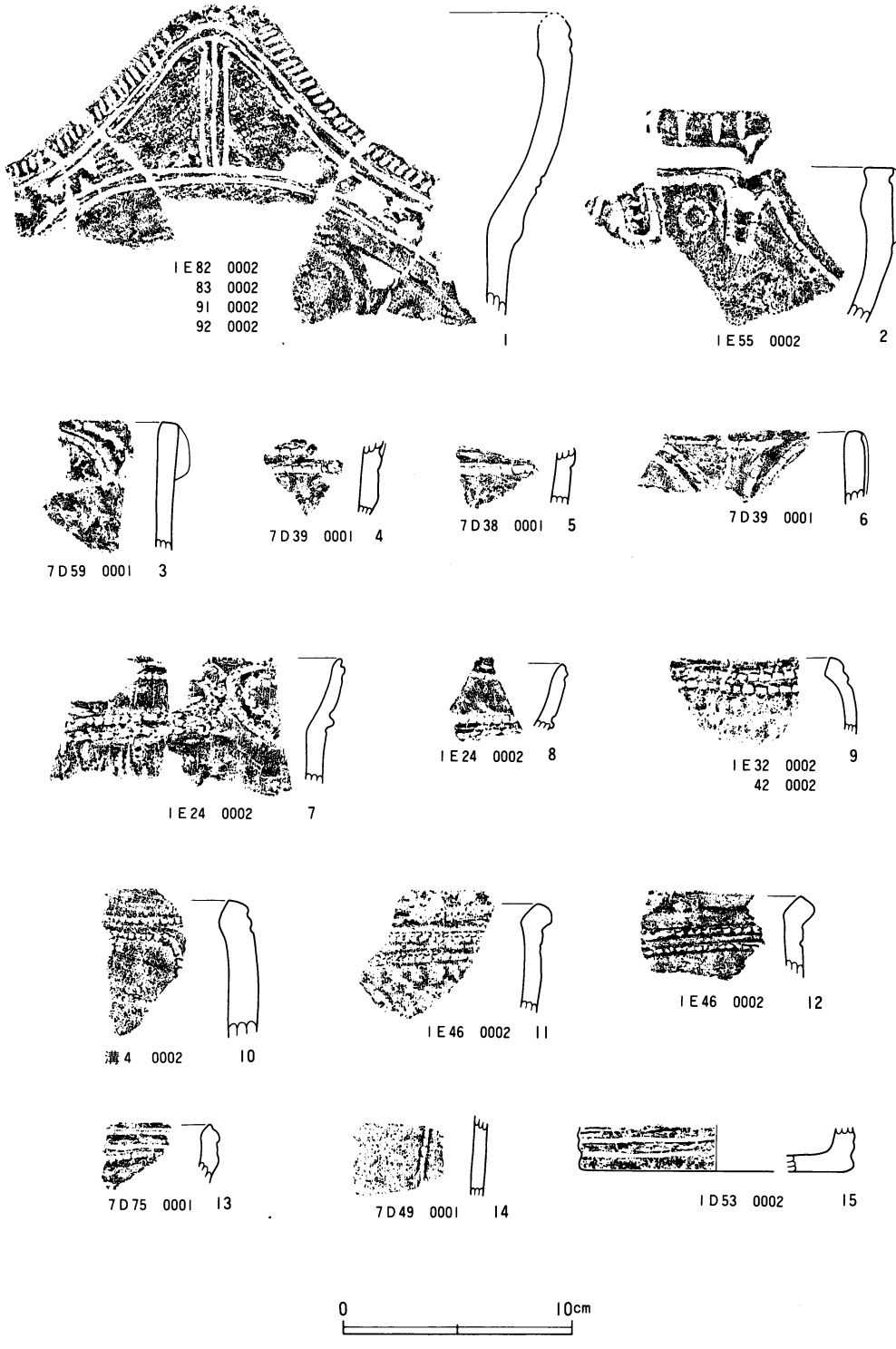
5・6・7は共通して押し引き文が施され、5はそれより少し上に幅広の沈線が1条入り、6は、把手の一種と考えた。7には瘤があり、全て中期初頭から前半のものと思われる。

8は瘤と左右にはＲＬの単節斜縄文と沈線による区画がみられる。口縁はやや内湾し、色調は灰褐色、焼成は良好。中期初頭であろう。

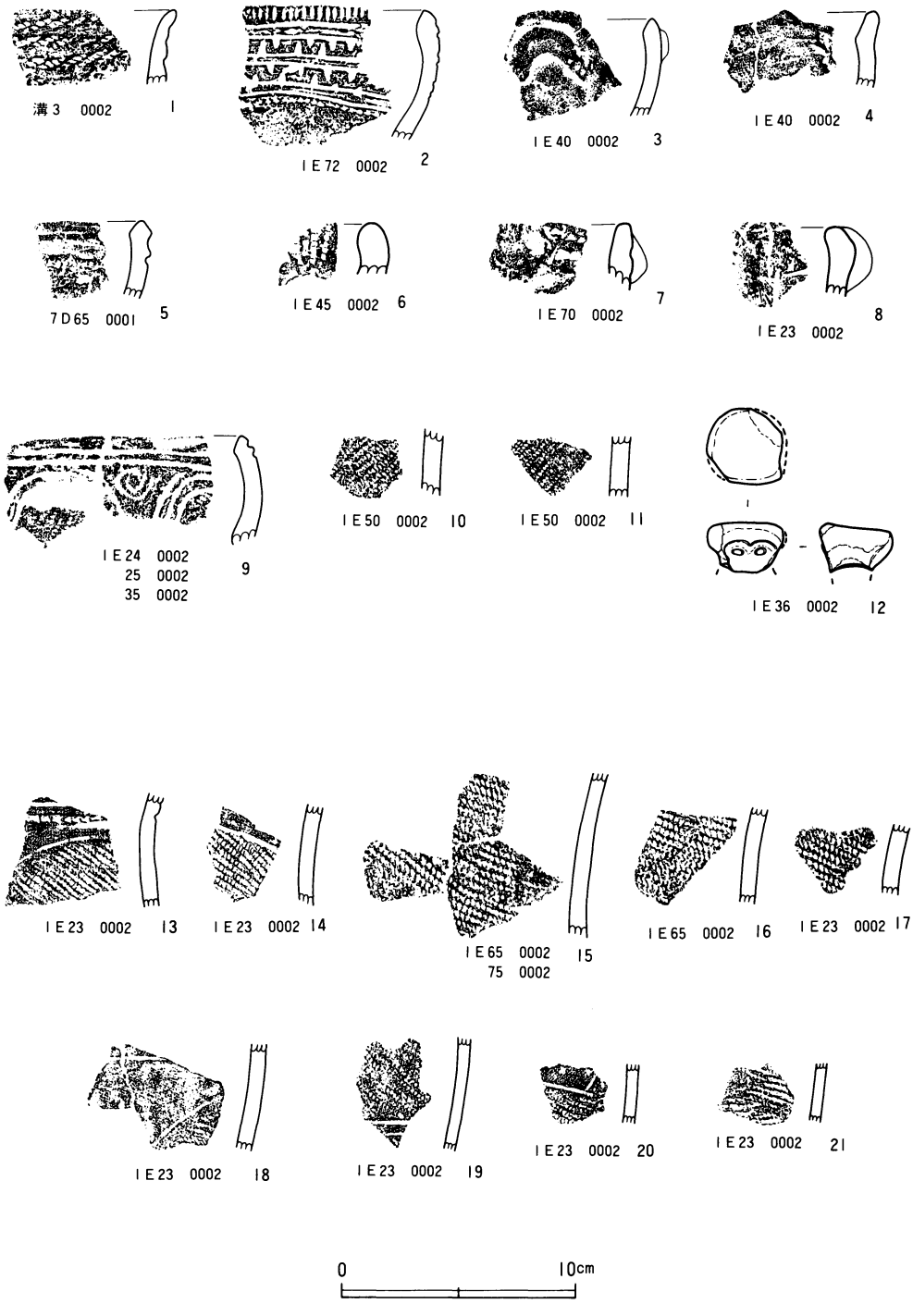
9は地文にＲＬの単節斜縄文があり、その上に口唇には2条の平行沈線が廻り、その下には沈線により渦巻文が施されている。色調は暗褐色、焼成は良好。中期前半かと思われる。

10・11は同一個体で、ＲＬの単節斜縄文のみ施されている。胎土には砂粒をかなり含む。中期初頭から前半ぐらいと考える。

12は正面観が猿に似た特異なものである。上面観は丸い。色調は灰褐色、焼成は良好。土偶に似ているが把手と考えておきたい。



第158図　第３群土器拓影図(5)（1/3）



第159図　第3・4群土器拓影図（1/3）

第４群土器　後期の土器を一括した。（第159図13～21、図版58）

13・14は同一個体で、ＲＬの単節斜縄文の地文を磨り消した上に浅い曲線的な沈線で区画し、くびれ部には連続刺突文を施している。色調は暗褐色、焼成は良好。

15～17は同一個体で、ＲＬの単節斜縄文のみである。色調は暗褐色、焼成は良好。

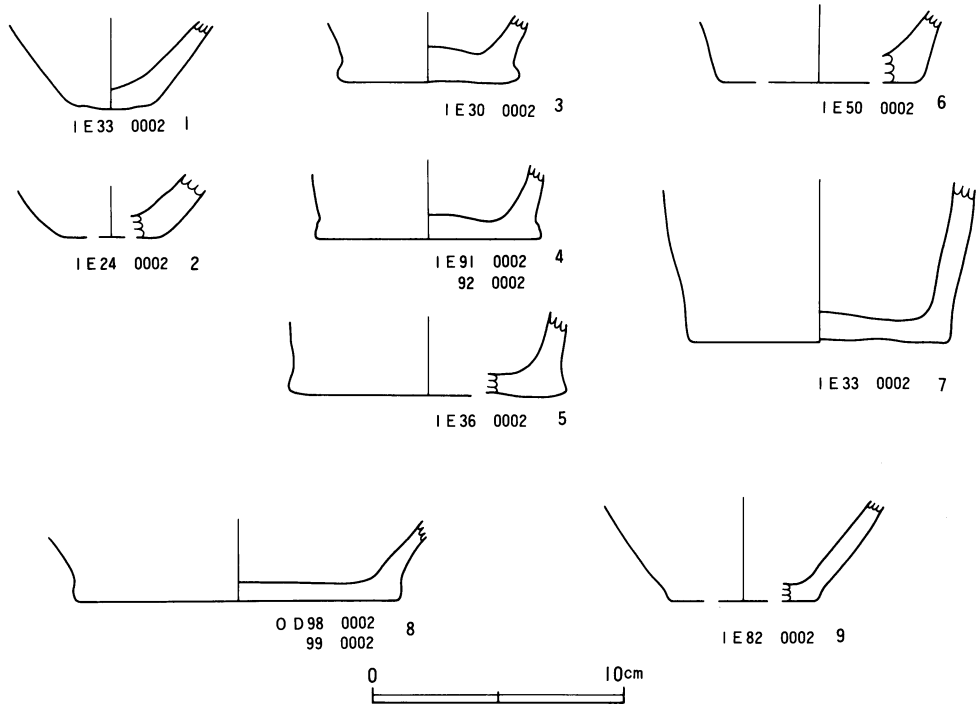
18～21も同一個体と思われる。地文の細いＲＬの単節斜縄文を磨り消して、曲線的な浅い沈線で囲っている。

13～21の時期は全て曽谷式前後と思われる。

底部　（第160図）

１・２は底部が小さく丸底に近いもので、色調は茶褐色で焼成はあまりよくない。

３～５、８は外方にやや張り出すもので、３は少し上げ底となっている。４にはあまり明瞭ではないが網代痕が認められる。８は第３群第１種の土器の底部と思われる。



第160図　縄文土器底部実測図（1/3）

4　石器（第81・95・96図、図版43・44、第8表）

縄文時代の石器・剝片類は、土器と同様遺跡北端の1E付近から多く出土した。器種別にみると、石鏃34点、打製石斧1点、敲石1点、彫器？1点、スクレイパー？1点、二次加工ある剝片16点、その他剝片・砕片33点、計87点である。

1～34は石鏃である。

1～4は基部の抉りがほとんどないか浅いもので、器体の形状は二等辺三角形あるいは五角形を呈し、やや厚手である。

5～7は基部に抉りが入るもので、器体の形状は正三角形に近く、薄手に作られている。

8～9は基部の抉りが浅いもので、形状は二等辺三角形を呈する。9に較べ8は器体も薄く、側縁も顕著な鋸歯状を呈する。

10・11はよく似ており、基部の抉りは浅いV字状を呈し、器体は幅広の三角形状で薄手に作られ、両側縁はやや外方にふくらむ。

12～15は欠損のため14を除き器体の形状は明らかではないが、正三角形に近いもので、基部の抉りは浅いと思われる。

16～18は器体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の抉りはやや深いと思われ、脚部の末端が尖らない。

19・20はいわゆる鍬形鏃で、脚部は太く長く先端は尖らない。身部は細めで両側縁は内湾する。

21・22は器体が幅広の二等辺三角形を呈し、基部の抉りが深く、脚部は太く先端は尖っている。

23・24もよく似ており、両側縁が外方にふくらみ、先端は突出するようである。基部の抉りは丸みがある。

25・26は器体・脚部ともに細めである。

27は両側縁の身部と脚部の境が外方に突出し、基部の抉りが器体の割に小さい。

28は基部の抉りが浅く脚部が短いのに対して身部が長大である。

29は有茎の石鏃で、身部と茎との境は側縁部が外方に張り出し、逆刺を作り出している。

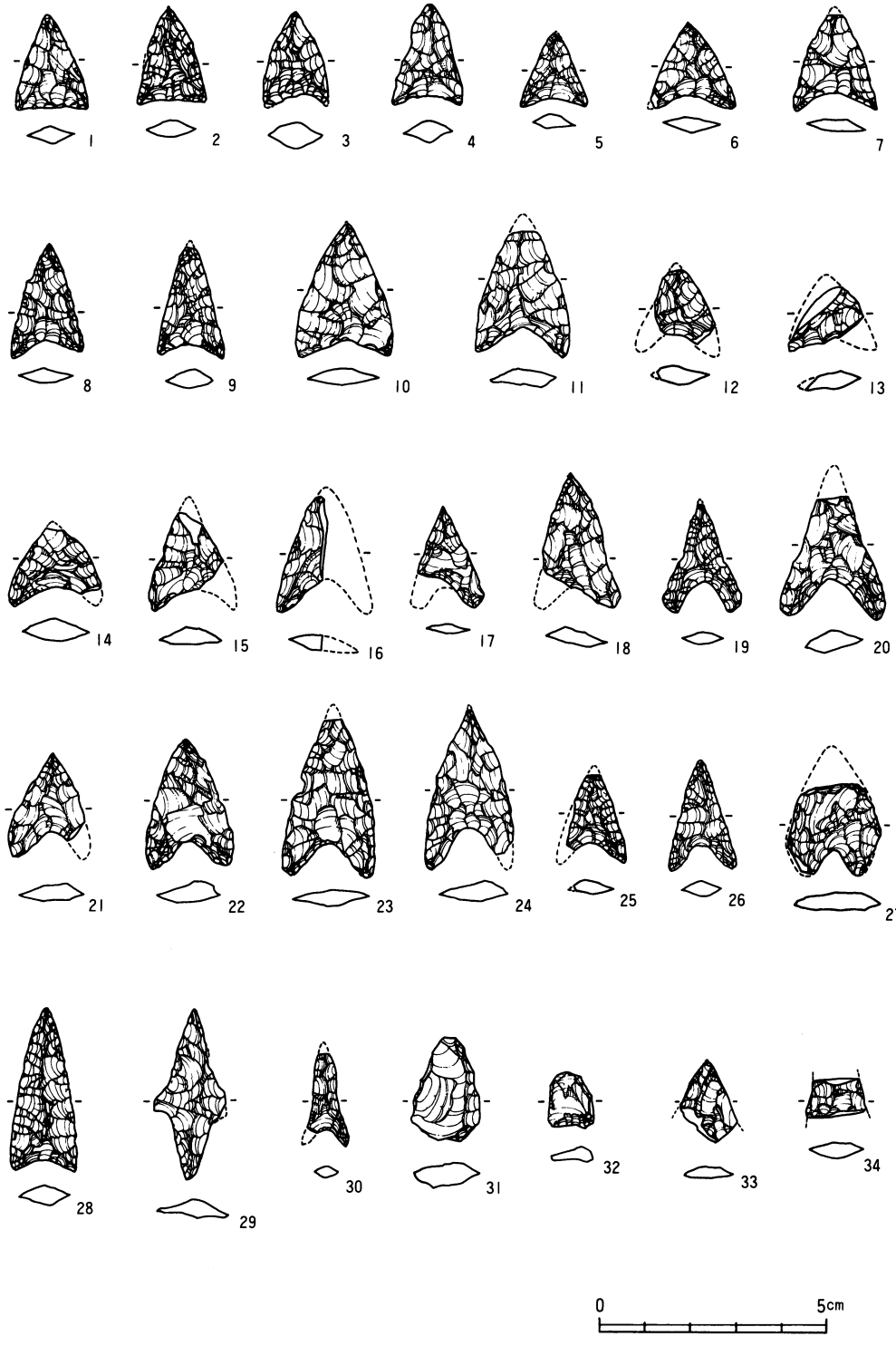
30は非常に細身小形のものである。

31は周辺加工の粗い作りである。

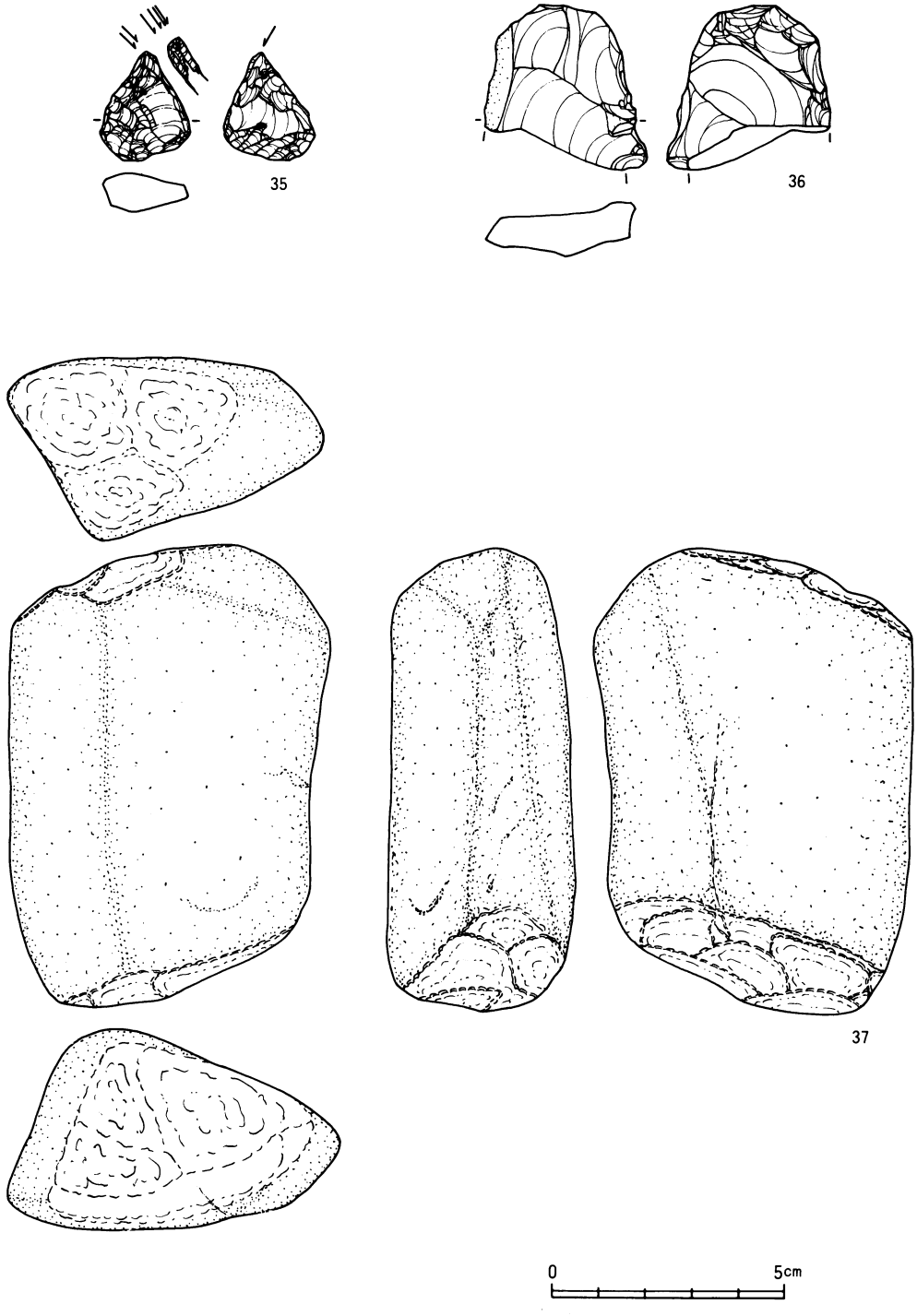
32は非常に小形でずんぐりとしたものであるが、若干の抉りが入っている。

33は欠損部分が大きいため明らかではないが、未調整部分がかなり残っており、剝片の形状を生かしたつくりである。

34は欠損部分が大部分のため、判然としないが、石鏃の身部の一部分と判断した。



第161図　縄文時代石器実測図(1)（2/3）



第162図　縄文時代石器実測図(2)（2/3）

これらの石鏃には基部の抉りの浅いものが目立ち、また、側縁が直線的かやや外方にふくらむものが多い。さらにほとんどのものが薄手に作られている。こういった特徴は縄文時代でも古いものに多いと思われ、出土土器などから早期条痕文系土器群前後のものが主体をなすと考える。石材は、チャートが16点と一番多く、ついで流紋岩の9点、その他安山岩・黒曜石各4点、玉髄1点である。

35は彫器状の石器である。厚手の剝片の周縁に調整剝離を施した後、先端から大小合わせて4条の樋状剝離を施している。

36は打製石斧の頭部と思われ、表面左端には平滑な礫面が残る。

37は上下に広く打痕を残す敲石である。

第10表　縄文時代石器群一覧表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剝離角)	登録番号
1	石鏃	チャート	2.1	1.6	0.5	1.1		2E62-2
2	石鏃	流紋岩	2.1	1.6	0.4	0.9		2D19-2
3	石鏃	流紋岩	2.0	1.5	0.6	1.2		2C33-2
4	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.5	1.3		6E02-4
5	石鏃	チャート	1.6	1.5	0.4	0.6		0D98-2-1
6	石鏃	チャート	1.9	1.8	0.4	0.8		1E61-2
7	石鏃	玉髄	(2.1)	1.9	0.3	0.9		7D16-2
8	石鏃	チャート	2.4	1.6	0.3	0.9		2E04-2
9	石鏃	チャート	(2.3)	1.5	0.4	1.0		2E76-2-1
10	石鏃	流紋岩	2.9	2.2	0.4	1.5		5Cイ002-1
11	石鏃	安山岩	(2.7)	2.1	0.4	2.1		5Eイ002-1
12	石鏃	チャート	(1.6)	(1.4)	0.4	0.8		7E04-5
13	石鏃	流紋岩	(1.7)	(1.5)	(0.4)	0.6		1D20-2-2
14	石鏃	チャート	(1.7)	(2.1)	0.5	1.3		2D64-2
15	石鏃	チャート	(2.1)	(1.7)	0.4	1.0		表採-1
16	石鏃	安山岩	(2.6)	(0.9)	(0.4)	0.8		2E30-2
17	石鏃	黒曜石	(2.2)	(1.5)	0.2	0.4		2E58-2-1
18	石鏃	流紋岩	(2.9)	(1.7)	0.4	1.3		4F-00
19	石鏃	チャート	(2.3)	1.8	0.3	0.6		1D05-2-1
20	石鏃	チャート	(2.6)	2.3	0.5	2.1		7D39-4
21	石鏃	流紋岩	(2.3)	(1.6)	0.4	1.1		5Cイ002-2
22	石鏃	流紋岩	2.8	2.0	0.5	1.9		2Cイ003-0
23	石鏃	流紋岩	(3.4)	2.1	0.4	2.3		7D79-4
24	石鏃	安山岩	3.4	2.0	0.5	2.2		8C43-2
25	石鏃	チャート	(1.9)	(1.3)	0.4	0.6		1E52-1
26	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.4	0.7		2E37-2
27	石鏃	黒曜石	(2.0)	2.0	0.5	1.8		7D50-2
28	石鏃	チャート	3.5	1.5	0.5	2.0		1E11-2-1
29	石鏃	流紋岩	3.7	(1.6)	0.4	1.5		5D57-1
30	石鏃	チャート	(2.0)	(0.9)	0.3	0.4		5E95-4
31	石鏃	安山岩	2.2	1.6	0.5	1.7		7E04-4

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
32	石鏃	チャート	1.2	1.0	0.4	0.5		2E57-2-1
33	石鏃	黒曜石	(1.7)	(1.2)	(0.4)	0.6		6E84-4
34	石鏃	黒曜石	(0.8)	(1.3)	0.4	0.4		溝5-1
35	彫器?	黒曜石	2.3	2.0	0.8	3.4		2E66-2-3
36	打製石斧	シルト岩	(3.5)	(3.5)	(1.0)	13.3		1D10-2-1
37	敲石	砂岩	9.5	6.5	4.2	392.8		6E84-5
38	剝片	黒曜石	(1.3)	(1.7)	(0.6)	0.9		0D69-2-2
39	剝片	流紋岩	1.7	3.8	0.8	5.1		0D78-2
40	二次加工ある剝片	黒曜石	(1.8)	(3.1)	(0.7)	3.2		0D79-2-1
41	剝片	黒曜石	(1.3)	(2.1)	(0.4)	0.7		0D79-2-2
42	剝片	流紋岩	(2.3)	(1.7)	(0.4)	1.4		0D79-2-3
43	剝片	流紋岩	2.4	1.4	0.7	1.8		0D95-2-3
44	剝片	安山岩	(3.0)	2.9	1.0	9.0		0D96-2-1
45	剝片	安山岩	(2.5)	1.6	0.4	1.3		0D96-2-2
46	剝片	流紋岩	2.5	3.8	1.7	10.5		0D96-2-8
47	剝片	流紋岩	3.0	1.5	0.6	2.3	115°	0E71-2-1
48	二次加工ある剝片	流紋岩	(1.7)	(2.5)	(1.0)	3.8		0E71-2-3
49	二次加工ある剝片	黒曜石	(2.5)	(2.4)	(0.8)	3.9		0E80-2-2
50	剝片	流紋岩	(1.9)	(2.4)	(1.2)	3.8		0E80-2-4
51	剝片	泥岩	1.9	4.1	1.3	6.8		0E92-2
52	二次加工ある剝片	シルト岩	1.5	2.1	0.6	1.1	130°	1B54-2
53	砕片	黒曜石	(1.0)	(0.6)	(0.2)	0.1		1C29-1
54	剝片	珪質頁岩	4.1	4.4	1.8	25.5	100°	1C29-2
55	二次加工ある剝片	流紋岩	2.2	1.9	0.6	2.4	115°	1D06-2-1
56	剝片	砂岩	(2.6)	(2.6)	(0.7)	3.7		1D07-2
57	二次加工ある剝片	流紋岩	(2.7)	(3.0)	(1.3)	7.7		1D20-2-1
58	剝片	ホルンスェルス	(3.2)	(4.0)	(0.7)	12.3		1D48-2
59	剝片	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.9	115°	1E01-2
60	砕片	石英岩	(1.0)	(1.3)	(0.8)			1E75-2
61	二次加工ある剝片	黒曜石	(2.0)	(2.6)	(0.4)	1.5		1E80-2
62	剝片	玉髄	1.5	2.4	1.3	3.8		1E83-2
63	二次加工ある剝片	玉髄	(2.1)	(3.7)	(1.3)	11.0		1E84-2-1
64	剝片	流紋岩	(1.0)	(1.5)	(0.2)	0.4		2E03-2-2
65	二次加工ある剝片	黒曜石	(1.5)	(1.6)	(0.6)	1.5		2E10-2
66	剝片	玉髄	3.7	3.4	1.2	12.5	115°	2E24-2-1
67	二次加工ある剝片	玉髄	2.2	1.8	0.4	1.2		2E24-2-2
68	剝片	流紋岩	1.6	1.9	0.6	1.9	90°	2E33-2-1
69	砕片	黒曜石	(0.6)	(0.8)	(0.3)	0.1		2E34-2
70	剝片	黒曜石	(3.2)	(1.2)	(0.7)	2.0		2E48-2
71	二次加工ある剝片	チャート	(0.9)	(1.1)	(0.7)	1.1		2E57-2-2
72	砕片	黒曜石	(0.7)	(1.0)	(0.3)	0.1		2E58-2-2
73	剝片	チャート	(2.0)	(2.2)	(0.3)	0.7		2E67-2
74	砕片	玉髄	0.7	1.1	0.2	0.1		2E74-2
75	剝片	玉髄	(1.6)	(1.9)	(0.9)	2.8		2E84-2-1
76	砕片	玉髄	(1.3)	(0.9)	(0.3)	0.2		2E84-2-2
77	砕片	玉髄	0.5	0.8	0.2	0.05		2E84-2-3
78	二次加工ある剝片	チャート	0.8	1.2	0.3	0.2	115°	2E84-2-4

番号	器　　種	石　　材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剥離角)	登録番号
79	砕　　片	玉　　髄	(1.0)	(1.2)	(0.5)	0.4		2E84-2-5
80	剝　　片	黒　曜　石	(1.0)	(1.5)	(0.6)	0.8		3E97-2
81	二次加工ある剝片	黒　曜　石	(1.8)	(1.9)	(0.4)	0.8		6E86-1-1
82	二次加工ある剝片	黒　曜　石	(1.6)	(1.7)	(0.4)	0.8		6E86-1-2
83	剝　　片	流　紋　岩	1.4	1.1	0.3	0.4	110°	7C59-1
84	スクレイパー？	チ　ャ　ー　ト	1.7	2.2	0.8	3.2		7E11-6
85	二次加工ある剝片	黒　曜　石	(2.1)	(1.5)	(0.7)	2.3	130°	溝2-1
86	剝　　片	流　紋　岩	(1.7)	(2.1)	(0.9)	4.2		溝3-1(1C18)
87	二次加工ある剝片	黒　曜　石	1.3	1.6	0.3	0.5		溝5-2(3E29)

第3節　その他の時代

1　遺　　構

溝状遺構が7条検出されている（第163図）。

(1)　1号溝状遺構（第164～166図、図版61）

遺跡南端の8Cグリッドから8Dグリッドにかけて検出されたもので、東側へ下る地形に沿って構築されており、等高線とは直交する。長さ70m、上端の幅約2.5～3.5m、下端の幅約30～100cm、深さ約40～70cmを測る。断面は底部が左右どちらかへ片寄った皿状を呈し、低面には複数の段がみられる。この段は数回にわたって作り変えられた結果生じたものと思われ、土層断面図F－F′の底面の形状並びに覆土における硬く締った土層のあり方などから、少なくとも3回は作り変えられていることが考えられる。

(2)　2号溝状遺構（第167～169図、図版62）

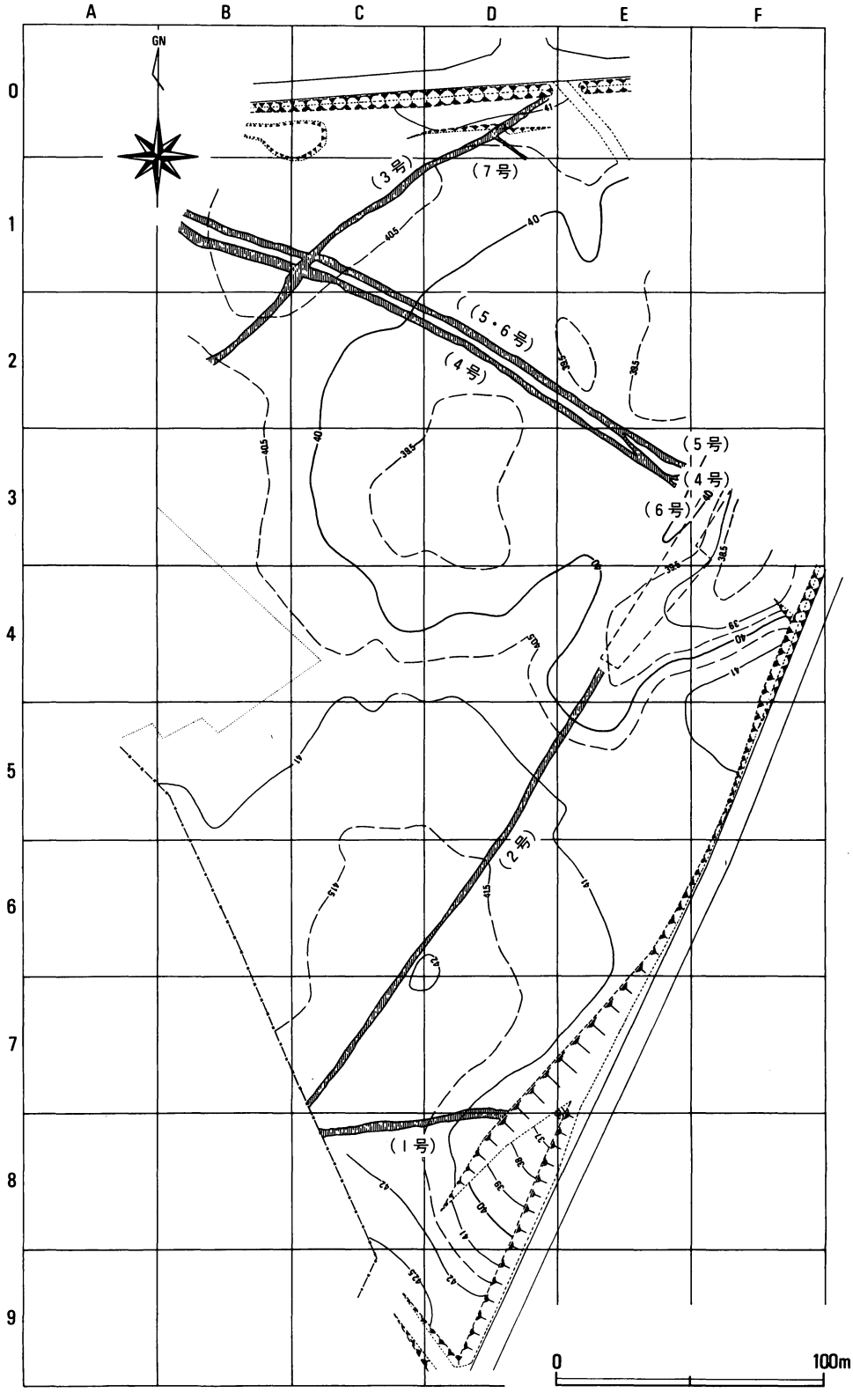
遺跡南端に近い7Cグリッドから遺跡で一番高い地点のそばを通り、東部の谷が入り込む4Eグリッドにかけて検出された。等高線とはほぼ直交する。長さ200m、上端の幅約1.5～2.5m、下端の幅約25～40cm、深さ約80cmを測る。断面は底面が狭い逆台形を呈する。底面には長さ約30～80cm深さ10～25cm程のやや方形に近い形態のピット列が検出された。ピットの間隔は必ずしも一定ではないが、1m前後のものが多い。

(3)　3号溝状遺構（第170～173図、図版63）

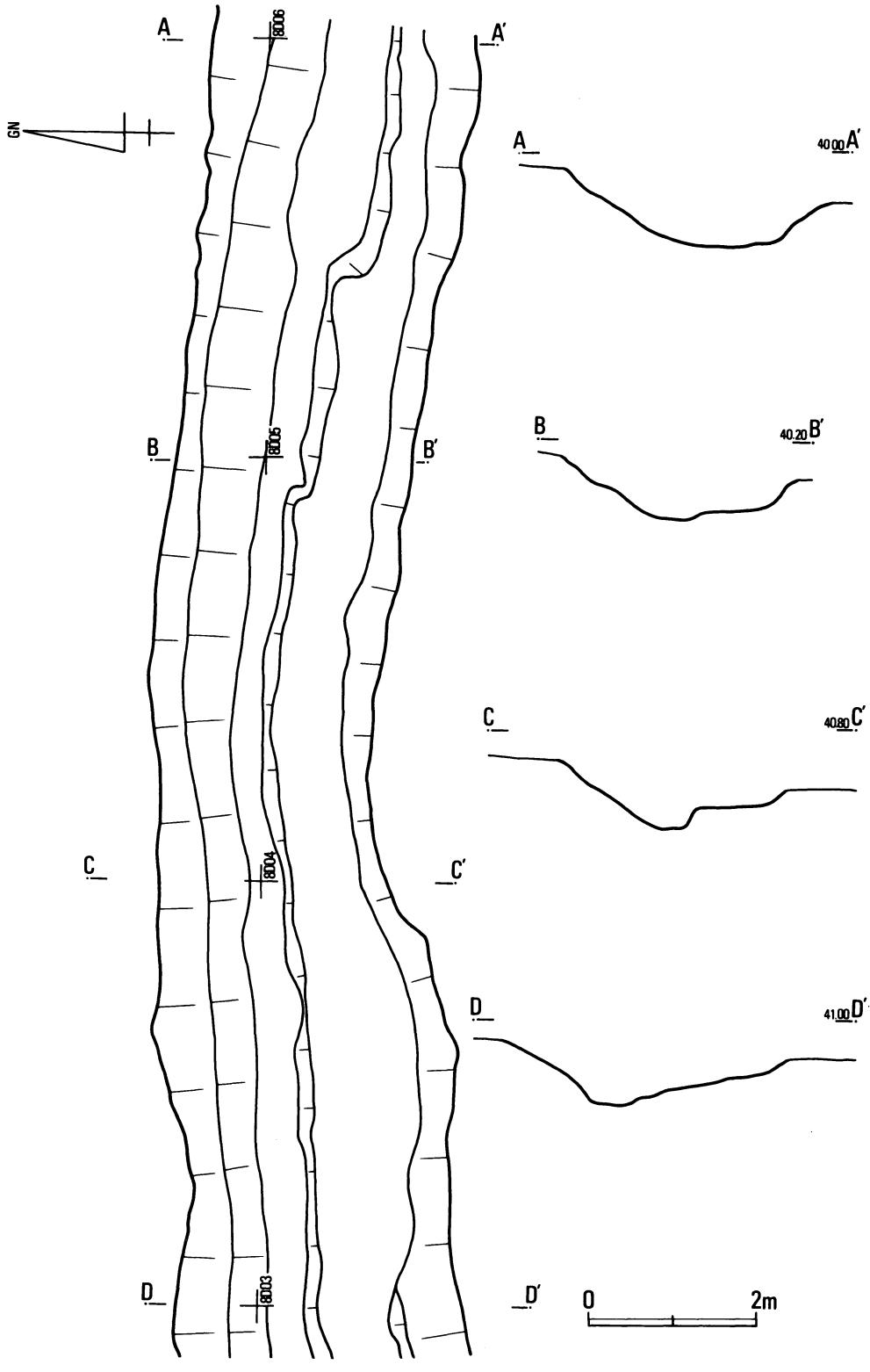
遺跡北部の2Bグリッドから2Dグリッドにかけて検出されたもので、等高線には概ね沿うものとなっている。長さ160m、上端の幅約2.5～4m、下端の幅約20～30cm、深さ約50～70cmを測る。断面は底部が左右どちらかに片寄った皿状を呈し、底面には複数の段がみられるなど、1号と似た形態をとる。土層断面図K－K′の底面の形状並びに覆土中の硬く締っている土層のあり方などから、少なくとも4回は作り変えが行なわれていると考えられる。この3号は4号・5号の2条の溝状遺構と交差しているが、覆土の切り合い関係から4号及び5号の方が新しい。

(4)　4号溝状遺構（第174～176・183図、図版63・64）

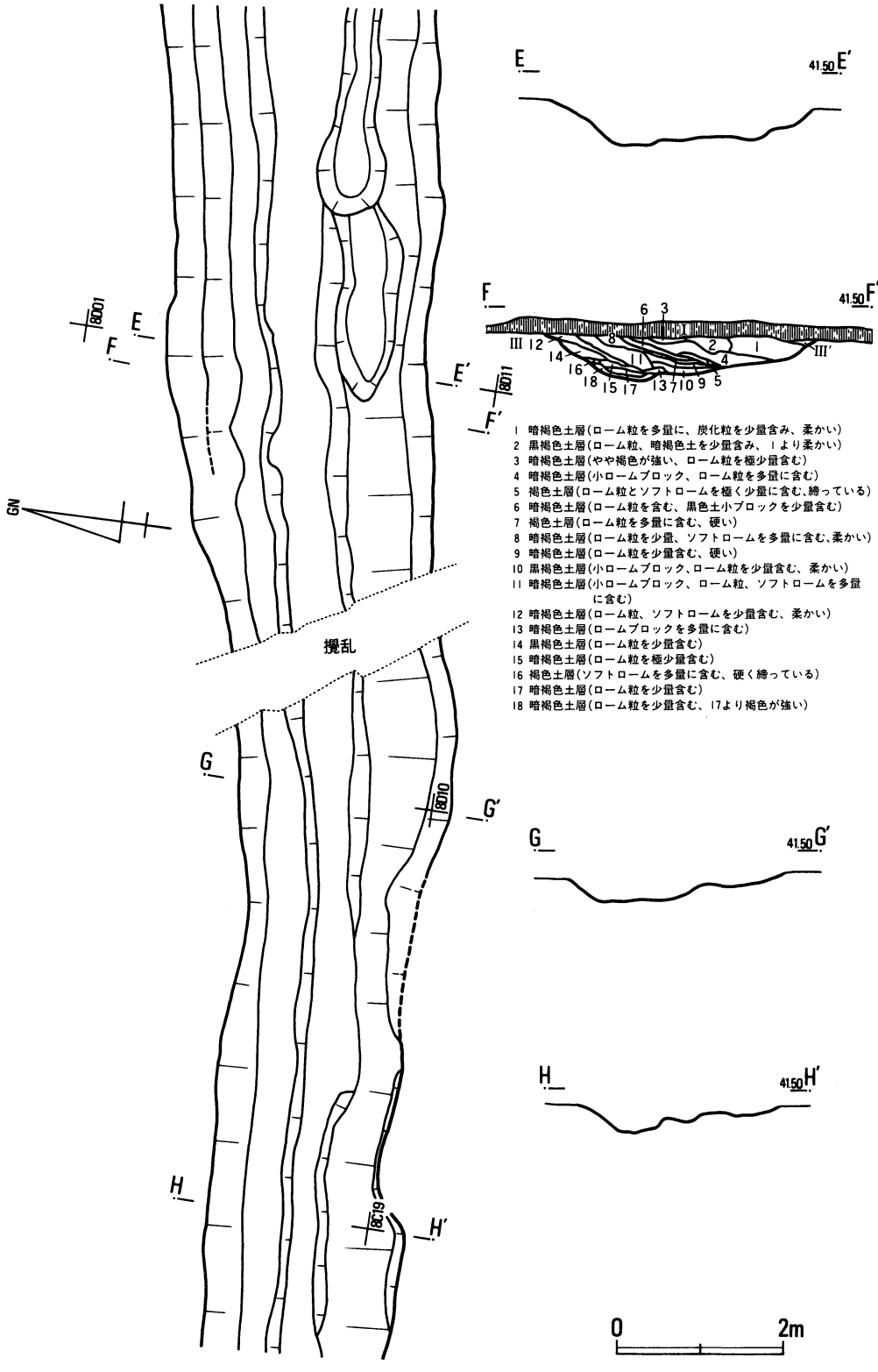
遺跡北西部の1Bグリッドから東部の谷に接する3Eグリッドにかけて検出され、概ね等高線とは直交する。すぐ北側には5・6号の溝状遺構が4号に並んで構築されている。長さ210



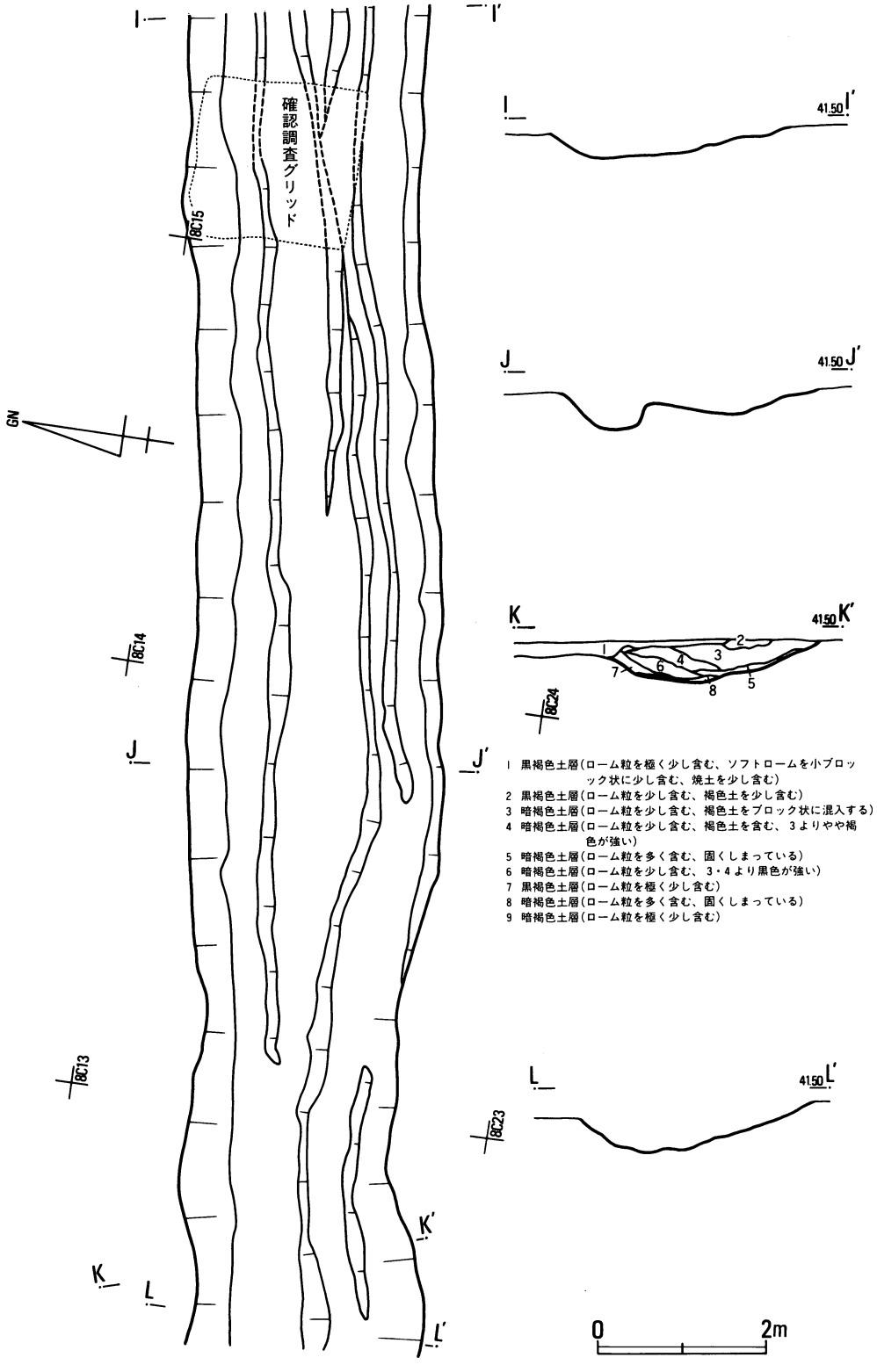
第163図　溝状遺構分布図（1/2500）



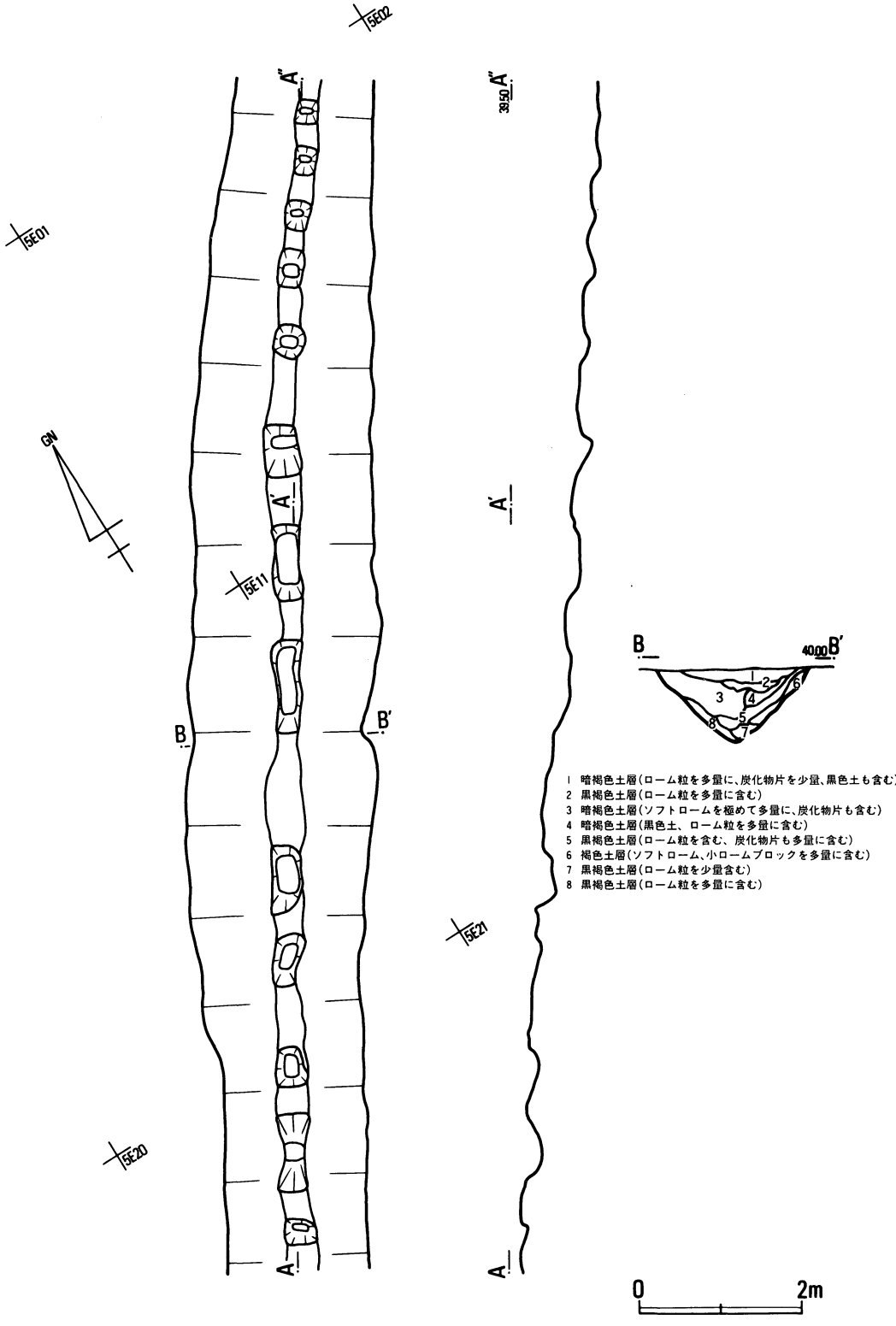
第164図　溝状遺構実測図(1号)(1/80)



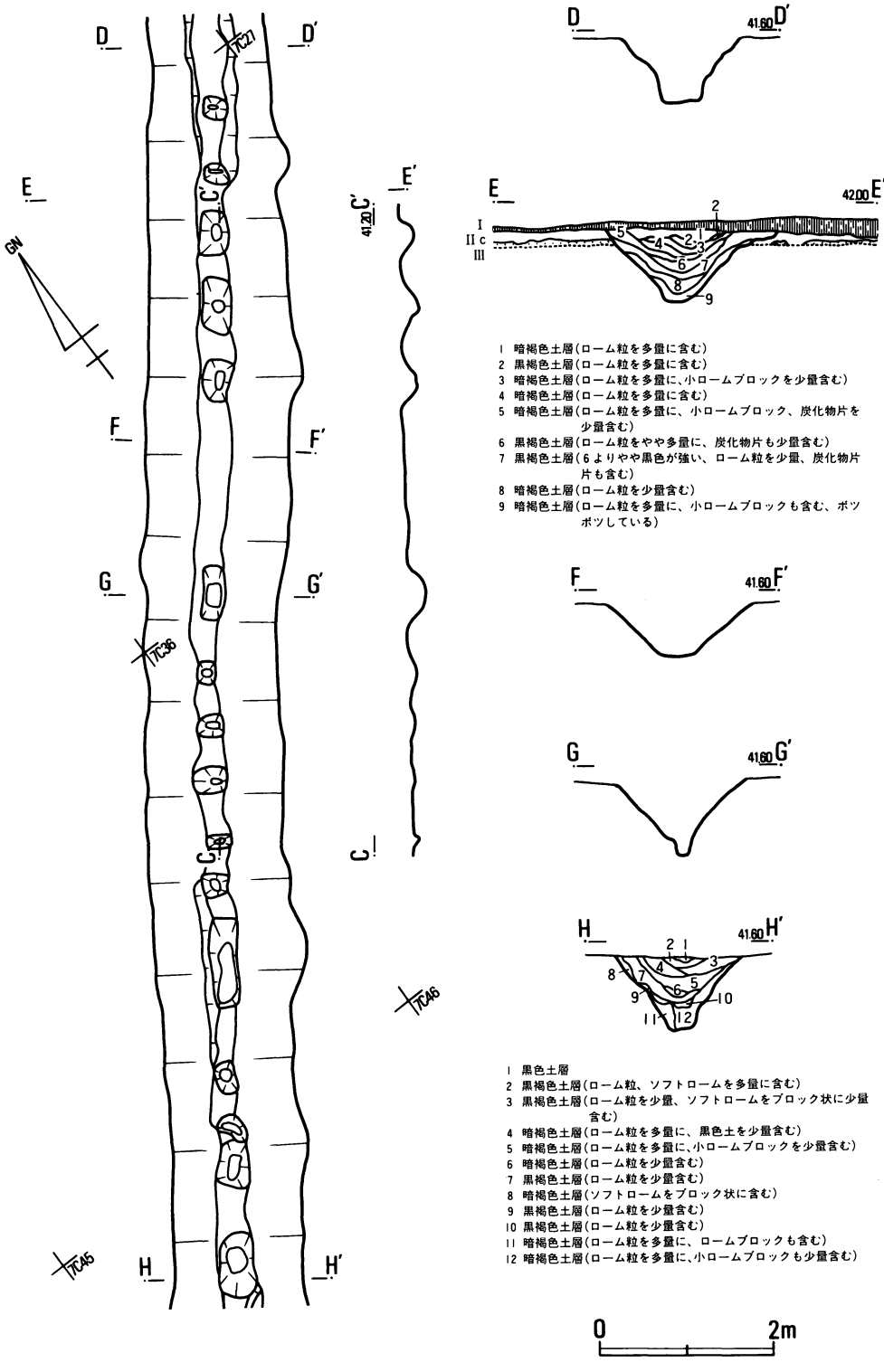
第165図　溝状遺構実測図(1号)(1/80)



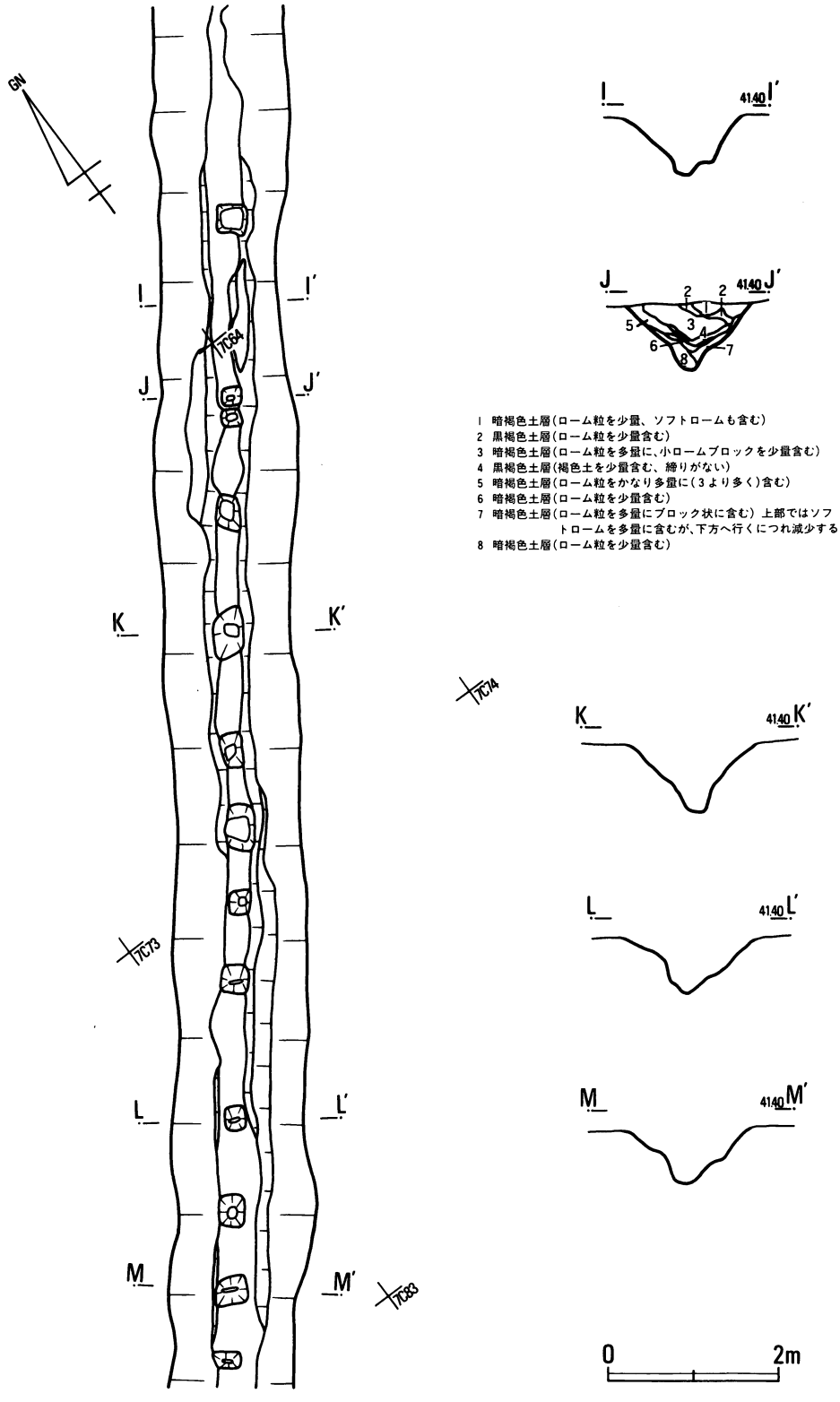
第166図　溝状遺構実測図(1号)(1/80)



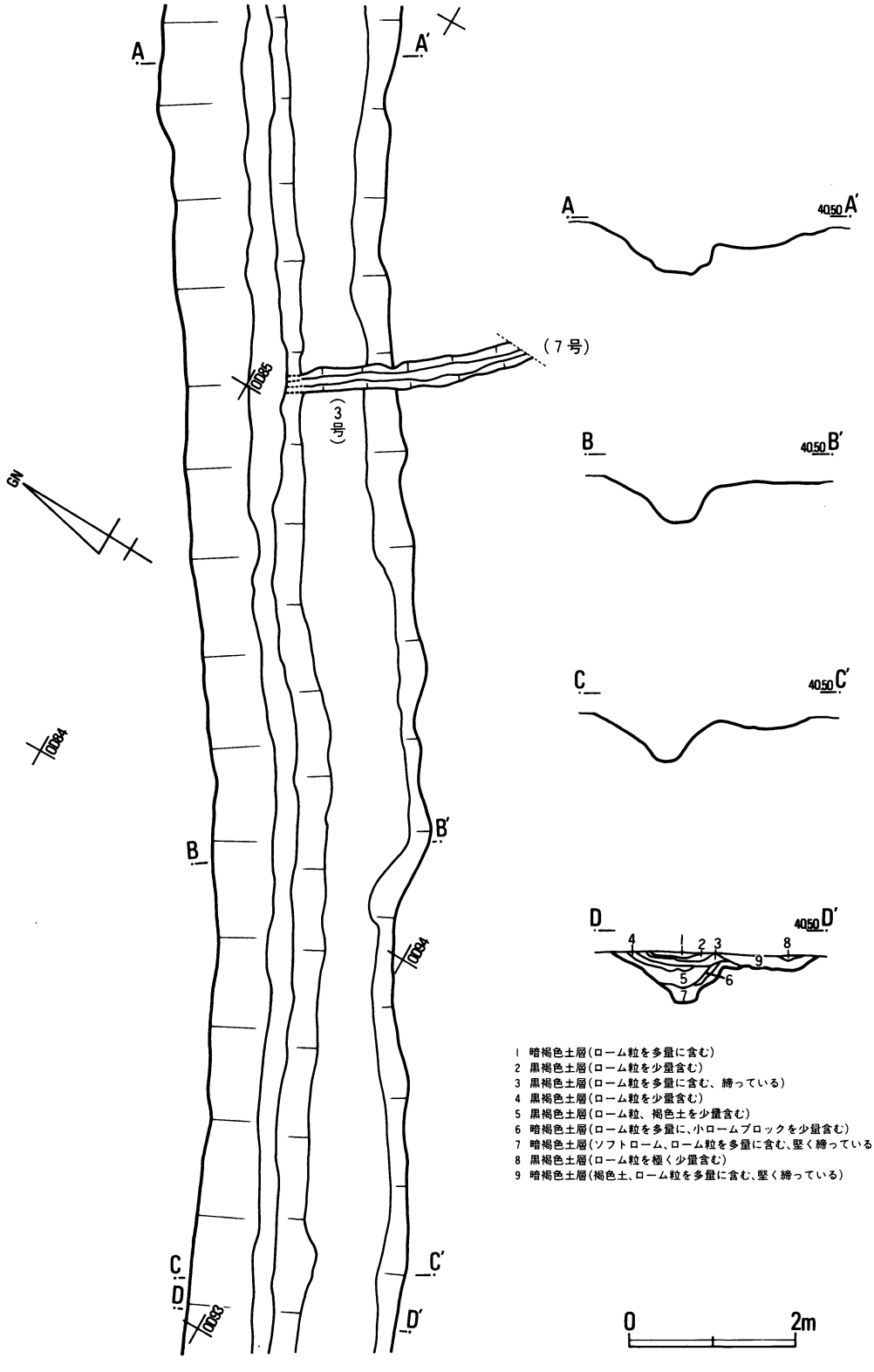
第167図　溝状遺構実測図(2号)(1/80)



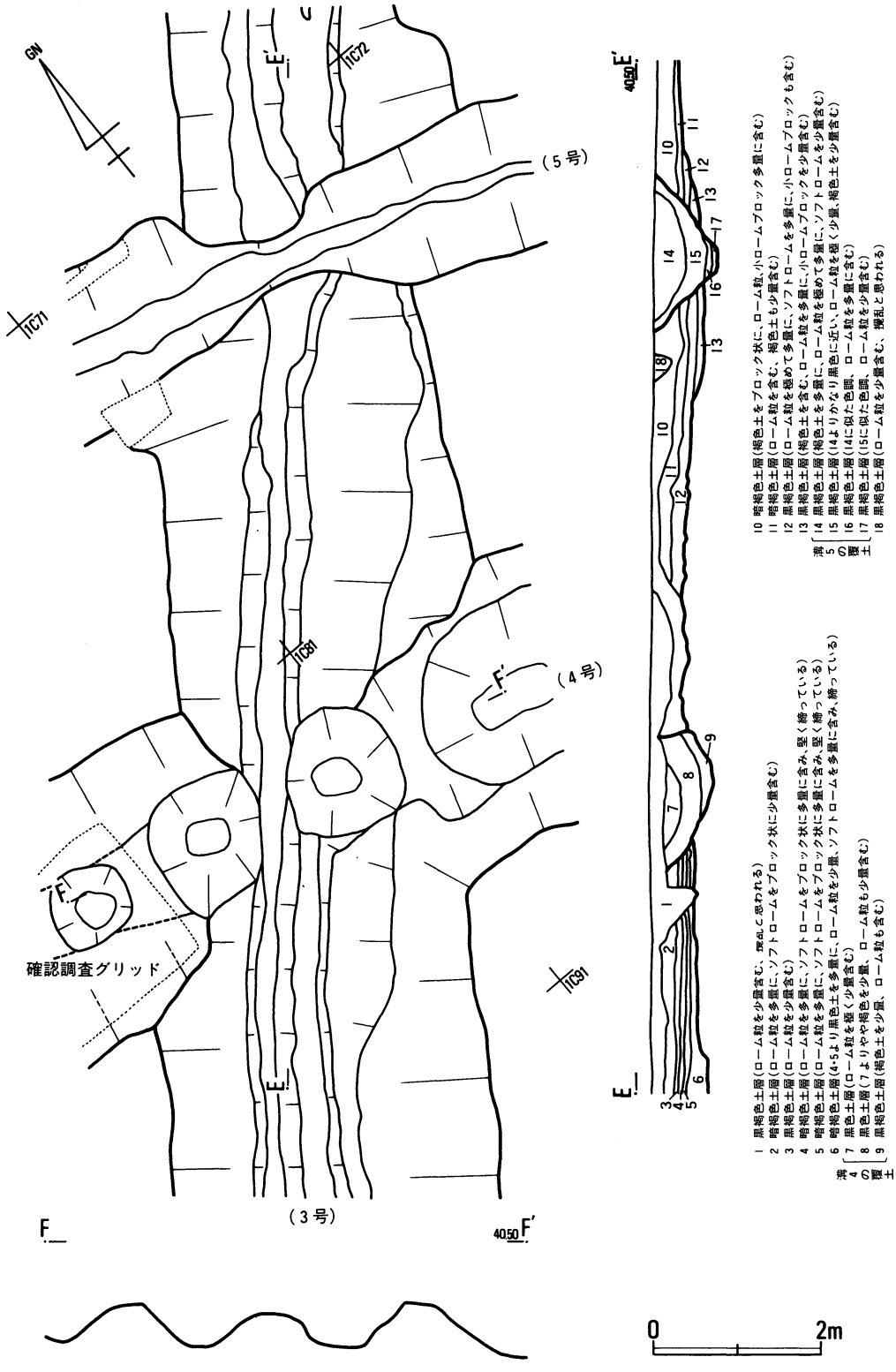
第168図　溝状遺構実測図(2号)(1/80)



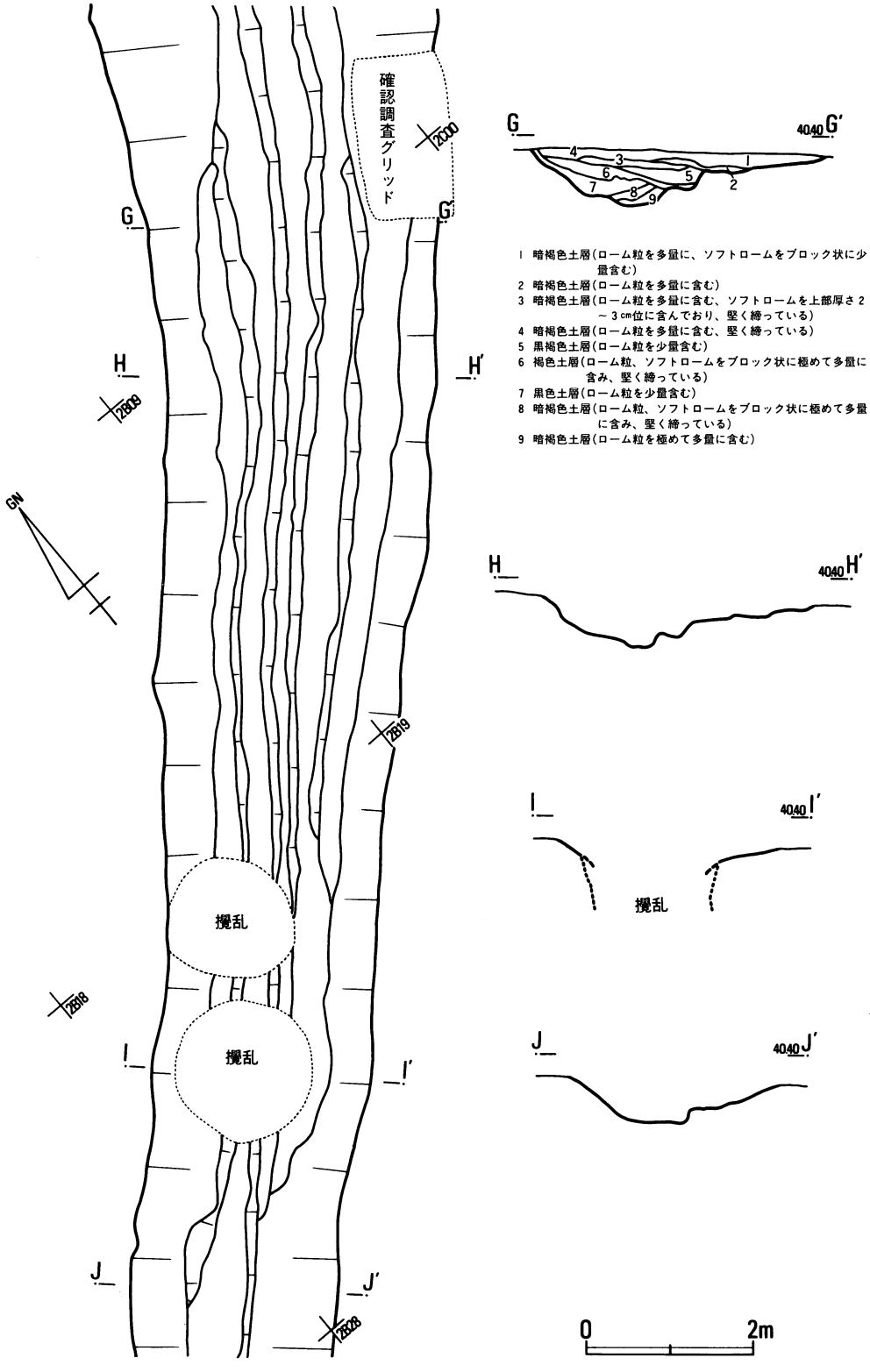
第169図　溝状遺構実測図(2号)(1/80)



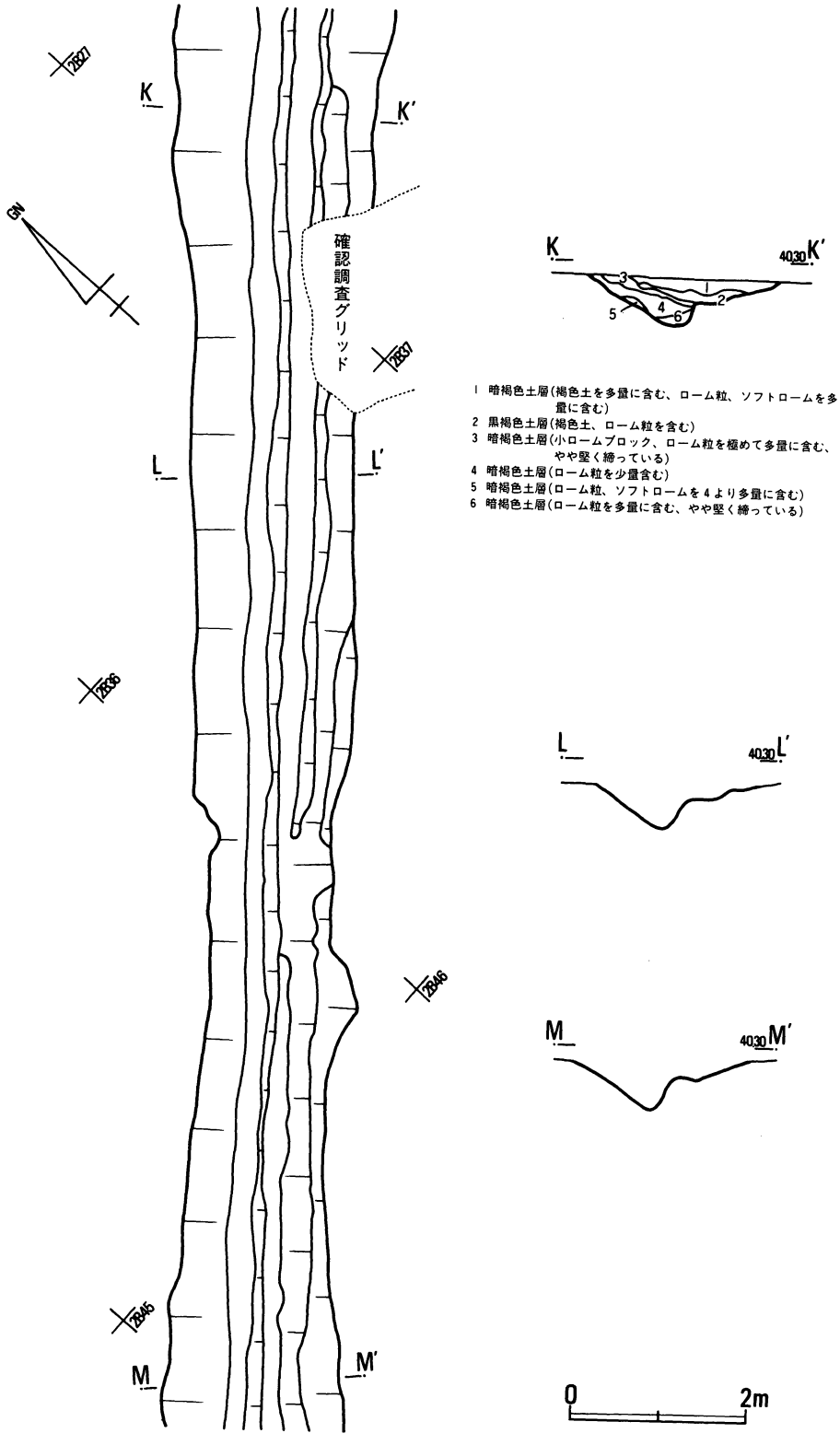
第170図　溝状遺構実測図(3・7号)(1/80)



第171図　溝状遺構実測図(3・4・5号)(1/80)



第172図　溝状遺構実測図(3号)(1/80)



第173図　溝状遺構実測図(3号)(1/80)

m、上端の幅約1.5～３m、下端の幅約40～150cm、深さ約30cmを測る。断面は浅い摺鉢状を呈する。底面には長さ約１～３m、深さ約40～80cmのやや方形に近い形態のピット列が検出された。ピットの間隔は1.5～2.5mで必ずしも一定していないが、隣合うピットの上端の間隔はほぼ40～50cmとそろっている。また、東端において６号溝状遺構と重複しているが、土層断面図H－H′から４号が６号を切って構築されていることがわかる。

(5)　５・６号溝状遺構（第177～183図、図版64）

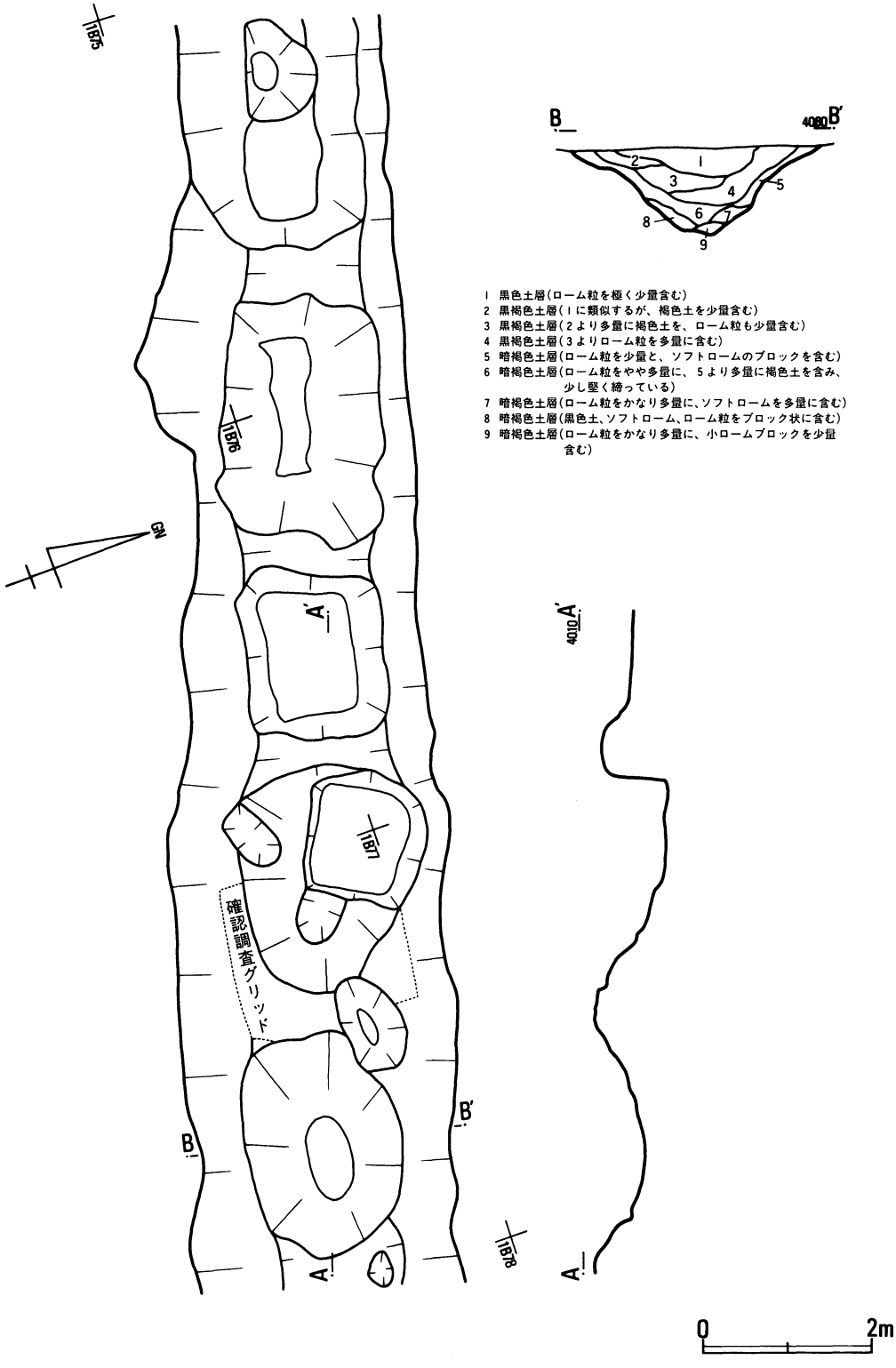
遺跡の北西部１Ｂグリッドから東部の谷に接する３Ｅグリッドにかけて、南側の４号に並んだ形で検出された。５号と６号は東端近くまで重複しており、長さ210m、上端の幅約２～2.8m、下端の幅約15～70cm、深さ約50～70cmを測る。断面は西端付近は逆台形状であるが、東端に近づくにつれて底面が凸凹のある浅い摺鉢状になる。底面には複数の段があり、３回程作り変えをしていると思われる。底面には径約50～90cm、深さ約15～20cm程の円形に近いピットが不規則に並んでいる。また、東端の５・６号が独立したところでは、５号の規模が上端の幅約1.7m、下端の幅約30cm、深さ約60cmを測り、断面は摺鉢状を呈する。そして底面には先述のと同様のピットが検出されている。６号は上端の幅約1.3m、下端の幅約50cm、深さ約20～30cmを測り、断面は皿状を呈する。底面には段がみられる。５・６号の新旧は、土層断面から６号を５号が切っていることがわかる。

(6)　７号溝状遺構（第170図）

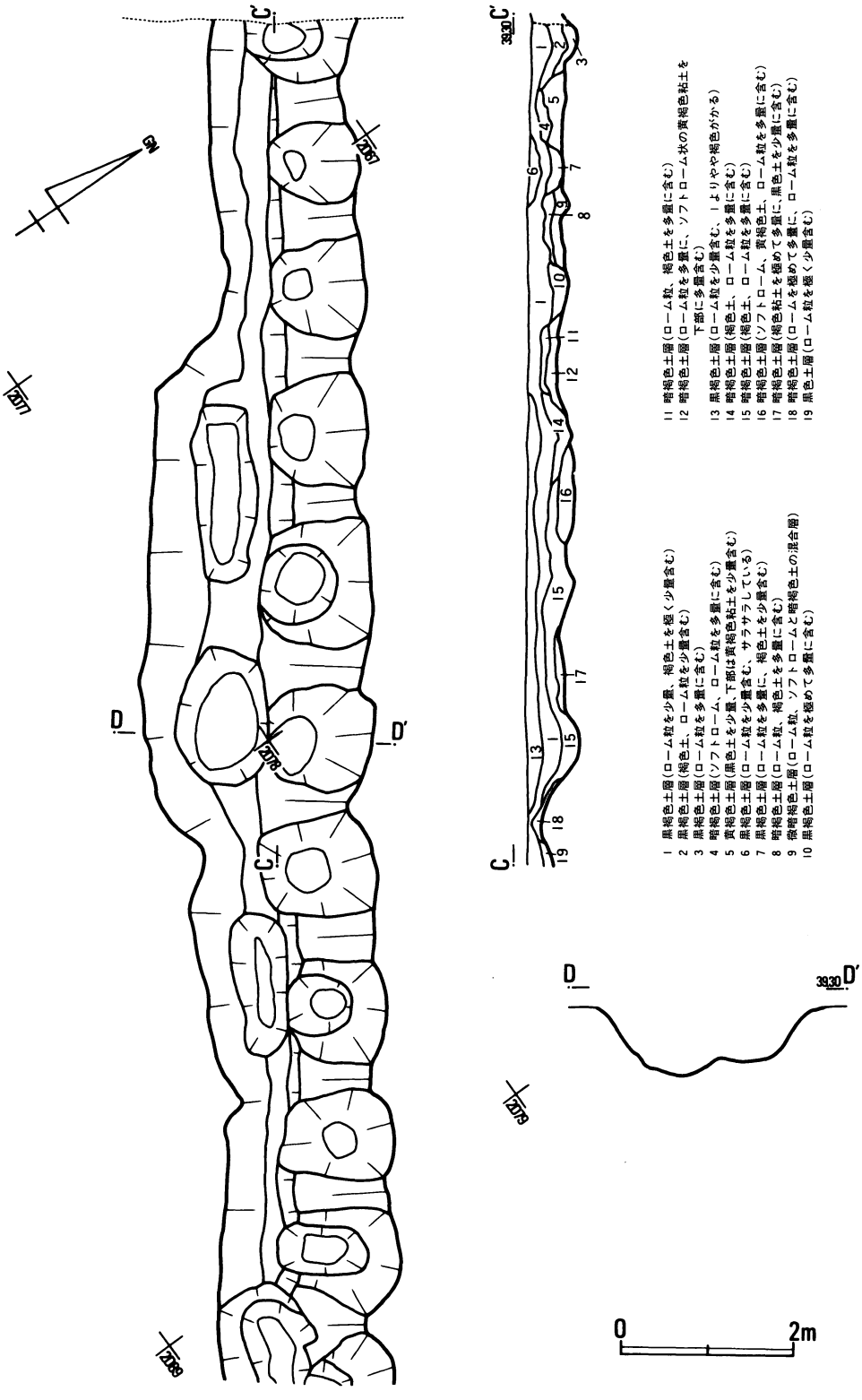
遺跡北端の０Ｄ85グリッドにおいて、３号溝状遺構に重複した状態で検出された。長さ約３m、上端の幅30cm、下端の幅約10cm、深さ10～15cmを測る。この他未掘であるが南東方向へさらに13m程延びていることを確認している。調査の結果３号の底部に繋ると思われ、３号のうちでも初期に構築されたものとほぼ同時期のものと考えられる。

(7)　溝状遺構のまとめ

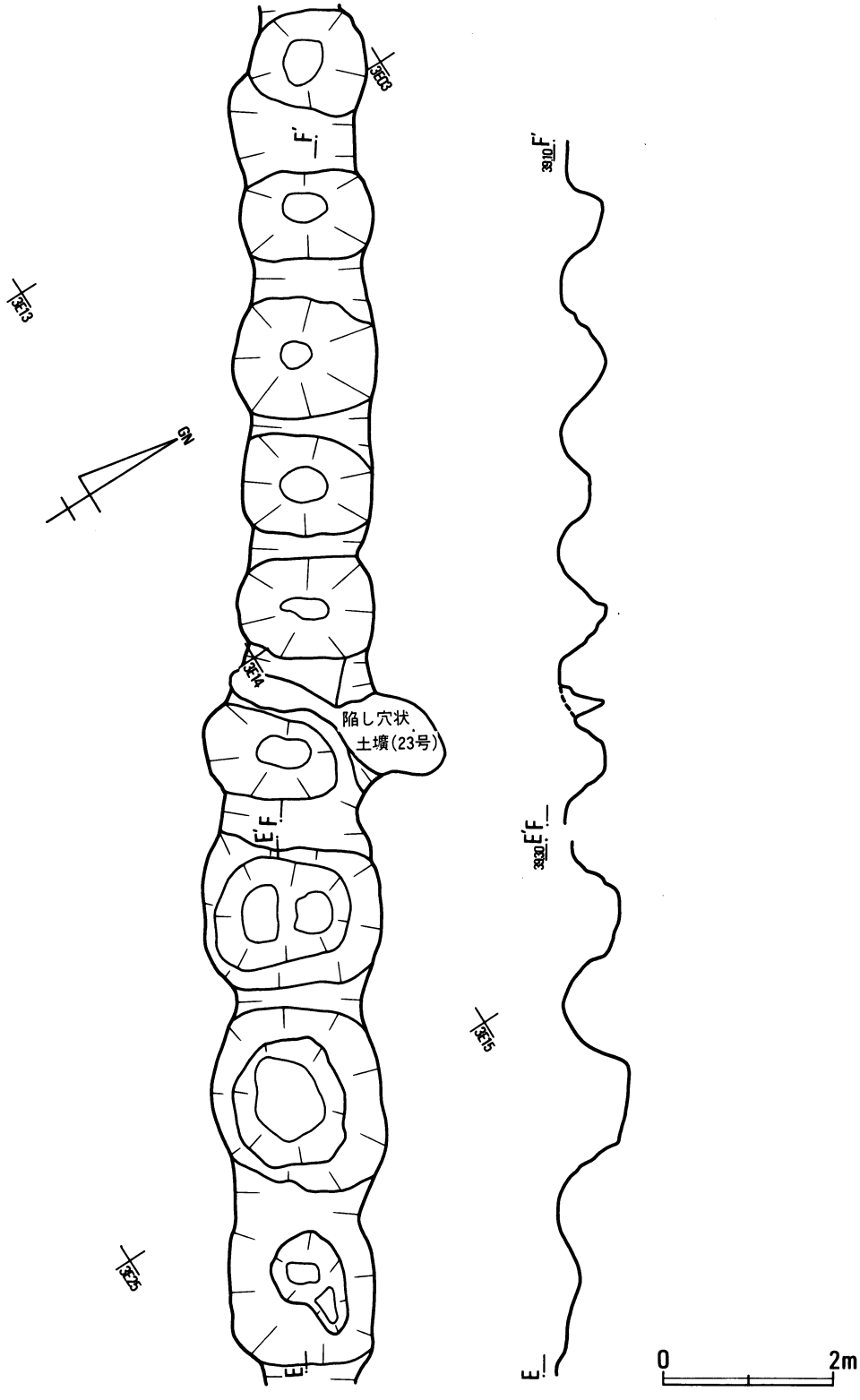
溝状遺構は７条検出されたが、いずれも時期を決定出来るような遺物は出土しなかった。７条相互の新旧は、その重複関係から３号より４～６号は新しく、６号より４・５号が新しいといえる。また、形態からは小規模な７号を除き２つのグループが考えられる。ひとつは底面にピットをもたず段を有し、作り変えが行なわれたと思われる１・３・６号で、もうひとつは底面にピットを有し明確な段をもたない２・４・５号である。このうち後者には柵列などの構築物の存在が推定されるのに対して、前者にはそういうものが見当らず、異った用いられ方をしたと考えられる。しかし、５号と６号がほとんど同じ場所に重複して作られているなど、構築場所については特に差は感じられない。



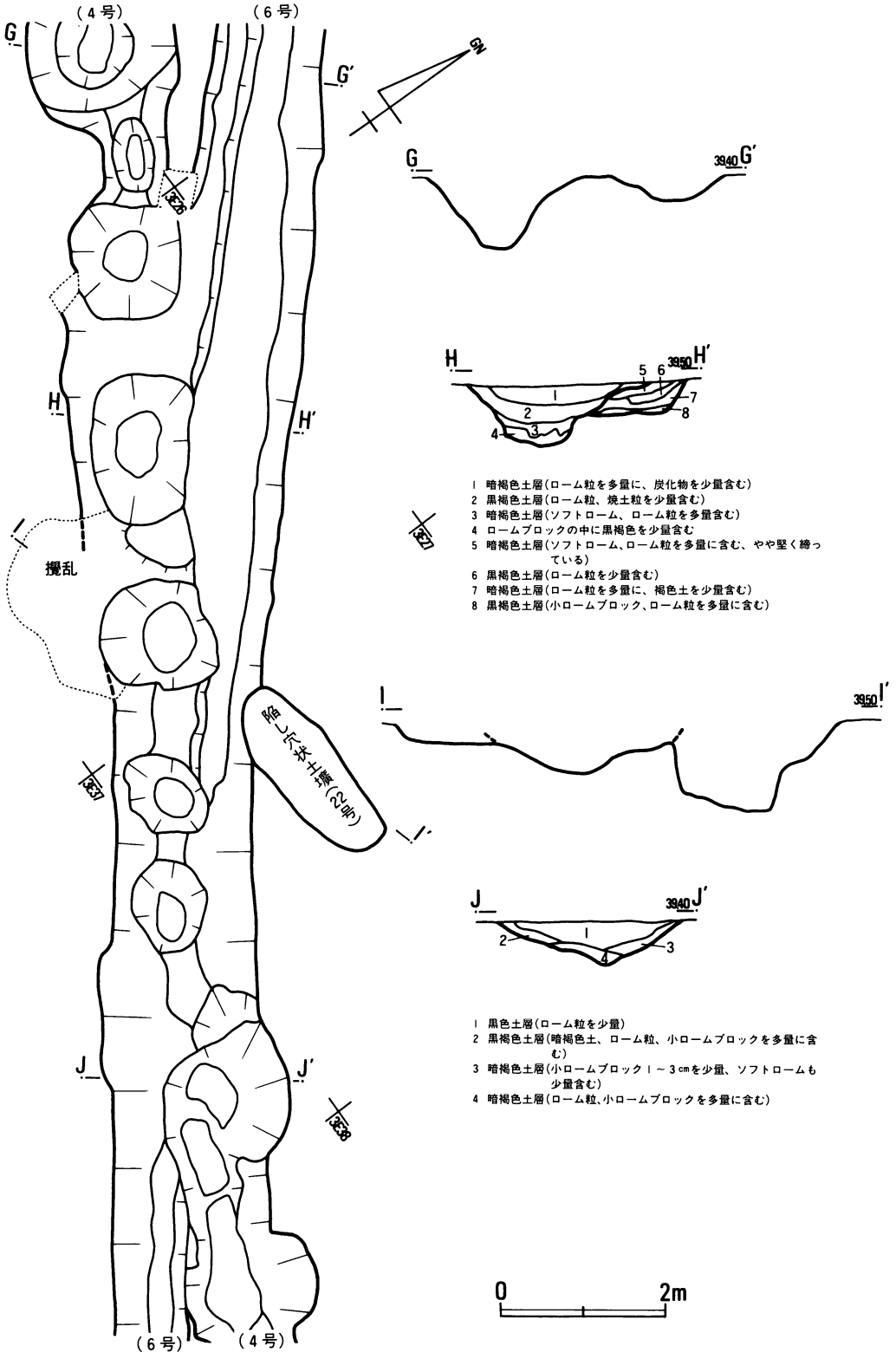
第174図　溝状遺構実測図(4号)(1/80)



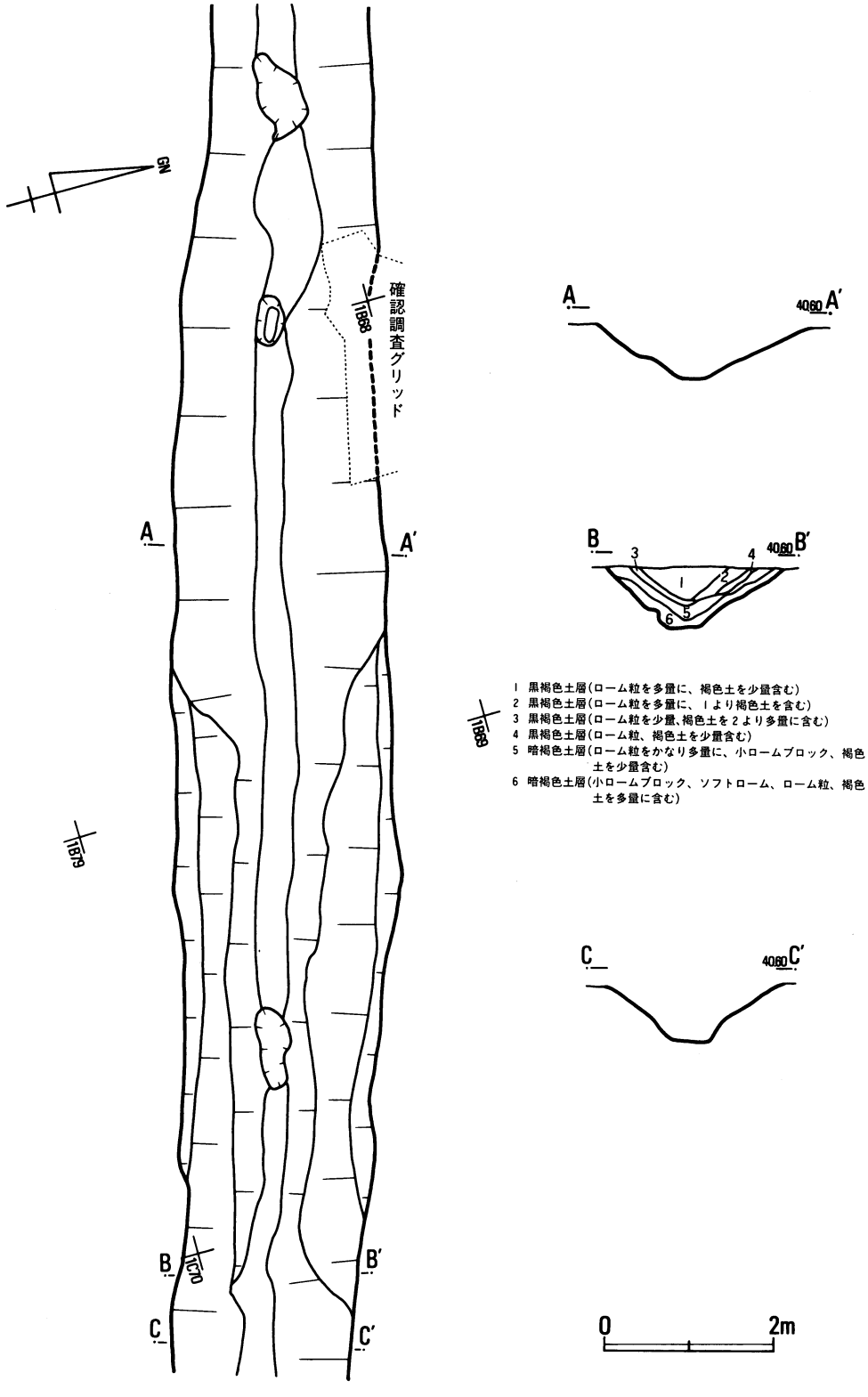
第175図　溝状遺構実測図(4号)(1/80)



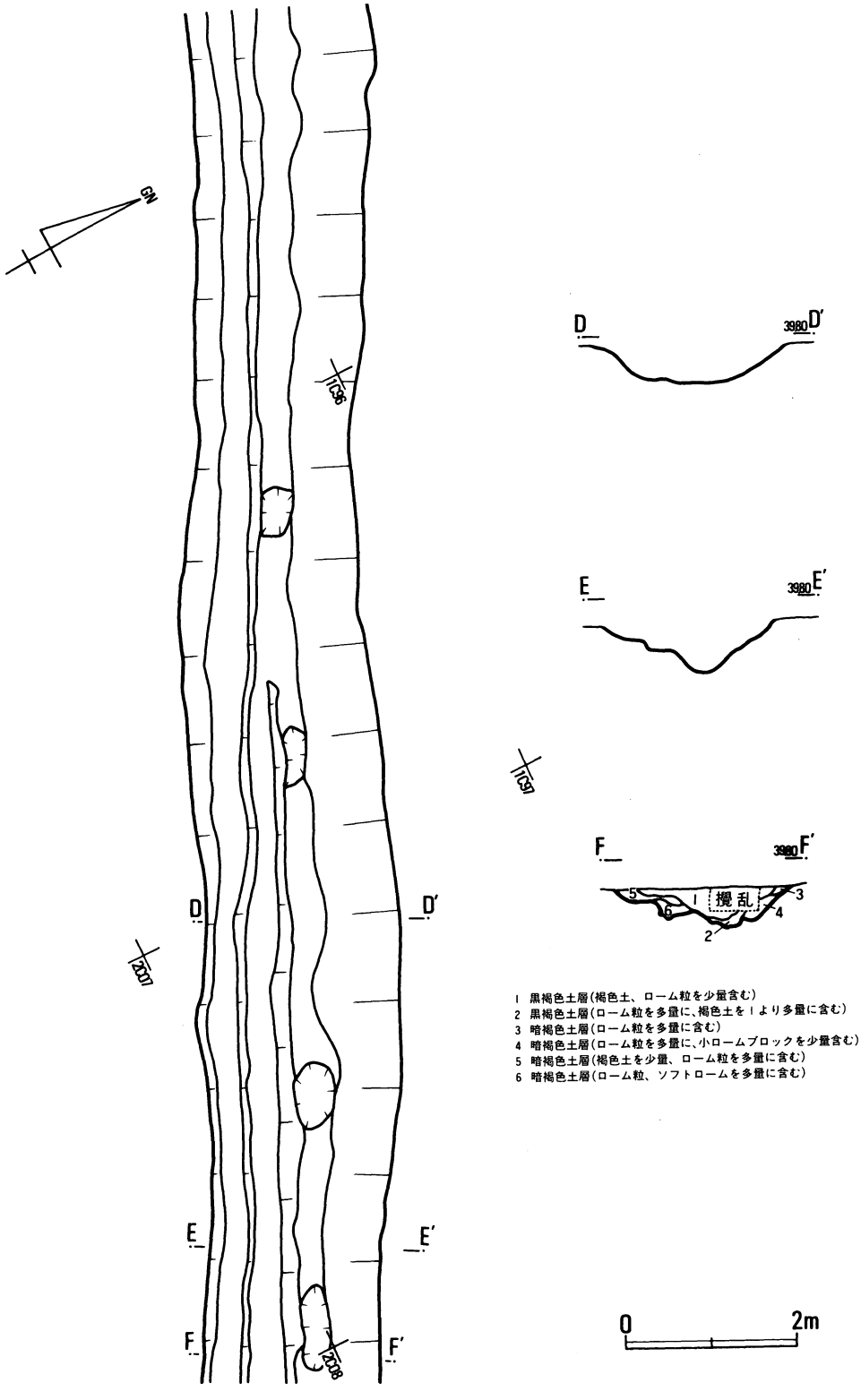
第176図　溝状遺構実測図(4号)(1/80)



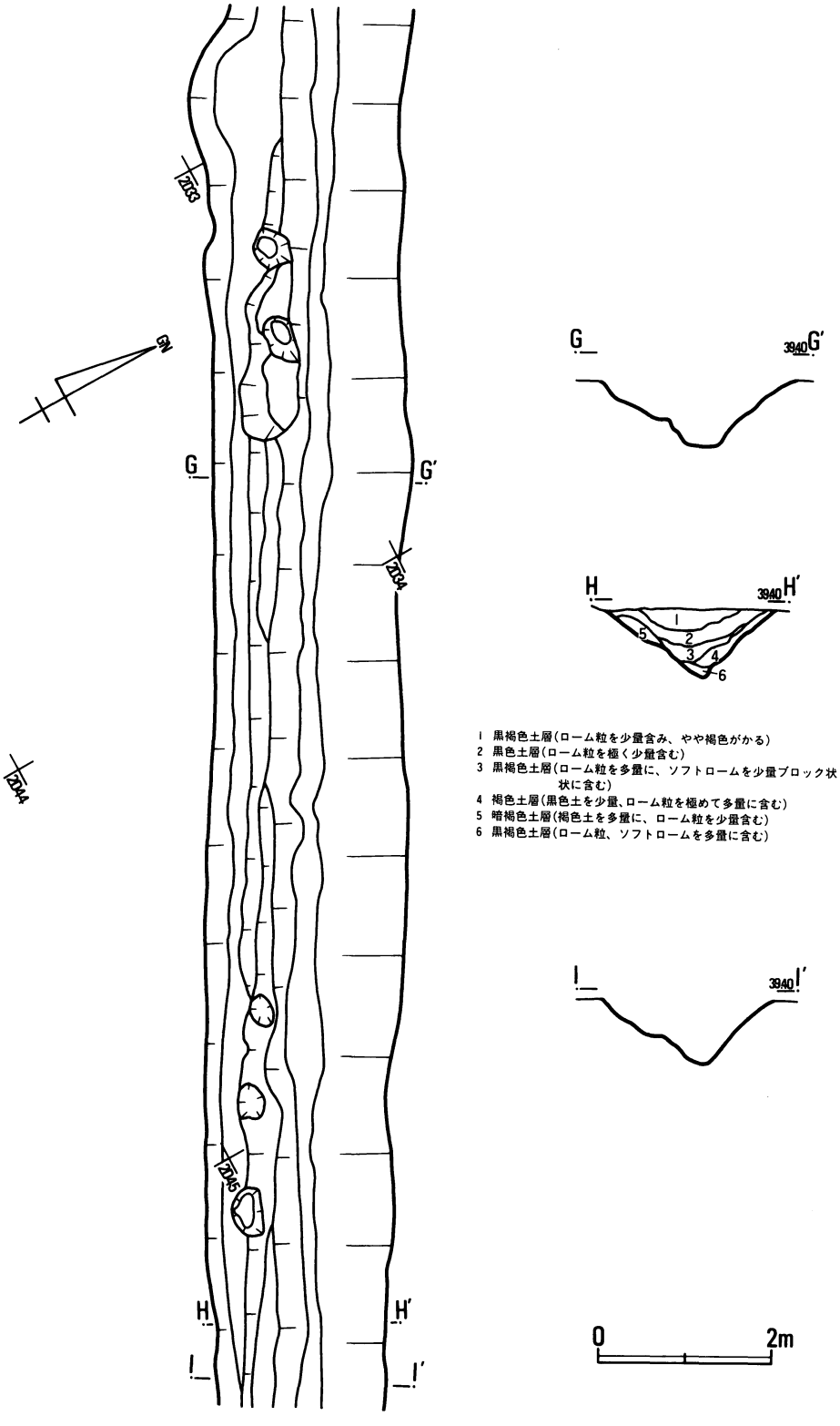
第177図　溝状遺構実測図(4・5号)(1/80)



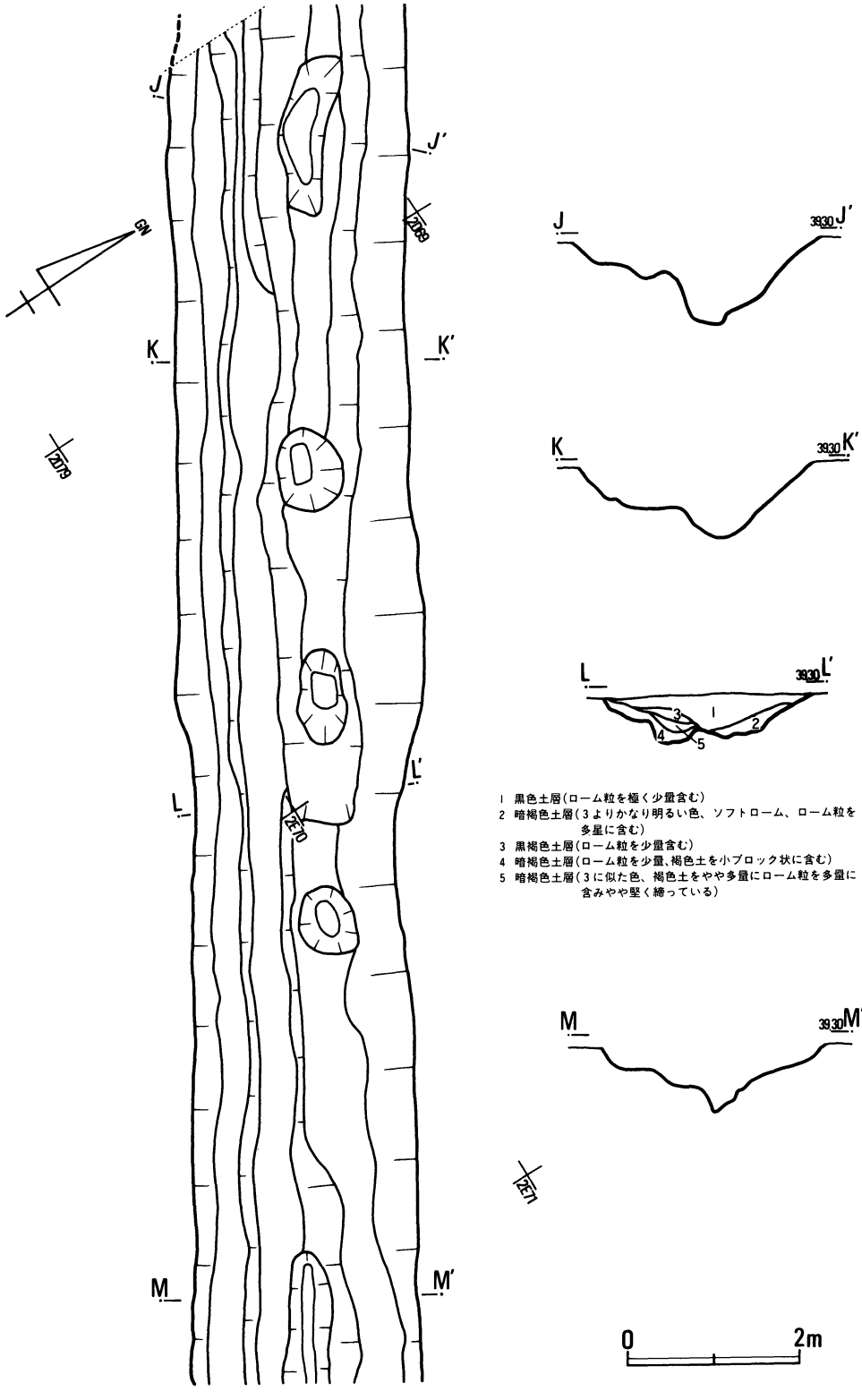
第178図　溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



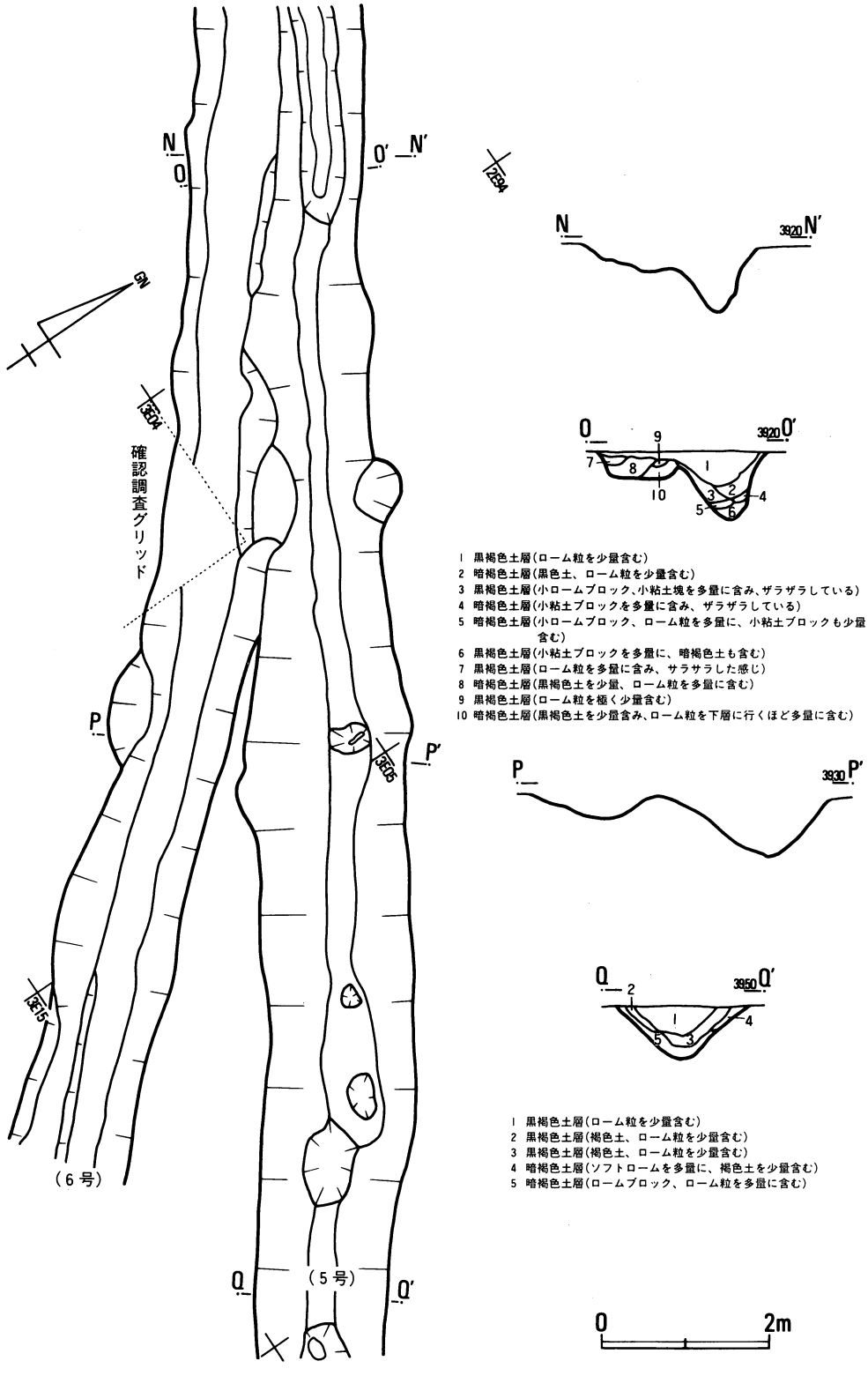
第179図　溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



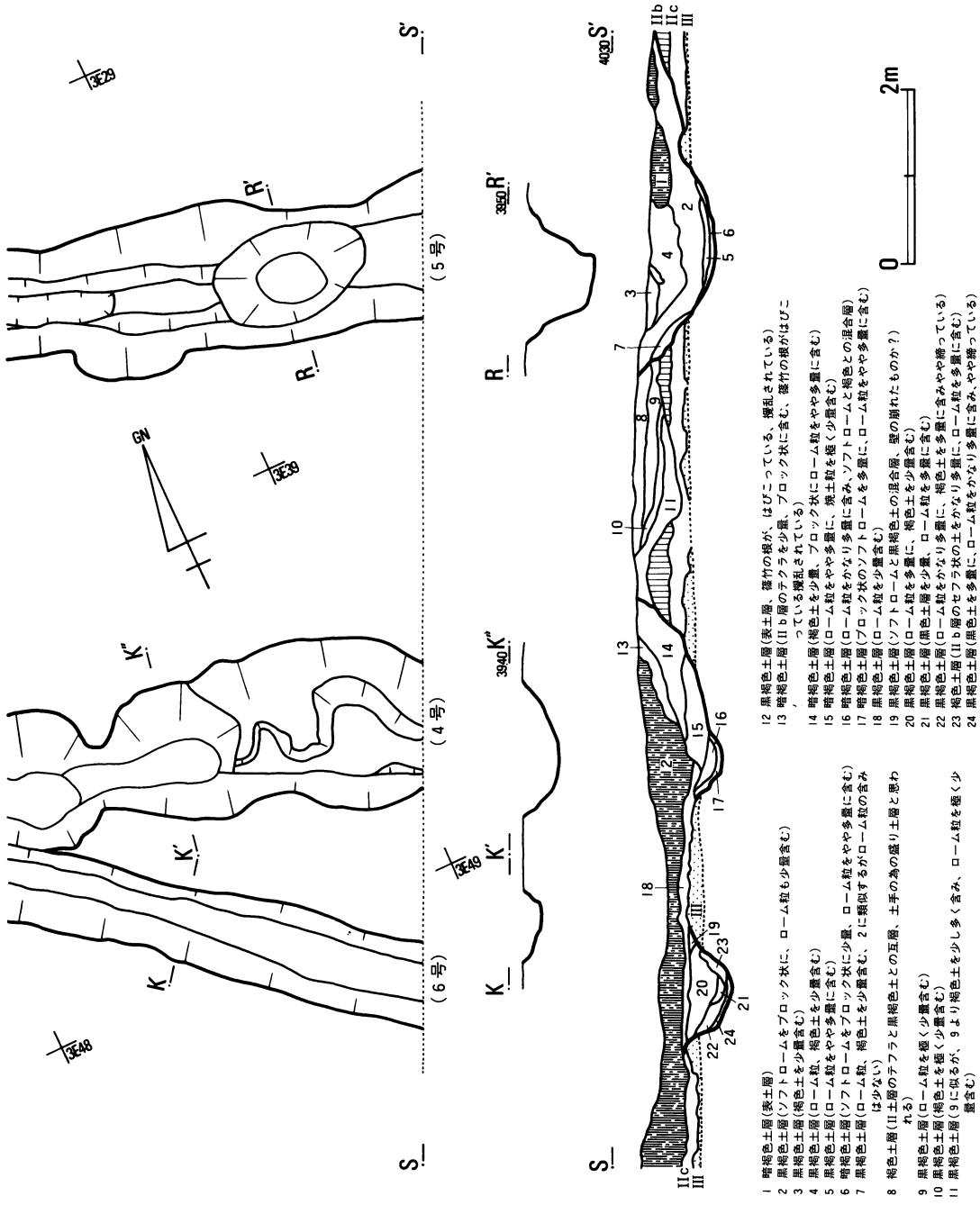
第180図　溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



第181図　溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



第182図　溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



第183図　溝状遺構実測図(4・5・6号)(1/80)

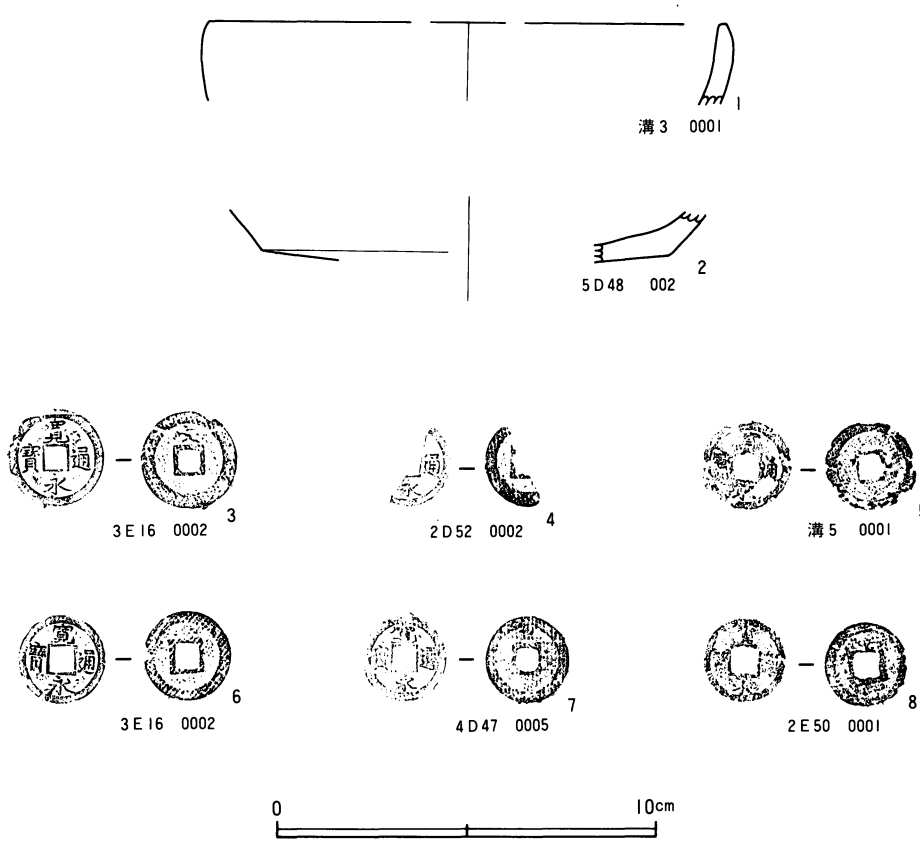
これら7条の溝状遺構の構築時期及び機能・用途を推定することは困難であるが、この地域には古くから牧が置かれていたことが知られており、取香牧などは御料牧場として最近まで存在していた。このことから牧に係わる野馬土手・野馬堀としての堀であった可能性が一番有力であろうと思われ、4号と5・6号などはその中央部に野馬土手が築かれていたとも考えられる。

なお、No.67遺跡では溝状遺構の覆土から土師器がかなり出土しており、古いものでは古墳～平安時代にまで遡るものがあると思われる。

2　遺物（第184図、図版65）

その他の時代の遺物としては古銭・土師器片などが微量に出土したのみで、溝状遺構との関連は不明である。

1は弥生土器の小形の椀か鉢の破片と思われる。2は土師器の小形高坏である。3～8は寛永通宝で一番大きいものは3で径2.5cmを測り、これのみ裏面上部に「文」の文字がある。



第184図　その他の時代の遺物実測図（1/2）

第3章　小　　結

ここではこれまで述べてきた調査結果に基づいてNo.10遺跡の時代的な変遷を簡単に振り返って結びとしたい。

先土器時代

1期　遺跡南東部にVIII層上部を主体とする第4及び第5炭化物片集中個所が残される。

炭化物片の集中個所については、自然的要因によるとの考えも強く、必ずしも人為的なものとは限らないが、石器群とは重複しないまでも石器群の検出される層位とほぼ同層位から検出されることが多く、少なくともその全てではないにしても人為的に残されたものが多いと考える。

2期　遺跡南東部にSブロックを中心としたVII層主体石器群と第2及び第3炭化物片集中個所が残される。

3期　遺跡北端部にはRブロックを中心としたIV～VI層主体石器群、遺跡南部には第1炭化物片集中個所が残される。

4期　遺跡南部にIII層下部を主体とするG～Lの6ブロックからなるブロック群とMブロックが残される。

5期　遺跡南東部にIII層中部～下部を主体とするA～Fブロック及びTブロックが残される。なおA～Fブロックには小規模ながら礫群が伴う。

6期　遺跡北端部にIII層中部～下部を中心に石刃及び石刃状剝片を主体とする石器群が残される。

7期　遺跡南端部にIII層中部を主体とするP及びQブロックが残される。

8期　遺跡南東部を中心にIII層上部～上面を主体とする槍先形尖頭器が数点残される。

9期　遺跡北端部と南端部（N・Oブロック）にIII層上部～上面を主体とする細石刃石器群が残される。

10期　遺跡北端部と南部にIII層直上を主体とする槍先形尖頭器とピエスエスキーユが残される。

縄文時代

早期前半～中葉　遺跡北端部を中心に撚糸文系及び沈線文系の土器片が少量残される。

早期後半　遺跡全体に多数の陥し穴状土壙群がつくられるとともに、遺跡北端部を中心に条痕文系土器群が残される。

前期　遺跡北端部を中心に黒浜式や浮島式の土器片が少量残される。

中期　遺跡北端部を中心に中期初頭～前半の土器群が残される。

後期　遺跡北端部を中心に曽谷式前後の土器片が少量残される。

弥生～奈良・平安時代

ごく微量の土器片が残される。

鎌倉～大正時代

野馬堀と思われる溝状遺構７条と寛永通宝６枚が残される。

昭和時代

開拓農家が畑をつくり桑室と思われる竪穴や芋穴さらにゴミ穴などを残す。

現代

成田空港二期工事区内となり、埋蔵文化財調査が行なわれた後雑草が生い茂り、キジやうさぎの格好の棲息地となっている。

引用・参考文献

石岡憲雄（1980）「所謂「Ｔピット」について」土曜考古第２号

今村啓爾他（1973）『霧ケ丘』霧ケ丘遺跡調査団

遠藤香澄（1982）「Ｔピット」『美沢川流域の遺跡群発掘調査の概要』財団法人北海道埋蔵文化財センター

大場磐雄他（1952）『千葉縣銚子市粟島臺石器時代遺跡調査報告』千葉縣銚子市公正市民館

小田静夫他（1977）『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会

川島利道他（1983）『岩坂大台遺跡』財団法人千葉県文化財センター

白石浩之・鈴木次郎（1980）『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告18

鈴木次郎他（1984）『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター

田中英司（1979）『唐沢遺跡』富士見市遺跡調査会調査報告第Ｉ集

戸沢充則・鶴丸俊明編（1983）『多聞寺前遺跡II』多聞寺前遺跡調査会

戸田哲也他（1977）『東内野遺跡発掘調査概報』富里村教育委員会

西川博孝・西口徹他（1984）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV―No.７遺跡―』財団法人千葉県文化財センター

西村正衛（1954）「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（第２・３次調査）」学術研究３

野口行雄（1983）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書―No.14遺跡―』財団法人千葉県文化財センター

福田友之（1981）「「溝状ピット」研究に関する覚書」弘前大学考古学研究第１号

町田洋（1964）「Tephrochronology による富士火山とその周辺地域の発達史―第四紀末期について―」地学雑誌73―５・６

松村明子他（1978）『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡刊行会

宮重行・池田大助他（1981）『木の根』財団法人千葉県文化財センター

宮澤寛・今井康博（1976）「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題―いわゆる落し穴について―」港北ニュータウン埋蔵文化財調査団調査研究集録第1冊

明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団編（1969）『神奈川県大和市月見野遺跡群調査概報』

図　版

航空写真（北から）

航空写真（北から）

先土器時代石器群出土状況

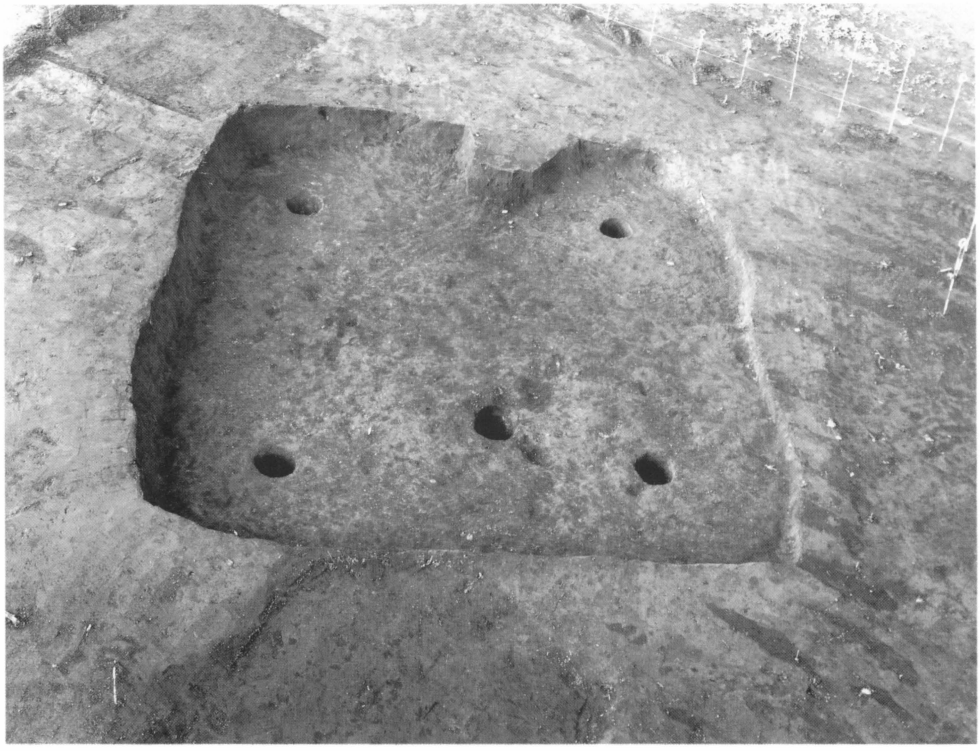
A－1号跡

A－2号跡

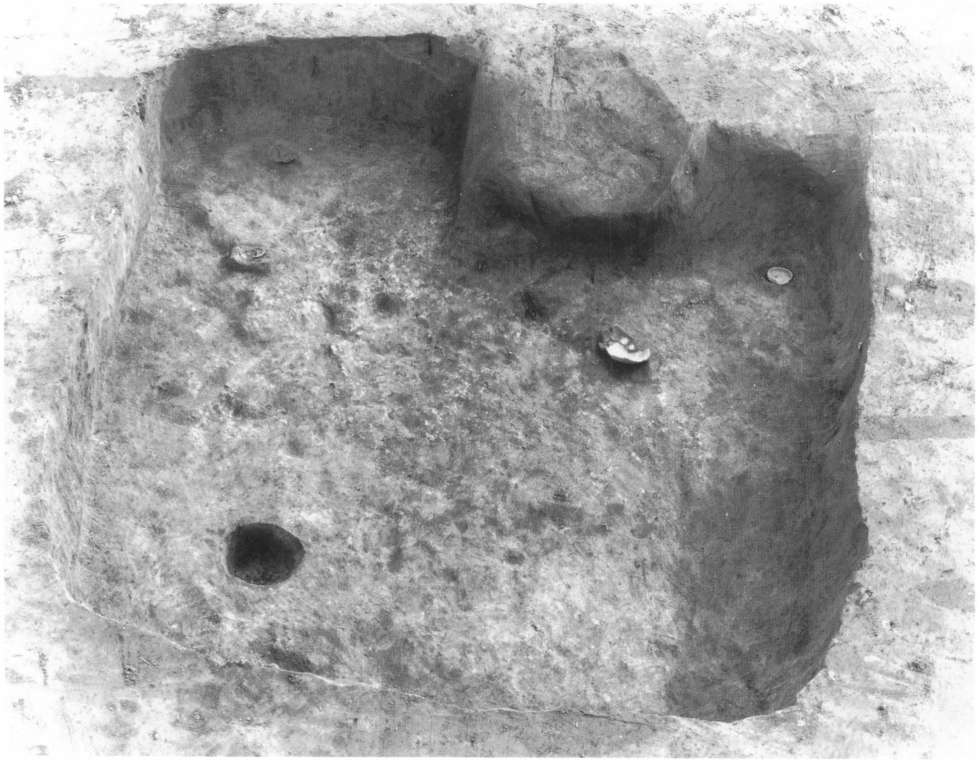
A－3号跡

A－4号跡

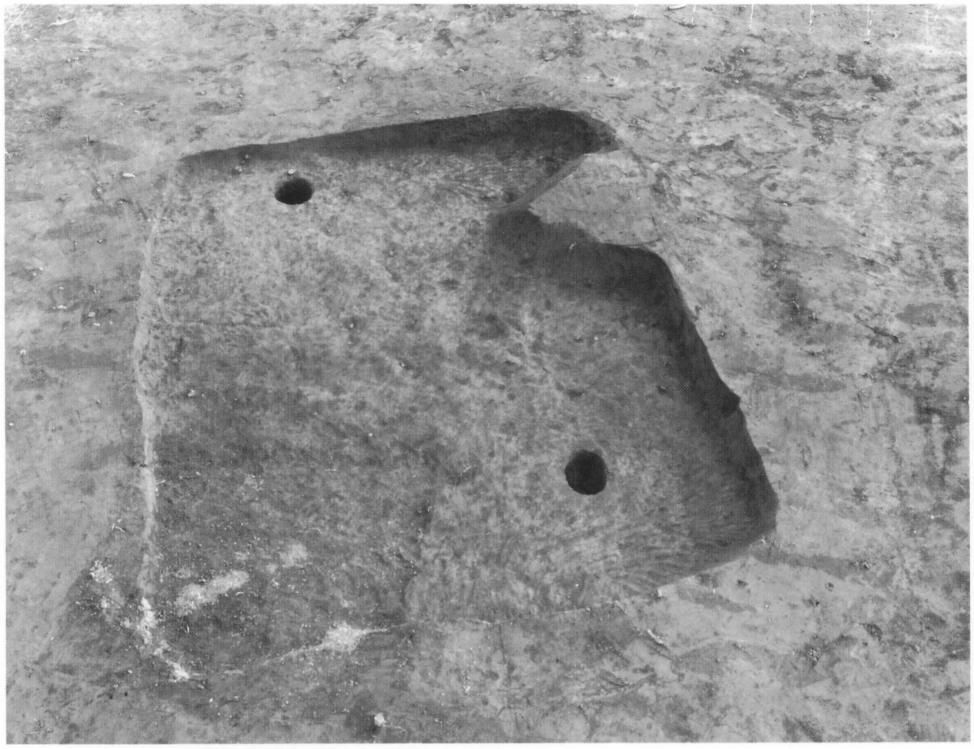
A－5号跡



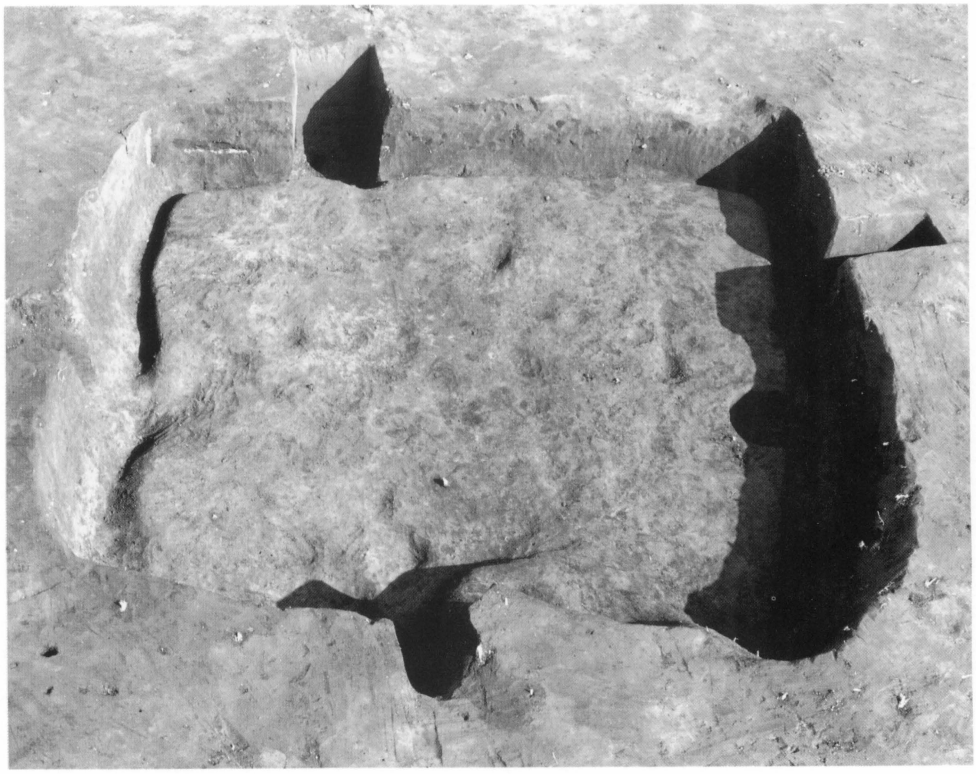
A－6号跡



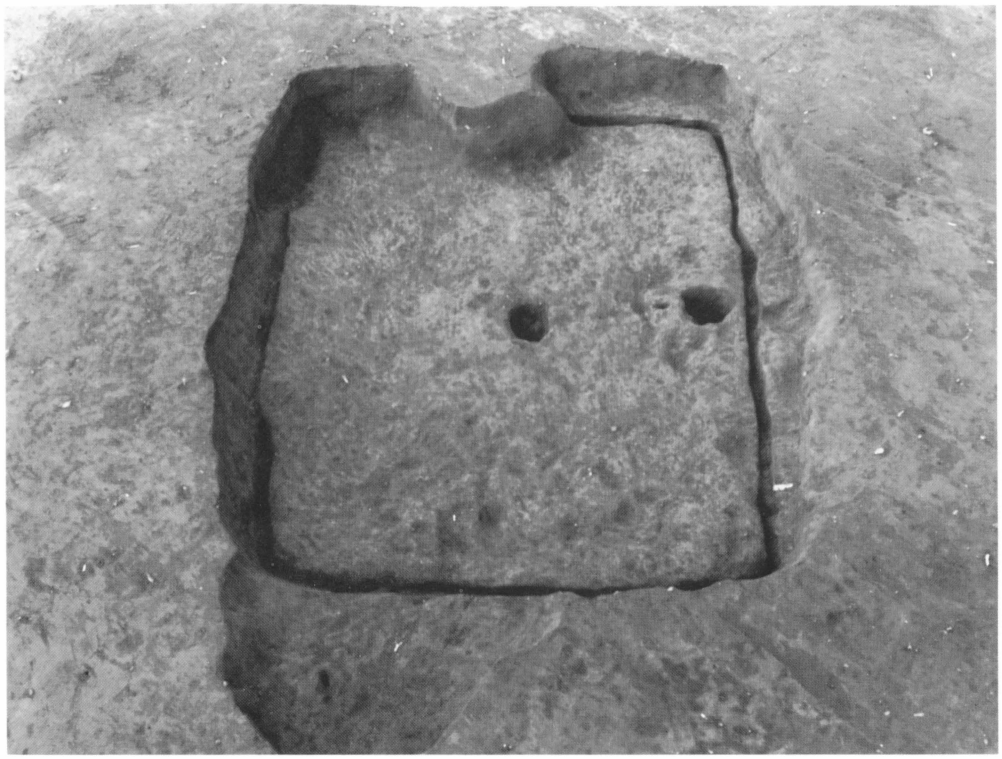
A－7号跡



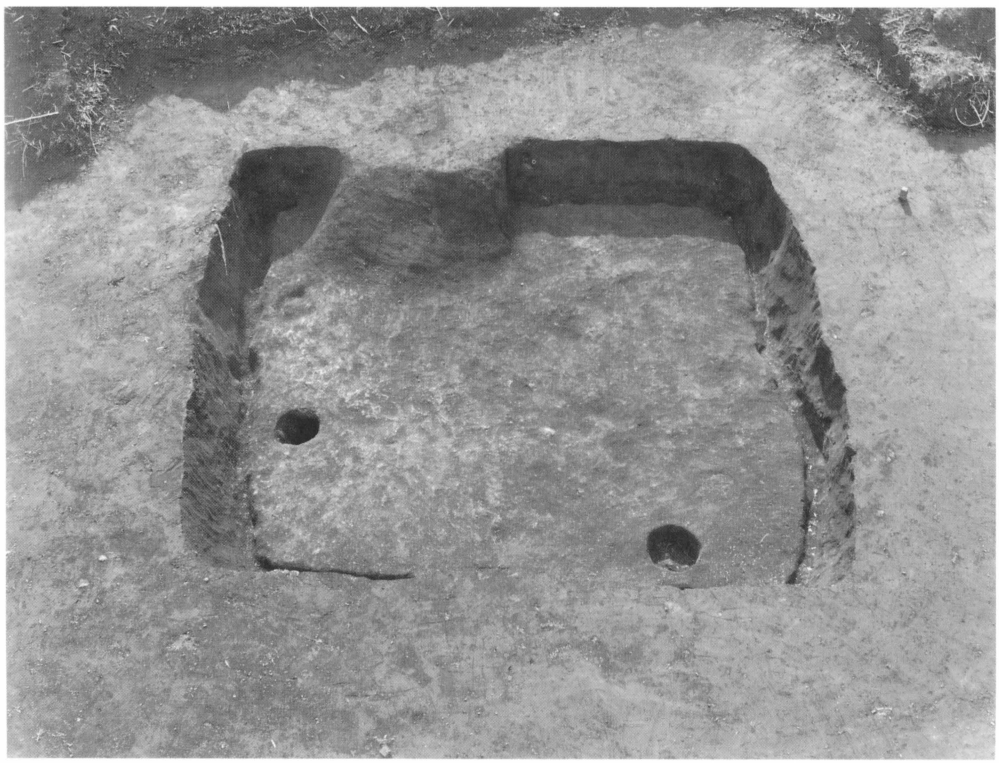
A－8号跡



A－9号跡



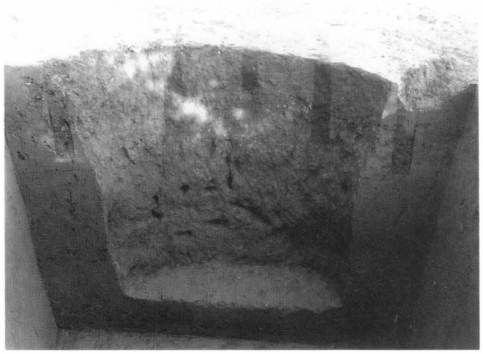
A－10号跡



A－11号跡

A－12号跡

A－13号跡

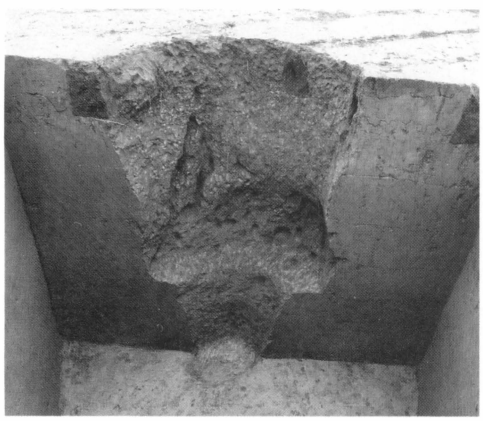


B－1号跡

B－1号跡土層断面

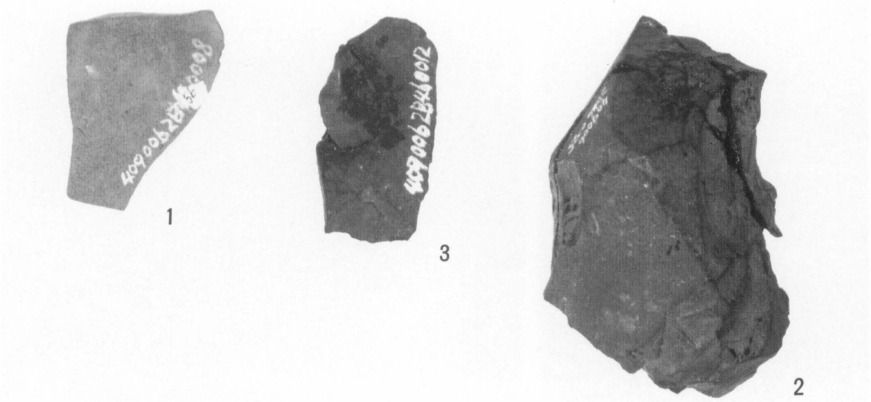
B－2号跡

B－3号跡



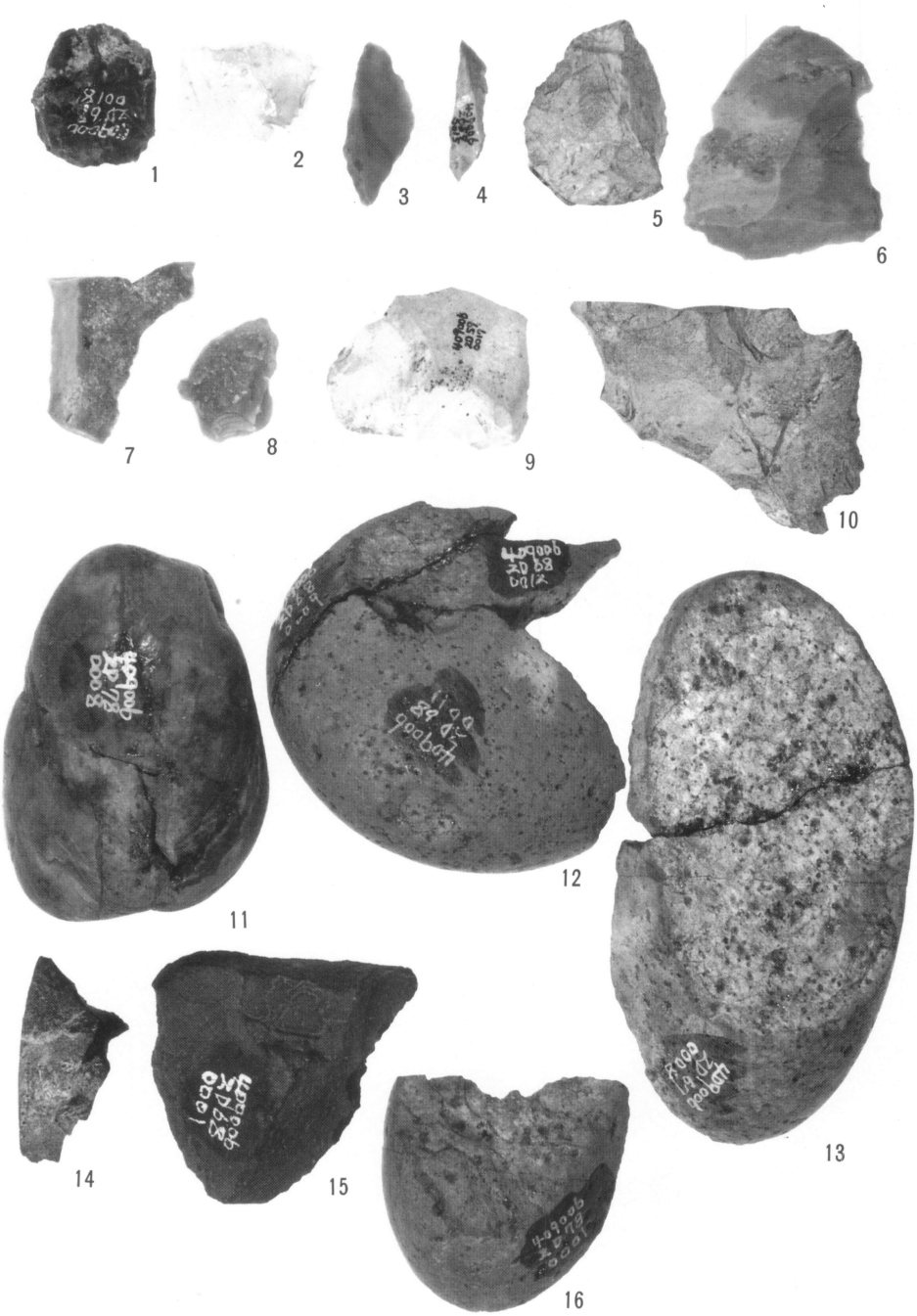
B－4号跡

B－4号跡土層断面

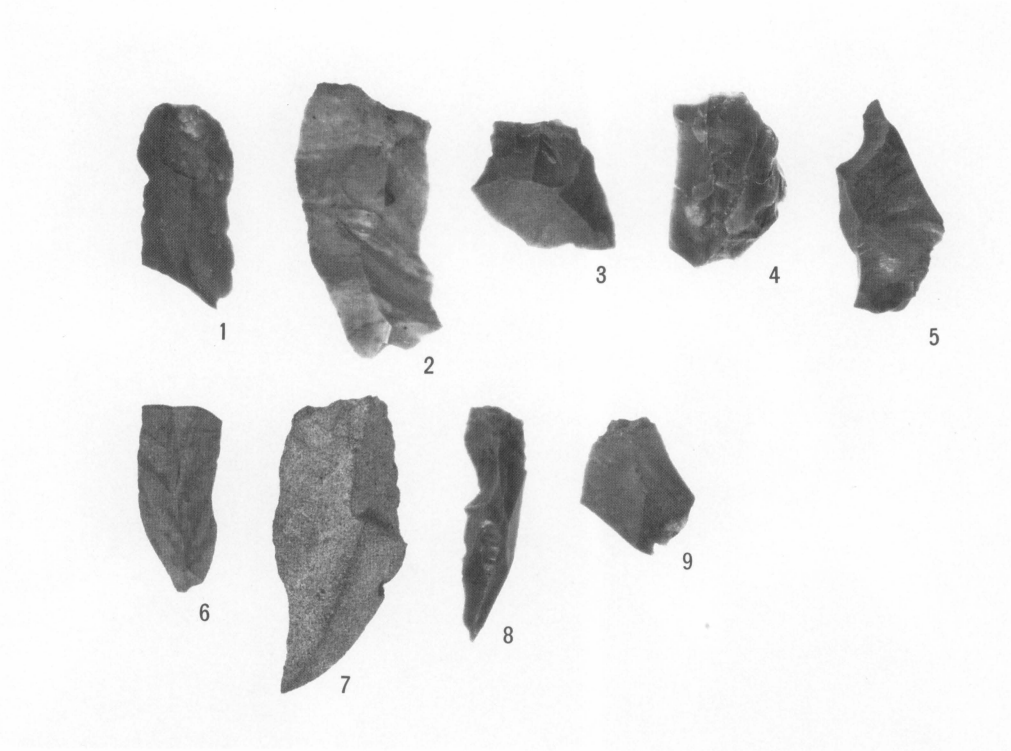


先土器時代遺物（A－2群）

先土器時代遺物（B－3群）



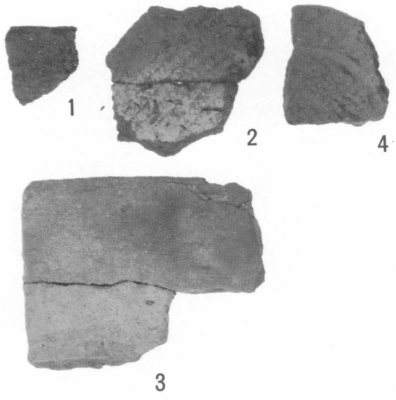
先土器時代遺物（B－1群）

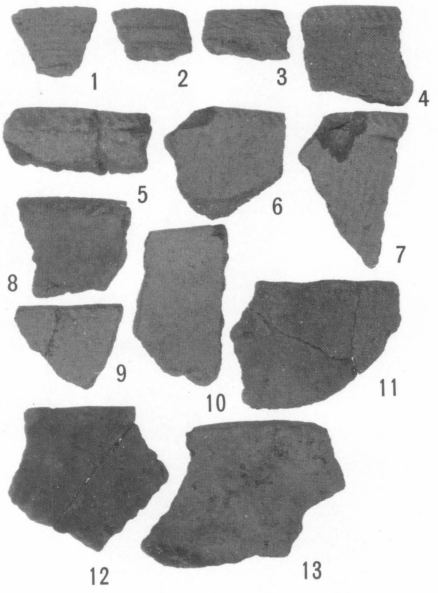


先土器時代遺物（B－2群）

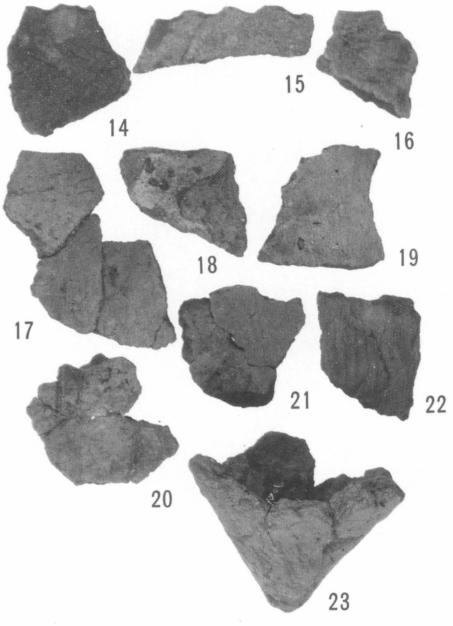
A区包含層出土遺物

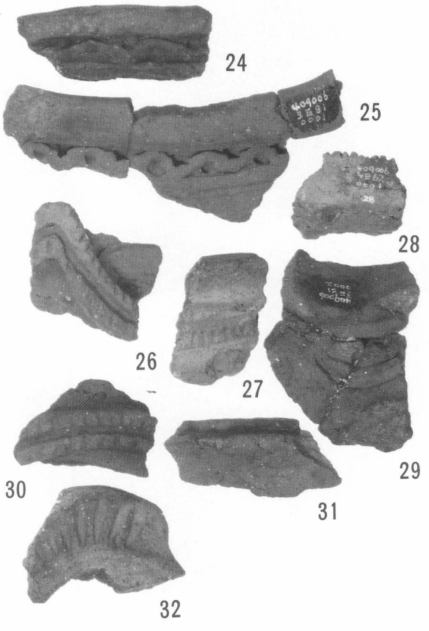
No. 2遺跡



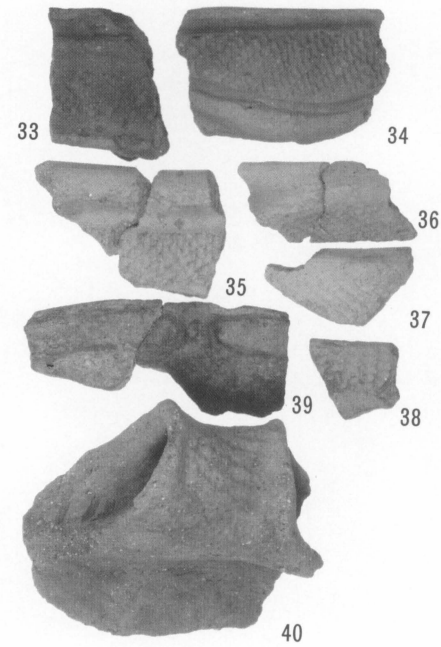


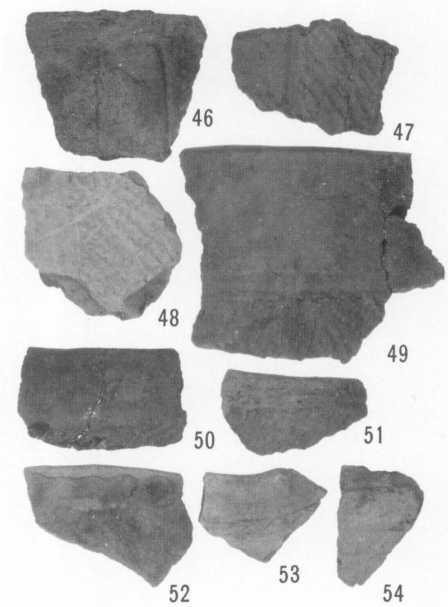
A区包含層出土遺物

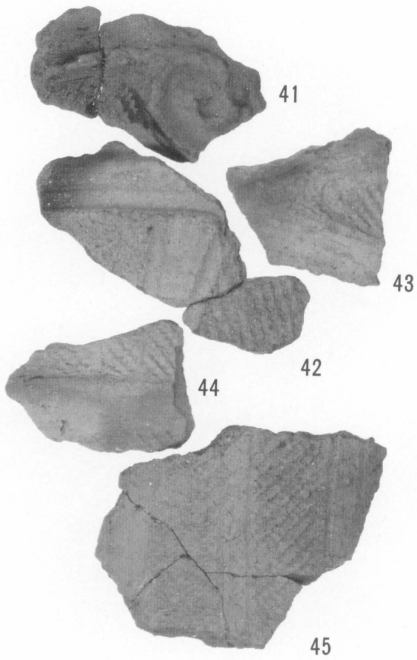


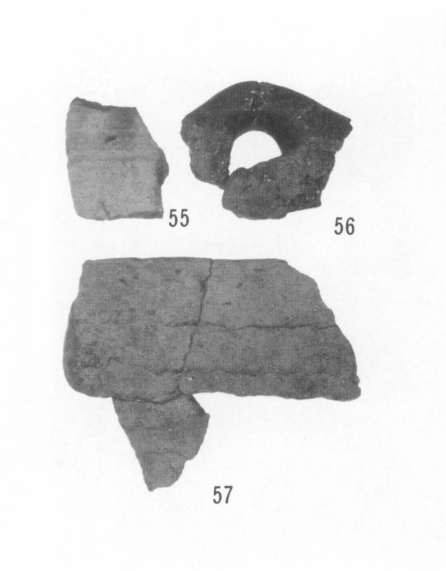


B区包含層出土遺物


33
34
35
36
37
38
39
40

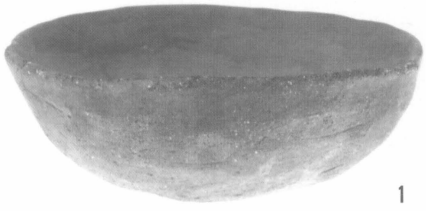

46
47
48
49
50
51
52
53
54


41
42
43
44
45


55
56
57

B区包含層出土遺物

A－1号跡出土遺物

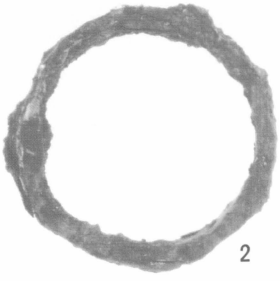


A－5号跡出土遺物

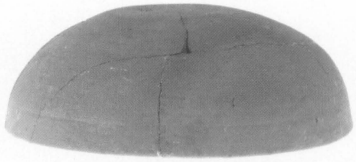
A－2号跡出土遺物

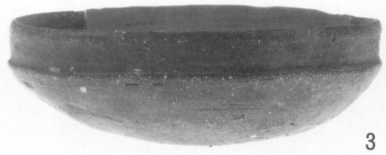
A－6号跡出土遺物

A－12号跡出土遺物



A－3号跡出土遺物


1

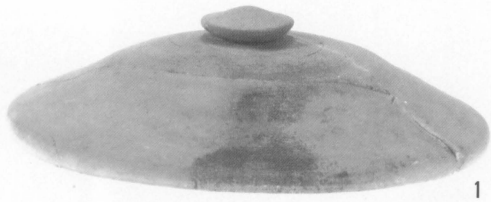

3

4

5

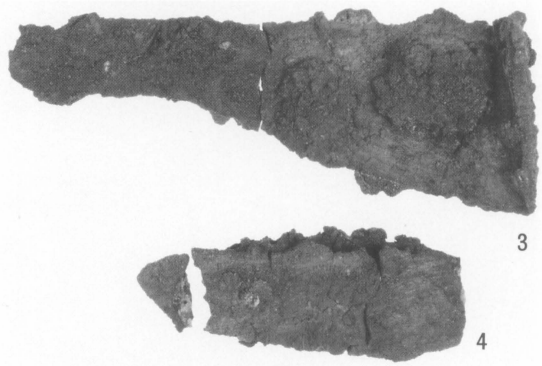
A－7号跡出土遺物

1


1

A－9号跡出土遺物

2


3
4

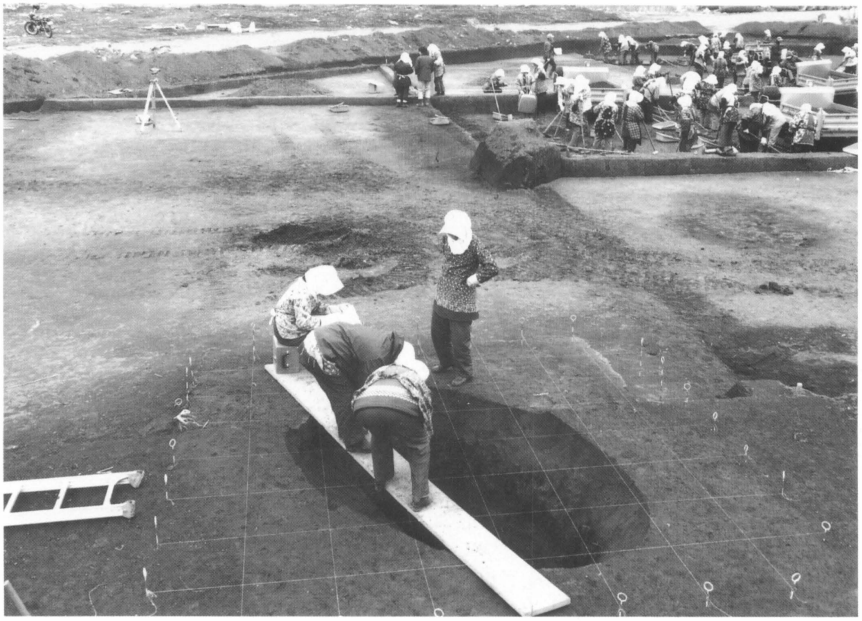
A－10号跡出土遺物

航空写真（東から）

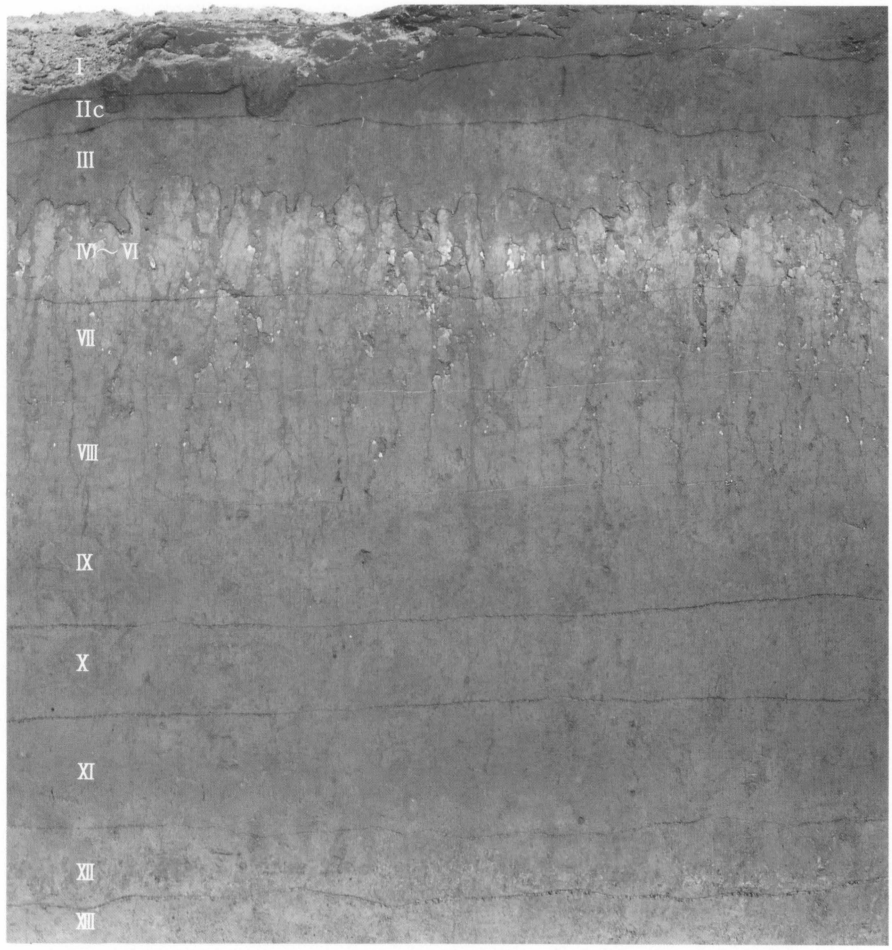
航空写真（北から）

同上（西から）

調査風景



同上



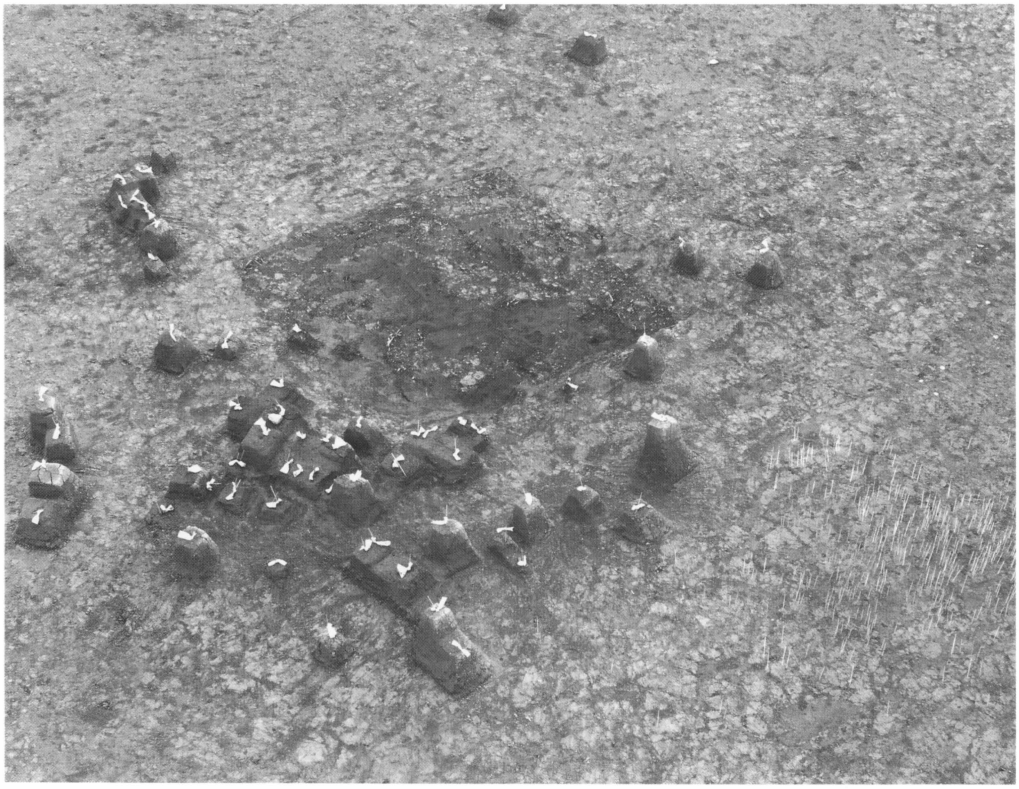
6D07　土層断面

Sブロック遺物出土状況

Rブロック遺物出土状況

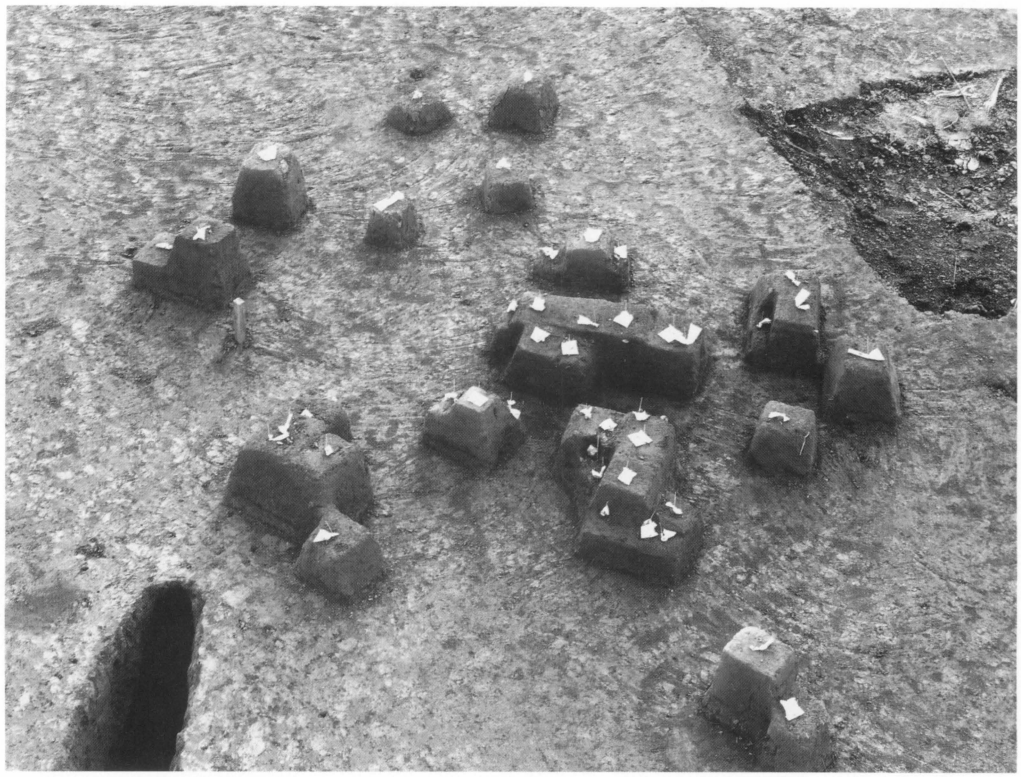
Ⅲ層主体石器群出土状況（北から）

同上（南から）



Cブロック遺物出土状況

Dブロック遺物出土状況



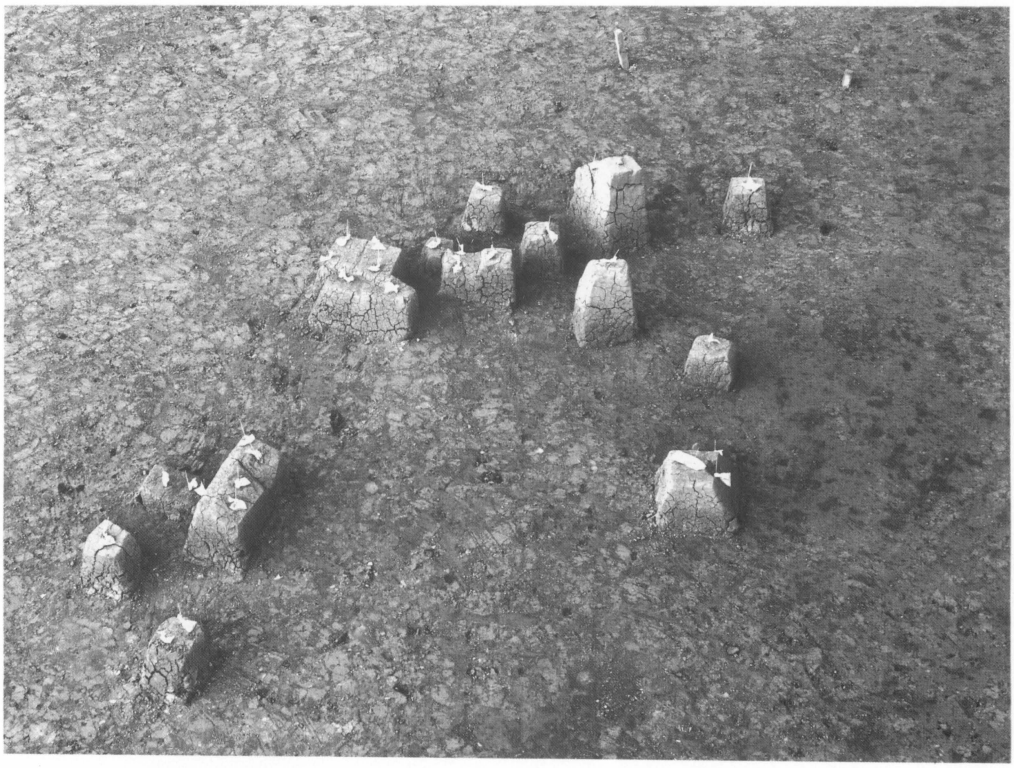
Eブロック遺物出土状況

Fブロック遺物出土状況

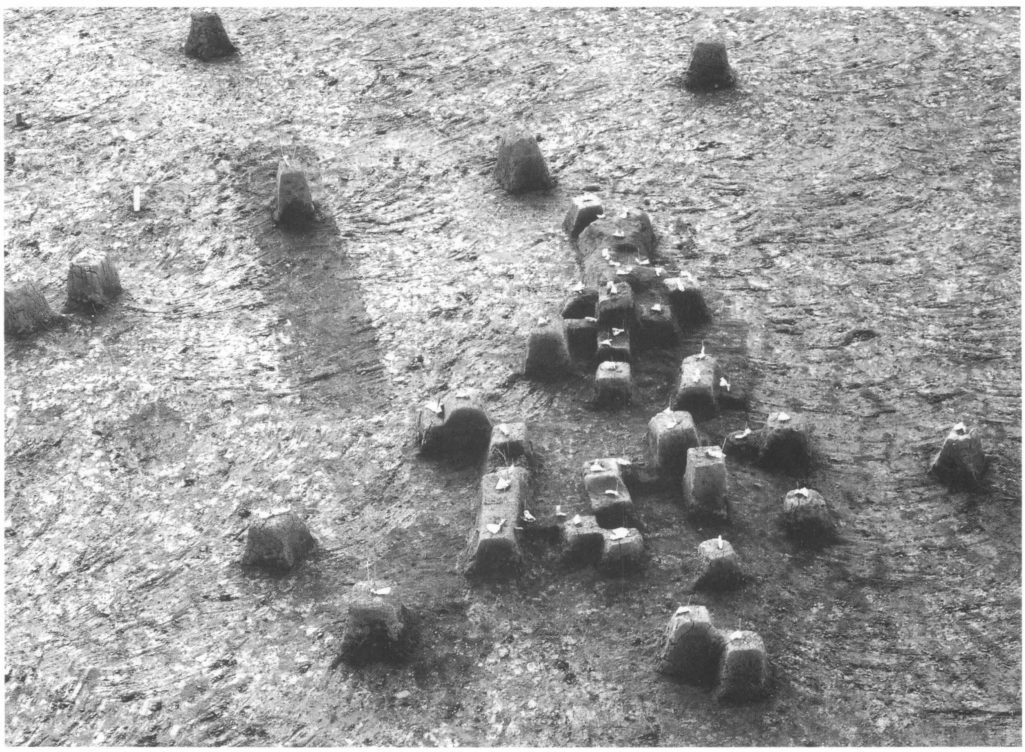
Gブロック遺物出土状況

Hブロック遺物出土状況

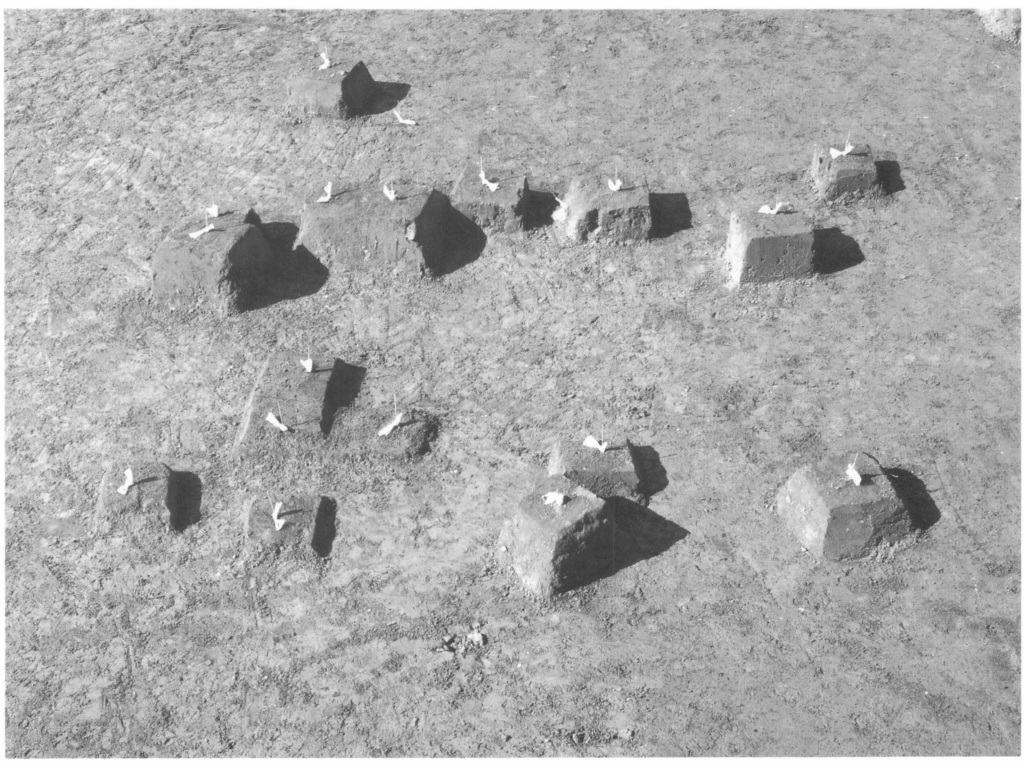
Ｊブロック遺物出土状況



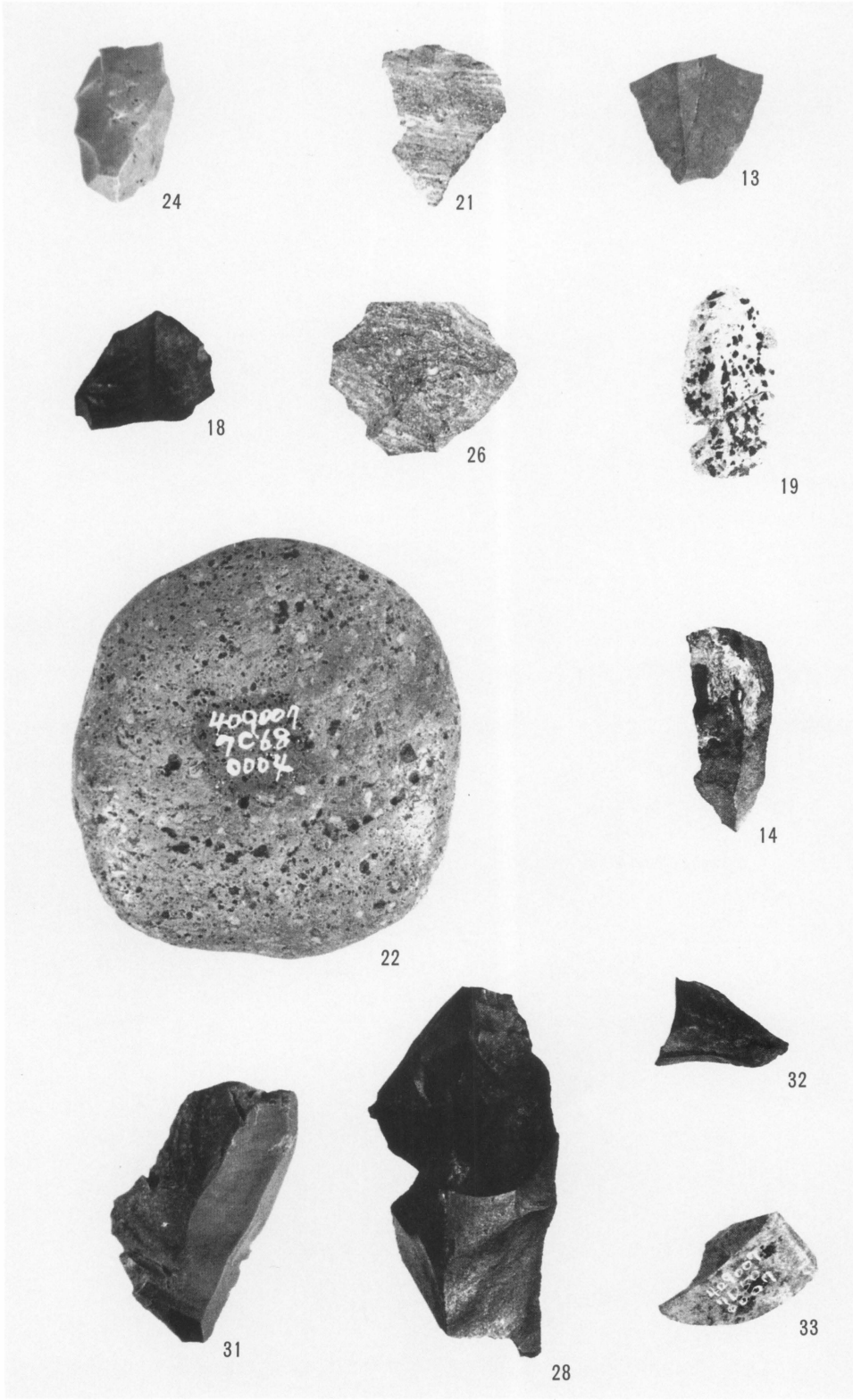
Ｋブロック遺物出土状況



Lブロック遺物出土状況

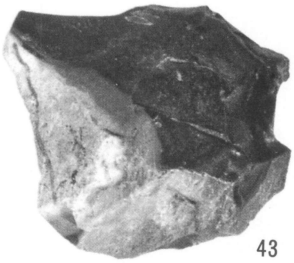


Pブロック遺物出土状況

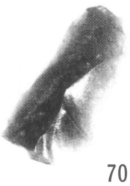


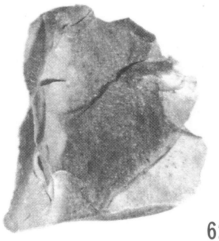
Ⅶ層主体石器群

71

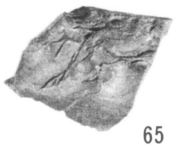

43

72


70

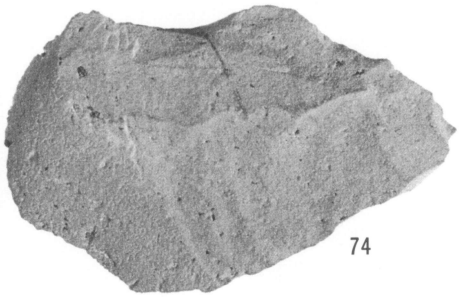

62

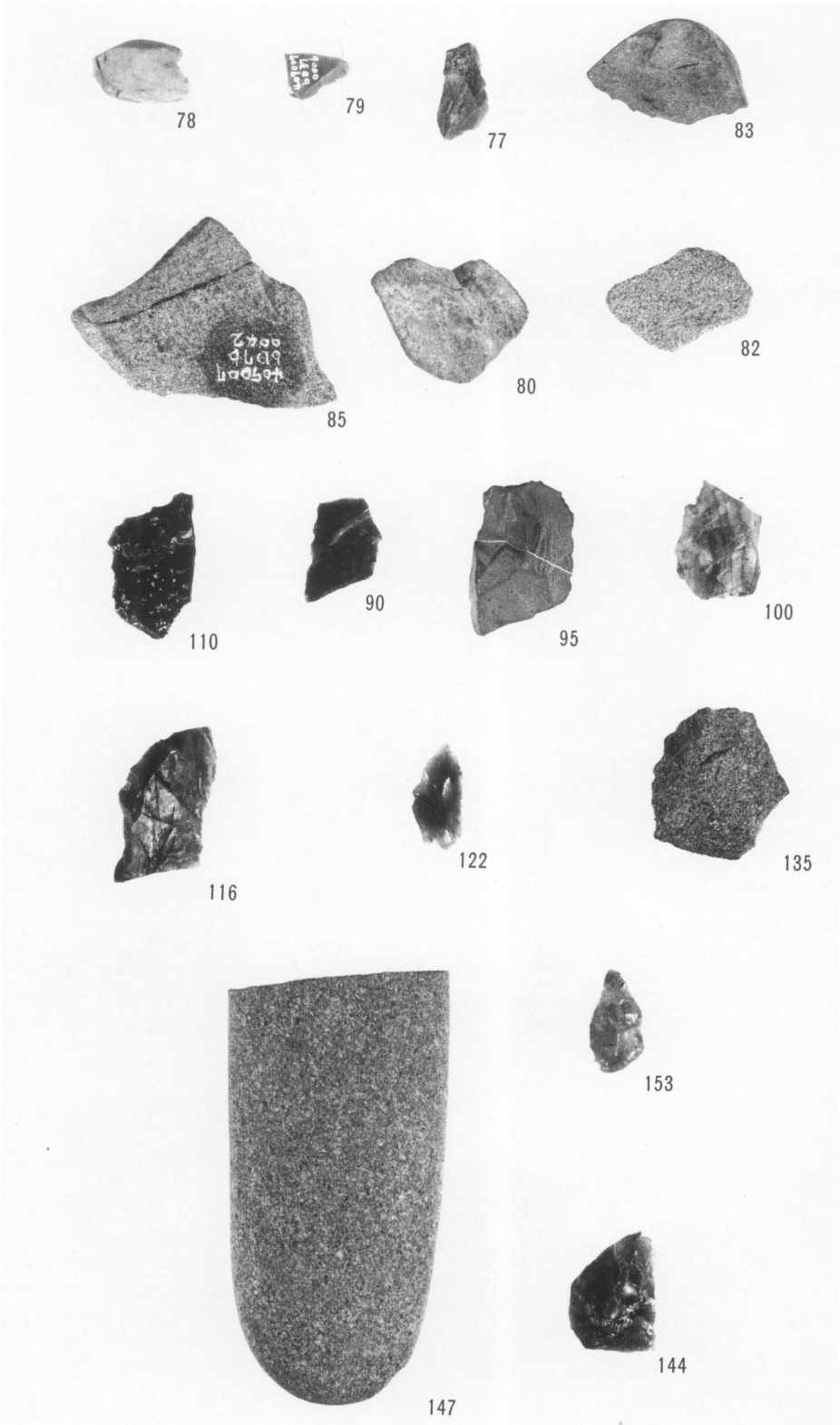
52


65

76

73


74



A～Fブロック出土石器

176

172

243

274

263

178

192

269

284

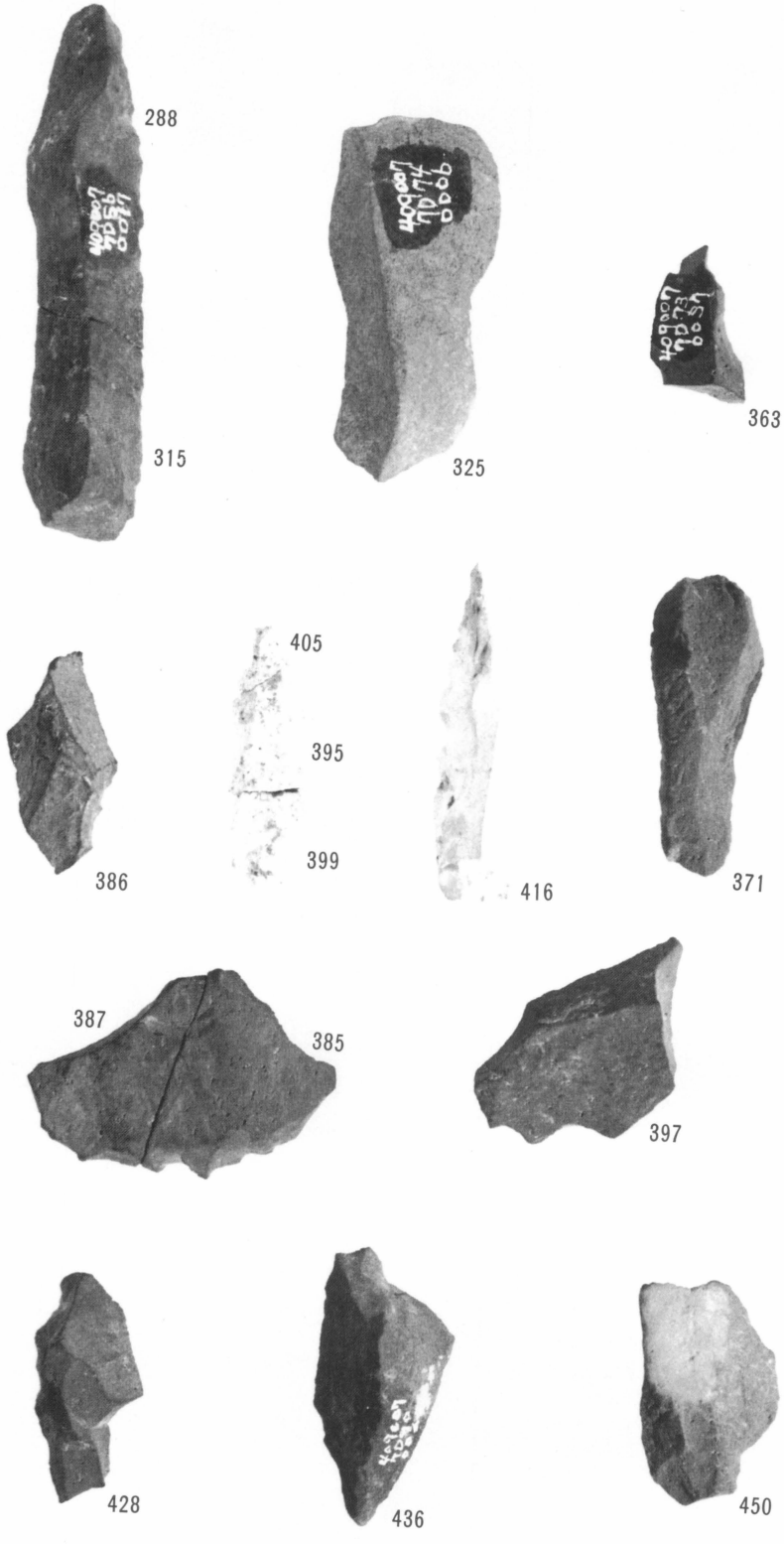
289

293

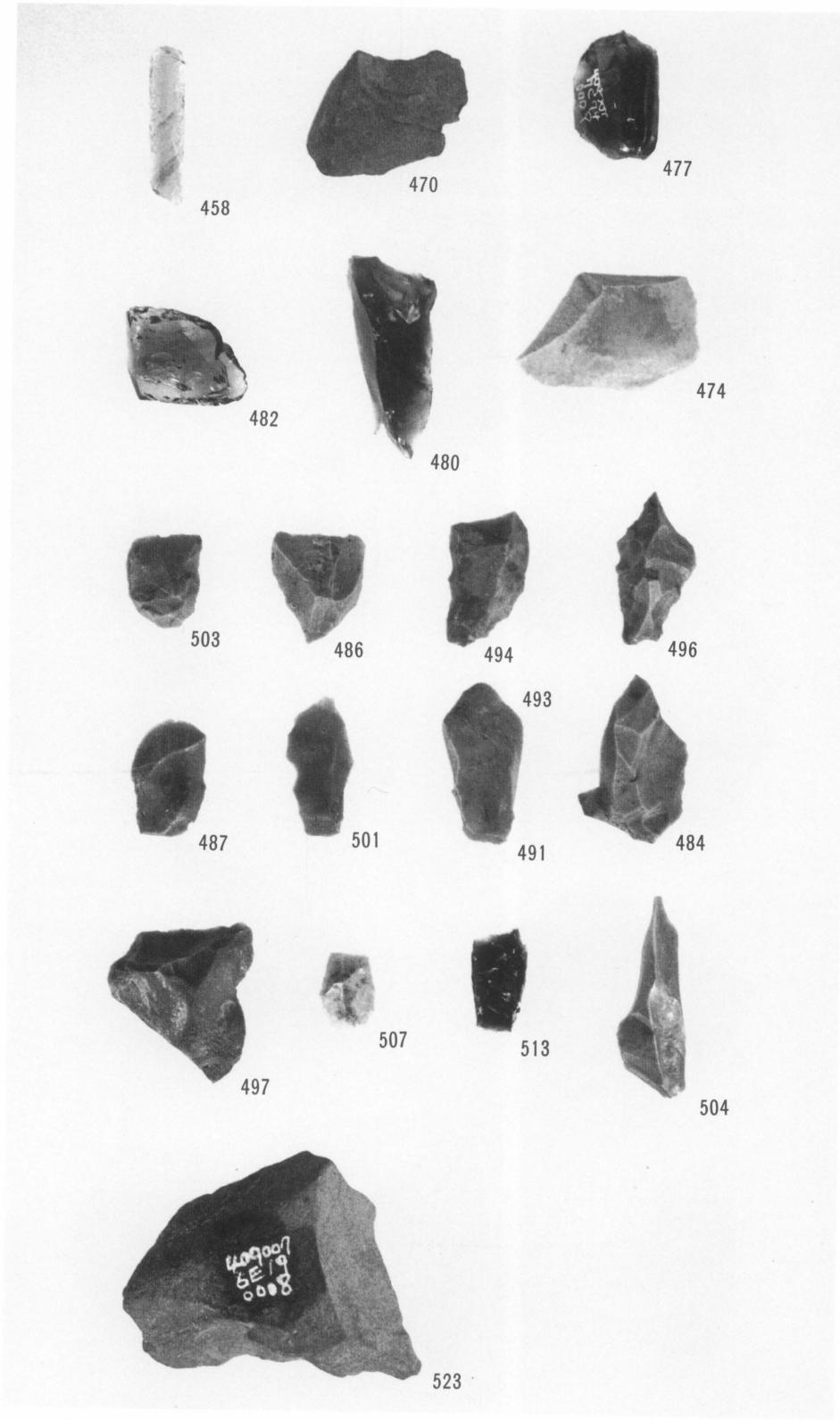
292

G・Hブロック出土石器

Gブロック出土石器

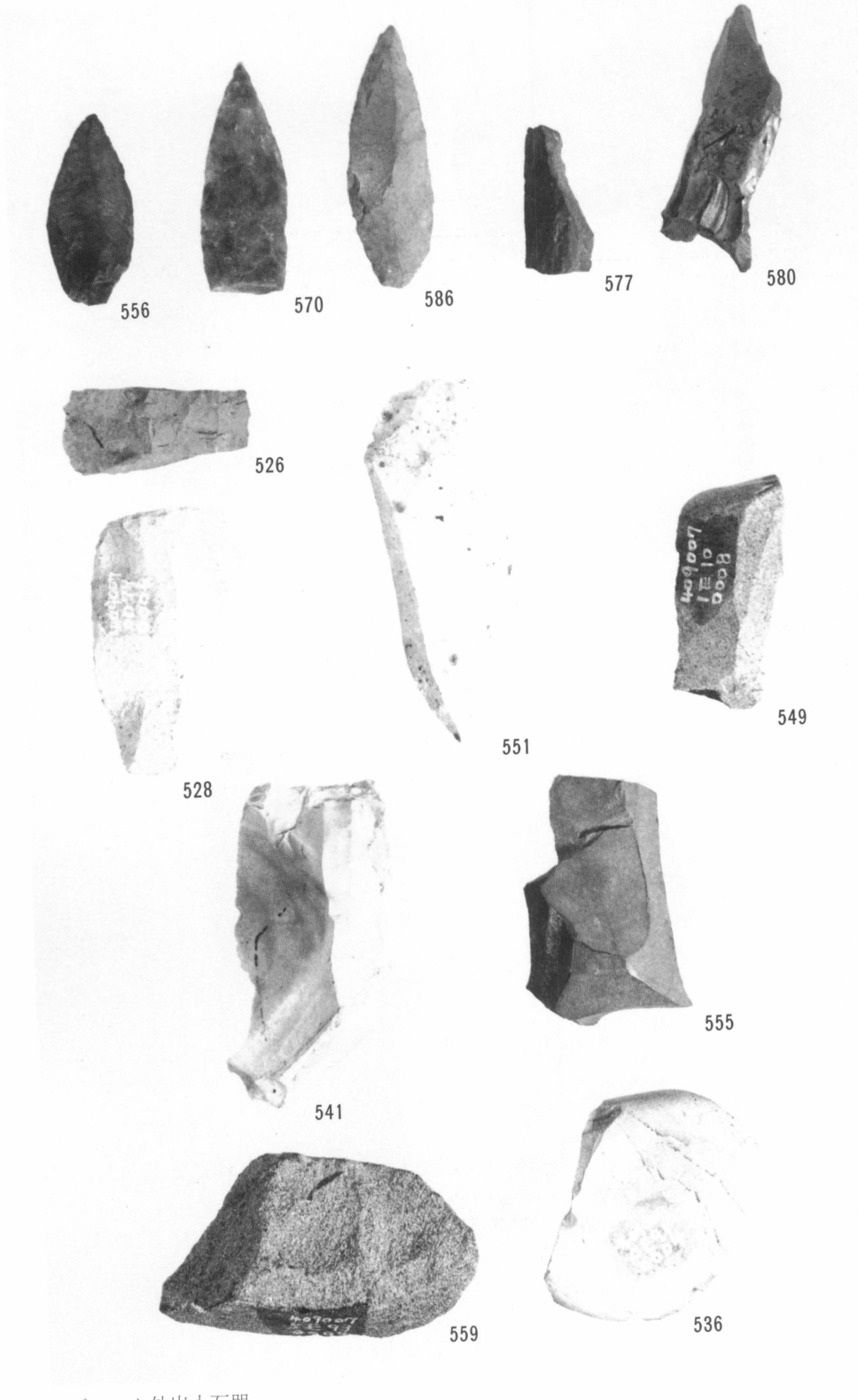


H～Mブロック出土石器

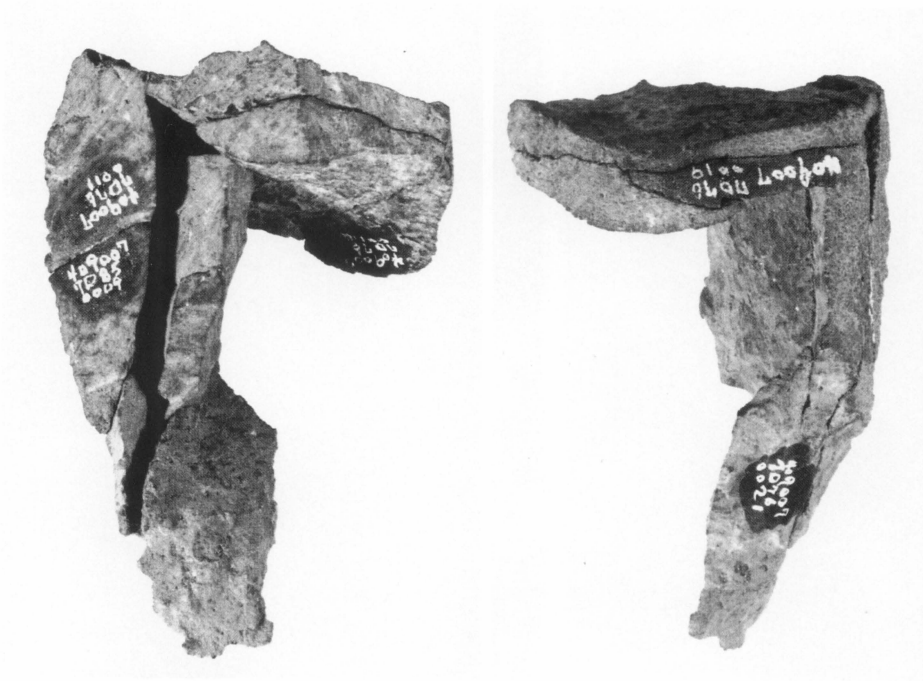


N～Q・Tブロック出土石器

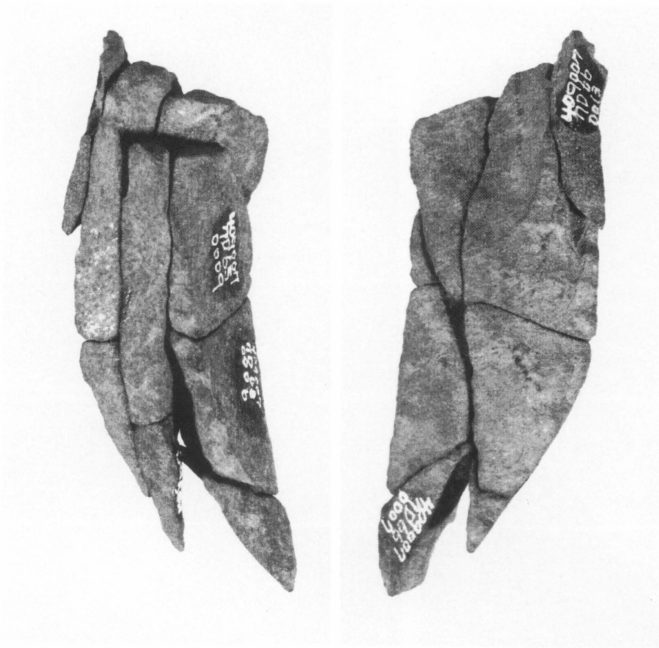
No. 10遺跡



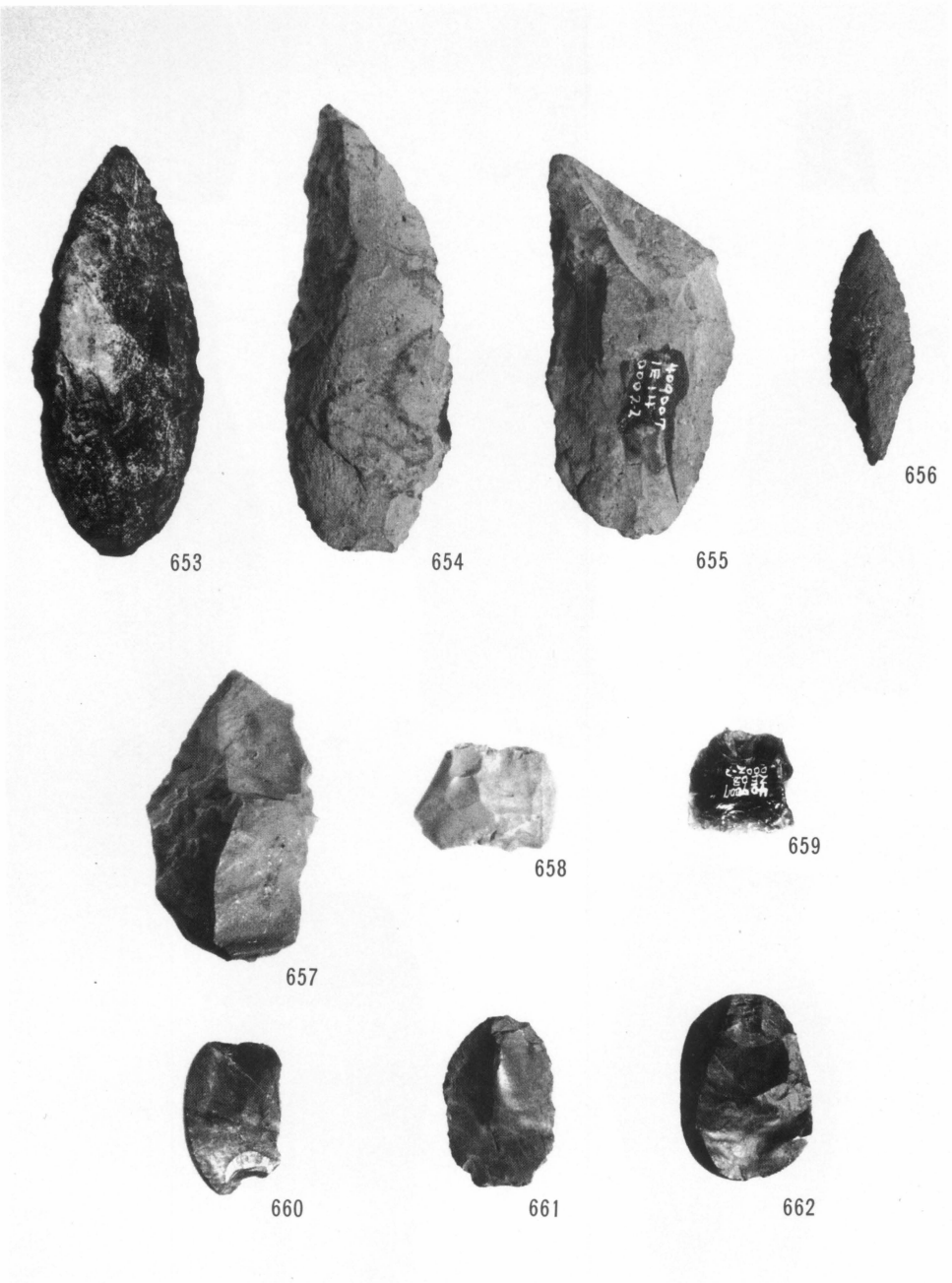
ブロック外出土石器



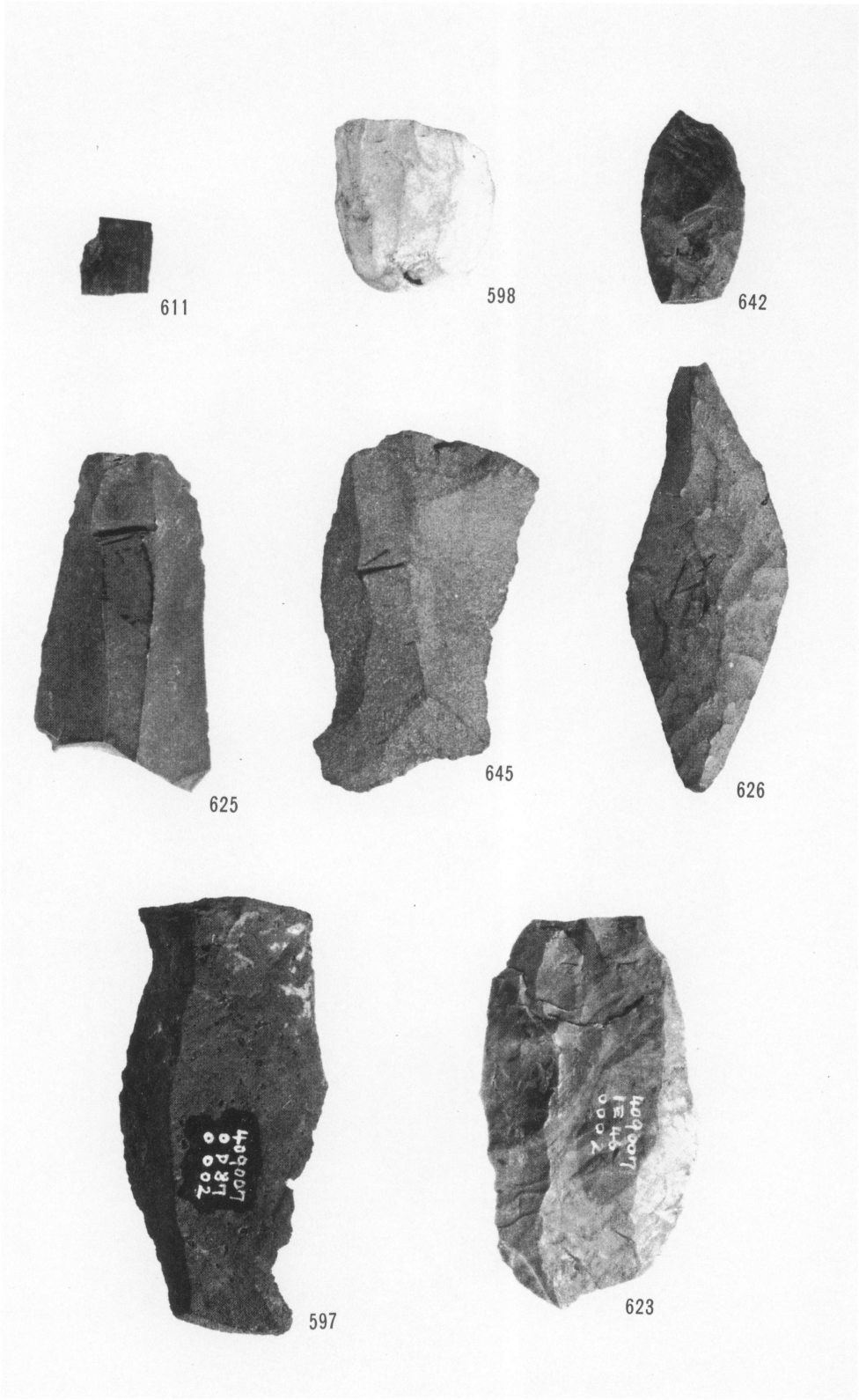
接合資料B



同A



Ⅲ層直上石器群

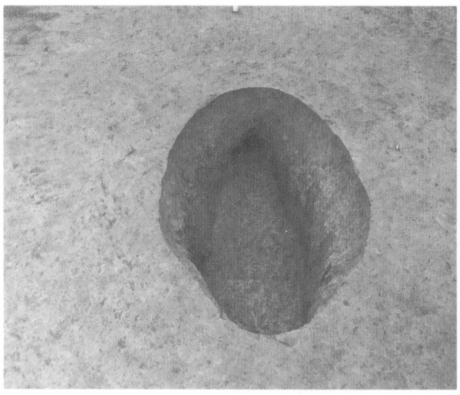


Ⅰ・Ⅱ層出土先土器時代石器群

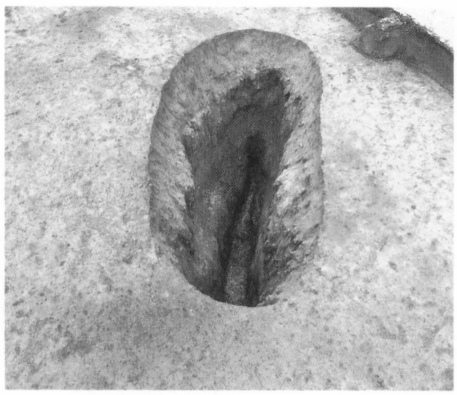
礫群構成礫接合例

1号

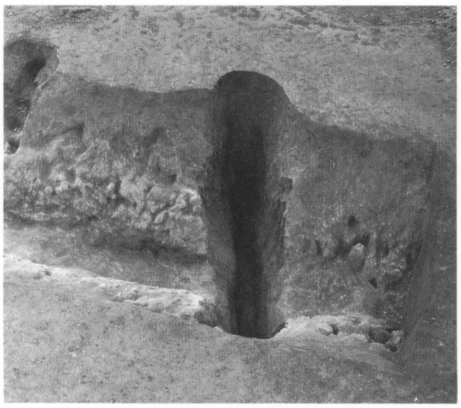
4号



2号



5号



3号

6号

陥し穴状土壙

8号

13号

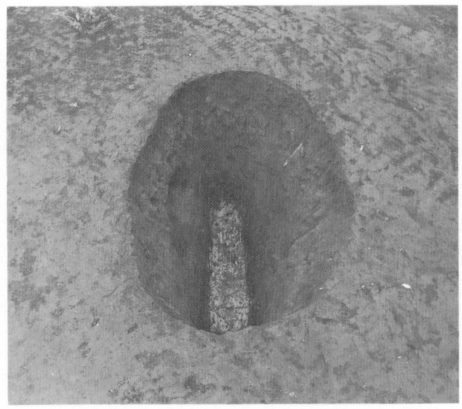
10号

19号

11号

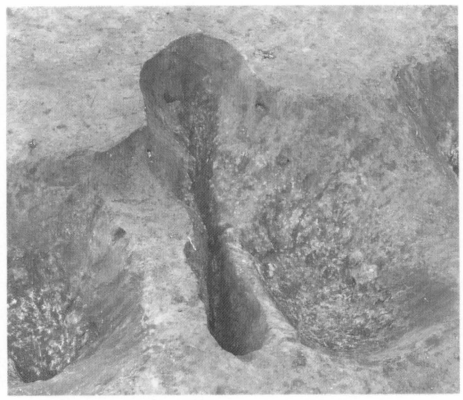
20号

陥し穴状土壙

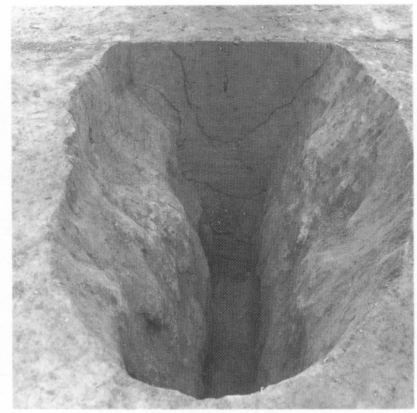


21号

26号

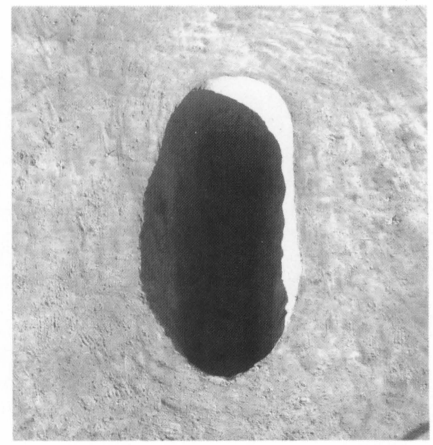


23号



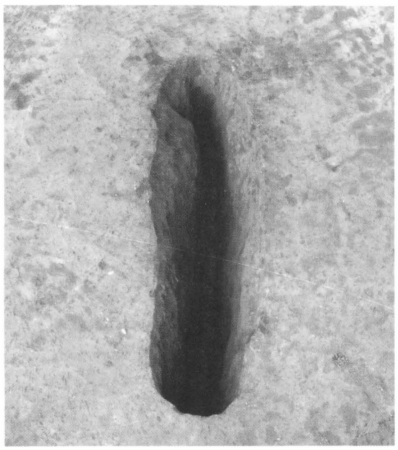
26号土層断面

24号



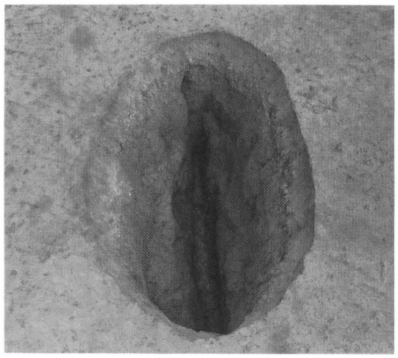
27号

陥し穴状土壙

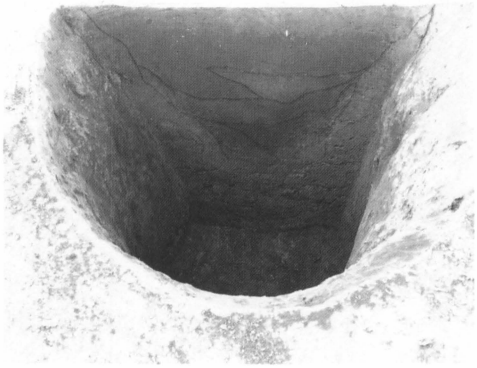


28号

30号

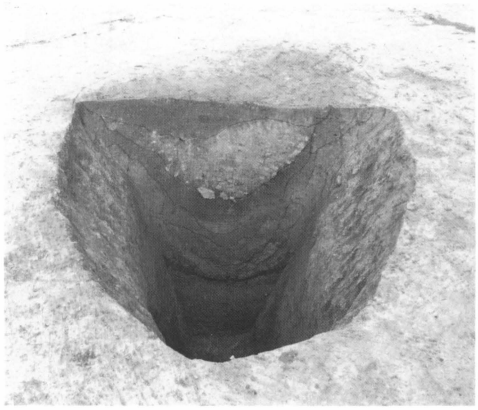


29号



30号土層断面

34号



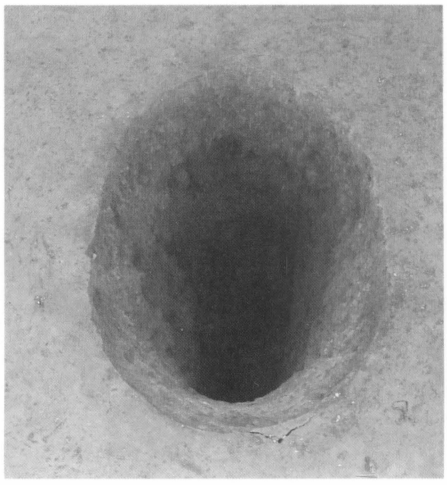
35号

陥し穴状土壙

36号

38号

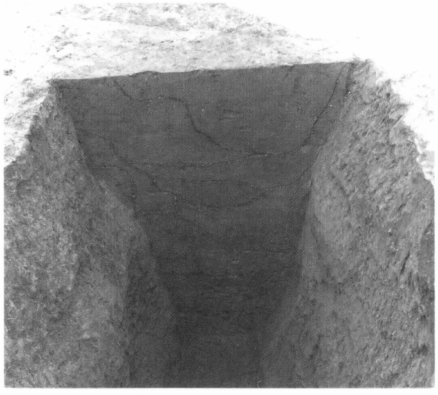
37号



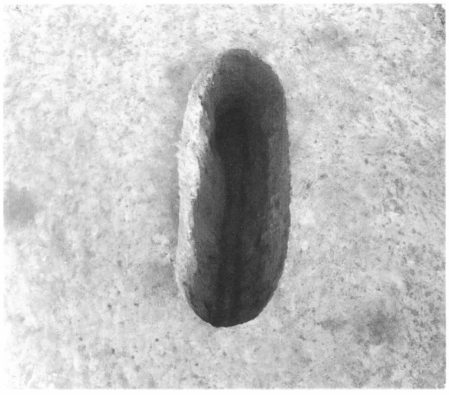
39号

42号

陥し穴状土壙

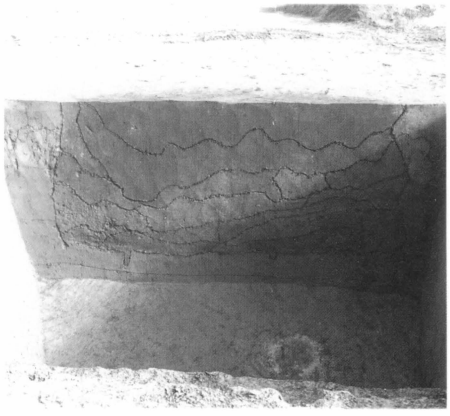


43号

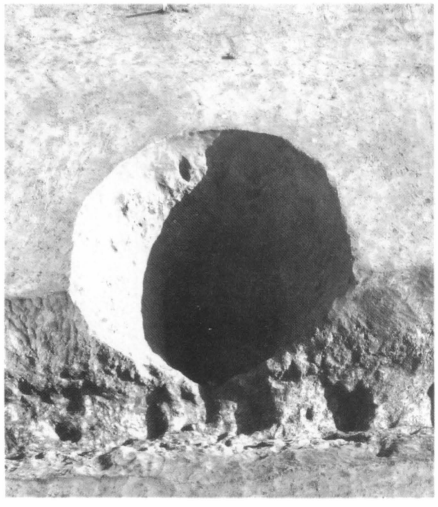


49号

47号



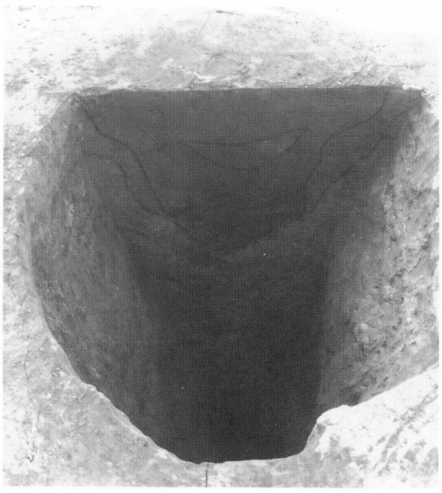
50号土層断面



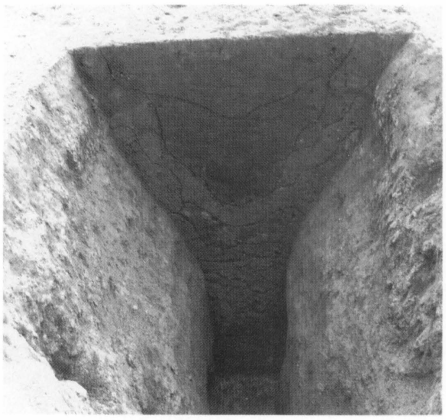
48号
陥し穴状土壙

50号

52号

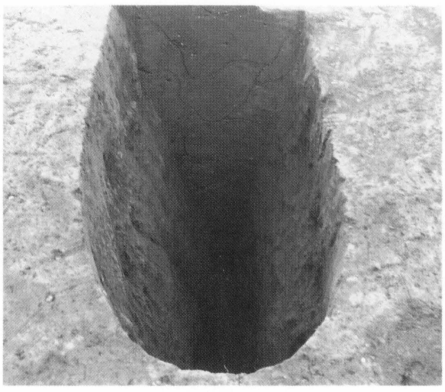


57号

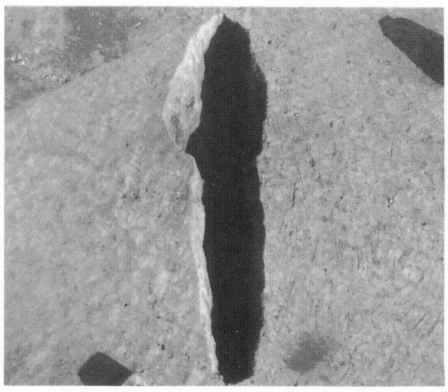


54号

64号

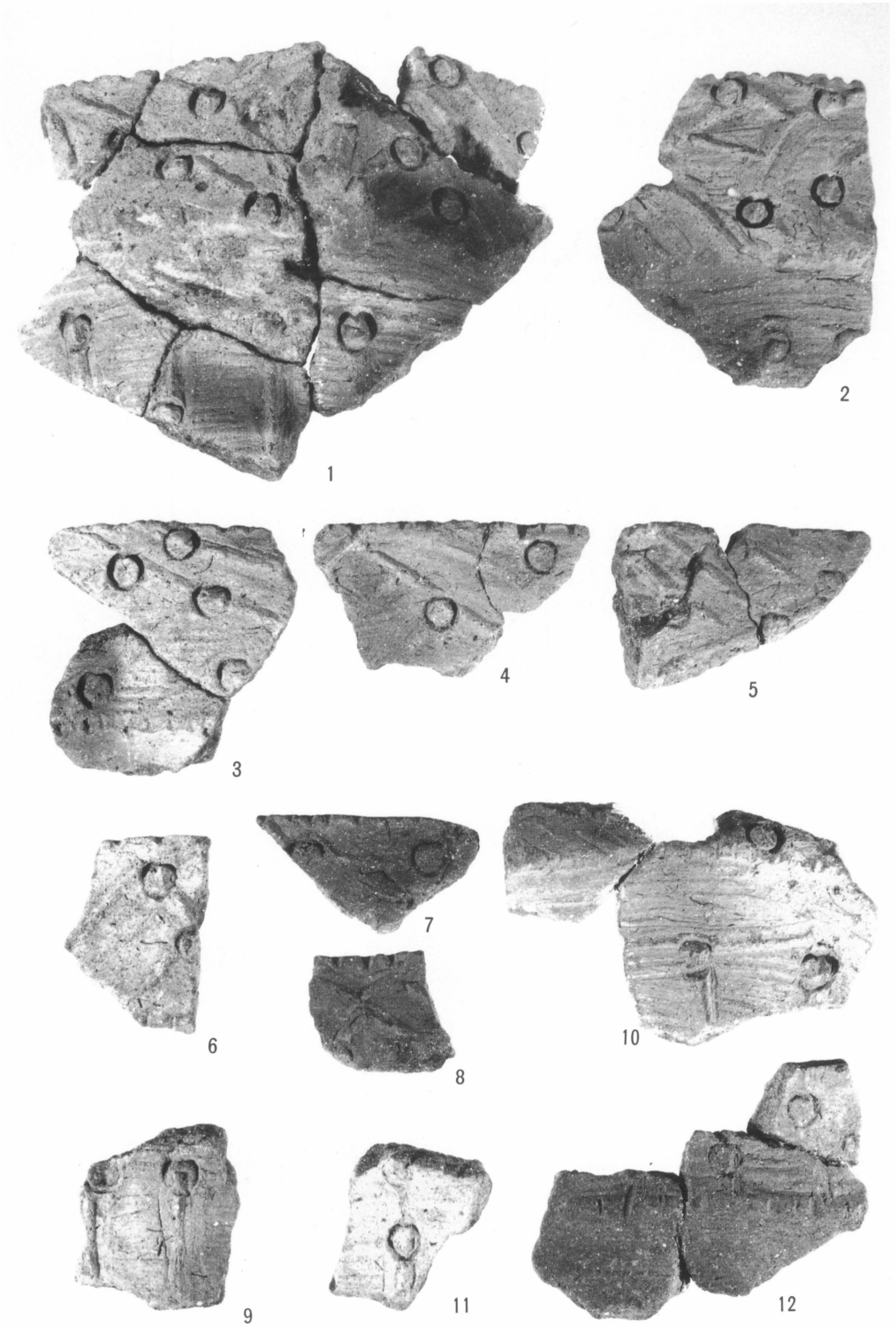


55号



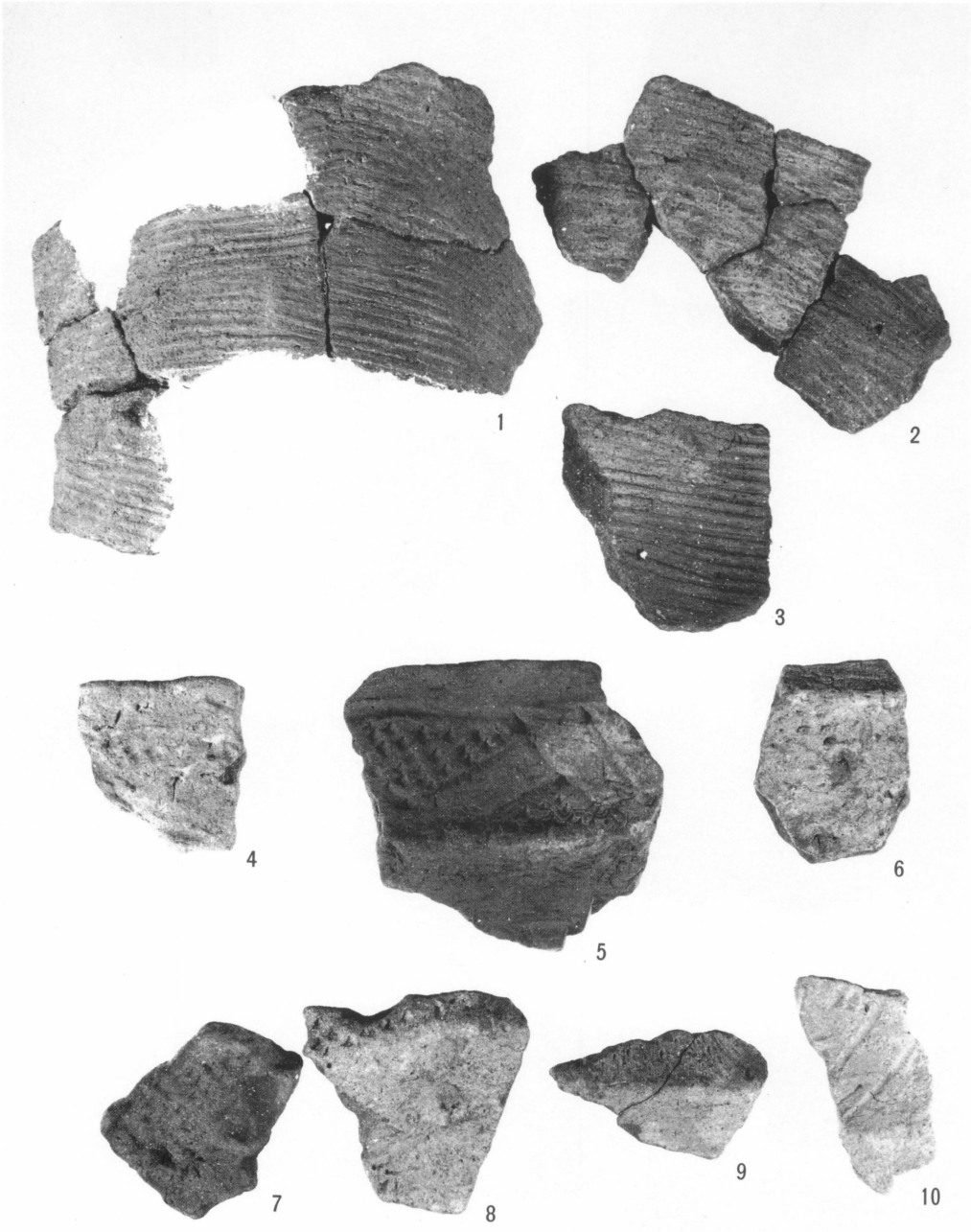
66号

陥し穴状土壙



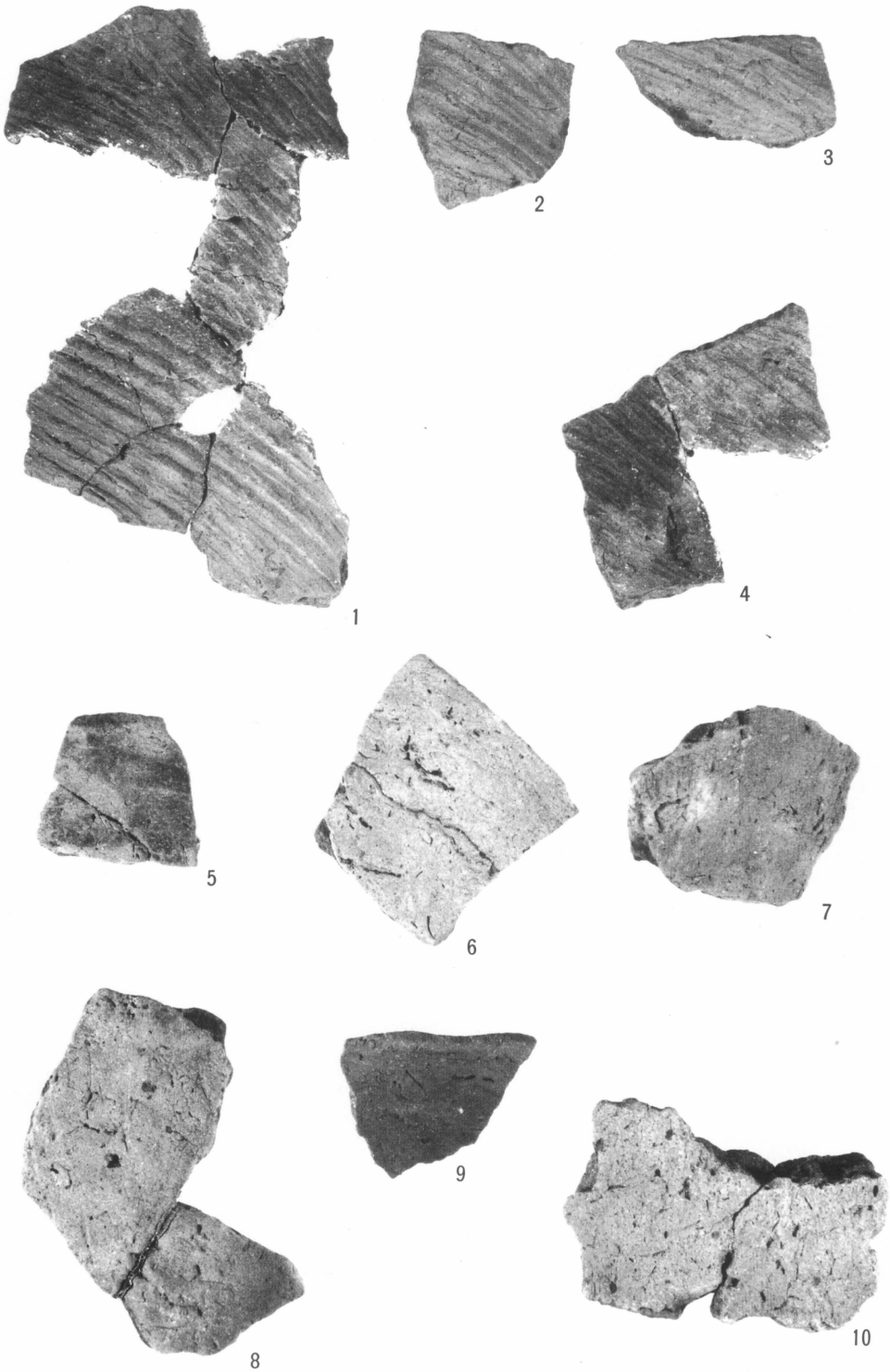
第１群土器 (1)

第１群土器 (2)

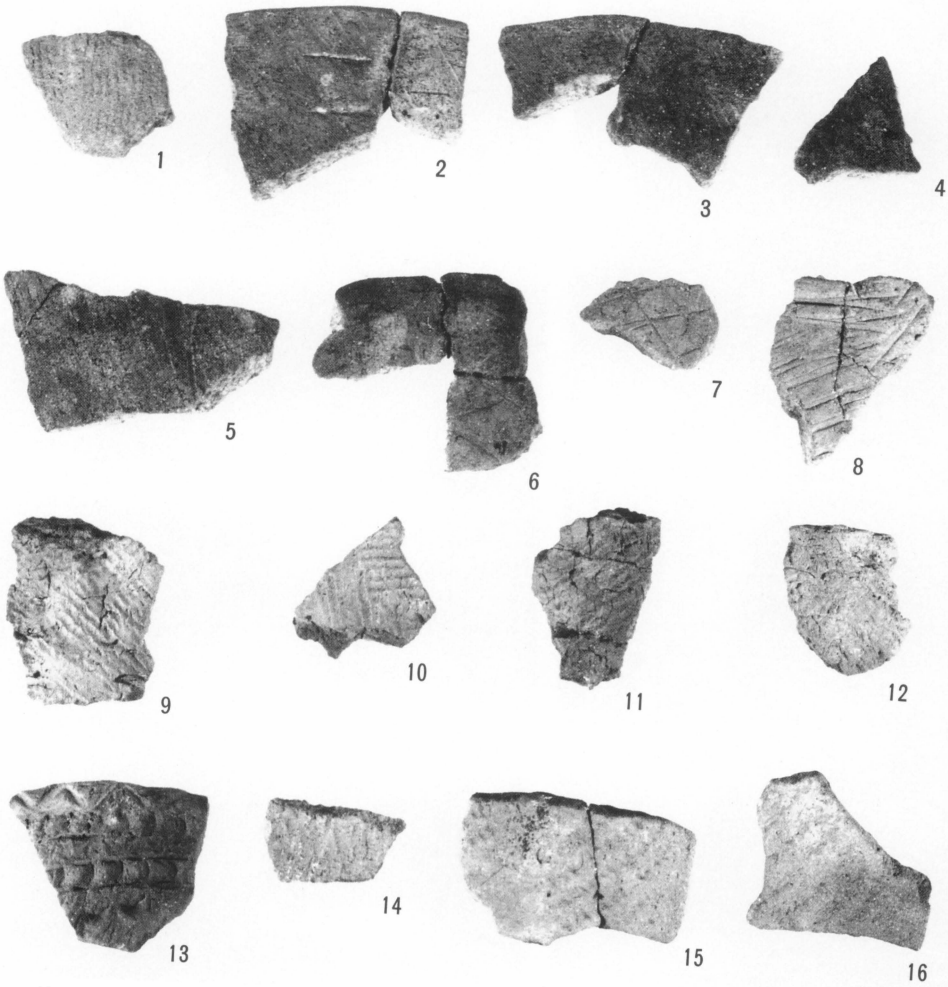


第1群土器 (3)

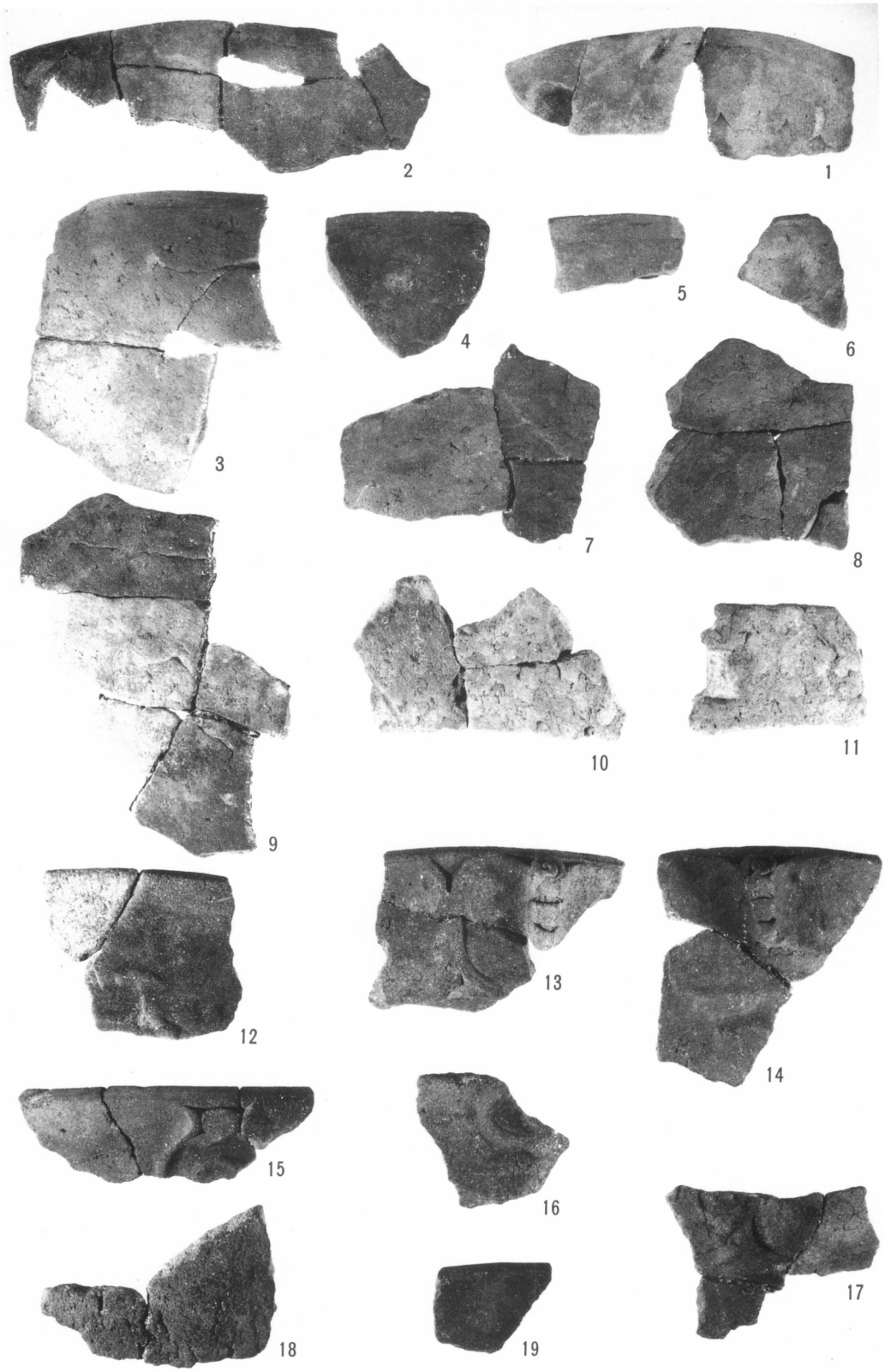
第1群土器 (4)



第１群土器 (5)

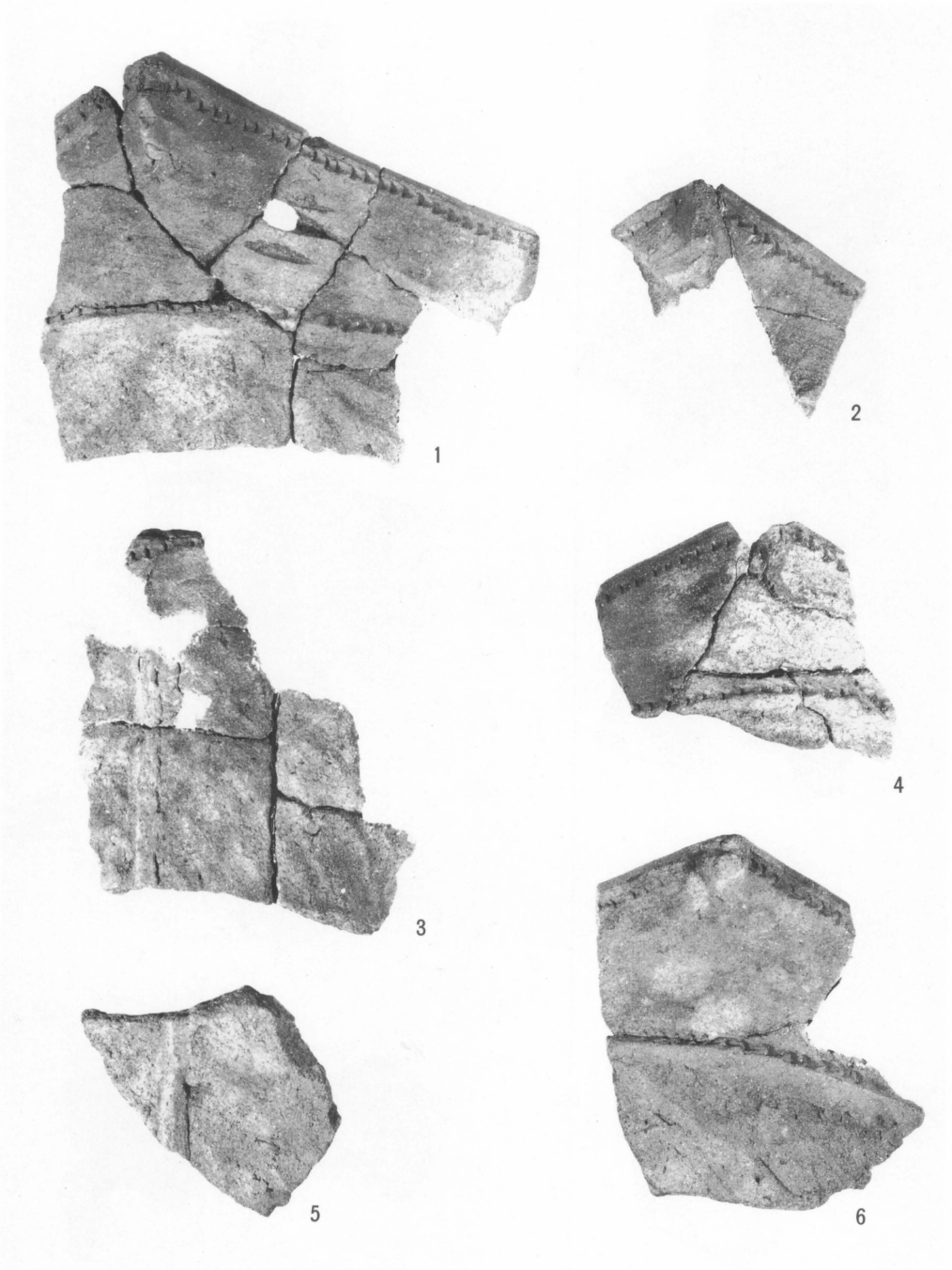


第1・2群土器

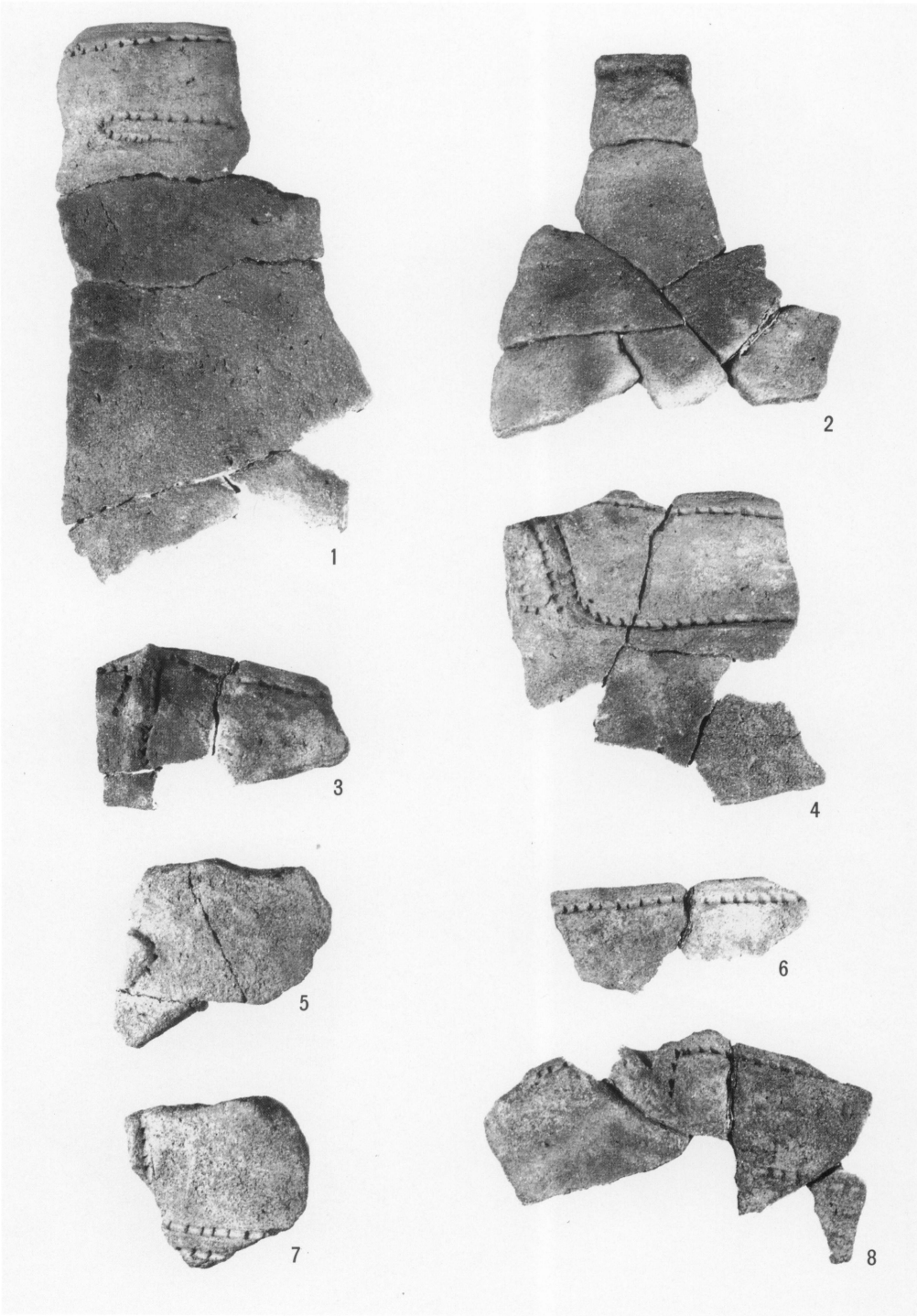


第3群土器 (1)

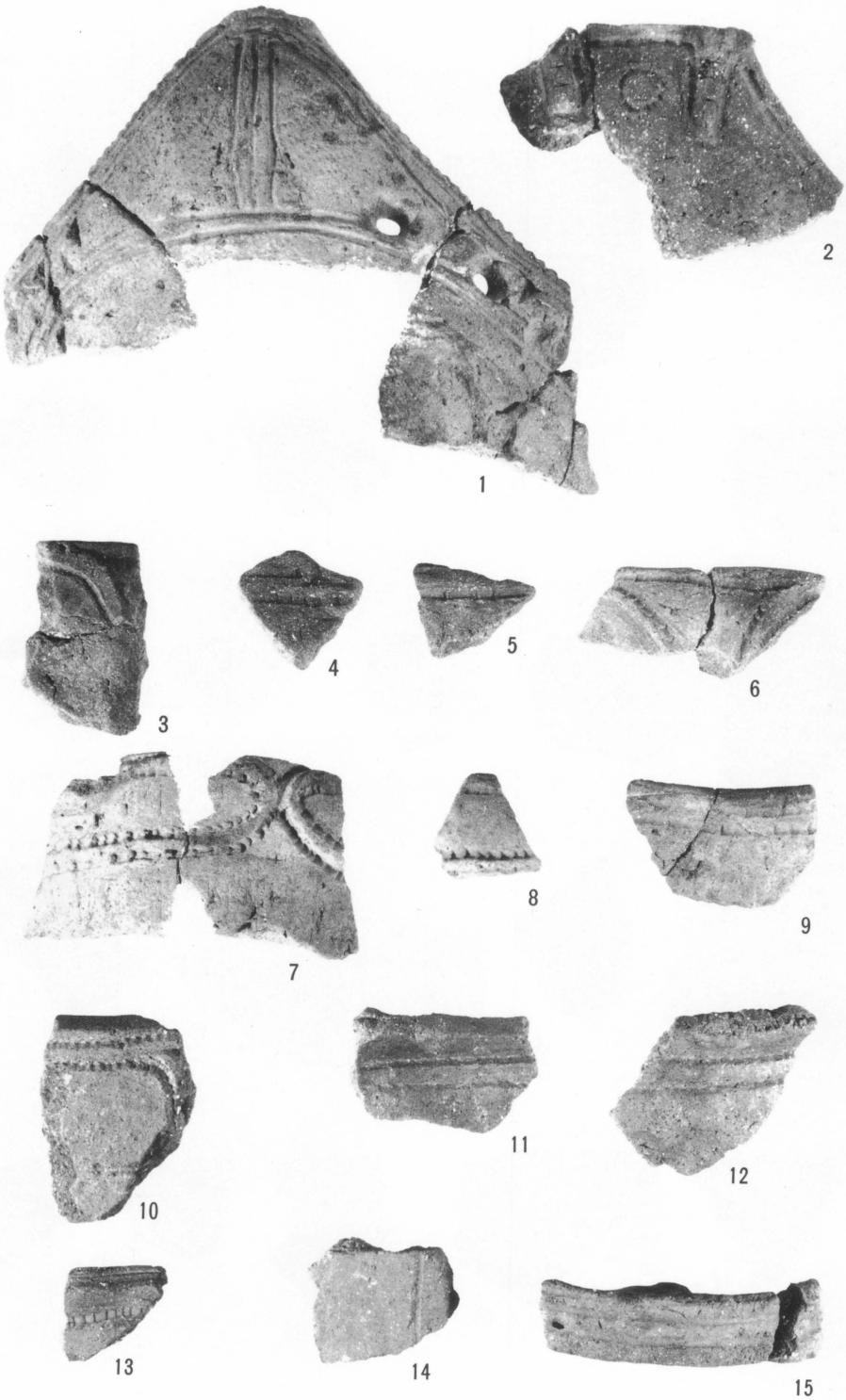
第３群土器 (2)



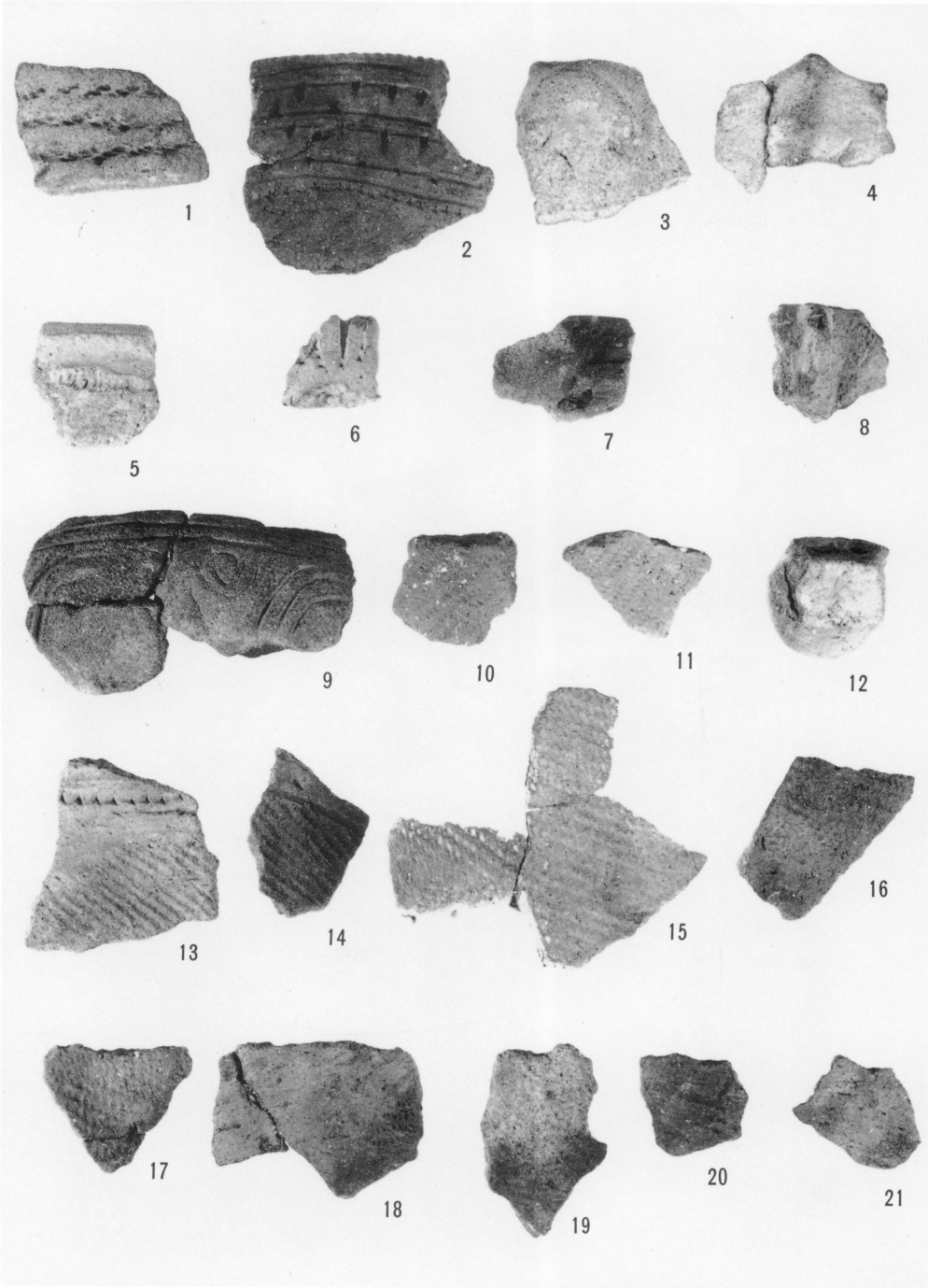
第3群土器 (3)



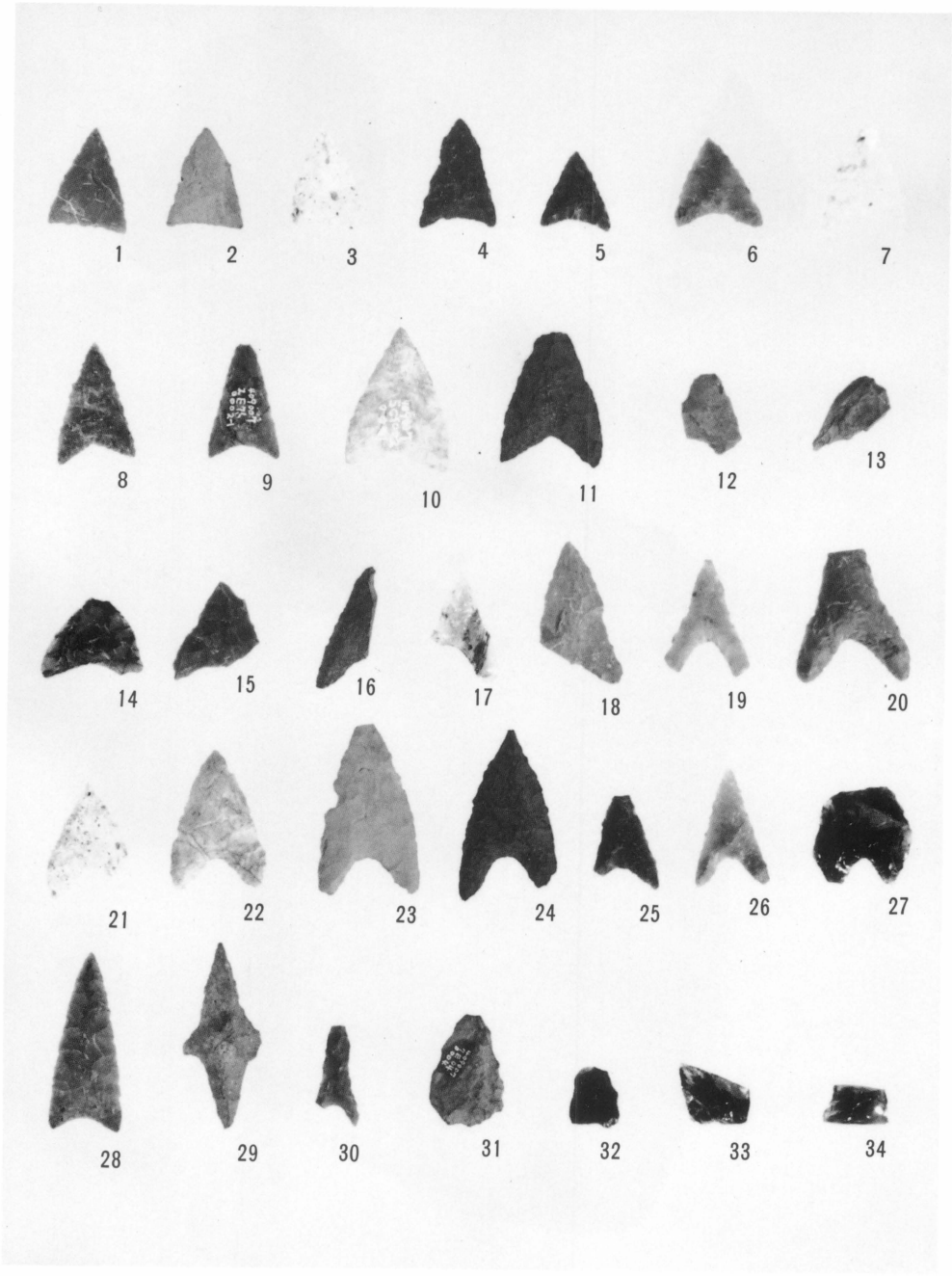
第3群土器 (4)



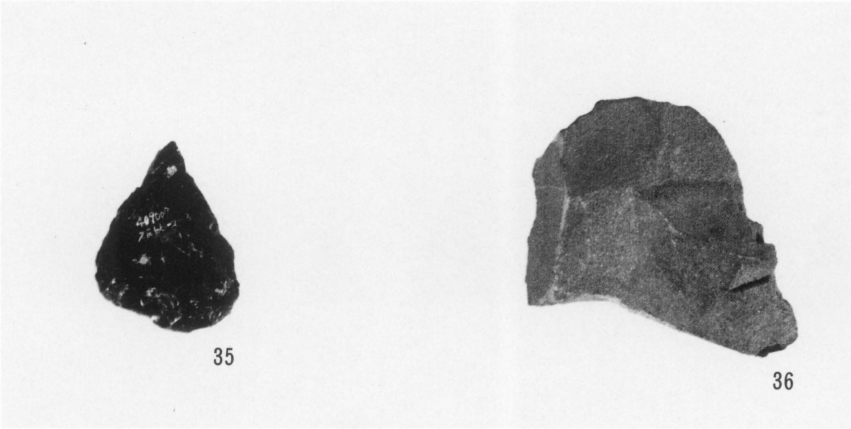
第3群土器 (5)

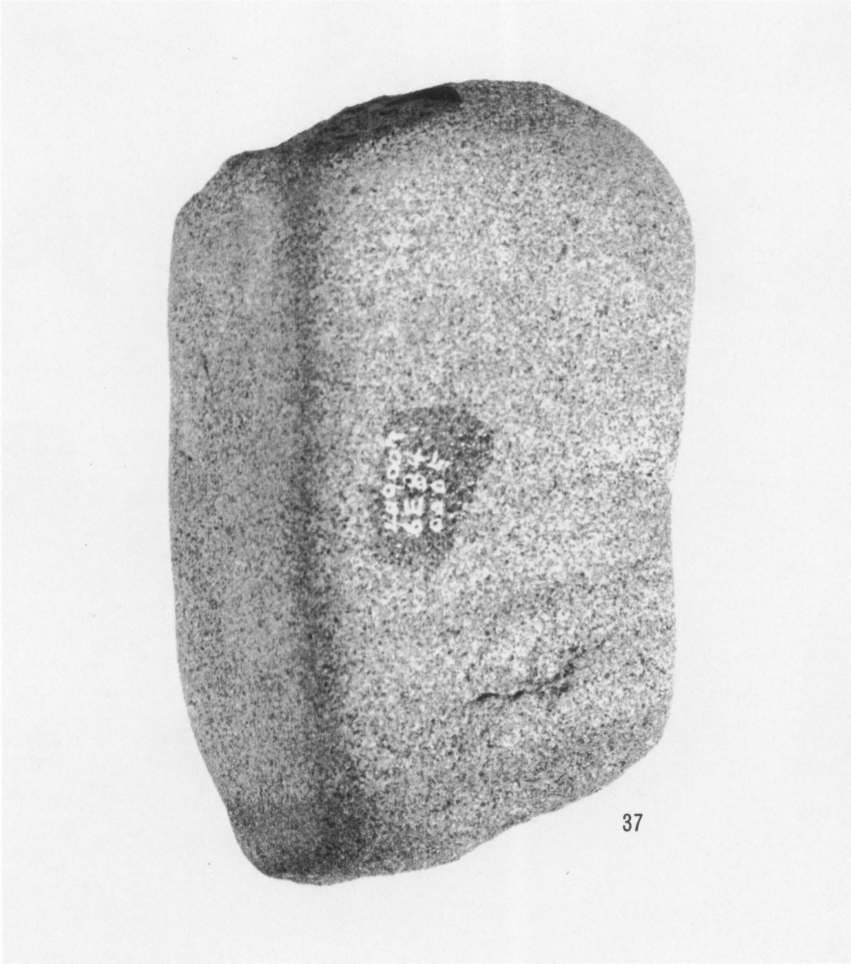


第3・4群土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

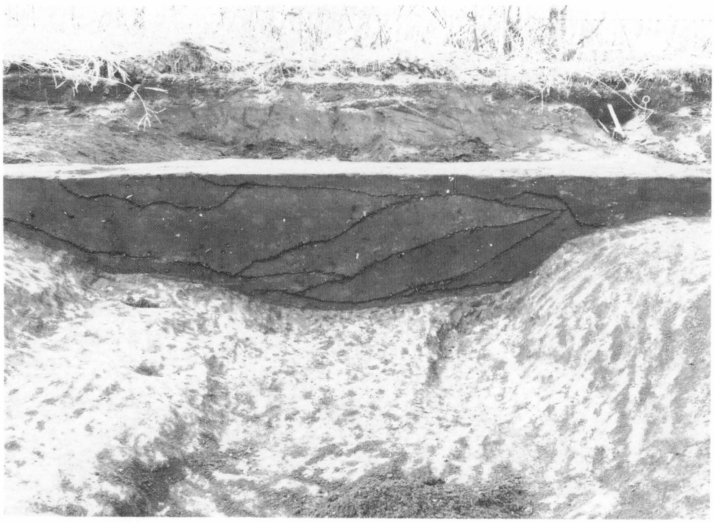
縄文時代石器 (1)



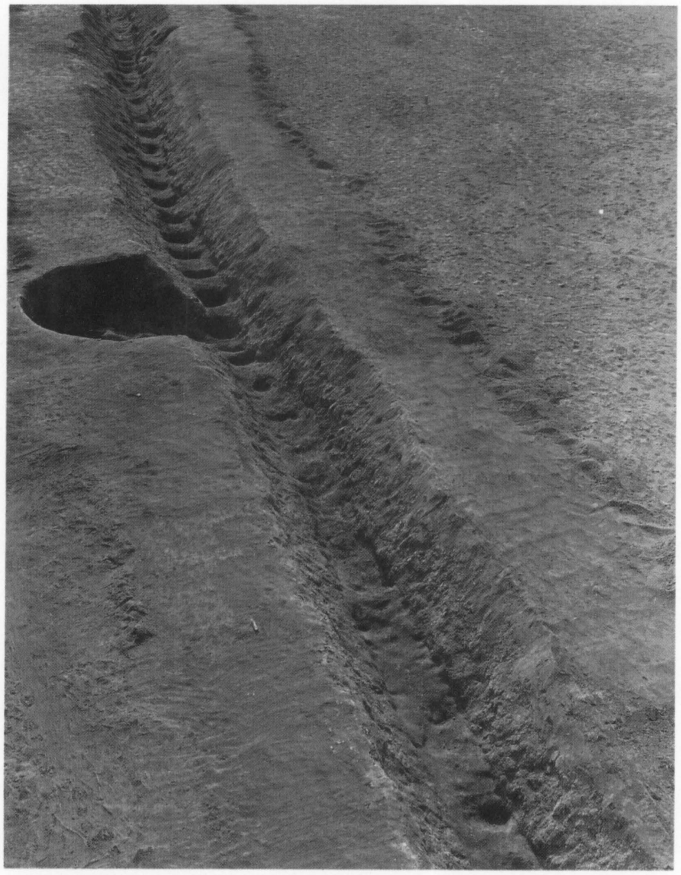


縄文時代石器 (2)

溝状遺構（１号）



同覆土断面

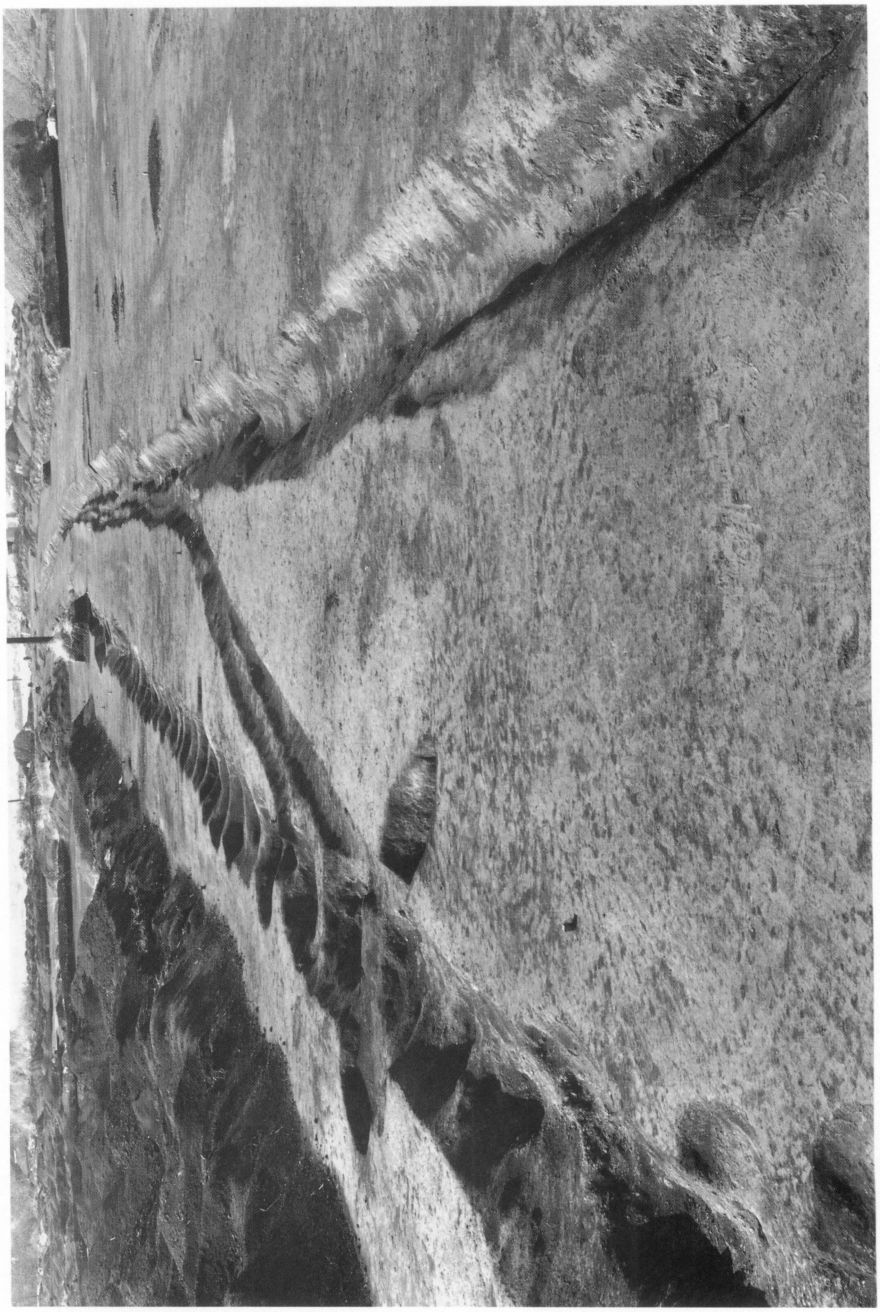


溝状遺構（2号）

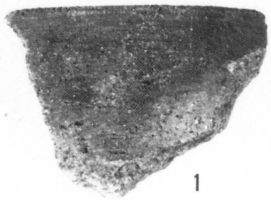
同覆土断面

溝状遺構（3号）

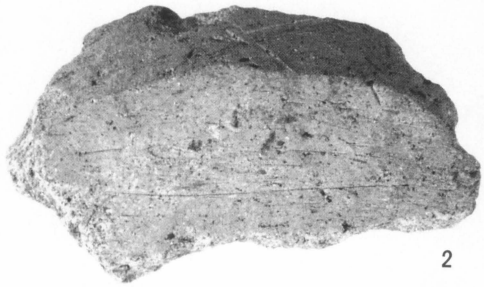
溝状遺構（4号）



溝状遺構（4・5・6号）東から



1



2

3

4

5

6

7

8

その他の時代の遺物

昭和60年３月20日　印刷
昭和60年３月30日　発行

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
－№ 2 遺 跡－
－№ 10 遺 跡－

発行　新 東 京 国 際 空 港 公 団
東京都中央区日本橋本町２－４
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
印刷　有限会社　み つ わ 軽 印 刷 社
千 葉 県 千 葉 市 神 明 町 ５ ４ ２

『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』正 誤 表

頁	行	誤	正
25	3	平担面	平坦面
31	5	出入口には	出入口は
79	7	A－1号跡	A－7号跡
79	9	A－1号跡	A－7号跡
90	5	明黄褐ローム層	明黄褐色ローム層
90	6	暗褐帯	暗色帯
94	19	ピエスエスキー	ピエスエスキーユ
126	1	剝方	剝片
132	第104図	3段目の左から2番目486	
136	14	再生削片	再生剝片
212	6	色調な	色調は
233	第166図	土層断面図K－K′において1のすぐ右が9	
254	19と20の間に挿入	橋本勝雄他(1984)『八千代市権現後遺跡一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』財団法人千葉県文化財センター	
図版32		上段石器番号181，下段石器番号182	